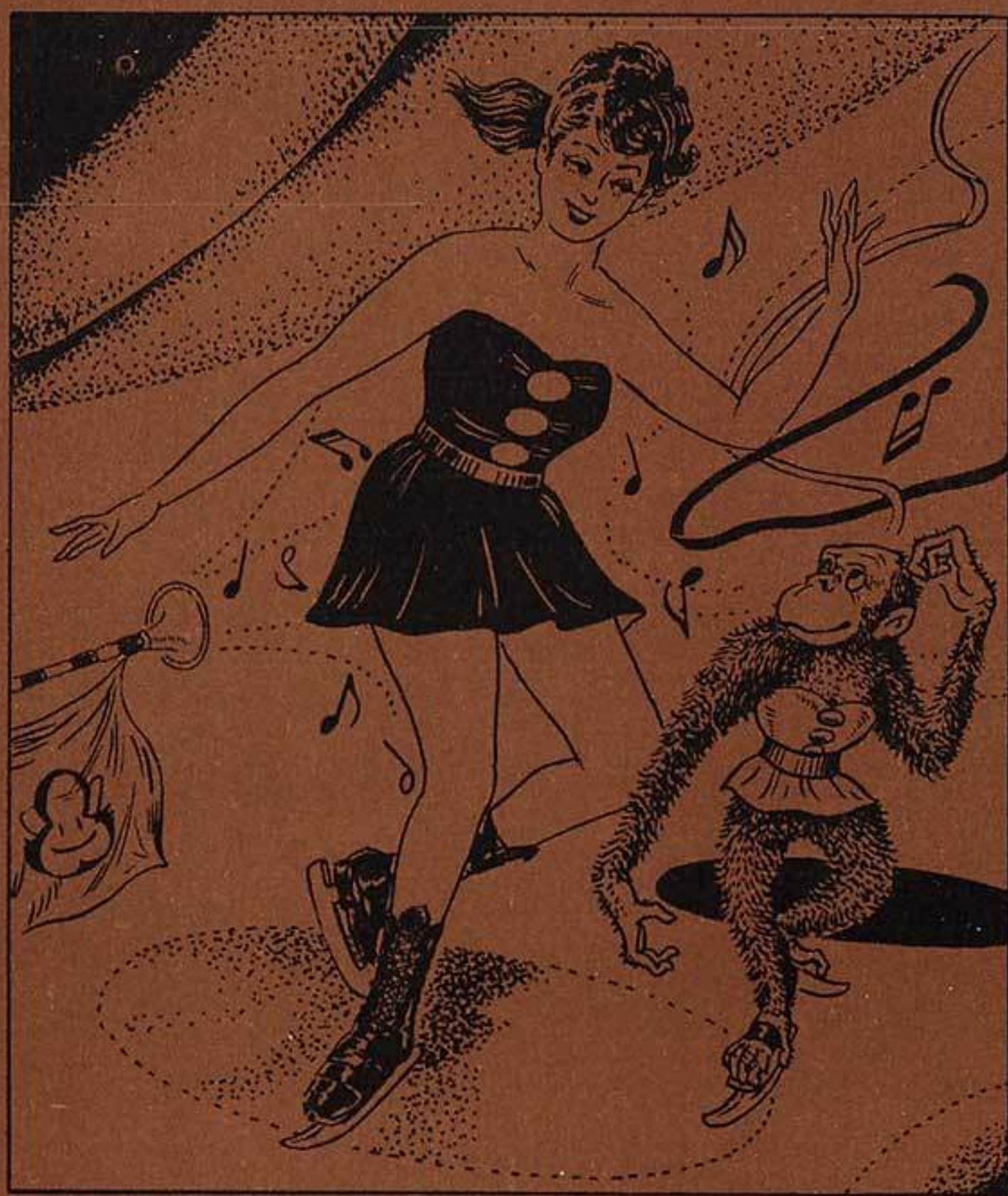


# 奇譚クラス

新しい風俗文献誌

3月号



3

March - '68



# 待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

## 前篇続篇合併 花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齡の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によつて「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四力年に亘つて本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説『花と蛇』を是非お求め下さい。

### 団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

#### 前篇

- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人—送られた着衣—ズベ公の本拠)
- 第二章 陥罪 (二度の嫌がらせ—運転手の正体—地獄の結婚)
- 第三章 美人探偵 (落花紛々—美人探偵京子—浣腸地獄図)
- 第四章 浣腸図 (強制—屈伏)
- 第五章 救援者 (羞恥地獄—観念の座—京子の活躍)
- 第六章 救援の失敗 (逆転—翫りもの)

#### りもの

- 第七章 好餌 (京子の屈伏—淫獣の餌)
- 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る—新鮮な生贄—悪魔の笑い—遂に美津子も)
- 第九章 地下室 (悪鬼の饗宴—美津子のおとり)
- 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥—身代りに立つ夫人)
- 第十一章 蛇の執念 (裸踊り—おしめ使う夫人—屈辱の挨拶)

#### 続篇

- 第十二章 姉妹危し (屈辱の猿ぐつわ—浣腸競演)
- 第十三章 調教師 (遂に京子も—上輩の中—調教師来る)
- 第十四章 美津子受難 (二人の美女—調教室—狂乱の美津子)
- 第十五章 結末 (美津子の屈伏—二つの肉塊—絶対絶命—美しい童女—スター誕生)
- 第一章 密室の秘密ショー (プロローグ—狼の批評—洗面器)
- 第二章 脱走の失敗 (美津子の脱走—望み破れて—絶望の涙—美津子の覚悟)
- 第三章 華やかな饗宴 (悪魔の二次会—狂乱の静子夫人—鬼女の計画)
- 第四章 地獄屋敷へ新顔 (新たな獲物—テーブルコーダー—美津子のいいわけ—美少年)
- 第五章 翻弄されるカップル (美少年と美少女—折檻部屋—乙女の涙—毒牙は迫る)
- 第六章 一千万円の身代金 (正気づいた小夜子—眼の保養—嵐のあと)
- 第七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難—女体の悲しさ—美しいニューフェイス)
- 第八章 涙の宣誓文 (美女と木馬—毒婦の恋—嵐の小夜子)
- 第九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の相談—恐ろしい計画—千代夫人—狂乱の静子夫人)
- 第十章 奇妙な三々九度 (鬼女の嬌声—地獄の花嫁)
- 第十一章 飼育される白い動物 (美しき敗北者—プレイ開始—白い指)
- 第十二章 悪魔と悪女の悪業 (恐ろしい仕事—全身美容—悪魔の寝室)
- 第十三章 屈辱の地獄図絵 (猫とねずみ—強迫—侵入者)
- 第十四章 逃走の恐怖と失敗 (の結末—風前の灯—再教育—京子の号泣—勝利に酔う悪魔)
- 第十五章 悪魔達の残忍な所業 (朝の酒—白い酒樽—ガラスの尻尾)
- 第十六章 落花無残の修羅場 (白いコンビーバラの肥料—開幕準備)
- 第十七章 淫らな美女の調教 (嵐の後—二人花形—美女戦)
- 第十八章 すさまじいショー (の展開—変身—密談—舌と唇)
- 第十九章 汚水にまみれた宝石 (流血—猿の檻—舞台衣裳—スターの心得—バラ夫人)
- 第二十章 華々しき美女の屈伏 (一難去つて—酔態—身検)
- 第二十一章 対峙する美女と美女 (嵐に立つ令嬢—美女対峙—悲しい説得—調教開始)
- 第二十二章 あくどい陥罪 (修羅図—失心する小夜子—悪魔の部屋)
- 第二十三章 羞恥図絵の展開 (復讐の生贄—汚辱に泣く令嬢—小夜子の屈伏)

直接お申込み 定価五〇〇円 略号「花特」



限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円（〒共） 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ 山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版（思わず息をのむ凄じポーズ満載）

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動！

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化

動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎フアンの要望に依えて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

〔女性刑罰拷問特集〕 △西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態  
七十二葉

頒価一〇〇〇円（送共） 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽（日本篇）「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ――。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・オンパレード・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円（送50円） 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方に提供するグラビア写真集の結集版です。発刊以来数カ月、すでに残り数が少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。



# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



3月号 ￥ 350

定価三五〇円

奇譚クラブ

昭和四十三年二月二十日印刷 昭和四十三年三月一日発行 三月号（第二十二卷第四号）毎月一回一日発行  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別換承認雑誌第二一〇号



今月の新版SM趣向異色フォト集案内

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円  
あくなき嗜虐の願望を満足させるため大胆奔放な緊縛姿を開陳した恵子嬢が美しい妊孕の女体を縛りの実験台に提供した。

初妊娠の六カ月腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円  
初めて子を孕んだ二十二才の若い美しい女体は適度の脂肪を全身に含みながら緊縛の人身御供としての美しさを発揮している。

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円  
妊娠して以来、一層のM心理がたかまり強烈な縛りを甘受するようになった恵子の膨満腹を中心にその美しさを誇らかに強調した。

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円  
同好者である恋人の種を宿した恵子は今やマゾ心理の昂揚から惜しげもなく裸身を晒して緊縛美の探求のため先駆となるのだった。

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円

恥かしげにぼつと妊娠六カ月の裸身が縄目に痛めつけられながらも、その限りなき美しさを画面一杯に媚をふりまいている。

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八〇〇円  
腹部は恰好よく胎動しはじめた腹は違った色気を発散して憧れの代と目を受けて美しく躍動する。

立縛り髪責め哀歎

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
均斉のとれた全裸の肢体にびっしりと掛った縄目。腰まで垂れる黒髪を驚づかみにされて、のけぞるように引回される安井夫人。

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
猿轡の布片以外は糸もまとわぬ裸身に肌もくびれるばかり厳しく掛った縄は流石にM夫人だけあつて素晴らしい喰い込みをする。

後手縛りで引回す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
でぎの指先から二の腕のつけ根まで痺れる痺れと喚くのをかまわず縄尻を掴んで引き回すひととき。

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
片足首に縄を掛けて引き上げればあられぬ境地を満喫する夫人。

憂愁夫人菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
愁いに満ちた美貌の夫人の細くそりした裸身をくびる上下から脛の救のないうるまで彩ってゆく。

柱対向立縛り夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
可立縛りの麗わしの女体は柱に向つて愛しい臀部には苛責のむきだしが肉もくじけとばかり炸裂する。

片足吊り裂き責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
片足だけを吊り上げることによって開股を強制すれば残った肢をばたつかせ空を蹴り長い髪をふり乱してもがき回る被虐のポーズ。

逆エビ責めに喘ぐ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
を縛った縄と高小手の縄とを連結して締め上げることに美

しい曲線を描いて苦痛に喘ぐ。

柱正面立縛り媚態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
後手縛りで柱を背にして正面向いて立縛りになった裸身は、媚態でファンの方々の眼に捧げらる。

股間縛りにもがく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八〇〇円  
股間をくぐって胸腹へと下った縄は、首をくぐって背後の後ろ首へ結され、横倒しに転がされと締まる縄目の痛さにううとがく。

豊満女体をくびる

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
愛知 葉子 略号 八〇〇円  
奇クサロンにその豊満な緊縛肢を晒した彼女が最近の見事なボリユムを肌を喰い込みにまかし、自慢の裸身を提供してくれた。

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
愛知 葉子 略号 八〇〇円  
開いた両足首に棒をかまして棒の中央と首縄とを連繫して締め上げ巨大な臀部を晒した提供作品。

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
愛知 葉子 略号 八〇〇円  
肉づきのよい円ろやかな太股を耐え返えらせ逆エビ縛りの苦痛



＜第22卷第4号・通刊第238号＞

◆ 奇クサロン

編輯部構成

○フエチ小説の虚構と真実……睦月笛一郎(9)○サロン楽我記(第四十五回)ズ  
 ……辻村隆(10)○短歌悲しき生理……高村初子(10)○秋山夫妻サデ  
 ム・ショー日程表……編集部(11)○「アクロ雑感」に応えて……極場談好(11)  
 ○見逃した菱縄……早木夢二(12)○寒風に詩う「冬」……梶天平(13)○詩「  
 折檻」……菊地淳子(13)○イメー「ジ画」……倉真砂(13)○新企画  
 案についで……御木本三郎(14)○イメー「ジ画」……柳武男(14)○イメー  
 ジ画「獲物」……西川緑(14)○愛妻ゆう子の「プレイボーズ」……新田英雄(15)  
 ○告白「縛り初め」……柴利好(17)○金原奈加子の「プレイボーズ」……新田英雄(15)  
 16佐渡(18)○短信往来……芳野眉美氏へ……夜乃探郎(18)○僕(19)○刺青師  
 集「はやくッ!」……宇都宮宏・「ピシャッ!」……室井亜砂路(19)○刺青師  
 の話……久我庄一(20)○顚末記その後……河本光三(21)○「瀧腸」……安原さゆり  
 しおき……小妻容子・「白状しや」……新井伸治(21)○「瀧腸」……安原さゆり  
 ま淋しいの……松井裕子(22)○妊婦哀歎(異常美の極致)……安原さゆり  
 22)○「花と蛇」……配役に……「芙美子お姉様」へ……琵琶湖畔女相撲取組フオト  
 ……大塚啓子・東浦ひかる(23)て……芙美子お姉様(23)へ……琵琶湖畔女相撲取組フオト

△本 文▽

本誌自粛の徹底……………編集部……………(25)

懸賞入選『私達夫婦の甘い秘密』……………安井喜久子……………(26)

マゾ・ストーリー 贋作・鞭の女王……………みはら・ひろし……………(34)

私の遍歴 美女と猿轡……………久津和好造……………(44)

稿談性風俗資料入門……………斎藤 夜居……………(46)

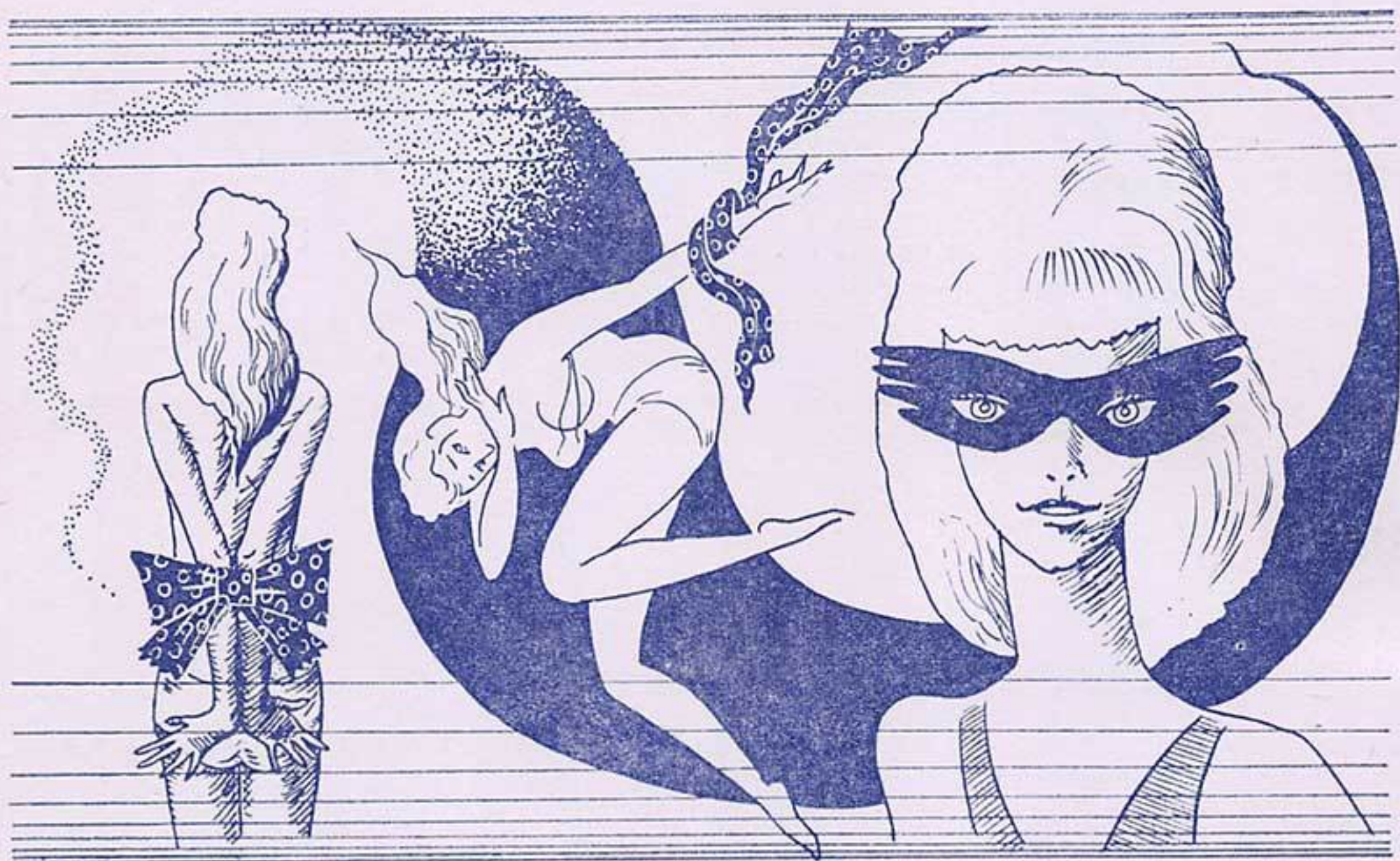
「秘戯指南」について。風俗雑誌のいろいろ

昭和四十三年度「新年号」を読んで……………山上 四郎……………(56)

漫談千一夜物語『薔薇と蜜蜂』……………田代 俊夫……………(58)

妊婦に魅せられて……………瀬沼 四郎……………(74)





獄中記 殺人囚の詩集	志賀 新一	(76)
ガンペッタ『復讐』	千葉 青鬼	(84)
作者は不在? (「ミスター・エロチスト」の背景)	魔仁阿天狗	(92)
連載小説 心傷たむ遍歴 (第三十九章)	西条 操	(94)
机上籠郭 法律雑考	井上 俊彦	(113)
鬼六談義「バラバラの話」	団 鬼六	(118)
マニアの夢『J・R・D・C』入会案内	須磨山 実	(126)
S小説 痴人の糧	山本 一章	(128)
M創作女神 (めがみ)	北林 一登	(137)
連載S小説「花と蛇」 (続篇第四十回)	団 鬼六	(146)
曲馬団哀話 サーカスの仕込み	極場 談好	(165)
「恋縄」雑記 (女装受縛憧憬)	井風呂秋於	(170)
SMカメラ・ハント△浅井優子の巻▽		
『優子の涙』	辻村 隆	(178)
芳野眉美の作品について 「水中花」メモ	夜乃 探郎	(198)
懸賞入選作品 鞭道雨宮流	中山 信	(204)
主張 切腹文学は「悪書」ではない	城山 秀彦	(213)
創作二つの世界	町 陽一	(216)
逆吊幻想奇譚「妖逆記」	秤 蕩也	(234)
読者通信	編集部選	(252)



今月のカラーフォト(天然色)新作案内

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 出産前の僅かなチャンスを狙って待望のカラー写真の撮影ができた。縛りなしのヌードで妊孕美を天然色によって御覧頂きたい。

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 露出症気味の彼女にしてみても初めての妊孕で裸の腹部をカメラの前

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 豊満な女体に掛った縄、両足首を縛って無理矢理左右に開かせ文

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 棒の両端に左右の足首を思いき

全裸強烈逆エビ責

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 染めてしまえば、全裸の肌はピンクに

肉づきのよい女体が両手両足を背後で縛られてしまえば、全く無防備の前面が美しいカーブを描いてマニアの目を楽しませる。

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 全裸で何ら掩うものがない女

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 後手縛りにされた両腕の間に突

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 両手両足を揃えて縛り女体を二

大の字と足挙げ責

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 両手も両足も一直線になるくら

首を高く頭の上になるまで挙げ

「安井喜久子夫人」

カメラハントで脚光を浴びた安井夫人の、其の後の強烈縛りとマ

開股羞恥責め姿態

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
安井喜久子 飼育よろしきを得た夫人は、誌

髪吊り強烈ムチ打

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
安井喜久子 我慢の長髪をむざむざにも束ねて

片足引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
安井喜久子 スベスベとした肌に喰い込む縄

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号五〇〇円  
安井喜久子 鞭打ちの大好きな夫人のお尻を

柔肌にて炸烈する答

大手札四枚一組 略号五〇〇円

安井喜久子 略号八して

高小手縛りで身動き出来ぬ夫

人の片足を握ってムチを揮えば、

柔肌は忽ち真赤に染まり、全身を

びくつかせて狂いまわる。

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号五〇〇円

安井喜久子 交又して縛った両足首を引きつ

情のムチが痛烈にぶち当たる。

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号五〇〇円

安井喜久子 革製の貞操帯を股間にがっちり

の雨を避ける夫人は乱打されるムチ

のようにくねらせてもがきぬく。

痛打にもがく女体

大手札四枚一組 略号五〇〇円

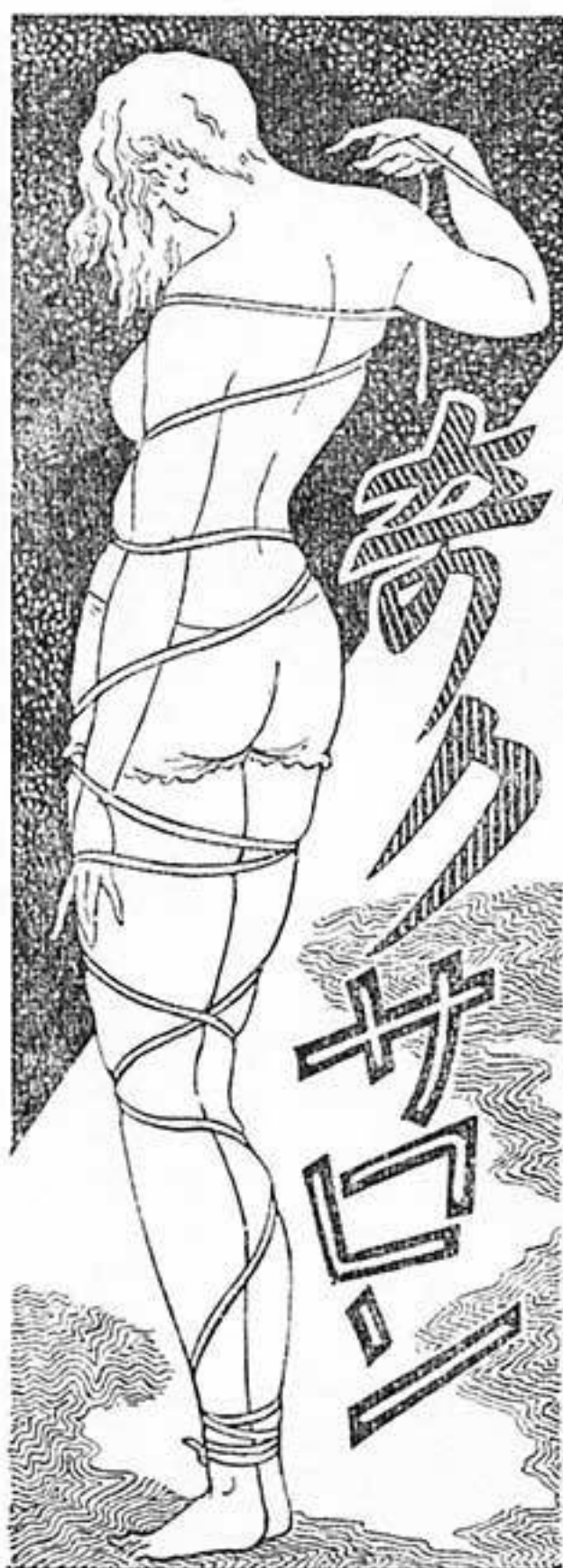
安井喜久子 革むちの痛打を盛り上った臀部

と床の上をころがりまわる。

あぐら縛りの羞恥

大手札四枚一組 略号五〇〇円





旧聞に属すが昨年暮、フランスから往年の大女優フランソワーズ・ロゼエが来日した。恐ろしい戦争の劫火が大陸に拡がって漸く窮屈になつてゆく世相の中で、彼女の主演した『外人部隊』『舞踏会の手帖』『ミモザ館』などの名画は暗い我が青春を没入させ夢を与えて呉れたことも有つて忘れる事の出来ない女優さんの一人である。

私がフェチ小説に手を染めた時エキゾシズムに依る神秘的な効果を昂めるため、躊躇なく題名を、**ハミモザ館**とし、大年増の主人公の愛称をフランソワ・ロゼエと見果てぬ夢を彼女に託した。フランソワの顔立ちは娼婦宿の女主人。街娼の姐御など、頹廢した怪奇性を想像させ得て妙である。しかし、此の種の小説は表現描写に限界が有り、その為構成に重点を置けば置く程、内容が空々しい絵空事に終り虚構が目立つことが多し。機会があつてピンク映画を見

た事が有るが、妊娠した女医が自らの手で中絶手術をする為に検診台に仰臥し鏡を使って施術中、失神する場面があつた。

満員の観客は固唾をのみ興行的にも成功したそうである。一寸考へれば、子宮の内容物を当人が長い器具を使用して搔把することや角度的に鏡に写す事は不可能で有ることが分る。観客は虚構を虚構として観るのではなく、真実として堪納しているのである。こうした映画や体験記の生々しい真迫力に追隨出来ないのは、矢張り愛好者が小説の域では生ぬるく感じ、プレイに役立つものを求めている故か。昨年十二月、文芸春秋別冊に梶山季之氏が**ハミスター・エロチスト**なる題名でフェチ小説に

最近の話題となつた産業スパイ事件を絡ませ、手馴れた手法で発表している。専門作家である氏をもつてしても、ことフェチに関する限り類型的な表現の範疇を出ず、産業スパイ事件もフェチを包むオブラートでしかなく読者に異質な感じを与え、煩雜だけが徒らに目立つばかりだった。

小説作法にも依るが、ナマの題材を取り上げた場でも真実性が薄れ、かえつて虚構に陥つてしまう事がある。東北の小都市に住んでいた頃、出産の為に入院した婦人を病院に訪ねた事がある。丁度、産婦は分娩室に入れられていたが、「産婦さんにコルポを挿入しましたから長く掛りますよ」と言い捨てて帰る看護婦の背中に、附添婦が皮肉たつぷりに浴びせた。

「ふん、お前達だって宿舎でコルポの御世話になつて居るだべ」コルポというゴム球は、羊水が早期に流出するのを防いだり陣痛を促進する為、ヴァギナや稀には直腸内に挿入される。この病院の看護婦の一部ではお互いにコルポでアヌスを責めたり尿道用のカテーテルを利用して楽しむ事が流行

していたそうである。男と違って女性のアヌスを責めは苦痛だけで快感が殆どないと聞いているが、異物挿入による女性本来の被虐願望を満足させるらしい。これを**ハミモザ館**に偽似分娩として応用したが素材が活きてこなかった。

ファッション界の醜い争いに巻き込まれた女性が相手の小児願望を暗示に依つて亢進させ、時計の針を逆行させるように自律神経を麻痺退化させ、遂に口もきけなくなりゴムカバーを当てられたままの赤ん坊に成り果てさせ、手を下す事なく復讐を遂げる物語を書いたが、これも英国の老嬢が小児願望症のため廃人になった例を参考にしたが、残酷だけが先に立って失敗したようだ。

私は奇巧を入手した時、一番先に目がゆくのは皮肉にも読者欄である。此処では街らしいもなく赤裸々な告白や体験が学べる。将来とも読者欄を大切に育ててゆきたいと願う一人である。最近、大阪の天満駅近くのLホテルで婦人科の検診台を備えている処が有ると聞いた。フェチシストにとっては嬉しい実験場の出現である。

梶山氏の小説には『女の警察』などにも出てくるが、経血や汚れて干からびた生理帯がよく顔を出す。氏のフェチ的傾向も自ら知れようと謂うものである。

## フェチ小説の 虚構と実真

睦月笛一郎





(第四十五回)

辻村 隆

夙川のY会長が御病氣だというので、年の暮の押し迫った一日、思い切ってお見舞いにお邪魔した。かなり血圧が高い御様子だがお見掛けした処、お元気そうで、常人と交りない。会長にビデオテープを拝見させて頂き、SMの四方山話のあと、思い掛けなくも、会長の愛人の成瀬紀勢子さんとプレイすることになった。(成瀬きせさんのことは、『快樂の紋章』で触れていますので、御参照下さい)この三十七、八才の蕨たけた美人とのプレイは、正に私にとっ

て、何よりのプレゼントである。余り激しいのをやると、会長の血圧に差し障るからと、手加減しながらの緊縛であったが、約二時間たらず、六、七度緊縛を変えて、果ては鞭打ちに到った。会長の御命令もだしがたく、最後は夫婦プレイもどきに、会長の眼前でハッスルしたが、残念ながらフオトは一枚も撮っていない。会長はビデオカメラを三脚に固定させた俥でズームレンズが私と紀勢さんのプレイを狙い、伸縮していた。四分のテープをとられて、こちらはすっかり、Sの男性モデル扱い。先日可愛い娘(カメラ・ハント『優子の涙』参照)を紹介してもらった手前もあるので、会長の言いなりになったが、会長の寵い者の紀勢さんにすっかり愛情を覚えて自分自身の気持の整理に弱っている。

× × ×  
奇クの緊縛映画の紹介は、近頃矢鱈と、ピンク映画の氾濫する折柄、誠に参考になる。『性犯』に出てくる緊縛フオトのカメラマンが、恰度、カメラ・ハントの辻村さんをモデルにした見たいですよと田宮氏に誘われて、時間を計ってそれを覗いてみた。成程私同様

の人間(映画の方はプロカメラマンだが)が登場して、井上幸子という女性カメラマンに扮する新人や、林美樹を次々緊縛してゆく。『風俗奇譚』の協力となっているが、あの緊縛シーンで何者かが協力している模様である。映画だけの話ではなく、ああした、SMに徹したプロカメラマンも一人ぐらい実際に名乗り出てもよさそうである。

「辻村さん、彼の様に思い切ってプレイフオトの個展をやってみたら如何です。メシが喰えますよ、それで」

と、田宮氏は本気か冗談か、しきりにけしかける。残念乍ら、それ程の度胸は今の処、持ち合せていないが、子供もそれぞれ成長して、おやじのやる事が理解出来るようになったら、すべての虚飾をかなぐり捨てて、辻村隆としてハダカになって世間に飛び出して見たい気持にはなった。

× × ×  
増田みゆき夫人の可愛い双生児が、やっと乳離れした昨今、増田氏の懇望もあって、木村洋子さんを紹介し、みゆき、洋子のダブルプレイを彼のアパートで撮る機会に恵まれた。彼のお母さんが上

## ＜短歌＞

悲しき生理

高村 初子

○ いつもの言葉信じて飲むビールあくどき責めの罍とも知らず

○ じわじわと高まる尿意ひときわに耐えに耐えぬき涙ながしぬ

○ 悶ゆるをほくそ笑みつつむりじいにつぎ込むビール泡立ちにけり

○ 後手によじり悶えて許し乞う男の足に顔寄せいつつ

○ 声に出し許しの文句大声で言えと強いぬ意地わるき人

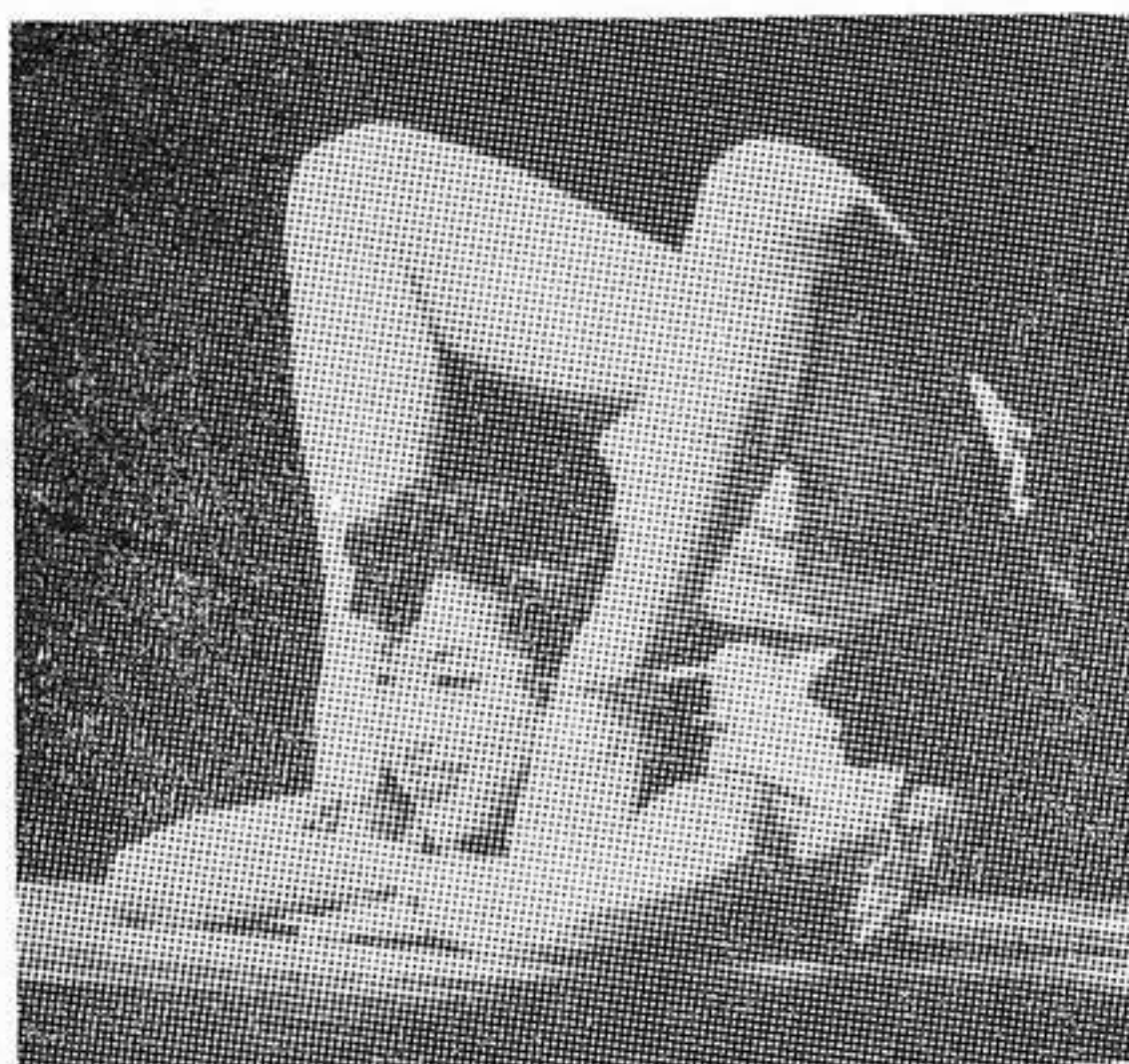
○ トイレにはまず脱ぐこととなぶりつつ縛しめのまま下着はがれぬ

○ 引きさけるほど足開かれて高々と吊られ呻めきぬ地獄の羞恥

○ 目の前に便器すえられうなだれぬ周りとりまくカメラの中で

○ たえがたき生理の前に泣きながら便器またぎぬ目を閉じながら





★

(上) 若山昌子

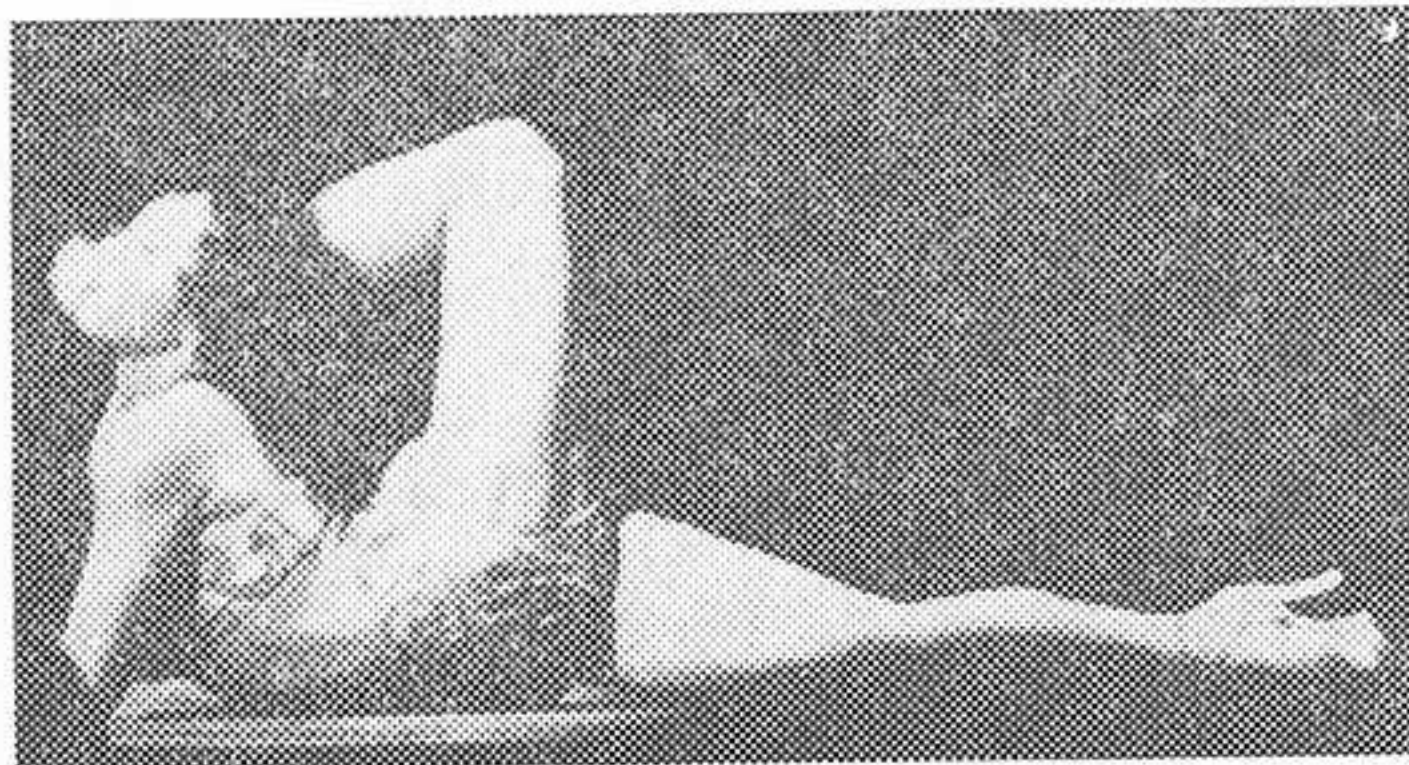
Ⅱ

(中) R・テンプル

Ⅱ

(下) 若山昌子

★



昭和四十二年十月号所載

「アクロ雑感」に込めて

極場談好

阪されて、二人の子供のお守りを頼んでの、僅か一時間半足らずである。プレイの真最中、子供が泣くのでと、お母さんが戻ってこれ、一同大びっくり。増田喜代司が大慌てで、ミルクを作っている間、座敷(といっても狭い四帖半)の間で、みゆき、洋子は強烈に縛られた俣だし、私はドキドキする

胸を押えて声を潜めている。

兎に角スリリングなシーンであった。いずれ精しくカメラ・ハントに発表する予定であるが、忘れられぬショックの一瞬だっただけに憶い出しても冷汗が出る。

× × ×

安井邦臣夫妻を紹介していただき、夫夫婦プレイ同好者

のお便りが多い。何しろ二人揃っては出難い御夫婦だが、あの時以来、仲いよいよむつまじくダブルプレイも辞さぬお元氣さである。喜久子夫人はすっかり、Mずいてしまつて、邦臣氏の聞の口説きにも、その氣充分との事だ。いずれこの御夫婦の後日譚も亦書く日が近い気がする。

秋山夫妻サディズム・ショー  
日程表 (編集部)

○一月十日—二十日  
名古屋銀映にて公演

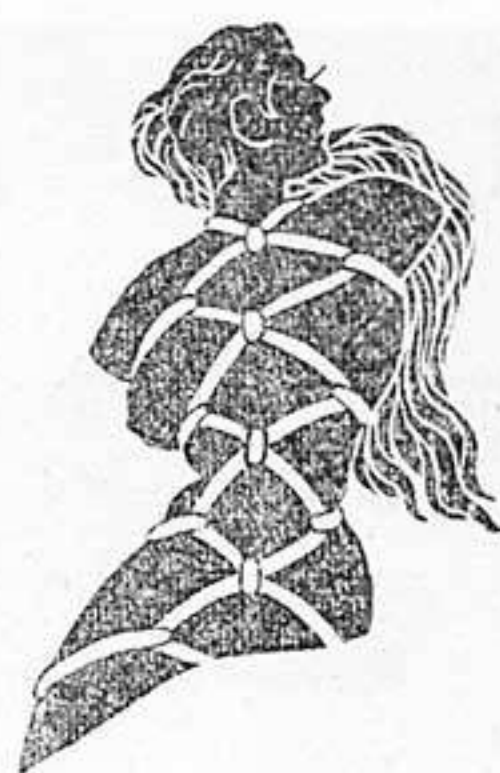
○一月二十一日—二十五日  
千葉県浦安ミュージックホール

○一月二十六日—三十一日  
東京都青戸ミュージックホール

○二月中一杯  
東京都新宿モダンアート



## 見 逃 し た 菱 縄



早 木 夢 二

近ごろ都会ではテレビの視聴率が下っているというのだが、そういわれると、私も最近ほとんど見なくなっている。

何しろ私は映画でも小説でも、緊縛、それも菱縄が出てこない面白くないマニアだから、テレビではそうそう期待出来ないのも、私のテレビ熱の下っている原因ともなっている。

所が、そんなことで、何とやらぬ損をすることがあるもんだ。

週刊朝日十一月三日号をめぐってテレビ評の欄を見て、ドキッとした。

十月十六日日本TVで放映された「剣・首斬り浅右衛門」の批評が出ているのだが、挿入されたスチールで、獄衣の上から菱縄を打たれた小川真由美が帯のみになっ

て、首斬り役人の三国連太郎が刀を女の眼の前に突きつけている。

実は放映当日も、新聞の紹介欄を読んで、ひょっとしたら、小川真由美の菱縄姿が見られるのではないかと思わぬではなかったが、いやいやまさかと思って、つい近ごろの怠けぐせにまけて、到頭見逃していたのが、急に惜しくなつて、ひどく腹立たしくもなつてきた。

裸でなくても、女の菱縄姿などそうそうあるものではないから、マニアである私としても、もっともっと貪慾に勉めなくてはならないと大いに自戒した。

ずっと以前にも、フランキー堺と中尾ミエの八百屋お七ものがあり、中尾ミエが菱縄姿で裸馬に跨って引廻される場面があったと

後から聞いて、地団駄踏む思いをしたのに、と思つて残念でならなかった。

殊に小川真由美は悪女で売り出した女優だから、この所ちよつと出ていなかっただけに余計だ。

何か溜めに溜めたお色気が発散していたのではないか、久しぶりの菱縄姿でキチンと正坐している彼女の、余りはっきりした写真ではないが、処刑姿を眺めている間に、又々、グチが出てくるのだつた。

斬首するのに六太刀もかかったというが、六太刀も浴せられて、彼女がどんな風に菱縄に緊縛された体を悶え狂わせたか、テレビではどんなだったろうか、実際にも伝馬町の牢屋敷における処刑でもそんな例があったと物の本で読んだことがあるが、血みどろになつて、胸にかかった菱縄もべつとりと血に塗れてのた打ち廻る女囚の肉体を想像すると、私は堪らなく胸を締めつけられる思いだった。

テレビだけではない、近ごろは先に述べたような訳で、映画の方もトンと御無沙汰で、先日久しぶりで場末の映画館の前で、女が裸で縛られているポスターを見たので、ついふらふらと入った。「赤

い肉」という映画で、縛りも大したことはなくホンのおつまみの感じ。ストーリーもいつもながらの団鬼六式のもので、目新しくもないので、又々失望して仕舞った。やっぱりオレは、菱縄があるとほっきり判っていないければ、もう金輪際観てやらないぞと呟いていた。

そんなに気ばっていないながら、身近かのテレビでころっと見落すのだから、我ながらはがゆい次第である。

せめて慶子だけでも、そんな時には見ていてくれると、あらあら菱縄よ、なんて頓狂な声をあげて私をよんでくれるのだが、悪いことには彼女は日本ものが嫌いで西洋ものの動物映画や魔女ものにつつまを抜かしているので始末が悪い。もっと綿密に注意しないと、折角の菱縄ものも見落して仕舞うと、この間慶子に剣突喰わしてやった。

まあかつてなことといって、と流石の彼女も面喰っていたが、これは考えてみると私の無理というものであろう。

その晩は例の如く拷問プレイをして、慶子をちよつぱり慰めてやり、それ以上に私のどうしようも



寒風に詩う……

冬

梶 天平

地平のかなた

寒い風が吹いてきて

昔のかい巻きが、欲しくなる

シカシちよつと不便かな？

だけど

面白いじゃない

……そうだな

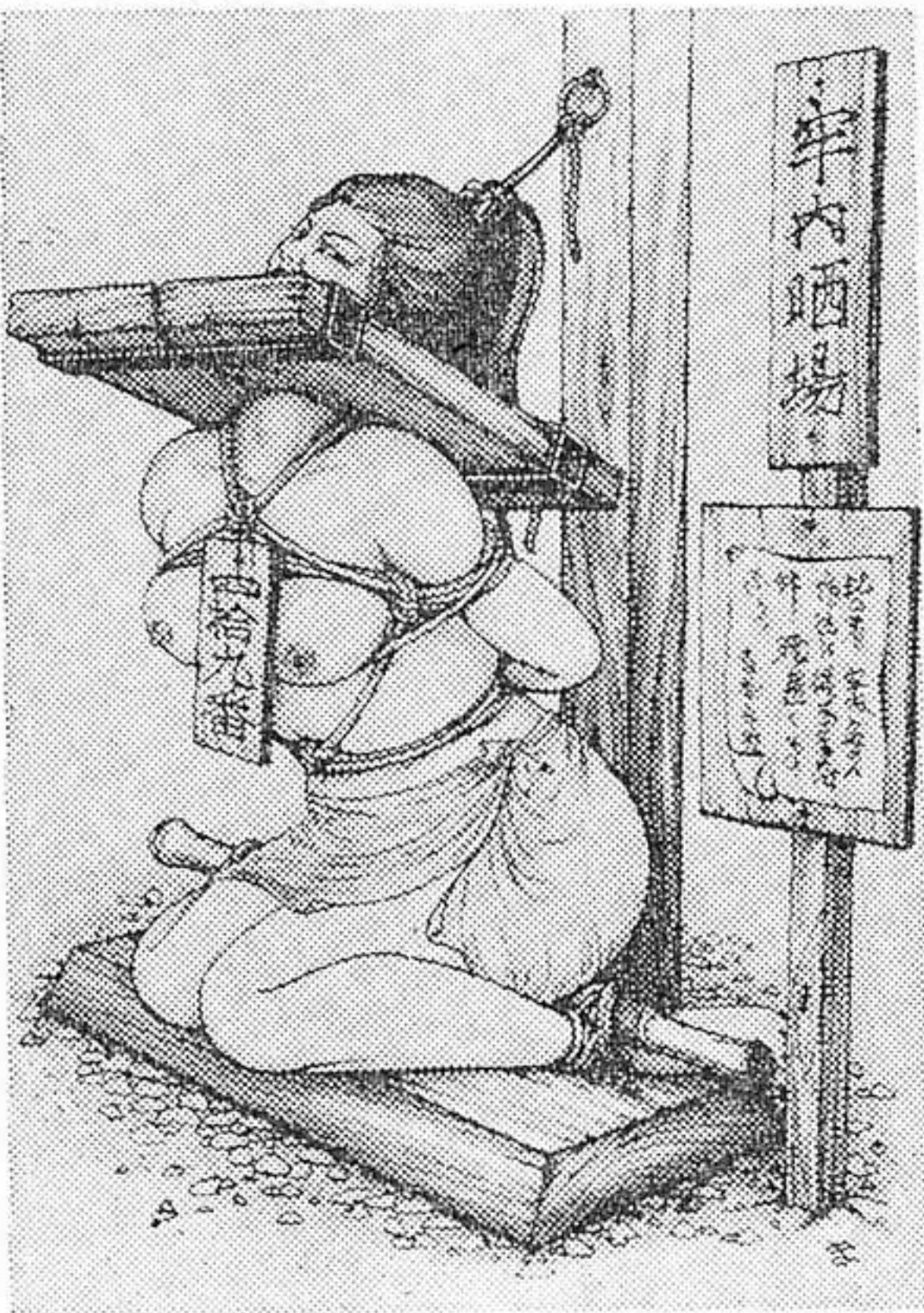
縄がいくらあっても足りやしない

地平のかなた

ポつとただよう双丘

やっぱり寒そうで

ポツポツ枯草をそよがせている



僕のイメージ画集『牢内晒場』 倉 真砂

詩

「折 檻」

菊池 淳子

…／＼責めに憧れた女のうたえるうた…

一、逆らい敗れ この恥辱

捌かれ咬まる 腰紐ぞ

身ぐるい叫けぶ むね絡らめ

はや手も背や おぞましと

×

二、捲くれし腿間 細そる身の

縄じり口惜し 嫂の掌や

看とらる羞じも こたゆかと

臀打ちすえつ 追わる背は

×

三、乳房責めぐか 身ゆすれば

無念のお縄 ひと入と

恨らみ忘れじ 嵌め轡

うなじに緊き 結び目や

×

四、こころ改らたむ 裸か身と

吐息も凍る お仕置きに

お股からめて はか無くも

握る後ろ手 高かかりき

×

五、お臀の撚じり 足うらに

尊き恥毛 いじらしと

身括くる繋ぎ 短かくば

伏すことならじ 曝し目や

×

六、嫂とよばざる 過ぎし日を

省りみ懲らす 終夜とか

瞳悶えて 胸ふさぐ

重き施錠や きびしぞと

×

七、涙も涸れて 刻永く

身ゆるぎ咎がむ 縛しめに

呻吟憐われ その袴り

責め問われるれば まだしもと

×

八、待ち遠しやと 首のべて

領き一途 その誓詞

慈悲乞う心 芽生ゆかと

轡とかるる 喘ぎ身に

×

九、はばかり請うや せつなくも

張り満つお腹 身もじりは

面あげよと 糺だされて

号泣むなし お便器ぞ

×

十、縛縄わすれ 肱揉みつ

かなしき仕打 歎げくとて

共々果たす 哀われさぞ

教わる憂き目 お浣腸は

×

十一、矜りや遥るか 消ゆ果てに

服罪誓う 剃毛は

おみないのち その悲咽

しるしぞ暗らき 見とどめや



## 新企画案について

御木本三郎

最近の本誌の傾向を考えると、以前とはちがって読者との間が凄くせばまって密接になってきたように思う。これは大変すばらしいことではないだろうか。

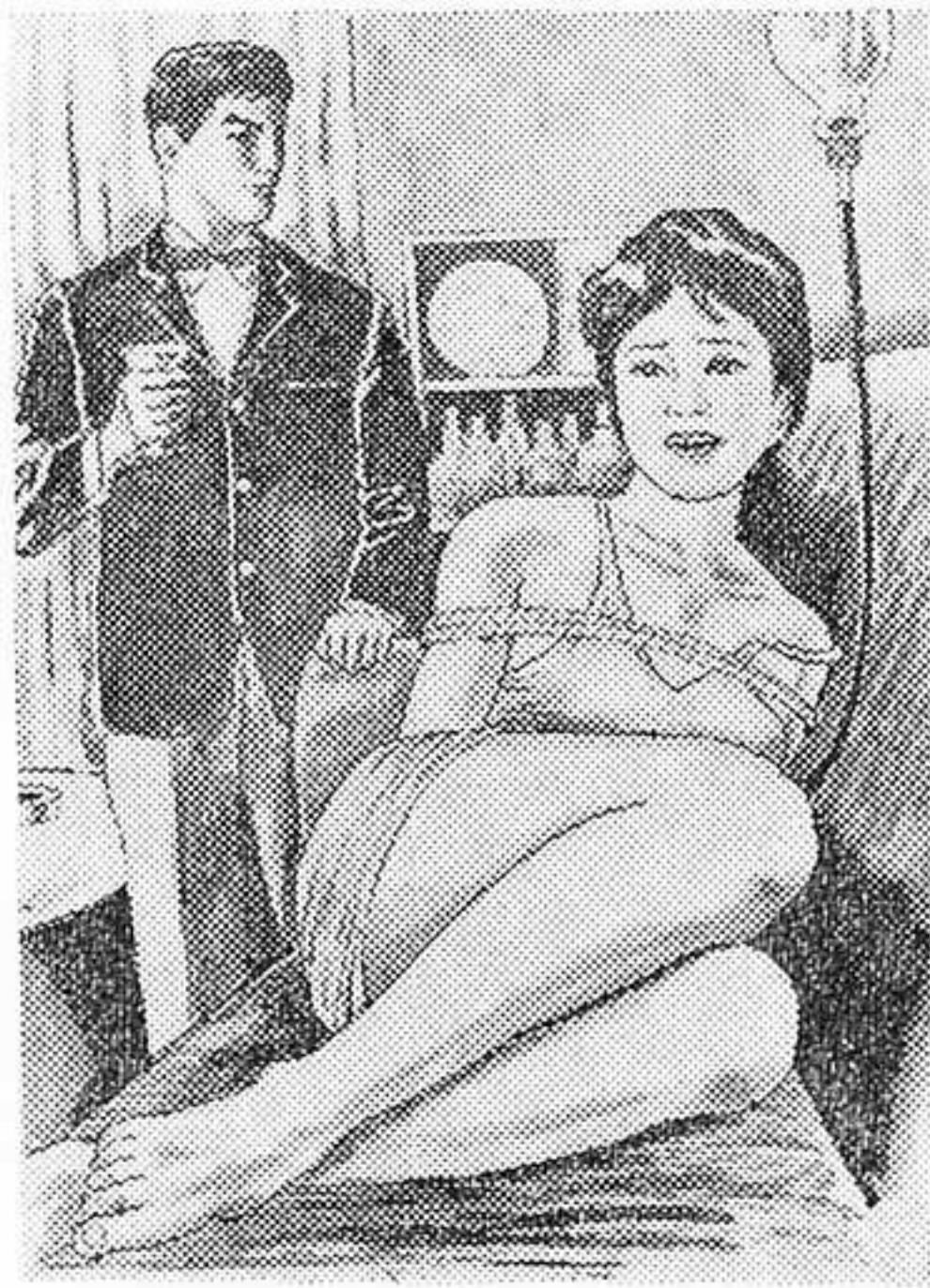
例えば夫婦プレイの記事、写真等が大変豊富に載っており、より身近かさを感じさせる。又、分譲写真のモデルも一般読者が登場し大いに関心を誘われる。しかし何よりも本誌を身近かに感じ購買意欲を湧かせるのは、毎月の辻村隆氏による『S・Mカメラハント』であろう。

全くの素人の娘をモデルにし、たちまち裸にしてフラッシュをたいてしまう。この素早い仕業に、一種の尊敬さえ起こる。写真は悪書追放に遠慮してか、お粗末を感じないでもないが、文章に溢れるような魅力を感じる。初対面の女性を口説き、裸にし、時には乳房を責め、遂には恥ずかしく嫌がる女体に縄をかけ、無理矢理に体を最大限に開いてしまう。そして、

その正面にレンズを持っていく。これが凄い。レンズを正面に向けられた時のモデルの気持を考えると、読んでいて胸に締つつけられるような圧迫感さえ感じる。

二月号の三好留美を写した『甘美なる羞らい』にしても、体を無理に開かされ、その甘い体の正面でフラッシュをたかれ、持っている場のなくなった悲しげな顔を横に向けている。その表情が素人臭さく、まるで自分の恋人のように感じられ、何ともたまらない記録だった。

毎月、毎月、カメラ・ハントを真先に通読し、思わず「またか」を連発してしまう。無理矢理、女体を聞かせていく、流れるような文章。それを実証する耽美なフォト。読んでいくうちに、いつの間にか自分が辻村氏にかわってフラッシュをたき続けている場を想像している。自分がいくらかフォトをやっているからか。この文章、フォトに魅了されて楽しい毎日を過



僕のイメージ画集

「獲物」 西川 緑

## &lt;告白&gt;

## 「浣腸憧憬」開眼

柳 武 男

私は、生家の事情から七才の時に、内科の開業医をしていた祖父の許に預けられ、そこで九才までの二年余りを過しました。

裏庭で遊んでいると、硝子戸を透して患者が祖父の診察を受けているのがうかがえましたが、その硝子戸に白いカーテンが引かれる時が時々あるのです。

別に気にすることもなく過して

いたのですが、庭から直接二階へ通じる階段の途中に、診察室が見える隙間があり、偶然、カーテンの引かれた時には、主に患者が浣腸をされているのだということを知りました。

何気なく階段を昇り、私と同じとし頃の女の子が、付添いの母親らしい人に押えられ、看護婦から浣腸されているのを見てしまった



## 愛妻ゆうこのプレイ・ポーズ

提供・新田英雄



している人も数多いと思う。  
そこで私は、辻村氏の『カメラハント』全集を、ぜひ企画されることを望んでいる。全国のファンが待っていると思う。その際には必ず、より多くのフォトを載せて欲しい。

もう一つの起案。ハミリの発売をしてほしいと思う。もちろん購買は限定され、仕事内容もむづかしく大変だろうが、これ wait っている少数の人のためにも、ぜひ実現させてほしい。

例えば流腸責めでも、逆さ吊りでも、鼻のいたぶりでも、また、

辻村氏の縄のかけ方でも、動かないフォトと違い、真に迫る圧迫感を与えることは、間違いない。監督、演出家だって辻村、団鬼六氏と一流が揃っている。そうすれば『花と蛇』だって、巷のインチキな映画と違い、我々大望のものができるのではないだろうか。モデルだって美人が揃っている。  
また、本誌でプールしてあるフィルムと読者からの希望で作成する特写を引き受けるのも素晴らしいと思う。

ぜひ、この二案、近い将来、実行されることを期待している。

私は、理由もなく体が慄え出すほどのショックを感じたのを覚えています。

診察の場を見ても、さしてどうという気にもならない私が、始めて見た流腸風景に、なぜショックを受けたのか。私自身にもわかりませんでしたが、とにかく、それ以後、床についてから寝入るまでの間、遊び相手の女の子に、私自身が流腸してやっている光景を空想するのが習慣のようになってしまったのでした。

「お通じは？」「ありませんの」「それはいけませんね」……その時の私は、祖父と入れ替っているのです。患者（それは定って、七八才の女の子）に舌を出させて診る。仔細げに脈を診る。次に熱を計る。そして必らず流腸することになる。患者は泣き出しそうにして嫌がるが、看護婦が器用に押えてつけてくれて、私は、充分に流腸療法を施してやり、患者はすぐに病気がなおり感謝される。だが、またすぐに、症状が元に戻り、再び、三度び、流腸しなければならなくなるのでした。

白いカーテン。それは、その後またたび引かれ、その時を狙ってそっと階段を昇り降りする私の

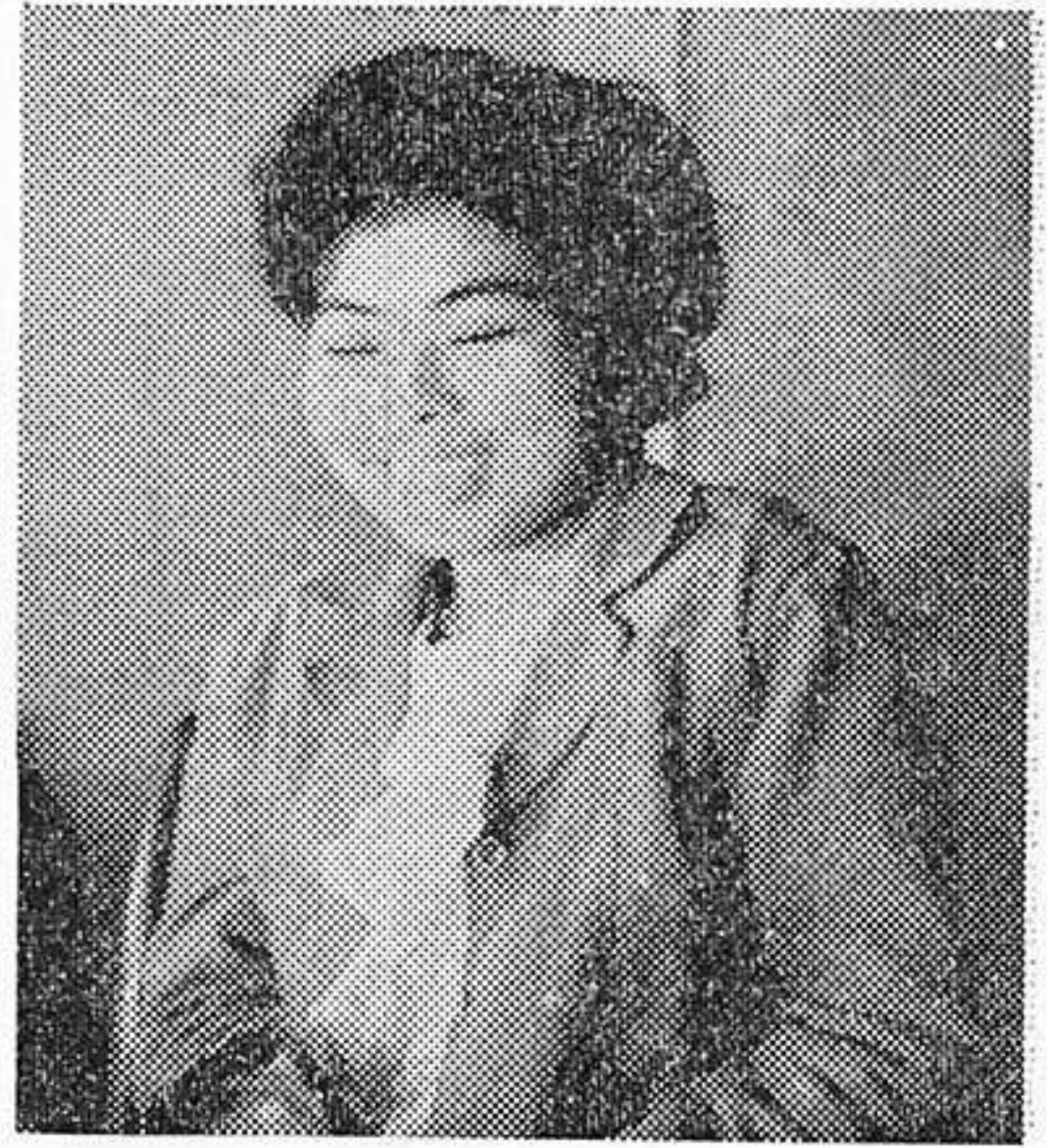
胸は、高鳴りを押えるのに苦勞したようでした。

日が経つに従い、私の空想中の患者は、診察を受けていた女性であつたり、道で会った娘さんであつたり、押えつけている筈の看護婦であつたり、時には、私自身であつたりさえするようになりました。

そして、二年余りの間に、一度だけ、夏の盛りに、食あたりした私が、日頃の空想の中の助手であり、患者であつた筈の若い看護婦から、実際に、流腸されたのでした。彼女は私が羞しがれるのを面白がるように、両膝で俯伏せにした私を踏み敷くようにして、実に入念に、幾度も流腸しました。

ずい分昔（二十年近くも）のことで、この想い出だけは、今だに鮮かに私の頭の片隅に残っているのです。そして、それは、患者の年令が年とともに成長し、妙令の女性になっただけで、私の願望には変わりなく今に繋がっています。そんな幼少の頃に、始めて見た流腸風景にショックを覚えたのは、恐らく、先天的な何かが、私の体内にあつたものでしょうが、この「天国」に遊びたいという憧憬は益々強く私を魅きつけるのです。





—〔告白〕—

## 或る願望に托して

金原奈加子

都会へ出てきてから、まだ間のない十九才になる女性です。今、或る小さな美容院で美容師の見習をしております。

私はここ二、三年程前から、妙な空想が湧いてきて仕方がありません。たとえば、先日テレビ『三匹の侍』を見ておりましたところ、浪人や食いつめたならず者たちの集っている恐ろしい道場へ、一人の娘が訪ねてゆこうとするのを、三匹の侍が若い女がそんな狼の集まりのような所へ行ったら只ではすまんぞ、といって止めているのを見ました。

賞金かせぎに腕自慢の浪人者が

何人いっても忽ちにしてなぶり殺しになる地獄道場へ若い女が一人で行くというのに、私は非常にひかれました。私だったら誰がためにも飢えた狼たちのいる道場へ行っ

て思いきり無茶苦茶になるまで辱められたいのです。そう思っただけで私の胸は熱くなってきました。沢山の乱暴者の中へ、私

がたった一人で投げこまれるといった空想が起り、い



つもそのときの相手は、ハンサムな青年や、身ぎれいな若者ではなく、フンドシ一本の雲助や女を喰い物にするきたらしいヤクザなのです。

こんな考えは大変危険なものだと自分では反省するのですが、夜ひとりで寝床の中に横になってみると、そんな空想が次々とわいてきて仕方がありません。身ぐるみ脱いで素裸にされるという心持でお布団の中で着ているものを全部脱いで、うつ伏せになってお尻を高くあげたり或はお向けになって両足をひろげたりして、自分が本当に強盗に襲われているような気になって興奮してしまいます。

こんなとき、はじめて御誌を見つけ、何んだか自分の気持ちにぴつ

## 編集部だより

○執筆者の方々や読者の方々から思わぬ多数の年賀状を頂戴したことを誌上を以て厚く御礼申し上げます。本年も又輝やかしい発展の年でありますよう皆様と共に期待して一同大いに努力したいと思う。

○中河恵子さんは昨年十二月上旬無事安産されたという簡単な便りを貰った。只今同好の夫君と満ち足りた日々を送っておられる由なので心から祝福を捧げたい。

○近頃写真同封でモデル志願をされる女性が増えてきつつあるのは嬉しい。女性の読者も相当数ある筈なので、どうか御希望の方は御遠慮なくお申出下されたい。

○モデルといえば昨今の出産ブームで妊婦モデルの志願者が勇敢に名乗りをあげて呉れるも頼もしい限りだ。只、出来るだけ出産間際の姿態を撮りたいし、距離が違いとわざわざ出張して行ったのに、急に陣痛が起って入院したという不運に遭遇することもある。現在出産予定日を御連絡下さっている方々も距離の関係でお迎えに行けないのが残念である。



たりのような記事が目につくにつ  
け、思わずしらすペンをとってし  
まいました。日夜こんな思いに悩

まされるよりは、一層のこと同好  
の方々に実際にいじめられてみた  
らと考えたり、或は空想を楽んで



いる方が無難だと考えたりしてお  
ります。

十二月号で三好留美さんや清野  
勝子さん、一月号では久木燿子さ  
んが勇敢に自己主張をしておられ  
ますので、私もその方にならって  
最近写した写真を同封して、この  
お手紙をお送りします。もし辻村  
さま、山本さまはじめ編集部の方  
々の手で、私のいじめられている  
写真を撮って下されば、こんな嬉  
しいことはありません。読者の同  
好の方々の中で、私の空想を実現  
して下さる方がございましたら、  
お便り下さいませ。

現在私は住込みで別に休日の定  
めはありませんが、月に三、四回  
は休めますので前もって日がきま  
っていますとお休みがとれます。

(大阪・金原奈加子)

## 縛り初め十句

柴 利好

——(田宮寿子夫人に捧ぐ)——

○ 奴隷妻の誓い新らたに初縛り

○ 肌に深く縄数も増え初縛り

○ 奴隷妻拒む術もなく脱がされる

○ 索かれ行く仕置の場所は台所

○ 初縄を咬えて背なに組む手首

○ 初縄や肌に冷たい責め柱

○ 常よりも縄目緊しい初縛り

○ 責め柱背負った後は猿ぐつわ

鞭だけは許してと哀訴眼顔なり

○ 初縄の儀式嬉しく奴隷妻

☆ ☆

十二月号、田宮寿子夫人の奴隷  
妻ぶりに感激し、殊に台所に立っ  
た独立柱に縛り上げられた姿を愛  
で、新春の奴隷妻ぶりを偲んでみ  
ました。

○それに引きかえ夫婦(恋人関係  
を含む)プレイの方は極めて活潑  
に行なわれている。いずれ発表に  
支障のないものから漸次誌上に紹  
介されることと思う。

○秋山夫妻ショーの日程表を辻村  
氏に対し送られてきていたが先月  
号の締切り直後だったので十二月  
中のスケジュールは掲載できなか  
った。一月下旬以降の予定を別項  
に載せたので参照されたい。

○口絵並にグラビア写真を廃止し  
て以来、本文中に挿入するフォト  
にて幾分の効果を發揮してきた。

尤もこの写真も極めて縮小して自  
粛の線に沿ってきたのだが、とか  
く視覚に訴えるものは忌避され易  
い運命にあることはいなめない。

○懸賞応募作品として長枚数のも  
のが送られてきつつあるが、優秀  
なものは臨時増刊或は単行本とし  
て発刊したいと思う。告白や手記  
体験といったものでもいいし、単  
行本として発刊するに耐える重厚  
味のある原稿も奮って御寄稿下さ  
るよう、お待ちする。

○編集参考資料としての写真、文  
献資料などで分譲可能のものがあ  
れば編集部に於て購入したいので  
希望価値を付して内容をお知らせ  
下されば折返しお返事する。





## ピンク映画

## 「女体残虐図」

## 紹介

丸鬼土佐渡

タイトルが画面に現われると同時に、全裸で、手足を連結され、宙に胴吊りされて、ゆっくりまわされている女がバックになり、映画は両手両足を猪吊りのようにされたショックキングなシーンからはじまる。

谷ナオミが扮する山形洋子が家出して上野駅に着くと、早速やく

ざ風の男にからまれるが通りがかりの親切そうな男に助けられる。しかし、実はその男もやくざの仲間、芝居を打っていたのだ。洋子をホテルへ連れ込むと、たちまち態度が一変して襲いかかり洋子を犯す。そして仲間にもたらしまわしにする。その場面を、隣の部屋からマジックミラーを通して、四、五人の男がのぞいている。その中の一人で、山奥のダム現場近くに売春宿を開いている組長と呼ばれる男との間に、洋子売買の契約が成立し、夜の山道を自動車で運ばれる。

五時間のもつ麻酔薬をうたれて、洋子は組長の膝の上でコンコンと眠り続けているが、その両手は後手に縛られており、テープで眼隠しされ、更にサングラスをかけられるという厳重なものだ。

売春宿の一室にころがされている後手、目隠のまま洋子のところへ、さきの組長とそのオカミが現われる。オカミが洋子の目をさませ、組長の命令でパンティ一枚に剥ぎ、再びもがく洋子をねじふせて後手に縛りあげる。テープはいぜんとして洋子の両目にぴたりとはりついたままである。組長がオカミを退けると洋子の

品定めにかかり、目かくしを解き弄び始める。ここからカラーなのだが、洋子に扮する谷ナオミは男好きする顔だが、特にその肉体が美しく、乳房は外国女性並に大きく、釣鐘型である。その乳房の魅力がこの映画では最大に生かされ成功しているといえよう。

翌日から洋子は、林美樹扮する春江とともに客をとらされるが、春江の忠告を聞かずに脱走しようとし、番犬にほえられてすぐに捕えられる。

洋子はパンティだけで後手に縛られ、口は割られて猿轡をかまされ、組長にゴムホースを二重にした鞭でビシビシ打たれる。これはなれあいではなく、力の入った打ち方で痛そうであった。

オカミも「やはりホースだと傷がつかないね、私にも打たせて」といって、洋子をとこる嫌わず打つ。そのリンチを春江もみせしめのために見せつけられる。春江も洋子の監督不行届ということなじられが、春江がそれに反抗し、オカミととっくみ合いをする。二人とも逃げだす心配があるというので、組長とオカミから更に厳しいリンチを受ける。ここからカラーになっている。

## 短信往来

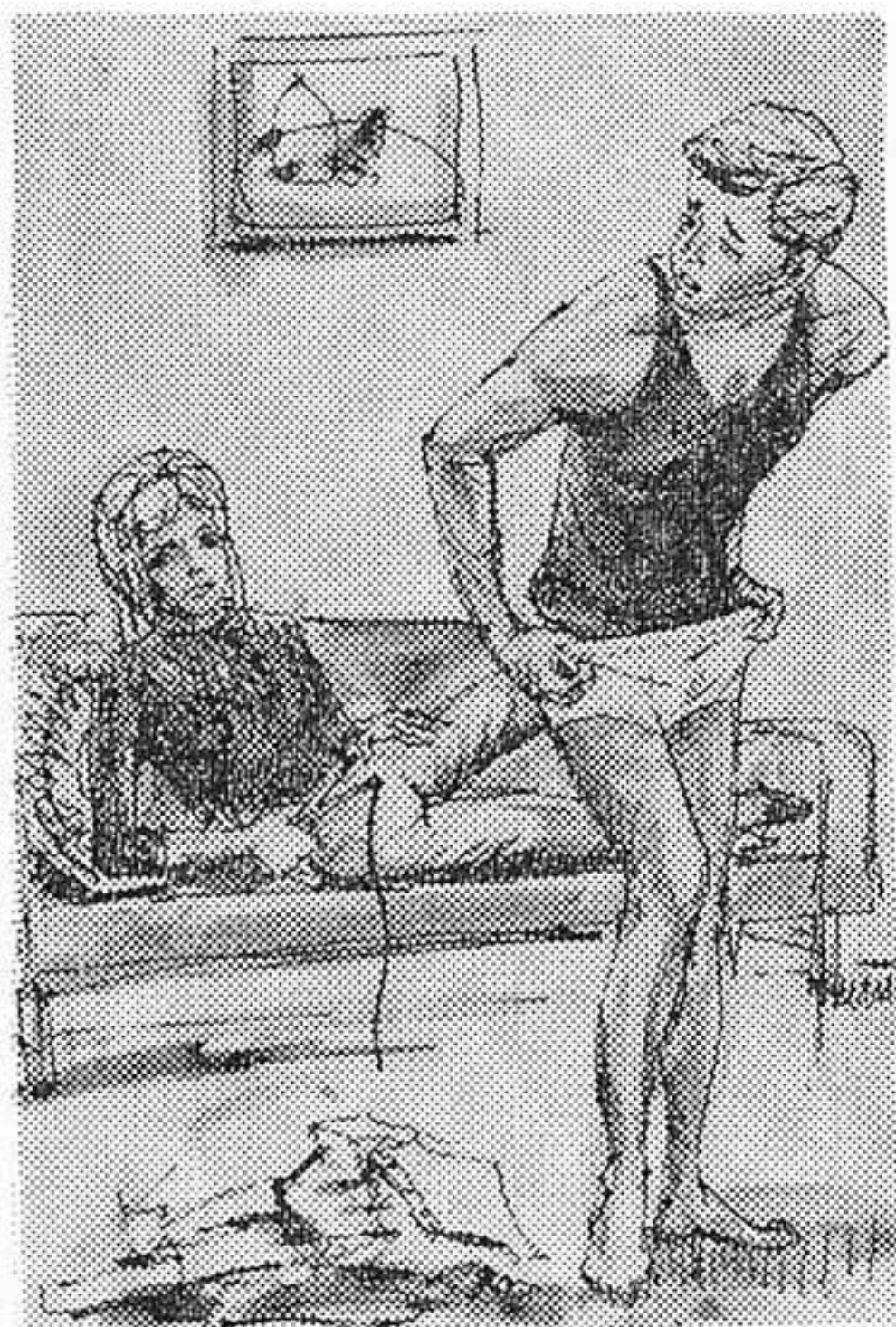
芳野眉美氏へ

夜乃探郎

ゴブサタシマシタ。公開状や告白などを発表してから、直接よびかけるのは随分、久し振りになるようです。ぼくも投書マニアなどと誌友の声が出るようになってはお終いですね。書くのを出来るだけ遠慮している現在です。

今度、どうしてもメモを執筆したくなつて脱稿、投稿したので一言、短信させてもらうことにしました。ぼくのメモ（水中花——芳野眉美の作品について）は、とうとうこれといったよい結論も出せず、尻切れトンボの感がありますね。たまたま投稿してから後、41年11月号に載っていた木戸川（奇ク番外地）の一文が眼についた。「わからなければ、いいよ——」というのは、前衛精神にも通じている「を読んで」「水中花」は、前衛小説でもあるワイ——だから、ぼくの「メモ」も、あんな調子でよいのだとひとりガテンにホッとし





「はやくッ！」宇 都 宮 宏

## 僕のイメージ画集

「ピシヤッ！」室井亜砂路



浴場では洋子が組長に、春江がオカミに拷問されて、悲鳴が浴場にこだましていく。

洋子は髪を結えられ、後手で立たされた両足の下には大きな氷がおかれ、その氷が溶けると、髪の毛を結えたロープで宙ぶらりんになるようにしかけられている。悶える洋子。組長が「さあ、逃げないと約束するか」というと洋子はおも抵抗の色をみせて、ベツと唾をはきかける。怒った組長は洋子のパンティを剥ぎとり、風呂の湯を汲んで足を支えている氷にかけ、溶かしにかかる。洋子の体重

は徐々に髪にかかり、乳房をふって悶え、悲鳴はだんだん大きくなり、完全に宙ぶらりんとなる。氷の上の洋子、髪を吊るした直立はトリックなしで、実にリアルである。

一方、春江はやはりパンティー一枚で、浴場に正座させられ、後手にしばられた手を水道の蛇口に縛りつけられているが、その膝にソロボンをかまし込まれて、オカミの膝で正座の膝がぐいぐいおしつけられ、ソロボン責めをされる。髪はわしづかみにされてあおむかされ、膝責めに力を入れられるた

びに、悲鳴が浴場にひびく。

ピンク映画のよさは、こういうトリックなしの赤裸々の演技にあると思う。大金をかけた大会社の作品より、これらの作品がうけがいいのは、ダテなマヤカシや説教は聞きあきた大衆が、人間本来の姿は何かということを見極めたいという欲望が満たされるという点にあるのではないかと思われる。げんに大会社の作品でも、ピンク映画が扱い、奇クが扱っているようなものを手がけた作品には観客が集まるということは、それをよく物語っている、と思う。

た所です。

ウン、書きたいことをどんどん書きたいように書かれたとお見受けするこの作品は、いずれにしろ貴方にとっても、本誌にとっても記憶に残るべき傑作となるでしょう。

新しく飛躍した「読む雑誌」奇譚クラブ。いまは昔、活躍したばくを含めて、あの人、この人。行動の是非は別にしてもらって、過ぎ去った一頁は、また懐しきものです。

特に現役たる芳野眉美氏に切に期待をかける故です。御健在で。



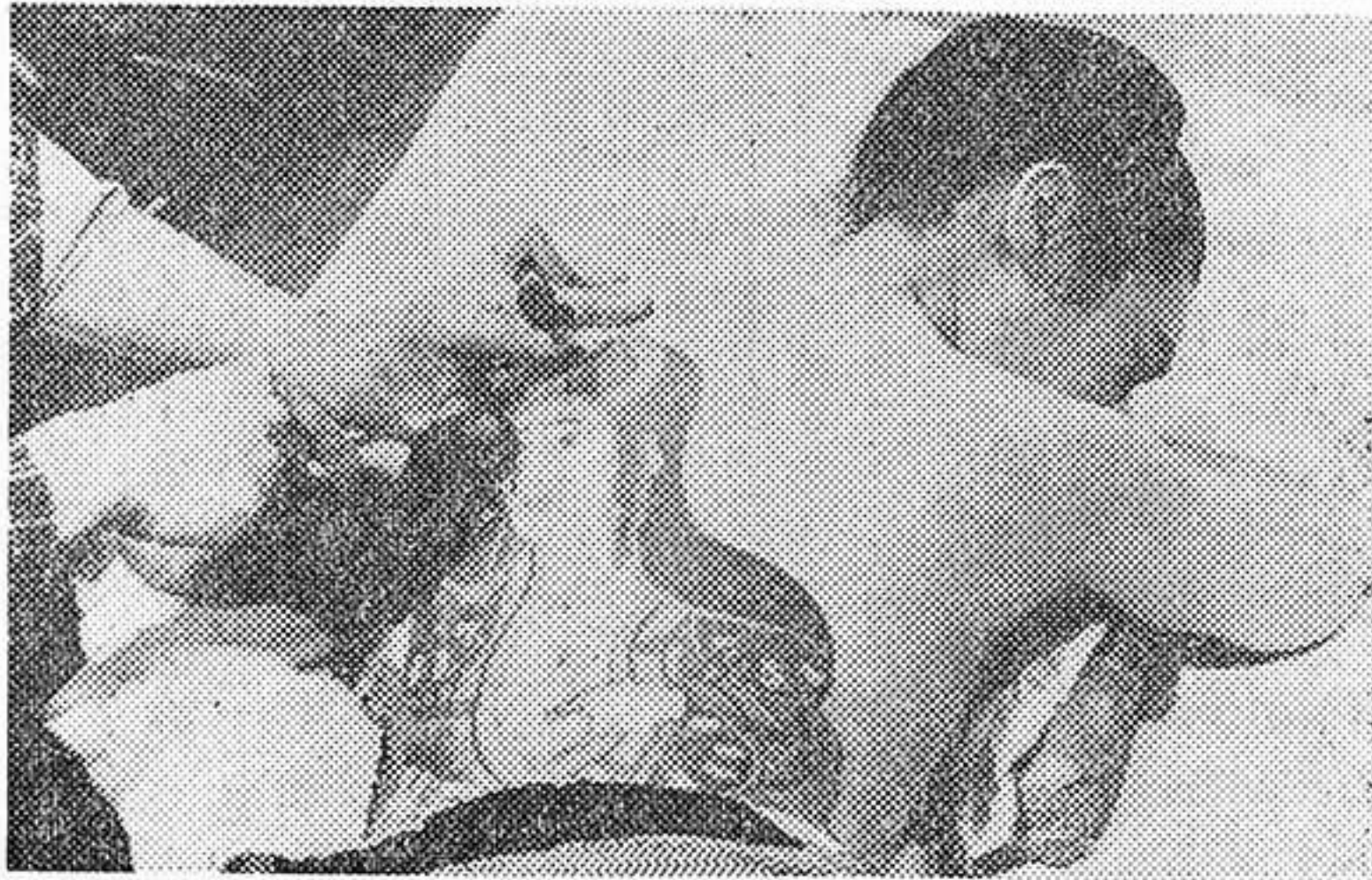
# 刺青師の話

久我庄一

——「愛書家くらぶ」第六号に——

本誌の常連寄稿家であり、書誌研究家、齊藤夜居氏の個人誌について、すでに一月号のサロン、

△編集部だより▽に、個人雑誌の『愛書家くらぶ』について10月28日号の「図書新聞」に詳細取り上げられていた」と報告されているがこの度（42・12月中旬）その第六号が出された。その中で、写真家（著書に『刺青』図譜新社41・6の写真集がある）多摩芸術学園映画講師、森田一朗の一文が、本誌向きとして注目される。刺青されている写真も一枚おさまっているが、「彫文さんの現在の理想は、気性のいい色の白い女の子に、湯上りには全身が、ポーッと桜色に染まる、素敵に白くってきれいなすべすべした肌に、まっ黒い墨針を刺すことで肌に入った墨が、すごくいい青に透きとおって行くのを見たい」と、彫文さんについて紹介の労を、つくしている。



## 〔告白〕顛末記その後

河 本 光 三

過日大島照代との顛末記を書いて間もなく急病で市民病院へ入院したのである。女性の下着専門の商売をする私にとって別に珍しい事でもないがベッドの上で受取ると何となく胸さわぎがするから面白い。ラブレターは如何なる時貰っても悪い気はしないものだ。

差出人名は八千恵子▽とだけ書いてあるが私には彼女が誰であるかすぐわかった。読み下すと

「主人も子供もあるのに、あきれた女とお思いでしょうが、どうしても貴方のことが忘れられず、日夜死ぬ程の想いをいたしております。貴方によって味った主人になり味が忘れられないのです。一日も早く、お元気になられ又フォトを撮っていただける日を夢見ております。」

千恵子

彼女からの見舞文を読んだ私は複雑な気持ちで彼女との先日のことを考えていた。彼女は生活には何の苦労もない身分なのである。私の得意先で男女従業員五十名余りも使い、大津、京都、神戸の三個

所にそれぞれ映画劇場を経営する興行会社の社長夫人なのである。人間、生活にゆとりが出来てくると浮気心が起ってくるのだろうか。私は入院前、彼女に誘われて彼女の運転するクラウンに同乗して京都見物に行った時である。八坂神社の近くの料理屋で夕食の料理をつつきながら、大島照代のフォトを何げなく見せた。

「変なお写真ね」

顔を赤らめて、じっと見つめる彼女の仕草をチラリと観察したが別段それ以上変った反応もなかった。やがて食事が終わると女中が心得顔で別室に風呂の準備のできたことを告げた。

人妻である彼女を慮って流石に別々に入浴したが、色白の肌をピンク色に染めて二十七才の爛熟した裸身を誇らしげに晒らして鏡台の前に肌ぬぎになった彼女を見ると、ムラムラと悪戯気が起きた。

乱れ簾の腰紐をとると、冗談のように彼女の背後から胸へかけていった。





僕の・・・  
イメージ  
・・・画集

左『おしおき』 小妻容子  
下『白状しや』 新井新治

本誌がSMマニア誌とするならば、この「愛書家くらぶ」は書物好きの趣味誌ともいうべきものだ。が貴重な特殊風俗資料も毎号相当スペースを取っているので、大方読者の一見をおすすめしたい。東京都北区滝野川、六の二八の七、斉藤夜居氏宛に申し込めば、発行

毎に一報。現在の所、会費は五百円、送料三十七円、その都度送金すれば入手（一冊分）できる。なお、この号には、斉藤夜居氏の近影（写真）カットとしてある（生方敏郎誌2の一文）ので氏のファンにとっても、興味がある。（挿入写真は本文とは無関係）



「アラ、あのお写真のように、あたしを括らはるの？」  
彼女の目が妖しい光を帯びて、キラリと輝いた。それから後のことは、一体どうなったのか、私にもはっきりとは覚えていない。とにかく気がついた時には、脂ぎった彼女の豊満な女体が、手元にあ

った紐という紐で、芋虫をくびるように縛り上げられていたのだ。十月末、私は箕田編集長に手紙を書いた、新しいモデルを引き合わせると。野口千恵子、彼女を必ず奇クのモデルにしてみせたいと思う。編集長は連絡があれば即刻出勤すると大乗気なのだから。



## 「浣腸体験告白」

女心はロマンチックで女体はせつない

## 「私いま淋しいの」

松井裕子

ボーイフレンドの彼と喧嘩分れてしまった。理由って、別にないの。毎日の様に逢っていた彼と逢わなくなつて一週間、彼から仲直りの電話がかかってきたが、無視してしまう。でも、十日も逢わないでいると、心が乱れてしまつて彼と逢つた時の、あの楽しみのことが思い出されて、思わず尻がむずむずしてしまう。

私って、異常になつてしまったのかしら。逢つた時にいつも彼にされるあの事。今夜はおふとんの中へ入つても、ねむくなくて、何んだか胸がドキドキしちゃう。やってみようかしら、自分で――。

あの時の、彼にされた様に、私はベッドのシーツの上にパンティのまま、うつぶせになる。お尻が全部出てしまうまでパンティをずらし、しばらく、そのままの姿勢でじっとしている。

彼とはもう二度と逢いたくないと思つている私。それなのに、彼

にされたことが、この様に切なく思い出されてくるのは、一体どうしたつていうのだろう。生花の剣山代りにされた時の羞しさ。それが済むと浣腸が待っている。

いろんな恰好をさせられ、二個の生卵を50CCのガラス浣腸器にて注腸される。どんな理由か、この時は両手を背中で合せて括られる。お尻をできるだけ高く突き出す恰好にされたので、首の筋が痛くつて、たまらなかつた。

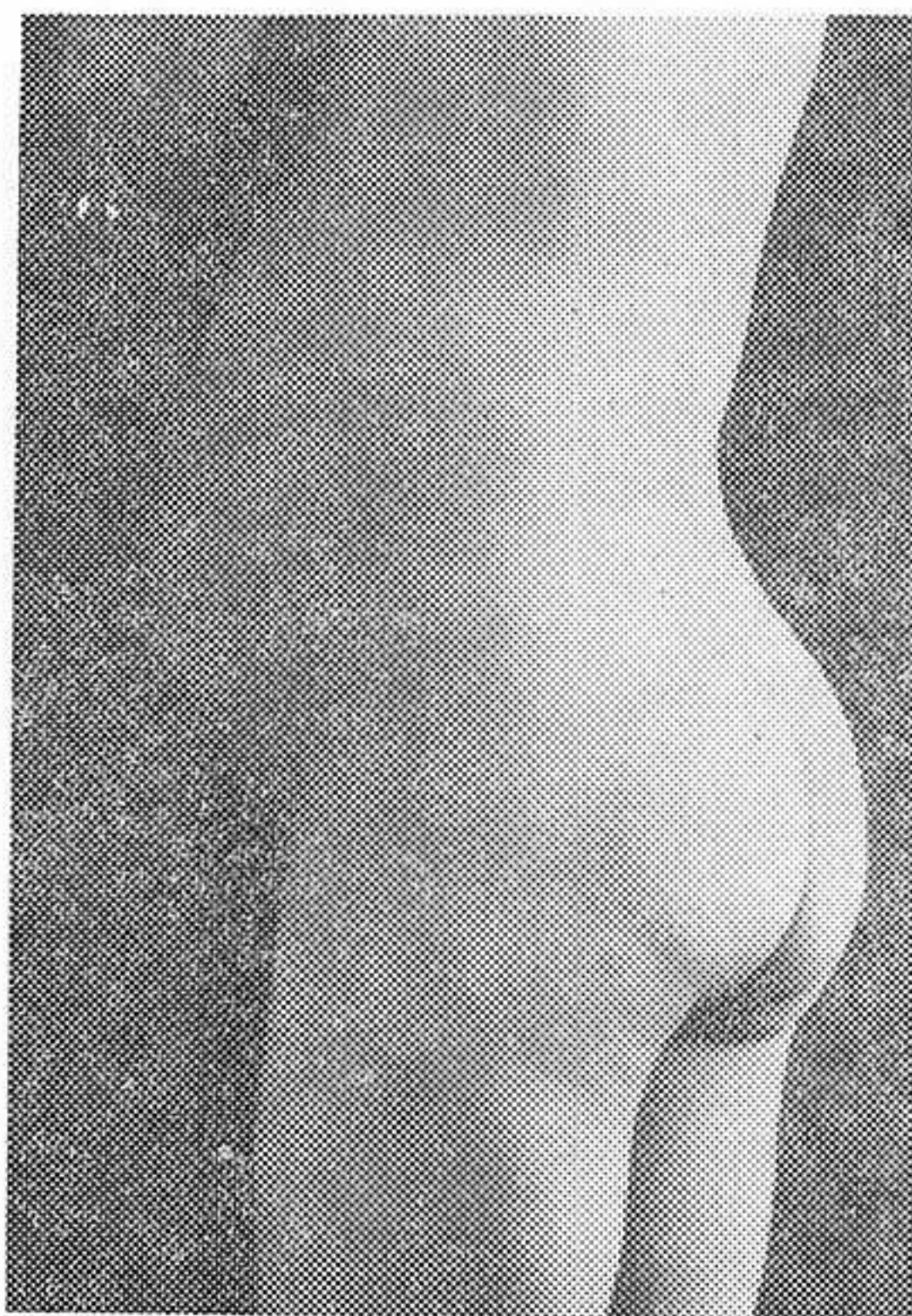
数分後、彼は私をうつ伏せにしたまま、じっとそんな私を観察していた。両手をうしろにしたまま両足を思いきり開かされ、洗面器に半分位お湯を入れたのを両足の間に置かれた。彼はポンプで、そのお湯を吸い上げ、私のお尻に近づけてくるのだつた。

やがて――一刻が過ぎた。

これまでに見たこともない、赤いゴム球の両端に管がついている器具。一方の管には、黒い太管、

## 妊婦哀歓（異常美の極致）

安原さゆり



そして片方は平べったい短い管。洗面器に平べったい方を入れて、黒い太管の方を私の方へ――。

彼がゴムを握ったり放したりする度に、私の下腹にズーン、ズーンと鈍いショックがある。

棒管を私の身体から、ゆっくりと抜かれた時、私はもう耐えられない程の便意に、お尻を左右前後に揺すつて、顔を真赤に紅潮させていた。憎らしい彼。そして甘く

切ない内臓の触感。身体の外側からの感触と違って、内臓の奥底からこみあげてくる言うに言われないうもどかしい感覚。私はあれ以来そんな官能の働きのあることを知らされてしまったのだ。

私いま淋しいの。でも彼とはもう二度と逢おうとは思わない。仲直りの電話をするのは、私のプライドが許さないわ。彼からもう一度掛ってきたら別だけど……。



## 『花と蛇』の配役について 黒柳 鉄

二月号に立町老梅氏が女優による「花と蛇」の配役を書かれておられました。大変興味深く読ませていただきました。適役なので

感心するばかりです。特に美津子を酒井和歌子というのは抜群だと思っています。さて私は独立プロ、通称ピンク映画の女優を対象として

考えていますので記してみたいと思います。

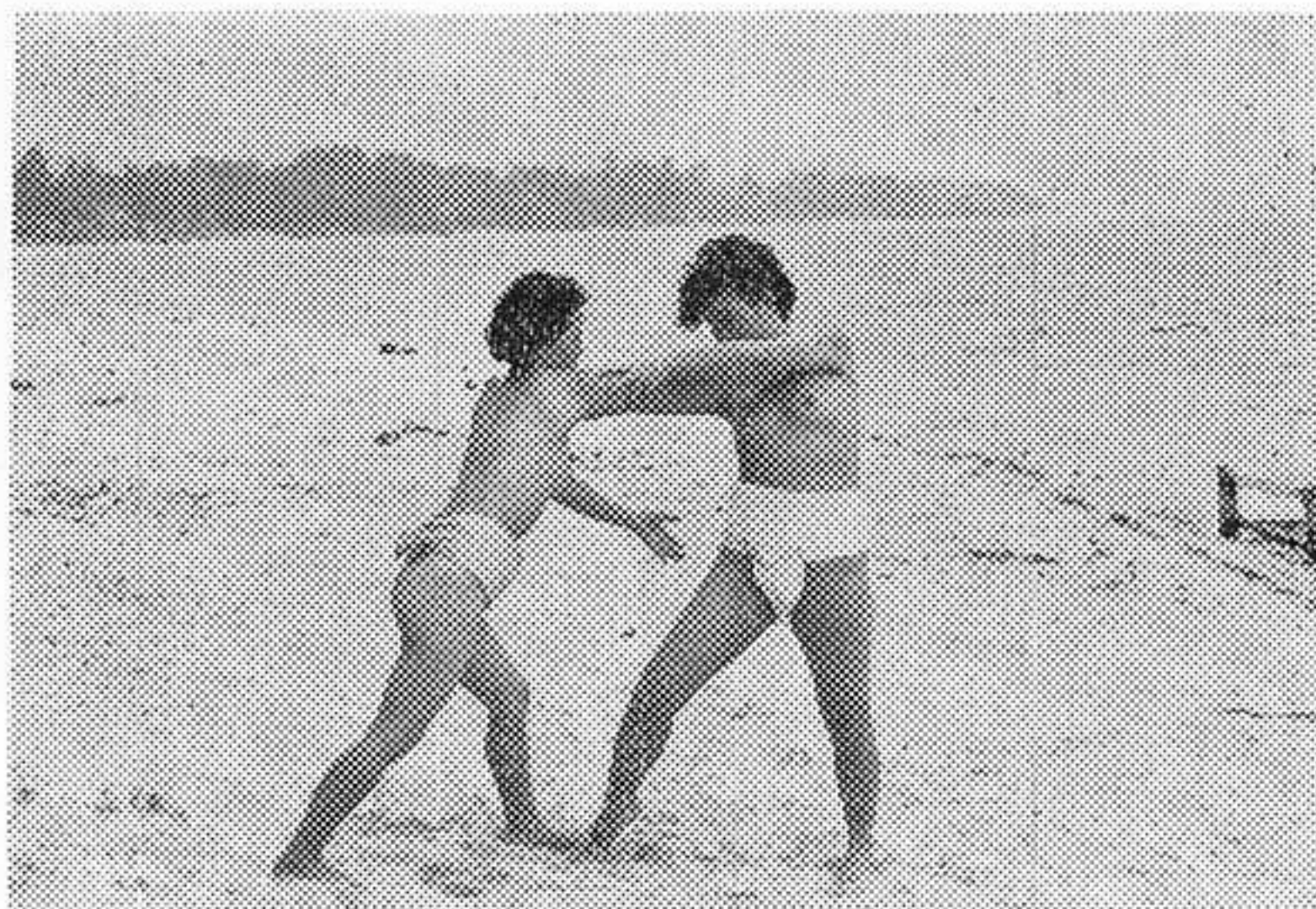
◇ ◇

美津子（松島美雪）色罨

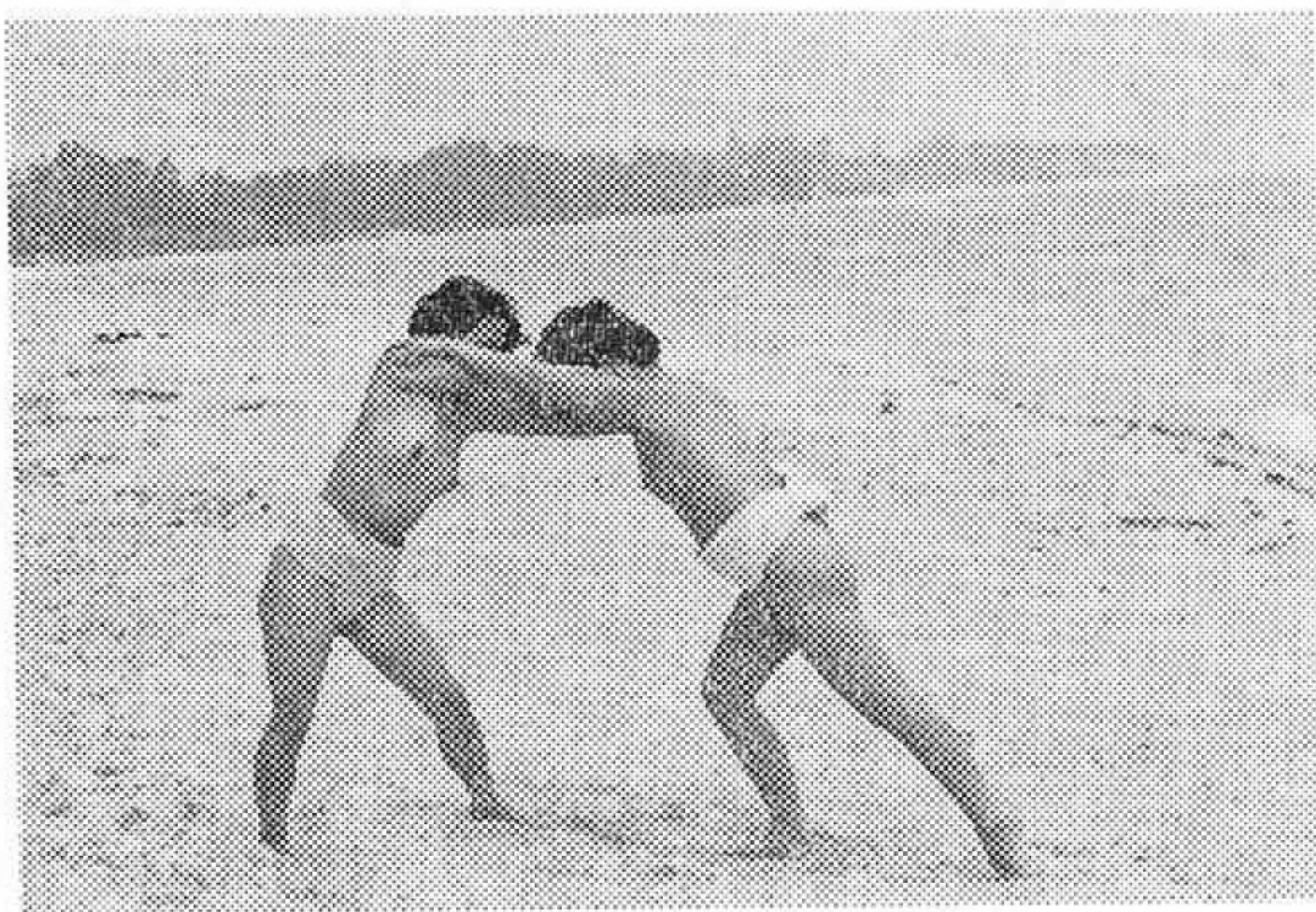
桂子（松宮ゆき）リンチと縛

り

小夜子（辰巳典子）多情な乳液



〔琵琶湖畔女相撲取組カラー作品〕



大塚啓子・東浦ひかる

京子（谷ナオミ）密通刑罰史

静子（美矢かおる）密通刑罰史

○映画名は最近出演して縛られ役を演じたもの。

責め役として――

千代（藤ひろ子）銀子（清水世

津）朱美（林美樹）悦子（一星リ

ミ）等です。

それに、もう一組、奇クのモデルさんや辻村隆氏のカメラ・ハンドでの女性を使って配役を考えてみました。

美津子（三好 留美）

桂子（左近麻里子）

小夜子（河森真理子）

京子（中河 恵子）

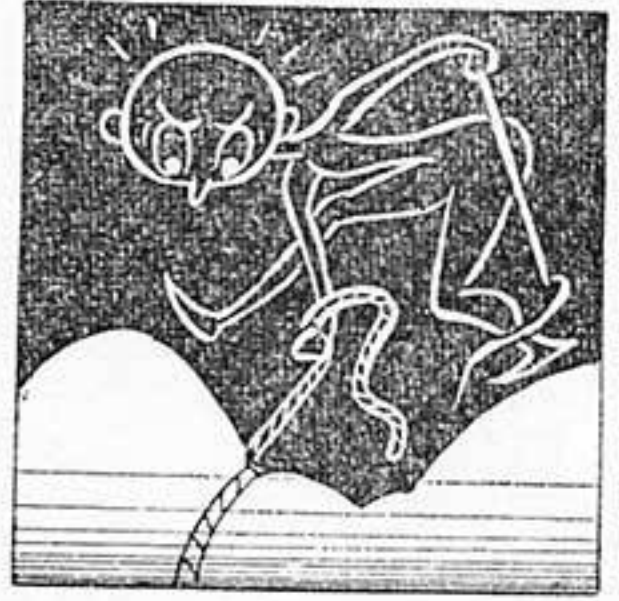
静子（関谷富佐子）

大体以上の通りですが、ピンク女優の方は団鬼六先生に脚本を書いてもらい奇ク主催で映画を製作することも不可能ではないと思います。『花と蛇』・ピンク映画ファンでなくとも奇ク愛読者なら、是非にとこの映画の実現を望むところでしょう。

尚、男性の配役については奇ク愛読者の中から志願者を募集されては如何でしょうか。きっと応募者が殺到することと思います。

この企画の速かに実現されることを望みつつペンをおきます。





## 「芙美子お姉さま」へ

竹 本 雅 敏

お姉さまを誌上で知ってから、私のお姉さまへの思慕は日ごとにつのるばかりで、私はどうすることもできなくなりました。私は二年ほど前に小さな書店で奇クを初めて読み、それ以来、豊満な女性にあこがれ、いつかは理想の人にめぐりあえると、ひたすらに信じて参りました。ですから誌上でお姉さまを知った時には、喜びのあまり思わず泣いてしまいました。

私は、お姉さまのことを考えているときが、最も幸福なのです。夜、床に入ると、いつもお姉さまが私の脇でやさしく小さな声で子守歌を歌ってくれて、私はお姉さまの大きな乳房に顔を埋めて、いつもとなしに、ねむりにつくのでした。そして時には、お姉さまがお店で私以外の男性に笑顔でお相手していると思うと、ヤキモチをやき、お姉さまの大きなお腹の上

に馬乗りになりドシンドシンと尻もちをついて、お腹がはりさけんばかりにするのでした。でも、お姉さまは、じっとこらえているので、私はお姉さまの乳房をかみ、ねじあげるようにしてお姉さまをいじめるのでした。ついにお姉さまは、私に「坊や、許してちょうだい」と泣き叫ぶのでした。すると私は我にかえり、お姉さまにすがりついて泣きじゃくり、お姉さまに許しを乞うのでした。でも、お姉さまは許してくれず、罰として私をお仕置するといって、私の顔面に豊満なお尻をのせて左右に動かして私をいじめるのでした。私は苦しさのあまり足をばたつかせながらも、ついに失神してしまいます。しばらくして私が気づきますと、お姉さまはお腹にクリムをすりこませて私にマッサージをするようにいわれ、私は夢中に

なってマッサージをするのです。数分のマッサージで艶のあるすばらしいお腹になり、私は我を忘れて見とれておりますと、お姉さまは短刀をとり出して、「坊や、私のお腹を切ってちょうだい」というのでした。私は恐ろしさの余り短刀を持つ手がブルブルふるえ、なかなかお腹を切ることができません。お姉さまは「早く切って」といいながら私を抱きしめるのでした。ついに私は、お姉さまのお腹を縦に数センチばかり切ると、絶叫と共にお姉さまはもがき苦しむのでした。やがて苦しみが静まると、お姉さまは私を引きよせ、豊満な乳房に、私の顔をもってゆき、息ができないぐらいに引きつけ私をいじめるのでした。私は嬉しさのあまり「お姉さま」と叫びつつ、我を忘れるのでした。そしてそれ以来、私とお姉さまは奇クのカメラ・ハントなどを参考にしてお互いにプレーをやり徐々に楽しさを見い出すのでした。私がお姉さまをいじめるときにはお姉さまの好みを生かした方法でいじめ、お姉さまが私をいじめるときには私の好みを生かした方法でいじめるのです。私はこのようなことを夢にみながら、いつか必ずお

姉さまに会える機会の訪れることの日々を待っています。お姉さまが若い男性を可愛がりたいたいというお気持は、きっと初めての赤ちゃんを、処置してしまわれた母性本能かと思われれます。でも奇クにより、お姉様のM性を自覚され、今は幸福をつかんで楽しい毎日を送っていられるとのことですから私は嬉しいのです。そして、いつか本当に良い人を見つけられて、かけがえのない人生を送って下さることを、お姉さまを思慕するあまりに願わずにはいられません。また、ファンの方々のために、時々誌上にお便りをお願いいたします。

やがて私の住む地方は雪が降る真冬になります。でも私の身体はお姉さまのことを思うたびに暖くなり、訪れる春を楽しく待つことができます。そして、私にも春が訪れる日がありますように、神に祈るつもりです。

芙美子お姉さま。

では、豊満な乳房と大きなお腹を一層すばらしくして下さい。最後に、身体にはくれぐれもお気を付けて、すばらしいM女性に成長して下さい。

では又、その内に……。



奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

昭和43年3月号

(1968年・3月号<第22巻第4号・通刊第238号>)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

# 私達夫婦の甘い秘密

— カメラハント「南紀の旅」の想いで出 —

安 井 喜 久 子

## 一、しばられる楽しみ

辻村さんの車に便乗させてもらったの十月の南紀の旅は、私にとっては学生時代の修学旅行以上の楽しい旅でした。

女って、結婚してしまうと、本当に家にしばられてしまうのですもの、何年ぶりの伸び伸びした解放感で、身も心もゆるんでしまうような気持でした。今思い出しても、あの

楽しかったひとときは忘れられません。

予約してあった奇クの一月号が夫の外出中に届きました。夫より先に開封するのが、ためられました。カメラハントに、あの時のことが載っているのだ、と思うと、もう一刻も待っておれない気持でした。二階の夫婦の部屋へ駆け上ると、早速ページをめくりました。

SMカメラ・ハント（三浦一美及安井邦臣

喜久子夫妻の巻）そこまで読んで私の手はわなわなとふるえました。

どんなことが書いてあるのだろうか。どんな写真が載ったのだろうか。次のページを見たいし、見るのが何故か怖いのです。

△野獲と戯れる少女▽（夫婦プレイ旅行同行記）そこまで読んで一呼吸<sup>いき</sup>つきました。

パラパラとページをくって雑誌に載った自分の縛られた写真を初めて見たのです。カー





ツと頭が熱くなり、あたりに誰もいないのに思わず見まわして頬が真赤になりました。そして、その次の瞬間、何んともいえぬ満足感が身体中を駆けめぐりました。

夫のいない留守中、私はゆっくりと本文を読みました。ありし日の、あの楽しかった夫とのプレーの有様を目の前に浮かべながら、辻村さんの文章を読んでいったのです。

でも、ページを追って読みすすんでいるうちに、私の知らない間に可愛らしい少女をハントしてプレイを楽しんだ辻村さんに軽い嫉妬を覚えました。私達を置いて急に一人で帰った裏には、こんなことがあったのかと、少

しがっかりしました。しかし、あの時は私達は夫婦同伴で人生の最高のひとときをエンジョイしたのに、辻村さんは淋しく一人寝だったのですもの、それも仕方がないと今回に限り許して差しあげます。

私はへしばられる『縛られる』といった文字に最も興奮させられます。活字になったそういう文字が目に入ってくると、もうたまらなくなってくるのです。いえ、こういう文字は私の願望そのものを表した言葉であり、文字なのです。

夫は解放的でワンマン、私は内気で保守的な性格です。ご存知の通り、新婚三日目にして縛られました。結婚するまでは保守的な家庭で良妻賢母型の教育を受けた処女である私は、こんな世界があるということは夢にも知らなかったのです。それが夫によって縄や鞭の味をいやという程知らされ、今では私達の夫婦生活に於いて、切っても切れない小道具とまでなってしまったのです。

私が両親によって幼少の頃から教え込まれた八夫唱婦随の考えが、夫のリードによって甘い世界を知らされたのかもしれない。又、それ以上に、夫を信じ夫を愛していたからかもしれません。

皆様もご経験がありがたいことと思いますが新婚の間はともかく、三年経ち四年経ちして商売も何とか順調に進んでまいりますと、倦怠期と申しますか、お互いに新鮮さというものを失い勝ちで、我儘も出てきて、ぼつぼつ夫婦喧嘩もやりはじめます。

養子（私も父母も夫に対しては、この言葉はタブーとして絶対に使いません）の夫に仕える心得として、両親は若し夫婦喧嘩になった時は、必ず私が負けるようにと固く申ししておりました。昔気質の両親から常々云いきかされておりましたため、夫婦喧嘩で夫に泣かされるようなことがありましても決して反抗するようなことはせず、両親のもとへ夫の勝手な行為を訴えに行くのが関の山でした。

そんな時、父母は私の言い分を聞いてくれるどころか、かえってたしなめられるので、私はいつもすねてしまうのです。

夫婦喧嘩の末、私が両親の部屋へ逃げていると、夫は仕方なく早速悪友のところへ電話して、北か南の行きつけのバーをはしごして、十二時過ぎでないと帰ってまいりません。ビールの好きな夫は、酒気を帯びて帰ってくると、二人きりの夫婦の部屋で忽ち暴君となってしまうのです。



「貴方、今日は御前様（午前様）なのね。さつきは私が悪うございました。御機嫌を直して下さいませね」

私が詫びるのも聞かず、着物を脱がしにかかるのです。今迄のプレイで馴れていますので、私はなるべく夫が脱がしように身をこなしながら、それでも軽く拒否をまじえつつ、裸にされてしまいます。夫は酒気を帯びると平常の真面目さをかなぐりすてて、凶暴性を発揮しだします。全裸の私の両手をうしろに力いっぱい縛ります。私の両手首は自分でも驚くくらい高く上ります。私はやせているので、他人が見ると逆手になっているようでも、自身にはそうも感じないのです。

夫は私の胸にも二巻き三巻きと縄掛けした上、長い髪の毛を持って部屋の中を引き回します。

「痛い、カンニンして」

階下の子供達や父母に聞かれるのが恥しくて、余り大きな声は立てられません。いつも夫に対して声を挙げて詫びる時が、むしろにせつなくて、又反面楽しいのです。案のじよう夫は私の詫び言を聞いてくれません。

「あなたのおっしゃる事は、何でも聞きますから、髪の毛を引っばるのだけはカンニンし

て、お願い！」

私は夫の好みもあって、髪の毛を腰のあたりまで伸ばしています。それを驚ぶかみにされて、引きずり回されると、目がつりあがったようになつて流石の私でも耐えられない痛さに悲鳴をあげてしまうのです。

「いい痛いワ、ウーム」

それが不思議と苦痛の連続だった私も、いつの間にか快感に変わり、縛られる事が一つの楽しみとなりました。二の腕、胸に喰い込む縄目も痛さは快さに変つてゆくのです。

最近、悲鳴を上げ、呻めき声を挙げることによって一層、その雰囲気に入ることが出来るようになってきました。夫も私の悲鳴を聞いて更にハッスルするのでしょうか。仲々責めの手をゆるめてはくれません。

「痛い、痛い、もっと、もっと」

と思わず叫んでしまいます。思いきり大きな声で泣いてみたいのですが、反面恥しいので、そんな時、夫が無茶苦茶に責めてくれたらと思うことがあります。

夫の性癖については、父母に一切申しておりませんけれど、薄々は知っていることとあります。でも私達二人の平常が仲良いので、安心してゐるようです。

縛りのプレイで発散して満足したのでしょうか。喧嘩の翌日は、夫はスガスガしい顔つきで商売に熱を入れてくれ、昨日の事は何にもなかったかのように、私には優しくいたわってくれます。

私の知らなかった甘い縛りの世界を教えてください。夫は、私にとっては、かけ替えのない大切な人だと心から感謝しております。

カメラの好きな夫は、私達のプレイのシーンをいろいろと撮影します。ポーズの変る毎にシャッターを切る夫のうれしそうな顔を見る自分が幸福でした。平素は内向的な性格の私ですが、カメラの前に縛られた裸身を晒らす時は物凄くハッスルしてしまいます。

南紀のプレイ旅行は本当に楽しかったワ。大勢の家族に囲れた生活から離れて、夫と二人で心ゆくまでプレイを楽しみました。

保守的な家庭に育って、遠慮しがちの性格の私は、夫と辻村様の二人の男性によって、最高の縛りの体験をしました。これが一人の女性に対する二人の男性の責めプレイかと、恥しいけれど満足できた、甘い世界への陶醉を感じた初めての経験でした。

でも私は今度の旅行プレイの中で一番恥しかった事が一つあります。





最初は柱を背にした立縛り、辻村さまの直接の縛りで撮影。柱に縛られ豆絞りの猿ぐつわをかまされ、白の小さなビキニパンティ一つの裸身で立たせられていました。辻村さまは手加減されることなく、ぎゅうぎゅうと力いっぱい縄をしめつけられます。

生れて初めて、夫以外の異性から裸にされて縛られた私、全身がぶるぶると慄えるような衝動で、両膝、両腿が自分ではとめようとしても、がぐがくと振動して、どうしても止まりません。おこりにかかったように、私の身体がふるえるのです。きっと感激のあまりそうだったのでしょう。

辻村さまは、無遠慮に、そんな私の前面を

じろじろと眺めます。夫と一緒に、難波の地下街の洋品下着店で買った穴あきパンティを珍しそうに手に触れてさえ見るのです。このパンティは、特に夫が気に入って、いつもプレイの時には愛用しているものなので、今度の旅行にも第一番に持参したのです。

一枚、また一枚、と撮影は慎重に続いてゆきます。平素、夫に写されているので、馴れている筈の私ですが、辻村さまのカメラの前に晒されて、私の緊張は最高度に達していました。膝小僧が自分でもよくわかるほど、大きな振動をくりかえしています。夫以外の異性の前に、そんな姿を見せるのは、たまらない気持ちでした。

夫はビールをがぶ飲みしながら、そんな私を冷笑を浮かべて眺めています。

ストロボの閃光を放ちつつ、正面から、側面から、ロングで、アップで、私の縛りポーズを撮影し終った辻村さまは、つかつかと近寄られ、私のパンティに手をかけられたのです。無造作にずり下げようとされます。

「ああ、それだけはやめて——」

私はそう叫んだつもりでしたが、声にはなりませんでした。思わず膝をすり合せて、夫の方を見ましたが、夫は知らん顔をしておりません。いずれは辻村さまに分ってしまうことなのですが、私はいつも夫の手によって剃られていますので、つるつるなのです。

辻村さまに、それを知られてしまうのが、とても恥しいのです。夫婦の閨房をのぞかれることよりも以上に、何か恥しくてならないのです。今日も夫と一緒に家族風呂へ入ったほんの僅かな時間ですが、プレイを控えて最後の仕上げをされたのでした。

夫の趣味に忠実に従うのが妻のつとめと考えています私ですが、やはり、最初はそれなりの抵抗はございました。でも夫から「お前は、大変うすいので、俺の好みにぴったりだ。もっと美しく若返ってくれね」と口説かれた時、何か殉教者のような気持ちで夫に身体をまかせていたのです。

夫は毛深い人には全然興味を感じないのだそうです。いや、もっと極端に言えば、真白い処女地に対して、限りない憧憬を抱いているのです。その点、私の身体は夫にとって願ってもない、ほんとちょっぴり手を加えるだけで、彼の好みの姿になれたのです。剃りあ



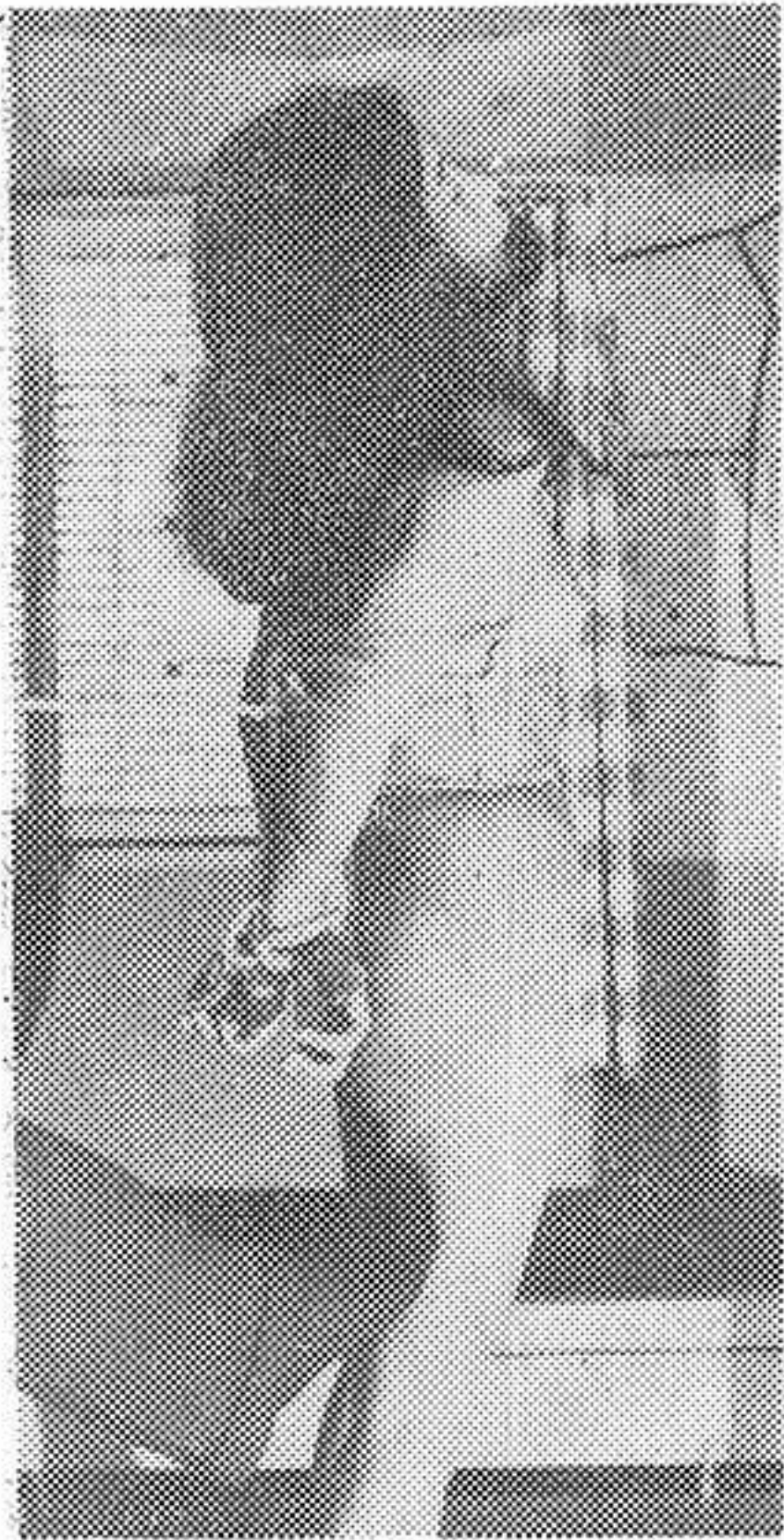
とは青坊主ではなく、すべすべとした禿頭に早変わりしたので夫は大喜びでした。

そして、いつしか、私もそんな姿に喜びを感じ、又時折りされる仕上げに、異様なエキサイトを感じるようになっていました。しかし、今日は違うのです。私達夫婦の秘密を第三者にあばかれてしまうのですから、とてもいたたまれない気持です。でも、夫はニヤニヤして平気な顔をしています。

柱に後手に高々と縛り上げられていたのですから、いくら私がかいたって、何んとも致し方ありません。

「いや、いやいや」

猿ぐつわの下でそう叫んだのですが、勿論辻村さまは聞いてくれる筈ありません。ゴ



ムの入ったビキニパンティは、ずるずると引き下げられました。一瞬、辻村さまは、おっという驚きの表情を見せられましたが、真剣な表情でシャッターを切ってゆきました。

夫は相変らずビールを飲みながらの観戦です。送って頂いた写真を見ましたけれど、あの時が一番恥しかったのです。

交替して夫の縛りプレイになりますと、はじめて私はホッとして、心おきなく全裸になったの撮影です。真白でかげりのない肌をさらしたの数々のポーズも、辻村さまが見ておられたので、何だか平常とは違う面映ゆさですが、夫は鼻唄まじりに上機嫌で、俺はこんなに見事に飼育したんだぞ、とまるで誇らしげに極端なポーズを強いるのです。

「あなたってば——」

私は、辻村さまの手前、夫を制するのです。がハッスルした夫は、そんな私の言葉には、お構いなしに次々と縛り直してゆきます。そのうち、海老縛り、股間縛りと進んでゆくうちに、いつしか私も、

その楽しさの中に没入してしまって、白い肌の恥しさも忘れ果ててしまうのでした。

殊に夫の手ぬるい縛り方に、見ていて業をにやした辻村さまが、私の一番大好きな股間縛りを施して下さいました時は、いつもの夫とのプレイと違う縛り方だったので、痛さは勿論のこと、何んともいえない感覚にしばれてしまいました。

辻村さまは大分お疲れになられた様子なので別室にてお休み頂いて、それから後は、夫婦二人きりの秘密のプレイを思いきり楽しんだのでした。このプレイ内容の詳細は申し上げかねますが、夫婦二人とも時間の経つのも忘れて、物凄くハッスルしたことだけは事実です。

只今、夫は商用で北海道へまいっておりま。夫不在の徒然を、送っていただいたお写真で慰めているうち、夫には内緒で、このレポートを書いてみる気になりました。

若しこのレポートが奇クの記事になったら、夫は自分に内緒に投稿したという口実で、私を縛り上げ笞打ち責め抜くことでしょう。私はひそかに、それを期待しているのかもしれない。もうこの頃では、夫に飼育されるというよりも、私の方が積極的になっ



て夫を誘発しているのかもしれない。

三浦一美さん、お目にかかれませんでしたけれども、何んだか親しみが持てますのではありません。編集部気付でご連絡下さい。ご都合がよければお遊びにおいで下さい。不思議な縁と思いますので、一緒にお話したいと思います。

辻村さまや夫たちのいない、女性二人っきりの場で思いきり楽しみませんか。

## 二、鞭うたれる楽しみ

奇クの一月号のカメラ・ハント、夫婦旅行記の中で、私達夫婦は辻村さまに内緒で秘密のプレイを楽しみました。それは夫による笞打ちのプレイです。

長時間に亘る縛りのプレイと、長距離の車の運転で、大変お疲れになった辻村さまを、お部屋までお送りしてからのことです。

二人の男性によって行われた縛りプレイに満足いたしました。私は次に笞打ちのプレイを期待していました。これは辻村さまにもお話ししておりませんでしたし、私達夫婦の間に、こんな秘密の楽しみがあるということはどうしても知られなくなかったです。

ムチ打たれる———ということは、縛られるということと共に、無垢の私には考えてもみ

ないことでした。それに今では、私はムチ打たれることによって快感を得るようになり、好きなプレイの一つになっているのです。

私達のように、大家族では、とても家庭内では出来ませんが、時折り夫は商売にかこつけて外出に誘ってくれるのです。幸い、子供は両親に預けることが出来るので、いそいそと二人揃って出かけるのです。多くは、いつもきめているホテルへ行きます。

部屋へ案内されると、お茶を持ってきた女中さんが帰るなり、夫は待ち構えていたように、自分のズボンのベルトを抜くと私に襲いかかってきます。そうです。夫のムチ打ちの小道具はいつもベルトなのです。

「待って、お湯に入ってから——」

私としては、責められるにしても責めのムードがほしかったのです。でも、待ちきれない夫は、背中に一発、二発、ビューン、ビューンと叩くのです。これが、私に裸になれという合図なのです。

「脱ぎますから、待って、止めて」

まだアルコールの入っていない夫は、私に浴室へ行く余裕を与えてくれます。お風呂で夫の背中を流し世間話をしている間は、まったくノーマルで何ら変わったことのない夫婦な

のです。ただ違っているのは、これからの加虐とそれを期待する被虐との、二人のプラスマイナスの心が、激しく火花を散らしていることぐらいのものです。

湯上りのビールを夫はおいしそうに飲んでます。私の膝枕で耳の掃除をして呉れという命令は、いよいよこれからプレイを開始する合図なのです。

ほどよくビールのまわってきた夫は、いきなり私の浴衣をぬがせ、後手縛りに締めあげます。私の肌の脂を吸ったロープは、ほんのりとしたしめり気を帯びて、肌にぴったりとまつわりつきます。口の中へは今の今まではいていたパンティを詰め込まれますが、よく訓練されている私は、夫が手を出すと同時に大きく口を開けているのです。日本手拭で頬がくびれる程、きつく猿ぐつわをされると、忽ち発声の自由が奪われて、ただ、ウーウーと呻き声を出すばかりです。

部屋の中のステレオのボリュームを上げた夫は、私を乱暴に横倒しにして、縄尻を四つ折りにすると、私のお尻目がけて、ピシリと打つのです。縄って、案外痛いものです。

二発、三発、とだんだん強くなってきますと、私は縄を逃れようと上向きになっていざ



ります。すると、お尻に一発、俯向きになると、お尻に一発。私は畳の上をごろごろころがりながら、縄で打たれます。

そんな時、考える余裕なんてないのですがお尻の方がまだ幾分痛さが少ないので、結局は下向きになってしまいます。夫は私の痛い痛くないなんかに関係なく、まるで犬でも追うように面白半分に叩きまくりです。両手を縛られているので私はもうどうすることも出来ず、只、ウーム、ウームと猿ぐつわの下で呻き続けるばかりです。

苦痛のなかから、チラリチラリと横目で楽しそうな、満足しきったような夫の姿を見た時、私は幸福感でいっぱいになってしまいます。これほどまでに、夫はこの私を愛してい



てくれる、と肌に痛く感ずるのです。

夫はここでベルトを持ち出してきます。これは縄どころではなく、本当に痛いのです。私のお尻は女性としては決して大きい方ではありませんが、夫は私のお尻に魅力を感じるといって打ちたがるのです。縄ムチの洗礼で私のお尻は真赤にほてっています。

少女のように可愛いお尻——と夫が言うてくれるのですが、いくら激しく夫にムチ打たれても、形だけはくずれません。お尻に対する鞭打ちの快感は、夫に教えられて始めてわかったのですが、思いきり張りあげる悲鳴を伴奏することによって、一層それが高められることを知ったのは、最近になってからのことです。猿ぐつわをしたり、ステレオをか

けたりするのは、そのための配慮です。猿ぐつわも只単に口を手拭で掩うだけのものよりも、口中に詰物をした方が好きです。もっとも悲鳴を上げさせることが目的のときは猿ぐつわはない方がよろしいのですが。ベルトのムチの連打は、無感覚になり、やがて夢幻の陶醉境が訪れてきます。いくら打たれても反応がな

くなると、夫はそこで一休みします。しかし、こんなこと位で許されることはありません。両手と両足をそれぞれ別々に鴨居に吊られて、弓なりに反った背やお尻を連打されるのです。

こんなポーズでムチ打たれますと、苦痛と快感が交互に襲ってきて、口では言いあらわせない甘美な世界へ没入してゆきます。ピシッ、ピシッというムチの音が、まるで天国で聞く夢の音楽のようなのです。

翌日、食卓に腰掛けても、坐れない位の痛さを伴うことがあります。歩きたびに衣服がすれて痛いのも、何かあのときのプレイを思い出して、何んとなく嬉しいのです。数日経たないとともに戻りませんが、時には、やっ

と直ったと思ったら、又次のプレイに入ってしまうこともあります。さて、ノーマルな考えからすれば、裸の肌を力まかせに笞打たれれば痛いにきまっています。いや、実際に打たれなくても、そう聞いただけで怖気をふるってしまうでしょう。痛い、しかし夫は私の肌をムチ打って、苦しむ私の姿を見て昂奮している——そう思うと、私は出来るだけ辛抱してしまうのです。夫の喜ぶ姿を眺めて辛抱しているうち、い



つしか、私もムチ打たれることを喜ぶ女になつてしまったのです。ですから、最初私が夫以外の男性からムチ打たれたとしたら、結果は大分違っていたかもしれせん。

夫の趣味に同調しようと努力しているうち、いつの間にか、私自身がその快感のとりことなつてしまったのです。

「もっと、もっと、もっときつく」

「もっときつくぶって、早く」

そう叫んでしまう私です。目から一すじ二すじ涙を流してベッドの上でムチの雨を浴びてころげまわる私。でも、夫婦生活だけはノーマルなつもりです。

私達夫婦の秘密プレイのエピソードを一つ二つ。夫は意地悪で、私がムチ打ちプレイで泣き喚めき悲鳴を上げたとき、テープレコーダに記録したのです。その時は私も夢中なのですが、あとでそれを再生して聞かされると、とても恥しいのです。夫はそれをよく知っていて、私を縛っておいて無理矢理聞かせるのです。

或る時、ベッドの上で両手前縛りで笞打たれたことがあります。笞の苦痛から逃れようと、もがいた時、ある所に指先がさわり、今までにない感覚に一大発見をしました。こ

のときも、苦痛と快感の交錯を十分に味わいました。

南紀旅行の折は、本当は辻村さまと夫の二人で笞打たれたかったのですが、そのときは恥しさが先に立って言い出せなかったのを、今となれば残念で仕方ありません。

夫は関谷夫人の鞭打ちのフォトを入手しては、私に見せるのです。鞭に打たれて恍惚とした関谷夫人の表情を夫はその度に賞めたたえるのです。私だって、もう少し年期が入れば、夫人に負けなくらいの雰囲気を出せると思うのです。決して鞭打ちでは夫人に負けないつもりです。私が見ても夫人のポーズと表情は見事なので、何かしら競争意識がわいてきます。

笞打たれることに対する辛抱強さは、決して関谷さんには負けなつもりですが、そのときの表情は関谷さんのような真に迫ったものではないと夫に常々申されます。泣き声だけは一人前だがね、と夫は笑うのです。

関谷さんの御主人様が若しお許しになるのなら、四人で笞打ちのプレイをやったら、きっと楽しいだろうなと、夫と話し合っています。私が関谷さまに笞打たれ、私の夫が関谷夫人を笞打つのです。お互いに同好者ですか

ら、この交換プレイは、きつとお互いに変った刺戟を受けあうのではないのでしょうか。

夫が関谷夫人のフォトを見て、その豊かな表情をほめ讃えるとき、私は夫人に対して同好者としての限らない親愛の情を抱くと共に一種の言うにいわれない嫉妬の念を覚えるのをどうすることも出来ません。あれほど笞打ちプレイに没入できる夫人を羨ましくさえなるのです。是非一度お逢いしたいものだと思っております。

ピシッと肌に弾む鞭。そのときの肉体的な苦痛もさることながら、あの〇・五秒の空白を待つ精神的な苦痛、それは次に襲ってくる鞭打の肉体的苦痛以上に私の気持を圧迫します。私はまだMではないのでしょうか？

只、愛する夫に迎合するために、夫の趣味に合せてMを仮装しているだけなのでしょう。私は時間と努力で夫の期待する妻になりたいと考えているのですが……。

☆編集部注☆ 本稿の一、縛られる楽しみと二、鞭打たれる楽しみ、は二回に亘って別々に送ってこられたものですが、誌面の都合によって同時に掲載しましたことを、お断りしておきます。





贗作

# ★ 鞭の女王 ★

— グレタ・エックス原作

『鞭の王国』より—

みはら・ひろし

一週間後、家政婦は書斎で富田讓治氏に對面していた。

「これは、みんなお嬢様の考えたことに間違いないでございます。男の子たちが裸になつて、そんなゲームをしたがる筈でございますんもの」

勿論、リエの考えたことに違いない。と讓治氏も思う。きつと始めから終りまで、これは彼女の仕組んでやったことなのだ。

——彼等をズブ濡れにさせるために雨の中に

連れ出す。素っ裸でバス・タオルのみで暖炉の前に坐らせる。そして縛り上げるためにバス・タオルもとってしまう。……何たることだろう。彼女の性癖は一段とひどくなっている。

「思うんですがいますよ」

家政婦は更に続ける。

「これは私が悪いんですが。私がずっと一緒にいてなきゃならなかったんです。

私は——」

富田讓治氏は無理して笑顔をみせた。

「いや、そんなことはないよ。貴女が悪いんじゃない。貴女は子供達のお守り役じゃないんだからね」

「ありがとうございます。でも、旦那様が留守で、それにあの子達にはお母様がないんですし、私はもっとあの子達に気をつけなければなりませんわね」

「余り深く考えないことだよ」

と讓治氏。



「そんなに悪いことでもないんだからね。第一、あいつらは、まだ子供なんだしね。裸になっただけで、そんなにびっくりするほどのこともないんじゃないかな？」

家政婦が立ち去ってから、あいつらはまだ子供なんだ、と讓治氏は考え続ける。そう、ほんとの子供なんだ。彼は手を重ねた。少くとも、明雄はまだ子供だ。それに多分、彼の友達の淳一も、そうだろう。だが、リエは？ 愛すべきリエは？

リエ。あの、はっとするような美しさ、やさしい性格、親切さ、おしとやかさを持ったリエは？

いや、リエはもう子供なんかではない。そして彼女は急速に、あの方向にめざめつつあるのだ。だが、私に何が出来るよう、本当に。精神医に診せるべきだろうか？ それは何になるだろうか？ もし彼女がそれを内裡に秘めていたら、精神医にだって判りやしない。

彼女の母親を一度、精神医に診せたことがあったが、どちらかというと結果は、なお悪かった。これは考えねばならない。精神医が彼女の治療がすっかり済んだといったその日に、彼女は私にどんなことをしたか、今でも覚えている。

精神医なんて、とんでもない。可愛いリエに精神医なんて！

ドアがノックされた。

「お入り」と讓治。

ジーン・パンツ姿のリエが書斎に入ってきた。

「パパ」

「やあ、可愛いこちゃん」

「家政婦が告げ口してたでしょう？」

「うん」

「彼女ったら、あのことを、やけに気にしてたのよ。でもパパ、そんなに悪いことじゃないわよ、ね？」

彼女の父親は眉をひそめぎみに言った。

「そうだろうな。だが、彼女をびっくりさせるようなことをしてはいけないな」

「でも、パパはびっくりしないわね？」

讓治氏は、ゆっくりと頭を振った。

「そうとも、びっくりしなかったよ」

「どういうことだったのか、パパ、判ったわね？」

「うん、判ったよ」

「それで、パパは怒んないのね？」

「うん、怒んないよ。だけど、もうちょっと気をつけてくれなくちゃね。ほかの人達は、

びっくりするだろう？」

彼女は机を廻って讓治氏のひざにのっかり額に接吻した。

「ほんとに、素敵なパパ。とっても好きよ」

彼女が出て行ってから、讓治氏は再び頭を抱え込んだ。

素敵なパパだって？ この私が？ どうか？ 私は、ただお前の何がいけないか、或は何がいけなくなるうとしてるのかを知ってるだけなんだ。そして奇蹟でもない限り、止めようがないのを知ってるんだよ。私自身には、どうにもならんのだ。

まあ、それにしても、讓治氏はいくらか、はっとする面があった。来週、学校に行ってしまう、そんな悪い気を起すことも出来ない。当分の間はね。だが取返しのがたなくならぬうちに、あの気をなくしてくれるかどうか、神のみぞ知る、で、この上は、彼女が級長なんぞにならぬよう祈るしかあるまい。

遂に学期は終り、リエは白バラ学園を卒業することになった。彼女には三週間の休暇が待っていた。休暇が済んだら神戸の短大に入らねばならない。

彼女が帰省した時、家には家政婦と女中達



しかいなかった。彼女の父は出張中で、弟の明雄は、彼の学校友達と一緒に北海道へ旅行中だった。

リエは荷物を解き部屋をちょっと片づけ、それから淳一のことを思い出しながら、家の中をなんとなく、歩き廻ってみた。淳一には三カ月前の休暇以来、会ってない。明雄が留守であるというのが痛い。明雄がいたら、淳一を一杯やろうとでもいって、呼び出させることが出来たのに。リエが自分で呼ぶわけにはいくまい。

そうこうしてる間中も、彼女の胸の裡には熱いものがくすぶりつづけるのだった。彼女は、やりたいと思い、そう決めたことを実行に移す可能性がないとは考えなかった。彼女の胸のくすぶりは、とにかく淳一を何とかして打ちすえてやりたいということである。彼女は、いくつかの思いつきを心に浮かべてみては打ち消した。そのうちに機会もあることだろう。

最初の晩、リエは淳一についてエロチックな夢をみた。山のスキー小屋で淳一と二人きりになり、彼の両手を縛り上げて小屋の天井の梁に吊るしている夢である。

彼女は、彼を、長いよくしなう筈で打ちす

えていたのだった。そして彼をぶら下げたまま少しまどろんだのだ。それから又、目を覚ましては彼を打ちすえるのだ。彼女が本当に目を覚ました時、すっかり興奮状態に陥っていた。こんな夢をみたことが恥ずかしくもあった。

現実に淳一に対して、こんなことをしようという気はなかった。彼女はただ、彼にズボンとパンツを下ろさせて前かがみにさせ、そして飛びきりの筈を六回、お見舞いしてやりたいだけだった。

彼女はベッドに横になって、もう一度、夢を思い返してみた。それは飛びきり刺戟的で少し恥ずかしく、それにしても何とも魅力的なものだった。

朝食を摂りながら、先ず彼女は自分が筈を持てないのに気がついた。これはいかにも馬鹿げたことだった。誰かを筈打ってやろうというのにその肝心のものがないのでは話にもならない。

だが、まてよ。乗馬鞭があった。乗馬鞭の方が余っ程、痛いはずだ。

彼女の持っている乗馬鞭は、長くて細い、ひだのついた革で包んだ一本の細い鋼線だった。筈を買うまで、これで十分にやれる。

でも、どうやって淳一を仕込もうか？

淋しいからと電話して、一杯やりにいらっしやいと言ってやろうかしら？ そうだわ、明雄には、ちょっとはしたないように思われるかも知れないけど、構うことはないわ。それにしても、父はどう思うだろう。これが気がかりだった。

女中が食堂にやってきた。

「お嬢様、御電話です。中野様から……」

リエの心臓は踊った。彼女は電話器に飛びついた。

「富田梨枝です」

彼女は、できるだけ落ちついて言った。

「やあ、リエさん。中野淳一です」

「淳一君、元気なの？」

「ええ、あなたも？」

「とってもよ。明雄なら留守なんだけど」

「知ってます。でも、あなたに——あなたにお電話したんです。お伺いしても構わないだろうかと思って……」

「もちろんよ。今日、お昼前に一杯やりにいっらっしゃい。そして、お昼も一緒にしましうよ」

これは調子がいい。ついてきたわ。

「それは願ってもないことです。喜んで、そ



うします」

「あたしが学校から帰ったのが、どうして判ったの？」

「明雄君に聞いたんです。だからお待ちしてたんです。私は一週間前から休暇なんです」

「淳一君、なんていい子なの。会いたいわ。十二時、いいこと？」

あたしが、どんなに彼に会いたがっていたか彼が知ったら、驚くにちがいないわ。

リエは急に言った。

「淳一君、いいことがあるわ」

「どんな？」

「午後から馬に乗らない？ 馬に運動させてやってくれてパパの言い置きなのよ。君、一頭、引っぱり出してくれるわね？ 雑木林まで一緒に一責めして帰ってくるの。どうかしら？」

「それは、いい。それじゃ、乗馬ズボンを穿いてゆきます」

「そうなさい。では、十二時にね」

彼女は電話を切ってニコリした。

これで今日の午後、乗馬鞭をあたしが手にする完べきな理由が出来たわ。それに雑木林なら人目も全くないし、鞭打ちの場所としては、とにかく絶好だわ。

二人は、雑木林の茂った木の下の草の上に坐っていた。二頭の馬は、手綱を低い木の枝につながれて草をはんでいた。淳一は恰好いい乗馬ズボンに乗馬靴を穿き、とても素敵にみえた。リエは乗馬鞭で自分の乗馬ズボンのわきを手持ち無沙汰に叩きながら、淳一を横から見つめていた。

リエは淳一が衣服を脱いで全裸になったときも、とても素敵だったのを思い出した。彼は今二十才だが、二十二、三才には見える。彼は早熟で、学校での二年間が彼に自信ある男らしさを植えつけていた。

彼はリエの方に向き直って横になった。「貴女は、この頃ますます魅力的です。こんなことしていると、危険かもしれませんよ」彼はリエの手をとった。

「本当の話、あなたは今とても危険なんですよ」

「淳一君！ あたし達、きょうだいみたいなものじゃない？」

「からかわないで」

と彼は静かに言った。

あなたは、それが嘘だと知っているのに。ボクが完全にイカレてるの、よく知ってるく

せに。ボクがあの日、あなたのために体に変化を起したことを見て以来、そのことがよく判ってる筈なのに、と彼は思った。

彼女は真顔になって彼に目を向けた。

彼は、彼女ににじり寄って唇を合わせた。

淳一は、それをごく自然に、何のためらいもとまどいもなしに実行したのだ。彼の舌が彼女の歯を押した。彼は舌を彼女の口の中に押し込んだ。

だしぬけに彼女は、両腕を淳一の首に巻きつけた。

その晩、彼女は又、淳一を鞭打っている夢をみた。彼女は彼を素裸にして雑木林の立木に縛りつけているのだ。そして乗馬鞭で彼を滅多打ちしているのだった。それから彼女は淳一をといてやり、柔らかな草の上に横になって愛し合うのだ。リエは、うずくような興奮のうちに目を覚ました。

彼女は、自分が本当にこの夢を実現させられないものだろうか、思案にふけた。この通りそっくりでは無理だろう。雑木林の樹々で、しゃ蔽されているとはいっても、戸外で彼を裸にするのは危険だと思う。でも、愛し合う前に彼を前かがみにさせて、剥き出し



のお尻に思いきり鞭をくれてやることだった  
ら、出来ないわけはない。

打合わせ通り淳一は十二時にやってきた。

二人はテラスでシェリイを飲んだ。彼は今日  
も乗馬ズボンに乗馬靴だ。もう一度、二人で  
雑木林まで馬を駆る約束だったのだ。

「淳一君」

彼女は、探るように言った。今、持ち出し  
た方がいいようだわ。

「何なの？」

淳一の態度は愛し合って以来、微妙に変化  
していた。それは恰も、彼女が彼の妻で、彼  
が彼女の夫でもあるかのような、やさしい親  
近感だった。

リエは勇気をなくした。

「大学は、あとどれほどかかるの？」

彼は素早くリエに目を向けた。彼女の出だ  
しは、もっと他のことをいいたげなようだっ  
た。

「二年です。試験に落ちなければね」

「あら、そんなこと大丈夫よ。きっと落ちな  
いわ」

リエの態度は、彼女自身ですら、とってつ  
けたような不自然さを感じさせた。

淳一は微笑んだ。そして、やさしく

「リエさん、やめましょう。あなたは何か他  
のことを考えてるんでしょう？」

「そうよ、そのとおりよ」

「どういうこと？ 昨日のこと悲しんでるか  
怒ってるかなんでしょう？」

「とんでもないわ」

彼女は直ぐに言った。

「そんなこととは全然ちがうわ」

「じゃあ、何なの？」

「あたし、あたし、いけないところがあるの  
よ。あたし、君に対して、あることをしたい  
という、少し変わった欲望があるの」

淳一の目が大きくなる。

「本当？ どんなことをボクにしたいの？」

彼女は、三秒ほど間をとった。

「君をムチ打つこと！」

リエは淳一の目を、じっと見つめながら静  
かに言った。

淳一は、いきなり立ち上ってリエに近づい  
た。淳一の目は輝いている。

「何ですって！ 本当に？」

「本当に、その通りなのよ。恥かしいけど」  
彼は、踊るようにリエの両手をとって立ち  
上らせた。

「恥かしいなんて、こんな素晴らしいこと初め

てです。ボクにも、いけないところがあるん  
です。ボク、あなたにムチ打たれたいという  
変った欲望があるんです。あなたは、どう思  
うかしら？」

彼女は淳一の輝く目をのぞき込み、満足感  
がどっと押し寄せるのを感じた。すべてが、  
うまくいっている。彼女の火も、やがて消せ  
ることになるようだ。

「どうてまあ、変ったことだこと。本当な  
の。もっと早く知ればよかったわ」

「あなたがボクと明雄君を縛り上げて、裸で  
床を這わせドアまで競走させた、あの日のこ  
と覚えてますか？」

「よく覚えてるわ。君が変わったよろこび方を  
みせたわね」

淳一は笑った。

「そうでした。とても恥かしかった」

「あたし、それが気に入ったのよ」

「それが、もっと早く判ってたらよかった。

それから、あなたはボク達を長い竹の笞で、  
二十回ずつムチ打つ話をしたのを覚えてます  
か。あなたは、ボク達が血だらけになるんだ  
と仰言った」

「よく、覚えてるわ」

「それで」と淳一は静かに続けた。



「それ以来、今までずっと、あなたが本当にボクをムチ打って下さることを、繰りかえし繰りかえし夢に描きつづけたのです。そしてどんなにか夢の実現することを祈り続けてきたことでしょう。そして、今こそ——あなたは本当に、それをお望みとは！」

「そうよ、とても望んでるわ。長い間、望み続けたんだわ」

淳一はリエを抱きよせて、唇を合わせた。

「リエさん、本当に素敵……いつにしましように？」

「今日の午後！」

「どこで？」

「雑木林で！」

その時が、やってきた。

二人は又、雑木林に坐り、リエは彼女の乗馬ズボンに包まれたふくらはぎを、乗馬鞭でけだるげに叩いていた。二人とも、ちよっとまどい気味だった。

「いくつ下さるんですか？」

「六つ」

「強く？」

「そう、うんと強くだわね。君に堪えられるかしら？」

淳一は、リエの手にした乗馬鞭に目をやった。

「一生けんめい、我慢します。——でも、それ、とても残酷そうにみえます。本当をいったら、ボク、ちよっと、こわいんです。でもその時が、きたんです」

「それでいいのよ」

彼女の胸が高鳴った。本当に、その時がやってきたのだ。リエは立ち上った。

「さあ、いくわよ。ズボンをお脱り！」

淳一はジッパを手探りし、ズボンを膝まで、ずり下げた。

「今度はパンツ！」

淳一は、無言でパンツをずり下げる。

「さあ、淳一！ 前かがみになって！ しっかりかがんで、あたしの責めをお受け！」

淳一は半ば恐れと、半ば彼女の命令による興奮とで、息をのんだ。彼は夢中で前かがみになった。

「足先を掴んで！」

「でも、ちよっと待って！」

淳一は立ち上った。

「一つ、おききしておきたいことがあるんです」

「いいわよ」

「リエさん、ボクと結婚して下さるでしょうか？ ボクが大学を出たら……」

リエは驚いて、彼を見つめた。

「こんな時に、こんな風に結婚の申込みをするなんて、この世では始めてだわよ」

「その通りです。未来の妻が、未来の夫を初めて打つ前に、ムチ打つ前におききしておきたいのです」

リエは首を振った。

「いやよ、淳一」彼女は、やさしく言った。

「ムチ打ちが済むまで、お待ち。その上で、まだ、あたしに結婚して貰いたいかどうか、思い知るがいいわ」

「そうします」

彼は、はっきりとそう言って、もう一度、前かがみになった。淳一は両掌を乗馬靴の足の甲に平らによせた。

リエは彼のシャツのすそを背中にたくし上げた。それから、あいた方の手で彼の尻を軽く撫で廻した。

「今に思い知るわ。たっぷり思い知らせてあげるから……」

彼女は、思い入れて言った。

「でも、もし君がこれから三分ほどたって、まだ同じ考えを変えないんだったら、ムチ跡



のついてない君のお尻も、これでおしまいということだね。もし君が本当にこれからの六ムチを受けて、そしてまだ、もっとムチ打ってほしいというんだら——」

彼女は、鋭く息をのんだ。

「——それこそ、君は、ほんとに打って打って打ちのめされることになるわよ！」

リエは、ちょっと片方に寄って、ムチを振り上げた。彼女の胸の裡の火が炎となって燃え上った。彼女は、全力を振りしぼった……だが、最後の瞬間、乗馬鞭が正に叩きつけられる時、この最初の時だけは少くとも余力まかせに打ってはいけないのではないかという考えが、いはずまのように、ひらめいた。手加減しなかったがために、彼の性癖を消すようなことになっては、元も子もなくなる。思い切りムチ打つのは、この次でも出来る。あやふく、彼女はムチの勢いを弱めることが出来た。

それにしても、彼は物凄い悲鳴を上げお尻を手でこすりながら、はね返るように身体を起した。

「両手を縛っておくんだったわ」

彼女は軽く言っただけだが、同時にムチがまだ強過ぎたのだろうか、いぶかった。

「もう一度、かがんで！ 済むまで立ち上らないの！」

「こんな、残忍な……」

彼は、つぶやいたが、直ぐに又、前かがみの姿勢をとった。

リエは、続いての五ムチには随分と手加減した。それにしても、このムチ打ちは、受ける淳一には非常な苦痛だった。そして、このムチは、夢にまで描いたリエにとっては頭を血を上らすに十分だった。最後の一ムチを打ち下すまでに彼女は余りの恍惚感で気が遠くなりそうだった。

リエは乗馬鞭を取り落とし、呻きながら草の上に身を投げ出した。

淳一は、ゆっくりと身体を起した。身体中を絶え間なく激痛が走ったが、それが或る痴情的な快感を覚えさせるのに気づいた。彼はリエのそばに跪ずいた。

「リエ様」

ムチ打れたあと、淳一は無意識のうちにリエに対することは遣いまで変っていた。

「何よ？」

リエは淳一の顔を振り向いた。リエのことは遣いも、彼女自身、自覚なしに変わってきた。

「あなたは、ボクに六回ムチ打つまで待てとおっしゃった……」

「そうよ。それで、どうなの？」

「大学を出たら、結婚して下さいますか」

彼女は、やれやれといった風に、ため息をついた。

「淳一、それはあたしにもわからないわ。その時になってみなくてはね」

淳一のお尻は本当に焼けつくようだったがその痛みは、むしろ快感につながっていた。淳一は、自分が彼女からもう六ムチ打たれてゐるのに気がついた。彼は彼女のわきに跪ずいた。

「淳一、あたしはお前をもっとムチ打ちたいわ、毎日よ。六ムチ以上、打ちたいわよ。いいわね」

「ええ」

淳一は、おとなしく答えた。

「いつでも？　そして好きなだけ？　でも、どうしてかしら。どうしてお前は、あたしにムチ打ってほしいのかしらね」

淳一は横になって、そっとリエの胸に手を触れた。

「ボクにも判らないんです。判ってると思っただけ、ほんとにいけないことだし、顔



「廢的なことだと思っんですけど……」

「じゃあ、あたしも頽廢的なのよ」

「そうなんでしょうね。あなたは、どうしてボクをムチ打ちたいんでしょう？ 答えて貰える？」

リエは淳一の指先ではじいた。リエは淳一の目に恍惚の色が浮かぶのを認めた。

「まず、あたしは君のことをわかりたいわ。」

「どうして君は痛い目にあわされたいの？ 痛いんでしょう？」

「おそろしいほど！」

「じゃ、どうしてなのよ？」

淳一は、あきらめたように首を振った。

「本当に判らないんです。何かボク、変なんだと思います。でも他にもボクみたいな人、いるんです。ボクだけじゃないんです」

「マゾヒストね、そういうんでしょう？」

「そうだと思います。何かそんなことがあるんですが、くわしくは知らないんです」

ひと息ついて彼は続けた。

「はっきりしてるのは、あの日、あなたがボクを縛り上げて、そして長い筈で、ボクの背中やお尻をムチ打ってお話をされてからというもの……」

「そして血を流させてね」

「そうです。その時以来、ボクはあなたにほんとうにそういう目に遭わされることに、憧れ続け待ち焦がれてきたのです。でも、どうしてってことになるかと困るんです」

「そういう目に遭わせてあげるわよ」と静かに言う。

「お前を縛り上げて血を流させてあげるわ」淳一は息をのんだ。

「ああ、背中も？」

「そうよ」

リエは、ちょっとほんとに、そういう目に遭わせている場面を心に描いて、頭が熱くなった。

「こんどは、あなたです」

と淳一は夢見心地で言った。

「どうしてあなたは、そういうことをなさりたいんです？」

リエは息を吐いた。

「あたしも、わかりたいね。いつか、わかるでしょうよ。とにかく、あたしは、いつでもよ。男どもを、あたしの支配下において、思うままにしてみたいのね。でも本当に実行してみたいと思ったのは、ごく最近のことよ。つまり想像だけでなくね」

「いつのことなの？」

「学校での最後の学期なの。あたしは、ある女の子を笞打つところだったの。最初のムチを打ち下したわ。そしたら――」

リエは、ちょっとテレたように笑った。「お前のこと、思い出したのよ。女の子がそこにいてさ、前かがみになって、お尻を剥き出しにしてるのさ。そこで明雄と一緒に裸になったお前を思い出したのよ。そして急に、女の子がお前だったらって思ったわけよ」

「その女の子を笞打ちたかったんですね？」

「つまり、気ばらしに……」

「そうよ」  
リエは、あっさり答えた。「もっと正確にいったら、そうしたかった、ということ。でも、お前が頭に浮んだとたん、いやになったの」

「それで？」

「ムチ当てただけで彼女をはなしてやったわ。それから休暇を待ちに待ったのよ」

淳一は、リエを真剣な眼差しで長いこと見つめた。

「ね、ボクたち、二人ともお互いのために生きてきたみたいですね。だから結婚して下さればいいんです」

彼女は声を上げて笑った。



「今に思い知るわよ。でも、あたしが今、何よりもやりたいのは、お前にあと六ムチくれてやることよ。さあ、立って！ 飛びっ切りの六ムチだよ。ほら、さっさと立たないか！そして、前かがみにおなり」

淳一には、今二つの感情が同時に湧き起っていた。強烈な興奮が、その一つである。こんな美女に、前かがみになるように命令されるのは、非常な興奮を起す。もう一つは恐怖である。今から受けねばならない苦痛は、全くの恐怖であった。でも、その怖れより興奮の方が強かった。

リエが淳一から手を離したとき、彼は立ち上り、リエに手をかして立ち上らせた。

「乗馬鞭！」

淳一は身をかがめて乗馬鞭を拾い上げ、リエに渡した。リエは、その乗馬鞭をピュッとごいた。彼女の目は、ギラギラと輝いていた。彼女は乗馬鞭を淳一の唇に押しつけた。

「キスなさい！」

リエは命じた。淳一は、無言で命令に従った。

「今度は、ここ！」

リエは乗馬鞭の先で自分の足をさした。淳一は地面の上に跪すいて、リエの黒革の乗馬

靴の爪先に唇を押し当てた。

彼が彼女の靴に接吻している間に、リエは鞭先で淳一のシャツのすそを背中の方に跳ね上げ、そして彼のお尻を軽くムチ打った。

「さ、かがんで！」

淳一は、直ぐ前かがみになって自分の足をつかんだ。

「今度は、前のよりこたえるからね」

リエは気軽に言った。

「お許しが出るまでは、立ち上るんじゃないよ！」

「いくムチ、お打ちになるんでしょうか？」

「さあ、いくムチかしらね。六つより多いことは、たしかだわ」

リエは乗馬鞭を振り上げ、渾心こんしんの力をこめて打ち下した。もう一度ふり上げ、少しでも威力を強めるために、かがとに重心をうつした。それから乗馬鞭が、唸りを生じて淳一のお尻に、はじけ飛んだ。彼女は、この動作を更に二度くり返した。

淳一は、絶え入るような悲鳴を上げる。

リエは、第一撃のムチを打ち下した時から全身を恍惚とした快感がうずき、甘美な歓喜が身の内に拡がっていたのだ。

二人は草の上で荒々しく愛し合った。

一時間後、二人は馬を並べて、家路についた。二人とも、とても疲れていたもので、ゆっくりと馬を走らせる。馬が歩きたびに、淳一は耐えがたい苦痛に襲われた。

淳一は、出来るかぎり足を突っぱって、ゆれ動く鞍がお尻に当らぬよう努めてみたが、不可能なことだった。こんなことで、淳一は余計な苦痛まで受けることになった。

「可哀想に」とリエは、淳一の魂をとろかすような笑みを浮べて振り向いた。

「痛いでしょう。とても。そうだわね？」

淳一は、悲し気な笑みを浮べた。

「ええ、とっても。でも、気になさらないで……」

「気になんてしないわよ。お前が痛がってると思うと、いい気味なのよ。思うつぼだわ」  
「ああ、あなたは、本当にサディストです」  
「そう」とリエは、あっさり言っただけ。  
「その通りよ。今、それに気がついたわ。今何時なの？」

淳一は、腕時計をのぞいた。

「五時半です」

「町へ寄るわね。十分、余計にかかるだけだわ。買物があるの。六時までは、お店が聞いているのよ」



「では、行きましょう」

リエは何かたくらむように含み笑いた。

「何を買いにいくか、わかってんの？」

「答よ」

「えっ、本当に？」

「そうよ、半ダース欲しいわ」

淳一は、リエを見つめた。

「半ダースも、どうしてそんなに？」

でも、淳一にはリエの答が、わかってる気がした。淳一の声は弱々しかった。

「お前をムチ打ってて、折れたときの用意に準備しておきたいのさ」

淳一の思った通りだった。

「あなたは、その乗馬鞭より答の方がいいんですか？」

リエは、ちょっとためらった。

「そうねっ」彼女は、乗馬鞭を手にかざして眺めた。

「こっちの方が痛いかも知れないわね。でもあたし、答が何か好きなのよ。象徴的なところだね。なぜだかわかんないわ。うまく言えないけど、答に何かすかつとしたところがあつて——そしてピリッとしてるわ。答をお前のお尻に打ち下ろしてやるのは、いい気味だわね」

淳一は、心配そうな笑みを浮べる。

「さっき、あなたはボクの背中にも、とおっしゃいましたね？」

「そうよ、背中もよ。両肩から十文字に見事にきめつけてあげるわよ」

リエは息をのんだ。

「話題を変えた方がいいわ。でないと、今すぐにも又、お前を前がかりにしたくなってしまうわ。そして、お店にいけなくなるわ」

二人は町に着き、雑貨屋に入った。

リエが店に入って答を買っている間、淳一は外で馬の番をしていた。

「あるかしらね」

淳一は待ちながら、リエが店の入口で小首をかしげて自分の瞳をのぞきこむ仕草をしたことを想い出していた。

「あたしの希望通りなの……」

残忍さが漂う魅惑的な眸が光っていた。

やがてリエは、二フィート半ほどの、よくしないような答を六本、手にして出てきた。

淳一は、それに、おずおずと目をやりながら馬に乗ったことだったが、とにかく、二人は出発した。

「もっと長いのが欲しかったんだけど、残念だわ」

「それでも長いようですけど……」

「お前が、かがんでるのをムチ打つのは、いいわね。でも、あたしは前にやってみたみたいにお前を縛り上げて、部屋の中を這い廻らせながらムチ打ちたいのよ」

「わかりました」と淳一は、おとなしく答えた。淳一には又、二つの感情が湧き起った。

こんどは恐怖の方が、ずっと強かった。肩から打ちおろされるのを思うと、気がすすまない。

いや、と淳一は急に思い直した。思うだけなら、とてもすてきなんだ。実際にやられるとなると、ぞっとしないんだ。全く、冷酷残忍なことだ。あれ以上、長い答がなくてよかった。お蔭で、彼女は実行することはできない。

「いいわよ」と彼女は又、乗馬鞭をかざして眺めながら言った。

「この方が答よりは少しは長いわ。これを使ってやるわ」

リエは馬のわき腹を蹴って、早駆けに移った。

「そら！ お前のお尻を、もうちょっと痛い目に遭わせてあげようじゃないの」



## 私の遍歴



## 美女と猿轡

久津和好造

美女と猿轡。これ程世の中に美しいものはないと、私自身は思っております。勿論、猿轡自体は単独では成立は致しません。緊縛あつてはじめて両立するものである事は、申す迄もないと思いますが、私の好みでは猿轡の方に興味の比重がおもい、と言う事になります。

この様な気持が、私の心の中に意識し始めたのは、小学校も終の頃だと記憶しております。普通なれば『明眸皓齒』の文字通り、口と齒も美人の条件の一つである筈なのに、どうしたのか、私は猿轡に妖しい魅力を感じてしまったのでした。

それからと言うものは、夢中で雑誌のさしえ、映画館の宣伝スチールを探し歩いては、ひそかに楽しんでいました。当時、映画は時代劇の全盛でしたので、たいていその様な場面が出てくるのです。三十年を過ぎた今でも記憶の端々に憶い出す事が出来ます。

美女が悪者にさらわれる。……それを助ける、美丈夫と、設定は大同小異で、ストーリー其のものより、猿轡の美女のロング……顔のアップ……女を助けに走る男……後手に縛られた手首……前……後……顔のアップを、交互に永々と写して楽しませてくれました。

その中でも、土師清二原作の『血ろくろ伝』

記』の映画化では、それこそ猿轡と緊縛の連続で、今憶い出してもゾクゾクします。緊縛される女優は、当時の可憐女優、花井蘭子でした。

最近では、大映「夜の罌」の若尾文子で、主人の無実をはらすために敵の罌に潜入し、とらわれ、猿轡に後手縛りのまま、何とか脱出しようと口紅を後手に握り、救助依頼の文字をハンドバッグに書く場面など、ラストの約二十分間位は、猿轡の嵌められ通しと言う、最近にない永い場面の映画でした。

小説の方では小島政二郎の『艶麗風土記』に、相当多頁に亘る縛轡及び木馬責がありました。江戸川乱歩の作にも多くありました。中でも「黒とかげ」と「妖虫」の二作品に多く、特に妖虫が良かった。さし絵は岩田専太郎で、ヒロイン球子が猿轡を嵌められる度に氏の麗筆が魅力で、連載小説ですので翌月号が待遠しくおもったものです。井川洗涯、志村立美、小田富弥などの一流挿画家の猿轡の絵をたくさん集めました。しかし、私のこの猿轡つわ行脚も、戦争のため一時中断のうき目にあい、戦火のため家屋焼失と同時に、永年かかって集めた資料も灰となりました。

戦後、或る私鉄の駅の売店で何気なく、装



釘の変った雑誌を手にし、頁をくった時：瞬間に本を閉じ、あたりを見廻して、早々に其の場を立ちさりました。胸がどきどきして、帰宅後も仲々平静にはもどれませんでした。

翌日、人通りのない場末の本屋で、その本を思い切って買いました。それが奇ク誌と私の、初めての出逢いでした。昭和二十八年だったと憶います。それ迄、私は自分の猿轡好きを、絶対に人に知られぬ様に注意しておりましたが、偶然奇クに出逢って、私はどんなにか気分的に安らかになれた事でしょう。奇クには大変感謝しています。でも、少しばかり不満な点もありました。女のS、男のM、禪、浣腸、女角力等が、誌面の三分の二はありますので、私の様に緊縛と猿轡以外に興味のない者は、三分の一しか見る頁が無いという事です。でも自分の好みだけで他の趣味をお持ちの方の事を考えないのも、心の狭い事だと辛抱して愛読しています。

私以外にも、猿轡の愛好家が世に多くおられる事を知らされたので、孤独な感情が明るくなったのも「奇ク」あればこそと有難く思っています。美しい女性が猿ぐつわをはめられる事に依り、尚一層美しく思われ、又、瞳が一段と輝き、眼の美しさが強調され

るものです。

だが「猿ぐつわ」と言う言葉や文字は、平和な一般の家庭生活では無縁のもので、夢でしかありません。ましてや『生』のままの猿轡の美女にお目に掛るなど、先ずは不可能な事です。

夢。そうです。人間は何にかと夢見ているものです。夢でも結構楽しいではありませんか。現実には、テレビ映画で偶然に出合う事もあります。ほんの一、二秒では問題になりません。現在の私は自分で造る楽しみを、おぼえました。と申しますのは、週刊誌、映画誌及色々の雑誌で、好みの美女を見つけます。その内容はともかく、美人を掲載してある雑誌を買って、自分の好み通り猿轡を嵌めるのですが、なかなか思う様に出来上りません。初めの頃は取って付けた様でゴコチなく、細工したものと一目でわかりますが、色々と研究を重ね最近では、一見して本当にその様に見える程に上手になりました。映画女優など、諸々の美女に猿轡を嵌めた顔写真が、二百枚を越したかと思えます。

生来の写真好きが、こんな所で役に立つとは考えてもみなかった事です。又私は、猿轡には日本髪が一番似合うと思います。そして

鼻と口をすっぽりと、出来るだけ巾広く日本手拭で嵌める式のが大好きです。だから洋髪の美女も全部日本髪に合成して顔写真を造り、出来上った顔写真は38%一眼レフで接写してネガを造り、次の段階では「奇ク」発行の緊縛肢体のグラビアをたくさん用意してありますので、その中から色々とピックアップして、姿体に似合った顔写真のネガを、引伸機で体とバランスのとれた大きさの顔に焼付けます。普通印画紙は厚みがあるので、この場合「CH」と言う極薄平の印画紙で顔写真を完成させてから、ハサミで切りグラビアの緊縛姿体へ貼り付ければ出来上りです。

自分の好みの映画女優等に猿轡を嵌め、緊縛姿体に造り上げるのは何んと楽しい事ではありませんか……私のスクラップブックには、この様にして出来上った諸々の美女達の美女達の監視人で時たま見廻って、夢の世界に遊びます。現実の忙がしい生活を、私はこの様にしてエンジョイしております。「奇ク」にお世話になって拾余年。もうはずかし気もない年令になりましたので、思い切って初めての投稿をしました。

読者で気の合った方との文通を望みます。



# 稿談性風俗資料入門

## 『秘戯指南』について

### 風俗／特殊／雑誌のいろいろ（一）

斎藤夜居

『秘戯指南』は、梅原北明編纂による代表的な著述として知られている。性愛百科事典とも謂うべく、広範囲に亘って素材を盛り込んだ／＼性愛術の書としても、当時としては資料発表の困難な、各種性典を大胆に織り込んであり、文芸市場社本としての真価を発揮し、軟派愛好者たちを十分に堪能させたものである。

約千頁の内容を飾った装幀がまた実にこつていて、商業出版の刊行物とは全然異った愛書家好みのどっしりと落着いた背革本で、特

殊出版ということのみならず、これの造本の味というのは書狂にとつては何時迄も忘れられない。本書に就いては今迄にも種々紹介が行なわれて来ているが、この艶笑出版史上の珍品を詳しく記したものが見当たらないので、内容の案内を兼ねて少しく私見を記してみたと思う。

秘戯指南 昭和四年五月発行 著者・梅原

北明 発行者・中野正人 発行所・文芸市場社 本文七七五頁 附録二三頁 定価

五円 装幀・酒井潔

目次

第一部 一般性愛学

和合の秘訣、生殖行為に於ける享樂の原因、女性と情慾の種々なる所在、八益七損、両性観相法、色情相法、古代印度に於ける四種類の女性、交合に関する禁忌に就て、仏陀の戒律、性的衛生学一般、女子生理学一般。

第二部 性交術百態

性交の準備、抱擁、接吻、爪の搔傷、齒の



咬傷、打撃・叫声・擱髪、アナンガ・ランガの性交論、カーマ・スートラの性交姿態と其準備、ジャルダン・パルヒューメの性交姿態、エル・クターブの性交姿態、ラテイラ・ハスヤの性交姿態、アナンガ・ランガの性交姿態、洞立子の性交姿態、素女経の性交姿態。

### 第三部 御法秘戯編

色指南、開相十二犯伝、呪と護符、制御術、結胎交合妙訣の八要、艶道の妙術、六踏三畧の秘伝、臨御及び御法、処女及び年増を御す法、淫情を長く保つ秘訣。

### 第四部 秘薬法一般

強壯剤としての秘薬、催淫剤としての秘薬、性交増進剤としての秘薬、男根の増大・女陰の縮小に関する秘薬、精液長時間保留の秘薬。

### 第五部 恋愛術

女性観識法、愛を受くる法、処女の信頼を得る法、媒介者なく男女相接近すべき法、他妻の信頼を得る法、娼妓鑑識法。

### 附録 性及び性崇拜

男根崇拜史、女陰崇拜史、日本性的神分布表、現代邦訳艶書解説史。以上。

本書秘戯指南の現物に接しないで以上の多彩な目次を通覧すると、各項目に亘って、梅原北明の性愛論が絢爛として展開されているように見えるが、そうではない。いずれも、その項目に分類された性典からの抽出である。それらの引用文献をひろい出して左に列記すると、

失題の艶本と題して、数種の江戸艶本の読和の部分抄出、アナンガ・ランガ、玉房秘訣、色情相法、色道禁秘抄、邪淫戒、立洞子、繁華麗錦和解、エル・クターブ、カーマ・スートラ、ラテイラ・ハスヤ、肉蒲団、和尚奇縁、情海奇縁、絵図風流奇談、

女才学絵抄、ジャルダン・パルヒューメ、素女経、色指南（艶道の大意）、いんよう手事の巻、枕文庫、好色智恵の海、らぶ・ひるたあ（酒井潔）、本草綱目、玉房指要、医心方、実教絵抄、婦美のはやし、文のしなん、黄素妙論、男女懷中札開節用集、閨中必要奇薬調製法秘伝、艶道日夜女宝記、毬歌国字解、花紋天のうきはし、好色秘術集、懷中要辞、春の若草、女今川、文のまこと、テラピー（大正13・11）、性愛秘義、性の崇拜（ウォール）、日本性的神分布表（斎藤昌三）。

等々、珍書愛好家の各位にはそれぞれ思い当るフシの書名も多いことであろう。引用書中もっとも多くの頁数を占めているのは泉芳環訳の印度学会発行の『カーマ・スートラ』『ラテイラ・ハスヤ』。酒井潔訳の『匂へる園』などと、なっている。『邪淫戒』（北川智聖訳著 新訳小乗四分律 甲子社書房大正15）からも大量に引用したり『色道禁秘抄』は写本に拠ったものらしく然かもあまり善本を使用していなかったりで、性典類を一堂に寄せ集めたのは当時としては偉業だったが、戦後になって各種複刻された正確なものとか



「変態黄表紙」創刊号表紙



らべると、ずいぶんと杜撰な編輯だった。文献資料としての眼から見ればそうであるが、厳しい官憲取締りの網をくぐって此の美書の出版は偉業だった。——次に、北明以外の出版社に移ることとする。

◇ ◇ ◇

軟派本やその出版所の系譜というのは仲々ややこしいもので、社名は存続しても経営者が替ったり、経営者は同じでも時々社名を変えたりする。また誌名も社名も住所も変えるが同じ経営者が根強く更生したりして、煮ても焼いても食えないシブトイのは戦後に至るまで生残ったものもあるが、全然別個の縁もゆかりも無い者が、既存の社名に似せて盗用したりする場合もあった。いずれにしても公然たる出版社という訳ではないから、社名登録をした堂々たる事業ではないので、真似されたからといって文句の持って行き所がない。元来その出版物は著作権も版權もないのだから、海賊版が出たってそれが道義に反する行為だという主張する根拠もない。類似社名の横行したことは、仲間割れの分裂派が活躍したからである。文芸資料研究会、文芸資料研究会編輯部、文芸資料発行所、東京文芸資料研究会、文芸科学研究会、等々まぎらわしい

ものが多い。そうしたなかでも梅原北明の主流派や分裂してもまだ幾分イキがかかっている出版社は、必ずしも売らん哉意識の悪どさのみならず、造本上に趣味があり、創意があり、内容の選定に当たっても珍らしい文献をねらっていたから、必ずしも北明本だけがすぐれていたとは謂えないようだ。

軟派出版も末期のものだが『青髯事件』（昭和7・4紙虫の世界社）という秘密出版があった。四六判うす緑クロス装で二百頁くらいと記憶しているが、本文二度刷で、内容はそれ程にきわどい読物ではなかった。私はこの本は一度は入手し読了しているのだが、発行所名に馴染がなく、この種の読物としては本格的に製本されている点を珍らしく思ったが、強いて保存の要もないと思って購入しなかった。所が、これが非常に珍本であって、軟派本のうちでは最も残存部数が少ないものであった。○という梅原系の出版屋がいて、雑誌や単行本を数点発行したが、その弟が出版したものである。この書一冊だけ発行したものであった。『青髯事件』は当時の多くの例があったように印刷中に押収され、辛うじて製本済の約五十冊を持出し、大阪のある軟派本仲買人に連絡すると、全部引受ける

というので指定された日時に会合場所の旅館で待っていると、間もなくその男が現われて現物を見せてくれと言う、そして後で代金を持ってくるからと言って一旦帰って行った。

——夕方になって、今度来たのは刑事だった。たちまち御用となり、警察に四十日以上も放り込まれてしまった。打明け話をする、この仲買人は刑事とグルになっていて、密告した謝礼にその本を貰うことになっていたのだ。拘留期間を了えて彼が東京へ戻った時には、家庭の経済はメチャメチャになって居り、その妻もいなくなっていた。得たものは、もともと患っていた肺病が悪化したことだけで、一ヶ月半後に死亡してしまった。彼はその兄とは違って非常に真面目で細心な性格の男だったが、魔がさしたとでも言おうか結果的には『青髯事件』と心中してしまった訳である。その出版社名を八紙虫の世界社と名附けた位だから、余程の本好きだったのであろう。気の毒な話だ。

私が如上の事情を知ったのは最近のことなので、当然入手できる珍書をみすみす逃がしてしまったことを残念に思うと同時に、この話は軟派出版に対する認識を一層深めることに役立った。敗戦後のエロ本氾濫の事情と戦



前の軟派出版のそれとを同じ眼でみることは間違いで、時代が経ったことばかりではなく、書物としての味や匂いという点では、やはりいいものを残していると思う。

軟派出版物は最近になって愈々収集が困難になって来た。特に単行本よりも雑誌類に至っては、創刊号から停刊まで（正確にその期間や冊数を調べるだけでも一種の仕事になってしまふ）、だから揃物を入手することなど不可能と言っても良い。どういう訳か、最近の軟派本の値上りは著しいもので、特に昭和初期のものは内容価値つまり読むということより、書誌的な趣味価値が認められて来たように、保存佳良の美本ともなれば馬鹿馬鹿しい程の高価を生じている——。従って私の蒐集の継続も又しだいに困難になって来た。以下は以前にはまだ発表を差ひかえていた未整理ノートや雑感を含めたものだが、斯道文献に興味・収集を有する方々に御高覧と補充を願う意味で綴った迄で、後日に大成を期したいと思っている。

この稿を本誌上に年代不同のまま数回発表し続けて来たが、現在までに私の考え得たことは、庶民が生活のなかにある「性文化」の面をそれぞれの立場で真剣に、ということとは

「談奇党」第五号表紙



粹談・猥談ひとつを聞いても、顔でわらって心はひどく真面目に——生活の智慧をふやそうとしている気持が、ハッキリと現われている時代は健康であり、生氣潑刺として生活意欲にも富んでいたと思う。数多い人生の謎のうちで一番こまるのはセックス問題であるから、このことをいつまでも追求しているうちは、人間の心は常に若いということであった。

◇ ◇ ◇

『変態黄表紙』昭和三年十二月に創刊号を発行し、停刊は昭和四年五月。全四冊。鳥ノ子表紙の美装雑誌、表紙には毎号色刷の貼絵があり、特殊趣味雑誌にふさわしい誌名であり、

る。

発行所は第一冊、第二冊が文芸資料研究会編輯部、第三冊と第四冊が南柯書院となつてゐる。文芸資料研究会編集部というのは、梅原北明の後をうけて、上森健一郎が主宰し、昭和二年五月に牛込赤城元町の文芸市場社からわかれて、牛込東五軒町に移った頃の名称である。然し、上森は北明の去ったあとの、雑誌『変態資料』のみに頼るのが不安になつて、上野広小路に移転して「南柯書院」と称し、また「発藻堂書院」を兼営して出版事業を続けたが、昭和四年八月に『世界デカメロン全集』なるものの刊行を発表し、未刊のまま姿を消してしまった。のちに又、牛込に舞戻って「東欧書院」を創立したりした。梅原北明とは違った意味での、典型的な軟派出版屋だった。まだ北明の下で変態資料発行名義人だった頃——昭和2・3——雑誌編輯後記の事務報告欄で寄附金を募ったりしたが、これは東京市会議員に立候補するための軍資金につかったというから、軟派というより硬派もいい所である。上森は当時たくみな弁舌をもつて、第一銀行牛込支店に口座を開き、不渡手形を乱発。そのため同支店長は本社より責任を問われ左遷されてしまったという。軟



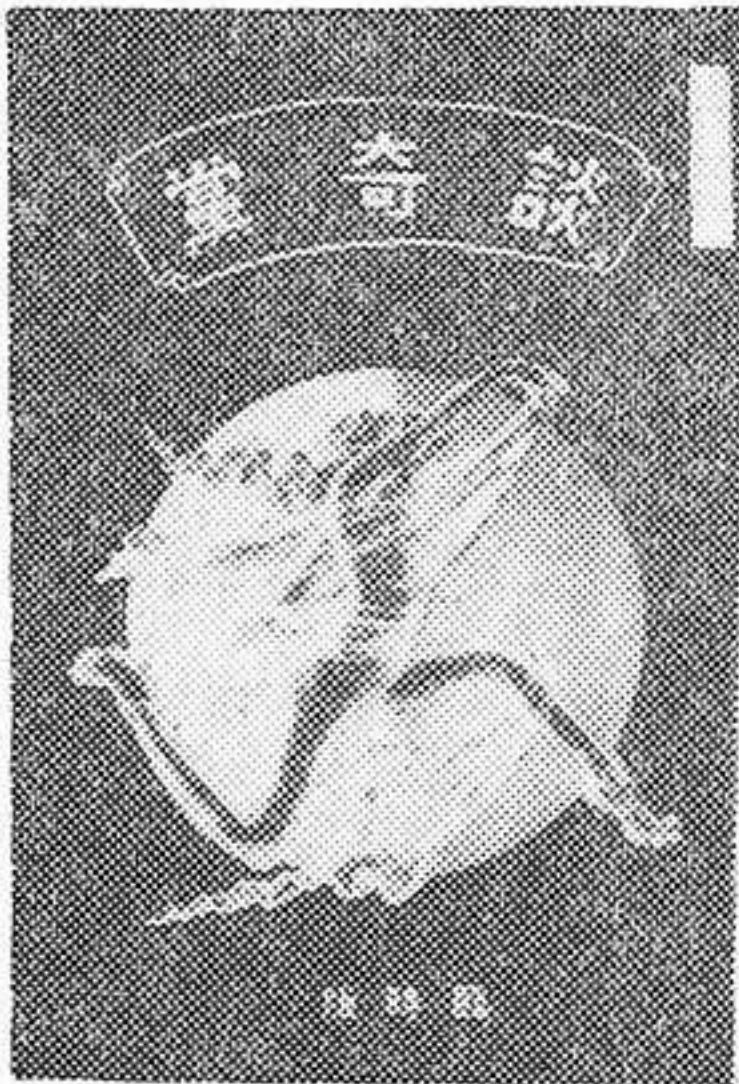
派刊行物では発行者として随分馴染の深い名前だが、事業経営者であり政治ボス型で、とても文献の世界の人間ではなかったらしい。少しく時代を早く生れて来た男で、むしろ敗戦後の日本が必要とした人物であつたろう。

雑誌その他出版物の実際上の編輯人は宮本良であつた。宮本も梅原の文芸市場社の編輯員だった。雑誌『変態黄表紙』はその発刊当時の内容見本も禁止になつたりして、創刊号から三号まで連続発禁、第四号のみ頒布を許されたという珍誌だったので、全四冊揃は仲々見つからない。次に総目次を記す。

### 第一冊（昭和3・12）

現代死刑徒資料

斎藤 昌三



「談奇党」臨時版表紙

女角力誌考

世界珍書往来

猥褻雜考

印度愛経研究講座

女子手淫の文学的考察

艶色解題

性的崇拜論

破礼句今昔志

変態歌謡小曲集

一日一夜物語

### 第二冊（昭和4・2）

性的小咄傑作集

女角力誌考(二)

女子手淫研究

便所考（醜臭收拾）

ほかに連載の続きと、艶道通言異本録 綿

谷摩耶火。黝い花（創作）綿貫六助。及び

上森健一郎が、購読者に誌代前納を請求する

為に「いよお・お久し振り」なる、一文

がある。

### 第三冊（昭和4・2）

現代死刑徒資料(二)

オナニスムの文学的考察

近世歌人猥褻考

花菖蒲杜若

耽好洞主人

蘇川 山人

西村 天来

泉 芳璟

南 紅雨

河津 曉夢

（翻訳）

蔵春洞主人

綿谷摩耶火

原 比露志

今村 螺炎

耽好洞主人

南 紅雨

河村目呂二

その他連載物の続き

### 第四冊（昭和4・5）

発禁の連続でやりきれなくなり、発禁防止

号として発行、従って内容は「欧西行紀」

と題する幕末物の海外旅行記の複製。

アスペラガスと将校夫人 岡田 時彦

紅説緋縮緬和讃―女のフンドシの研究―

京都 耽好洞主人



「コレクトマニア」第二号表紙

『変態黄表紙』は内容的には、結局『変態資料』の延長に過ぎなかった。直接購読会員もやっと三百名前後で、美装雑誌だっただけに経費も多く掛り、経営が成り立たずに終わった。一、二、三号と連続発禁誌で直接読者の



手許にも届かなかったりして、多くの不満を残したままつぶれた。今私の手許にある四冊揃は国際文献刊行会（伊藤竹酔）で番頭役を勤めていた宮原作次郎が所持していたものを、後年になって譲られものである。

雑誌『変態黄表紙』で二回だけ載せられた斎藤昌三の「現代死刑徒資考」は、鍛冶橋監獄の教誨師田中一雄の記録で死刑囚徒資料の発表は珍らしかった。その中の一挿話のみ転載すると、

〔池谷竜蔵、住所畧〕平民、農二十六歳。謀殺犯。犯罪当時は二十四歳、前科なく無教育、酒少量を要い、健康。父母あり兄弟七人。宗教的信念なく、放縦生活に鞠育せらる。明治二十九年十一月頃から小平村初山安五郎長女サヨと私通し将来を約したが、翌年四月頃からサヨは彼を疎遠する傾向あり、偶々三十一年三月十五日サヨの奇遇した飲物店初山元右衛門方軒下でサヨと邂逅したのに、サヨは彼我財産不権衡もあり関係を断って呉れと申出たので、彼は女の意の論ったことを確め憤懣の折から、同二十四日サヨは元右衛門の媒介で初山銀次郎と結婚することを聞知し、翌二十五日は元右衛門の妻イネとサヨは自宅に帰ると

聞き、午前八時頃芋切庖丁を懐中し田畝で待っていたが来なかった。一旦午飯に帰り、再び砂ノ台という田畠で待つ内、兩人の江戸街道を通行するを認め、近道を走って萩山の山中に潜み、いよいよ兩人の至るや、サヨを通路から三十間許りの山中に誘い込み、サヨの変心を責めた上庖丁を以って女の咽喉部を刺して即死せしめた。後から従って来たイネは此の体を見て逃げ出したのを、彼は追跡してサヨの屍体近くに引戻しサヨの着用した浅黄唐縮緬の細帯をとってイネを絞殺した。その上、彼は犯罪をくぐらすべく、イネの面部に猿轡を施し、且つ二人の手足を緊縛し、サヨの屍体



「巫山」創刊号表紙

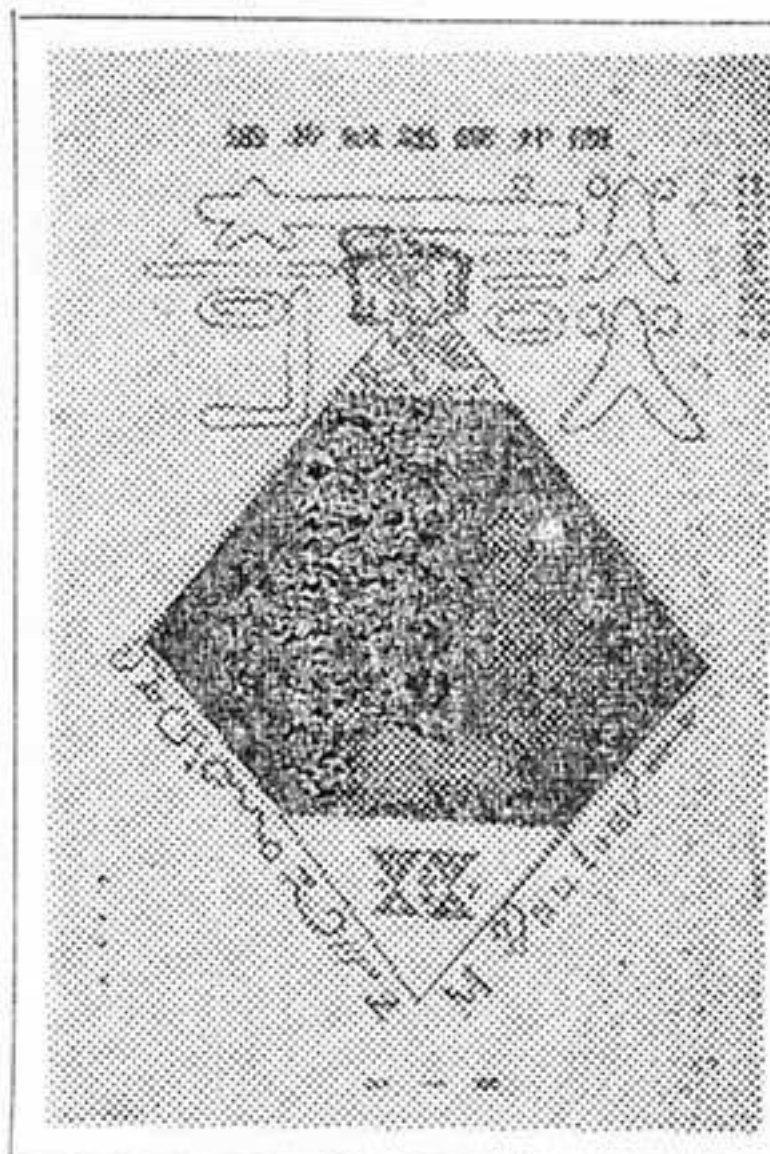
の胸腹部に数カ所の傷を加えた上に、彼女の陰門に手指を入れてこれを抉り、二カ所の爬傷を被らせ、サヨの所持金五円とイネの二十五円を奪取し、一見強盗強姦の所為と見せかけて置いたのであった。彼は死刑の宣告を受けた後でも、命丈けは何とか助かり度いと希って居たようで、教誨師も色情上の犯罪は改心の期があるものであるから、必ずしも死刑の必要はないと言っていた。

と言うのがあった。今日ある所の新聞記事の性犯罪と殆ど変わらぬ事柄である。雑誌内容としては珍奇資料に富んでおり、第三冊の南紅雨の「オナニズムの文学的考察」などは、足立欽一の発禁小説『外道三昧』（青潮社）の詳しい紹介で、発禁資料としても貴重である。次に、この変態黄表紙を発行した発藻堂書院の単行本の書名を掲げて置く。いずれも比較的硬い研究的読物が多かったのが不思議である。

印度旅日記	泉 芳環
近世毒婦伝	横瀬 夜雨
魔類大津絵節	市場直二郎
言語遊戯考	綿谷 雪
性愛嫉妬考	綿谷摩耶火



## 「談奇」第一冊表紙



情死考

小林隆之助

ラブレター雑考

池田文痴庵

これらの書は「軟派十二考」および「雑話叢書」と名附けられたシリーズで菊判袋綴の和装本であった。横瀬夜雨の毒婦伝は再版物が出ている。この詩人にしてこの著述もまったく珍しいことだ。

◇

◇

◇

『談奇党』この雑誌は全八冊と伝えられている、第三号を除くほか全部発禁。創刊は昭和六年九月。発行所は牛込・市ヶ谷ビル内の書局落成館で、編輯・発行は鈴木辰雄。これも変態資料好みの内容で、表紙のつくりも真似ている。第五号と終刊号の内容を大畧紹介す

ると。

第五号（昭和7・3）菊判96頁、口絵四枚、非売品。

目次。りんの玉雑考 琳珠斎。鮑とり 平井蒼太。訓蒙性的戯談 対江堂巫山。談奇党夜話 同人。ほか二編と特別読物「陰獣倉吉物語」という当時著名な変態殺人事件の物語があり、口絵写真版にも事件報道の新聞が出ている。

臨時版（昭和7・6）四六判324頁非売品。

これが終刊号である。雑誌というより単行本型式のもので、発送までに至らぬうちに押収されたらしく、殆ど直接会員の手にも渡らず、当年の軟派愛好家でもこの号が存在したことを知る人はきわめて少い。

口絵は五枚、リングや性神像、ヌード写真、西欧風俗漫画。

目次。強姦検察法 アルフレット・タイロル述。現代色道禁秘論 妙竹林斎。海の恋物語 花房四郎。本朝艶本解説 新守庄二。談奇風景 黒田英介。二人の破戒僧 志摩房之助。東海道中色行脚 十返舎十九。豊州公乱行記 佐賀春之介。研究資料・性愛論W・H・ロング博士。

雑誌の約三分の一の頁を占めているのが巻

頭の強姦検察法。巻末の性愛論と共に主要読物となっていた。幾分か当局へ申訳のように伏字をつかっているが、どうせ駄目なことは判っているのだから、ナマのまま出せばよろうにと思う内容だった。後記は談奇党遺言書と題したもので、次の通り、

「永々お世話になりました。愈々本号を以って世を去ります。今なら飽きも飽かれもせず気持よく往生させて頂くことが出来ます。せめて、最後の号をこれだけ美しく飾って頂いたことが何よりの喜びで、この雑誌でも廃刊号と言えば、ペラペラの貧弱なもの相場がきまっていますのに、表紙にまで着色して頂いて、これでもう思い残



「談奇画報」創刊号表紙



## 「資料」第一冊表紙



すことはありません。妾の亡くなった後は、アヴァンチュールさんが代って妾以上になりきってあなたを慰めるでしょう」と言うことで、新誌を予告しているし、「アヴァンチュール」を一大猟奇雑誌とうた上げた新聞紙四分一の大案内状を各所に送ったりした。が、実現に当たっては『猟奇資料』（昭和7・12）と改題し発行した。

『コレクトマニア』第二号（昭和5・5）編輯・発行人 大木喜伸 48頁 定価二十銭  
コレクトマニア社。

ほとんど人に知られていない小冊子であるが、企画としては趣味家好みのもので、この

誌のなかで斎藤昌三は、「一蒐集家としての自己狂味」という短文のなかで、収集品目を掲げている。

1 入場券 2 レッテル類 3 案内もの 4 目録 5 現代名士書簡 6 性神資料 7 縁起もの 8 筆禍資料 9 護符 10 お札 11 猥書出版広告 12 浴場資料 13 裸体資料 14 乗車券 15 蔵書票 16 杓子 17 本屋の包紙 18 裸体ポスター 19 本のカバー 20 奥附の著者検印 21 紙ナイフ 22 好色文献資料 23 性薬の説明書 24 マッチ票 25 花柳資料

必ずしも性的物品や図書ばかりを集めるという意味ではなく、マニヤとしての巾の広さを示していた。この昌三流の蒐集精神というのはいろいろな面で後継者を生んでいる。雑学ではあるが、素人でも現物を持つことの強味を教えたことは、この人物の残したもののうちで最も尊い遺訓であった。

この小冊子には高岸拓川、河村目呂二、無冬山人ほか七名が執筆している。いずれも奇人ばかりである。「唇あつめ」と題した文章で河村目呂二（画家）は、「一般に蒐集困難なもの程独自の境地を誇る別の味わいが生ずるものでありますが、非常に資力を要するもの

の、畧ぼ限定された数より無いもの、長時日を要するもの、資と量の大なるもの、切り離し難いもの、不浄なもの、私蔵し難いもの、等々、これらのものは、集める、と言う趣旨から見れば、あまり適当とは言えますまい。だが、相当の日時と金力を惜しまず、更に切り離し難いもので、少々不浄に属しても、味わいの豊かなもの、色的シズムの匂いの高いものなどの要素を織り込んだものがあつたら、それらは蒐集の傑作と賞すべきでありましょう」という味のある所論を述べている。傾聴すべき言葉である。

『巫山』創刊号（昭和4・9）編輯・発行人 斎藤虚己 55頁 定価二十銭 巫山房。

内容は、破れ衣 草人居士、猥談今昔物語 談奇莊隠人、エロトマニアの余太話 川南未三夫。その他、カフエー・スケッチ、東都花柳界便り、などというのがある。

気の抜けたビールみたいな味気のない雑誌である。特別にこれだと思う読物一つを見つけてもできないが、この社では『稀漁』という特殊雑誌を四冊発行したことで知られている。この巫山は恐らく創刊号だけで終わったものであろう。



『談奇』酒井潔連続著述 全七冊（昭和5・

5・5・12）第六冊（5・10）が発禁となった。発行所は伊藤竹酔の国際文献刊行会。酒井潔の個人執筆雑誌という非常に無理な企画だった。「あまりにエロの為めのエロには、もう吾々は背中を向けよう。談奇の世界は、そんなに狭いものではないのだから。編輯方法なども、あまり奇を弄し過ぎると、すぐ飽いて仕舞う。それでむしろ平明なやり方を用いて行く」と第一冊の巻末で言っている。これでは大方の批評が、余りにもよそ行き過ぎて、お行儀が良くなってつまらなくなった。往年の気魄がない、酒井も遂に老いたか、の感をい抱かしめた。

1 魔法秘譚・黒い牝雞、貞操帯物語、世界姦通刑罪考、上海歡樂郷物語、その他。

2 沙翁劇に現われた魔薬毒薬の研究、エル・キターブ性不能の原因と其の治療法、姦淫と誘惑。

3 デカメロン式類似説話研究に関する覚書、僕の珍書読破術並に珍書紹介、ほか。

4 ラヴル元帥嬰兒の血をもって淫惨なる悪魔のミサを修する事、当世風俗談義、ほか。

5 この号が、この誌の逸品。「南方（熊楠）

先生訪問記」が載っている。

6 発禁号で、内容は左の通り、

好色ロココ風景（グールド夫人の稼業）。

閨房哲学・寝室の書。

魔法珍術指南講座 淫魔学。

7 好色ロココ風景(二)、好色絵巻小柴桓草紙及び濯頂巻に就いて、伯林の変態カフェーと

日本カフェー私見。

酒井潔は当年の西欧軟派文献の権威第一人者で、あまり知り過ぎてかえって後に沈黙してしまった。著書に『巴里・上海・歡樂郷案内』『日本歡樂郷案内』があり、共に竹酔書房の発行であった。文芸市場社本の装幀は殆ど彼の手により成っていて、愛書趣味の普及にも力をつくした。

### 『獵奇画報』

この雑誌については現代軟派文献大年表に抛れば、「昭和四年十二月創刊。六冊刊行の後休刊となり昭和五年八月に復活号（第七冊）が出て九月号からは全然編輯方針を一変してエロ方面の雑誌になった為め発禁となり、十月号を出して後中絶となる。」と解説してある。

編集兼発行者・藤沢衛彦。発行所 日本風

俗研究会。発売所 国際文献刊行会（伊藤竹

酔）。内容は、内外の珍奇風俗・性的風俗な

どの写真版図譜と資料読物が半分ずつと言った編集であった。執筆者は遊行夏彦、石川

巖、高月代二、尾崎久弥、村上静人、畑耕

一、竹内道之助、松村武雄、南江二郎、加藤

藤吉、永見徳太郎、笹川臨風、中里機庵、酒井潔、など風俗や文芸研究家が毎号執筆して

いたが、いずれも断章的な読物で、読むことよりも見たり眺めたりする点を主にした雑誌であった。特集は「天変地妖人異」（2ノ2）。

「黄金狂時代」（2ノ5）など――。第三冊

目がどういう訳か雑誌なのに天金になっている、このことは竹酔老人に会った時じかに教えてもらったことだが、妙な所でこったものである。

尚、この『獵奇画報』や『談奇』などという雑誌を発行した伊藤竹酔（敬次郎）は、貴の画家伊藤晴雨と親交があり戦前戦後を通じて約二十点の画集を出版している『女三十六気意（景）』と『美人乱舞』はその代表作であった。

### 古典趣味雑誌『資料』

特殊風俗雑誌の大半は趣味誌であって研究



誌ではない。従ってどうしても読物になってしまっている——。創刊してから前半迄はそれでも資料読物として生彩もあり、実もありコクのある記事があり、読んで楽しみも多いが、やがては力が抜けだらけた読物で頁をふさぎ、そのうちに何時の間にか書店頭から姿を消してしまうと言うケースが大半であった。純粋な特殊風俗資料雑誌はきわめて少なかった。この『資料』という雑誌は昭和九年十一月に創刊、四六判仮綴包み表紙の小冊子

だった。全五冊を発行した。中野栄三と平井通が主として執筆し、二百部限定版雑誌である。永続刊行したくても、余りにも不便が多くて刊行者と読者間の流通も不十分なうちに何時とはなく停刊になってしまった。薄っぺらなものであるから保存されるということもなく終った。然し、それら刊行者や執筆者の内に秘めた特殊文献に対する情熱というのは伝えられて良いものだと思う。以下その創刊号の目次のみ紹介する、

人間創造の説話

由良大蔵訳

(註。フレーザーの「旧訳聖書に現われた

民族」よりの訳出)

横浜沿革記録

平井 蒼太

明治初期に於ける性学書

桃源堂主人

芸者畧名史

中野 栄三

花街辞典(語彙編)

聖賢 町人

浴場に関する文献書

中野 栄三

(未完)

## 昭和四十三年度

# 新年号を読んで

山 上 四 郎

奇ク新年号を読了した。その感想を一言で

言えば、おもしろかったということになる。

さすがに新年号だけあって、最近の奇クの中では一番充実していた。私も奇クを読み始めてからそろそろ三年になるが、毎号、この新

年号ぐらいの内容があればと思った。

小説だけをあげてみても、二十頁に増えた

“花と蛇”をはじめとして、“心傷む遍歴”、

“狂獣の宴”、“水中花”、“復讐”、“背

徳の果て”と読む雑誌への脱皮をめざす、奇

クの新しい門出を思わせる。これに加えて、特別企画の“オニ六先生大いにシバル”、映画シナリオ“奴隷妻”と、新鮮な企画が続く。

“オニ六先生大いにシバル”では、我々待望の辻村氏と団氏の対談が実現して、奇クファンにとってはこれにまさるお年玉はないであろう。いうまでもなく辻村氏は“S・Mカメラハント”の名ハンターであり、団氏は傑作“花と蛇”の作者である。いわば、お二人は奇クのON砲ともいうべき人たちで、それぞれにおいそがしい方々が対談することは、我々の夢だったのだから。さらにこの対談に、モデルとして左近麻里子嬢が出席なさったこ



とも、うれしい限りであった。

さすがにベテランのお二人らしく、話題も豊富で、団氏のペンネームがキ六でなくオニ六であるということから始まり、ピンク映画の内容、さらに落語家の立川談志にまで及んで、読む者をあきさせなかった。欲を言えば、辻村氏からハントする時の苦心談などもきたかった。

対談中に、左近嬢を二人がかりで縛るのだが、この時の縛り写真は注目に値する。私は最近のSMカメラ・ハントに載っている写真にはずい分と不満があったのだが、この日はモデルが私の好きな左近麻里子であったということも手伝って、十分納得がいった。中でも気に入ったものをあげれば、縛られた麻里子嬢の上半身を写したものの、彼女の乳房や二の腕にくい込んでいた縄が哀れさを誘った。それと、縦縄を首にかけられて美しい顔をのけぞらしている写真。この二つには、特に麻里子嬢の表情がよくとらえられていた。その他に、やはり縦縄をかけられた麻里子嬢を、背後から写したものが印象的だった。近ごろ誌上でこのような写真におめにかかるのは珍しい。もう一枚、腰に手ぬぐいをまいただけで、乳房の上下をしごきで縛られ、

さるぐつわをはめられた麻里子の全身を写したものがあったが、彼女の見事なプロポーションがあまりよくなく表現されていた。

これらの写真に比べると、奴隷妻や、SMカメラハントの写真は見劣りしたことは確かだ。奴隷妻の写真はやや露出オーバー気味であったし、SMカメラハントの方はモデルが麻里子嬢に比べて劣っていた。とにかく、これによって左近麻里子ファンも増えることだろう。どうも、麻里子評になってしまったのでこゝらで小説にもふれてみたい。

先に述べたように今月は新年号ということもあってか、小説の数がいつもより多く、うれしいことであるが、いざその質となると、そうほめてばかりもいられないようだ。

六編のうち、心から満足したものといえば「花と蛇」と「復讐」ぐらいのものであった。

どれも風俗文献誌として奇クの面目を保っているが、個々の内容はそれほど目新しいものはないようだ。

例えば、完結した「狂獣の宴」であるが、これはかなり「花と蛇」を意識して書いてあった。登場する三人のヒロインのうち、未亡人の房代とその義妹の里絵は、明らかに静子

夫人と桂子、あるいは静子夫人と小夜子であり、探偵助手の映子は京子であろう。三人の女を助け出そうと数人の男が活躍するものの、物語の舞台ほとんど剛三の屋敷内であるし、その剛三自身、里絵たちをかんきんして自分の奴隷としようとするところなど、鬼源たちをモデルにしたとは思えない。

おそらく能美氏（作者）としては、「花と蛇」のような羞恥責め小説をねらったのだろうが、惜しいかな我々にはそれほど強い感銘を与えなかった。それは、たぶん一人々々に対する責めが淡泊で、「花と蛇」のように徹底した執拗さがみられなかったからであろう。その上欲ばって屋敷外の男たちの行動にまで手を広げたために、結局どっちつかずのものとなってしまっているのだろう。ピントを三人の女にしなければよかったと思う。

「心傷む遍歴」は、——これには私と同意見の人が多いと思うが——一口にいったいくつである。ここといったヤマ場もなく一本調子にたんたんとして続いてきたのを読み、またこれからも同じように続いていくのかと思うと少々うんざりしてしまう。この小説には毎号かなりのページがさかれているが、それだけの価値が果してあるかどうか考えてしまう。



「水虫花」については、この程度の小説ならば普通の読者雑誌にも、のっているのではないだろうか。

あまりけなして没になってしまふところから、今度はほめよう。

やはり筆頭は「花と蛇」だろう。特に今月は二十頁にも増えてじっくりとたのしめた。

小夜子の調教もくるところまできて、これからはいかに彼女が鬼源に身も心も屈服するようになるかがみものである。それに、小夜子と静子夫人との間の愛情がどのような形に発展していき、同じく静子と恋愛関係にある京子が、これにどうからんでいくかも興味を引く。新年号で残念だったことは小夜子の調教に最後まで静子夫人が立会わなかったことである。小夜子は二人のチンピラによって活眼させてもらったのだが、私としてはこれを夫人にやらせて、その時の夫人の心の動揺をみつめてみたかったのだが。しかしその代りに静子が新しい技術をおぼえさせられ、元女中の千代の前に屈服するのを見ることができたのだから、まあよかった。娘の桂子からけいべつされるぐらいまでに夫人を仕上げたから、おもしろいだろう。

去年を通してみて、前半は京子、後半は静

子と小夜子がストーリーの中心にいたようだ。京子は二人のシスターボーイと、静子は捨太郎とそれぞれ結婚させられてしまった。

不満を言えば、前記の三人以外の女たち、美津子や桂子があまり登場しなかったことだ。

それと静子夫人と捨太郎の結婚式がまだすんでいないようであることだ。今年は若い二人をもっと多く登場させ、また静子と捨太郎の夫婦プレイが実現することを祈る。

その他にももしろかったものとして「復讐」がある。「花と蛇」と比べてみると分るのだが——この小説は心理的なものよりもむしろ肉体的に苦痛を与えることに重点をおいている。

緋沙絵夫人と恵利香は親子であるから、そのことを知っている緋沙絵には羞しさもあるだろうが、スパンコール縛り等の次々と考案される責めの数々は明らかに肉体への苦痛を目的としている。

しかし、この二人を責める新藤という男の意としているものを考えるとぞっとする。恵利香は自分を苦しめる相手が母親とは知らないでいるが、もしいまのままの状態が続けば彼女は緋沙絵に対して激しい憎しみを抱くことだろう。そしてそれが母親と分かった時、

恵利香の受けるショックはどうだろうか。その結末を思うと私は少々恐くなってくる。

奇クには珍しくレスビアンを扱った小説が載っていた。清原麻耶氏の「背徳の果て」がそれであるが、惜しいことに主人公の言葉づかいが男言葉であるために、レスビアンという異様な感じがつかめなかった。

去年一年を振り返って感じたことは、今は奇クにとって過渡期にあたるということだった。教育ママというヒマ人たちの「何とか運動」等によって、数々の雑誌が規制を受けた。奇クもまた例外でなく、グラビアはもちろんのこと、さし絵までも掲載を制限されてしまっている。これらの規制が、のこっているわずかなさし絵やSMカメラハント中の写真などにおよぶことは必定である。その中を奇クが生きのこるにはやはり小説などの読み物を充実させること以外にないと思う。

この一年間にもこの試みはつづけられてきた。現在は暗中也さくといったところだが、何らかの形をみつけ出すまでまだしばらくかかると思う。また、小説をふやすについてもその内容に気をくばらないと単なる大衆小説になってしまう。

これからの奇クの発展に期待している。



## 薔薇と蜜蜂

(3)

田代 俊 夫

13

油屋の大将キンカーンはその後どうなったのでしょうか。話はメロンが脱出に成功したときより少し以前に遡ります。

用心棒のウドタイを従えた油屋は人目を避けるようにして、短いコンパスでどたどたと月の夜道をメロンの家へ急行したのでした。

娘を手に入れてもコケオ・ドオシなんかに渡すものか、どこかへ隠してわし一人であるムッチリと引締った太りじしの雪肌を、ウヒヒ。そう思うと自然に笑いがこみ上げ、顔の

筋肉の緩むのを禁じえないキンカーンでした。道すがらコケオ隊長をごまかすための口実を、あれこれ思案しながら目指す家の前までやってくると、予想通り門が締まっています。

「おい、ウドタイ。わしが合図するまで娘に手をかけてはいかんぞ。分っちやるね」

「ようがす、旦那。おいどんは何もせんとです」

油屋はどんどん、門を叩きはじめました。

一方、サファイヤは愛するメロンの帰りの遅いのを、いらいらしながら待っております

た。時折遅くなることはあっても、予めその旨を知らせるようしつけてあるのです。今日に限ってバー、アルサロなどの不潔な女どもがいる場所へ寄り道することもあるまい。第一、そんな金は持たせてないし……。最近交通事情がとみに悪化しているから、帰り道で乳母車にでもはねられて怪我をしたのではなからうか、そう思うと心配にもなる。いや、リスのように敏捷な子だからそんなヘマはしないでしょう……。いろいろに推理していると、その日はメロンの苦手とする代数・幾何の試験予定日であることに気づきました。は



はん、読めた、予習をしてないものだからサボルつもりなんだわ。敵がその気ならこっちも覚悟がある。今夜は一つ閉め出しを食わせよう……。

右のように考えて、門を閉めておいたのです。が、それにしても遅すぎるわ、とまた少し心配になりかけていたときに油屋が到着したというわけです。時すでにイレブン・PMを過ぎております。

どんだん、どんだん。……ふん、今ごろまでどこで油を売ってたんだろう、あの浮浪児は？ ところが何やら叫び声がするし、耳をすますとどうも別人らしい。サファイヤは門口まで出ていきました。

「こんなに遅く、どなた？」  
「お前さんの旦那のことで大事な用件があるのじゃ。早く開けて下され」

サファイヤが門の戸のかんぬきを外すと、男が二人ずかずかと踏み込みました。キンカーンはウドタイに目くばせ、門を閉めると合図します。逃がさないようにとの配慮です。

「主人がどうかしたんですか」

不審顔のサファイヤが尋ねると、キザな蝶ネクタイにダブルの背広なんかを着用した油屋、とってつけたようなすまし顔で、

「いや、なあに、あんたをわしにお売りになつたんじゃて」

サファイヤはあつけにとられた表情、しばらく口もきけません。

「それでお前さんを引き取りに来たという次第じゃ」

サファイヤの優秀な脳細胞は瞬時全速回転を始めました。したり顔の油屋は、いいかげんな出まかせを並べたててから、

「……とまあ、そういうわけだから、早速わしと一緒に来てもらおうかの」

「アホらしい。何の証拠があつてそんなことを……」

「それそれ。そういうと思って、これを持って来たのですて」

団子鼻をひくつかせながら、メロンを拷問して書かせた売渡証を手渡します。手にしたランプの光にかざすと、確かにメロンの筆蹟に相違ありません。いつも試験の答案を見ているのでよく分るのです。

「どうじゃ、得心がいったかな、娘さん？」

——本心でわたしを売るはずがない、これは何か脅かされたにちがいない。あの子は弱虫だから、すぐに参ってしまふんだ……。

「で、主人は今どこにおりますの？」

「さあてな。代金を持ってキャバレーへでも行ったんじゃないかね。今ごろはいい子ちゃんとチンチンカモカモの真最中じゃろ。ウツヒヒ……」

サファイヤは、ほりの深い横顔をゆがめてきりりと齒を噛みしめました。

——どこかに監禁されてるにちがいない。何はともあれ、この豚をとっちめて泥を吐かせなきゃ……。

「じゃ、早速、御同行願おうか」

手を握ろうとする油屋を、サファイヤはびしりと払いのけました。

「お断りします」

「何を馬鹿な！ この売渡証が……」

「子供に書かせた証文など無効ですよ」

憤然としたキンカーンは、今はこれまでとばかり、用心棒ウドタイに掛かれの合図をします。

瞬間、サファイヤの全身は激しく宙に跳躍しました。目にもとまらぬ早技です。キンカーンが後を振り向くと、大男のウドタイが地上に倒れて悶絶しておりました。急所に見事な一撃を受けたとみえ、うんともすんとも言いません。

サファイヤは油屋など眼中にないかのよう



に、スルメのようにのされた用心棒をぐるぐる巻きに縛ってしまいます。自分がひっ括るつもりで持参した縄を、あべこべに使われたのだから正しく自縄自縛です。

あわわ、こりゃいかん。仰天したチビハゲの油屋先生。最悪的事態の出現に、泡を食ってよたよたトン走しようとしています。が、いかんせん、その短い脚は救いようがない。ずかずか大股で近づいたサファイヤが、長い脚の片方を油屋の進路へさっと差伸べると、ごろりんこん、樽をころがすぶざまな恰好で横転してしまいました。

「どこへ逃げるつもりなのさ。かんぬきはあんたがかけたんだろ？」

腰を強打して、すぐには立上れないキンカーン。それでも必死に虚勢を張った。

「わ、わしをだれだと思っとるか！ このカルピスの町で油屋のキンカーンといえ、泣く子も笑う……」

もぞもぞ亀に似た鈍重さで起上ろうとしたが、四つんばいになったところを脇腹へ強烈なキック。ぎゃっとうめいて、再度の横転です。さっとその背中にのしかかったサファイヤは、油屋のぶよぶよした太い腕を逆手にとってねじ上げます。

「きゃおん、きゃおーん、てて、いてて、暴力絶対反対！」

「この腕はへし折ってやるよ……」

「わっ。そ、それはたまらん。ゆ、許せ、許してくれいっ！」

いい年をして若い娘に哀願しています。まるで芋虫のようなもがきぶりです。サファイヤは容赦せず、骨折一步手前までねじ上げたので、キンカーンは息がつまり、声も出なくなりしました。

「わたしの質問に正直に答えるか！」

口のきける程度にゆるめ、鋭く決めつけます。

「わ、わかった。いう、何でもいう。だから、もっとゆるめて下されい」

「増長するんじゃないっ！ 一体どこへ監禁したんだい、わたしの主人を？」

女検察官のきびしい訊問に、油屋は醜惡な顔を一層醜惡にゆがめ、苦痛にうめいて少しずつ泥を吐いていきます。その背中にどっかと馬乗りになっているサファイヤも、月の光を反射するキンカーンのヤカン頭がまぶしそうです。あらかた白状させたところで、反射光線から顔をそむけながらさりげなく、

「美人の妾が四人いると聞いて態度が変わった

んだね、あの子の？」

「へ、へい。さようで」

「ふん。……で、屋敷に着いてからのようすは？」

「それは大モテで……。でれでれと鼻の下を長く、……。あっ。いてて、げえっ、取、取消しっ、……。終始謹嚴な面持ちを崩さず……」

「全然ちがうじゃないか、さっきと。……いいかげんなことを言うのと、こうして……」

「あっ、きゃおん、きゃおん……。それがし近眼でしゅのでよく分りました」

眼鏡もかけてないのに、水晶体の屈折機能の異常を主張して、上腕骨の破損を免れようとしています。もっとも、ずるさでは定評のある油屋、共同謀議の点については全面的にコケオ隊長に責任をなすりつけるのです。

「わしはよそう、よそうといったんだが、コケオ君がわしを脅迫するので、ついつい心ならずも……」

「コケオというのは、あの脳タリンの隊長のことだね？」

「へい、姓はドオシ、名がコケオで。……あいつの兄貴のフンってのがまたひどい奴でして……」

「関係ないだろ、そんなこと」



一切切悪業を白状させると、サファイヤは油屋の油ぎった身体を、ぎりぎり巻きに縛り上げてしまします。

「こ、これは無体な……もうすっかり申し上げたはずじゃ。これ以上わしに何を……」

紅唇をへの字に曲げて、サファイヤは油屋の抗弁を冷笑しりました。

「そう簡単に許して貰えると思うのかい、発光体。大切な主人を取り戻すまではお前は人質さ。そら、お立ち」

頭髮が密生しておれば当然それをわし掴みにするのですが、生憎と先生、ズルむけのヤカン頭です。そこでやむを得ずひげを掴んで引張ります。

「あっ、あいた、いたた……」

むろん、第3節で説明したとおりのつけひげですから、苦しまぎれに首を振った拍子にすぽっと根元から抜けてしましました。場所柄も弁えず、サファイヤは大口を開いてげらげら笑いました。しわが寄るのを警戒して、メロンの前ではこんな笑い方は絶対にしないのです。

「これじゃ、正真正銘ののっぺらぼうじゃないの。え、おじさん？」

しばらくは笑いころげていましたが、やっ

と真顔に戻り、何を思ったか全長約五メートルの太い縄を持ってくると、その一端を輪にして、キンカーンの首に巻きつけました。

「わ、助けて、ひ、ひと殺し……」

「安心しなさい。人間は殺しても豚は殺さない主義なんだよ、わたしは」

動物愛護精神を披瀝してから、体重百キロのキンカーンの球状弾性体をサファイヤは軽々とその肩にかつぎ上げました。

「ちよっと汗を流してもらうわ、月光頭面のおじさん」

庭にある池の際まで運んでくると、えいと掛声もろとも水面めがけて投げ込みます。

ザブーン、爽快な水しぶきが上りました。

大人の背丈ほどの深さですが、とび抜けて短身の油屋は全身が漬かってしまします。

ブクブク泡を生産して、もぐったり沈んだり、浮ぶことはほとんどありません。全身毛糸の玉のごとく縛られているので、身体の自由はきかない。たださえ水分過多なのに、その上、ガブガブ池の水を補給しているキンカーンは、言語に絶する、死の苦しみの状態です。

サファイヤは縄の一端を握って引いたり緩めたり、生かさず殺さずという風に痛めつけ

ます。しばらくそうやっていましたが、殺してしまうのは可哀想。もうよからうと縄の一端を池の傍の木の枝に括りつけました。頭と顔だけが水面から出るよう縄の長さや角度、張力を操作しておく。

それから先刻KOしたウドタイのところへ歩を運びましたが、こちらの先生は依然としてすやすや安らかな睡眠を続行中。実に気持ちよさそうな寝顔です。こんなことなら縛るんじゃないかった、損しちゃったな……。そこで、縄を解いてから活を入れる。

「うちはユースホステルじゃないんだよ」

ウームとうなり声を発して覚醒した用心棒ウドタイ。きよろきよろあたりを見回すと眼前に美しいアマゾンが直立しています。実力の隔絶を痛感した田舎者の大男は、完全に戦意喪失のありさまです。

「お前の旦那は風流人さ。ほら、あそこの池で、涼みながらお月見と洒落てらっしゃるだろう？」

「池の上にゃ、おいどん月しか見えねえだ」

「老眼鏡をかける年令だね、お前も」

サファイヤは、油屋の屋敷に監禁中のメロンを連れてくるようにと、ウドタイに厳命しました。しかえし三倍の報復原則を不当に拡



大して、駄目を押します。

「いいね、大事なあの子の体に、かすり傷でもつけようものなら、お前の旦那の命はないよ。……とっととお帰り！」

すっかり恐縮したウドタイは、ほうほうの体で逃げていきました。

俳号を持つ風流人キンカーンは、何とか一句ものにせんと、水中で苦吟のようすでしたが、ようやく創作が完成いたしました。

古池や 油は浮かぶ 水の上

陶 然

14

油屋の屋敷からは、運良く脱出に成功したメロンでしたが、追手を怖れて夢中で駆け通したので、とうとう息を切らしてしまいました。実は丁度このとき、ウドタイと入れ違いになったのです。兩人ともそれを知りませんでした。

さて、もう自分の家の近くまでは来ています。まず安心。そこで歩きながらメロンは考えました。

油屋に売ったなどといえば、むろんサファイアは怒るだろう。だが隠しても明日になればキンカーンが来るから分ってしまう。い

や、今夜すぐにでもやってくる可能性も多い。

(メロンは、前節の出来事を全然知らないのです)とにかく正直に一切を話して、すぐ夜逃げする他はない。が、一体どこへ？

据膳を食ってきたことはもちろん黙っている一手だ。露見する気づかいもないし、第一そんなことをサファイアに知られたら、どんな目にあうかもしれないから……。

「おや、メロン君じゃないか。こんなに遅くどこへ……」

ギクリして声の主を見ると、以前その家之間借りしていたセツカイ老人です。あまり月がきれいなので、夜中の散歩と洒落れこんでいるのでしょう。

メロンは早口で事の次第を説明しました。「それは大変じゃ。何はともあれ、娘御をわしの家に連れて来なさい。お前さんも一緒にかくまってあげよう」

メロンは大喜び。急に元氣百倍してまた走り出しました。そしてようやく門口にたどりつき、締まっている門の扉をたたきます。

「開けてえ、サファイア。……早く開けておくれ」

メロンが釈放されて無事帰宅したと思ったサファイアは、ほんと安堵の胸を撫でおろし

ました。早速抱きしめてやろうと切ない思いに駆られました。が、いやまてしばし、ここが我慢のしどころと考え直します。

——なるほど、今回の事件は現在水浴中の赤豚の卑劣なしわざだけれど、甘言を真に受け、鼻の下を長くしてノコノコついで行った亭主にも一半の責任がある。それに、多分姑息な手段を弄して、試験を免れようとする意図に出たものであろう。そんな不埒な考えは許せない。今夜のところは締め出して明日みっちり油を搾ってやるんだ。けれど、塀を乗り越えて入ってくるかもしれない……。

いつまで待っても門が開かないのでしびれを切らしたメロンは、あいつもう寝てるんだと判断して、塀の裏手に廻り、庭の中へボンと飛降りました。

「夜分こんなところからお入りになると、泥棒と思われますよ……」

メロンの身体は宙に浮いて、仰天して首をねじ向けるとサファイアの腕に抱きかかえられていたのでした。

「あ、あの、大変なんだよ。油屋の、キンカーンの屋敷から逃げてきたんだ、ぼく……」

「逃げてきた？」

「うん。実は今日……」



と、機関銃的速度で事情を説明し、油屋がやってくるかも知れないから、すぐセツカイ老人の家へ避難するように要請しました。もちろん、自分に都合の悪いことは言いません。ウドタイと行き違いになったらしいと悟ったけれど、サファイヤは素知らぬ顔で

「まあ、そうなの。うまく脱出できてよかったわねえ、あなたにしては大出来ですわ」

と一応メロンの機敏な行動を賞讃しましたが、さして驚いた風も見せず、メロンを小脇にかかえてささと家の中へ運びます。平然としたサファイヤの表情にメロンは拍子抜けといったところです。

「……だから、一刻も早くセツカイじいさんのところへ……」

「市場からの帰路、突然油屋の手下に襲われ、縛られた。屋敷に連行されると、いきなり隊長が刀を抜いて脅迫した。——と、こうおっしゃるのね、あなたは」

「そ、そうさ……」

「手下って何人いたの？」

「どうだっていいだろ、そんなこと！ 現在は極度に緊迫した危機的情勢にあるんだよ。

……いつまで抱いてるんだ、早く降ろせたら、……ムギユッ」

最後の間投詞は、メロンの気絶を意味します。うるさくなったサファイヤが、ひじ鉄の当て身を贈呈したからです。そして、睡眠用丸薬をメロンの口へほうり込み、水とともに食道を通過させました。ぐったりしたメロンを再び抱いて更衣室へ入り、大きな衣裳ダンスの中へ寝かしつけると、サファイヤは外からカチャリと鍵をかけてしまいました。

——ひとまずこうしておくか。朝まで眠っているだろう。わたしは今夜いそがしいんだから……。

サファイヤはまた庭へ出ていきました。

苦吟の末前節末尾においてついに後生に残る名句をものしたとはいえ、あまりに長時間に亘る水中観月で、風流人陶然宗匠はすっかりふやけきっておりました。

冷した西瓜を井戸から引上げる手つきで池から取り出してみると、たださえタテヨコの区別のつきにくい身体が、まるでゴムまりのように膨張しているのです。蝶ネクタイはむろんなくなっているし、凝った感じのダブルの背広も、まず使いものになりません。地面にころがして腹を足で踏んづけると、ぴゅっと口から噴水が迸り、なまずが一匹飛び出しました。縄を解いてやっても立ち上る気力

なく、口をきく元気すらありません。目を白黒させて、辛うじて呼吸をしているだけです。

「池の水はおいしかっただろう？……水分を吸収しすぎたようだし、木の枝にでも吊るして乾かしてあげようか」

「い、いえ、もう結構で。そのご配慮は御辞退申し上げます……」

「少しは反省できたかい、おじさん？」

「はい。もう全く腹の底から……」

「二度と主人に手出ししたら、空中ブランコさせるからね」

「へ、へい。もう決して。……どうかお許しのほどを」

キンカーンは平伏して、ヤカン頭を地面にすりつけるのでした。そこで、サファイヤは売渡証の代りのものを、深く反省している油屋に作成させました。

○

—— 小生儀今般貴殿御主人に

対し奉り数々の御無礼の段……

こはすべて隊長コケオ君の指金に依るものにして……格別の御

慈悲を以て御許し賜り……以後

断じて不心得を起さざる……深



甚なる陳謝を……尚、池中にて  
反省中佳句を得て……併せて御  
礼申上候

△月○日

油脂・酒樽製造販売業

バタービル商会取締役社長

キンカーン 十拝

メロン殿奥様

○

「少し蛇足があるようだけど、ま、大体いい  
でしょう。……あんたのつけひげは証拠品と  
して没収するからね」

「へい。光栄至極なこと……」

「お多福風邪にかからないうちに、とっとと  
お帰り！」

深く恥じ入った油屋は、ぬれねずみよろし  
く、ほうほうの体で退散していきました。午  
前二時のブルースです。

——今度はあのむさ苦しい熊男か。こいつも  
足腰の立たないくらいコテンパンにノシテや  
るんだ……。

15

風流人陶然が、注進に及んだことはいうま  
でもありません。帰宅してみるとメロンはす

でに脱走しており、妾達は大狼狽。そこで慌  
てて隊長の家へ救援を求めに行ったという次  
第です。

「どうしたんだ、今時分。娘はうまく攫って  
きたんだろうな」

「いや、それが。どうもまずいことになって  
のう。あの女め、強情なやつでなかなかい  
うことを聞かないし」

「うむをいわさんために、用心棒を連れて行  
ったはずじゃないか」

「一目でいいからあの小僧に会わせてくれと  
泣くんだ。どうもわしいかん。美人に弱い  
し、元来涙もろいたちだから……」

自分の演じた醜態は、口を拭って知らん顔  
です。

「ふん。お前らしくもないトンマな話じゃな  
いか。……時に、自慢のひげはどうした」

「こ、これか。……か、帰りの坂道でころん  
で外れちゃったのさ。このところ運動不足で  
いかん。早速明日からトレーニングを」

坂道など、どこにもないのです。

「だらしないやつだ。わしが行ってふん掴ま  
えてきてやる」

隊長閣下、大憤慨の体です。

「一つよろしく頼む。……が、あの娘は力が

強いし、なかなか一筋縄では……」

「どうしてそんなこと知ってるんだ」

「あ、いやなに……その、気性が激しそうだ  
し、背も高くて……」

「お前が低すぎるのさ、旦那」

コケオ・ドオシはすぐ身なりを整え、自慢  
の大刀を腰にぶちこんで勇然出立いたしました。  
サファイアの腕前を知っていたら、こん  
な軽卒な真似はしなかったでしょう。

「やい、開けろ。開けんとぶち破るぞ！ ど  
んどん……」

「どなた？」

「カルピス町警備隊長兼消防総監コケオ・ド  
オシだっ！」

「お待ちしておりました。さあさ、どうぞお  
入り下さい」

門がさっと内側に開かれ、長身美貌のサフ  
アイヤの姿が、夜目にも白く浮かび上りまし  
た。このことあるを予期して、黄色いスウェ  
ーターと純白のショートパンツ、腕も脚もあ  
らわにむき出した大胆な夏向き衣裳です。ド  
レミ学園推奨になるところのレスリング及び  
サイクリング兼用の、若奥様向きデザインで  
もあります。

何だかようすが変なので、一瞬目玉をパチ



クリした隊長、こりゃあ、オカシナ具合じゃぞ。さては油屋め……とは思ったものの、すぐ気を取り直し決意を新たにして、順路作成した惘惘用予定原稿を読み上げました。

「こら、小娘。油屋のトン助は言いくるめてもこのわしは騙せんぞ。用件はわかつとるじやろが、アーン。おとなしくついてくればよし、さもなれば……」

「以前に、どこかでお会いしたような気がするけど……」

痛いところを衝かれた隊長、第3節の醜態を想起して躍起となりました。

「だまれ！ 12月号のことなど、知ったことではないわ。わがはいを愚弄するとこの大刀で真ッ二つに……」

「ふん、抜けばサビ散るテンプラ正宗だろ、そのなまくらのは？……お前だね、妙なことをした黒幕は」

潮時よしと、サファイヤも戦闘体制に入ります。商売道具をけなされて、カッとなった隊長は凄惨な形相で掴みかかってきました。

さっと体をかわして、ぶざまに泳ぐところを狙いすましたアッパーカット、ものの見事にあごに炸烈。うっと呻いてダウン。起き上ろうとする端は強烈なフックが再度あごに決

まり、二度目のダウン。

「第一ラウンド、5-2だね。一分間の休憩をやるよ」

「な、なにを！」

形勢不利に憤然、敵の好意をはねつけて、赤鬼フェイスで猛然と飛びかかっていくコケオ氏です。がっきと受止め、しばし四つになつて揉みあっているうち、げえつと悲鳴を發して隊長はへなへなその場にうずくまってしまうました。急所をいやというほど蹴上げられたのです。

「あたたた……、反、反則とは卑怯千万……」

……レ、レフリー……」

「おだまり！ うるさいわね。置敷菜さんならとくに寝てるよ。何時だと思ってるんだ、トンマ」

瀕死の鷺鳥よろしく呻いている隊長の背後に回ったサファイヤは、襟元と腰のベルトに手を掛けて、六尺二寸、二十八貫の巨体を、かけ声もろとも目よりも高く差上げます。そして油屋が名句を残した池めがけて、それ行けとばかりたたきこんだのです。

ザンブリ。ダンブカーの衝突音がして、水煙が空中高く四散しました。

「最近火事が多いよ。少したるんでるんじゃないか、ホース屋の大将」

火災発生件数と消防局の業務活動につき筋違いのお叱りを受けた隊長は、肩書詐称の手前返す言葉ありません。火から逃げて水に親しむことで、禅問答的償いをしたともいえます。第二ラウンドはまず5-1というところでしょう。

「見かけ倒しもいいところさ。そんな腕前じゃコソ泥一匹逮捕できないよ。ま、早いところ降参するんだね、オッサン」

武勇卓絶の女戦士は、ここでコンパクトを取り出して化粧くずれを防ぎ、髪の流れを直しています。

これだけ実力の差異が明瞭となれば、あっさり敵の軍門に降るべきところ、度重なる嘲笑に我を忘れたか、それともまだ挽回の機会ありとみたか、池中よりずぶ濡れで這い出した隊長コケオは、無謀にも第三ラウンドに挑み徹底的に壊滅させられてしまうのです。

「う、うぬっ。かくなる上は是非もない。今宵血を呼ぶこの正宗で……」

と、相手が反則するならこっちもだと、聞きかじりの科白を述べて、卑怯にも腰の刀に手を掛けました。と、飛燕のごとく身を躍らせたサファイヤは、砕けよとばかり体当りの



敢行。よろよろと棒立ちになったところを空手チョップをお見舞し、素早く腕を首に巻きつけるとみるや腰車一閃、どうと地上にたたきつけました。

そして早く勝負をつけようと、あおむけに倒れた隊長の上にむんずと馬乗りになって押え込みに入ります。

「まずお前には、はね返せまいね」

「何、何だと、く、くそっ！」

小娘に組敷かれては末代の恥辱と、隊長は最後の力を振りしぼって必死にもがきます。

毛むじらのけの脛をばたつかせ、腰に反動つけて上下関係の逆転を企てます。が、夜毎修練を積んだ女武者は、敵の腰をかつちり両膝でしめつけ、みじんのゆるぎも見せません。

さればと膝を立て尻を持ち上げんとしても、乗馬で鍛えぬいた女騎乗者は巧みに重心を移動させ、はずみをつけて押し潰す。苦しまぎれに下からわし掴みにかかる腕をさっとはねのけ、拳固めたるストレート。鮮血鼻より迸り自慢のひげを朱に染めぬ。

しばし続くは奇妙なるサーフィンにして、陸上のヨットレースの展開なり。波に船体大きく傾けど、風受けぬ帆はそよとも揺るがざり。風なきに波高しとははいかに。帆かけ

船、今海面にあらざればなり……。

格闘はそう長くは続きませんでした。第二ラウンドまでのハンディがあり、その上組打ちの技術において格段に優り、体力もひけをとらぬサファイヤだったからです。フラフラになった隊長コケオはついにグロッキーもいところ、体力を消耗しつくし、たたかう意志を失いました。

サファイヤはぐいと腰をせり上げ、ぶ厚い隊長の胸にどっかりと豊臀を据えると、二の腕をしっかと膝にふみ敷いて両手を腰にあてがい悠然と見下しました。

勝負はこれまで。ブラシ的剛毛におおわれた猿のような腕とそれを制圧する真白な膝及び太腿がまことに鮮やかな対照を示します。「もしもしオニさん、オニさんよ。さっきの自慢はどうしたの」

サファイヤは、名曲を口ずさみます。

「無、無念！ これしきの小娘に不覚をとるとは……残念だっ！」

「可愛いハズがちゃんといるんだよ。奥様とお言い、奥様と」

呼称の訂正を求めたサファイヤは、臀下に呻吟する隊長の腰から短刀を引き抜き、その喉笛に凝しました。月光に映えてギラリと不

気味に光ります。

「覚悟はできているだろうね」

コケオ・ドオシは絶体絶命。目玉は三角、口四角、忍びよる死の影に怯えて蒼白になってふるえました。

先刻の大言壮語もどこへやったのか。普段部下に死生観の確立を説き、「武士道とは死ぬことと見つけたり」などと、他人の言説を盗んで、もっともらしい訓示を与えているくせに、いざ自分がその場に臨むと、このてい तरなくです。

「うわっ……お許し、お許しを。奥方様、い、いのちばかりはお助けを……」

恥も外聞もない。ただひたすら助命懇願の低姿勢あるのみです。サファイヤは端正な横顔をゆがめて嘲笑しました。

「情けない男だね、お前も。お望みとあらば初からやり直してもいいんだよ」

と、再試合の挑戦資格を与える度量を示します。ですが、この調子では何回やっても歯が立ちそうにありません。隊長はフ抜きのような顔をして、恐怖に頬の筋肉をピクピクとひきつらせながら、

「い、いえもう充分で。……ど、どうか命ばかりは……」



と未練がましく同じことを繰返しています。まるで、傷ついたレコードです。サファイアは語気鋭く決めつけました。

「意気地なしめ！ 降参するというんだな、このわたしに」

「い、いたします……」

「悪事を監視する公務員の地位にありながら、油屋の卑劣なたくらみに加担したことをどう思っとるのか、アーン？」

「フ、フカク反省しております」

「わたしのハズをいじめたことはどうなんだい、ひげ面」

「失礼の段、重々お詫び申上げ、以後決してさような不謹慎な振舞いは……」

「よし。今回に限り、命だけは助けておく。但し、罰としての懲戒を行なう。異存はあるまいな？」

「ご、ごさいません、奥方様」

命さえ助かるのであれば何でもする。盆踊りでもスネークダンスでもやるといわんばかりです。サファイアは左手で隊長の自慢のひげをわし掴みにし、右手に持った短刀で、ブスリと根元から切断しました。てっきり喉もとを挟まれたと誤認した隊長は、痛くもないのに断末魔の悲鳴を挙げます。

「ひゃーお。……神様、仏様、イエス様、南無金剛大明神……」

「オーバーね。レデイの前でのひげ面はエケ・チットに反するんだよ。それくらいは心得てお置き！」

逆手に持ち替え、懇切丁寧に逆ぞりで仕上げにかかります。むろんひげそりクリームは使用いたしません。

「てへへ……い、いたた。無、無茶苦茶でござりまする……」

「感謝には及ばないさ。以前の約束を実行してやるだけなんだからね」

とうとう、鼻の下はつるつるになってしまいました。青いそりあとに赤い血が滲んできます。隊長殿はうらめしそうな顔つきで女理髪師を見上げているだけです。

「以後、生意気にひげなど生やしたら承知しないよ。分ったね？」

「はっ、謹みます」

ようやくサファイアは、組敷いた隊長の胸から身を起し雄大な臀部の重圧を取りのけてやりました。そして上衣を剥ぎとり、後手に縛り上げるのでした。ひげをなくして神通力を喪失したか、サファイアの豪勇に恐れ入り、身のほどを弁えたのか、今となっては何

の抵抗もいたしません。

それからお決りの鞭打ち懲戒作業の開始です。予め用意しておいた牛馬用の鞭で、びしびしと遠慮なく打擲いたします。たちまち皮が裂け、肉が破れて、赤い線条がくっきりと浮き出し、見るも無残な様相を呈しました。

隊長は地響きを立てて、炭俵のようにころげ回り、のたうち回ります。散々に打ち据えて、柄にもなく偽似ソプラノの悲鳴を発する隊長が、もはやグウの音も出なくなった頃を見計らい、サファイアは鞭撻の対象を足の裏へと集中させます。厚い皮が破れて血だらけとなり、風船のように膨張します。

「げ、げげえ、……ぎゃっ、ぎゃっ……お許しを、もうお許しを。……奥方様、どうか許してチョーダイ」

「鞭の痛さを思い知ったか！」

「充、充分に堪能いたしましたっ！」

ここを先途とばかり、満身の力をこめて打ちまくったので、さすがのサファイアも全身汗みどろ、ハアハアと大きく肩で息をするようになりました。

そこでやっと鞭打ちを停止し隊長の縛めを解いてその場に四つ這いになるよう命じました。もっとも、足の裏のダメージがひどいの



で、隊長としても立上ることはできないのです。

「公約を覚えているだろうね。わたしの馬にして乗り回してやるから……」

「公約？ トンと存じませんが」

「市場へ行って競売人のハッターさんに聞いてみるんだね。……どこかの国の政府とはちがうんだよ、わたしは」

当選した直後に、必ず、健忘症にかかる先生方とはいささか趣きを異にするようです。「あ、ありがとうございます」

隊長の背中に、ショートパンツ姿のサファイアは。どっかりと馬乗りに跨りました。女騎手の重みが、まろやかな臀部を通じてずしりとかかってくる。大男の隊長なので、騎手の足が地面につかず大変好都合。腰ベルトを手綱代りにかませて引きしぼり、サファイアは強く両踵で蹴りあげました。人間馬はのろのろと亀の子運転をはじめます。

「それ進め、信号は青。……左自転車、右へ寄る。制限時速五十、遠慮は不要。もっと飛ばす……はい、ストップ。馬鹿！ 停止線を越えたじゃないか、バックバック！」

好き勝手なでたらめを言って悠々と御し、思いのままに乗りまわす姫御前です。哀れな

り隊長。四ツ這いは赤ん坊時代以来のご無沙汰、トレーニング不足の悲しさで肘はすりむくし膝は血が滲む。塀沿いに庭を三回も這いずり回されると、ついに力尽きて完全に乗り潰されてしまいました。

人間馬を捨てた女騎手は長々と地上に伸びている駄馬の背をボンと蹴り、分取ったその大刀をすらりと引き抜くと、敗残の敵将の首筋にひたひたと押し当てました。

「少しはいい薬になったらしいね。何か言いたいことがあればいってごらん。聞いてやるよ」

「い、いえ滅相もございません」

「ないの？ どうだい、わたしの馬にしてもらった感想は？」

「へい、この上もない光栄で……」

隊長はただただ恐縮の極みとみえて、ひたすらごまかす戦術に徹します。

「この刀は記念に頂くよ。夜の明けぬうちにさっさとお帰り！」

完敗KOの隊長は、命拾いに大喜悦。寛大で慈悲深いアマゾンに三拝九拝して退出して行くのでした。むろん、歩くことはできません。四つん這いになってのろのろと、時速五〇〇メートルの進行状態です。帰路だれかに

出会ったらどんな挨拶をするのか、その口実に困ることでしょう。

東の空がほのかに白んできました。日の出も近いようです。どこかで一番鶏が鳴いています。

だが、まだ一人残っている……

## 16

午前九時、行動開始です。居間のソファでしばらく仮眠をとったサファイアは、前夜の大奮闘の疲れもとれて爽やかな気分。いつもどおり入念に朝の化粧を済ませてから、メロンを閉じこめてある更衣室へと急ぎました。

——とにかくそをついているのは確かだから、まずこの点を糾明せねばなるまい。油屋の自供内容は諸般の事情よりしてまず信用してよい。全部泥を吐かせてから、お仕置を考えるとしよう。今回のような事件を、被害者だという理由で不問にしておく、必ず増長するにちがいない。今後のためにも、一つ心を鬼にして愛の鞭を振うのだ。妾などという低級な種族の女の色香に迷い、圀りに侍らせて、でれでれと鼻の下を長くしていたとはもっての他である。さてそのお仕置だけど、どうしたらよからうか。鞭でたたくのは肌に



傷がつくからいやだし、馬にして乗り回すのはいい気分だけれど、大男の隊長とちがい、あの子の華奢な身体ではわたしを支える体力はないし、腰を痛められたりしたらチト困るし、さてどうしよう……。

と、まあ右のようなことをサファイヤは考えていたのです。まさかそのものズバリの不貞行為を働いていたとは、夢思っていますでした。キンカーンもそんなことは言わなかったし、監禁されていたのだからさような不祥事の起る可能性は絶無とみなしておりました。

だが、天網恢恢疎にして漏さず、悪事千里を走るとの格言あり。第10節から始まった事件の顛末も、ようやくその大詰を迎えることになりました。

「何故こんなところへ入れといたんだ。イブニング・ドレスじゃないんだぞ、ぼくは！」

鍵をはずして衣裳ダンスの中から取り出したとき、すでに目を覚ましていたメロンは大立腹、口をとんがらしてサファイヤを詰りま

した。  
「ええ、でも昨夜は何かと取り込んでいたものですから……」

「油屋が来るといったら、油屋が！ それに

あのおっかないコケオ隊長も一緒なんだぜ。何て気がきかないやつなんだ！ ああ、もう九時だ。どうしよう……」

科白の前半では腹立たしさをぶちまけていたものの、卓上の砂時計を見るとメロンは急に弱気になって、絶望的な表情になりました。姉さん女房が大奮闘して、悪漢どもを追い払ってくれたとはつゆ知らず、睡眠薬がよく効いてその間中ズツと寝ていたのですから実際のいい気なものといえましょう。

「油屋さんなら、ゆうべ来たわよ」

「……」

ギクリ。一瞬メロンは鼻白みます。

「隊長さんもそのあとで来ましたけど……」

サファイヤはにこにこ笑っていますが、状況は少しずつ転回の兆しをみせはじめます。

「……子供の書いた証文は無効だからって、うまく言訳してお引き取り願ったの」

そう言ってサファイヤはメロンの書かされた売渡証をふところから出して見せました。

笑顔はすでに消えています。メロンは視線を左右に配りましたが、むろん逃げ道などありません。先生が黙ってお引き取りしてくれするような紳士でないことは、百も承知のメロンです。

「そ、それは、よかったねえ……」

現在のメロンの心境と立場は最悪です。両者の間はすでに五十センチの射程距離内にあり、しかもいつの間にか部屋の壁際に追いつめられているのです。さっと腕を伸ばしたサファイヤは、メロンの上衣の襟もとをわし掴みにし、ぐいと引きつけました。ネクタイがあればより好都合ですが、当時は蝶ネクタイしかなかったと服飾辞典に書いてあります。

「な、なにするんだ。は、離せたら……」

長身のサファイヤに上から見据えられて、メロンは必死に視線をそらします。

「昨日の出来事をもう一度おっしゃい！」

「く、くどいよ。だからゆうべ説明したとお

り……」

ピシャリ！ 果然、メロンの頬へ痛烈な平手打ちが炸裂しました。

「十三年前のミス・カルピスっていうのはだれなのっ！」

キンカーンは正直に八年前のミスだと自供したのに、憎さも憎し、水商売上りの女のこ

と、五年も逆サバを読んで問いつめます。メロンの虚勢は寸時にして崩壊しました。

「ぼ、ぼくはただ、キンカーンが家へ来いと



ピシッ、バチン！ 痛烈な往復ビンタの開始です。左手で襟もとを押え、右手の甲と掌で左右の頬を交わるがわる襲撃します。イエスの訓戒も自由意志を前提にはじめて可能となり、それゆえこの場合のメロンを救済できません。二度や三度では済まない。平手打ちが十数回に及ぶとメロンはついに泣き出しました。

「ご、ごめんなさい……もう、決してうそはつきません、……ワーン、ワーン……」

サファイヤは一旦ぶつ手を休めて、メロンを決めつけます。

「今日は許しませんよ。第8節のお約束は忘れたのっ！」

と、何カ月も過去の誓約を道具に糺問するのです。債務不履行を責められると、メロンとしても弁解のしようがなく、ポロポロ涙ををこぼしてしゃくりあげています。

サファイヤはそこで油屋の自供内容と、メロンの昨夜の説明事項を、順々に比較対照して、その差異をきびしく追求し、真実の究明にあくなき情熱を傾けました。ようやくにして真相がほぼ解明されたところで、女検事は被疑者に念を押します。

「他に隠してることはありませんね？」

「は、はい。もう何も……」

ここまではサファイヤの予定どおり進行したわけですが、が、そのあとがいけない。当初の計画では、ここで長々とお説教をぶち、心構えを説示してからお仕置に入るという段取りだったのです。しかし、幸か不幸かサファイヤの鋭敏な女の第六感が、メロンの態度にまだ何か隠しごとありと察知しました。泣くのはいいが、必要以上におどおどしている。うつむいたり横を向いたりで、視線を外してばかり。これはキツと何かある。

突然、サファイヤの目がつり上がり、美しい横顔の線が崩れて、ぶるぶると頬の筋肉が痙攣しました。あろうことか、メロンの項にくっきりとあざがついているのです。昨夜は暗くて分らなかった。だが十億ルックスの太陽光線はごまかせない。襟もとを握る手に力が加わりました。瞋恚のほむらがその目ならんらんと輝いています。

「おお、これは一体どうしたのです！ わたしはこんなところに付けた覚えはありませんよ！」

ああ、何たる不運。もういけない。そのすさまじい形相に、メロンは真青になって竦み上がりました。歯がモンキーダンスを始めま

す。と、身体が宙に舞いました。サファイヤがいきなり足払いをかけたからです。どでん、と床に横転、したたか腰を強打して起き上げません。小荷物の包装を解くような手つきで、サファイヤはメロンの着衣を剥ぎとりにかかり、たちまちすっかりむしりとりしてしまいました。一般の小荷物は動かないが、中味が人間ですのがたがた振動しています。スグさま、品質の吟味に移る。項だけではない。あっちに一つ、こっちに二つと不貞行為の証拠歴然たるものがあります。百貨店からの中元の品目の郵送なら、気に入らないからといって取り換えてくる手もあるが、この場合はそのようなことはもとより許されない。

「あなたは私を裏切りましたね……」

「そ、それは……あの、……し、しどろもどろ」

「おだまり！ ならば、どうして最初に言わなかったのですっ！」

顔を強打されて、鼻血が迸りました。前歯も少し折れたかもしれません。メロンは恐怖のあまり口がきけなくなりました。

弁解の機会を与えないのは不公平であるから、メロン君のために一言弁護する必要がある。君はうそをついたのではない。うそとは



虚偽の事柄を陳述することである。事実の単なる隠蔽は、うその概念カテゴリーから除外されねばならない……。だが問題は、上記のごとき三百代言的言辞を以ってしては、逆上したサファイヤを鎮静せしめる効果なしということであります。

その時点におけるメロン夫人の見解はこうである。単にお仕置で済む問題ではない。倉で解決できる性質のものではない。明らかに軍法会議である。しかも最も悪質、卑劣なる反逆罪が成立する……。

サファイヤはメロンの手首を握って寝室へ引きずって行きました。まず、赤いしごきで後手に縛り上げる。発覚した罪の重大さにメロンはただ動転して、抵抗はおろか口をきくこともできません。

次にサファイヤは長さ約一メートルの一本の細い皮紐を持ってきました。そして、姦通罪を構成した元兇物を召しとりにかかったのです。砲身と火薬庫を一まとめにして、紐の一端にしっかりとくりつける。さらに他端をやっと月賦の支払いが済んだダブルベッドの脚に結びつけます。

珍奇なる連結形態です。二つの結び目の間隔はごく短くしてあり、砲身台座たる者はほ

とんど身動きができません。しかも意地の悪いことに、立つでもなく坐るでもなくしゃがむのでもないという、中途半端な中腰の姿勢に固定してあるために、たちまち膝がしびれ腰がだるくなってきます。せめて膝だけでも床につけば楽なのに、あと僅かの距離に妨げられ、かといってむろん立上ることもできないのです。

ぞっとするほど冷やかな表情で、サファイヤは言いました。

「あなたはもうわたしの夫ではありませんからね。……そんなもの必要もないし、二度と浮気のできないようにしてあげるわ。しばらくくそうして名残りを惜しむんですね」

冷酷に言い捨てて、わっとばかり泣き出したメロンを残して、近くの薬局に血止め剤を買いにいくと称して寝室を出ていきました。

いや、どうも大変なことになりました。たった一度の不義密通ですべての男性がこんな目に合わされるとすれば、人類の未来は危機に瀕するといわねばなりません。それに、この程度のことと愛すべき紅顔の美少年メロン君が、その機能を喪失せんか、ただに可哀相というのみならず、愚作の完結までの筋書きを、ちゃんと拵えている馬鹿面のT氏にと

っても迷惑至極な話でしょう。ここは何としても防止策を講じねばならぬところです。それにはやはり、現に生殺与奪の全権限を掌握している現メロン夫人こと元サファイヤ姫の理性に訴える他ありません。

ですから(!!)、美しくも勇ましい元姫君は宿舎を出てしばらくすると平静に戻り、はしたなく逆上したことを反省して思い直したのです。——元も子もなくすような仕儀はよろしくない。日頃信奉しているマイ・ホーム主義の崩壊を自ら生ぜしむるのは愚の骨頂である。アホラシイ限りといえる。……ああ、それにしてもトサカにきちゃうわねえ、全く。その辺を散歩して少し頭を冷やしてこよう。ここでTのヤツに貸しを作っておくんだ。そうすればまた自分に都合のいいように書いてくれることもあるだろう……。

犬も歩けば棒にあたる。女が歩けば女に出会う。

「あーら、メロン様の奥様じゃござあませんこと?」

「まあ、お隣りのレモン様の奥様。どちらへお越し?」

「家庭裁判所ぞんす。……ま、ちょっとお聞き遊ばせ。ウチの宿六、わたしの目を盗んで



他の女にチョッカイを出し、子供まで生ませていたのでございます。何というミダラで不道德な……ぺらぺら、ぶんぶん……」

「あんなお固そうな御主人がねえ……」

「ケダモノでございます。……御用心遊ばせよ、奥様。お宅の旦那様も、もしかすると……」

「いいえ、宅の主人に限ってそんなことはござあませんわ。わたしをとっても愛してくれておりますもの、おほほ……」

「結構ございますわねえ。……時に奥様はどちらまで？」

「はあ……、その、主人が風邪を引いて寝込んだものさますから、ちょっとお薬を……」

「さいでございますか。ゆうべお宅の庭で何か騒々しい物音が聞えておりましたけど……」

「主人と二人で、鬼ごっこをしておりましたの……。じゃ急ぎますから御免遊ばせ」

長話は無用と、鬼ごっここと風邪引きに因果関係を設定したサファイアは、傷心激昂のレモン夫人に別れを告げました。

家へ戻ってくると、姦通の亭主は相変らず泣いています。窮屈な拘束が相当苦しいとみえ、膝ががたがた震え、号泣はやめて忍び泣き、呻き泣きに変っています。

直ちに許すわけにはいかない。はっきりと

宣告した手前もあり、情状酌量の理由を探すのに骨が折れるのです。付き合以上、恐い顔をしてメロンの傍に蹲みながら、何かいい口実はないかしらんとサファイアは考えておりました。——何てよく泣く子だこと。涙腺に異常でもあるのかしら？ こんな泣虫の亭主を、これからずっとお守りしていかなくちゃならないんだから、全くうんざりしちゃうわねえ……。

丁度そのとき、救いの神が現われました。セツカイ老人です。じいさん、昨夜メロンにサファイアを連れてくるよう言っておいたのに向やってくる気配もなく、もしや油屋達にすでに引致してしまっただのかと心配して、調査にやってきたのです。ところが家の前まできるとメロンの泣き声が声えます。はてなと怪訝に思い入口の戸を勝手にこじ開けて夫婦の聖域に侵入したという次第です。見るとこの有様、すっかりたまげてしまいました。「これはまあ、どうしたんじやな。訳を話して下され」

老人の姿を認めたメロンは、ここぞとばかりに、また大声を挙げて号泣宣伝を始めました。まずこれで安心、助かったわと、サファイアは一層恐い顔をして事情を説明し、卑劣

なる不貞行為の断じて許すべからざる所以を力説します。ふんふんと適当に聞き流したセツカイは、尚もしつこく泣いているメロンに向い、

「これ、いつまでも泣いていると子取りにさらわれますぞ。わしからよう謝ってあげるから心配することはないのじゃ」

と慰め、サファイアに言いました。

「いや、実はこれはわしの落度じゃ。この御仁に罪はありませんて」

「どうしてなの？……ぷりぷり」

セツカイは昨夜のメロンとの出会いを簡単に説明したあと、次のような出鱈目をつけ加えます。

「その時には、メロン君は全部話すつもりだったのじゃ。が、女との一件だけは止しなされと忠告したのですて。事を荒立てぬ方がよからうと思つてな……」

「でも、この子は、そんなこと少しも言わなかったわ……」

下唇を突き出し、腕を組んだサファイアはメロンの方を横目で睨みながら抗弁します。

老人は一向慌てることもなく、  
「何、それはお前さんの怒りようが激しくして怖しさのあまり口がきけなかったのじゃ。」



だから一つ、ここはわしに免じて……」

と、巧みに言葉を続け、あっさり結着をつけてしまいました。姦通自体と、その事実の告白とが何とはなしにすり換えられているのです。亀の甲より年の功、実に巧妙な話術です。

それからしばらく、したり顔のセツカイと仏頂面のサファイヤとの間で、半八百長問答の行なわれた末、予定どおり極刑の撤回という運びになりました。やれやれ、助かった。

誠に御同慶の至りです。

「じゃ、通常のお仕置だけにしておくわ」「賛成、賛成。じゃがあまり痛めつけるのはいけませんぞ。かえって怖気づくばかりじゃからな」

「大丈夫よ。慈悲深い態度で充分に言い聞かせ、思いやりのある仕方です。ミッチリ反省していただきますから……」

セツカイ老は別段他に用もないので、もう一度念を押してさっさと帰って行きました。

## 新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

残された二人は何ともバツの悪い表情で、しばらくお互いの顔色を窺っていましたが、いつまでもつつ立っているわけにもいかないサファイヤです。やがて皮紐の結び目を解いて奇妙な連結装置の取り外しにかかりました……。

「許してくれるの？」

メロンの問いに、サファイヤは答ええないで取り外し作業を続けていましたが、メロンの安心の気の反応を認めて、グイッと捻じり上げます。すぐ調子にのるメロンです。

「これで済んだお祭り？」

メロンの甘え心はスッ飛びました。

その日の夕方まで、メロンは水に浮かんでおりました。後手に縛ったしごきにロープをつけられ、井戸の中へ吊り下げられていたのです。そして、ビールや西瓜などの諸君とともにじんわり冷やされておりました。だがこれはお仕置ではない。不浄な身体を清め、穢を祓う儀式なのです。初夏だから肺炎にかかる心配もないでしょう。

長すぎた第二章も次の第17節でおしまいです。第三章では、サファイヤが第5節の夢に見た「赤い鷹」が登場します。



## 妊婦に魅せられて

瀬 沼 四 郎

一月号を読んだ。早速中河恵子さんがモデルの六カ月の「妊婦フォト」が分譲されている。勿論現物をまだ見ていないので、批評の限りではないが、次号に告白文が載るとの予告（編集部だより）もあり、まだ月も進んでいないので、急いで何か言う必要はないであろう。ただ発表されたものが全部「縛り」のものであるのと、「妊娠九カ月ぐらい迄は月を追うて撮影させて貰うよう依頼してある」という点、勝手だが少し注文させてほしい。読者通信に南九州、T・K氏と宮崎・上林恒雄氏とが「妊婦の切腹」「妊婦の腹裂き」のフォトを希望しておられるが、逆に小生は

「縛りなし」の芸術的な（？）妊婦裸像も撮っていただきたいと希望している。読者通信といえば島根・Y生氏は奥さんの妊娠の記録を撮っていられるというのが目についた。小生は縛りなしのを見たいと思う。

もう一つ、「妊娠九カ月ぐらい迄」などと言わないで、なぜ「臨月まで」言いかえるなら「分娩間際まで」撮影して下さらないのであろうか。辻村氏が「オニ六先生大いにシバる」の中で、妊婦も臨月になると、もう美的なものより、とってる方が苦しくなる、と述べておられるが、是非「臨月まで」撮影してほしい。体に影響があるといけないから縛り

とか責めのないヌードでよいわけだ。

それにしても、妊婦を二人許り撮る機会に浴した、と言われる辻村氏がつくづく羨やましい。自分に勇気がないせいだが、オニ六先生が言われるように「一度拝見したかった」ものである。この対談で「花と蛇」の静子夫人の妊娠のことが出てくるが、「静子夫人」を以てみずから任じ、静子夫人に擬してフォトなども撮らせた恵子さんの方が、物語の中の静子夫人よりも先に本当に妊娠してしまつて、ハラが大きいフォトを提供されるようになったのは奇縁という外ない。

同じ「オニ六……」で辻村氏が、大島照代さんへのクリスプレイに対して、羽鳥水江さんや瀬沼四郎氏から、激励の手紙が届いた、と言っておられるが、偶然中河さんの「妊婦フォト」の予告と重なったので、同じ妊婦マニアということから、辻村氏の頭の中で羽鳥さんと小生とがダブったのではなからうか。一月号について言えば、奇クサロンに載せてもらった小生の短文に、小妻容子さんのイメージ画「妊婦受難二題」を同じページに入れた下さった配慮に感謝している。原画はもっとすばらしいだろうが。

とにかく今月号では、中河恵子さんのその



「SSS」所載の漫画  
カット。……



後の経過がよく分らないので、次々と発表される予定のフォトや告白文で、詳しいデータが得られるものと期待している。また「目下受付けているモデル志望の通信が若干あるの……」（編集部だより）とあるのは、やはり妊婦モデルのことだろうか。気になるところである。

近頃、週刊誌をちよくちよく立ち読みする。12月12日号の「SSS」という隔週刊誌に次の記事があった。田代二郎氏の「体験的衝動レポート——『妊娠したい！』」である。羽鳥さんにならって、カット漫画を同封する。

「『マタニティよろめき』」  
六年前の話だが——関西地方で妊婦（七カ月以上）だけを犯す暴行魔が出現したことがある。変質者であることは間違いないが、犯

人は指名手配中に自殺してしまった。その遺書には、

『妊婦のあの醜惡な姿に憧れる』

という一行が目をついた。妊婦はたしかにスタイルは醜惡である。しかし、ご本人も近辺も子孫誕生のため、醜惡さを超越してしまっている。

『妊婦に憧れる男なんてそうはいませんよ』  
というのがほとんどの声。まったく、その通りである。

ところで現代に話を戻すと「マタニティよろめき」なんて言葉が飛び出してきている。

マタニティ・ドレス（妊婦服）を着た女性がよろめくというのである。

『よく相手をする男がいるな』

疑問に考える男も多いが

『いや、オツなもんさ』

という答えもあるくらい。六年間の間に、すっかり世の中は変化してしまった」

続いて、マタニティ・ドレス製造会社の調査を引いて、女性の「妊娠したくなる心理」を紹介した後、こういうのである。

「『マタニティよろめき』の相手をする男性が近頃どっと増加したのは

『妊婦なら、もう妊娠する心配はないもんな

あとで、ごたごたが起らないから、いいですよ』（セールスマン・28歳）

といった按配」

あと、大学助教授の精神医学者なども登場して、いろいろと賑やかだが、小生の関心のあるところは以上なので、もう止めておく。

この同じ週刊誌（？）の同じ号「事件ワイド特集」の4に、もう一つ面白いのがある。

「妊娠九カ月の腹部をサラシでしめあげていたが……新婚電車で気の早い出産」

「ロマンスカーはウレシタノシの新婚さんカップルを乗せてひたはしる。その時

『あ、もう、あ、もうダメエ』

という尋常ならざるお声。

『生まれる生まれる』

新郎はあわてた。シコミが早すぎたのですな。ちょうど、産婆さんがいて無事出産。ア

フレコ結婚のとんだ一幕でした」

細部を省略すると以上の通りである。

いずれにしても、妊婦を相手に、ウワキならともかく、犯罪のようなことをするのは、妊婦マニアとして風上にも置けぬ奴と言わなくてはならない。「妊婦マニア」なるものが奇ク誌上などで、だんだん認められるようになって来れば来るだけ、そう思うのである。



## ＜獄中記＞

殺

人

囚

の

詩

集

志賀新一

## 第一章

この世に、もし、男と女が存在しなかったら性愛はあり得ない。

また、その片方が存在しなかったら性愛はなし得ないか。

しかし、それは人間のまっとうに考えるべきことではないようだと思うだろう。ところがそうではないのだ。残念なことに人間は己れを拘束するために法律という実に厄介なものを作ったのである。

人間が人間の作った法律に苦しむということとは残酷を過ぎて滑稽である。そしてその滑

稽な世界には男と女の存在がないのだ。つまり、男は男だけの世界におかれ、女は女だけの世界に区別されるのである。私は男であるから、男の世界のことを記述するしかないのだ。しかし、女も人間である限り性愛における生き方は男のそれと少しも変りあるまいと思う。

『女囚』という、きいているほうで哀れな気分になり、ロマンチックなひびきがある。女は悪を働いても、それが社会の責任に結びつけられる。得な性分である。しかるに、男のほうは、どうだろう。徹底して糾弾されるのだ。野郎と呼ばれる男は損な性分である。この世には男と女しかないのに、そこに形

式の相違ができると、同じ男が男を悪しざまにいうのだ。そして法律はいつも座席で大あぐらをかいて笑っているのだ。

女より穴が一つ不足しているだけで、男は人生における助演者であり、悲しきピエロである。

さて、男が男と一緒に生活していて、何が不自由かといえば、やはり女のいないことである。食事、洗濯、これらの日常はまあまあ我慢もできる。日中は女など何んの必要もないのだ。だが、地球には夜が必ず来るのだ。その夜になると、男は女なしでは過ごせない動物なのだ。女もまた然りである。しかし、女がいないのだ。女がいなければ男は考える



輩である。女の代役を同性に求めるのである。勿論、女の代役だから若くなくてはいけない。

そこで若い男は、そのすべてを献身しなければならなくなるのだ。

法律は意地悪である。SEXまで厳禁してしまう。そのくせ法律ぐらいスケベエはないのだ。法律はいつものぞいて歩いている。そして充分覗き楽しんでから現行犯タイホだという。そこで囚人の間に生れた合言葉が巧くやれよオである。そして、巧くやったあとのそう快さときたらない。まったくもって刑務所もエデンの花園なのだ。

「スケなんて、メじゃない」

とかなんとか、その気になっていると、法律の可怕いおじさんが、

「こらアッ、何をしとるか。現行犯だぞオ」と怒鳴りとばして、裸でだっこの俣ご夫婦そろって石の冷めたい廊下を屠殺場へ曳かれて行くことになる。

保安課長は口ひげを撫でながら、二人を等分に睨みつけ、

「きさまら、よくそんな穢いことが平気で出来るのう。男の尻などどこがええのか、あそこはウンチのする穴で、男の……れるとこ

ろじゃないわい。きさまら催したらなせ……いて辛抱せん。本来なら……りも罰じゃが、儼はそれ程不粹じゃないわ」

といって、口ひげを撫でていた手で鼻の孔にゆびを突っ込み、ハナクソをほじくりだした。可哀相にご夫婦とも素裸である。お父ちゃんもお母ちゃんもちぢみ上って腹の中にかくれてしまった。

九月といえば、もう秋である。北国の獄では肌寒くて到底裸などではいられない。保安課の鉄格子の窓を去来してゆく雲の影が、そこはかとなく冬を告げている。

八甲田山の上には雪片らしきものが漂っている。野うづらの声も何んとなくもの悲しい。また、法律よりもきびしい冬がやって来るのだ。刑務所には暖房の設備などない。法律を犯した悪党どもに暖房などもっての他だという。ごもつともなことだが、やはり冬は寒い。毛皮を自然体に備えている犬猫のほうに伴せである。

「そんな人並な欲求をする位いなら、なぜ悪いことをするのか……」

だから、いうなってんだ。相手は法律なんだ。われわれがまっとうに人生の表街道が歩けない人間だっことをご披露におよんだと

て、法律のおじさんはそっぽを向くだけさ、分りる。

おめえは一体むしよのメンコの数を何年喰っているんだ。前科がお馬に喰わせ切れない程ゴマンとありやがって——。

「しかしよオ。そうはいつでもよオ。兄貴、あれを見なよ。あれをよオ」

なる程、津軽平野を渡ってくる風は、夏から一足飛びに冬になってしまう。木の葉が散らぬ中に真白い雪をかぶってしまい青い葉のまま飢死してしまうのが、無残である。

「——で我慢せい」

と粹を利かせたつもりで保安課長はのたまうが、冗談じゃない。火気厳禁の獄中でわれわれが暖を取る方法の一つしかないのだ。男と男が確かり抱擁してそこに確執しなければ生きて行くことのできない本能なのだ。それが異性と同性の相違だけのことで、穢い綺麗などの問題ではないのだ。悪いことは承知で法を犯して来た野郎どもにご意見ご無用のものもんが見えねえのか。ああ、やんなっちゃった、悲しいなあ。

「走れトロイカ今宵は、楽しいうたげ」  
巧くやれよ。パクられるなよ。

「ふゆになれば、しもがはって、どじょっこ



だナふなっこだあの、てんじょこはったとおもうべな」

うんだ。うんだ。おもうべ。

如何なる星の下に生れ来しかと、囚人がひそかに涙をこぼす冬がくるのだ。

若い囚人が呟やく。

「あの八甲田山の彼方<sup>あつち</sup>におらの家があつて、もう婆さまがランプに灯をつけたるな」

監房の鉄格子にみなが縋りついて、それぞれオラが家の方向を見る。石の巨塀の上に八甲田山の帽子が見えるだけなのに。

「東京はどっちだ」

「東京は東だから、あっちだべ」

「東京は暗いなあ。あんなにネオンがいつぱいついてるのによオ」

空はその東京につづいてるのに鉛色の雲が遮断してしまつて何にも見えない。ふるきとを見失なつてしまふ季節。鉄格子にかけた手が力なくひとつひとつはなれて行く。めしにになった囚人に冷やかな微笑をたたえながら夜が忍び足でやって来る。

「てんじょこ、はったとおもうべよ」

あきらめること以外にない世界だ。誰かが道化て見せたが、そのてんじょこには針金の網を張りめぐらした10燭の裸電球がだらりん

ことぶら下っているだけだ。

「あの綱にぶら下っているすすのうに俺のおやじも牛小屋の梁にふんどしサかけ首っこ吊つて死んだだなや。しかしよオ死ぬことなからうが、俺は好きで盗ッ人サしたのでねえ。分んねえかなや。俺も分んね」

あのバカも一人前にホーム・シックになつていやがるんだ。にわとり十羽で一年二カ月の懲役、一体これ、どうなつてんの。法律は低脳児よりさんすうができないのかなあ。

「あのとき、あのスケのやつ、てめえも良くなつてよオ……やがったのに、強姦されましたってサツにたれこみやがった。いい線行きやがる。糞ッ、一緒に……や合意じゃねえかよオ」

可哀相なのはこの子でございって面しやがつて、野郎の……ぎっこんぎっこん押し込まれて見る、てめえの嫌だつて強姦されまして訴<sup>たれこ</sup>込みたくもならアな。しかし、野郎にゃアンコもねえんだなあ、あのデッカイ……じゃアンコの尻<sup>けつ</sup>のチャックも毀われちまうからなあ。

まだ、就寝までの位いあんだア。おれのラドーはなあまだ八時まえだ。てやんでえ。てめえのハクライはみんなノビ品じゃねえ

かよオ。うヒヒヒ……ぐにッても『質草』万つてレコもんサ。いうなつてんだ。婆婆に29日が最高保持だなんてくせによオ。

「走れトロイカ、ああ……」

「切ないなア……」

この野郎、就寝二時間もまえないのに、もう準備運動してやがる。モッコふんどしは切ないのう。走れトロイカ……

あくび、あくび、あくびである。涙を目にいっぱいためて、囚人はひまなのだ。誰か人間らしいこと喋らねえもんかなあ、おい、ラドーもう何んじだ。あいな、ジャスト八時。そうだ。とつとつあん、おいおい、こらア……さまじい、この百科辞典。頼むから喋ってくんねえか。

「きみらは」おっと、きみらときたよオ。バカ、拝聴しろい。「——をバカにしとるが、決して不純なものではないぞ。つまり——とは男子の人間形成への第一歩なのだ」スケは……で第十歩か。爆笑。爺さんは無知なる徒輩を哀れみとさげすみの眼差しでながめまわしながら、

「ドイツの性科学者でヒルシュフェルトという人の説に、成熟した男性の本格的オナニーとは、手やその他で刺激して、オルガスムス



にまで到達するものをいっとる。だから未婚の男性の性のはけ口は、オナニーがほとんどすべてというのだ。つまり、きみらの現実にはみな未婚なんだ。有害にはならんから大いにやるんだのう。ただし、尻はいかんぞ。尿道に大腸菌が入ったら、それこそ梅毒どころじゃない。こうだ」

爺さんの顔がフヤけたおでんのつみれのよくな顔をして見せる。おお、きかなきゃよかった。

アンコ可愛や、お尻は憎や。そのとき、暗い廊下を馬の屁のような音を立てて就寝ベルが鳴りひびいた。

「走れトロイカ、今宵は楽しいうたげ」

囚人の自由、それは寝ることと——をすることだけである。かあちゃん、おやすみ。もういくつ寝ると、装婆にでる。

「はるになれば、しがこもとけて、どじょうこだのふなっこだの、よるがあけたとおもうべな」

そうだ。一生刑務所に飼い殺しではないのだ。人殺しも、強盗も、ドロボーも、喰い逃げも、はるになれば、しがこもとければ、必ず装婆にでられるのだ。必ず。

その、しがこもとけて春になるのは五月で

ある。りんごの花っことも桜の花っこともすみれの花っことも一斉に咲きそめる季節になっても、残雪は消えない。しかし、津軽平野を渡ってくる風はやわらかい光をまき散らし見る眼に愛しみを与える。時なし草の小さな花びらからほろりと雫がこぼれ落ちる。それが、みちのくの春の風情を添える。野うづらの声もチツチとして豊かである。風に乗って刑務所の中まで匂ってくるにしんの匂いも北国の春らしい。

「刑務所にも春が来た」

看守が空を仰いで呟やく。春を待っていたのは囚人ばかりではないのだ。明けても暮れても男ばかりの灰色の世界に閉ざされて勤務している彼等にとって、いちばん切実な問題は感覚のズレである。囚人と少しも変りのない日常。いや、むしろ監視されるよりするほうが精神的にこたえるのだ。規則は囚人ばかりに課せられているのではない。看守も職務規程があり、規律は守らねばならない。しかも刑務所における宮仕えは階級が絶対であり差別もおのずから異ってくるのだ。特に平看守等にとって夜勤務はおそれである。春夏はまだしも、みちのくは一年の半分余を冬で過ごさねばならない。看守職務規程には三十分

ごとに巡察して歩くべしと謳われている。それも漫然と持場を歩きまわるのではないのだ。何百もある監房を丹念にひとつずつ視察孔を開閉しながら囚人の異常あるなしを巡察して歩かねばならない。これは一見容易な仕事と思われるが、ところが、どうして大変神経のつかう仕事である。囚人一人一人の言動を見て歩き、その報告を詳細にカードへ記入しなければ受刑者の優劣差別が判然としないからで、日中の作業成績よりも監房内における囚人こそ更生の対象になるかならないかの重核点なのだ。看守等の見過ごしにできない生態をさらけだすのが監房内である。モハン囚だと公認されている受刑者が、その信頼性を裏切って見事脱獄に成功した例も枚挙にいとまがない。囚人は何を考え企んでいるかわからない。そのとおりである。どんな人間でも自由が欲しい。すべての受刑者の心に脱獄性はある。脱獄をしないだけだ。したいと思う気持は誰しも抱いているのだが、ただできないだけだ。しかし、脱獄は決して不可能ではないのだ。その気になればいつでも可能のチャンスはある。囚人等は脱獄したいのだが、脱獄する意志がないだけのことである。脱獄するために何人もの看守に信頼して貰える苦



業をしつづけた囚人にしてみれば、人間の信頼性ぐらいバカげたうすっぺらなものはないと思っただろう。正直とかまじめなどというものは心でなすものという修身教育は偽りも甚だしい。人間の感情は正直もまじめもその形式さえあれば納得するようにできているのであって、いつも真実は厄介扱いをされているのだ。

看守はバカでもできる。だが、看視はバカではできない。囚人等に人気のある看守は疲労しない。それは人間性の欠乏したバカだからだ。勤務が終了すると疲労がいつぱんに顔に現われる看守には何か心を寄せられるものがある。生活をまじめに考えて行動する人間には疲労が伴うものである。

「どじょっこだのふなっこだあのも、喜んでるべなあ」

若い囚人がはしゃいでいうと、老看守の眼にいとしさがあふれ、笑顔でこたえる。

「そして、若いおまえのどじょっこもな」

「ンんだナ。おやじさん話す分るすな」

監房の中も、春の笑い声で一杯になる。

## 第二章

私が不良囚として東京の府中刑務所に押送になった原因は、まったくバカげている。若いアンコの尻を冗談に撫でていたところを、看守に見つかり、報告されてしまったからだ。私には、そのとき、まったくその気はなかった。丁度、ふんどしの交換日だったので同囚等と素裸になり、ふんどしをしめ代えようとしたら、私の眼のまえに若いアンコの水蜜桃のようなまるやかな尻があったものだから、つい、ほんとうにツイさわりたくなってしまったのだ。しかし、私にその気はなくなっても、若いアンコのほうにその気が充分あったものだから、私だって、まだ三十代だ。脂肪が下っ腹にたまっているからピンと……ってしまった。

刑務所では布地をセツヤクして、囚人のふんどしは一切モッコ褌にしてある。つまり、男のオシメなのだ。それだから糞尿のときなど非常に不便である。いちいち横紐を解いて、それを下に落ちないように一所懸命片手で抱えて用を足さなければならぬのだ。それにモッコ褌は女性的でしまりが無い。芝居の女形が用いるものだときいたが、確かに男性向じゃない。だいたいイザ鎌倉というときに横紐などマゴマゴ解いていたら不覚を取っ

てしまう。その点、六尺褌や越中褌は便利である。六尺ふんどしは搔き分けてやればいいのだし、越中ふんどしはひょいと前を外ずせばことはたりる。

私が尻を撫ぜると、若いアンコが腰をくねらせて

「ああ、もっと」

なんて、変テコな声を出すものだから、看守に気付かれたのだ。看守なんて欲求不満の奴ばかりだから、特にアンコ河童<sup>カッパ</sup>のことになると刺戟感が強いのだ。

「こらア：何をしとるかア。このドスケベ」

ガチャガチャンと錠が外ずされ、鉄扉がギイーツと開かれた。こうなれば、もう一卷の終りである。私の方はうなだれモッコ褌の中にかくれてしまう。若いアンコも桃をモッコに包んでしまう。

「ケイカン罪だ。現行犯だぞオ」

看守は点数を上げた喜び声を張り上げる。なんて卑劣な野郎だろう。ケイカン罪とは囚人同志がセックスすることを指しているのだ、私のはアンコのおケツを、ちよいとさすただけじゃないか、と思ったが、それを言葉で現わしたら、それこそ看守抗弁でガッチ



り懲罰を喰ってしまふ。監獄へ来て、またブタ箱入りはごめんである。しかも、減食で麦めしに小便汁一杯では、到底持ちません。このバンタ野郎、と殴りつけたい衝動はあつても、わが身可愛さに齒を喰いしばってしまふ。私はどうせ懲罰にされるならアンコだけはタスケてやろうと思った。

「おやじさん、俺が冗談にやったんで、こいつは何んにもしないよ。つれて行くな俺だけにしてくれ」

「ばかたれ、ケイカンが一人でできるか。いくらかばっても現行犯だから許せん。さあ医務所に行って検査してやる。もし、アンコのウンチでもついてて見ろ、ガッチリ一カ月はアンマだ」

アンマとは、めくら監房という懲罰でも最悪者の入る石の監房なのだ。電灯もない昼夜の区別もつかない石の監房は、囚人のもっとも怖れる懲罰である。私も人並に怖れた。しかし、アンコのケツなど掘らなかつたという自信が心の底にあるだけ強味だった。

私は医務官の前にワンワンさせられ尻にガラスの管を突き刺された。

「むアッ……」

その痛さに、思わず悲鳴を上げてしまっ

た。次はアンコの番である。アンコの尻にガラスの管を入れるとき、医務官の眼尻が下がった。

「どうだ。痛いかな」

アンコの顔は何んの痛痒も感じていないのだ。ケロリとしている。

「おまえは、おかあちゃんのほうだから、こんな細かいもんじゃ物足りんだろう」

医務官は下卑た笑い声を立てた。

検査の結果、ケイカンはしていないことが判明された。あたりまえである。刑務所とはまともなことがとおらぬしきたりになっているので、囚人の社会性は久乏も甚だしくなるばかりだ。

押送車の窓口におでこをこすりつけて、私は走り去る津軽平野を眺めていた。

「野うづらよ、さようならだ。達者でいroy」

「りんごの花っこもな。元気だな」

人間の環境とはおそろしいもので、自由のない刑務所でありながら、イザ去らねばならぬことになる、長い歳月の哀惜が残るものである。私の眼にうっすらと涙があつた。

東京。

私の感覚が鋭いメスになった。もはや、落

ちりんごではいられないのだ。同じ刑務所でも東京は違うのだ。私は、もう若くない。しかし、この囚獄で一生終る訳でもない。十年の刑期もその半ばは過ぎたのだ。あと長くても一年である。何かを確執しなければイケない。その何かは、具体的にして社会復帰への試金石にすべきである。私には職業的技術は何もない。やくざという無謀があっただけである。その無謀が殺人という私の人生を狂わせてしまったのだ。しかし、もはや無謀では生きられない年令である。私は手錠のまま股間のものをグツと握りしめて

「東京へ帰って来たんだぞ。確かにしろよ」

と心の中で呟やいた。そのとき列車が上野のホームに滑り込んだ。護送看守が馴れぬ手つきで網棚から鞆を下ろし、私の手錠の鍵穴を調べて確かめると、

「さあ、東京だべ。はやく支度せい」

と肩を小突いた。私は東京人の誇りをもって、おもむろに席を立った。

府中刑務所。その規模の大きさには驚かされる。この刑務所は東洋一だそう。われわれ囚人たちは、府中刑務所を呼んで、東京さはいはてという。ほんとうに東京のさいはてらしいしずかな場所である。刑務所の中に武蔵



野が存在するのだ。むく鳥、尾長鳥、かけす。かんこ鳥、それに井之頭公園に天然で飼われている鶴なども舞い込んで来ることがある。四季の移り変りの鮮明さは北国の獄の比ではない。高村光太郎の詩に逆らう訳じゃないが、東京にも、こんなに澄んだ空があるのだ。刑務所の中に鉄道線が入っていて、受刑者の作業材料が運び込まれたり出されたりする。この荷物車を利用して脱獄した者もいた。

私は新入監房に配置された。監房の鉄格子に縫って、外を眺めると栗林である。その向うに巨塀がそびえ立ち聖教会の十字架の一部が見える。日曜日の朝になると、オルガンのみやびやかな音色と讃美歌が風に乗って流れて来る。新入教育は一週間ですんだ。栗林の野鳩や教会の讃美歌ともお別れである。

私の配役された工場は、紙細工専門であって、この工場に働く囚人たちは、その殆んどが不良囚といってもいい連中ばかりなのだ。私は長期刑で、犯罪が殺人なので、この世界ではどこへ行っても顔が利くのだ。それをいいこととして反則行為ばかりして来たが、一年経ち三年過ぎ、五年になるとすべてがおつくうになり、あまり刺戟も求めなくなる。た

だ、勿体ないのは人間のまっとうな精力を、ムダに消耗することだけだった。

「志賀を、162監房へ配置、作業席は19、二級のマークを貸与係に行つて貰つて来てつけさせなさい」

私は担当看守の後に従つた。作業席に着くと一斉に同囚が私を見た。見られることには習性になっているので、私は挨拶代りにちょいと手を上げただけである。

「志賀に仕事の手順をよく教えてやれよ」

と担当看守が隣席の爺さんにいった。爺さんはへへへと阿諛を含んだ追徒笑いをして「ようがす」

と胸を叩いて見せた。看守が去ると、爺さんは、私に喋りはじめた。仕事を教えるような素振りを示しながら、私の素性を糾すのである。よくあるケースだと思い、私は何度も繰り返して来たことを、これまたいとも安々と答えてやった。殺人犯ときくや、爺さんの眼の色が変わった。爺さんは後席に振り向いて皆んなにパントマイムで、コロシだと告げた。私は、これでこの刑務所でも位置を確保することができたのである。囚人は単純そのものだ。私は、にわかに親切になった爺さんにいった。

「いい、アンコいるかい」

すると爺さんは入歯が落ちたばかりの口を開けて笑い出し、

「流石はコロシやさんだ。いうことがいい。いますぜ。飛び切り上玉がね」

私の入った監房は人員八名である。勿論新入は便所の傍だ。ガラスで見透しだから、野郎どもの糞尿の様が厭という程視野に入ってくる。見なくとも汚臭が想像されるのだ。これまた馴れでさほど気にもかからなくなつた。私の隣りで寝るのが田代浩三という若い男である。犯罪はスリ。現代ではパンサーというそうだ。私は新入初夜から田代の……つて入った。相当のベテランである。何んにもいわず私を受け入れた。

翌朝、私の洗面用具は田代の手で揃えられていた。歯刷牙子には粉がたっぷりついているし、顔を洗うとタオルがあてられるという愛情ぶりである。私は苦笑した。いい線引きやがると思った。この男も私の排泄穴にすぎないのだ。それでも当人は、満足して女房気取りなんだからいいようにさせて置こうと思つた。

工場の昼休みどき、芝生に寝そべっている私の横に田代が来てべったり坐った。私は顔



を見た。

「ねえ、昨夜、<sup>ゆんべ</sup>失礼よ。わたし痛かったわ。恥かかしちゃ悪いから黙ってたけど、どうするつもり、ねえ」

私は突然おかしさがこみあげて来て、思わず吹き出してしまった。

この世に、男と女の必要はないのだ。現在ここにいる田代は男であり女なのである。男が男であることよりも女であることに生甲斐を感じているのだ。性の錯倒、いいじゃないか、そんなことは問題じゃないのだ。要するに環境に即応する生命の喜びさえあったら人間は万才なのだ。善も悪もない。生きて行く証しがあればそれでいいのだ。私は可訝しさに涙をこぼしながら芝生を転ろがった。私がそうでもしなかったら地球が停止してしまうほど、暗い寂しさがおそって来そうな気がしたからだ。

「おれの青春は獄死したんだ」

では、何んのために本能にしたがって、欲求するのだ。返らない青春に復讐するためだ。

「笑わないで。わたし、あんた好きよ」

田代は私の手を握った。私はこの女に……のぶら下がっていることを想像して、また笑

った。

「舐めるんじゃない、共同便所が」

私の眼光に殺人の日の怒りがあった。田代は慄え上って、立ち上ると物もいわず駆け去って行った。

私が独居監房に移転したのは、夏の終りだった。朝夕吹く風は、武蔵野に秋のおとずれがあった兆しである。夕日に映えて柳が銀に乱れるさまはすでに秋色である。

私は作業拒否罪で監禁されたのだ。別に仕事に嫌いなのではない。では体に交調を来たしたのかといえ、いたって元気である。ただ、なんとなく仕事をしたくないのだ。長い斗獄生活では、こういう現象も起こる。独居房にいても、一日中窓外をぼんやり眺めているだけだ。巡察看守も注意しなくなった。

めしを喰う以外は窓辺にぼんやりしているのだから、これほど手ずうのかからぬことはないのだ。それに私は自殺や脱走のおそれがないと性格的に調査されていたからだ。東京へ舞い戻り、社会復帰を目の前にして、作業を拒否することは決してよい結果にならないことも知っている。いながらも仕事に精が出ないのだ。私は阿部みどり女の俳句をなんとなく想い出していた。

「秋の蝶山にわたしを置き去りぬ」

私の脳裡に白い蝶が一匹羽搏いていた。その白い蝶が女のドレスに見えたり顔に見えたりした。そしてこの掴みどころのない幻想は美しい空白だった。

「何かが不足しているのだ」

栄養のない生活では、体力も衰えるばかりなのに、私は本能の太陽を西に沈ませないのだ。しかし、やはり何かが欠乏している。黒い炎が幻想の句蝶を消してしまった。

刑務所の附近にある東芝工場の煙突のけむりが、太陽を包んでしまったのだ。私は笑った。人間はおかしくもないときに突然笑いが来るものである。私は視察孔までのろのろと歩いて行き、看守を呼んだ。何んの用事もないことを知っている。

何もかも私の世界とは違うのだ。私が欲すものは人間の想像におよばない大きなものなのだが、それはとてつもない暗い穴なのだ。私は素裸になった。ふんどしもはずした、己れの一物を改めて見た。表情も愛想もない奴だが、私の未来を約束してくれるモノは、こいつだけだ。

私は夕日のさし込む監房の真ん中にデンと突っ立った。突、いつまでも己れの一物を眺めていた。



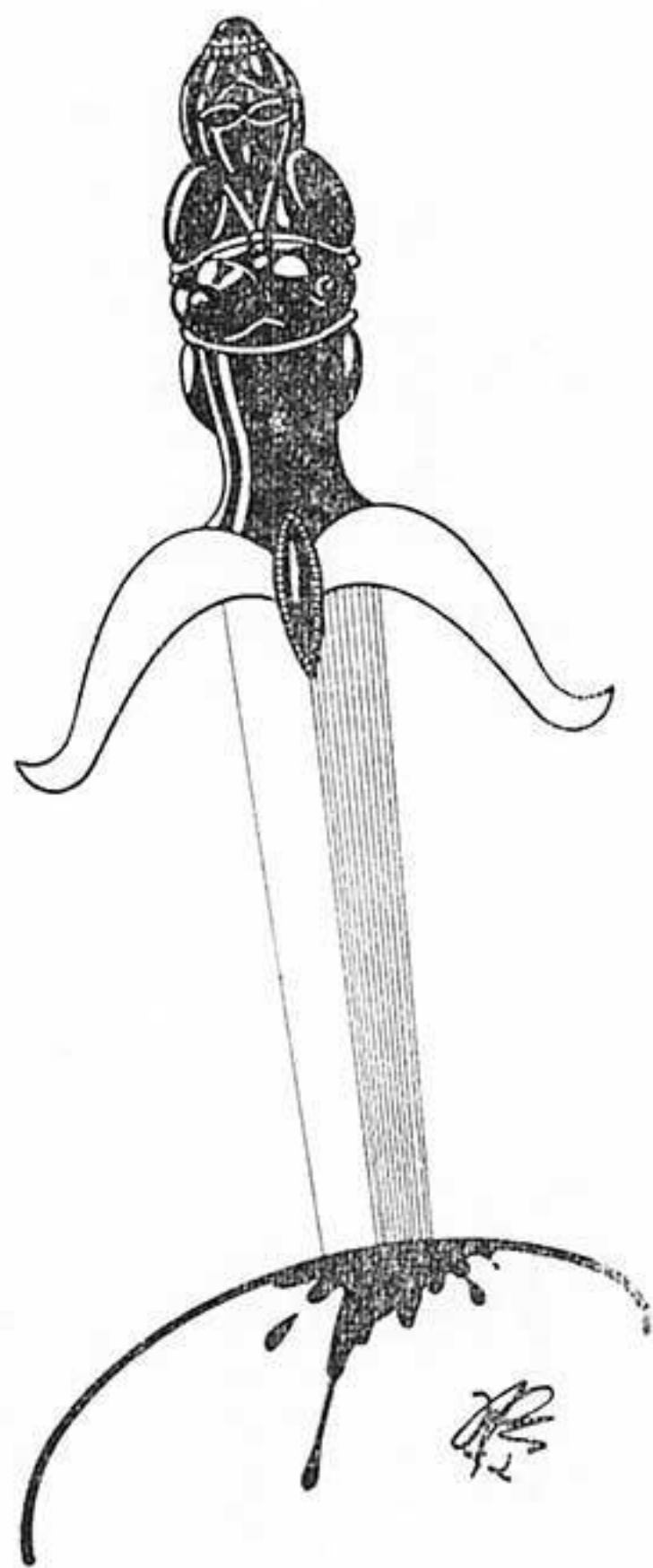
## 【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

復

讐

(その8)



千葉青鬼

## 遺書(続)

「元華族の御殿だったという三島社長のお邸は、鬱蒼とした木立に囲まれていました。

母家から離れてポツンと建っている土蔵がありました。何でも、昔、気の狂った若様がいて、それを押込めるために使ったのだそうで、内部が座敷牢になっておりました。

かあさんは、そこへ連れこまれてしまったのです」

「急に暗い土蔵の中へ入れられたので、目が馴れずに迷っていると、突然緋沙絵がとびかかってきて、たちまち縛りあげられてしまいました。

緋沙絵は女王のように私の前に立つと、——私は正義さんと結婚します。正義さんはあなたなんか始めから好きじゃなかったといっています。あなたも、いいかげんにあきらめたらどうですか——

と申します。もちろん、かあさんは抵抗しました。しかし、かんじんの三島が向う側に

ついてしまったのは、全くなかあさんの負けでした。やっと、二十才になったばかりの緋沙絵に、いいようにされている自分がいかにもみじめでした。かあさんは口惜しくて泣きました。話せばわかるのに、どうして私を縛るのかと詰問しました。すると、緋沙絵は、びっくりするほど甲高い笑い声をあげて、——私は、あなたに死んで貰おうと思っていますのですよ——

というではありませんか。その上、この土蔵の地下には秘密の「おとし」があって、そ



こへ生きながら、かあさんを押込めて、ブロックを積んで塗りこめてしまうといって、おどすのです。

——正義さんには、アリバイを作っておくために出張して貰っています——

緋沙絵の態度は、ホントにかあさんを殺しそうでした。かあさんは悲鳴をあげ、助けを求めました。すると緋沙絵は、

——どんなに叫んだって外には聞えないよ。聞えたって誰が助けにくるものか——

かあさんは、あなたのことを考えると、どんなことをしても生きて帰らなければと決心しました。

——お願いですから助けて下さい。私には明という子供があるんです——

——フン、ここだけそんなこと言っただって、誰が信用するもんか——

——いいえ、誓います。もう正義さんのことはあきらめます。ですから、どうか帰して下さい。お願いです——

かあさんは、とうとう緋沙絵に屈服してしまったのです。

——そんなら、誓約書をかくわね？——

——はい。何でも書きます——

泣く泣く、かあさんは今後は正義と何のか

かわり合いもないし、一切交渉をもたないという誓約書を書きました。

——もうこれで気が済んだでしょう。帰らして下さい——

誓約書をかくために、手首の縄だけはほどこいて貰いましたが、二の腕と両膝は、ギリギリと縛られたままでした。

緋沙絵は、かあさんの書いた誓約書を大事そうに、スラックスのポケットにしまいこんで、こう申しました。

——まだ、だめよ——

どうして、というかあさんの質問に

——保証がいるのよ。あなたの誓いの保証をあなたのからだにして貰いたいのさ——

急に、ズベ公のような口調になって緋沙絵が言ったので、かあさんは恐ろしくなりました。かあさんには、緋沙絵の言うことの意味が、まだよく理解出来ませんでした。

——あんたが、正義さんとのことを人前で言いふらしたりしないようにしてやるのさ——

——いいえ。私は絶対に言いません——

——だから、その保証をもらおうと言ってるじゃないの——

——私を信用して下さい。そして、はやく、はやく帰して下さい——

場所が場所だけに、かあさんは不気味さを通り越して、身の毛がよだつようでした。そんな私を見くだすようにして、緋沙絵は、又もや高々と笑い声をあげるのです。

——ホホホホ……。別にとって喰おうというわけじゃないのよ——

といいながら、かあさんを押し倒して手首と足首に縄をかけると別々に部屋の四隅にある金輪に引っかけ、はじめて胸や膝を縛った紐を解いて、手足の縄を順々に引き絞るので、夢中で逃がれようとしたが、三十を過ぎたかあさんと、若鮎のようにピチピチしている緋沙絵とでは勝負は目に見えていました。いつしか、かあさんは大の字なりに手足をピンと張って床に磔にされていたのです。

もう、何をされても全く無抵抗でした。緋沙絵はそれをいいことにして、乱暴にかあさんの帯を解き、着物の前をはだけるではありませんか。そして腰紐も抜きとられ長襦袢の前がひらかれると、もうかあさんの胸は丸出しとなってしまうました。その上、緋沙絵は腰巻の紐にまで手をかけたのです。

——たすけて。もうかんべんして——

かあさんは哀願しました。かあさんはお腰の下には何もつけていなかったのです。けれ



ども、意地悪な緋沙絵は、かあさんの恥かしさなど少しも気にならない風でした。とうとう、それを抜きとって、誇らしげに打ち振るではありませんか。まるで闘牛士が赤い布をふりまわすように見えました。その下で、かあさんはみじめに張り伸ばされた裸身を、ちぢめることさえ出来ずに慄えていたのです」

「緋沙絵は、それから土蔵の外へ出て行きましたが、暫くすると、びっくりする程大きな犬を引いて戻って来ました。犬のきらいなかあさんは、それだけでも身体中の血がスーッとなくなってしまうような気がしました。

犬はかあさんを見て、ひくくうなりました。腹の底にひびくような声でした。

——もっと早く始末をつけてあげようと思っ  
てたんだけど、この犬の都合で今日になってしまったのよ——

かあさんは、まだ緋沙絵がどんなことを企てているか予想が付きませんでした。それで犬を外に出してくれるように頼みました。

緋沙絵はセセラ笑って、

——この犬は、グレート・デーンといって世界一大きな種類なの。もちろん、血統書もついているし、利巧で身体も丈夫だし。アンタ

の夫としてはずかしくないとと思うわ。つまり、正義さんの代りに、この犬をアンタにあげようというのよ。よくって?——

——いりません。犬なんかきらいです。——  
かあさんは叫びました。

——困ったわねえ。——

緋沙絵はますます楽しそうでした。

——でも、犬の方がアンタを好きだっていつてのよ。どうする?——

いつの間にか緋沙絵は、細いバターをとり出して、かあさんの太腿の内側にぬたくりはじめました。くすぐったさに、かあさんは身をよじって逃げようとしたが、固定されているので、どうすることも出来ません。屈辱の極とは、このことでしょうか。かあさんは、歯がみをしましたが、ほんとうにこの恐ろしい行為を避けることさえ出来なかったのです。しかし、それでもまだまだ序の口だったといわなければなりません」

「それからのことは、かあさんには、あまりのことを書く勇気がありません。でも、かあさんの受けたはずかしめを、明さん、あなたに知っていて貰わねばならないので、恥を忍んで概略をしるすことにします」

「バターを塗られてしまった内腿のあたりを犬がペロペロなめるのを幽かに覚えているだけで、かあさんは気絶してしまっただけです。今想い出しても、ゾツとするようなことでした。おそろしさとかすぐったさで、死んでしまった方が余程楽だったとさえ思ったことでした。

気がつくと、すぐそばで、犬が舌をダラリとたれて、よだれを流しながら、ハアハア言っております。ギラギラするスポットライトが四方から無残な凌辱を受けた、かあさんの全身を照らしておりました。

そうであっても、かあさんには、まだ事態が呑みこめませんでした。すると、暗いかげから、十六ミリの撮映機を持った緋沙絵が近づいて来て、こういうではありませんか。

——素敵だったわ、おめでとう。アンタこの犬との一部始終は私がフィルムの中に入れておいてあげたわ。いずれ見せてあげるわね——

何ということでしょう。全身の血が逆流するようでした。気が違わないのが不思議な位でした。犬にひっかかれたものでしょうか、乳房や横腹のあたりに、たくさんのみみずば



れができて、血がにじんで  
おりました。

「緋沙絵の拷問は、これでも  
終りませんでした。疲れ  
果てたかあさんは、後手に  
縛り直される時も、何の手  
向いもできなかったのだ  
す。

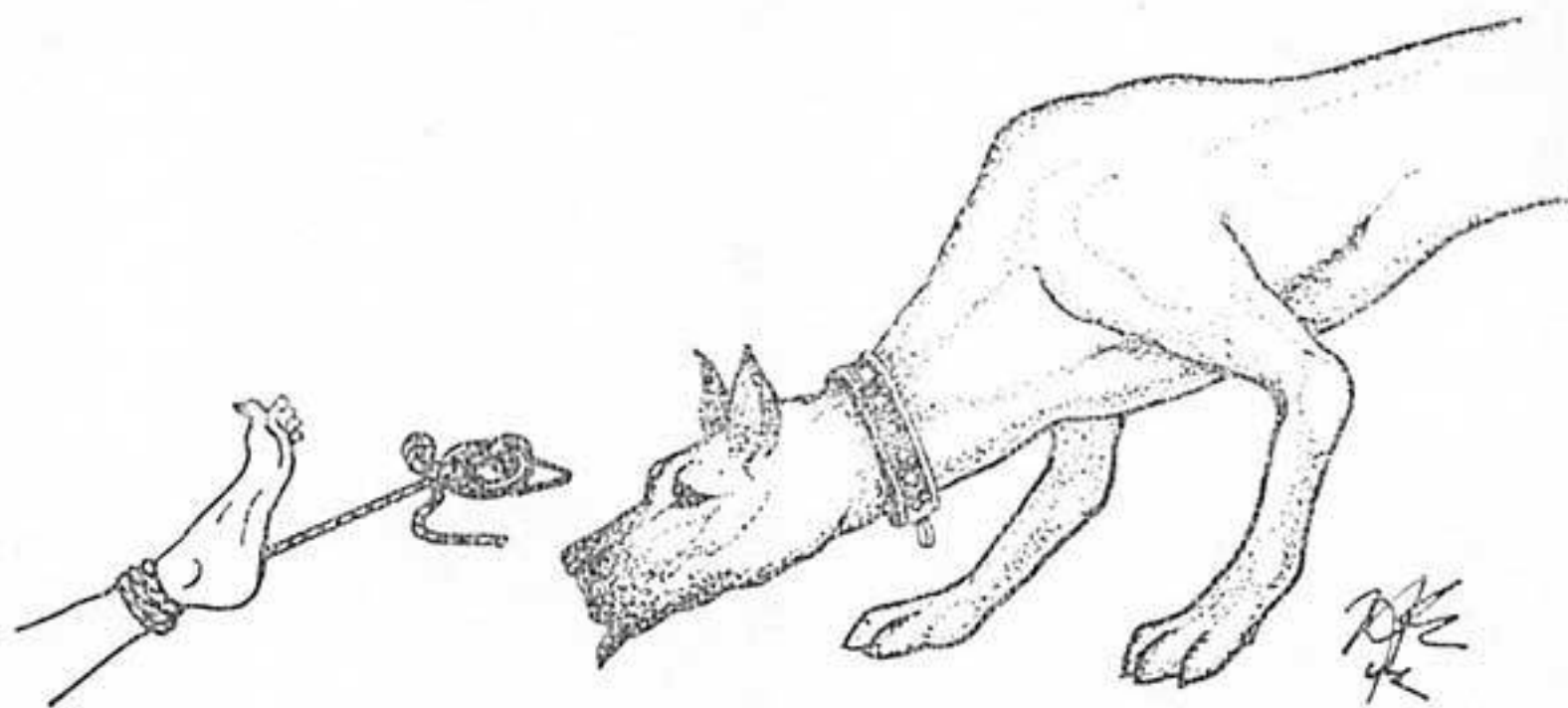
かあさんの身にまとい  
いたものは、全部一まとめ  
にまるめて、部屋の隅に投  
げ棄てられました。する  
と、どういう訓練を受けて  
いたのでしょうか、犬がそ  
こへ行つて、片脚をあげて  
放尿するではありません  
か。

部屋のまん中に、きたらしい瑠璃びきの  
ボールがおかれました。中には残飯らしいの  
に味噌汁がかけられ、煮干しが二、三尾のせ  
てありました。犬の食事なのです。

それを、かあさんに喰べろというのです。

——いやです。あんまりじゃありませんか。

あなたはそれでも人間ですか——



さすがのかあさんも、腹が立っ  
て、思わずこう叫びました。する  
と、

——おや、アンタはこの犬の奥さ  
んじやないの。夫唱婦随というで  
しょ。それとも、ダンナさんの喰  
べるものでは、嫌だという積り？  
いいわ、それなら明をここへ連れ  
て来てあげるから。明に、アンタの  
無様な姿を見せたいと思うの——

緋沙絵にはこういう奥の手があ  
ったのでした。かあさんは屈服す  
る他はありませんでした。手をつ  
かわずに、犬のようにして喰べろ  
というのです。しかも、その有様  
を十六ミリに撮ろうと待ちかまえ  
ているのです。情けなくて、もう  
涙も出ませんでした。おそろ、お  
そろ汚らしい容器に口を持って行きまし  
た。

犬が低く吼えました。緋沙絵が繋ぎとめて  
おかなかつたら飛びかかってきたかも知れま  
せん。

——ごらん。アンタが先に喰べようとするか  
ら、御主人が怒っているじゃない。——

わらいながら言う緋沙絵は、美しい鬼でし  
た。先ず犬に与えて、その喰い残しを喰べさ  
せられたのです。そして、かあさんが顔中を  
飯粒だらけにしたのが可笑しいといつては、  
ケラケラと笑いこけるのでした。

次は、もつとはずかしいことをさせられま  
した。かあさんの着物の上に、犬のように用  
を足せという命令なのです。あなたのことに  
かこつけて脅迫されては、恥をしのんで従う  
他はありませんでした。かあさんの衣類は、  
犬のと、かあさん自身ので二重に穢がされて  
しまったのです。そして、撮影機がジーツと  
廻る音を聞きながら、かあさんは又、気を喪  
つてしまいました」

「かあさんが意識を回復した時は、もう夕方  
でした。緋沙絵も犬もいなくなっていました  
た。両手も自由になっていました。かあさん  
は逃げようとしたが、何も着ていないの  
に気がついて、あわててあたりを見廻しまし  
た。しかし、例のビショ濡れの着物しかあり  
ませんでした。仕様がなから、反吐が出そ  
うなのを我慢して、それを纏い、人に見つか  
らないよう、かくれるようにして家に帰った  
のです。タクシーを拾うことさえ出来ず、小



一時間もあるいて、やっと家にたどりついたのです」

「明さん、かあさんの受けた苦しみは、こんなことだったのです。いつか、あなたが大きくなって、このことを知ったら、きっと憎むべき三島正義と緋沙絵夫婦に復讐してくれるでしょう。かあさんは、それだけを願って死んで行きます。」

緋沙絵の悪どくみは、かあさんの浅ましい姿をフィルムに収めて、一方ではまだかあさんに幾分未練を残している正義を完全にきりめさせ、一方では、かあさんの反抗を徹底的に封じてしまったのです」

「ほんとうは、かあさんは自分の手で復讐をしたいのですが、今となってはその気力がありません。汚された自分の身体に愛想がつきてしまいました。どうしても、かあさんは生きてはいられません。明さん、あなたにはきつと苦勞をかけることでしょうか、哀れなかあさんの気持を考えて、どうか許して下さいね」

「このお手紙は嚴重に封印の上、民生委員の

おじさんをお願いして、あなたが成人になったとき渡していただくようにします。もし、これがあなたの手にわたらなかったら、それも天命だと思ってあきらめます。しかし、あなたはきつと、この手紙を読んでくれるだろうと信じています」

「かあさんは、畜生にされたこの肉体を憎んでいます。ですから、自分自身の手で焼きはらってしまおうと決心したのです。世間の人には、かあさんのことを気狂いだと言うかも知れません。その人たちは、かあさんの受けた心の創が、どんなものか知らないからです」

「ではさようなら。あなたが丈夫で、立派に成人することを、かあさんは草葉のかげから必らず見守っています」

昭和二十二年×月×日

母より

明さんへ

## テグス糸

新藤明は、母の遺書を一気に読み終えてしまった。双頬を伝う涙を拭いもせず、キツと緋沙絵夫人をにらむ、そのまなざしにはあらたな憎悪の火が燃えさかるかのようにだった。

今はもう、とことんまで打ちのめされてしまった緋沙絵夫人である。因果応報というが若気のふとしたいたずらが、こうまで正確に身に報いて来ようとは、夢にも思わなかったのだった。

「母が何故、身体にガソリンをかけて焼身自殺したか、おまえにもやっとなかって来たらう。母が狂っていたか、いなかったか、サア、返事をしてみろ」

弱々しく緋沙絵夫人が答える。

「いいえ。すべてが、私の罪です。私が、あなたのお母さまをはずかしめ、そして死に追いやったのです。しかし、どうか、どうか恵利香だけは助けてやって下さい。あの子には何の罪もないのですから」

「おまえは、子供の私をオトリにして母を脅迫した。目には目ということがある。今、恵利香の事で苦しむのも当然の報いではないのか」

全身を打ち慄わせながら、緋沙絵夫人はヒステリックに叫んだ。

「私があなたに何をしたというんです。私が脅したのは口だけだった。あなたは、私の仕打ち以上にむごいことをしているじゃありませんか」



「あたりまえさ。借りた金にはチャンと利息をつけなくっちゃね」

平然とした答えがハネ返ってくる。

「どうしても恵利香まで巻添えになさるお積りなのでしょうか」

悲歎にくれる緋沙絵夫人を真向から見据えながら、新藤は言った。

「一回だけ、恵利香を自由にする機会を与えてやろう」

「えっ、本当ですか」

身を乗り出す緋沙絵夫人は、

「どんな、どんなことでもいたしますから、

恵利香をお助け下さい」

と額を床につけんばかりに平伏する。

新藤は続けた。

「私はおまえを一旦、国へ帰してやる。おまえには、そこで私の命令通りの事をして貰わなくてはならん。つまり、大株主、且つ取締役であるおまえが緊急役員会を招集するのだ。そして、その取締役会の席上で三島社長を解任するのだ。次に三島名義の一切の資産を処分させる。現在の邸宅は施設に寄附し、どこか郊外の小住宅に引越すこと。三島の権利財産の一切をハギ取った上で、三島を離婚すること。離婚条件は十分にある。私が調査



したところに依れば、彼の非行の証拠がハッキリしているからだ」

緋沙絵夫人は、アッケにとられたように新藤の顔を見上げた。誇り高い彼女は、夫が自分以外の女と交渉を持つことはあり得ない

と、頭から信じていた。ドス黒い疑惑の雲がむらむらと持ち上ってくる。

「どうかね。これだけのことを完全に果したら、恵利香は許してやる」

齒をガチガチ言わせていた緋沙絵夫人は、憤然として答えた。

「約束します」

「よし。そうときまったら善は急げだ。すぐに出発しようか。おっと、恵利香のことをすっかり忘れてしまっていた」

新藤が、緋沙絵夫人をC室に待たして、再びD室に戻ると、もう一時間にもなろうというのに、恵利香は依然としてペダルを踏んでいた。サドルのない自転車乗りは、平衡を保つだけで極度に体力を消耗する。恵利香の肌は油汗にまみれ、異様なハイライトでキラキラと輝いていた。プリプリと揺れる乳房、小休みも許されない全身の筋肉は、もう疲労が限界点に達したことを示していた。

ズカズカと近寄った新藤は、タコメーターの鍵を開き、記録紙を入念に検査した後、満足そうに恵利香の尻をたたいて、  
「えらい、えらい。少しもミスをしていないな。もう止めていい」



その刹那、倒れ落ちるように床にくずおれた惠利香は、肩で大きく息をはずませながら、苦しげに転り廻るばかりであった。

そんな惠利香を黙って見ていた新藤は、しばらくして言った。

「又、二、三日留守をしなければならぬ。例によって宿題を出しておこう。今度はこの自転車乗りだ。いいね。八時間は自由にしていよう。しかし、あとの十六時間はペダルを踏んでいなければならない。但し、四時間毎に一回休んでよろしい。その都度缶詰の流動食が出てくる。これを残さずに喰べてしまふんだ。入浴は許可しない。排泄はすべてポリ袋に一回宛とって、マジックで時間と番号をかいしておくこと。これは、あとで検査するぞ。睡眠は床にゴロ寝してよろしい。朝夕のおつとめはテープへ吹き込んでおけ。わかったね」

やっと呼吸のおさまった惠利香は、怨ずるような眼差しで新藤をふり仰ぎながら、徐々に起き上って正坐すると、

「かしこまりました。一生懸命に致します」と丁寧に誓うのである。新藤がいなくなるのは、前には嬉しいと思ったが、近頃は何故

か物足りなく、かえって淋しいような気さえするようになってしまった。外面ばかりか、内面でも、不可思議な変容が行われつつあったのである。

部屋の隅には古めかしいジュースの自動販売器が置いてあって、コインを入れると缶が転り出てくるようになっていた。惠利香が四時間休まずにペダルを踏み、それが予め制限された速度を割らなかったならば、タコメーターに連動したコインストッカーから一個だけコインが落ちてくる。そのコインを銜えて行って自動販売器から一回分の食糧を取るのである。小さい缶の中には栄養と水分の供給だけを目的にして作られたドロドロの食事が入っている。色彩とか味覚とかは全く無視されているので、喰べられたものではない。しかし馴れてくると、惠利香にとっては、そのよく冷えた一口が、何にも代え難い甘露のようになさえ思えてくるのだから、人間の感覚など実にいい加減なものなのである。缶をあけるのは自動販売器についているオープナーで簡単に出来るが飲み干すのは仲々技術を要する。歯で缶の辺を噛んで支え、素早くすすり込んでしまうのである。両手の自由を喪ってから早くも一カ月余り、惠利香はこのような

要領も上手にこなすようになった。

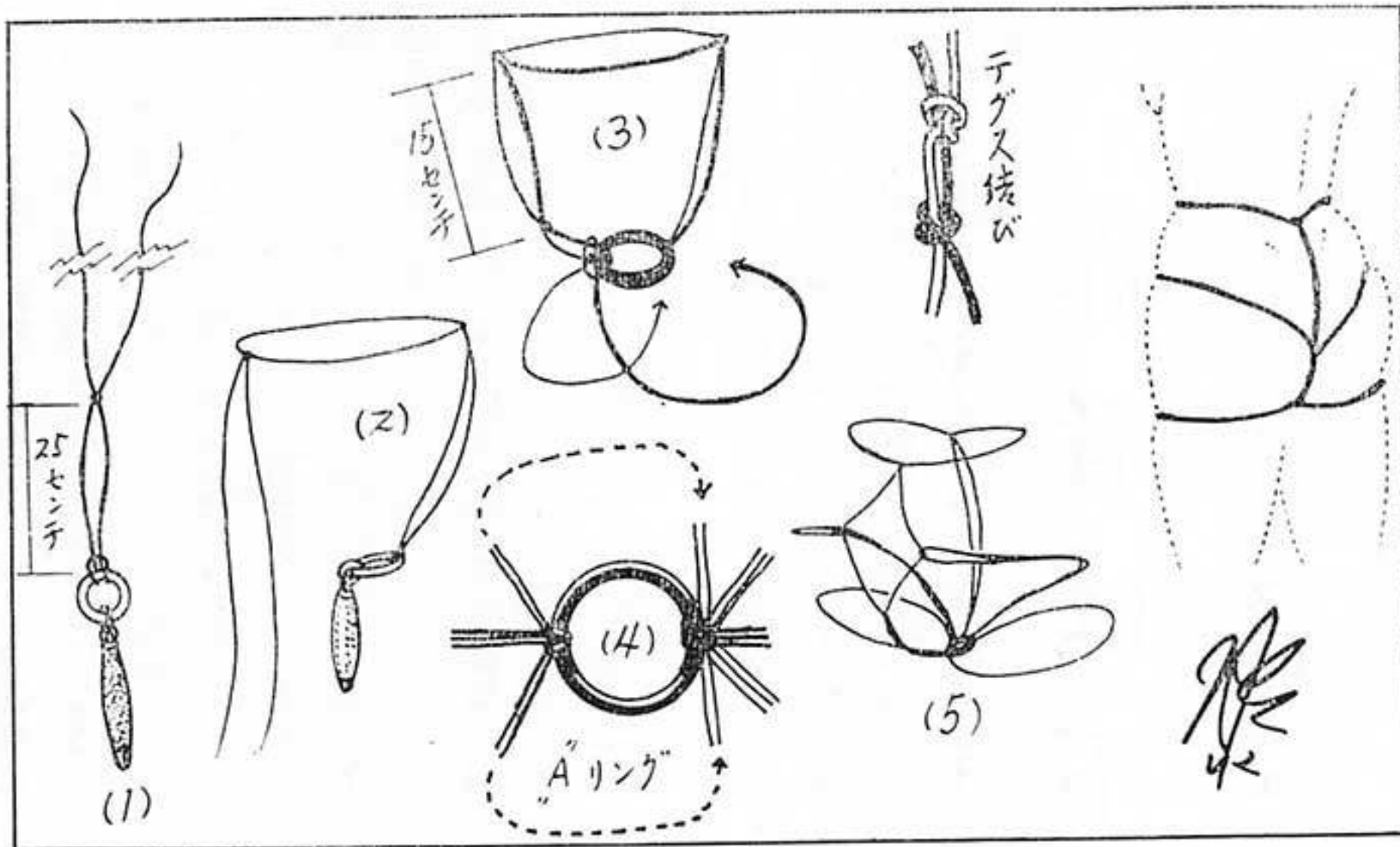
細部に亘る命令を惠利香に与え、その時刻を〇日〇時とした日付時計を壁にかけてから新藤は緋沙絵夫人のところへ戻って行った。

赤い部屋では、柔い絨氈の上にヴォリユームのある裸身を美しく調和させながら緋沙絵夫人が正坐して、物思いにふけていた。

新藤の一言が、緋沙絵夫人をグサリと突き刺していたのである。どんなに拷問されてもそれは肉体に関してであって、心にまで及ぶものではない。心を責めるのには、又、その方法があった。嫉妬は緋沙絵夫人が未だ経験しなかった感情だった。夫に女がいる。そんな事態は夢にも考えていなかっただけに、嫉妬の悪魔に対しては、緋沙絵夫人はまるで無力だったのである。そして、緋沙絵夫人の内心に隠蔽されていたサディスティックな本能が、毒蛇のように鎌首を持ちあげて来た。自分が、これ程までに苦しんでいるのに、又これ程までに惠利香のために犠牲を払おうとしているのに、その間でも彼、三島正義は女を引きこんで、ノホホンと遊び戯れているのだと思うと、どうやって仕返しをしてやろうかと、ドス黒い執念に身内の熱くなるような感



じがしていた。そんなわけで新藤が入って来ても、今までのように恐怖の感情に戦くということがなくなって、ただ一刻も早く与えら



れた使命に進みたいと、はやる心をおさえかねている緋沙絵夫人だったのである。

チラリと見ただけで、新藤には緋沙絵夫人が如何に変わったかがすぐわかった。一個の女夜叉が誕生したことを確認する。

「私は、おまえにノシをつけて帰す積りはない。おまえは私の復讐のカタライザーなんだから。そのことを忘れないように……」

といいながら新藤がとり出したのは長さ十センチばかりの葉巻型のプラスチック円筒と一束のテグス糸だった。プラスチック円筒といっても、実は水洗便所で上から鎖でぶらさげるありふれた把手にすぎない。

「さあ、立つんだ」

考えこんでいた緋沙絵夫人は羞恥を忘れてしまったかのように、言いつけられた通り立ち上った。新藤は器用な手付でプラスチック棒の一端につけてある直径二センチばかりのリングにテグスを結びつけると、先ず二十五センチばかりのところに結び玉をつくった。

「テグスはよくすべるから、テグス結びという特殊な方法がある」

なる程、二本のテグスを夫々結んで一寸引っぱると二つの結び目が喰い合ってキツチリと固定されてしまうのである。

「バカ、早くひろげるんだ」

何をされるかと戦々兢兢々としている緋沙絵夫人は無意識に膝を固く合わせていたのだが、新藤の罵声にギョッとなって脚を開く。

「サア、これをよくなめっておけ」

無理矢理、プラスチックリングが口の中に押し込まれる。否応なく、なめるより方法はない。やがて、新藤はそれを緋沙絵夫人の口から抜きとると、やおら次の段階に移るのであった。

「アッ痛ッ」

刺すような痛みが緋沙絵夫人を襲った。

「動くな。その儘にしている」

二重のテグスが後腰に廻されると、二十五センチの結び玉は正確に脊骨の、ウエストの位置にくる。そこから一本ずつ、細腰の左右を廻して、帯のように前部で結び合わせる。

その結び目は臍のやや上になった。今度は、反対側にタレ下ったテグスの十五センチばかりの位置に結び玉をつけると、その先をリングの前部に通して固定する。テグスは、更に、一本ずつ太腿を廻って、今度は後からリングへ。そこから再び一本ずつ臀部を二分するようにして前へ廻されると、縦になった二重のテグスに夫々、ひっかけて、又後へ廻



し、ギョッと引き絞る。縦のテグスは菱型に割れて、上下を一層しめつけるようになる。

「ア、アッ」

耐え兼ねたように、緋沙絵夫人がウメキ声を洩らす。そんなことには頓着なく、テグスの端をリングへしっかりと結びつけ、余った端を切って棄てる。

「リングはチャンと正しい位置にあるね。絶対にズレない筈だ。用足しの邪魔をしないためだから、*“A”* リングと呼ぶことにしようか」

無遠慮に覗き込みながら新藤が言った。その手にペンチが握られている。テグスの最後の結び目を金冠で覆い、封印を施すためであ

った。

「命令を果して帰ってくるまで、絶対にとるんじゃないぞ。さもないと恵利香を帰さないからな」

又もや、負い目が一つ増えた。細いテグス縛りの縄目は、着物の外からではわからないかも知れぬ。しかし、緋沙絵夫人は昼も夜もこの恥辱の縦縛りがもたらす苦痛を忍ばなければならぬのである。あまりのことに声もなく、緋沙絵夫人はただ天を仰いで歎息するばかりだった。

こんなみじめな想いを堪えながら、夫のもとに帰らねばならないとは……。

緋沙絵夫人は屈辱という言葉の意味を、文

字通り肌で感じ、感覚で知らしめられて、はじめさを噛みしめていた。

「どうだ？ 使命に身が引き締るっていうのは、こういうことをいうんだぜ」

新藤は面白そうに嘲笑した。

「そうそう、三島に土産物を用意したよ」

又、何かの悪だくみであろう。又、難題を持ちかけられはしないか。緋沙絵夫人は、次から次へと出されてくる責め苦に、ともすれば圧しつぶされてしまいそうだった。今はただ、恵利香を救おうという悲願だけが、母性愛の一念だけが、彼女を支えていたと言ってもよいであろう。

(未完)

## 作者は不在？

—「ミスター・エロチスト」の背景—

魔 仁 阿 天 狗

「奇譚クラブ」は、新年号において、団・辻村両氏の対談という呼物記事を筆頭に、四十

三年度の幕を切ったわけだが、一般雑誌界に於ても、これらの文壇にあってはまさしく

「超ヘンタイ」小説の出現、しかも三〇〇枚一挙掲載という話題を盛って新春特大号が刊行された。『別冊・文芸春秋』がそれである。作者は、つとに「鬼才」として名の高い梶山季之氏であり、題名は「ミスター・エロチスト」。

目次に曰く、*「僕はあの美少女の奴隷になりたい。少年期、すでに芽ばえたマゾヒスティックな欲望が、その男の人生に狂い咲かせた悪の華！」*



本文の始めからしてスゴイ？ ね。

“……冒頭から、告白しておく。私は変態性欲者である。俗にいうエッチな男なのだ”

とくる。そして

“……私が犯罪者だと云うことなのである”  
 としている。

この「ミスター・エロチスト」という小説のモチーフは、美少女の奴隷というマゾだけが全篇を通してではなく、主人公、背割皓二郎は「屍姦」もすれば、ゴムマニアでもあり、ネクター趣味があつて、露出欲もある。そして義母を犯すという「近親姦」も経験し、更に女の秘密に対する「ノゾキ」趣味もある。そればかりではなく、男同志の愛に興味を持ち、はては女を鞭打つサド味を発揮する。浣腸も出て来るし、終りには、最後の願望としての「切腹」までついている。

まことに波瀾万丈。血湧き肉躍る？ というか、背割皓二郎といえる人物の生涯は一人でSM百科辞典（なんでもござれ）的活躍するという、オソロシイ物語りである。

更に、この小説は至って親切である。悪書などとは無縁であろうところの「文芸春秋」という「高級雑誌」の読者を意識してか、要

所に、「Sとは何か」「Mとはどういうものか」「変態性欲とは……」などという、至れり尽せりの解説がなされてあり勉強？ 出来ることになっているのである。

こうまでするとなれば作者も、いつものように（筆者註、私見によれば）「独自の構想です」とばかりには構えているわけにもまいらぬというのか文章の終りに「（註）高橋鉄一あぶらぶー、井上泰宏ー犯罪と性。ならびに雑誌（奇譚クラブ）（風俗奇譚）などより、資料を使わせていただきました」と、チャンとことわり書きが付けてある。

この一文は「作品論」でも「作家論」でもなく、ただ私としては表題通り、「背景」を寸感して書いていただけである。作家、梶山季之氏の作品は、日頃から高く評価し、敬愛の念を持って拝読させて貰っている一人であるが、この「ミスター・エロチスト」に関しては、マニアの立場からみて、羊頭狗肉の感がうかがえる。内容のおにぎやかなワリに底の浅いものを感じてしまうのである。

成程、作者の意図はよく判る。変態性欲者——というより、この場合、ズバリ、人間とはまことに複雑怪奇なものだ——といわんと

するのだろうか。その為に、かくもおにぎやかに、これでもか、これでもかとSMのあれこれを主人公に託してご披露されたようであるが、そのラストに於て主人公が用意の白装束姿、短刀の銘は、自慢ではないが国宝級の長曾弥入道虎徹だ。おい、佐知子。お別れだ、そう白眼を剥くな——という場面描写のくだりとなつては、そのサビース過剰ぶりに苦笑を禁じ得なかった。まさに「ミスター・エロチスト」は作者不在といわざるを得ないのである。残念ながら「ことわり書きの各誌の資料」が勝手に踊りまくっているという感じである。

おそらく梶山季之氏としては、まだまだ文壇上では未開拓の分野でもあろうSMの世界と取り組まれ、追求されるお気持ちで、今回の三百枚一挙掲載という快打をなされたものと思うが、その作家的意欲はともかく、惜しむらくはカラ振りの感の拭えないことである。

産業スパイの立役者、背割皓二郎。美少女の奴隷を希むエロチスト、背割皓二郎。雄々しくも割腹して果てる変態性欲者、背割皓二郎。——以て瞑せよというべきか？

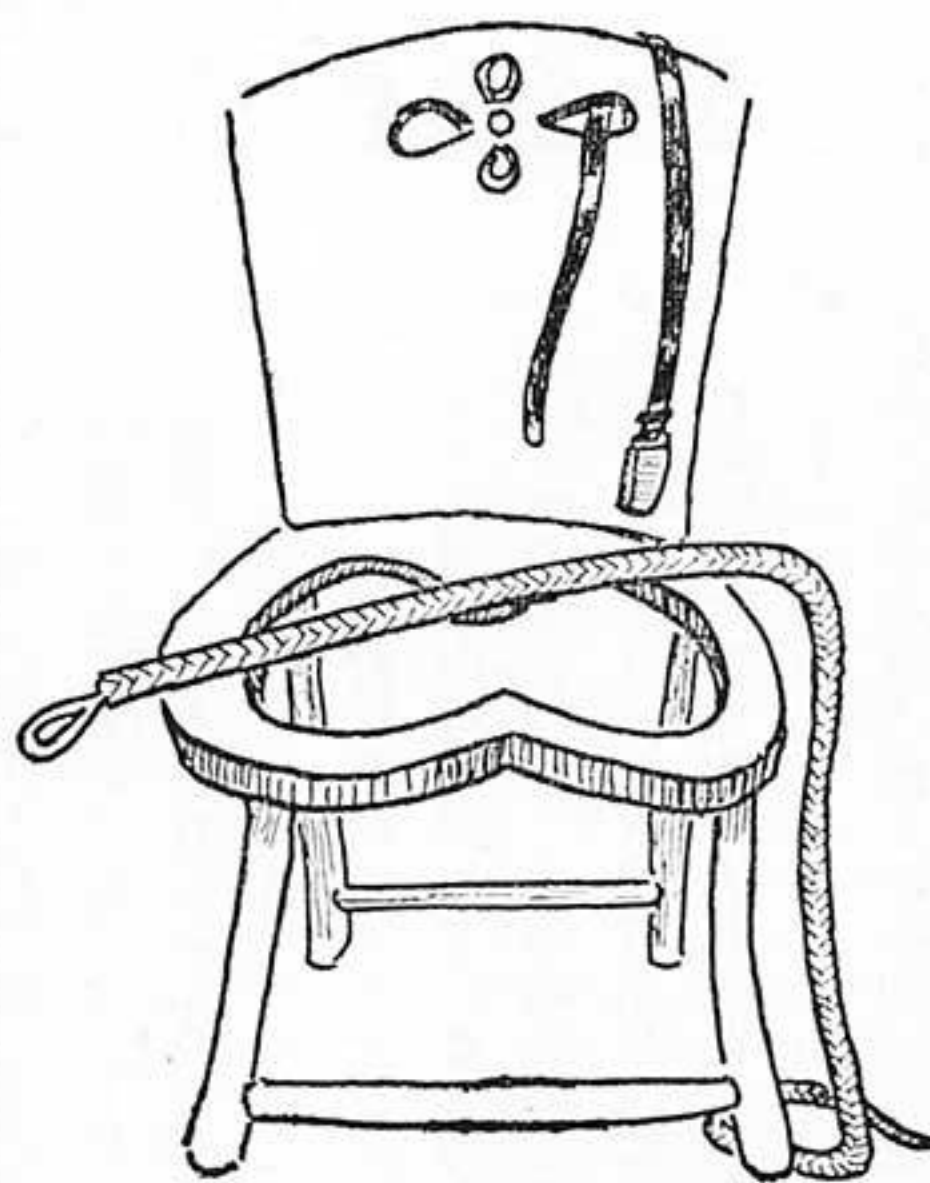
梶山先生の今後の御健筆を期待したい。



# 心傷<sup>こころ</sup>たむ<sup>い</sup>遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

第三十九章 仮釈放審査（四）

西条 操



立ち上がって整列する女囚八名は、まったく疲労し果てて脚もふらつく。やっと済んだと喜んだのが二時間ほど前——時計を眺めたレダがニヤリとし、早く終えたのを褒めるどころか、いままでの荒仕上げだよ、とキメつけて、最後の仕上げなるものをやらせたのだ。光り輝やく室内や廊下を盗み見て、女囚たちは悲しい想いだった。汗水垂らして磨き立てたというのに、その自分たちが追い戻されるのは、灰色も佗びしい獄舎の中なのだ。「ま、よく働いた方だったよね。御褒美をあげようかね」

レダの言葉に、女囚たちは眸を輝やかす。「いけないことだけど、ここでシャワー浴びさせたげる。タップリ使わせてあげるから、よく洗いな。でも、洩らしちゃ駄目だよ」女囚たちは、プール付属のシャワー場に追われた。夏の日も暮れ初めて、既にプールには人影もない。左手の手錠がはずされた。「ホラ、どうってことないじゃないの」マリーはそう云って口をとがらせ、手錠取扱い規程違反の嵌め方だったミシュリーヌのを、手際よくはずしたことだった。

女囚たちは囚衣をコンクリート床に畳み、

人数には不足の古タオルと石鹸とを与えられた。肌すり合わせて見回す女囚たちの眸は、壁際に並ぶ化粧台を哀しく盗み見る。

号令一下、女囚たちはシャワーの下に群れた。シャワー器も二つばかり足りないが、時間に制限なしと思うと、喜々として楽しげな声も洩れる。条件反射というか、監舎のシャワー場での癖が出て、女囚たちはこらえるのに懸命だった。

二人の女性が飛び込んで来て、眺めて眉を寄せ、床の囚衣の列を見て憤然とした。制服を半ばひっかけたのはエディス婦人看守で、



もう一人の年増ドレスはミリアム看守だ。

「あんたたち、いままで水遊び？」

「バカ云わないでよ、マリー。お召し物を見たら分かるでしょ？ お部屋のシャワーが調子悪いんだ。イヤなっちゃう。私、これから出勤なのよ」

エデイスは口をとがらせた。

「ベルディーヌ姐御のピンチヒッターね」

「図星。まったく敵わんわあ、あの小母ちゃんには。新兵さんの気持がよく分るウ」

エデイスは嘆声を発してブラジャーを脱いだ。イヴェットもよくシゴかれたものだ。

「ミリアムも緊急出勤？」

「あら、一監は至極平穩なの。立関まで来たらシャワー浴びたくなって。私、これからお散歩。独り静かにお星さま眺めるのよ」

「勝手にしやがれ。ブラジャーのホック、はずしてなんかやるもんか。あれッ、初めっからブラなし！」

マリーがふくれて舌打した。

エデイスとミリアムはシャワーの下に押し入り、女囚たちは肌寄せ合って避けた。

二人は悠々とシャワーを占領し、八人は四つのシャワーの下で身を縮める。

「なにをそんなにこわがってんの？ お互い

に、今は裸じゃないの」

「バカね、エデイスは。裸になったときでもさ、なおかつ、エヘン、その——受刑者を畏怖せしめるってわけ。そのくらいの気概を持たなきゃ」

「お星さまがそう云ったのね。あら、なんだか匂うわ。粗相したのが居るんじゃないの？」

エデイスとミリアムは手早く浴び終えた。

「お前たち、ヘアカバー要らない？」

とエデイスが自分の頭から除って振る。

「おシメカバーの方がいいんだって。ホホ」もちろん女囚たちは尻込みし、レダが雷を落とした。笑ったミリアムまでが驚いて、大きな乳房をブルブルさせた。

「いい加減におしよッ。いつまで遊んでるのよ。夕食が処分されちゃっても知らんよ」

エデイスとミリアムは化粧台に、女囚の群はコンクリート床で体を拭う。

「ミリアムは、バストいくらあるの？」

「九十六。かけ値なしよ。羨ましい？ 引き締ってて恰好もいいしね」

だからミリアムはブラジャーなしを好む。「タオルをおいてッ」

女囚たちは、奪い合っていた古タオルを床においた。内腿のあたりを拭っていたのも、濡れた髪をこすっていたのも、それはそのままに古タオルを手離す。命令には、絶対の服従があるのみだ。

「脚をひろげて、両手をあげるッ」女囚たちは、狭い脱衣場のコンクリート土間の上で、命令のままに「火」の字の姿勢を取った。

「回れ右。両手を床に突いてッ」

「スゴク厳格なのね」

と、ミリアムが化粧台から振り向き、全裸の胸あたりに化粧水を匂やかにすり込んだ。

「ま、ここにや、ダイヤモンドがあちこちに散らばってるものね、フッフ」

「あら」と、エデイスが扇風機を弱める。

「だってミリアム。ホラ、こないだのプール掃除に来た赤縞、アメ玉を体に隠してたじゃないの。絶対に信用は出来ないわよ」

「ま、ともかく、大きな愛情で接してやらなきゃ。ちょっとクシ貸して。そうすりゃ、いくら女囚だって、信頼に応えてくれるわよ」

「甘いね、ミリアムは。いいこと？ 刑罰の方が更生とやらより先なのよ。そしてね、刑罰ってものは、要するに、報復と憎悪を正当化したものなの。分かる？ 私はきびしいんだから。凛々しき社会正義の女神——」



エディスは椅子を離れ、くしけずるミリアムのグラマーぶりを横目で見やった。

「ああら！ なるほど。分ったわ、あんたがおセンチになったわけが——。こんどのロマンスはホンモノらしいわね」

ミリアムは、あわてて、乳房のキスマークを手で押えた。

「よしッ。立て。着衣ッ」

女囚たちは床の囚衣を拾いあげる。ミリアムも立ちあがって、脱衣籠に手を延ばした。エディスは既にパンティを穿き、ブラジャーを当てがってミリアムに背を向ける。

「厄介なものを使ってるのね」

ミリアムは誇らかに云い、ナイロンパンティを片手に、ホックを留めてやった。

女囚たちはそんな二人に向かい合い、哀しげに盗み見て眸を伏せる。穿かされる下穿きは木綿の青灰色——パンティとはおろか、ラニンングパンツとも云えぬ不恰好さだ。

ミシュリーヌも微かに鼻を嚙り、恥かしいモンペに両脚を包んだ。

「ミリアム。あんたのコレット、ずいぶんと念が入ってるじゃない？ この暑いのに御苦労さまだこと。どんなお星さまに逢いに行くのやら——。手伝ってあげようか？」

と、こんどは、エディスが巻き返す。

「私なんか、コレット要らないわ。ガードルだけで沢山なの。どう？ この腰の線」

エディスはシームレス靴下を手際よく穿き終え、ガードルに吊り、脚動かして具合を試した。ミリアムはコレットを入念に締めあげる。御自慢のバストとはちがって、彼女のおヒップは少し垂れ下がり気味だ。それを気にしているミリアムだが、自称お散歩ぐらいのことで、上は無防備、下は用心堅固——御苦労さまだ仕儀であった。

元秘書嬢が赤縞上衣をかぶり、その中で鳴咽を洩らした。ほかの女囚たちもまつげをしばたく。化粧台の鏡に映って、みじめな我が姿がイヤでも見えてしまうのだ。

「みんなショげ返っちゃって。ま、気持は分かるけど——。ま、いまのその気持を忘れなようにすることだわ」

エディスは女囚たちを眺めながら、シワひとつないスカートを穿いた。

「あらッ。これ、ゼーんぶウチのコたちだったのね。マジリっけなし——」と、ピカピカの靴を履く。

レダがジロリと見た。

「しっかりおしよ。ほかの家のコをマリーが

世話すると思う？ 非番ボケしないで」

「でもねえ」とミリアムがドレスをかぶる。

「女心の哀しさを掻き立てちゃったわね」

ミリアムはムッチリと白い首に、黒水晶のネックレスを垂らした。

「仕方ないじゃない？ 囚人が娑婆を見りゃ切ないに決まってるわ。その切なさを肝に銘じさせなきゃ——」

エディスは事もなげに云い、襟元の純白を重ね直すべく、鏡に向って小首をかしげた。

レダとマリーが小さな錠を四個ずつ持ち、女囚たちは腰切れ上衣の裾をかかげ持った。情けなくもみじめなモンペの錠——中年女囚がホロリと泣いた。八つの錠前が冷たく光って、それぞれの腹部にカチリとぶらさがる。

「上衣を押えてッ」

号令は上品だが、つまり、切なくもみじめな股布を締めあげる、ということだ。

「じゃ、お先に。お気をつけ遊ばして——」

「あらッ、エディスったら」

マリーが口をとがらせた。

「仕事々々——。若い者は精出さなきゃ」

ミリアムは笑ってエディスのお尻を叩き、ドレスの裾ひるがえして立ち去った。

「どうせ帰るんでしょ？ 手伝ってよ」



「あら、行くんだわよ。私は女囚じゃない」

エデイスは不承々に留まった。まったく近頃の若手と来たら、ドライで困まる。

「暑いわね。それに、ここは狭いし」

「そうね。みんなおいでッ」

マリーとエデイスが手錠や捕縄を集め、女囚たちは両手を背に回した。

テラスの前で横一列に立ち並び、その眼の前で、マリーたちが捕縄を手錠に結ぶ。

獄衣は汗ばんで暑苦しいが、シャワーの蔭でサッパリした。それに、ミシュリーヌですらも盗み飲みをやらかしたのだ。女囚たちは夕風に吹かれつつ戒具を待つのだった。

「さ、手を出せえ」

マリーとエデイスが両端から嵌めて行く。

寮主任女史が宵の衣更えをして現われた。

「おや、どこへ行ってたの？ 帰ったのかと思っただわ。済んだのかえ？ アリス」

「ええ、まあね」

と、アリスは作業監督気取りだった。

「そうかい。ホント、隅々まで舐めたみたいになっちまった。近頃の女中だったら二十人で三日はかかるとこだよ」

女史は見回して感心し、女囚の列を見やっ  
て眉をひそめる。

「だけど、ホントに可哀想なもんだこと。い

くら懲役女だとはいえ、丸一日をふうふう云って働いて、やっとこさ済んだと思ったら、もう——。御覧よ、アリス。みんな疲れ切っちゃってサ、ふらふらじゃないか」

「そうね。どうか手錠入れて下さいって、両手そろえて待ってるのね。いじらしくって涙が出ちゃう光景。でもさ、ワン公だって気の利いた犬なら、そとへ連れ出して貰うときには自分の首環と鎖をくわえて来るわね。ともかく、あの音ってスゴク小気味がいいじゃない？」

ミシュリーヌはエデイスの制服を迎えて、そろえた両手をさらに持ちあげ、嵌め易いように手首を動かした。

こんなものをば両手に光らせることなく道を歩ける日が、果して近くやって来るのだろうか。それとも、今年の冬もまた——。

ミシュリーヌは涙を滲ませ、両手首にまつわった鋼鉄環をじっと見詰め、それに結ばれた捕縄を握って両手をおろした。

「回れ右ッ」

握らされた捕縄を背後から取り上げられ、きつく腰縄を打たれる。そして、太いロープで後ろ腰を珠数繋ぎだ。

「まあ云って見りゃ、荷造りとおんなじね。女奴隷の荷造り」

「さっきからなんてこと云うの？ アリス。あのひとたちの気持ちにもなっておやりなね。だけど、ホント、わるいことは出来ないよね。親御さんが見たらどんな心地かしら？」  
「子持ちの人もいるわよ。自分の子供にだけは見せたくない姿よね。でも、なんの心配もなくって、気楽な境涯かもね、あんなつまえ  
ば」

捕縄とロープを使つての連縛は手間がかかる。それをやっているのがマリーと新米娘だから、手錠をガチャリとやられてからの時間が永い。二、三人が啜りあげ、背を丸めて、両手に音を立てた。縛しめを受けるときには身動き一つ許されない身だが、親御だの子供だのと胸抉られたので、さしぐむ涙をこらえかねたのだ。無理心中娘の三五八号が忍び泣いた。

「じっとしてなさいッ。バカね」

「——す、すみません」

中年女囚がお尻を撲られ、後ろ腰ゆすぶるエデイスに詫びた。

「まあまあ！ 哀れなもんだこと。だけど、観念し切っちゃって——」



と、丸々と肥えたエプロン姿が現われた。  
「おや、名コックさん。あんたがいま台所を離れていいのかい？」

「もう、ゼーんぶ完了。デザートまで――」

おあとはウェイトレスとワンピースの仕事」

「そうかい。ま、今夜は簡単なものね」

「ね、こんなの、亭主が見たらどんなだろ？ 殴り込みヤラかすんじゃないかね。頭に来ちゃうよね、きっと。看守さんが男だったら血の雨が降るわよ」

こんどは亭主と来る。男恋しの啜り泣きが洩れた。

「そんな男をつかまえてりゃ、こんな浅間しい姿になるもんか。そうだろ？ アリス」

アリスは舌を出した。恋人もある年頃だ。

「こうされて牢屋へ連れ戻されるんだよね。味気なからうじゃないか」

「あら。ほかに帰るところがある？ あったりまえのコンコンチキのこと云わないで」

「アイスクリームを取っというてやらないよ、アリス。だけど、ああして諦め切ってサ、ションボリおとなしくしてるけど、さぞかし逃げたいことだろうねえ。到底、逃げ切れやしないけどね」

「経験がおりなの？」

「撲るよッ。でもさ、人間と生まれて、あんなザマにだけはなりたくないもんだ。ほんの歩いて十分ほどのとこじゃないの。あんなにまできびしくないでもよかろうにねえ」

聞きつけたレダがジロリと睨んだ。

「余計なお節介はおよし。規則なんだから。しめっぽくなっちゃって困るねえ。そんな同情の仕方は百害あって一利なしだよ。お前さん、どこからお給料貰ってンだい」

コック女は首をすくめた。

「いいかい？ 刑罰ってものは厳粛なものなんだ。よく考えてごらん。こうして縛ってやるのも、結局は当人たちのためなのよッ」

レダは言葉も峻しい。おおかた、ロハの料理のことで小競合いでもしたのだろう。

「私たちだって、神妙にしてる人間を縛り上げたかないさ。でもね、責任のない連中が何と思おうと、私たちの手は固いんだよ。社会防衛の責任があるんだ。もちろん、その人間を憎んでるんじゃないから誤解しないで。憎んでるのはその罪なんだ。厳正なものさ、私たちは。たとえば、あのマリーがさ――」

マリーは最後の後ろ腰にロープを結び終えて、エディスと二人で点検し初め、自信のない二人とて、ゆすぶって調べている。

「――あのマリーが轢き逃げでもしてさ、二年ほど喰らい込んでここへ来たとするねー」  
「ま！ 縁起でもないこと云わないでよッ」  
「でもマリー。充分にあり得ることよ。そのときには、お気の毒だけど――」

と、エディスがミシュリーヌの腰縄をゆすぶった。レダがウンとうなずく。

「そうとも。そのときだって、私たちは誓って厳正なもんさ。絶対なる法の執行者だよ」

「マリー。車なんか売っちゃった方がよくってよ。私を悲しませないでね。轢き逃げは助からないわよ。実刑は請け合いだもん」

「うるさいわねえ。さあ、済んだわ。私、汗掻いて気持ち悪いから――」。厳正なお役人さんも付き合わないこと？ シャワーよ」

「そうだね。どうせ、おそくなりついにか」

レダとマリーは立ち去り、女囚の列はそのまま待たされた。どの背中にも疲労が濃い。寮主任女史はその列の背を眺めていたが、やがて、前に回って来て云った。

「ほんとに御苦労さまだったわね。悲しいだろうけど辛抱して勤めるのよ。そして、早くワンピース着せて貰ってここへ来なさいな」  
女囚たちは期せずしてホロリとした。こんな服を着せられてこのかた、どんな苦役をや



り通したとて、ついぞ、ねぎらって貰えたためしなどはない身なのであった。

エデイスとアリスだけになり、若い娘二人が君臨した。

「こら、みんなッ。列が曲ってる」

「間隔もそろってないようヨ。ダラけてる」

女囚たちは前後左右に僅かずつ動いた。

「なによッ、溜息なんか吐いて。ダラダラすると眼から火が出るわよッ。こらッ、十センチ左ヘッ。ウスノロったら——」

中年女囚のふくらぎに、マリーから借り受けたエデイスの竹笞がしたたかに鳴った。

「まあ！ エデイスったら。痛かったわよ、いまのは。悲鳴が絶え入ってるじゃないの？ みんなヘトヘトなのよ。立ってるのがやっとてくらい」

「ダラけてるって云ったのは誰？ この赤縞たちが疲れてるって？ そんな理由になるもんか。私は勇氣凛々なんだから。これッ、姿勢が悪いよッ。頭を立てて、肩を引いて」

「まるで教練ね。『氣をつけ』のお稽古」

「正しい姿勢を叩き込んでやるのが肝心なのよ。健全な精神は確固たる姿勢から、よ」

「さっき、誰かに聞かされたセリフだわ」

「こらッ、膝が離れてるよッ。バカ」

エデイスの竹笞が夕風を截って、女囚たちのふくらぎに片端から鳴った。珠数繋ぎたちは悲鳴を耐え忍ぶ。一声ヒーツとでも洩らせば、それを理由にまたも笞が降るのだ。膝

の間を竹笞がシゴいて回った。

「ずいぶんと荒れてるじゃない？」

「そりゃそうよ。今夜はゆっくりと骨休めするつもりだったのが……。腹が立ったら、もうホントに。大学を出てりゃなあ」

「憂さ晴らしのハツ当りなのね。赤縞さんたち、いいツラの皮。ホホホ」

二人は声を低めているつもりだろうが、女囚たちにも筒抜けに聞える。

「こいつたち、どうしてもダメね。こらッ」

膝の隙間を見付けられて、二、三人がシバキあげられ、哀れな悲鳴が糸を引いた。

とうとう、全員の膝に小石が挟まれた。脚線の悪い女囚には大きな目の石だ。

「落としたら食事ヌキよッ」

エデイス婦人看守は威丈高に云い放ち、笞を振り振り、列の前に回った。女囚たちは泣きたい想いを胸に噛み締め、疲れ切った両脚に力をこめる。ガニ股の女はひとしお辛い。

「アゴを引いてッ」

中年女囚が竹笞で顎を小突かれた。

「足先二米の地面を見る。目の玉を動かさしやいけないッ。不動の姿勢よ。こら、どこ見てるの？」

元秘書嬢の頬に笞が飛び、膝の小石が落ちた。笞の痛みと失態の恐怖に、若い女囚は泣き声を絞る。腕が悶え、腰縄がめり込んだ。

「——カンニンして——おゆるし下さいましッ。御飯を抜かないで。せめてパンと水だけは——お、おねがいです、エデイスさま」

「うるさいわね。ともかく拾いなさいッ」

女囚は懸命に屈み込み、やっと小石を指先に拾い、膝に戻そうとして手錠を鳴らせた。アリスが笑い声を立てて寄り、挟み込んでやってお尻を叩き、さらに笑った。

「みんなッ、手指を延ばしてッ」

十六本の腕が悶えて、手錠が音を立てる。

指がそろっていないとて、またしても中年女囚の手の甲に笞が降った。

「おや？ そのツラと眼付きはなァに？」

「——す、すみません」

「その流し目は何かって訊いてるのよッ。バカ。口惜しいのなら口惜しいとお云い。どうなの？ 『斜視』ヤラかして澄まし込もうっていうのね」

「——と、とんでもございません、口惜しい



だなんて、そんな大それたことは……」

「フン。ま、そりゃ情けないだろねえ。四十も過ぎたお前が、はたちそこそこの小娘にキリキリ舞いさせられて、ピシピシ絞られてんだからね。正直にお云い。胸が煮えてるんじゃないかって？　こらッ、背骨が曲ってる」

こんどは肩口を打ち据えられて、中年女囚は声もなく呻いた。

「え？　どうなの？　いまの眼付きを説明しなさいッ。命令よ」

エディスはしつこく責める。八ツ当り大安売りの槍玉にあげられたのが身の不運だ。こんなにシゴかれて痛い目に逢えば、大抵の女囚が恨めしげにするものだ。

「——は、はい——私は刑に服している女でございます——ですから——」

中年女囚は眸を伏せて涙をこらえ、この小娘制服の御機嫌を損ねることなく切り抜けようと、嗚咽を押えて懸命だ。

「——年なんかいくら違ってたって——ハイ。

もうしわけございません。担当さまはお役人様、私は女囚の身ですもの、身分が違いますわ。この手錠を担当さまに入れて頂いた身でございます。不届きがございましたら叱られて撲られるのが当り前でございます。担当さ

まをお恨みするなど、飛んでもないバチ当りです——もうしわけございません、ハイ。決して、そんなつもりは露ほども——お、おゆるし下さいまし——おゆるしのほどを——」

「そう。ま、分っちゃいるのね。気をつけなさい。模範囚を吹っ飛ばすわよッ」

中年女囚はふるえ上って思わず両手を合掌し、その手の甲にまたしても答が降って、エディスは漸く赦してやった。

「いろんなことを云わされちゃうのねえ、囚人ともなると」と、アリスが首を振った。

ミシュリーヌは不動の姿勢をさらにシャチホコ張り、息をさえ詰めて地面を見詰める。エディスが眼前に立って検分の眼を注いだからだ。スカートがゆらめいて、純白の襟に光るバッジが鼻先に迫った。

「四五三号ッ。このボタンはどうしたのッ」

「——は、はい——」

ミシュリーヌは、わなないて唇を舐める。

「返答できないのねッ」

竹筥が腹部を小突き、こね回し、一転して頬に鳴った。手加減はしているだろうがビンタより痛い。

「——あの——マリーさまに申しあげて、お赦し頂いております。落としたんです。すみ

ません。ほんとにすみません」

「ほんとだね？　ま、お前はウンは吐かないだろうけど。でも、さっきはたしか——」

エディスは小首をかしげた。手錠をかけたときに見付け得なかったのを照れてもいる。

「ウン。その女囚のボタンなら私知ってる。おひるにマリーが撲ってたわよ」

アリスがおくればせに証明してくれた。痛い筥痕が頬に疼くが、そんなことは泣き寝入りだ。そうはいっても、こんな生意気な新米制服に、ベルディーヌですら滅多にはという顔面を、しかも理由もなく筥打たれたのだ。

ミシュリーヌは流石に口惜しくて、齒を喰いしばった。

「あら、そうお」

若い制服娘は事もなげにうなずき、ミシュリーヌの手の甲をピシリと打ち据え、自分の早合点と確認の手落ちとを押しつぶした。

「指が曲ってる。心がねじれてる証拠よッ」

ミシュリーヌは口惜し涙をホロリと落とした。番号で呼ばれる身の悲しさが胸にこたえる。しかし、あのバッジを光らせた人間に対しては、それがどんなに小便臭い小娘とはいえ、絶対の屈伏あるのみ、だった。どんなことがあろうとも、おてんとさまが西から昇る



うとも、金輪際、勝てっこはないのだ。

ミシュリーヌは熱い泪の滲む眸で、自分の両手を見詰めた。冷たく光って喰い入るこの手錠——きつくくびれ込む腰の捕縄——いずれも、このエディスにかけられたものだ。

さっき、中年女囚が哀しく声を詰らせたように、この手錠をかけられた者は、その鍵を持つ人間に向って、眸をあげることもすらもおそれた所業なのだった。

「アリス。この女囚は元伯爵御令室なのよ。いいや、側室だったかしら。ま、どっちだって同じようなんだけど」

「ああら、そうなの、道理で少しは品が良い女だと思ってたわ。へーえ、落ちぶれるにこと欠いて懲役人とは。トコトンまで落ちちゃったのね。服に鍵かけられて、手錠入れられて縄付き」

ミシュリーヌは胸を掻きむしられた。

さらに二人が膝の石を落とし、哀願し竹笥に身をよじり、そして、マリーとレダが戻って来た。いとも爽やかな顔付きだ。

「だいぶ暗くなっちゃった。早いとこぶち込まなきゃ」

「左向けえ左ッ。前へ進め。あらま、石なんか挟ませてたのね」

「こら、ふらふらするんじゃないよッ。いくらヨロメイて見せたって護送車は来やしないんだから。あのくらの働きのでなにさ。シャッキリしな。一日の償いを終えて、繋がれるべきところへ帰るんだらう。喜悦と満足を全身で示すがいい。そうあるべきだよ」

「そんなこと云ったって無理よ、ねええ」  
「うるさいね、アリス。こら、もっとキリキリ歩けないのかい」

レダは革ロープを振り回す。

「今日の労役ぐらいで大きなツラするんじゃないッ。あんなの、ツーロンへ行きゃ朝飯前のことだよ。煉瓦運び、水汲み、石磨き、まあ、お前たちの中で半分はツーロンの飯を食うことになるだろうがね、いずれは——」

珠数繋ぎの列は、灯ともし頃の寮をあとに獄舎へ追われた。女囚たちはいろんな人々とすれ違う——家路を急ぐ娘たち、乳母車を押して散歩の夫婦連れ、くたびれた背広のサラリーマン——。

うなだれて歩む群にすら追い越され、足取りも重そうな中年女性は、売行き思わしからぬセールス・ウーマンの思いあぐねる姿か。

豪華な黒塗りセダンが音もなく追い縋り、重々しい警笛にセールス女性があわてて避け

る。深々と独りシートに埋まると令夫人風が手錠の群を眺め、半月形の眉をひそめた。白いイヴニングドレスに黒色薄物のボレロ——令夫人は夜会にお出ましの御様子だ。

緑に包まれて点在する家々は、或いは窓のすべてが明るく輝き、或いは寂として静まり返る。夕餉の匂いが立ちこめて流れる家、すべての扉や窓々を閉じた住まい——。

珠数繋ぎの列で誰かが啜りあげ、あちこちで鋼鉄の触れ合う音がする。瘦せさらばえた野良犬が一匹、オドオドと道ばたを掠めた。ミシュリーヌも手錠を微かに鳴らせ、そして、深々と溜息を吐いた。

「なにをそんなに思い詰めてるの？ 脱走計画？」

マリーが寄り添って覗き込んだ。

「——い、いえ——すみません」

「叱ってるんじゃないわ。元気出さない。ボタンのことは心配しなくていいのよ」

「はい。ありがとうございます」

ミシュリーヌはもう一度溜息を洩らした。買物かごを重そうに提げた十五、六の少女が息を切らせてすれ違ったからだ。その少女は家が貧しいのか、それとも女中なのであろうか——。賢くそうな大型犬を引張った同じ年



頃の娘が、涼やかなショートパンツで自転車に跨がり、つつましい買物かごを追い抜いて行く。レダが満面に愛想笑いを浮べて、自転車の娘に挨拶した。

「あれ、誰？」

「おや、知らないのかい、エディス。所長のお嬢さんさ。こんどの所長は本省採用の特急組だよ。いずれ、局長は固いね」

「そうお」

と、エディスはうなずいて見送ったが、マリはフンと鼻で笑った。

「——さ、元気出して、なあに、永患らしいたと思や、二年や、三年のことがなによ。すぐに取り戻せるわ。私だって、一度失敗したのよ、結婚にね」

マリ婦人看守は珍らしく自分の古傷に触れる。ミシュリーヌは仄温かいものを感じ、その横顔をちらと見やった。

「そうです!! 人間て、それぞれにいろんなことがございますのね。でも——」

「でも——なアに? 少しは元気出た? 自分だけが不幸だと思ひ込むのは間違いよ。みんな、それぞれに悩みがあるんだから。私だって、うわべは呑気そうにしてるけど——」

「マリさま。よく分りますことよ。でもマ

リーさま。人間の暮らして、ほんとにいろいろと段のあるものですわね。ほんとに、まあ、いろいろと——どうしようもない段が」

女囚はしみじみと云い、眼前の後ろ腰から延びて揺れるロープを見詰めた。

「そうね。今日一日、リビエラあたりで遊び呆ける連中もいるし、アルジェリアの砂漠で虫ケラみたいで、死んで行ったひともあるだろうし」

獄舎の高い塀が見えて来て、中年女囚が脚をもつらせた。その塀に沿って革サンダル引き摺りながら、若い女囚が不意に啖りあげ、手錠を激しく引張り鳴らせた。

「騒ぐんじゃない。何だっていうの? 野良犬よりマシだろ、帰るところがあるんだもの」

エディス婦人看守の竹笞がお尻に飛ぶ。

「あら。ちょっと、エディスったら。それお返しよ。ムヤミヤタラと使わないで——」

マリは竹笞をエディスから取りあげた。

獄門で、守衛がレダに噛みついた。

「おそいじゃないか」

「おや? ちゃんと電話入れたろ?」

「その連絡から、さらに二十分遅れてる」

「まあいいじゃないのさ。適当に頼むわよ」

レダは片眼をつぶって見せ、マリとエデ

イスは我れ閑せずと珠数繋ぎを追い立てた。

——一方、第三監舎の詰所では、イヴェットがヤキモキしていた。

「心配しなくとも、集団逃走の気ずかいはないよ。よしんばそうだったてさ、あんたのお氣に入りのコだけは戻って来てお手々をそろえるね、ホラ、四五三号の別嬪——」

ベルディーヌはそう云いながら、自分もイライラしている。

「代りにエディスが来るんでしょ? お帰りになったら如何?」

「そうは行かないよ。ちゃんと顔を見なきゃね。それに、ちょっと叱ってやらなきゃ」

自分の都合で無理を通して、ベルディーヌはいい気なものだった。

「もう、だいたい暗いわ。日没後、相当経つてます。規程違反ですね。八時間でもきつい労役なのに——」

イヴェットは堪まらなかった。さぞや、ミシュリーヌ奥さまはお飢いことだろう。

「なあに——」ベルディーヌは事もなげだ。

「たまにゃいいよ。餌又キで夜っぴてコキ使ってやるといいんだ。赤旗振ってストライキやる気ずかいはないんだし。労働の尊とさを叩き込んでやらなきゃ——」



電話が鳴り、八名の婦獄が門衛から報らされた。イヴェットは立ってウロウロする。

「なにオタオタしてンだい？」

「いえ、あの——スープを暖めてやったら、  
 と思って——」

ベルディーヌは眼を丸くした。女囚の食事はスープなしが建前で、週に一、二回、与えられたり与えられなかったりが通例なのだったが、コリンヌ課長が予算をふやすことに成功したので、近頃は毎日の夕食にポタージュが出ていた。コリンヌにして見れば、おもて向きのスローガンはスローガンとして、本心は売名が目的だ。さりげなくマスコミに流して名前を活字にして貰うことに成功してもいたし、女囚たちの健康保持に寄与すること大きいという数字をデッチあげもしていた。

「ま、暖めたきゃ暖めな。でも、どこでやるの？　ここでガスを燃やさないでくれよ、暑いから。詰所のレンジは赤竈用じゃない」  
 イヴェットは断行しかねて泣き顔——モレシエンヌが助け舟を出した。

「この暑いのに、熱ウいスープをふうふう啜らせるのもいいじゃない？　イヴェット、構わないからここで暖めちゃいましょう」

二人は広間の長卓からスープを集め、ガス

レンジに火をつけた。これで、ミシユリーヌさまに暖かいスープを差しあげられる。ポタージュの冷めた奴だけは全くまずいものだ。

シチュウもコーヒも、暖めて差しあげたいんですけど、我慢して下さいましね——

イヴェットはあたりを盗み見て、手早く粉チーズをタップリと入れたのだった。

「ふーん。お前さんたち、だいぶ翅が生えそろって来たようだねえ。まだ、ホンモノの天使さまには数が足りないようだけど」

ホンモノの天使マジョーリは、今夜はいない。ベルディーヌは帰り支度を始めた。

「——ま、天使さまの真似もいいだろうよ。いろいろとやって見るこった。でもね、よく考えることだね。いいかえ？　シャバの貧乏暮らしより刑務所の方が楽だ、なんてえことになったらどうなると思う？」

「そうよ」と、キャスリーヌも口を挟んだ。

「——週刊誌に出てたわ。補導院送りや罰金刑はイヤだ、刑務所へ送ってくれ、なんてホザいた売春婦がいるのよ。どうお？」

「へーえ。ずいぶんとナメられたものねえ。

だけど、勘定は合うのかしら。補導院はダラダラと永いから、ま、分かつとして、罰金の方は——」と、フィリスが暗算を始めた。

「えーと、単純売春なら二年が最高ね。罰金の最高は五千フラン。ま、三千フランとするわね——それを体で勤めるとして——ねえ、一日当り何フランぐらいに換算するの？」

「バカだね。どう転んだって二年より長くなるもんか。法律って、そんな不合理なものじゃないわさ」と、ベル姐御が鼻を叩く。

「——要するにだね、タダで住んで着て食べて、ノンビリ暮せて出ゼニなしと来れば、息抜きに入りたい連中もあるだろうサ。それなのによ、ヤレ、日没後は働らかせるな、スープをおいしくして栄養をつけてやれ、人権を尊重しろ、文通の制限は所長に届ける、戒具は懲罰具じゃない、病氣させるな、お尻以外を撲っちゃいけない、本人の更生が目的だ、劣等感を与えないようにしろ——ま、バカバカしいスローガンは、まだまだゴマンとあるけどさ——。まったく、世間のオロカ者どもと来たら救えないねえ。牙のない刑務所にしといて、そいでもって、犯罪が多過ぎるのなんのとヌカしやがる。ヤツラにや、威嚇効果ってものが分っていないんだ、ウン——」

ベルディーヌはパフを片手に大演説をブチまくった。

「スゴいわア。アップレな大見識。マジョー



リが居たら面白いのにねえ」

「おふざけでないよ、キャスリーヌ。私たちはね、社会正義の最後の防壁さ。そこんところが一番腎心なとこだね。冷厳にシャンとするこった。けどサ、間違えないでくれよ。

迫害者になれっていうんじゃないだよ、ウン。そりゃまあ、神と人間の魂とやらが触れ合う崇高なアンバイ式のことだって、ときたまにはあるわさ。砂漠にだってバラの花が咲くこともあるだろうからね。でもサ、いつもいつもそんな夢ばかり追ってたんじゃない、社会の正義が保てなくなっちまうよ」

「ンまあ!! 正義の権化、法の女神——。御趣旨は、よく相分かりましたことよ」

「ね、ねえ。ベルディーヌ先生さまのおっしゃるとおりかも知れなくてよ。社会正義の防壁になるってこと、ホントに大変なことだよ。ホラ、去年の夏だかに判決があったでしよ? 検事の娘が妹を殺した事件——」

「ああ、アミアンだったわね。キャドラーミ婦人検事の家庭で起った大惨劇——」

「ええ。ママは忽ち検事を辞めちまつたし、心神耗弱の鑑定もあったっていうのに、検察側が反証して六年になったわ。検事局って、やっぱし大したものねえ。それでこそ破邪の

剣と云えるのよ。ホントに感心しちゃった」

「そうとも」と、ベル姐御がふんぞり返る。

「——あんたたちも見習うこった。たとえ、昔、御恩を受けたひとりが送り込まれて来たって、心を動かしちゃいけないね」

「あら。ウチにそんなカンケイのひと居るかしら? でも、そんなの深刻な悲劇よねえ」

キャスリーヌが眼をクルクルさせ、イヴェットは預を硬張らせた。

「居るとは云ってないよ。居ないとも云ってないし——。ま、そのくらい厳肅なものだてことサ。——おそいねえ、エディスは」

と、ベルディーヌは話題をそらせ、モレシエンヌが反撃して口を挟んだ。

「キャドラーミ元婦人検事の娘さんのことだけど——。その事件、いま、まだ上訴中なんでしょ? 二審でどうなることやら知れたものじゃないかってよ。一審の実刑六年というのも、案外カムフラージュかも知れないわ」

「へええ」と、ベル姐御が眼玉を剥いた。

「——あんた、そんな顔しててサ、ずいぶんとヒネくれたこと考えるひとだねえ。じゃ、なにかい、母親が検事だから手心加えて貰えとでも云うのかえ?」

「そうねえ——あ、火を落としてよ、イヴェ

ット」モレシエンヌはレンジを離れた。

「——そりゃまあ、ハッキリと相談なんかしてるとは思わなくてよ。だけど、一審の六年というのがそもそも軽過ぎやしない? スラム街の娘だったらどうなったかしら」

「あん? 裁判を批判するのかい。呆れた」

「ともかく、呵<sup>あうん</sup>呷の呼吸てものがあるわ。第一ねえ、そのキャドラーミの娘さんたら、六年を打たれて保釈されてるのよ。シャアシアと暮してるって」

「ふん。新聞やなんかを鵜呑みにするもんじやないよ」

「私ね、二審の結果を刮目して待ってるの。この私の正義感<sup>せいぎかん</sup>は欲永不満ですわ。世間の人

たちは一審で満足して忘れてるかも知れないけど、私は忘れないんだから」

「執念深い子だねえ、モレシエンヌは」

「だって、そちらがホントの社会正義じゃなくって? “ナントカ一家”は許せないわ」

「なんだって!! あんたは、かりそめにも、法務省の職員だろが?」

「お気に障ったかしら。でもね、早い話が、たとえば、おとどしの暮のウチはどう? ホラ、ジャンヌ・ブリネル事件よ。立派な“ナントカ一家”の発露じゃないの」



「いったい、何を云いたんだえ？」

ベルディーヌはタジタジ気味だ。

「あのね、つまり、みんながね、もっと謙虚な気持を持つべきじゃないかってこと。裁判所にしたって、検事当局にしたって、少し思ひあがってるんじゃないかしら。批判はタブー視されてるし、たまの攻撃だって遠慮気味で、おそろおそろのヘッピリ腰だし——」

「そうですわよ」

と、イヴェットもレンジ前から口を挟む。

「——裁判所や検事局を、もっともって国民が批判してチェックする必要がありますわ」

イヴェットは、ミシュリーヌ奥さまの受難を想って口走ったのだった。イヴェットに云わせれば、ミシュリーヌ奥さまに四年もの実刑を科するなんて、飛んでもないアキメクラ裁判だということになる。

「——どう考えたって腑に落ちない裁判がありますもの——」

「ふん。たとえば？ え？ イヴェット」

ベルディーヌに突込まれて、イヴェットはビクリと口を噤んだ。ミシュリーヌ奥さまとの間柄を感付いているのかと思える節もあることだし、そこらをアバき立てられては困るから、ベルディーヌの気嫌は損なえない。

「たとえばねえ」

と、モレシェンヌが助け舟を出した。

「——たとえば、ホラ、作家のゴミスさん。轢逃げしたじゃないの。いや、逃げたんじゃなかったつけ。ともかく、酔払ってたのは確かだわ。なのに、演出力も豊かに『反省』を示したらさア、二人も殺しておいて執行猶予よ。事実上は無罪——。全然落度のなかった被害者の魂が浮べないわよ。どう？ 妙な裁判の一例よ。検事側は、上訴もしなかったし、マスコミも碌々報道せずじまい。もちろん、批判なんかこれっぽちもお目にかかれなかったわね。ま、流行作家の原稿が貰えなくなると困るからでしょう、ホホホ」

「そう云やそうだわねえ」

と、フィリスも同調して小首をかしげた。

「——市井の一市民だったら、信号無視で速度違反で酔払い運転と来りゃ、轢かなくなってる実刑喰うわ」

「そうでしょ!! 私、ゴミス氏の本は、全部捨てちゃったわ。もちろん、今後、決して読んでなんかやらないつもりよ。ええ——。ホント、男らしくないったら——卑怯きわまる人間の屑よ。潔よく体で償った方が、気も楽になるでしょうに——」

「負けたよ、モレシェンヌの正義感には」

ベルディーヌはアッサリと云った。

「——だけどね、その人間の経歴やらバックやら、お芝居の上手下手やら、裁判官を説得できる弁護士を雇えるかってことやら、そのほかモロモロをさア、全部ひっくるめた上で裁判じゃない？ そういう考え方もあるわさ。善い悪いは別の問題なんだ。ところで、どこから話がコングラがったんだろ。裁判の批判は、もうやめようよ。まだやるんなら、バッジをはずしてからにするんだね」

「じゃ——」

と、モレシェンヌはバッジを襟から外す。

「おんや？ まだやる気？」

「ええ。妙な裁判の例をもうひとつね——」

「ヤレヤレ。ま、まだ若いんだからねえ」

ベルディーヌは溜息を吐いて時計を見た。

「あのね。ウチの三二三号、ロレッタのことです」モレシェンヌはキッパリと云った。

「あん？ それはタブーだよ、あんた」

「知ってます。でも、齒痒いんですもの。あのひとの裁判なんか、それこそ、典型的な例ですわ。検察と司法とが不当に神聖視されるとは思いませんか？」

イヴェットは胸中で喝采し、ベルディーヌ



は苦がり切り、詰所の空気が白け切つて、そこへ、フォンテイナーが現われた。

「あ、フォンテイナー。お帳面済んだ？」

「済む筈がないじゃないの。八名さま御出張のままなんだもの、ホホホ」

三監の大黒柱フォンテイナー補佐は、我れと我が肩を叩いてソファに沈んだ。

「——イヴェット。済まないけど、コーヒーでもくれない？ あら、何してんの？ へええ、スープをねえ。へえ、そうなの。それが大激論の発端というわけなのね、ホホホ」

「ねえ、フォンテイナー。ウチの若手、二、三人クビにしなきゃいけないようだよ」

「まあね。あらかたは聴いてたわよ。ま、裁判の批判もいいでしょ。言論は自由だもの。でもね、自分たちが当面処理しなくちゃいけない事柄については駄目よ。分かる？ それ是一種の逃避です。卑怯だとも云えるわ」

「——はい」と、モレシェンヌも神妙だ。

「でも、気持は分かるわ」

フォンテイナーは瞑目した。

「——あ。有難う、イヴェット。いい香り」

と紅茶を一口啜り、ポツリと呟く。

「ロレッタ、早く仮釈放してやりたいわ」

「ね、ね、そうでしょ」

と、モレシェンヌが勢い込んだ。

「——仮釈放もいいけど、再審はどうなのかしら。石頭ばかりそろっちゃって——」

「あのね、モレシェンヌ。ロレッタの親類に検事か判事が居ないか探してやったら？」

そう口走ったフィスリを、フォンテイナーとベルデイナーがチラリと睨んだ。

「——そうねえ」

と、フォンテイナーが嘆息気味に呟く。

「——既に一度却下されてるんだし——仮釈放の方はなんとか出来ても、再審はねえ」

「だって——あのひとの生き甲斐なのよ」

と、モレシェンヌは涙声だった。

「受刑者は番号で呼ばなきゃいけないね」

ベルデイナーが唇を引締めてたしなめ、フォンテイナーが肩をすくめた。フォンテイナーも、さきほど名前を呼んでいる。

「ともかく、私は平気よ。ほかの連中と同じに考えてるんだから、ウン。安心してよね」

そう云い放ったのはキャスリーヌだった。

「——ま、そうね、これは私の個人的意見だけ——」

「聴かせてよ、フォンテイナー。ね、ね」

「——先ず、ロレ……いえ、三二三号の刑期が満了して、誰が真犯人だとしてもその時効

が完成して、そして——証言を強制されたと

かされなかったとか云ってる人たちの偽証の時効も完成してからのことじゃないかしら」

「おっと、肝心のことを忘れてるよ、フォンテイナー。関係した検事や判事が退官なさってからのことさ。それまではお預けだね」

ベルデイナーは大胆に断定し、パチクリと見詰めるモレシェンヌに、片目をつぶって見せたのだった。しばし沈黙が流れ、

「——正義だとか更生だとか云ってたじゃないの？」と、フォンテイナーが紅茶を干す。

「そう。それが本論だったのよ」

「ともかく、私たちとしては、その問題の方が切実だわ。正義の満足と本人の更生とのカネ合い——刑政の真の在り方は如何——。大問題よ、これは。切ないぐらいだわ」

「そうだろ、フォンテイナー。私たちにサ、人間の魂とやらを救え、なんて云ったって、どだい無理だよ。先生になれたって——職業教育や道德教育の教師が勤まるぐらいならさア、なにも、こんな制服着てるこたないんだ、ホント——」

ベルデイナーはいきまき、フォンテイナーは嘆息を洩らした。どこかの監房の前で、ジョーゼット婦人看守の叱り声が響く。



「なにしてんのッ。私はね、少しは近眼だけど、お前たちが何ヤラかしてるかぐらい、おメメつぶってたって分かるんだよッ。こら」  
 どうやら、不埒な行為を試みようとしたのを、デスク当直のジョーゼットが発見したらしい。夏の宵の性に悩む女囚が一人、あっさりと後手錠を科された様子だ。

「——売春婦の補導院でもねえ、とうとう、手錠を使い出したわ。そうでもしなきゃ収拾がつかないんだって。革手錠もよ。設立の趣旨は御破算だわ」

フォンテイーヌは嘆かわしげだった。

「そうともサ。何てったって、体に鍵かけてやるのが一番だよ。ところで、私個人としちゃねえ、売春を罰するのはナンセンスだと思うよ。ま、法律で決まっちゃってんだから仕方ないけどサ。ともかく、私たちは社会治安の最後の防壁、最終の防衛者——ホント、名誉あるお仕事なんだ、ウン、そうとも——」

「お給料はワリカしいしね」

「バカ。ハシタないことお云いでない、キャスリーヌ。すべからく、厳正かつ厳粛にやるんだよ。愚かな者たちの眼には迫害者と映るくらいで丁度なんだ。弱い者いじめしてると思われてちよいどいい加減サ。あたしゃ、世

間の馬鹿タレどもが白い眼で見たって、赤縞たちがどんなに恨めしげにしたって、一向に平気だね。いっぺん、ギロチン死刑を担当して見るこった。度性骨がデンと据わるよ」

「あら。ベルデイーヌは担当したことあるのオ？ どんな風なの？ 聴かせてよ」

「ウンニャ。——ともかくだね、使命感に徹することサ。威厳に満ち満ちて、堂々と胸を張って、汚れた女たちを真人間に叩き直してやるんだ。私たちの職場は聖なるものだよ。

だいたい話がさア、更生とやらを私たちがけに押しつけるのが気に喰わないね。世間の奴等の考え方がどだいおかしいよ。前科者呼ばわりして爪弾じきしてサ、どうして立ち直れる？ 償いを終えた人間なら、それを、もっと暖かく受け入れてやらなきゃ——。戸籍に前科マークを捺すなんて大間違いのコンコンチキだね。償い終えたあと……までハンディをつけるのは残酷だよ。赤縞たちは前途を思い患らうことなく贖罪一途——そして、私たちもビシビシと償いを求める——。そういう姿にして欲しいよねえ。そもそも……」

若手婦人看守たちは肩をすくめ、ベルデイーヌの長広舌は鉄格子扉の音で断たれた。疲れ果てた風情の珠数繋ぎ八名が、漸くのこと

で帰監して来たのであった。どこで引っかかっていたのか知らないが、獄門からこままでに、えらく手間取っていたものだ。イヴエツトはそっと立って、レンジの火を強めた。

「おや、エディス。おそいと思ったら、手伝ってたのかい。そうかい、そうかい」

ベル姐御は機嫌を直し、エディスの遅刻は一言も責めず、尻に帆かけて帰って行った。身検と着替えが済むのを見計らって、イヴエツトはスーパを八枚の皿に配った。ベルデイーヌが居たなら、身検を永引かせるとか、やり直しを命じるとかして、折角暖めたスーパをば冷まして仕舞うところだったろう。

——八月もそろそろ末の日曜日。ベルデイーヌは顔を見せるや、朝の監舎で噛みついた。

女囚たちが磨きあげたばかりの通路を点検し、何やら細いものを二、三本つまみあげ「こらッ。これでお掃除したつもりかいッ」

と呟鳴った。昨夜の当直はイヴエツトとモレシェンヌとエディス——若手をシャッキリさせる狙いもあるのだろうが、よくもまあ、眼ざとく見付けるものだ。

「ブロンドが二本、栗毛——かな、これは。え、こら、三本も落っことしておいておマンマにありつこうってのかい？」



女囚たちは肩をすくめ合った。

「探しゃ、もっと落ちてやしない？」

「そう。もうそろそろと抜け毛の季節。でもさ、あたいは赤毛だよ。責任なし」

「あたしもそうサ。だって押えてるもの」

そう呟いて唇曲げるのは、「ベルト」腰手錠の不心得女だ。

「みんな、立てッ。整列。脱衣ッ」

女囚たちは溜息を吐いて命令に従った。

「膝を抱いてッ」

六十数名の裸形が一斉に上体を倒し、自分の両膝を両腕で抱き、膝の後ろで両手を握り合わせる。

「ね、早くしなきゃダメよ、ヴィヴィアンヌったら。ノソノソしてると——」

ミシュリーヌは隣りを振り仰いで気を揉んだが、とき既におそく、ベルディーヌの革ロープがヴィヴィアンヌの背に吸い着いた。ヴィヴィアンヌの虚無的態度とふてくされ振りは徹底していて、若手婦人看守では到底手に負えない。イヴェットやモレシエンヌが接するときには、ミシュリーヌはオロオロと気を揉むのだった。マジョーリの愛情とベルディーヌの答——そのどちらが勝つかは、三監の興味

の焦点であった。ヴィヴィアンヌは革ロープの鞭に声一つ洩らさず、ゆっくりと我が両膝を抱いたのだった。

女囚たちはそのままの恰好で、通路を何回も往復させられた。六列縦隊に並んでヨチヨチと、お尻を振り振り、床を睨んで歩く。

「性根入れて探すんだ。見付けた者には御褒美あげる。ただし、自分のと同じ色じゃダメだね、フフフ。こらッ。手をしっかり握る」

ベルディーヌは笑った。どうせ、ヤキ入れが目的なのだから、見付かろうが見付かるまいが、誰かがネをあげて膝を落とすまでは続けるつもりだろう。

「ベルト」の二人が相次いでよろめき、三三三三のロレッタが脚をもつらせ、中年女囚が二人、膝を落とした。「ベルト」組は腰手錠の夜が続いていることだし、中年女ともなれば体力の差が物を云う。

「性根」の足らない五名が、朝食ヌキを言い渡され、「貝拾い」から漸く解放された女囚たちは腰を叩いた。

革サンダルをくわえて朝食の卓に向い、五名の女囚は泣き顔で立った。ロレッタが身を揉んで激しく鳴咽し、首の赤札を振り回す。

マジョーリが静かに寄って何か云ってきかせたが、無実を叫んで十年のロレッタは、な

おも泣きじゃくるのだった。今朝は、マジョーリの来るのがおそかったのだ。

ミシュリーヌは朝食の前後を通して、今日もまたヴィヴィアンヌを口説いていた。

「ま！ じゃ、考え直してくれたのね。嬉しい」ミシュリーヌは飛びあがって喜んだ。

ダイアナが三日前から重屏禁を喰っているので、二人の間は空席だ。邪魔者が間にいて茶々を入れることがないので、礼拝堂行きをすすめるミシュリーヌの口説も効き目があつたらしい。シモーヌは、我がことのように喜色を浮べた。

「なにをしゃいでの？」

「あ、すみません、イヴェットさま」

ミシュリーヌは詫びて赦しを乞うた。

「——でも——ヴィヴィ、いえ、三八七号が礼拝に出るっていうんですもの」

「ほんと！ そう」

イヴェットも晴れやかに喜んだが、聞いたフォンテーヌは思慮深くうなずいて、保安課へ警護方を依頼したのだった。

フォンテーヌが警戒した不祥事も起らずに、ヴィヴィアンヌは神妙に終始した。特別マークのヴィヴィアンヌを十一房へ入れた狙いは的を射ていたのかも知れない。それにヴ



イヴィアンヌが専門的見地から同囚として云って聞かせるせいか、ロレッタも仮釈放を真剣に考え直すようになったらしい——。

「ねえ、ヴィヴィアンヌ。おねがいよ、御命令に従っておとなしくして頂戴」

監房の中で、ミシュリーヌは両手合わさんばかりに頼むのだった。

「あなたが、撲られたり、食事ヌキにされたり、縄で固く縛られてお説教されてるのを見ると、私、胸が痛くなるの。ね、おねがい」

ヴィヴィアンヌは黙りこくっていた。

「近頃、新しいひとがとんと来ないわね。どうしたのかしら？」

「心配要らないわよ、ミルドレーヌ」

ヴィヴィアンヌが皮肉な調子で受ける。

「悪い女がいなくなったわけじゃないんだから。裁判官さまたちの御都合よ。夏休みをお取りになるんで、女の罪人の製造がおくれちゃうの。御休暇の間、候補者の女たちは暑い拘留所で蒸しあげられてお待ち申しあげること。九月に入るとジャンジャン送り出すんだから。毎年のことよ。裁判なんていい加減なものね、ほんとに」

並みの女囚の言葉はちがっても、その道にたずさわって来たヴィヴィアンヌの口から言

われると、なんだかそんな気もして来る。

ロレッタが思い起すのか、ひとしきり忍び泣いた。彼女には、誤審の恨み綿々たるものがある。

「ミルドレーヌだって、裁判官が別のに当たたら、ひょっとすると二年ぐらいで——あら、ごめんなさい。余計なこと云ったわね。でも、ミシュリーヌは不幸中の幸いだったのよ。大抵なら求刑どおりの五年ね。あなたのは陪審員がカスぞろいだったんだわ」

「もうよして」シモーヌが泣き声で云った。

——さて、イヴェットは足取りも軽く詰所を出た。今日の仮釈放審査委員会——それにミシュリーヌが呼ばれたのだ。夜勤明けの疲れも何のその、イヴェットは委員会への連行業務を自ら引き受けたのだった。前例や情報やらによると、ミシュリーヌの仮釈放許可はほぼ確実の筈だし、そのような勘もする。

ミシュリーヌさまがどんなに喜びになることか。早く報らせてあげて、少し早いけど連れ出してしましましょう。だけど、もし、もしも万一駄目だったら、ああ——

イヴェットは取越苦勞を振り払い、押え切れない微笑を浮べて十一房の前に立った。

「四五三号。出なさい。仮釈放審査の御面接

です」

ミシュリーヌの顔がパッと輝やき、弾かれたように起った女囚は、息をさえ弾ませて鉄格子扉を潜った。

今日の面接には、三監からはもう一名、三五八号が呼ばれている。フォンテーヌが注意を与えて励まし、マジヨールはもとよりマリーさえもが肩を叩いてくれた。

イヴェットは例によって胸中深く詫びながら、ロープ付きの手錠を女囚の両手首に嵌めた。ミシュリーヌ奥さまの御手に叩き込むなどという芸当は出来っこないイヴェットだ。静かに丁寧な、まるでおそろおそろかけさせて頂くというような仕草と態度であった。こんなことではかえっていけないと反省するのだが、自然にそうなって仕舞うのだった。だから、イヴェットはほかの女囚に対しても、バランス上、やさしく嵌めてやるように心掛けていた。

そんなイヴェットだったが、先に掛けられた三五八号が横眼で見やって、ミシュリーヌに対するやさしさを責める眸を投げた。この無理心中の片われ娘も殊勝なので、決して手荒く嵌めたイヴェットではなかったのだが、やはり、滲み出るいとおしみの情だけは如何



とも仕難い。自分の方が邪慳にされたと三五八号はひがんだのか、鼻を嚙って手錠をガチャつかせた。囚われの境涯を送っていると、ほんの僅かのことで、差別されたと思い込んで僻んで仕舞うものだ。

二人の女囚は肩を並べ、おのおのから延びるロープを合わせてイヴェットが背後でにぎり、三人は薄暗い地下通路を歩いた。

「イヴェットさま——」

ミシュリーヌが不意に立ち止まる。

「大丈夫でしょうかしら？ もし駄目だったら、私、もう——」

つられて不安に駆られたのか、三五八号も大きく喘いだ。

「——出して頂きたいわ。出して貰えるなら床だって舐めます。ああ——出たい——」

嘗ては死を覚悟したであろう三五八号だったが、今日これからの瀬戸際を控えると、身を揉んで自由を求めるのだった。死んだつもりで勤めれば、あと二年ほどのことが——というのは、鉄鎖の味を知らない者のことだ。

「駄目だったら気が狂うわ。ああ神さま」

「——ね、どうでしょうかしら？ 大丈夫ですわね？ きっと。イヴェット——いえ、イヴェットさま、大丈夫だとおっしゃって」

イヴェットまでが不安に襲われ、どう答えていいかとうろたえる。

「——私、出して頂いたら、どんな貧しい暮らしでも喜んで辛抱します。日雇い人夫でも、新聞配達でも、靴磨だってやりますわ。お、お願い。何とかして頂戴——おねがい」

「——大丈夫よ、二人とも。神さまにおまかせしましょう。さ——」

イヴェットはかろうじて云い、二人の肩を静かに押したのだった。

面接審査の室では、例の数人の男女がゆったりと寛ろいでいた。本館付きワンピースたちが昨日一日を磨き立てたので、隅から隅まで光り輝やいている。

「まだそろわないの？ おそいわね。失礼しちゃうわよね、ほんとに」

いきまぐブリジットは華やかにドレスアップしている。

「いやに張り切ってること。ま、久し振りだものね。ね、ね、レマン湖で逢ったひと、それからどうしたの？ 一線を越えた？」

「バカ。フロレンスったら、すぐにそれなんだから。ちょっと冷房を落として頂戴な。もう空は秋の色じゃない？ 私、陽のあるうちにシャンゼリゼへ戻りたいのよ。早く始めな

きゃ。今日は多勢なんだし——」

ブリジットは眉をしかめた。バカンスとやらで、まる二カ月を休会したのだから、溜まるのも当たり前だ。

「ほんと。今日はワンサと集まるわね。えーと、ヒヤア、全部で十四人!!」

「いい加減に打ち切って、あとは次回よ」

「そんな可哀想なこと。期待に胸ふるわせてやって来るんですぞ」

モントルイユ氏が人間味を示した。

「だから、先月中に、せめて一回でも集まったりやよかったのですわい」

「ああ、だって無理よ、ムッシュ・クレマソン。私はヴェニス——フロレンスはどこ

だった？ あ、スイスね。マダム・オッセンはフロリダ——どうして集まれるとお思い？

ねええ。私たち、女囚連中の雇い人じゃございませんことよ」

「そうですとも。待たせときゃいいんだわ」  
紳士二人は重々しく咳払いした。

「定足数を四ぐらいにしなければなあ。六なんてきびし過ぎますな」

「左様。国会の馬鹿騒ぎだって——いや、そんなことはどうでもよろしい。ところで、今日の問題女囚はどれですか？」



「難物は、ホラ、例の母娘仲良くって奴です。母親の方はともかく、娘の方はどうもねえ、いくらヒイキ目に考えても——」

「あら、ムッシュたちも案外と公正なこと。」

私、心を鬼にして娘の方は押えますことよ」

「私もよ、フロレンス。人情味ゆたかな紳士がた、その場になってホロリとしないで頂戴な。私たちは大丈夫。冷厳そのものなんだから。ねええ。娘の方は面接不要くらいよ」

ブリジットは独りで力み、オッセン夫人がやおら資料から眸をあげた。

「事前に意見を交換するのはやめましょう」  
シユバリエ夫人とレニエ夫人が重々しくうなずいた。

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。  
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。  
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

「だけど、この前の——えーと、三一六号だったかしら、ホラ、元婦人警官。あんなのは今日はいないでしょうね？　どうなの、コリンヌ」

コリンヌは苦笑いして首を振った。

「そうよ。ホントに、馬鹿にするのもいいとこだったわ。ともかく、なんでもいいから許可しろ、だなんて。私たちのメンツ台なし」

前回、すなわち六月半ばの、ミシュリーヌの委員会のとき、なんの前触れもなしに、法務次官からの勧告が文書で伝達され、クラリスの審査評決の直前に、配布されたのだった。理由は明かに出来ないが、クラリス・シモンに対する審査は形式的に止め、嘆願を許

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

可することを望む、という旨の文書であった。その文書は直ちに回収され、クラリスの秘密功績を知らないお歴々は内心穏やかでなかったのだった——。

ミシュリーヌは小さな胸をおののかせて曳き出され、立ちすくんで必死に祈った。

「——よく反省したわね？　どう？」

「は、はい——このあいだのことほんとに申しわけございませんでした。悪うございました。おゆるし下さいまし。こ、このとおりでございますッ。お、おゆるし——」

ミシュリーヌは唇ふるわせて哀願し、短かい鎖を両手首に引張り、革具きしませての合掌を下腹部で悶えた。

「そう。悪いことをした報いがどんなか、よく骨身に染みたわけね？」

「——は、はい。それはもう——充分に懲らしめて頂きました。ほんとにもう懲り懲りでございます——もう、ほんとに懲りました」「ほんとうね？　では、即決します。お前の仮釈放嘆願を許可します——なにか知らないけど、重大な捜査にちょびり協力したことがあるそうだし——」

ミシュリーヌは、オッセン夫人の勿体ぶった声を天使の言葉のように聞いた。そのまま



膝の力が抜け、ずるずるとへたり込む、縄尻を握るイヴェットも全身がゆるみ、捕縄が床に落ちた。

「立ちなさいッ」コリンヌの声が鋭く飛ぶ。

「いいこと？ お前は近いうちにここを釈放されます。でもね、よく聞くのよ」

「——は、はい」

女囚は歓喜に咽喉をふるわせ、喜びのあまりに膝をガクガクさせた。

「お前の体からは鎖が解かれます。だけど、心の鎖はまだ解いては貰えないのよ。いい？ そのところをよく心得ないと駄目。与えられる自由はかりそめのものよ。公民権は剝奪されたままです。目に見える鎖がないからってハメをはずさないようにね。しばらくはただここに居るわけだから、その間によく考えて、どういう風にこれからを過ごすべきか、とっくりと思索しなさい。分った？」

「はい。よく分りました。ありがとうございます。お慈悲を肝に銘じて、今後も更生の道を歩ませて頂きます——。みなさまにもいろいろとお手数かけました。ありがとうございます。ありがとうございました」

ミシュリーヌは深々と頭を垂れ、嬉し涙に頬濡らせつつ去った。

そして、シュバリエ老夫人は遂に一言も発せず、終始瞑目していたのであった。

慣例の「珠数繋ぎお見送り」のとき、またしても一二九号が悲痛な声を絞った。

この五十女の女囚は、我が娘と共謀して、酒乱の娘むこを殺害し、死体をバラバラにして捨てた母親だ。娘は六監に、自分は一監にと、同じ塀の中で同じく十二年の刑——聞くだに恐ろしい重罪人ながらも、日曜ごとの礼拝に娘を垣間見ることとを唯一の慰さめとして七年あまり、五十も半ばを過ぎて仮釈放の慈悲を受け得たのだったが、娘の方は哀願も空しく却下されてしまったのであった。女囚控え室でそれを知ったとき、半狂乱のように泣き悲しんだ一二九号であった。殺人の大罪を犯したのも、もとはと云えば娘可愛いさのことなのだから、自分だけが鎖を解かれる哀しみは察するにあまりある。

「——おくさまがたッ、旦那さまがたッ。お慈悲でございますッ。私の代りに娘を——娘を出してやって下さいまし。お、お慈悲を」

一二九号は正座の脛に砂利を踏みもだえ、世にも悲痛な哀願を絞った。ミシュリーヌはまたしても貰い泣きをした。子を持つ女囚たちもまつげをしばたく。却下組の三五八号も

哭き伏した。

「——その代り、私は一生涯ここで暮らせて頂きます。お、おねがい——おねがい」

二人の男性は顔をそむけて車に乗った。若奥さま二人が思わず足を停めて思案顔——そのドレスの袖を、分別ある老夫人たちが引張り促がし、七人の委員たちは車に納まった。

一二九号は死物狂いで膝をにじり、ミリアム婦人看守が溜息まじりに肩を押える。そんな母親の哀切場面をよそに、娘の六三〇号はふてくされ果てた態度——眼前を走り去る乗用車に齒を剥いて、顎をさえ突き出した。

当然、その背に答が数発降り、気付いた母女囚が身を揉んだ。娘は反対側の端にいる。

「——お、お前——どうしてそんなんだい。おねがいだから、神妙にしておくれでないかえ？ 私たちは——人殺しの罪人なんだよ」

「ふん——」と、娘は鼻を鳴らす。

「ああ——どうしてお前は——。そんなお前じゃなかったのに。母さんは、待ってるよ。一日も早くお慈悲を戴いて出といで。そしてきっと私のところへおいで。きっとだよッ」

「お黙リッ」

意を決したミリアムの答が、キツパリと母親の背に鳴ったのであった。

(未完)





郭籠上机

# 法律雑誌

井上俊彦

## 第一編 婦女に対する権利

### 第一章 総則

世界平和をリードする實力を有する盟主、レイ国では、第〇〇通常国会に於て、婦女子に対する特別の法律たる「婦女法」が制定せられましたので、ここにその法律を、奇譚クラブの読者に特別に解説付きでお知らせ致します。

尚、婦女法がまだ一般に公布されていないのは、一部の婦女を取扱う業者から政治家に対して圧力がかかり、その施行を遅らせようと、目論見ているからで、業者たちは、婦女法の内容があまりにも人権尊重に重きを置きすぎていると、非難しております。が、世界的規模で、広がりつつある婦人解放運動の波は、止めようにも止まる所を知らず、いずれ婦女法は一般に公布され、その効力を有するようになることでしょう。

本婦女法は、主に婦女に対する権利。婦女の売買。賃貸借等を定めたもので、従来家畜

同様に取り引されていた婦女を、法の規定によって保護し、よって婦女の婦女としての人格を認めようとするもので、近代的な人権保護に関する精神を十分に折り込んだものと言えます。

私も解説するに当っては、進歩的な思想を取り入れ、よって婦女が奴隷状態から解放されることを祈りつつ、ここに婦女法を公開致しますものであります。

## 婦女法

（昭和〇〇年〇月〇日）  
法第××号

施行、未定

第一条（婦女に対する権利の種類）、婦女に対する権利は本法、其他の法律に定むるものの外、之を創設することを得ず。

（解説）婦女に対する権利の種類は、封建制度のもとでは多種多様であったものをここに整理統一した。法律に定めのない婦女に対する権利を設定する契約は無効のみならず、法律の認める婦女に対する権利に、この法律と異なる内容を与える契約も無効である。婦女の人格を尊重するためには当然のことである。この規定により婦女は保護される。

第二条（婦女に対する権利の変動）、婦女に



対する権利の設定及び移転は、当事者の意思表示のみによりてその効力を生ず。

(解説) 当事者甲乙の間では、婦女の所有権を移転しようとするのに意思表示だけで効力が生ずる。第三者丙に対しては、単に対抗要件の問題である。

○

第三条(対抗要件—登録)、上級の婦女に対する権利の得喪変更は登録法の定めるところに従い其登録を為すに非ざれば之をもって第三者に対抗することを得ず。

(解説) 婦女審査法によれば、婦女は満十八才に至った時、各都道府県に配置された婦女審査会の審査を受けなければならない。審査は厳格なもので、医師の立会の下に左記の各項に渡って行なわれる。

一、身体検査 身長、体重、胸囲等は全て生ものを測定するため、婦女は身に何一つ付けること許されない。また病氣、身体の欠陥も調べるため、鼻、口腔、胸、等全身に亘って診察を受ける。

二、浣腸 身体検査とは別に婦女は一室に集められ、四つ這いになって浣腸を受けねばならない。その光景は真に壯観だということである、が一般人の見学はもと

より許可されない。

三、知能テスト 男としては馬鹿な婦女を相手としても面白くなく、これも必然的に行なわれる。

四、美容テスト 単に顔のみでなく全身の釣り合いも問題とされるため、全裸で行なわれる。

五、SM性テスト いろいろなテストが用意されているが、読者の方々の方が詳しいので説明するまでもない。

六、その他必要に応じて審査会で認められたもの。

以上の各項に亘り婦女は審査を受けなければならない。その結果、婦女は、秀優良不可の五等級に品別され、上級の婦女とは秀優の品位を与えられた婦女のことを言い一般社会取引上高価なものとされるので、その婦女の移転は登録法の定めるところに従って登録(甲女につきAからBへ移転というように)しなければ、その移転を第三者に対抗できない。すなわちAからBへ甲女の所有権が移転され、Bが登録しない間にAはCに甲女を売った場合、Cが登録をすればCはBに対して甲女の所有権を主張でき、逆にBはCに主張し得なくなる。このようにして登録は上級婦

女の取引の安全をはかる制度となり、買主は登録を一応信頼して上級婦女の取引を為すことができる。

○

第四条(対抗要件—引渡)、下級の婦女に対する権利の譲渡はその婦女の引渡あるに非ざれば之をもって第三者に対抗することを得ず。

(解説) 良不可の品位の婦女は重要な取引の客体とはされず、その婦女の譲渡は慣習上引渡によって行なわれていたため、それを法的なものに高めたのである。元来、上級下級の婦女に対する権利の移転は、品位の区別なくただ焼印をもって行なわれていた。それは尻に焼かれ一生消えないものであって、婦女の婦女としての人格を著しく害し、またかつ婦女の所有者にしてみれば尻に焼印を押すことによりその婦女の取引価格が下落することになり、高価な買物も売る時には買いたたかれる。また幾度も取引され所有者の変った婦女は幾つもの焼印が尻に焼かれ、どの焼印が新たな焼印か識別が困難となり所有権に関する訴訟が絶えなかった。

以上の各点が、登録制度、引渡制度で改められることになる。しかしながら、それは取



引をする場合のことで、一生自己の所有物とする時は、婦女に焼印を押した方が安全である。

## 第二章 占有権

占有権は、ある人が婦女を支配しているとき、その状態を保護し、社会の平和秩序の維持を目的とするものである。

第五条（占有権の取得）、占有権は自己のためにする意思をもって婦女を所持するによりて之を取得する。

（解説）必ずしも、常に連添わせる必要はなく、家屋内に保有したり、女中などに見張らせておく場合にも所持を有する。

第六条（権利の適法の推定）、占有者が婦女の上に行使する権利は之を適法に有するものと推定する。

第七条（占有者と果実）、占有者は婦女より生ずる果実を取得する。

（解説）ここにいう婦女より生ずる果実とは天然果実と法定果実とに分けられる。天然

果実は婦女の妊んだ子供、母乳及び排泄物を言い、法定果実とは、他人に賃貸したる場合の賃料を言う。

第八条（即時取得）、平穩且公然に下級の婦女の占有を始めた者が、善意にして且過失なきときは即時にその婦女の上に行使する権利を取得する。

（解説）即時取得は下級婦女の占有に公信力を与え、下級婦女取引の安全をはかる制度である。上級婦女は登録されているので、登録簿の記載を信頼して取引すれば安全が保たれるが、下級婦女は登録されていないので、現に占有している者が真の所有者か識別できない。よって売主が真の所有者でない場合であっても、これと取引した買主が、売主がその婦女を売るにつき正当な権利を有すると誤信したときは、その誤信がいかにももっともであれば、婦女の所有権を取得する。

第九条（盗品の特則）、前条の場合に於て婦女が盗品なるときは被害者は盗難の時より二年間占有者に対して婦女の返還を請求することを得。但し占有者が盗品を競売若くは公の市場に於て又は婦女を販売する商人

より善意にて買受けたる時は被害者は占有者が払いたる代価を弁償するに非ざればその婦女の返還を請求することを得ず。

第十条（逃走の特則）、他人が飼養せし下級婦女を占有する者は、その婦女逃走の時より一カ月内に飼養者より返還の請求を受けざる時は、その婦女の上に行使する権利を取得する。

（解説）本法の公布施行が遅れている理由は正に本条にある、以前は慣習上逃げ出した婦女は永久に飼養主から追求されたが、この規定によれば、一カ月間他人のもとに隠れていれば、飼養主は誰が逃走婦女を保有しているか解らず、よって請求することができないのでその婦女に対する権利を失う。本条は下級婦女に悪質なる飼養主から逃走する権利を与えたものと言うことができ、婦女の人権を尊重した規定である、しかしながら上級婦女についてはこの規定の適用はなく、従前どおり永久に飼養主は追求できると解せざるを得ない、それは上級婦女が高価なものであって、その損害が飼養主にとって大きいからである。

もっともこの規定は、新たなる所有者が前



第十一条（占有権の消滅）、占有権は占有者が占有の意思を放棄し又は婦女の所持を失うによりて消滅す。

第十二条（所有権の内容）、所有者は法令の制限内に於て自由にその婦女の使用、収益処分を為す権利を有す。

(解説) 所有権は客体たる婦女を全面的に支配する権利であつて、婦女をどのようにでも利用できる混一なる内容を有する。しかしながら、全くの家畜状態におくことは許されず(このことから婦女と獸類とを交接させることは法の禁止するところとなる)生きていくための食糧を十分に与えなければならぬ。使用とは労働に従事させることであり、収益とは賃貸等により法定果実を得させることである、また処分は売りに出すことである。婦女といえども勝手に殺すことは許されない、生命は全地球よりも重いからである。

女は所有の意思を以て之を占有するによりてその所有権を取得する。無主の上級婦女は国の所有に属する。

(解説) 婦女は満十八に至るまでは父親の所有に属し審査以前は取引の対象としてはならない。審査後も一応父親の所有に属するが、審査後に取引の客体とならぬうちに父親が死亡した場合、その婦女は無主の婦女となる。満十八才以前に父親が居ない場合は国に属し審査直後無主の婦女となる。また正当なる権利者(父親、所有者)が婦女に対する権利を放棄した時は、その婦女は無主の婦女となる。国の所有に属した上級婦女は競売される。

婦女を奪われたときは、所有婦女返還請求の訴により、婦女の返還及び損害の賠償を請求することを得。

は婦女の全身につきその持分に応じたる使用を為すことを得。

（解説）一般に婦女は価値を有するので、父親、売主から買主へ売買されるのが普通であ

第十六条（共有物負担）、各共有者はその持分に応じて婦女の管理の費用を払わなければならない。

(解説) 管理の費用とは婦女の用に具する拘束具、食糧等である。衣服も着用させる場合は含まれる。一年間管理の費用を払わない共有者は以後、共有婦女に対する権利を失うのが慣習である。

質権は契約によって生ずる担保婦女権であるから、金融の手段に用いられる。

の担保として債務者より受取りたる婦女を占有し、且その婦女につき、他の債権者に優先して自己の債権の弁済を受ける権利を有す。



第十八条（質権の目的物）、質権は譲渡することを得ざる婦女を以てその目的となすことを得ず。

（解説）譲渡することを得ざる婦女とは取引価値のない婦女のことである、不可の品位の

### 四馬孝妖美異色画集

女体浣腸責め図絵

略号

大中判印画紙焼付八枚一組

略号

女体浣腸羞恥場面

略号

大中判印画紙焼付四枚一組

略号

女体浣腸羞恥場面

略号

大中判印画紙焼付四枚一組

略号

美少女羞恥責め 悦虚絵巻

略号

美しき嗜虐生賛

略号

妊婦の美しき媚態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

女学生浣腸二態

略号

婦女や老女はこれに属する。質権者は債務者が債務の弁済をしない時は、質婦女を換価しその代金を以て優先弁済に充てるのであるから取引価値のない婦女ではその目的を達することができない、債務者は質入の際に

羞恥責め絵巻五態

略号

浣腸責め図譜五態

略号

女体浣腸羞恥場面

略号

女性切腹時代風俗画

略号

大中判印画紙焼付五枚一組

略号

倒錯美緊縛画集

略号

大中判印画紙焼付五枚一組

略号

「花と蛇」力作画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

女体吊り責め画集

略号

して婦女の品位を示す公正証書を提示すべきである。慣習では上級婦女と下級婦女の間で、質権の効力には差違がある、本法もそれを認めている。

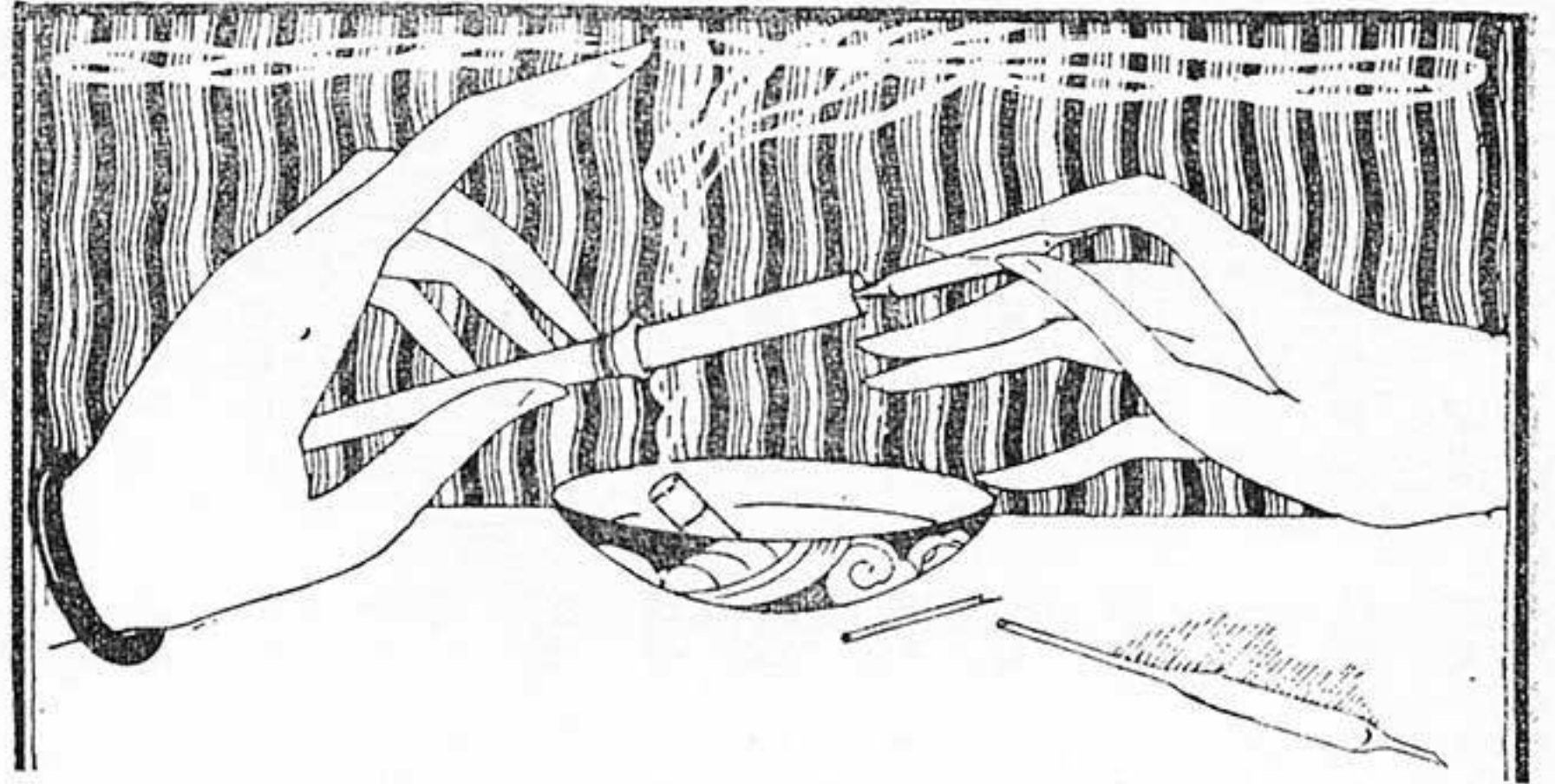
第十九条（使用収益権）、質権者は、質権の目的たる下級婦女を自由に使用、収益を為すことを得。上級婦女については債務者の承諾がなければ自由に使用及び収益を為すことを得ず。

（解説）上級婦女と下級婦女のこのような違いはいずれもその価値の差から生ずるものである。以下債権の利息請求権、流質契約（二十条、二十一条）が下級婦女についての認められ、上級婦女に認められないのも同様である。

今回は一応、第一編婦女に対する権利のみのお知らせに止めます。何分にも学会、講演等で、私も忙がしく走り廻らねばならず、これに掛りきる暇がありませんので、ご諒承下さい。第二編、婦女に関する契約。第三編、婚姻。第四編、婦女に対する刑罰。は、暇を見つけ次第に解説を付け詳細に報告致すつもりで居ります。

◎お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社宛へ——。





## 義談六鬼

## バラバラの話

## 団 鬼 六

この前、あそこに書いたあの描写がまずかったのかとうろたえたものだが、実はその事ではなく、彼等の用件は全然別のもので、Eという人物に面識があるかという事について彼等は私に尋ねるのだった。

Eという男には友人の一人に紹介された形で、私は二度か三度逢った事がある。思い出すさえいまましい男で、私はまんまとこの男に五万円ばかりペテンにかけられたのであった。いや、貸した金が戻らぬというだけの事だから、ペテンにかかったとは断定出来ないが、計画的にやられたような気がして、私の所へひょっこり首を出した親しくしている元やくざにこの話をした所、よし、俺に任せ

ておけ、とEの所へかけ合いに行った事がある。元やくざが、取ってくるぞと勇ましく、Eの所へ出かけてくれたのはよかったが、結果、Eにうまくまるめられた恰好になり、一緒に酒を飲み、いい気嫌になって私の所へ帰って来ると、「あいつは決して悪い奴じゃないから、もう少し、待ってやってくれよ、先生」と逆に私の肩をたたくようにしてぬかすのであった。全く阿呆らしくなって来て、その後、仕事に追われるまま、Eの事は忘れてしまっていたが、その時、私がEにひっかけられた事情を、その筋の人達は問い合わせたため、私の所へやって来たのである。

何か別の詐欺事件なんかで、Eはどうとう

ついこの間の事だが、一寸したショックを受けた。東京の私の仕事場に突然、刑事が数人、訪問して来たのである。こういう場合、エロ作家がびっくりするのは当然で、やはり



警察へしよつびかれ、Eの余罪を調べるために刑事達が走り廻っているのだろうと私は思った。よくある事であり、私は、何かほっとしたような気分で、彼等にお茶をすすめ、悠々と煙草をふかし、ひっかけられたといつても、わずかな金額で、私しや、それ程、恨みには思つてませんよ。などとわざと気前の良いようないい方をし、「詐欺なんてするような悪い男だとは、Eはどうしても思えないんですがね」ともいった。実際、Eは悪人めいた不快な印象の全くない奴で、ひっかけられた方でも、自分が完全にペテンにかけられたと気づくまでには、相当な時間を要するのである。

私はこれまで随分と色々な種のペテンにかけられたが、ペテンにかかりやすい者とかかりにくい者との間には性格の差があつて、ペテン師は、相手と一言二言しゃべっているうち、こいつはカモになりそうだとか、こいつは駄目だとか、敏捷に判断が出来るようである。いくら欺されても欺されても、性懲りもせず、ペテンにかかりつづけている人があるかと思うと、一度もペテンにかかった事が無いのに人を見たら泥棒と思え式で、一寸した取引をするに当たっても、相手を徹底的に調査

し、観察してからでないと落着かないという人もいる。

大体、ペテン師という奴は、容貌や風采が品よく整い、弁舌さわやか、というより、あまり風采は上らず、どこことなくモタモタして、しかも醜男、という種の方に、人はひっかかり易いようだ。前者は人に警戒心を起させるが、後者は、人に安心感を抱かせるらしい。つまり、美男子で手八丁口八丁は詐欺師らしく、醜男で動作も鈍いというのは詐欺師らしくないからであろう。私もこれまで随分とペテンにかけられたが、ひっかけやがったのは、ほとんど風采の上らない不恰好な奴ばかりであった。

よく週刊誌などに出ている結婚詐欺の常習犯という奴の写真を見ても、どうしてこんな変な顔した男に女性が次から次とひっかかるのか不思議に思われる時がある。あまり二枚目過ぎると女性に警戒心がわくので、それは結婚詐欺師として不利な事になるのかも知れない。

この種のペテン師も、手八丁、口八丁で女性に迫るのはそういうふうだ。美辞麗句を並べて女心をくすぐるのは、もう時代おくれなのか、自分の教養をほめかすため、ベラ

ベラと気障な事をしゃべったりするのは逆効果だと心得ているようだ。だが、どの種のペテン師も必ずといってよい程、相手、つまりカモに認識させようとする事は、自分には地位があり、財産があり、快刀乱麻を切る実力があるという事で、これをカモに一応示さなければ仕事やりにくいらしい。だから、そうした事をそれとなく、実に自然に相手に認識させる術を心得ているようだ。××産業取締役社長とか××大学文学部教授とか、そういう出鱈目の名刺を、幾通りも用意しているが、めったに自分の方から相手に示したりせず、一緒に飲みに入った酒場のスタンドへ、それをわざと置いて便所へ行き、相手がそれをふと発見するのを待ったりする。

今、話したEと、一度、酒場で飲んだ事があつたが、その時、彼は気嫌よくグラスを空け、酔つてくると、スタンドの電話を引寄せ、誰かに電話し、こんな事をいった。「君の頼んでいる手形の件だが、もう一度だけ千五百万、面倒を見てあげよう」さも大きな取引でもしているようにいつてるのだが、これは私にわざと聞かせるためのハッタリ電話で、自分というものの値打を相手に宣伝させるための戦術。恐らく愛人の家にも電話し、E



の癖を知った愛人はハイハイとあくびでもしながら、このEのインチキ電話をさばいていたのだろうと思われる。

あとになって、それもインチキだったとわかった事だが、その時、Eは、カウンターに入っているバーテンに、東宝に籍を置く或る有名女優の電話番号を電話帳で調べさせ、そして、バーテンに直接かけさせた事がある。先方が出て、バーテンから受話器を受取ったEは、女優の家の女中らしいのに、「K子を呼んでくれ」といい、「そうか、まだ撮影所にいるのか、じゃ、俺から電話があったと伝えておいてくれ」といって電話を切る。女優の家の方ではEの事など全く知らないのだ。電話に出た女中がまごついて、あの、貴方様は、どなた様で——などといってるのに、自分のいい事だけいって、ガチャリと電話を切ってしまうのだ。

しかし、横で聞いている方で、それを、まさかふざけてやっているとは思わない。あいつ、東宝の大女優を彼女にしていやがる、大した奴だ、と感心させられ、こんな大した男と知り合いになったという事が楽しくなりする。

ペテン師も一流になってくると大したもの

で、女の虚栄心、男の虚栄心の弱点を上手にくすぐりながら、そして、また自分の虚栄心を充分満足させつつ、詐欺をやったのけるのだ。考えれば、ペテン師というのも楽しい商売である。

それにしても、Eが事であろうにバラバラ事件の犯人であったとは、その筋の人達に聞いてもすぐには信じられなかった。新聞に出たその事件は、薄々知っていたが、そういう恐しい出来事は、何か別世界の出来事のような気がし、と同時に、最近ではバラバラ事件というのもそう珍らしい出来事でもないのだから、仔細にその記事を読もうとはしなかったのだ——彼等に聞かされて、あわてて、その日の新聞をも一度取出して読み始め、改めてびっくりしたのである。

何という恐しい事か。美女をバラバラにして土の中へ埋めるとは。一口にバラバラ事件といってしまうば簡単だが、首や手足などノコギリなんかでギーコン、ギーコン切り刻むなど、たとえ相手が死んだ犬や猫なんかでも私なら正視する事は出来ない。まして人間、それも評判の美女、想像するさえ肌に粟粒の生じる思いがする。その夜、私は怖しくて仲々寝つく事が出来なかった。

人間をバラバラにするような怖しい男と、よくもまあ一緒に酒をくみかわしたりしたものだ、ぞっとして、グラスを手にした彼の骨太の手を思い出し、あの手で、美女を魚のように切刻んだのかと寒気が起るのだ。

時折、新聞の三面で見かけるバラバラ事件は、何か絵空事のような思いで見えていたが、それはあまりにも常識を超越した事件であるからであったが、少しでも知った奴がそういう事件を引起したとなると、大分事情が変ってくる。

一度か二度、ピンク映画で、人間をバラバラにする脚本を書いた事があったが、まるで、きれい事でも書いてるようサバサバした顔つきで、その怖しいバラバラ事件をテーマにした。所詮、通俗的な小説とか脚本とかいうものはそういう風は無責任なものなのだろう。一つの殺人事件を素材にしても、リアルに探究すればその底知れぬ怖しさ、憂うつさに嫌気がさし、正常な神経を持つ作者の筆は慄え出して、進まなくなってしまうのじゃないだろうか。

通俗作家の書いている嘘の皮を執念深く剥いでいくとそれこそバラバラに潰れてしまう事になるが、とにかく小説やシナリオなんか



では、簡単に書き飛ばせる事件も、実際的に——大袈裟ないい方でいふなれば芸術的な現実の眼で想像してみると、全くもって嫌悪に耐えぬ、ぞっとするものになる場合もあると思われる。

何時か書いた事もあると思うが、やくざが七口を抜いて喧嘩し合う場面を実際に眼の前で見た或る劔豪作家は、小説の上では何十人もバツバツと斬り倒しているくせに、真っ青になって土間へしゃがみこんでしまい、慄えつづけた。その場に居合わせた私は、彼を見て、何とまあ情ないと顔をしかめるより作家というのは、これもまた一種のペテン師みたいなものだと感じたのである。

それはとにかく、バラバラ事件の犯人、Eに対する参考人の一人として、その筋から幾つかの質問を受けた私は、二三日の間は、何とも不快な気分であった。友人の一人に話したところ、貸した金をやかましく催促したりすれば君もバラバラにされたかも知れないぜと笑うのだったが、おっとりとして、分別ありげな——私にはそう思えたのだが——あのEという男のどこに、そういう残虐性があったのか不思議でならず、また、人間が人間を切り刻むとは、果してこの世の出来事だろう

かと、何だかその辺に血なまぐさい匂いが立ちこめて来たような無気味な気分にもなるのである。

K K誌上に生首マニヤという人の記事がよく出ているが、大抵の事には驚かない私でもどうもあれだけはわからない。以前、知人の一人に、大学病院にあるアルコール漬けにした人間の生首の写真を見せられ、しばらくの間、飯が喉に通らなかつた事もあり、また、或る一人に戦争中斬首の刑に処せられた中国人の首がゴロゴロ地面に転がっている所の写真を見せられ、その写真に触れるのさえ慄える思いですぐに燃やしてしまった事があつたが、どうもああいふものは苦手だ。処刑マニヤとか殺人マニヤとかいうものもあるが、そういう人達は、実際に人間が処刑される場面、殺される場面に立会っても平気でいられるのだろうか。ただ、空想だけを楽しむという程度のものなのだろうか。

だが、どういうわけか、私は、妙にこういうEのような恐ろしい殺人者の何人かと知り合っている。最近では、こういう風に店が変つたか知らないが、西大久保のある酒場へ以前はよく仲間達と遊びに行ったもので、そのRという人の良さそうなマスターと徹夜でマ

ージャンをやったものだ。ところが、しばらく行かないうち、この愛想の良かったマスターが、事もあろうに内妻を絞め殺し、その死体を茶箱につめて車で郊外に運び、川の中へどぶんと投げこむというどえらい犯罪をやつてのけたのだ。

一週間もたたぬ間に茶箱につめられた死体の身元は割れ、マスターは逮捕され、三角関係がこじれてこういう事になったと彼はあっさり白状してしまつたようだが、Rなんて、どう考えても、内妻を絞め殺して川へ投げこむなど、そういう大それた事をやつてのける人間とは思われない。愛想も良く、人当りも良く、世話好きな、実にいい男、という風に私達は見ていた。

そんな事など、あれやこれやと思出してみると、何だか人間というものが不可解になり恐しくなり出して来る。現在、親しく交際している友人達の中に、いや、自分自身の中にも、こうした得体の知れぬ狂暴性が潜んでいて、ふとしたきっかけからそれが突然、爆発して、大事件を突発させるかも知れないという風に——。

大体、殺人事件なんて起す奴は精神の薄弱者であり、異常者であり、また、一種のサジ



ストでは——こんな事を考えてみて、それなら、アブの世界を紹介するKK誌の読者の中にその危険性が——などとも、一捻りして愚劣な想像をしてみたが、更に、もう一捻りして考えてみると、KK誌がこうした犯罪を防止しているとも考えられるのだ。売春禁止法という悪法がなかりせば、かくも性犯罪が増加する事はなかったらうという理屈と同じで、美女を誘拐し、羞恥責めにかけたいという衝動を、花と蛇が押さえている——いや、何もこんな事は、バラバラ事件などに何の関係もない事である。私がいいたいののは、バラバラ事件の犯人であるEも、死体箱づめ事件の犯人であるRも、そうした身の毛もよだつ残虐な行為を行ったものの、生首マニヤでも殺人マニヤでもなく、残虐行為を記載した雑誌(KK誌を含めて)の愛読者ではなかったという事である。

しかし、彼等是一種のサジストである事には違いない。つまり、雑誌を読まないサジスト、いい方はおかしいが、自分のサジズムを楽しめないサジストであったわけだ。こういうサジストは、運命が裏目裏目に出て、窮極状態に追い込まれた場合、恐しいサジズムを発揮してしまう事になるのかも知れない。

とにかく、せっぱつまった人間程恐ろしいものはない。ペテンに何度でもかかるタイプと絶対にかからぬタイプがあるのと同様、せっぱつまれば悪い事するタイプと、いくらせっぱつまっても悪い事の出来ないタイプとがあるようだから、人を雇う場合でも、経営者は、人物の見えないところまでよく観察しておかないと、公金を持ち逃げされたりして、ひどい目に合う事になる。また逆に、今まで部下を顎で使っていた会社の部長級の人が相場に手を出して公金に大穴をあけ、解雇されてから、色々な詐欺をやって廻って、最後にはプールの脱衣場の中から、三百六十五円しか入っていない財布を盗んで、警察にあげられたという人がいる。財布を盗まれたのは私であった。

あんな善良そうに見える人が、と、誰の眼にも映ずる人が恐ろしい事件を巻き起した例も多いが、そうかと思うと、戦争中、敵陣へ切りこみをかけ、数人を日本刀でぶった斬ったという勇ましい人が、現在、工場の守衛をやって、細々暮しを立てているというのもあるし、かつては、やくざの大親分で斬った張ったの世界に身をさらしていた人が足を洗った映画俳優として結構稼いでいるという人もい

る。

話は随分と外れたが、EやRが、大犯罪者となってしまうた事を見て、つくづく人間とは、見かけだけではわからぬものだという感を深くしたわけである。これまで信用していた友人に欺された事など数えてみて、その数の多さに驚くのだが、それは相手に対する誤解から、すべて生じる事なのだ。

自分をこよなく愛してくれていると思っていた女性が、実は全然、愛してなく、彼女の想いは全く別の男性にあったという事などは人生にはさらにあり、夫婦の間でも、自分達夫婦は本当に愛し合っているのかどうなのか結婚後十年たっても、さっぱりわからんというのがまた実に多いようだ。Mだと思って、プレイを重ねていたのに、実はその女性、Sの性情の方を持っていた、という事も、私の経験の中にあった。

誤解という言葉が出たついでに書くが、ついでの間、道を歩いていて、ピンク映画の看板をふと見ると、「鞭打ちと縛り」という題のポスターに脚本、団鬼六、とあり、ハテ、こんなもの書いた覚えはないが、とYプロに問い合わせてみると、それは私が「奴隷妻」という題で書いたものであり、それを配給会



社は、団鬼六のものだから例のやつだろうと、浅ましいばかりによく判る題名をつけてくれたのであった。これは、あまり出来のいい脚本ではなかったもので、私の方から題名は、そっちで作ってみてくれ、といってあったから文句はいえないわけだが、如何に商魂をむき出しにするとはいえ、少し、どぎつ過ぎると思わず苦笑してしまったが、その次の「消えた女体」という題で書いたものが、Yプロの方で「お姉ちゃん蒸発」それが配給会社の方へ渡って、「ダブルドッキング」と何が何だか、さっぱりわからぬ題に書き直され、すでにポスターにも刷られてあった。脚本を読んで、こういう題がふさわしかろうと、配給会社の専務がつけたものらしいが、誤解などというより、昔、英語の教師をやった事のある私でも、その題名の意味はすぐに理解出来なかった。ドックに船が入る事にひっかけて、寝床へダブって入る事か、などと思っただが、これは酒場のホステスの間の流行語になっている事で、ソ連の宇宙船がランデブー飛行した事から来たものだ、と、配給会社の係りの人に何だか要領の得ない事を教えられ、自分の浅学を恥じ入ったわけだが、それはそれでいいとしても、一体、それは映画の

内容とどういふ因果関係があるのかと、こっちは、眼をパチパチさせている。いささか手違いして、雑誌に載った脚本の題名と、封切った映画の題名とが違ってしまった。

話は変わるが、一月号に辻村氏と私とのやり取りが対談という形で載った。テープで録音したものではなく、辻村氏特有の語り口であつた形にされたものであり、団氏に対し失礼の描写あれば許されよ、とも断わつてあつたが、ああ、やってるな、と私は辻村流の筆法をニヤニヤして読み、さして気にもとめなかつたが、これが、丁度、熱海でロケーション中の助監督が私の家へ寄り、一寸、借して下さい、と持つて行つた事から、これもまた奇妙な誤解を招く事になってしまった。

ロケーションが終り、ピンク女優のT子とS子、それに監督が、お茶漬けを御馳走して頂戴、と私の家に寄つたまではよかったが、腹ごしらえが出来たあと、「ね、先生、私達をズベ公呼ばわりはひどいわよ」と、助監督に貸してやつた箸のKK誌を紙袋の中から取出してふくれ出すのであつた。

何も女優にKK誌を見せなくともいいものをと、助監督に対し腹立たしくなつたが、私は彼女達を誌上においてズベ公呼ばわりした

記憶はない。彼女達に教えられて、もう一度KK誌を開けてみると、辻村氏と対談の中で、私が左近麻里子嬢をピンク映画に入らないかと口説いたという風になっていて、ピンク映画にはズベ公めいたのが多いが、貴女には清純なものしか感じられない云々と私がしゃべつた事になっていた。

ありや、えらい事を書きやがつた、と私は、いささかうろたえ、これは半分フィクションだから気にするな、といったが、何時もズベ公役ばかりさせられているT子は、煙草の煙を、プカプカと盛んに吐き出しながら、「何よ、このモデルさんとでれでれしちゃつてさ。全く歯が浮くわ。私、先生って人、見損なつたわ」と吐かすに及び、私は、酸っぱく唇をとがらせた。

彼女達は、映画館に坐つて、灯りが溶暗し始めると、いとも簡単に虚構の世界に自分を没入させる事が出来、喜劇を見ては大口を開けて笑い、悲劇を見ては、さめざめ泣く事が出来るらしい。こうして、辻村氏の一文を見ても、そして、そこはフィクションだと弁明しても、自分の現実感覚は麻痺し、辻村氏の書かれたままの情況と対談がそこにあつたよう信じて疑わないのである。それが辻村氏の



語り口のうまさなのだろう。だが、二人の女優に、よくもまあペラペラと（左近麻里子嬢相手に）調子のいい事をいってるわ、眼に見えるようだわ、と皮肉られたりして全く私は苦り切ったのである。

——あの時、私は始めて、辻村、箕田両氏と逢ったわけだが、カメラハントなど読んで想像した辻村氏と、逢って見た感じとは大分違っていた。違っているといえば時々、カメラハントで辻村氏の筆で顔をのぞかせていた箕田氏においても然りで、何時か辻村氏の文章の中で、箕田氏がやって来たモデルに一万円札を半分に引き裂いて渡し、この次やって来た時、あと半分は渡してやると次の逢う瀬をはっきりモデルに約束させたというのがあった。

なかなか洒落た事をする人だと、私は彼の輪郭を想像して、恐らく英国製の黒地の洋服をびったりと着こなし、黒いソフト、黒い眼鏡、口髭なども貯えて、外国煙草を矢鱈にくゆらせ、一寸したアルセーヌルパンみたいな人だと思っていたが、全くそれとは違って体は小柄だが、八風吹けども動かずといった堂々とした胸幅を持ち、和服姿で銀煙管を横に咥えれば、さぞ似合うというような明治時代

の米相場師みたいな人であった。

一万円札を半分に引きちぎって女に渡すような気障な事の出来る人ではないように思われる。辻村氏は、時々、雑誌に写真が出ていたけれど、それは私の眼には高利貸に転向した元やくざの親分みたいに何となくごつい人に見えた。ところが写真というものは当てにならないもので実物は春日八郎をうんとしにくくしたようないい男で、柔和に眼をしばたきながら京都の呉服屋のぼんぼんみたいに柔らかない関西弁を使う人で、あの調子で色々と女性を欺すのではないかと想像出来たが、とにかく写真とか文章とかでその人を判断する事は誤りである。

誤りといえば、辻村氏が私の鬼六談義を読んで、団氏は実に自分を出している。私もかなり自分を出したつもりでいるが、ああまではっきり正体を出す勇氣はない、という意味の事をいわれたが、それも一つの誤解だと思ふのだ。

私は、鬼六談義などで自分の正体を出そうと思った事は一度もないし、（花と蛇の如き羞しい小説を連載している所からしてもそれは妥当の事と思うが）ただ鬼六談義に出て来る文体の自分臭さが自分を出し過ぎていると

いう風な誤解のされ方をしたのだろうと思う。自分を出す事はなるべく避けようとしているのに文体にくっつく自分臭さはどうしても取除く事が出来ない。

花と蛇を連載して、もう四年にもなると思うが、編集長の箕田氏とは手紙のやりとりだけで、逢ったのは、あとにも先にも、あの熱海での出会いが始めてで、幾度も仕事で関西へ行きながら、彼と逢うのを避けていたというのも天を恐れぬ悪魔小説を連載している手前、あの男、少し、阿呆と違ふかいな、と見られるのが恐ろしく、羞かしかった故でもある。それだけに一種の露出症のように見なされ、生いたち云々まで記載されてしまったとするなれば、正直、これはあまりいい気分のものではない。

ま、こうした誤解は別にどうって事はないけれど、さっきいったピンク女優のズベ公問題には閉口し、辻村氏にこの件において謝罪さす意味で、彼を雲助にでもして、ピンク映画に出演させ、また、いつも女体を縛っては一人で楽しみ、読者を羨ませがらせている罰として、逆に彼を縛り、ピンク女優にメチャクチャに責めさせてやろうかとも考えているのである。



しかし、何といっても、熱海でふと見せられた辻村氏のリアルなコレクションには驚かされた。辻村氏宅にある膨大なコレクションにくらべれば、彼の持参したものなど氷山の一角に過ぎないものだろうが、左近麻里子嬢に対する縄さばきを見ても、そうしたコレクションを見ても、彼は全くのプロで、私なんかとは日を同じうして語る人物ではないようである。

早速、その事を、丁度大阪へ仕事に行く事になった友人のTDに話した所、彼は後学の

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

ためぜひ見て来ると喜び勇み、大阪へ着くやまず箕田氏に電話し、彼と共に辻村氏宅へお邪魔に上ったらしい。TDは芸能界の売れっ子で毒舌家で名を売り、これも色々と誤解されて高慢チキな男だとレッテルをはられていたが、さすがに辻村氏のコレクションには参ったらしい。何かどえらいものを見せられ、マニヤであるTDの神経は昂ぶったようだ。東京へ戻って私の所へ電話して来た彼は、「彼の所まで行った甲斐はあったよ。驚くべきものを見た。ああ、よかった、よかった」

大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

と唸り、それをまだ見ない私を盛んにひがませるのだった。

何か、すばらしいご馳走をホンのすこしお裾分けして貰い、そのうまかったことを自慢した相手が、早速にそのフルコースを賞味して来て、逆に自慢されたような奇妙な気持ちになってしまったものである。

バラバラ事件を書こうとして、何時の間にか例によって筆は脱線し、表題のようにバラバラの話になってしまった。

—失礼御免—

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。



## マニアの夢

J・R・D・C

## 入会案内



須磨山実

秋晴れのある朝、私はいつものように朝食をすまし、アパートの一室で汚れたオシメとオシメカバーをゆっくりと洗濯し、押入れに人目にふれないように干して外出しようとしてフト郵便受を見ると、次のような郵便物が入っていたので、私は非常に驚きました。奇クは十年以上、愛読しているのですが、本名と、まして住所も明記したこともないのに、どうして私がオシメカバーマニアであることがわかったのでしょうか？

え、読者の皆様「蛇の道は蛇」ですって。

ええ、そうかも知れません。読者の皆様ならどうなさいますか？ もしアパートに変な奴がいて、他人の信書を盗んで読む人がいたら……。考えてもゾッとしますが、幸い無事私の手に入って何よりもホッとした私でした。そして、ふるえる手つきで封を切ったのでした。何故って？ 表記は私宛の正確な住所と名前でしたが、裏面を見るとK・K読者会「J・R・D・C」となっていたので、外出をとりやめ急いで自分の部屋に戻り施錠して、とるものもとらず封を切ったのでし

た。しかし自分でもかなり昂奮していたものとみえて、茶びんを引っくり返してしまいました。したが、それにもかまわず急いで中の文を取り出して読み始めました、息をはずませながら……。きっとマニヤの皆さんなら、私と同じような心理状態は理解なさいますことと存じますが、いかが？

では「J・R・D・C」よりの手紙文を全部そのまま公開させていただきます。

## 前書

前略 突然の御手紙を貴殿様に差上げまして本当に驚かれたことと存じますが、私共も貴殿と同様にK・Kの愛読者で、同じ「オシメカバー、メンスバンド」フェチ愛好者であるという前提のもとに話をすすめてゆきたいと考えています。私どもの調査では間違いないとは存じますが、万一、貴殿にこのようなフェチ趣味がないといわれるのであれば、この手紙を破り捨てて下さっても結構です。幸い愛好者でありましたら、早速、本会に御入会なさいますように私達発起人一同お待ち申し上げていますので、よろしくお願い申し上げます。

尚、本会の会名は「J・R・D・C」と命



名、つまり (JAPAN・RUBBER・DIAPER・CLUB) の略称でありまして、スマートに、あくまでフェチ会員のための誠実な会でありまして、不真面目な方や会の運営に違反される方は、入会をお断りすることがございますので、あらかじめ御承知下さいませ。次に誤解のないように申し上げますが、入会するしないはあくまで貴殿様の自由意志でございまして何かの都合で入会したくない方、後日入会したい方など、いろいろのケースがございましょうけれど、たとえ御入会なさらなくとも、貴殿様の秘密はお互いに厳重に守るよういたしますが、御住所を変えられた場合は速かに本会にお知らせ下さいませ様にお願い申し上げます。万一、住所変更未届のために秘密が他人に洩れることがありますが、当会としては責任はもてませんし、当会も迷惑がかかることとなりますから、くれぐれも御注意下さいませようお願いいたします。御入会後の退会は御自由（御結婚、その他の理由により）ですが、その場合、入会金はお返しいたしませんので御了承下さい。尚、別紙の如く来る×月×日午後×時より同紙明記の場所にて「J・R・D・C」設立準備委員会を開きますので、役員の方は

もとより一般希望者も御参集下さい。独善的になるといけませんので皆様の多数のアイデアにより、より楽しい会としてゆきたため、くわしい会則等をとりきめたいと考えていますので、よろしくお願い申し上げます。

## 御入会希望者殿

顧問	箕田 京二先生
〃	辻村 隆先生
指導	竹野ひろ子先生
〃	山本阿津子先生
発起人 会長	赤井 茂氏
〃 副会長	並原新一氏
〃 副会長	安田隆夫氏
〃 会計部長	原由貴子氏

## 本会の運営と目的

前述にて御理解下さったことと存じますが、当会に御入会希望者は続けて読んで下さい。

①会員相互親睦Ⅱ人生の悩み苦しみも、こうした同好会々員の集合により、お互いに親睦をはかり、閉塞的ではない希望を持つて明るい人生を送るため、心から語り合うことが大切だと考えられますので、いろいろのアイデアをもち込んだ会合を開きたいと考えています。会合の場合は各自着用（取替用と

して一枚以上、持参）して参集のこと。

②物資共同購入及交換会Ⅱおしめカバーや生理バンド等、買いにくいものを、希望者にはメーカーより安く共同仕入をして、市価より安く良い品を手軽に入手出来るし、交換市等も面白いアイデアである。その他、情報交換等。

③プレイ希望者同好会Ⅱプレイ希望者は、お互いの理解の上にて他人に迷惑にならないように出来得る。強要はしてはならないのは申すまでもない。写真をとる場合、決して顔を写してはならない。

④入会金二千円也、他に毎月一回位、会合し実費会費（一回千円以内）を、その都度、申し受けます。

別紙申込書に御記入の上、御返送下さい。

○

以上が私宛の手紙の全文でした。ほんとうに驚き桃の木、山椒の木……全く到れりつくせりで、顧問の先生方始め発起人の方の顔ぶれは、既にK・K誌とは切っても切れない顔なじみ？の方々ばかりで、本当に心強く思いました。外出も忘れた私は夢中で入会申込書を書いていました。



痴

ち

人

じん

の

糧

かて

## 山本一章

## —別離の宴—

北摂の山波にうっすらと白い衣が懸り、六甲おろしが吹き抜ける寒い夜のことである。北陸での苛酷ないたぶりに疲労し切ったアケミも、十日ばかりの平穏な生活に漸く元氣を取戻し、百合子やセツコと共に、夕食後の一刻をテレビに向っていた。大山が女ばかりのその部屋へ入って来たのはその時だった。「みんなに相談したいことがあるんだが：

...

「えらい改まって、どうしたの？」

最年長の百合子が尋ねる。

「誰か鄭さんとこへ行ってくれないか？」

「いやな人だわ。とてもひっこくって、無茶

苦茶するんだから。でもどうして？」

百合子が代表である。大山は言い出しにくいのかしばらく黙っていたが、女達の視線が返事を求めて、彼の上に集まっているのを感じて口を開いた。

「皆がいやなら仕方ないが、大事にすると云

ってたよ」

「何日位？」

「多分、一生——」

女達は黙ってしまった。百合子さえも、意外な大山の返事に言葉が出なかった。鄭の残忍さを知っている三人にとって、彼の囲われ者になるなんて考えただけで、ぞっとしたからである。

「断われないんなら、大山さんが選べばいいじゃないの」

百合子が捨て鉢に呟いた。大山がこんなこ





とを云い出す以上、のっぴきならない事情があるのに違いないと思えたからである。そして彼が選ぶとすれば、自分かセツコのどちらかになるだろうことも、女の直感で覚っていた。彼がアケミを一番愛しているらしいことは疑いなかった。

「それもなあ——」

「遠慮することないわよ。さっさと決めてしまった方が、すっきりするわ。ねえ、そうでしょう？」

アケミとセツコが頷いた。

「うん……」

大山の態度は煮え切らなかった。鄭のような男の女になることは、並大抵の決心じゃ駄目だとわかっていたし、それよりも、今まで一緒に暮して来た三人の中から、一人を選んで離別することの残酷さに心が痛んだからであつた。鄭からの申出の金額は、特に収入源のなくなっている現在、大山にとって大きな魅力ではあつたが。鄭には断れればいい——大山は息づまる空気の中で、結論を出そうとした。

「抽せんしたら、どうかしら？」

百合子は、大山の気持を見抜いたように云つた。そしてマッチ箱を畳の上にぶちあける

と、その中から三本を手にして一本を短く折つた。

「短いのを抽いた人が行くのよ。鄭さんは三人の中で誰でもいいんでしょう？ アケミさん、セツチャン、これで決めてしまった方が氣持がいいじゃない？ さあどう？」

百合子は、三本のマッチの軸を長さが分らないようにして指に挟んで出した。思い切つたようにセツコがその一本を取った。長かつた。

「さあ、いよいよ、わたしとアケミさんだけになってしまったわね。ちょっと待ってよ」

百合子は、指に挟んだ軸を持ち直した。アケミが黙って一本を抽く。長い。

「わあ、云い出しっぺえになったわね。ううっいやだ！」

しかし百合子の表情は、そう変っていないかつた。彼女の指の中に残された一本も、長いものであることを大山は知っていた。セツコが長いのを抽いた後で、百合子は大山の顔をちらっと見て、短いのを長いのとすり代えてしまったのである。大山は、百合子の心情が愛しくなつて、もう鄭には断るべきだと思つた。

「さあ、もう決つたんだから深刻がることな

いわよ。わたしが行ったら、鄭の奴を尻に敷いてやる。でも大山さんも時々は来てよ」

「もう断るよ」

「今更何云つてゐるの。決つたことは決つたこと。人生なんてこんなものよ。案外、わたしが一番仕合せになるかもしれないわ。ちよつといやな奴だけど」

百合子は笑つたが、アケミもセツコも笑えなかつた。

「お姉さん、大山さんに断ってもらつたら」

「変なこと云わないでよ。それよりも、最後の欲送会を開いて欲しいわ」

「いいよ。どこへ行きたい？」

大山にはちよつと未練があつたが、百合子の決心を見て思い切つた。

「ここでもいいの。鄭さんとこへ行くのはいつなの？」

「できたら明日。電話したら鄭さんが迎えに来ることになっているんだ。勿論、裸で受取ると云うんだから用意はいらない」

「じゃ、わたしが行くまで、アケミさんとセツチャンを、わたしの目の前で責めて欲しいわ。わたしも手伝うから」

「変な送別会だな」

「構わない？」



百合子はアケミとセツコを交互に見て尋ねた。

「いいわ」

セツコの返事に同調してアケミが頷く。

「容赦しないわよ。アケミさん、体の方は大丈夫？」

「ええ、もうすっかり」

「大山さん、加減しちゃう駄目よ。わたしのためにね。わたしの気持ちわかるでしょう？」

話は決った。アケミとセツコは、この奇妙な送別会の準備のため浴室へ向った。生いけにえ贅は清潔でなければならない。

「どうして、あんなことした？」

「あんなことって？」

「マツチのことだよ」

「わかってたの？ いいわよ。それより今夜は可愛がってね。阿呆な女でしょう？」

大山は百合子の手を両手でしっかりと握った。故意にアケミに勝を譲った彼女が不憫でならなかった。

（馬鹿な奴、人間ってどうしてこうも悲しくできているんだろう。余計なことなんだ。全く余計なことなんだ。そして人間だけしか演じることのできない喜劇なんだ！）

「鄭さんに交渉してみるよ。せめて半年位で

帰してくれるようにな」

「そんなこといいのよ。わたし……」

百合子は、ちよつと涙ぐんだ。

○

二つの白い裸身が、両手を上にして敷居の上に立っていた。両手が肩幅の間隔で、棧にしっかりと縛りつけられた半吊りである。二人の向きは反対で、アケミが夜具の敷かれた寝室の方を向き、セツコがそれに背を向けていた。二人共口を割って縄が頬に食い込んでいた。部屋の中はガストروبで暖かった。

「大山さん、さあ始めて！ 滅多打ちよ」

百合子の一声と共に、大山の手にした革バンドがセツコの尻に炸裂した。ビーン！

「ウウウウッ！」

セツコの体がそり身になる。それを追うように、革バンドが連続して双丘を打ち据えた。遅しい臀部に忽ち赤い条痕が浮かび出て来る。その打撃に力の加減はなかった。双丘から太腿へ、そして背中から肩へと、非情なバンドの音が移動する。

「ウウッ！ アウウッ！ ウッ、ウッ、ウ」

苦痛に女体が硬直し疼れんする。そして遂には彼女の太腿に白い糸が引いた。セツコの頭がのけぞり、半ば失神状態になったのを見

た大山は、次にアケミの後に廻わる。

「随分思い切って叩いたわね。血が滲んでるじゃない。こんなに強く叩いたのは初めてでしよう？」

百合子はセツコの前へ廻わると、その乳房を両手でぎゅっと握った。セツコの縄を咬まされた顔が揺れる。百合子の手と目が下へ降りた。

「セツチャンはサンパツの手間がいらないからいいわね。うぶ毛もないみたい」

ビシッ！

「ウウウッ！」

大山の革バンドが今度はアケミの尻を打った。狂ったように響く連続音は凄惨だった。百合子は背面を打たれているアケミの前に立つと、その突き出た乳房を掴んだ。打たれる度に彼女の手が苦痛の疼れんが伝ってくる。「にくらしいわ。いつ見ても綺麗な体をしてるわね。わたしが男だってもきつと惚れるわね。ここも可愛いわ」

百合子の手は意地悪く動く。その間も大山の打撃は続けられていた。アケミの裸身は、一定の間隔を置いて、きゅっきゅつと緊張し震える。百合子の指にその苦悶が伝わる。

「こんな娘を他人にまかせるなんて大山さん



も罪な人ね。自分だけのものにして置けばいいのに。アケミさんが二十、セツチャンが十九だったわね。若いわ。おばあちゃんはお払い箱ってわけよね。淋しいなあ」

気性の烈しい彼女に似合わないその感傷を耳に痛く聞きながら、大山は目の前のふくよかな肌を打ち続けていた。

「ウウウーン、ウッウッウッ！」

両手を上にした、この半吊りの姿勢は、鞭打ちの前には全く無抵抗である。臀部、腰、背、肩、胸部が、打撃から逃がれることができずに伸びている。バンドはその晒された肌を非情に鞭打って、朱の条痕を刻み込んで行く。

「あああ、もうメソメソするのは止した。さあ、アケミさんもセツチャンも、徹夜で責めてあげるから覚悟するのね。やけくそなんだから」

百合子は大山から革バンドを受取ると、苦しげに震えているアケミの裸身に再び鞭打ちを浴びせかけた。

ビシッ！ ビシッ！ ピーン！

「ムムムッ、ウウウム」

「セツチャンは直ぐ洩らしちゃったけど、アケミさんって、さすが飼育されて強いわね。」

彼女、完全なMね」

バンドの尖端が鋭く乳房に当る。ビリビリと全身が震える。一しきり打ってから百合子はアケミの体を調べる。もうセツコの倍以上の鞭を受けているアケミだった。

「まだね。本当に責め甲斐のある娘だわ。にくらしいと思ったらないわ。今夜はアケミさんを滅茶苦茶にしてあげる」

彼女のために自分を犠牲にした百合子の気持が大山にはよくわかった。そしてまた自分の心を引きつけて離さないその女体を、その故に責め殺してしまいたいような衝動すら感じ始めていた。愛の変態である。

「よし、やるぞ！」

大山の目が血走り、その輝きの奥に残忍な執念が燃え上った。最初は百合子に引きずられるようにプレイに入った彼であったが、今はもうその主役の立場に立っていた。

「セツコにも手伝わすか？」

「じゃ、アケミさんだけを責めるの？」

「いいだろう」

「そうね。その方が、面白いかもしれないわね。でも、この間の旅行から間もないけど、大丈夫かしら？」

大山の意気込みに今度は百合子の方が、少しためらった。

したためらった。

「大丈夫さ。アケミ、どう？」

大山が半吊りのままのアケミの顎に手を掛けて尋ねた。アケミは僅かに頷く。

「よし、セツコを解いてやれよ」

半吊りから解かれたセツコは、肩を撫でながら大きな溜息をした。

「お姉さん可哀想ね。いつもお姉さんばかり責められるんだから」

「いいのよ。彼女好きなんだから。そうでしょう？」

大山は笑いを浮べながら、アケミの口に咬ました縄だけを解いて尋ねた。

「さあ云ってごらんよ。虐めて欲しいと」

「……」

「さあ何とか云って！」

大山の手が、烈しい音をアケミの頬で鳴らす。往復ビンタである。アケミの顔が歪む。

「云わなかったら、云うまで叩くから」

再び、顔が向きを変える程強く叩かれる。

大山は手の痛い程の感触の中で、サジスチクな気分を燃え立たせていた。

「どんなひどいことでも……。わたし辛抱して……」

顔を打たれたため、アケミは少し朦朧とし



ていた。しかし、その心の底で被虐の快感を求めて期待しているもののあることを、否定できなかった。

（どんな辱しめでも、わたしは耐えるわ。耐えることができるわ。腹をえぐられても、手足をもがれても、わたしの体は大山さんのものよ。あなたが望むなら、お望みどおりのことをわたしの体でやってみて欲しいの。死んだって構わない。たったこれだけしかない体なの。そしてこれだけしか、あなたにあげるこのことができるものはないの）

彼女もまたマゾの陶酔に踏み入っていた。

「よし、覚悟はいいね？」

大山は再び顎に手を掛けて念を押すのに、彼女は頷いた。

「セツコ、綿と絆創膏と蠟燭を持ってきてくれ」

○

暗闇の中にY字型の女体が棧からぶら下げられていた。後手に縛られたアケミの逆吊りの姿である。ストリーブの赤い光だけが、その裸身を妖しい影を作って照らしている。顔は鼻孔だけを残して目も口も絆創膏で塞がれ、彼女の表情を見ることができない。そして耳にも固く綿が詰め込まれているため、彼女は

殆んど音のない世界にいるのだった。

「少し暗いわね。体で明りを持って貰ったらどう？」

百合子が目の前の太腿を撫でながら云った。

「うん、そうだな、二本使うか」

大山はセツコが持ってきた蠟燭の中から新しいのを二本手にした。細手のものと太いのとである。手間はかからなかった。百合子がマッチで点火する。焰がアケミの半身を照らし出す。

「さあ、叩くか」

大山は革バンドを百合子に渡し、自分は縄の束を手にして背後に立った。

ビシッ！ ビシッ！

縄の束は重い音を逆吊りの女体に鳴らす。開脚の犠牲者は頭をのけぞらし、胸を張って苦痛に耐える。二本の蠟燭の焰が無残な影を揺れさせる。

パチッ！ パーン！

百合子の革バンドが女体の前面に撥音を鳴らした。前後からの鞭打ちである。ゆっくりと刻み込むような打撃が、臀部に背に太腿に腹部に、所嫌わず動いて行った。悶えは部分的な筋肉の震えにだけしか表現されない。声

もなく、鼻から洩れる呻きだけが肌の鳴る音に低い伴奏を加えていた。

「セツちゃん、そこのが倒れそうだから、しっかり立てて」

細手のが立て直される。その時、同時に二本の蠟燭から蠟滴が浸り落ちた。小刻みの疼れんが無防備な女体を襲う。そしてアケミもまた、セツコが演じた自然の生理を溢れさせたのである。

「ふふふ、やったわね。噴水ってとこね。さあ、どうせ濡れついだから、残すことはないわよ」

液体は主に彼女の肌を濡らし、喉から頬へと流れた。蠟滴は止まず、彼女の柔肌を埋め始めていた。特に少し傾斜した細手の方の速度が早かった。そしてそれは幾度か立て直されなくてはならなかった。

「あられもない恰好ね。セツちゃん、蠟燭を取って綺麗にかくしてあげたら」

「かくすって？」

「見えないようにするのよ。そうだわ、その前にいいことをしてあげる。卵を暖めてもらうの」

百合子はかつて自分が旦那からリンチを受けた時の、惨めな茹で卵のことを思い出して



いた。彼女は白色レグホンの生卵を持って来ると大山に手渡した。

「これはあんたの役よ。手荒くしちゃ駄目よ。割れちゃうから。少し冷いかな」

大山はその思いつきに微笑しながら、逆吊りのままのアケミの傍に近づいた。

セツコが蠟燭を傾ける。蠟滴がポトポトと透明な膜を作り、肌の上で白く固まる。肌がピクピクッと軽く震え続ける。やがてその白い蠟の膜が大きく広がる。

「密封ってわけね。蠟がかえったらどうするかな？」

百合子のおどけた言葉に、大山もセツコも声を立てて笑った。

アケミの体が一旦降ろされた。畳の上に横たえられたその体は濡れて尿の臭いを発散していた。

「洗ってやれよ。くさいからな。お風呂の火は消してないだろう？」

「ええ、じゃセツチャンと二人で連れて行くから待っててね。顔とここはこのままでもいいでしょう？」

大山の顔くちを見て、百合子とセツコがアケミの両腕を左右からかかえて立たせた。アケミはよろめきながらも歩くことができた。

「よく暖めてやれよ」

声を掛けてから大山は寝具の上に横になったが、興奮状態は醒めそうになかった。今夜の彼は異常に燃えていた。

○

外へ連れ出して晒し者になると大山が云い出した時には、さすがの百合子も顔をしかめて云った。

「そりゃちょっと無理だわ。こんなに寒い晩だから病氣しちゃうわよ。風もあるし、ここでもいいじゃないの」

「いや、やってみよう、少しの間でいいんだから。北陸じゃ雪の中で礫つけられてたんだから大丈夫だろう」

「でも、却ってこんな夜の方が寒いわよ」

大山の考えは変りそうになかった。

「少し酔わせて置くか」

「大山さんもひどい人になったものね」

口の絆創膏だけが外され、その唇にウイスキーが堰ごと当てがわれた。溢れた液体が顎を伝ったが、かなりの量がアケミの喉に吸い込まれた。

「蠟が剥がれちゃったわ」

セツコがびっくりしたように声を出した。「濡れたからね。いいわよ。その代り絆創膏

を貼って置いてよ」

横たわったままのアケミの足の方にセツコが廻わったが、アケミは逆うことなくセツコのするがままに体を委ねていた。ウイスキーが効果を現わしたのか、彼女の湯上りの肌に益々赤味がさしてきた。

「さあ、もういいだろう」

再び、口に絆創膏を貼りつけられたアケミは、後手に簡単に縛られた裸身を起された。

「何か着せてあげたら」

「裸のままでいいよ」

「素っ裸で晒すの？ 残酷ね。わたし寒いからここで待っているわ。セツチャンは？」

セツコは大山の顔をうかがった。

「僕一人でいいよ。その縄を取ってくれ」

大山は縄束を小脇に抱えると、顔面を絆創膏で包まれている哀れな女体の背を押した。

さすが外は寒く、服を着ている大山でさえ思わずぞくぞくと体を震わせた。静寂と暗闇に包まれた裏庭を、無残な一人の裸女と非情な男が横切って行く。よろめきながら押されて行く裸足の女の後で、男の下駄が固く凍ったような土を蹴って音を立てる。窓の明りではんやりと浮び出している柱の前で二人は止った。アケミのために立てられ、彼女が初めて



縛られた思い出の柱である。アケミはその前に立たされると、柱の後で手首を縛り直された。縄尻が両肘にも掛けられて、後へしぼられる。女体は胸を張った。大山は無言で作業を続ける。首、胸、腹部、膝上、足首と縄が裸身を柱に強く固定して行く。そして柱を背負った姿が完成する。

「寒いか？」

「……」

バチッ！ バチッ！

突然、大山の手が無抵抗の女の頬を打つ。

女の顔が、みじめに左右に動く。

ビシッ！ ビシッ！

大山は女の頬を打ち続けながら、熱い感動が胸にこみ上げてくるのを感じていた。切なかった。そしてその切なさが更に彼の血を燃え立たせるのだった。

（アケミめ、アケミめ！）

男は、身動きできない女体を柱と共に抱いた。その胸の中で女のかすかな悶えがあった。男の唇が突き出た乳房に押しつけられる。そして腹部にも。

（好きだよ。本当に好きなんだ）

男の秘かな呟きが、女に聞えたかどうかかわからない。

やがて佻しい下駄の音が、犠牲者を寒空に残して遠ざかって行った。

寒かった。心の底まで凍って行くような寒さだった。柱の根元を固めている冷たいコンクリートが素足の感覚を奪い、痛いような空気が痺れて行く腕と手を凍らせた。鞭打たれた全身と、腫れ上る程ぶたれた頬が、酒の酔いの中でジーンと音を立てていた。意識は朦朧としていた。

（許して！ 許して！ 死んでしまふ。可哀想なわたし。ひどい大山さん）

○

「鄭さんは、わたしをどうするかしら？」

百合子が現実に戻って心細そうに尋ねる。

「さあね」

「毎日責めるつもりかしら？ どうせいろんな道具を用意して、わたしに使うんでしょうね。いやだ、いやだ」

「……」

「案外、お嫁さんだから大事にしてくれるかもしれないんじゃないかしら」

セツコが横から慰めるように云った。

「だって二号なんですよ。洲本の別荘づきの奴隷にする気だわ」

大山は黙ったまま横になっていた。どうせ

鄭のことだから百合子の体だけが目当てで、道具以下の奴隷にしようと考えていることがはっきりしていた。それに三国人のことだから彼女の体で金儲けも考えているかもしれない。いわば女体の売買なのである。M性の——鄭には話して置いた方がいいだろう。どうせ無駄にしても。

「わたしって、今夜は本当にどうかしてるわね。もう云わないわ。セツチャン、もう一度裸になって！」

「なんだか今日のお姉さん、恐いわ」

セツコはそれでも柔順に洋服を脱いだ。縄を手にした百合子は、セツコを坐らせると右手と右足、左手と左足を別々に固く縛った。

「大山さん、もうアケミさんを許してあげたら？」

「そうだな」

「きつとまいてるわよ。死んじゃったら、ことよ」

大山は立上ると大きくのびをした。そして百合子が、縛ったアケミを仰向けに引っ繰り返すのを眺めた。女の羞恥の姿勢であった。「ゆっくりでいいから、よく介抱してあげるのよ。そうでないと彼女病氣してしまうわ」



百合子はセツコに手を掛けながら大山に云った。大山の姿が部屋から消えた。

「セツチャン、恥かしい？」

「ううん」

「若いわね。もう今日が最後だから、うんと可愛がってあげる。蛇の刺青が涙で濡れる程ね。でもこんな所に刺青をするなんて、大山さんも随分変態だわね。尤も外からは見えなから、どうってことないけど。アケミさんのは歟だったわね。わたしだけがないんだから、ちょっとひがむわよ」

百合子は話し掛けながらも、手の動きを止めなかった。

「オネーサン、止して！」

セツコが、不自由な体を左右に振って悶える。

「駄目、駄目。余り騒ぐとお尻を叩くわよ」

「ううっ。やめてえー」

「セツチャンも女になったわね。動いちゃ駄目よ」

ピシャッ！ ピシャッ！

力一ぱいセツコの尻が叩かれた。そして再び……。

「自分じゃわからないけど、とっても綺麗だわよ。食べてしまいたい位。アケミさんののも綺麗だけど、でも生れつきの白って、普通の人はいやがるけどいいものね。子供みたいだし不潔感がないんだから」

「ムムムムッ。ああっ。あああ！」

女による女への辱しめである。ストープで部屋の中は暑かった。遂には百合子も素裸になって、その執拗な行為を続けるのだった。

その頃、大山はアケミの傍に立って、懐中電燈で照らしながら、無残な女体を見つめて

いた。

「もうまいった？」

「……」

「叩くよ」

「……」

バチッ！ バチッ！ バチッ！

アケミの顔が左右に動く。顔を殴るという最も屈辱的な仕置きを、彼女は逃れることができずに受けていなければならなかった。全身が冷え切ってぶるぶる震え続けていたが、頬に当る苦痛も辛かった。耳の栓だけが外される。

「これでも愛している？」

アケミの顔が縦に動く。

「馬鹿だなあ。くそっ！」

その言葉は大山の自嘲だった。

柱から解かれたアケミは、全身が麻痺し切っていて自分で立っていることができなかった。気力もなく倒れかかる裸身を、大山が抱きかかえる。

「冷いなあ。可哀想なアケミ」

大山は抱きかかえたアケミの冷い体を、力一ぱい抱き締めた。

（どうしてこんなにまでこの女を虐めなければならぬのか。どうしてこんな目に逢いな

## 天星社刊 〽限定版グラビア写真集〽 在庫案内

- 山原清子『刺青の魅力を探る』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」  
 二女緊縛『女斗緊縛競艶写真特集』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」  
 「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」  
 M写真集 女王様に飼育される日々 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



がら、この女は愛を消そうとしないのか」

ぐったり力を抜いた女体を抱いたまま、大山は百合子らのいる部屋に戻った。

「早かったのね。どう、アケミさん気を失っているんじゃない？」

「大丈夫」

百合子の、セツコへの露骨な責めは終わってなかった。セツコの口は絆創膏で閉じられていた。

「少し暖めてあげるといいわ。この部屋、暑い位だから恰度いいじゃない。セツチャンのような恰好で、ころがして置けばいいわ」

「えらいハッスルしてるじゃないか」

「ウフフフ。最後の夜なんだから」

冷え切ったアケミの体が、今度は二つ折れにされて、右手首と右足首、左手首と左足首が束ねて縛られる。そしてセツコと同じようにストローブの傍で仰向けに倒された。

「卵を出して置いた方がいいわ。うまくやらないと割れちゃうわよ」

しかし円い生卵を割らずに取り出すことは難しかった。

「そうね。女の子にさせるようにしたら」

百合子はセツコを責めながら指図する。

「駄目だな。少し見えているんだが」

「じゃあ、割るしかないわね。そっとするのよ。傷をつけちゃ可哀想だから。中味は飲んであげたら？」

その作業は困難なものだった。なま温い黄味は大山の胃袋に納ったが、殻の処置は百合子の手も借りなければならなかった。

「やっぱり茹で卵にした方が楽ね。でもこうして出すのも楽しいんじゃない？」

「馬鹿なこと云うなよ」

アケミの体がセツコの横に並べられる。

「さあ、セツチャンの蛇は、もう溺れそうだから、今度はアケミさんの蠍に泳いで貰うわ。うわっ！ 随分冷え切っているわね。」

百合子の手がアケミの体に掛る。セツコにしたと同じような動きが始まる。大山は蒲団の上に体を横にして、そのショックな女達の体を眺めていた。

（百合子の奴、やけくそになってるんだな）

「アケミさんって完全にMだわ。ひどい目に逢ってエキサイトしているんだから。どう、こう二つ並べたところは見事じゃない？ 泣き濡れた蛇蠍って映画の題みたい」

「もう一つ並べたら？」

「うふふ。じゃ大山さんが縛ってくれる？」

百合子は二人と同じようにポーズを取って

大山が縄を掛けるのに協力した。彼女は既に二人と同じ状態にあった。大山は三つの女体を、そのまま俯伏せにして並べた。

「いい眺めだよ。しばらく、そうしてるんだな」

「ねえ、お願い。姉妹にして！」

百合子が感極まったように叫んだ。

○

大山にとって、余りにも刺戟の強い夜だった。それが去って行く百合子へのはなむけであつたにしても、彼自身、男としての若さが失われていないことの満足感もあった。男と女、雄と雌、——単純な、ただそれだけの結びつきの中で、人間だけがどうして道德的意味づけを必要とするのか。求めるものと求めるものが結びつく方法に、何故人間の文明が邪魔をしようとするのか。変態も常態も、それが人間の文化ではないのか。大山の考えに睡魔がけだるく襲ってきた。三人の女が浴室へ去った明け方の一刻である。

百合子の離別の日は始っていた。

△あとがき▽しばらく中断していた「痴人の糧」を続けることにしました。種々御意見や激励を下さった諸兄姉に厚く御礼申し上げます。今後とも卒直な御意見をお聞かせ願いたいと思っております。よろしく。





## 一、動機

今、私は机にもたれて、この夏から秋にかけての奇妙な、素晴らしい宗教的体験を思い起

## 失意の人生に光りを賜る美しき教祖

女

め

神

が み

北 林 一 登

すと、頭の芯の方がジーンとしびれて来て、何とも云えぬ恍惚境に襲われるのです。不思議な感動、不可思議な喜び、自分の人生を根本から揺り動かし、変えてしまったこの体験

を他人に語らずには居られないような気持。特に、この雑誌の読者なら、私の今の心境を必ずや理解して頂けるに違いない。いや、むしろこの不思議なる宗教M・M教について私の知る限りを読者にお伝えするのが、現在の私の義務のような気もして、拙いペンをとる次第です。

私、折口誠は今年三十七才、某生命保険の外交員として働いている男です。仕事は割と順調にいつて居りまして、月に三十万円から四十万円の収入になる事もあります。勿論、歩合制のセールスマンですから、月によっては五、六万円の時もあります。しかし、私がこの業界に入ったのは、昭和二十六年ですから、足かけ十六年間もセールスマンをやって来た訳です。こう長期にわたると、自然にベテランの部に入り、駆出しの人達とは比較になりません。粒々辛苦して貯めたお金で株を買い、昭和三十五、六年のブームの時は一寸まとまったお金も出来ましたので、土地を買って家を建てました。東京郊外の閑静な住宅地に自分の家を持てた喜びは、大へん大きなものでした。妻も迎えました。可憐な妻は、よく努めてくれましたが、子供が出来なかった事が一寸残念でした。しかし、家の借金も



払い終ると自家用車も買入れ、時には妻と共にドライブがてら横浜へゆき、中華街で食事をして帰るなど、はた目でみたら羨しいような夫婦であったことでしょう。

ところが好事魔多しとか。その妻が、去年の秋にふとした事から床につきあっけなく帰らぬ人となってから、私の人生は急に下り坂となって来ました。セールスと云う仕事は、

気持ちが暗い時には成果の上らないものです。まして妻が居なくなったら今、誰の為に仕事をするという目標がなくなったように、仕事にはりが出て来ません。こうなると成績は落ちる一方だし、昔儲けた事を思い出して手を出した株は曲るし、信用取引で三百万円位もやられたでしょうか。益々いらだって、商品取引の小豆に手を出したり、競馬をやってみたりという有様でした。しかし落ち目の時は何をやっても駄目なものです。酒を飲んでもうまくはなく（もともと私はあまり飲めませんが）弱り目に祟り目の日々でした。

そんな或る日、あれは夏も終りに近い頃でした。会社のデスクで、ぼんやりほおづえを ついていて、後からポンと肩を叩く人がいます。やはりこの保険会社の内勤事務をやっている女性で、美樹という、若く麗わしい人

でした。

「折口さん元気ないわね。どうしたの？」

「そう見えるかね。あなたみたいに、若くて美しい人が羨しいよ。としかねえ、こう暑くちゃあ働く元気も出ない」

「駄目ねえ。まだ若いのにそんなお年寄りみたいなこといって。奥様のことが忘れられないんですよ」

「女房？ 忘れたね。それより美樹ちゃんとデイトがしたいよ」

「よし、してあげるわ。その代り晩ご飯はおごるのよ」

そんなわけで、簡単に二十二才の女性とデイトということになりました。やはり嬉しかったですね。若い美しい女性とデイトが出来るといふことはうきうきする程楽しいことでした。ところが、美樹の方には一つの意図があった、私につき合ってくれたようでした。つまりM・M教への勧誘という目的のために……。

中年の妻を失ってしょぼくれている男性など、若い女性にとっての所謂興味の対象とはなり得ないでしょう。しかし、その時の私は彼女が馬鹿に素直にデイトにつき合ってくれたので、手ぐらひは握れるだろうか。自分に

好意を持っているのだろうか。うまくゆけばホテルへでも……と、おろかしくも妄想は果てしなく拡がり、当日はすっかり若がえったつもりになり、めかし込んで出かけたものでした。

型通り、お茶を飲み、映画を観て、食事を、というコースをすすみましたが、どうも考えていたように調子よくはゆきません。映画を観ながら、そっと手を握ろうとするとピシヤリ。腕をとろうとすれば、するりと逃げてにやっと笑う。掴まえようとあせればあせる程、するりと逃げてしまう小妖精のようでした。最後にお茶を飲みに入った喫茶店で、美樹は艶然として笑いながら、口を切ったのです。

「いかが？ 今日のデイトは……フッフッ」  
「美樹ちゃんはひどいよ。さんざんじらして手も握らしてくれない」

「あら。私そんなお約束、いつしまして？」  
「だって……君はあんまり魅力的すぎる。綺麗すぎて頭へ来ちゃった」

全くその日の美樹は魅力的でした。夏の終りとはいえ、まだ暑い頃ですから薄いピンクのワンピースの衿元から、フワッと匂ってくる美樹の、汗と体臭と香水のミックスした得



もいわれぬ香りは、私の脳みそを爪でガリガリ引搔くような刺戟を与えました。

それに薄絹からこんもりとこぼれ落ちそうな乳房。化粧に使っている乳液の匂いと乳房の匂いが混濁して、私の脳ずいを貫きます。ミニスカートから出ている可愛い膝などは、かぶりつきたいような衝動を私に起こさせます。

「坂口さんは、女の子が好きそうね」

「好きですよ。特に美樹ちゃんが好きなのに、こんなにじらされてはノイローゼになっちゃうよ」

「坂口さんの奥さん、亡くなられてからもう一年ね。可哀想。だから、若い女の子をみると、すぐ頭へ来ちゃうのね。怖い怖い」

全然恐そうでなく、そんなことをいうと私に向ってフーと息を吐きかけます。それがまた、いい匂いでした。女性の口臭というものは、天が与えた最高の香水でしょうか。

「坂口さん、貴方、私がそんなに好きだったら、M・M教にお入りにならない？」

「何ですか、M・M教って。聞いたこともないな」

「新興宗教の一種よ。この頃、凄く流行り出した原理運動などと同じような宗教運動よ。」

私そこに入ってるの」

「入会金や、お布施のようなものが要るの」

「要らないわ。でも入ってから、皆、出したくなるらしいわよ。でもそれは本人の自由意志から出たものよ。強制的にとられるものって何もないのよ」

「よし入ろう。美樹ちゃんに会えるのなら、どんな宗教だっていいや。入りますよ。紹介して下さい」

私は保険の勧誘をするために、一時的方便として創価学界や人の道などにも入ったことがあります。だから、新興宗教ずれがしているというか、こういうのに首をつっ込むのも憶劫とも思いませんでした。それが、まさかこんなことになるうとは神ならぬ身の……。

## 二、入会

山の手線目黒駅で美樹と落合って、軽く食事をすませてから、M・M教の本部のあるこ池田山へやって来たのは、次の土曜日の夜でした。池田山。昔、岡山の池田侯が、明治になってからここへ邸をつくったので、この辺を池田山というとか。都会といっても、この辺りは大きなお邸が散在して、鬱蒼たる木々に包まれているのは、さすがに昔のお邸街

で、都会的喧騒は感じられません。歩く道々美樹が、M・M教について説明してくれたのは……。

「変ってんのよ、この宗教は……覚悟してね」

「どういう覚悟をしたらいいですか？」

「本部の門を一步入ったら、男の人はね、犬か畜生か動物か、何しろうんと程度の低いものと自分のことを考えなければいけないの」

「女は？」

「女性はね、神様になるのよ。女神ね。男性は女性のいうことには絶対的に服従し、尊敬し、崇めるわけね」

「原始の女体崇拜の宗教思想だな」

「御本尊様はアンナ大神様という女の方よ」

「アンナ大神。天照大神の真似だね」

「ひやかさないで真面目に聞いて。今にすぐ真面目になるけどね」

「真面目ですよ。そしてその、アンナ大神様はいくつくらい？」

「二十四、五かしら、よく判らないわ。凄く綺麗な人。神々しい美しさっていうのね」

「しかしどうして、男性が女性を崇め奉らなければならぬんだらう」

「それは女性に対して横暴な男性が争いを好



み、戦争を起し、世界の平和を乱した。真に平和を望むならば、男は女性に対して絶対に優しく服従し、尊敬しなければいけないというのね」

「まあ、フェミニストは概して平和主義者だがね」

「それに女性に対して、えらくもないのに威張っていた男達が起した戦争で、はじめに負けた日本が平和を誓ったけれど、二十年も経つとそろそろ昔の血が騒ぎ出して、戦記物や愛国心、忠誠心が盛んなブームを呼びそうでしょう。アンナ大神様は、それがご心配なのよ。日本を平和国家のままで存続させるためには、男の人の心根を入替えるしか方法は無い。これが大神様の根本思想ね」

「一応筋は通っているんだね」

「それと、戦争中は戦に勝とうという目的があった。結局は、負けたけれど……。戦後は復興という目的があった。しかし二十年以上たつと、一応ビルも道路も家も自動車も、日本も復興したわ。もう現在の日本には何でもあるわ。食べるもの着るもの。テレビからモーターボートまで。でも、一つなくなったものがあるわ」

「そりゃ何だい」

「目的よ。復興という目的よ。人間はいつも何かのために生きているんでしょう」

「そういえばそうだね。僕なども妻が死んでからは生きる目的を失ってしまつて、スランプの連続だものね」

「アンナ大神様は、それを庶民に与え給うたのよ。男達よ、お前達の生きる目的は、女性を崇め敬い奉ることであるってね」

「成程、物質的に満足し切った豚のような男共に、女性のために生きるという目的を指針した訳ですか。一寸面白いですね」

「それが一寸かどうか、じきに判りますわ。」

「ここがM・M教本部のご門よ」

ご門の構えは特に変わったこともない普通の門でした。玉砂利の敷きつめた道が、ずっと植込みの間を玄関に続いておりました。庭の植木の手入れといい、玉砂利の掃目といい実によく手入れの行き届いたお邸でした。信者と覚しき男の人達が白だすきをかけて一心不乱にその辺りを掃除をしておりました。

「みんな嬉しそうな顔をしているでしょう。本当にM・M教に救われた人達は、あんな幸せそうな顔になるのよ。報酬を求めず、アンナ大神様のために働く喜びよ」

美樹が得意そうに説明して歩きました。驚

いたことに、庭の掃除をしている男達は美樹の姿を見ると、さっと仕事を止め、玉砂利の上に土下座をして最敬礼をするのでした。

「君は偉いんだね……驚いたよ」

小声で私が美樹に囁くと……。

「女性に対しては、ここでは皆がそうするのよ。貴方もそうなるわ」

「いやだな、僕は」

「なるわよ、絶対に。まあ今はまだ洗礼を受けてないから、そういう気持ちになれないでしょうけど……そのうちにね。フッ」

美樹は何やら可笑しそうに笑いました。玄関に着くと、また、中からさっと飛び出して来た男の信者が、一せいに平身低頭します。以前赤坂の待合に代議士などとゆくと、女中達が一せいにお辞儀したのと同じで、少し気分のよいものです。

「ステラのミコト様お帰りー」

一人が大きな声で奥に告げます。美樹はここではステラの尊と称されているようです。信者の一人が、さっと美樹のぬいだハイヒールを取り上げて磨き始めます。他の人は荷物をとり、おしぼりを持ってくる者、うちわであおぐ者と、大へんなお出迎えぶりです。勿論これは美樹だけでして、私の方には誰も見



向きも致しません。

さて奥の間で、これも美しい女官のような着物姿の女性に紹介されました。クララの尊とかいうそうでした。

「ステラの尊よりお聞きしております。坂口さん。ご入信の決意に相違ございませんね」  
「はい、相違ありません。よろしくお願い致します」

「この入信の誓約書をよく読んで、ここへ署名、血判を押して下さい」

事務手続きは厳粛に進行していきます。誓約書とは次のようなものでした。

#### 誓約書

一、私は本教団に入会した日より、一切の人間性を抛棄し、すべてをアンナ大神様に捧げます。

一、私は男性としての罪深き自分を卑しめ、この世の最高の存在である女性に対して限りなき尊敬と崇拜の念を捧げるものです。

一、私は争いを致しません。特に女性に対しては絶対的服従を誓います。

一、私は本教団の女神様達のご命令には、例え水火の中といえども、身命を惜しまず命令を実行致します。

一、私は万一、右の条項一条たりともこれを

守らなかった場合は、どのようなお仕置きをも喜んでお受け致します。そのため、命を失うようなことがあっても甘受致します。

#### 坂口誠

以上の誓約書に血判を押す時は、一寸不気味な気がしましたが、しかしためらいを押し進める何か強い力が働いて、私は入信の手続きを完了致しました。クララの尊は静かに立上るといつてくるようにいつて奥へ進みました。美樹は、いやステラの尊は、もうその時はお部屋にはいませんでした。

しばらく行くと大きな神殿造りの部屋があり、信者が数人、熱心にご神体に向ってお祈りを捧げておりました。その時はご神体そのものが何であるのか、よくは判りませんでした。神殿の裏の方へ、クララの尊はずんずん入ってゆき、廊下の突当りを指さして……

「ここは、アンナ大神様や女神様のみがお使用遊ばされますお手洗いです。まず貴方はこのお掃除から始めて下さい。このような尊い場所をお掃除させて頂けることに感謝しながら、一生懸命おやりなさい」

「はあ」

私は変な気分でしたが、昔「人の道」という宗教で、手洗いの掃除ばかりして修業する

話を聞いたことがありますので、あれと同種のものだと理解しました。

さて始めようと思いましたが、道具がありません。クララの尊に訊こうと思いましたが、もう姿が見えません。途方にくれていると、そこへ一人の信者の男の人が通りかかりましたので、そつと尋ねてみました。

「貴方は新入りですね。羨しい。こんな尊いお仕事を最初にさせて頂けるなんて、何と幸せな方か……どなたかご紹介者がおられるでしょう」

「ステラの尊です」

「ああ、ステラの尊様ですか。お美しい方です。ご聡明で……」

その信者は、夢みるようなひとみでいいました。

「お手洗いの掃除の仕方ですね。お教えしましょう。貴方のハンカチを使うのです」

「このハンカチを……」

「そうです。ハンカチでまずこうして塵を拭きとります。そして自分のツバをつけて、この桧の板を磨きに磨くのです。最後に、水でハンカチをよくしぼり、板の上をよく拭きとります。陶器の中も大体その要領でよいでしょう」



私は啞然としましたが仕方ありません。教えられた通り、せっせとお手洗いの中を磨きあげました。もともと他の信者達が年中磨きあげている所でしょうから、汚れては居りません。またたく間にピカピカ光り輝くような美しさになりました。こんな美しい手洗いを使用するアンナ大神とは、どんな方なのだろうと興味はいや増すばかりでした。

### 三、洗 礼

一週間程は、毎日お手洗いのお掃除ばかりして居りました。不思議なもので、教会内の雰囲気はだんだん導化されて、何かしら女性とは尊いものという気持ちになって来て、私はお手洗いを床の間のように磨き上げることに懸命になっていました。その努力が認められたのか、誠意が通じたのか、アンナ大神様にお目通りのかなえられる日がついにやってきました。

私は朝から身心を清めて、肉断ちをし、清浄な気持ちで、その時刻を待ちました、やがてステラの尊にいざなわれて神殿に入りますと、左右に白い着物に緋の袴姿の女神達が居並んで居り、中央一段と奥まった場所に御簾が降りていました。クララ様は中央から三人

目の所に、端然としてお坐りになって居られました。やがて「お出まし——」と云う声と共に、誰かが御簾の中程に着坐されたようすでした。

私は急に威怖に打たれたような気分になって、自然と頭を畳にすりつけて待ちますと、御簾がするすると上りました。するとこの部屋に居た信者達は一せいに「南無アンナ大神様、南無アンナ大神様」と唱え出しました。それが大合唱のようになり、私も知らず知らずのうちに唱名を唱え出して居ました。一段落すると、クララ様の厳やかなお声が命令します。

「坂口誠、頭を上げなさい」

私はおそるおそる頭を上げて、私があんなに心をこめて磨き上げたお手洗いを使用される尊いお方を見上げました。

私はもう平凡な言葉で、アンナ大神様の美しさを称える事は出来ません。十二単衣をお召しになったアンナ様の美しさは、気高さと交り合って、古えの支那の楊貴妃や西施もこれ程の美しさではなかったのではないかとさえ思われました。

今冷静に考えてみると、照明の効果や音楽の神秘的雰囲気で人工的に演出され、作り出

された面もあるのでしようが、その時は無我夢中でした。私はこの人の為なら死んでもいいと本当に思いました。

今の今まで、三十七才の今日まで、私の人生は何と云う空しい人生だったのでしょうか。何の為に生きて来たか。奉仕すべき対象もなく尽すべき相手もなく、只漫然と過して来た日々。これは正に無為です。私はもう救われました。私の奉仕すべき対象は美です。美そのものです。美という絶対的なものが、美しいヴィーナスのような形を伴って、人間界に姿を現したのです。人類が永遠に求めて止まないもの、それは、この美ではないでしょうか。ミロのヴィーナスやローマのヴィーナスは、その希求心の具現化ではないでしょうか。

クララ様は私の身上調書のようなものを読みあげて、新入り信者の紹介をして下さいました。私は顫える声で、例の誓約書を読みあげました。

アンナ大神様からもお言葉がありました。「総てのことを忘れて、私の事のみをお考えなさい」

その声の麗わしさと優しさ。その瞳の静かな輝きと奥深さ。

私は「はい」と申し上げただけで涙にくれて



しまいました。御簾は再び降されて大神様は退座されました。私はふとその時、邪馬台国の卑弥呼女王とはこのような人ではないかという想念が、湧いてまいりました。

さらに一カ月程、私は毎日目黒のM・M教本部へ日参致しました。勿論、昼間は会社に出て、保険の外交に参ります。不思議なもので、一時のような虚脱感は消えて、生活に張りが出てまいりました。夜はアンナ大神様にお会い出来ると思うと、もう昼間から頭の中はその事で一杯です。そして一円でも多くお賽銭を奉納したいという想いで一生懸命やるので、成績はぐんぐん上り出しました。

お賽銭の事は誓約書にも書いてないし、強制もされませんが、信者は皆、夢中でお賽銭競争をして居ります。誰が今日は五万円奉納したようだ。誰さんは土地を売った代金全額を奉納して、アンナ様からお言葉を頂いた。などと云う話を聞くとたまらなくなり、私も幸い家族はなし、喰ってゆける分以上の収入は、全部本部へ奉納して居ります。そして、毎日、夕方から目黒の本部でお掃除にお仕事にと励みますから、小遣いも殆んど使いません。飲んだり、博奕をしたりする暇は全然なく、至って健康になりました。これもアンナ

大神様のおかげです。

さて皆様、お待ち兼ねの洗礼のお話を致しましょう。一カ月程した或る日、ステラの尊より洗礼を受けたらどうかと云うお話がありました。私が一も二も無くお受けしたのは勿論です。

当日は、神殿の間に洗礼の為の道具と設備が、一式持ち込まれました。男の信者は設営までで全員退座してしまいます。私は首の廻りに、床屋で洗髪をする時に使うゴムの前掛けのようなものをして、神殿の間中央のマットの上に寝かされます。丁度仰向けになった顔の上に、赤ん坊がヨチヨチ歩きをする時に使うような、木の丸い輪に足を取りつけたものを置かれ、洗礼、つまり御神酒拝受式の用意万端が整ったわけです。

厳やかな笙の音にアンナ大神が上段の神坐より静々と天降りまし、私の方へ歩いてこられるようです。私は仰向いて寝ていなければならぬので、よくは見えませんが、

やがて十二単衣の袴がふわっと私の顔の上を横切りますと、あたりは真暗になりました。つまり私は、十二単衣の袴で、首から上をすっぽりと蔽われてしまったわけです。何がなんだかさっぱり判らないうちにびたりと

私の顔面が何かに圧迫されてしまいました。

逃れようとすれば十分逃れ得る程度の圧力でしたが、勿論私は動きません。しかしそれくらいが永いのです。まだかまだかと思ひ、じりじりする程で、この暗い中でどうすればいいのかと思うと気が気ではありませんでした。

御神酒は最初は岩清水の流れの如く、やがて溪流となり滝となり飛沫を上げほとばしりました。

私の胸の内は一瞬苦痛と歓喜とが融合って火花を散らします。総てが終わりました。

アンナ大神様は静々と通過遊ばされます。お顔色一つ変えず眉も動かさぬお静かな表情で御座居ました。もっともそうでしょう。最近のように信者が増え、洗礼希望者が多数に上りますと、大神様には、殆んど無駄に流されてしまう御神酒は、ないのではないでしようか。馴れてしまわれるのもむべなるかなと思います。

#### 四、御神体

私共信者は教団本部へ行った時だけお祈りをするわけではありません。自宅にあって常にお祈りをかかす事はいけないのです。ですから朝二時間、寝る前に二時間位は御神体



に向って御唱名を唱えます。勿論我家にも立派な神棚を買って来て祀っております。そして問題の御神体を安置してあるわけです。御神体は何か、しばらくの間は私には判りませんでした。アンナ大神様の御分身がある事はたしかだろうと思われましたが、桐の箱に鄭重に入れられてあり、御神鏡と共にまつられているわけです。

或る日私はステラの尊に御神体の御分身を戴けないかと頼んでみました。自宅で御唱名をするのにどうしても戴きたい。お金は必要だけ必ず用意するからと……するとステラ様はクスクスお笑いになって一寸小首をかしげて日数を数えられました。来月の三日頃ならいいでしょうと云われて……

「この頃は御神体の御分身の希望者が多くてね、アンナ様もほんに難儀な事ですわ」

と、又笑われました。

御神体の御分身を戴ける日が参りました。会計に五万円の拝受料を払込み、アンナ様よりクララ様へ、クララ様よりステラ様へと御下賜下されて来た御分身は、桐の箱に納められ、紫の紐で結んである立派なものでした。私は燃えるような気持を抑えながら我家へ戻りました。風呂へ入りシャワーで冷水をかぶ

り、身心を清めに清めて、御神体に向いました。紫の紐をほどき桐の箱蓋に手をかけました。

中には真白な美しい綿にくるまれ、鮮かな花が咲いていました。ハツとするような深紅の花が……。私は思わず知らず、捧げ持ったままひれ伏してしまったのです。

私は朝も夜もこの御分身に対して御祈りを続けています。そして今や、私の人生はバラ色です。生命力は燃え上り生甲斐に満ち溢れた毎日を送っているのです。

## 五、宮 刑

恐ろしい事件が起きたのは残暑もまだかなりきびしい或る日の午後の事でした。女神様のお一方で、ルピアの尊と仰せられる、可愛らしくて且つグラマラスなお方が居られました。その日、日中のあまりの暑さとけだるさにお負けになったのか、ルピア様は女神様神殿控の間から、御自分の居室にお下りになり、うとうととおひるねを遊ばされていたので御座居ます。

そこへ、余次郎と云う男信者が、居室のお厠の掃除当番としてやって参りまして、うたたねのルピア様をかいま見たのでしよう。ル

ピア様はお腰のものもしどけなく乱され、涼しい風を入れながらお寝すみになって居られたのか、緋のはかまから目をあざむくまでの白いおみ足が大きくはだけ出ていたわけなものでした。

余次郎はそのお美しさに我を忘れたのでしようか。自分の浅ましく卑しい身分も、この宗教の厳しい戒律も忘れ、けしからぬ振舞いに及んでしまったのです。ところが、ルピア様は睡魔に負けておられた故でしょうか。どんな夢を、ご覧になっていられたのでしょうか。何をどう間違われたか、余次郎をうつらうつらしながら、受け入れてしまわれたのでした。

夢幻から現実にかえられた時、ルピア様はそれが、御厠掃除の余次郎と知って、大変な驚愕のなされ方でした。そして大声をあげて人をお呼びになりましたので、余次郎は一も二もなく取押えられ、教団の戒律を犯したものととして、厳しく処分される事になったのです。

この教団に於ては、神格者である女性よりのご命令なりお許しなりがない限り、このような不心得な振舞いは絶対に禁じられて居ります。もとより生身の現人神ですので、女神



様も御自身からお求めになる必要はおありです。その時には、適宜お氣に入りの信者をお呼びになり一寸御命令になればよい事です。命令は絶対ですから直ちに実行されます。勿論その節には、女神様のおいつけ通りに、事が運ばれるのは当然です。

ルピアの尊様も一人のお氣に入りの男信者に常々お命じになって奉仕させておられたのです。うたたねの最中のこととて、ルピア様はその信者と錯覚されたようだったのです。それだけに御怒りが、激しかったのでしょうか。裁判はアンナ大神様のもとで厳正に行われました。余次郎は全面的に不心得を認め、ルピア様の魅力に負けて戒律を犯した己れの罪におののいて居りました。

判決が降りました。宮刑……。私はびっくりして自分の耳をうたがいました。重罪には違いありませんが、宮刑とはひどい。宮刑は、この教団の最高の極刑であるからです。

刑の執行は四日後に、とり行われました。神殿の間には、いかめしい外科手術の道具類一式が持ち込まれ、医師の免許を持つ女神、つまり女医の方が執刀されました。

恍々たるライトに照らされ、白いシートに蔽われた手術台の側に、高手小手に縛られた

余次郎が連れてこられました。余次郎は最早観念しているらしく、暴れもせず、じっとうなだれて居りました。

いよいよ極刑の開始です。

アンナ大神始め女神様達は壇上でじっとこの様子を見つめて居られました。さすがに息をつめ、声をのんでおられるような氣配を、ひしひしと感ずる事が出来ました。私は余次郎の表情の変化を見逃すまいと、種々の手伝いをしてゐる振りをしながら、余次郎の顔の見える位置についていました。

そしてついに最後の時が来ました。余次郎は勿論、麻酔の影響で痛くはないのでしょうか、メスの閃めきが眼に入るたびに、喜びの表情を現しているようにしか私には思えませんでした。もうこれで、一生涯、男性として失格者になる瞬間だと云うのに、余次郎は眼の中に恍惚の色さえ見せているではありませんか。そして彼はその間、終始「南無アンナ大神様、南無アンナ大神様」と唱名を唱え続けるのでした。

昔の支那の宦官、そのものになった余次郎は、その後どうなるのかと、案じていましたら、矢張り宦官と同じように、教団本部奥向きの、つまり女神付きの雑用係として、日夜

忠勤を励む事になりました。

今までは大体一人の女神様に対し三人の男信者が、軍隊の当番兵のように雑用係として付き、食事のお世話、下着類の洗濯等、あらゆる雑用をやって居りましたが、それも昼だけの事で、女神様も夜の雑用係に男信者を使う事が出来ず、御不自由のようでしたが、余次郎によってそれが解決されたわけです。夜の奥向きのご用は余次郎にということ、この頃はいつも奥に入浸りでございます。禍を転じて福となすとか。

信者連中の中に最近では、羨望の眼で彼を見るものが増えております。中には自分もひとつ、余次郎のような大罪を犯して宮刑処分を受けたい。などと冗談とも真面目ともとれないことをいう男もおります。噂に聞くとこれによりますと、支那の宦官と同じように、余次郎はこの頃せっせと特殊な訓練に励んでいて、熱心にお勤めしているとか……。

M・M教についてはまだまだ書きたいことが多々ありますが、またの機会にゆずりましょう。私は信者の一人として、皆様にもM・M教への入信を、是非おすすめする次第です。



はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

## 連載小説

花

はな

と

蛇

へび

## 団 鬼 六

### 続篇（第四十回）

#### ショーの開幕

静子夫人が三階の広間へ鬼源達に連れこまれて行った頃、庭の竹籬の奥にある例の密室では、すでに桂子のショーが始まっていた。

つまり、土蔵を改造したその密室がショーの第一会場、三階の広間が第二会場というわけで、田代はその夜の客を二組にわけたのである。第一会場である竹籬の密室につめかけている客は、田代が以前から懇意にしている悪徳不動産屋、金融業者、その他浮世の裏街道を渡り歩く一癖ある連中ばかりであった。しかし、彼等は、やはり、やくざ連中とは気

が合わないようで、田代はそこを考え、三階の広間と庭の密室とに客を分けたのらしい。

密室の中につめかけている連中は、やくざ達のように出演者に向かって、どなったり、弥次ったりするような柄の悪さはなかったが、一様に淫靡な薄笑いを口元に浮かべ、仲間同志、何か声をひそめて語り合いながら舞台の上へ好色そうな眼を向けている。

狭い粗末な舞台の上では、バックに紙に書かれた松の木などが幾つか張りつけられて、前髪の若衆姿に扮した桂子が、六尺棒を持って打ちかかる雲助二人を相手に刀を抜き、型通りの立廻りを演じているのだ。

美しい若侍を襲撃している二人の雲助は吉

沢と井上が扮装している。昔、ドサ廻り芝居の一座に加わっていた事もあると、かねがねそんな事を自慢している井上と吉沢は、滑稽なくらいに一生懸命、見得を切ったりして熱演しているのだ。舞台の袖から、それを眺めている銀子と朱美は、時々、全身を動かして、キャッキャツと笑っている。雲助に扮した井上と吉沢の動きが面白いのだろう。

紙で出来ている山賊みたいな髪をかぶり、よれよれの単衣物を尻からげにし、赤禪までして、雲助に似させているつもりになっている。

道中袋を肩にし、黒紋付、道中袴の桂子扮する前髪の若侍が、舞台の上手や下手に逃げ



ようとする、雲助の井上と吉沢は、おっと  
そうはさせねえ、と大手を拡げて立ちほだか  
り、

「ここは地獄の一丁目、身ぐるみ脱いで行き  
やあがれ」

と、これも型通りの大見得を切って、奇妙  
な声を出すのである。

この珍妙な芝居は、川田が面白半分脚本を  
書き、その筋書き通り、井上、吉沢、そして  
桂子が演じているわけで、三人はかなり練習  
をつんだものと思われる。芝居は、一応、三  
幕ものになっていて、桂子の役は、桂之助、  
(実は武家娘お桂)という事になっており、  
井上が熊公、吉沢が虎公、と川田の作ったガ  
リバン刷りの台本にちゃんと書かれてある。  
川田の書いたその脚本に、いささか手を加  
えて読み易くし、以下、少し、紹介してみよ  
う。

—○—

桂之助、白刃を振るって、雲助二人の中  
間を突破しようとするが、敵は意外に手  
強く、桂之助、哀願し始める。

桂之助 「拙者、兄の仇を討たねばならぬ  
身。所持する金子は、すべてその  
方達に渡す。それ故、この場は何

卒——」

熊公 「見逃してくれというのかい。し  
やらくせえやい。最初からそう下  
手に出りやいいものを刀を抜いて  
暴れ廻りやがった。こうなりや金  
は無論の事、身ぐるみそっくり剥  
いでやるから覚悟しやがれ」

桂之助 「おのれ、これ程までに、頼んで  
も——」

虎公 「当りめえよ。手前の仇討ちなん  
ざこちらの知った事かい」

桂之助 「おのれ、下郎！」  
桂之助、再び、刀を振り廻し、雲助二人  
と渡り合う。

熊公、桂之助の背後へ廻り、足のあたり  
を棒でなぎ払う。

あっと叫んで、転倒する桂之助、その上  
へ乗しかかる熊公と虎公、桂之助の手か  
ら刀をもぎ取る。

桂之助 「は、離せ、離さぬか」

熊公 「じたばたするんじゃねえや。お  
い、虎公、この野郎を早くふん縛  
れ」

虎公 「合点だ」

熊公と虎公、刀の下げ緒で、桂之助をキリ

キリ、後手に縛り上げる。

桂之助、狂ったように身悶えするが、雲助  
二人は、縛り上げた桂之助の肩を押さえて  
立ち上らせる。

熊公 「さ、行くんだ」

桂之助 (激しく身を揉んで) 「おのれ、  
拙者を、ど、どこへ——」

虎公 「俺達の隠れ屋へ行くんだ。そこ  
で、身ぐるみ剥いでやるからな。  
さ、歩かねえか」

雲助二人、桂之助の刀を鞘へ納めて肩に  
担ぎ、桂之助を引立てていく。

—○—

ここで一幕が終わり、赤白だんだらの幕が  
引かれる。幕がおりと、裾から銀子や、朱  
美、竹田や堀川が舞台へ飛び出して来て、素  
早く次の舞台装置にかかるのだ。

舞台は、山小屋の中という設定になってい  
て、舞台中央に大きな大黒柱を立てた竹田と  
堀川が、釘と金槌を使って、コンコンと打ち  
つけ始めた。銀子と朱美は、薪や荒むしろな  
どを周囲に配置し始め、陰気な山小屋の中  
の感じを出そうとしている。

そんな所へ川田がかけつけて来て、銀子達  
と一緒に舞台装置を手伝い始めるのだった。



このショーの責任者という形になって、あれこれ指揮をとっていた森田が、そんな川田を見つけて、

「よ、第二会場の方の様子はどうなんだ」

「それがね、親分、向こうの連中は全く手におえませんよ。酒を飲んで荒れ出しやがってね、静子夫人を楽屋まで運ぶのに社長以下ボデイガートを務めるような有様なんです」

ようやく、静子夫人を楽屋に入れる事が出来たが、岩崎親分に大事な客人があり、もう三十分ばかり、開幕がおくれる事になったと川田は云い、

「ここでやっている芝居は、俺が台本を作ったんですよ。何となく気になりましたね」

その三十分の時間を利用して、一寸、のぞきにきたんです、と川田は笑った。

舞台的一幕がおわり、三人の役者が再び登場して、二幕目の芝居の準備にかかり始めると、川田は演出者気取りで、台本を手に持ち彼等に細かい指示を与えるのだった。

「いいな。じゃ、幕を開けな」

川田は、舞台の裾に戻ると、幕の係りになっている森田組のチンピラ達に声をかける。

二幕目の幕が開いた。

川田の作った台本によると、大体、次のよ

うになっている。

—○—

山小屋の戸が開き、雲助二人、後手に縛った桂之助をこつき廻すようにして、入って来ると、土間の上へ桂之助を突き飛ばす。

もんどり打って、転倒した桂之助の胸倉を取って、ぐいと引起した熊公、

熊公 「さあ、若憎、ここで身ぐるみ脱がしてやる」

虎公 「下穿きまで外して丸裸にしてやるから、その恰好で仇討ちに出かけるがいいぜ」

雲助二人、桂之助の衣類を剥こうとして左右からつかみかかる。

必死になって身を揺さぶり、抵抗する桂之助。桂之助の胸に手を当てた虎公

虎公 「あっ、兄貴、こいつは女だぜ」

熊公 「何だと——」

虎公 「どうも男にしちゃ顔が綺麗過ぎるし体つきが柔けえと思ったよ。

こいつは女に違えねえ」

熊公 (桂之助の襟首をつかみ) 「おい、手前は女か」

桂之助 (激しく首を振って) 「ち、違います」

虎公 「なら、どうして、ここが大きくふくれているんだよ」

桂之助 (悲鳴を上げて俯伏せる)

熊公と虎公、互いに顔を見合わせて北叟笑む。

熊公 「女か女じゃねえか、素っ裸にすりゃわかる事だ」

桂之助 「待、待って下さいまし」

虎公 「どうしたい」

桂之助 「——私は、お、女でございます。故あってこのように男に姿を変え

兄の仇を探しております。お慈悲でございます。お見逃し下さいませ」(すすり泣く)

熊公 「おめえ、名は何ていうんだ」

桂之助 「お桂と申します。元、会津藩、

鉄砲組、藤田作右衛門の娘——」

熊公 「おっと、そこまで聞かなくなっ

ていい。聞きゃ成程気の毒な話だ。

おい、虎公、このお嬢さんの縛しめをといてやんな」

虎公 「ええ？ 兄貴、せっかくいいカモが飛びこんで、来たというのに



よ」

お桂は、生氣を取戻した表情で

お桂 「所持致します路銀はすべて差上げます。何卒、お助け下さいまし」

虎公、ふくれ面で、お桂の縄をとく。お桂、背中にかけていた道中袋を外し、中から袱紗にくるんだ小判を出し熊公に差し出す。

熊公、小判を数え出し、

熊公 「へえ、十両か、こいつは豪気だな」

お桂 「そ、それでは、私はこれで――」

お桂、土間に落ちていた刀の大小を抱え雲助二人に一礼するようにして足早に外へ出て行こうとする。

熊公 「待ちな」

お桂 （ハッとして立上る）

熊公 「縄は解いてやるといったが、助けてやるとは云っちゃいねえぜ」

お桂 （顔色を変える）

虎公、茫然と立すくむお桂に近づいて、お桂の抱えている大小をひったくるように取り上げる。

熊公、薪の上に束ねてあった麻縄を取り上げ、笑ってお桂に近づく。

熊公 「一旦、縄を解いてやったのは、

着ているものを脱がせるためなんだぜ」

虎公 「おめえのような別嬪をむざむざ

逃がしちゃ雲助の名折れだ。さ、観念しな」

熊公 「武家娘ってのは、まだ一度も味

わった事がねえ。味は甘いか、しょっぱいか、今夜はしみじみと――」

お桂 （慄えながら）「人、人非人っ。

誰が、誰がお前達などに――」

熊公と虎公、同時にお桂に躍りかかる。

狂気したように暴れるお桂。

『暗転』

舞台の中央の大黒桂に（客席の方を向き）

お桂、麻縄でがんにがらめに立位で縛りつけられている。すでに衣類は剥ぎとられ、乳房に巻いていたさらしも剥がれて

お桂の身にあるものは、胫を覆う脚絆、草鞋、足袋、そして、腰には、鶉色の褌

をしめている。

熊公 「へえ、まわしをしめているとは

驚いたねえ」

「ハハハ、湯文字をつけちゃ男に化けられねえもん<sup>とき</sup>な。だが、鶉色

の褌ってのも色気があって仲々いいじゃねえか、え、兄貴」

虎公と熊公、お桂の足元にかがんで、お桂の胫から脚絆を解き、草鞋を脱がせ、足袋のこはぜを外し始める。

鶉色の褌一つになったお桂を熊公と虎公は面白そうに眺めて、散乱している衣類をかき集める。

虎公 「すまねえな。俺達は身ぐるみ剥ぐのが商売なんだ。おめえの刀やこの着物一切は、有難く頂戴するぜ」

熊公 「大小二本に黒紋付、道中袴、下着も合わせて、古着屋に売りやあまず五両はかたいぜ、虎公。となりや、今日の日当は合計十五両」

虎公 「それだけじゃねえぜ。このお嬢ちゃんを俺達二人が男好きに仕込み上げて、宿場の女郎屋に売ってみねえ。これだけの器量だ。安くみたって五十両にはなる」

熊公 「皮も中身も、銭になるってわけか。こたえられねえな」

二人の雲助、笑いながら、大黒桂に縛りつけられているお桂を見る。



お桂、屈辱に全身を慄わせて泣きじゃくっている。

熊公 「どうだい、お嬢さん。仇を討とうにも、そういう恰好にされちまっちゃうじゃないか。もう仇討ちなんて馬鹿な事は考えず、俺達二人の女房になって、ここで安楽に暮す気になっちゃうだうだ」

熊公と虎公、せせら笑って、桂子の縄を巻きつかせている乳房に手をかける。  
お桂、それをはじき返すように激しく身を悶えさせて

お桂 「な、何をする。人非人、下道！」

熊公 「何だと」

お桂 「私も武士の娘、淫らな真似をすれば舌を噛みます」

虎公 「ああ、噛むなら噛みな。さぞ、おめえの仇は喜ぶだろうぜ。これからは枕を高くして寝られるんだからな」

お桂 (口惜しげに口をつぐむ)

熊公 「ま、よく考えておきな。俺達二人に身を任す気になったなら、その縄は解いてやる」

熊公と虎公、お桂から剥ぎ取った衣類や刀を抱え、小屋の戸を開け、出て行く。  
そのあと、桂子、ハラハラと落涙し、天を仰ぐように

お桂 「仇は、この土地の近くに潜伏するというのが、ああ、何という不覚を——」

お桂すすり泣きながら、何とか柱につながれた縄目を切ろうとして、全身を左右へ揺さぶり始める。びくとも動かぬ縄目に、ああ、と絶望の呻きをあげ、がっくり首を落す。

お桂 (眼を閉じ祈るように) 「——兄上、お桂は、どのような羞しめにあうとも、決して自害は致しません。兄上の仇、源八郎を討つまでは決して——」

お桂、急に顔をあげ、きつとした表情になる。

お桂 「そうです、兄上。私は一旦、あの下郎どもを、いう事を聞くと欺き、この縄目を解かし、隙を見て

——

お桂、そこまで口走り、ふと口をつぐむ。  
戸が開いて、熊公と虎公が徳利をぶらさ

げて入って来たのだ。

熊公 「どうでえ、前髪の別嬪さん。いや、禪をしめたお嬢さん。へへへ、決心がついたかね」

熊公と虎公は、大黒柱の根元にあぐらを組み、徳利の酒を茶碗にくみ合う。

お桂 (眼を閉ざしたまま) 「云う事を聞きます。ですから、早くこの縄を——」

熊公 「ええ？ 馬鹿に聞きわけがよくなったじゃねえか」

虎公 「油断がならねえぜ、兄貴。縄を解きゃ、またさっきみてえに大暴れする気だ」

熊公 「そうはいかねえだろう。刀も着物も取上げられたその姿じゃな」

お桂 (口惜しげに唇を噛む)

熊公 「そうだ。念のために禪もこっちへ頂いておこうぜ。いくら気性の強い武家娘でも、丸出しじゃそう派手に、暴れられねえだろうからな」

お桂 (青ざめる)

雲助二人、立上り、お桂の禪の結び目に手をかける。お桂、逆上したように身を



悶えさせ、

お桂 「そ、そればかりは——ああ、待、待って」

熊公 「俺達に抱かれる決心がついたんだろう。なら、何も羞しが事はないねえじゃねえか」

虎公 「第一、美しいお嬢さんが何時までもそんなものをつけてるのはおかしいぜ。揮ってのは男のするものだ」

雲助二人、結目を解き、くるくる廻しながら外し取っていく。

お桂 (身をくねらせながら) 「嫌っ嫌っ、ああ、解かないで——」

虎公 「へへへ、もうおそいや」

虎公、外し取った鴉色の長い布を丸めて横へ投げ捨て、羞恥に柔かい太腿をすり寄せ、モジモジして、すすりあげるお桂を酒の肴にして、熊公と一緒に手をたたき猥歌を唄い始める。

熊公 「へへへ、さっぱりしたろう、お嬢さん。段々と女らしくなってきたじゃねえか」

虎公 「畜生、いい——してやがる」

熊公、酒の入った茶碗を持って、お桂の肢元にしゃがみこみ、しげしげと見つめて、

熊公 「フン、武家娘だと威張ってやがっても、持物は町人娘とそう変らねえじゃないか。ざましろ」

熊公、手にしていた茶碗酒をそれにパツとひっかける。

お桂、悲鳴を上げて腰をくねらせる。

虎公 「へっへへ、おや、早くもしっばり——」

熊公 「おい、虎公、俺達がこうして久しぶりにうまい酒が飲めたのも、このお嬢様が、こうして身ぐるみ一切脱いで俺達にたっぷり稼せて下さったからだぜ。自分達だけ、飲み食いしちゃお嬢様に悪いや。一つ、お嬢様にも御馳走してあげようじゃねえか」

虎公 (ニヤリとして) 「よし、わかった。今すぐ持って来るからな」

虎公、フラフラと腰を上げ、舞台の上手へ行く。

お桂 「御、御生です。早くこの縄を——」

熊公 「あわてるねえ。おいしいものをつつぷり御馳走してから解いてやる」

虎公、紫の袷紗にくるんだものを持って戻って来る。熊公、それを受取って

熊公 「こいつはな、昔、俺達が江戸で盗人をやった頃、品川の宿に奥女中の一行が泊った事があったんだ。金目になるものがあると忍び込んだまではよかったが——」

虎公 「騒ぎ立てられて、盗んで来たのはこれ一つ、へへへ。だが仲々の値打もんだぜ、水牛の角で出来るんだ」

熊公、それをお桂の鼻先へ持って行く。さっと顔を赤らめて、横へ顔を伏せるお桂。

熊公 「(ニヤリとして) 真っ赤になる所を見ると、こういうものは御存知のようだな。そいつは好都合だ」

熊公が身を沈ませると、お桂、狂気したように肢をばたつかせ、必死にそれをさける。



お桂 (眼をつり上げて) 「無、無礼者

！」

虎公 (キョトンとした顔で、熊公を見

る) 「兄貴、無礼者だ」とよ

熊公 (笑って) 「何が無礼者だ。何も

かも丸出しにしゃがって。こっちは、禪まで頂戴したお礼をしてやろうと云ってるんだぜ」

熊公と虎公、別の麻縄を使って、狂乱したようにばたつかせるお桂の肢を柱に縛りつける。

お柱 「あっああ——何を、何をするっ、

下道、人非人！」

熊公 「さ、もうどうしようもねえぜ。

俺達二人の女房になる決心がつくまで、これからたっぷりといじめてやるからな」

お桂 (狂ったように身を悶えさせ、わ

めきつづける)

熊公 「うるせえな全く。そうやかまし

くがなり立てられちゃこちらの気分が乗らねえ。おい、虎公、このお嬢さんに猿轡をかませな。そう

だ、おめえの赤禪がいいぜ」

虎公 「おっと合点だ」

虎公、禪をくるくると外し出す。

熊公と虎公、お桂の顔を強引に押さえつけ、赤い猿轡で口を縛り出す。

熊公 「さあどうだ。俺達の云う事を聞

く気になったら首をたてに三度振るんだぜ。それまで、この責めはやめねえからな」

虎公、お桂の乳房を鷲づかみにする。

うっと顔をのけぞらせ、ベソをかくような表情になるお桂。そんなお桂をニヤニヤ見ながら、熊公、体を沈ませていく。

—○—

川田はガリバン刷りの台本を片手に舞台の袖から、こうした芝居を満足げな表情で眺めていたが、次に眼を客席の方へ向けた。

舞台上で演じられているなまなましい淫臭に当てられて、客席の中からは吐息と興奮が渦巻きのぼっている。

川田はいい気分になって、ふと、腕時計に眼をやった。もうここへ来てから三十分ばかりも過ぎ、そろそろ第二会場の方で静子夫と捨太郎のショーが始まる頃になっていた。

川田はその進行係という事になっているので、心残りだったが舞台裏の方へ降りて行った。

そこはベニヤ板で仕切られた狭い通路で、

その途中に二本の角材が打ちこまれてあり、次の出番を待っている文夫と美津子が、その一本一本に、きびしく立縛りにされている。

銀子と朱美が、それぞれ寄り添うようにして、メイキヤップをほどこしていた。

「へへえ、こりゃ、いいや」

川田は、文夫と美津子の肢態を見て、片頬を歪めた。

今夜は、文夫も美津子も時代劇調に仕立てて出演させるという計画であったが、すでにその仕度は出来上っている。文夫は、今、舞台上で演じている桂子と同じく、前髪の鬘をかぶらされ、真白の六尺褌をキリキリと腰に巻いていたし、美津子の方は、可愛いいくすだまや、簪をつけた桃割れ鬘、腰には、薄桃色に白梅をちらした可憐な色香を匂わす湯文字をつけていた。

「どう、川田さん。今夜の二人は、一段とひき立つでしょう」

銀子と朱美は微笑を浮かべて、川田の方を見る。枕絵草紙という題をつけて、文夫と美津子を小姓と下町娘という設定にし、実演させるのだと、ズベ公二人は、得意そうにいうのだった。



「成程、こりゃ受けるぜ。二人とも、まるで油壺から抜け出て来たような美男美女になっただじゃねえか」

川田が感心し切った顔つきで、若い二人をしげしげ見つめながらいうと、銀子は、

「それに今夜は、美津子が、いえ、お美津が上位になって、文之助と楽しむという趣向なのよ。私達二人が演技指導してやったのよ。

ま、ゆっくり見物して頂戴」

「拝見させて欲しいが、俺は第二会場の方の進行係にされちまったんだよ。向うだって、結構面白いぜ。静子夫人が捨太郎とフランス式を、おっ始めるんだからな」

「何よ、フランス式って」

ズベ公二人が不思議そうな顔をするので川田はニヤニヤし、いや、これは千代夫人が名づけ親なんだがね、と、その意味を教える。

ズベ公二人は、プツと吹き出した。

「まあ、あの御貞淑な静子夫人がね——」

「そりゃ、傑作だわ。私達もぜひ拝見したいものね」

ふと、銀子が何かを思いついたように、ちらと立縛りにされている若衆姿の文夫と下町娘に扮した美津子を見た。

「ね、こっちも向うに、負けてはいられない

わ。そのフランス式ってやつ、今夜、この若い二人にもさせてみようよ」

そうね、と朱美も面白そうに相槌を打ち、

「ね、あんた達、やってくれるわね」

と、角材を背に立縛りにされている美少年と美少女の間へ割って入り、二人に、その意味を教えるのだった。

忽ち、首も顔も燃えるように赤くして、激しく狼狽し、顔を伏せてしまう美津子と文夫である。美津子は、文夫と反対側へ顔を振らせると、可憐な飾りもののついた桃割れを震わせ、世にも羞かしげに声をひそめてシクシク泣き出すのだ。

「何も今更、羞しがる事はないじゃない。あんた達はもうれっきとした夫婦でしょう。静子夫人なんか初夜早々に、そいつを捨太郎とやらされるのよ」

銀子は、さも悲しげに羞しげに、身をもじもじさせている若い二人を見ながら、楽しそうに云い、これから、それについて、朱美と一緒に、若いカップルへ要領を教えこもうとするのだった。

「じゃ、俺は、第二会場の方へ戻るからな。また、閑を見て、様子をのぞきに来るよ」

川田は、銀子と朱美にそう告げて、客席の

方へ出て行った。

表へ出ようとした川田は、ふと足を止め、もう一度、舞台の方へ眼をやった。

虎公に乳房を熊公に……、同時に責められ、赤い猿轡の中で、声にならぬ呻きを上げ全身に脂汗を浮かべて、柱に背をすりつけつつ、のたうっているお桂。

「どうだ、女房になる決心がついたかい」

と、土間に片膝をつき、お桂の腰に片手を巻きつかせ、淫虐な責めを加え続けている熊公が苦悶するお桂を見上げてせせら笑っている。それでも、お桂は、嫌、嫌、と首を左右に振っているのだ。

「じゃ、仕方がねえ。このまま、極楽へ送りこんでやる」

と熊公は再び攻撃を開始し始め、それと同時に切なげに狂おしげに、キリキリ舞いして柱に背をすりつけるお桂。

こうした淫猥で露骨な責めは、ぎっしりつまった客席を完全に魅了させたようだ。

客席の後方で腕組みし、これを眺めていた森田が、川田の方へ近づいて来る。

森田に気づいた川田は、へへへ、と愛想笑いして、

「如何がです、親分。俺の作った芝居は」



「ま、悪くはないが、これ位の手ぬるさじゃ今夜の客は承知しないぜ。そのものズバリといかなきゃ」

「そりゃわかってますよ」

と、川田は、自分の作った芝居に、ケチをつけられた気分になって、不快そうな顔をし「つまり、俺は、女ってやつは、たとえ武家娘であれ、仇討ちであれ、セックスに直面すると、全くもろくだらしなくなってしまうって事を観客に訴えたいんです」

「訴える？」

森田は、オーバーな事云うな、と笑って、「今夜の客は、秘密映画や秘密ショーを目当てにしているんだ。結局、このあと、話は、こういう風になるんだ」

「えーとですね」

川田は、台本をポケットから出して、ペラペラめくりながら、

「お桂という武家娘は、雲助二人のために、女のもろさを遂にさらけ出し、二人と情交を結ぶ事になるんです」

「成程、そうこなくちゃ面白くない」

川田は、調子づいてしゃべり始める。

——雲助二人は、思いを遂げると、今度は、お桂の仇である源八郎を見つけ出し、これに

お桂の身体を百両で売渡す。その源八郎というのがまたその道の好きな男で、しかもテクニシャン、お桂に色の道を教え、仇に対し、憎さも口惜しさも忘れさせ、肉の悦びに、のたうたせる——そして、この芝居の題名は、返り討ちではなく、返り突きだと、川田は、笑いながら森田に説明するのだった。

「何だか変な芝居だな。まあいい。終ってから、批評させてもらおう事にしよう」

森田も笑って、再び、眼を舞台に向けた。

雲助二人の淫らな責めに遂に屈服したお桂は、激しくすすり上げながら、雲助達の要求を承諾し、いよいよ情事のために土間の上へ荒筵が敷かれるという所まで芝居は進行している。

## 楽屋の中

三階の広間は、酒の匂いと煙草の煙り、酔ったやくざ達のわめき声などがからまって、異様な熱気を充満させている。

「よ、何時まで待たせる気なんだ。人を馬鹿にしゃがって。早く始めろ」

と、一升瓶を手にした人相の良くないやくざがフラフラと立上り、楽屋という事になっ

ている広間の隅のカーテンで仕切られた一郭までやって来て、中へ侵入しようとする。

すると、カーテンの中から鬼源が飛び出して来て、

「もうすぐ岩崎親分がここへお見えだ。それまで待てねえのか」

と、噛みつくようにどなって、酔っ払いを押し戻すのである。

鬼源は、こうして威猛高になると、眼の底に狐火のようなものが、じーんと浮かび、相手を無気味がらせ、威圧するのだ。こうした職業で日陰暮しをして来た人間の持つ特有の怖さだろう。そこで、酔っ払いも、はっとたじろぐが、とにかく、岩崎親分という名が出ると、もう強い事はいえず、すぐ自分の席へ舞い戻るのである。

「一体、岩崎親分は、何を手間どっているんですか」

と、竹簾の密室から戻って来た川田は、その臨時の楽屋へ入って鬼源に聞いた。

「それがやっこしい事になったんだよ。あの親分、東京にいる二人の妾に自分がここへ来ている事を知らせていたんだ」

その二人の妾がさっき、ここへ岩崎親分を訪ねて来て鉢合わせとなり、一寸した事から



口論になって、あわや、つかみ合いが起りかけて、さすがの岩崎親分も中に入ったものの往生しているという。

「田代社長が今、出かけて行き、妾二人の機嫌を一生懸命とっているらしいんだが、全く困ったもんだよ」

と鬼源は、鼻に小皺を寄せて苦笑するのだった。

川田がふと狭い楽屋の奥の方を見ると、紫のしごきで後手に緊縛されている静子夫人が床柱を背にして立っている。こうした喧噪を無視したよう夫人は静かに瞼を閉ざし、凍りついた美しい横顔を見せ、無我の心境に全身を置いていく感があった。

川田は、夫人のその肢態を見て、ほほう、と眼を見はる。立縛りにされている夫人の足元に坐って、煙草をくゆらしながら、楽しそうに夫人を見上げている千代の手で取りつけられたのであろう、夫人は、銀色や金色にピカピカ光るハート型のバタフライを腰につけさせられていた。全裸のまま、客の前に引出すより、そうしたものを舞台衣裳として最初身につけさせた方が効果的だと千代は見たと思われる。それだけではなく、ダイヤのイヤリング、首には、それもダイヤの粒で出来て

いるらしいネックレス、などが飾り立てられていた。それ等は、すべて千代が遠山家の豪華な静子夫人の寝室から持ち運んで来たもので、かつての夫人の所有物であった宝石類を今夜舞台に立つ事になった夫人にちりばめ、一きわ美しく飾り立てたのである。

千代は、陶然とした面持で夫人を眺めている川田を見て、

「どう、今夜の奥様は一段と美しく冴えたようでしょう。このバタフライは、浅草のストリップパーがしていたものを譲ってもらったのよ。奥様にぴったりだったわ」

千代は、そういって、唾え煙草しながら立上り、軽く瞑目している夫人の白い頬を指で押した。

「この次は、網のタイツをはかせてあげるわね。バタフライとかタイツとか、色々と資本がかかるとだから、奥様もしっかり働いてくれなきゃ駄目よ」

千代は、気品のある夫人の横顔をしげしげと見つめて、楽しそうに云うのだった。

静子夫人は、かつての使用人であった川田と千代の手の中にあって、まるで魂のない人形のように無抵抗になり切っている。

「全く、きれいだぜ、今夜の奥さんは」

川田はいかにも感に耐えないといった調子で云った。

艶があり、品よくアップにまいた頭髮。上背のある伸びやかな肢態。ダイヤのイヤリング、ネックレスなどが気品のある静子夫人の美しい容貌を一層気高く綺麗に見せる効果を持ったようだ。ただ、夫人がつけたハート型のバタフライだけが、その気品のある夫人の容貌とアンバランスな感がするが、狂おしいばかりの官能美を客席にまき散らす事は受け合いである。

鬼源は、しきりに時間を気にし、いらした顔つきをしていたが、そうした忿懣をぶち当てるようにツカツカと床柱につながれている静子夫人の傍へやって来た。

「いいか、岩崎親分がおいでになったら、さつき教えてやった要領で客人達の御機嫌を上手にとるんだぜ。ここに集まっている客は、与太者だし、酒を喰らって大分荒れているからな。そうした連中の気分をほぐすのもおめえの仕事だ」

鬼源に夫人は、このショーを如何に演じるかについて、幾度も教えこまれ、念を押されていたのである。見物する男達に対して、彼等の官能の芯をうずかせるような春心あふる



る甘いねだりの言葉、ためらいがちなポーズと積極的なポーズを織りまぜて、夫人に色々客の機嫌をとらせた後、捨太郎とフランス式ベッドショーを演じさせようと鬼源はプランを立てていたのである。

「今夜は普通の見世物じゃなく、つめかけている客は、皆、この道に通じているお兄さん連中だ。ごまかした方法は通用しねえ。おめえもその気になって、必ず捨太郎をその方法で一度落とすちまうんだ。別に飲みこんだって毒にやならねえ。客の前で吐き出すなんてみっともねえ事するんじゃないぞ」

鬼源に次々と難題を吹きかけられる静子夫人は、さすがに美しい眉を苦しげに寄せて、顔を横へそらせてしまう。

「よ、わかったのかい」

鬼源は、夫人の顎に手をかけて、鋭い声を出した。

「——はい」

静子夫人は、うるんだ濃い黒眼をそっと開いて鬼源を見、悲しげにうなづく。

横で、それを眺めている千代は、いじらしいばかりに従順になった静子夫人の美しい瓜実顔と気品のある柔かい鼻筋をぞくぞくする思いで眺めているのだ。

この気高いばかりに綺麗な花びらのような夫人の唇が、見るに耐えない醜悪なもの押し込み、しゃぶり続ける事になるのだと思うと、遂に決定的な破壊を美しいものに加えたという狂おしいばかりに倒錯した快感が千代の身内にこみ上って来たのである。

カーテンが開き、岩崎の所へ出向いていた田代がようやく戻って来た。

「間もなく親分がお越しになるぞ。用意はいないな」

「大丈夫ですよ、社長」

と鬼源は卑屈に笑って云った。

「今までずっと、この美しいスターに要領を呑みこませておきましたからね。安心して下せえ」

田代は満足げにうなずいて、

「ようやくお妾同志の仲も丸くおさまって、親分はここでショーを見ながら、妾二人と祝いの酒宴をはるという形だ。恐らく明け方までの騒ぎになるだろうと思うから、あの手この手で充分に、お妾達の方の機嫌もとってくれなきゃ困るよ」

「へへへ、恐らくお妾達もいらっしゃる事だろうと思って、ちゃんとコツをスターに教えておきましたよ」

鬼源は、田代に、これからのプログラムを簡単に話して聞かせた。最初から捨太郎とやらませるのでは興味が薄いから、始めは静子夫人のワンマンショーの形をとり、果物切りなどの珍芸を披露させたあと、捨太郎と熱の入ったフランス式を演じさせ、十五分ばかり休憩、それから本格的なベッドショーに入らせる、と鬼源は得意げに鼻をピクピク動かして田代に説明するのであった。

「男とのからみは今の所調教はまだ不充分だと思ふんですが、こうして縄つきのままベッドに乗せるんですからね。少しぐらいもたつくのはお愛嬌ものですよ。捨太郎がその点、熟練してますからね。捨太郎のリード通りやってみていいわけだ。ハハハ」

鬼源は、ふと、首を曲げて、隅の方であぐらを組み、ちびりちびりと焼酎を飲んで捨太郎を手招きして呼んだ。

赤禪一丁をしめた裸体の上に半纏はんてんを引っかけただけの珍妙な恰好をしている捨太郎は、しゃっくりをしながら、鬼源と田代の前にやって来る。

「馬鹿野郎、仕事の前に、そう酒を飲むんじゃないぞ」

と鬼源が顔をしかめると、捨太郎はまたし



やっくりをくり返しながら、

「へい、どうもすみません。だが、おら、こうして焼酎ひっかけた方が、うんと力<sup>りき</sup>が出るようなんぞ」

鬼源と田代は顔を見合わせて苦笑した。

その時、広間の方で、襖の開く音。それと同時に、「あ、親分」「さ、どうぞ、こちらへ」と、やくざ達のソワソワし始める気配が起った。岩崎が妾二人を引きつれ、乗りこんで来たのである。

田代と川田は反射的に体を上げるようにして、岩崎を出迎えに楽屋を飛び出して行く。

「さあ、いよいよ仕事だ」

と、鬼源は捨太郎の手から焼酎を引たくるように取り、ぐいと一飲みして、静子夫人の繊細な、美しく冷たい横顔を複雑な微笑を浮かべて見るのだった。

「明日は調教を中止して、一日ゆっくり休ませてやるからな。そのかわり、今夜は、好色で鳴らした岩崎親分が御覧になっていらっしやるんだ。調教師としての俺の腕が認められるか、認められねえかの瀬戸際なんだぜ。俺に恥をかかさねえよう今夜ばかりは腹をすえて、しっかりやってくんな」

半分は捨太郎にも聞かせて、そういうと、

隅に置いてある黒靴の中から注射器を取り出して、それにアンプルの薬液を注ぎこむと、

「悦子、こいつをケツに注射してやんな」

と、先程から、窓ぎわの椅子にぼんやりと坐り、何とはなく不服そうな顔つきになっている悦子に声をかけるのだった。

「何なの、その注射？」

「精力剤をやつさ。何しろ今夜は精力絶倫男と徹夜の大勝負をはるんだからな。育ちのいい元、令夫人のスタミナが心配だ」

鬼源は、悦子に注射器を渡すと、これも、岩崎親分を迎えるため、急ぎ足で楽屋を出て行くのである。

悦子は鬼源に手渡された注射器を持って、おずおずしながら静子夫人に近づいた。

いよいよ底知れぬ深い泥沼の中へ引きずり落とされようとしている夫人は、とくに観念はしているといえ、その端正な白い頬は、さすがに熱っぽく上気し、ぴったりと閉じ合わされている豊かに引き緊まった官能味のあつた太腿が、思ひなしか慄えているようであった。

悦子は、静子夫人のミルク色の柔かい肩に軽く手を当て、夫人をこの運命から救ってやる事の出来ない自分がじれったくなったよう

次に額を夫人の胸のあたりに押し当てて。

静子夫人は、そつと眼を開き、逆に悦子を慰めるように、しつとりと潤<sup>うる</sup>んだ黒眼を悦子に向けるのだった。その静子夫人の、観念しきった微妙な美しさに悦子の心は慄えた。

静子夫人は、悲しげな微笑を口元に浮かべささやくように悦子に云うのである。

「明日は、私、一日調教を休ませて頂けるらしいわ。私のつながれている牢屋へおいでになって悦子さん。フランス語の勉強を致しましょう」

これから地獄の底に真逆さまに蹴落されようとしている運命にあるのに静子夫人は、<sup>かげ</sup>闇の深い濡れた瞳と花のような口唇に柔和な微笑をわざと浮かべて悦子に云うのであった。

「奥様、貴女って人は、何という——」

地獄の底にあつても心の清らかさまで失わぬ静子夫人に悦子の胸は思わず、じーんと痛むのだったが、うしろの方で突然、  
「一寸、悦子さん、あんた一体、何してんのよ」

と陰険な千代の声がする。

「モタモタしていちゃ鬼源さんに叱られるわよ。もう岩崎親分もお越しになっているんだからね」



悦子より、静子夫人の方がうろたえ気味で悦子をせかすのである。

「お願い、悦子さん。鬼源さんが云った通りにして頂戴。静子はもう覚悟をきめているのですから」

悦子は、物悲しげな眼つきでうなずき、夫人の横へ廻って腰を落すと、官能味を持ってむっちりと盛り上っている夫人の尻たぶへ注射の針を静かに差しこんだ。

夫人は軽く唇を噛みしめ眼を閉じて、針の痛さを耐えている。

針を引抜いた悦子が、そのあとをガーゼを使って優しく揉みほぐしている時、カーテンが開いて、田代に川田、鬼源が一緒にニコニコした顔つきで入って来た。何か岩崎親分と話がはずみ、それで上気嫌なのであろう。

「さて、随分と待たせたね。いよいよ出番だぜ、奥さん」

と、川田は馬鹿に張り切って、奥にある果物籠を取って来る。それに鬼源が箆を投げて「今夜は、俺が切らすんじゃないく客人がお遊びになるんだからな。太いのを十本ばかり選んで箆に入れてくんない」

「あいよ」

川田は、立縛りにされている夫人の足元に

あぐらを組み、一本ずつ選んで箆の中へ入れていく。

「台湾から直輸入だというだけあって、今日のは皆んな太くて仲々美味そうだけ。え、奥さん」

川田は面白そうに夫人を見上げて、そんな事を云ったが、夫人は観念の眼を静かに閉ざしたまま、その優雅にも美しい伸びのある見事な肉体を微動だにもさせなかった。

「さ、行こうぜ」

鬼源は、床柱につないである夫人の紫の縄尻を外し取り、軽く背を押す。

「皆様、首を長くしてお待ち兼ねだ。悲しげな顔をせず、ちゃんと胸を張って歩くんだ」

静子夫人は、鬼源に引立てられた恰好で、静かに歩き始める。バナナを箆へ盛った川田がそれを横に抱えて先導し、引立てられていく夫人の周りには田代と千代、捨太郎、それに悦子やマリが、まるでボディガードでも務めるように取巻いて付き添って行くのだ。

一步一步、静かに歩を運ぶ静子夫人は、優雅な美しい容貌をシーンと凍りつかせ、それは死刑台に登って行く美しい女囚のような凄惨な場面にも似ていた。

楽屋のカーテンを川田が開く。川田のあと

から、一步外へ足を踏み出した静子夫人は、広間一杯に埋め尽す男達のむっとする体臭とギラギラ光る熱っぽい異様な視線を痛いばかりに全身に感じ、一瞬、眼まいが起りそうになって足をすくませてしまった。

「へえ、こりゃ凄いい美人だぜ」

「まるで山本富士子そっくりだ」

「こりゃ、たまげた。眼がくらんじまうよ」

広間を埋める男達は、啞然として口を開ける者、眼をしきりにこする者、そわそわと立ったり坐ったりする者、そして、この広間全体は、やがて、興奮の坩堝と化してしまふのであった。

## 桧舞台

鬼源に、しごきの縄尻を取られ、田代、千代、捨太郎達に護衛されたような形の静子夫人は、慄える足を踏みしめるようにしながら埋め尽す男達の中に入り、広間の中央へ向かって進んで行く。

野卑な男達のひしめき合っている丁度その真只中が、これより静子夫人が珍芸を披露し捨太郎と実演を行う舞台になっているらしくすでに天井から、太いロープが一本垂れ下が



っていて、その下にも、酒気を帯びた男達が埋め尽していたのである。

「すみません、一寸、その場所をおあけになつて下さい」

川田は丁寧な頭を下げ、やくざ達に場所を開けさせると、鬼源と一緒に静子夫人をロープの下へ立たせて、素早い動作で、しごきの縄尻をロープに結びつけ、その場に立位のまま固定してしまった。

「さ、岩崎親分、どうぞ、こちらへ」

田代が、会場の一郭で妾二人に二、三人の身内を混えて酒を飲んでいた、岩崎の方を向いて声をかけた。

岩崎が妾二人と一緒に腰をあげると、やくざ連中は、一斉に後ずさりして通路を作る。

手をのばせば、立縛りにされている絶世の美女の脛にまでとどきそうな正面に、座布団を三つ配置した田代は、それに岩崎を中心に二人の妾を坐らせたのだ。特等席というわけだろう。

岩崎の二人の妾は、一人は葉子といい、以前はキャバレーのホステスをやっていた狐のようにとんがった顔つきの眼の細い女で、派手な縞模様のツーピースを着、もう一人は、和枝といい、元、待合の仲居をやっていたと

いう小太りして眼の大きい、河豚を連想させるような女で、窮屈そうな音のする帯をしめた和服姿であった。二人は、さっき喧嘩した事などケロリと忘れたように、森田組のチンピラ達が運んで来る酒を飲み、膳の上の料理をつつき合つて、精力的にペラペラしゃべり合っている。

せつかく来たのだから、面白いものを見せてやる、と岩崎に誘われて、この場に女だてらに席を連ねたのだが、二人とも元は水商売の女であつただけに、こうした見世物は二度三度眼にした事があり、照れるという事はなく、まるで映画館にでも入つたよう、すましかんだ顔をしている。

眼の細い、狐に似た顔つきの葉子はひどく近眼らしく、しきりに眼をしょぼつかせているが、さっき、順子ととっ組み合いになりかけた時、過つて眼鏡を落し、割ってしまったのだ。だから、眼の前で、立縛りにされている静子夫人の容貌をはっきり見極める事は出来ないが、和枝の方は、幾度も、溜息をつくように伸びのある美しい静子夫人の見事な肢体と優雅な匂いに包まれた美しい瓜実顔を眺めて、

「何だか信じられないわ。この女が実演のス

ターだなんて——」

と、小首をかしげ、酒の酌をするため、腰をかがめて来た川田に、

「どういふ素姓の女なの。すごい美人じゃないの」

と聞いたりする。

「ハハハ、云わぬが花という事にしておきましょう。とにかく、映画女優にしたって、これだけの美人は仲々見当りませんよ。森田組のドル箱スターなんです」

「どうして、ああいう風に縛っておくの」

「うちの社長の趣味なんです。また、この別嬪さんは、目下修業中の身でしてね。稽古が辛くなつて逃げ出したりされちゃ困るんで、今のところ、一応、こうして縛り上げたまま、いろんな芸を仕込んでいるんですよ」

へえーと和枝は何だか要領を得ない顔つきでうなずき、川田の酌を受け、返盃して銚子を取り上げる。

単に珍芸や実演を見ろというのではなく、この広間は、賭場がめでたくお開きになつたというその祝いの意味からか酒席にもなつていて、森田組のチンピラ達が入れ代り立ち代り、銚子のついた膳を運んで来ては、男達の前に配置しようとしている。だが、男達は、



そんなものには見向きもせず、いわゆる酒の肴として、一本のロープに緊縛された優美な肢体を支えられ、微動だにせず立っている静子夫人の方へ吸い寄せられるようにギラギラした熱っぽい視線を向けているのであった。

白磁の細工物のように、白くて繊細な足の指、つつましやかにびったり揃えている優美な肢、ミルク色に艶々として、豊かに肉がのり、悩ましいばかりに光沢を持つ太腿、その付根にびったりと喰いこむように取りつけられたキラキラ光るハート型の挑発的なバタフライ——男達の酒に濁って異様にギラつく眼は、そうした静子夫人の下肢から、じわじわ這いずるように上半身へ移向していく。

形のいい臍、絹のようになめらかな腹部から鳩尾、上下に数本のしごきをきびしく巻きつかせた豊満で優美な乳房、その白い山頂にある薄桃色の二つの乳頭は、眼に泌み入るような清らかさを持っている。

静子夫人は、硬質陶器のような冷たい表情を作り、薄く眼を閉ざして、そうした野卑な男達の貪るような視線に耐えているのだ。

そんな静子夫人の横に立った田代は、喰いつくような視線を一斉に向けている男達に向けて胸を張るようにして云うのである。

「どうも皆様、長い間、お待たせ致して申訳ございません。本日で岩崎親分歓迎の賭場も無事お開きとなりました。お礼の意味で、ささやかな酒席をここに設けさせて頂きます。これと申してお気に召す料理はございませんが、ここに登場致しましたる美女は、当方と致しましても、いささか自慢の出来る生魚、何とぞ、この美女を本日の酒の肴とおぼし召し、ゆりりとおくつろぎ願ひとう存じます」と、挨拶をやり始めた。

そうした田代の口上を、ウムウムとうなずきながら聞き、左右から妾二人に注がれる酒を口をとがらして吸いこんでいた岩崎は、周囲を見廻して、やくざ達に声をかけた。

「今夜は無礼講のつもりで俺に気兼ねせず賑やかにやってくれ」

それを聞くと、岩崎がここへ来てから申し合わせたように声をひそめていたやくざ達はほっとしたように手をたたき始め、盃のやりとりを再び賑やかに始め出す。

かなり酔っ払った何人かが、眼の前にさらされてる美女のむせかえるような官能美にもう押さえがきかなくなったのか、フラフラと近づいて来て、美女の柔肌になんとも手触れさそうとするのだ。

「おっと待って下さいよ。あわてる事はねえじゃありませんか」

と、この場の進行係になっている川田はニヤニヤ笑いながら、立縛りにされている夫人の前に立塞がるようにし、やくざ達を制して黄色い果物の入った箆を高々と掲げて彼等に示すのだった。

「こっちで作ったプログラム通りに進行して楽しもうじゃありませんか、え、皆さん」

川田は、愛想よく笑顔をふりまきながら、彼等をなだめるようにして、そのプログラムを話して聞かせる。

希望者二人ずつが、美女の前と後に分かれ美女は、その両方を使って、切って落す——という奇抜な遊びを川田に聞かされたやくざ達は、一瞬、呆っ氣にとられた顔つきになったが、すぐにわっと立上り、その権利を獲得しようとして川田の持つ箆の中へ手を差しこもうとした。

そらつと川田は笑いながら、十本の果物を夫人の足元へパツと投げ出した。まるで、餓鬼のようにその一本を拾い取ろうとして、喚声をあげ、男達は突進する。

岩崎と二人の妾は、それを見て、声をあげて笑い出す。



静子夫人は、足元で組んずほぐれつ一本のそれを奪い合っている男達を見て、そのあまりの浅ましさと恐しさに、優雅な頬に上気の色を見せ、苦しげに眉をひそめて、はっきり横を向いてしまふのだった。

地獄の森の餓えた狼の巣へ投げこまれてしまったような恐怖感に断頭台に登ったような覚悟はしていたとはいえ、やはり、夫人の全身は、わなわなと慄えつづける。

首尾よく果物を手に入れた十人の男達は、川田に指示されて、その順番をきめるべくジャンケンをしている。静子夫人は、これから、この野卑な男達を二人ずつ、前と後に分けて、いたずらをさせ、面白がらせていかなければならないのだ。しかも、鬼源の云うお色気サービスというものも盛りこんで。

静子夫人は大きく息を吸いこみ、動揺する自分の心と慄えおののく肉体を平静に戻そうと努力し始めている。

鬼源がそんな夫人の肩を合図するように、うしろからポンとたたいた。

「さ、お客様の順番もきまっただぜ。あとは、おめえの努力一つだ。俺の云った通りに、この大事の舞台を一生懸命務めるんだぜ。俺はここで見物しているからな」

小さい声で、夫人の耳にそう吹きこんだ鬼源は、すぐ傍で、楽しそうな顔つきになって田代と盃のやりとりをしている千代の横へ、どっこいしょと腰を落すのである。

静子夫人は、しばらく頭を垂れ、心の昂ぶりを押さえるように瞑目していたが、やがてその気品のある美しい顔をすくくと正面に向けた。月の滴に濡れたようにキラキラ光る美しい夫人の双眸には、嘆きも涙も振り払い、この醜惡な芸当をやったのけようという決心がはっきりとにじみ出ている。

「——静子と申すこの家の実演スターでございます。只今より、鬼村先生にお教え頂きました、お座敷芸の一つをこの場にて披露させて頂きます。何卒、お酒の席の余興として、御笑覧下さりたくお願い致します」

正面に坐っている岩崎に対し、夫人は鬼源に教えられた口上を悪びれず口にする、軽く頭を下げるのだった。

「へえ、随分と礼儀正しいのね。こんな実演って私、始めて見たわ」

岩崎の横に坐っている葉子と和枝が顔を見合わして面白そうに話し合っている。

この種の実演スターというものは、男と混って女客がのぞきに來たりする事を極度に嫌

がるものだという事を和枝も葉子も知っていたが、今、眼の前でさらし者になっている美女も、その例にもれず、口上の途中、ふと視線が和枝達の視線とからむとひどく狼狽したうに眼をそらせ、男達の血走った視線の方へ、その美しい顔を向け直すのであった。

「どなたが最初、お遊びになりますの。さ、静子の傍へおいでになって下さいまし」

静子夫人は、しつとりと陰影をたたえた情感的な眼差しを男達に注ぎこむようにして柔らかに云った。

二人の男が舌なめずりして、夫人の傍へ寄って来る。

一人は関口一家の幹部である大原、もう一人は、南原組の身内である木村であった。

大原の方は、かなり酩酊していて、足もとがふらついている。フラフラとつんのめり、立縛りにされている夫人の肩に両手をからませ、危かしい足を踏みしめるという状態であった。酒臭い息に、夫人は思わず美しい眉を寄せて、顔をそらせてしまったが、こうした客達に不快な気分を、持たせてはいけけないのだ。

「——ね、そんなにお酔いになっていて、大丈夫ですよ」



静子夫人は、顔を横へそらせながら、口元に微笑を浮かべて、柔らかく彼を包むように云うのだった。

大原は、えへら、えへらと笑いながら、静子夫人の骨の髄まで柔らかそうなミルク色の肉体のあちこちに唇や鼻を押し当てている。

一人で我物顔に振舞っている大原を見て、南原組の木村が口をとがらせた。

「よ、いい気になって一人で楽しむな。第一手前は酒臭くていけねえ。誰かと交替したらどうだ」

「何だと」

大原は、静子夫人から体を離し、陰険な眼つきを木村に向けた。

「駄目ですわ。こんな所で喧嘩なすっちゃ。

今夜は皆様の親睦会なんですよ」

静子夫人は、体のあちこちを陰湿に接吻されたりした虫ずの走るような感触をこらえながら、やくざ二人の陰険な空気を何とか解きほぐそうと努力しているのだ。

「へへへ、仲々可愛い事を云ってくれるじゃねえか。気に入ったぜ」

と、大原は、酒臭い息を吐きながら、相変らず足もとをふらつかせつつ、夫人の白い顎に手をかけて、その優雅な美しい瓜実顔をぐ

いと上げる。

先程から、チビリチビリ盃を口に運びつつ美しいさらし者に眼を注ぎつづけていた岩崎が「喧嘩だけはいかん。今夜は、その女が云うようにわし等の親睦会なんだ。最後まで仲良く楽しめ」

大親分に一声浴びせられた二人のやくざはへい、と恐縮したように頭を下げ、調子を合わせて、遊びにかかり始めた。

二人が同時に腰をかがめて、バタフライの細いビニールの紐を解きにかかると、静子夫人は、鼻を甘く鳴らせ、

「嫌、嫌、そんなせっかちな」

と、悩ましいばかりにたくましく優美に盛り上ったヒップを、ゆさゆさと左右に揺すって二人の仕事を甘く拒否する。

「すぐに、お切らせになるなんてひどいわ。

静子がその気分になって、おねだりするまで脱がしちゃ嫌」

静子夫人は、訴えるような情動的な瞳を左右に腰を落している大原と木村に向けるのだった。

それが鬼源に長い間仕込まれて来た、こうした場合における演技なのだが、すっかり、それは夫人の身についた感であり、浅薄なテ

クニックとはもういえなかった。恐怖感、屈辱感を、自分の神経を麻痺させて耐え抜くには、自分自身が愛欲と官能の渦に巻きこまなければならぬ。と努力している内、一種の快楽源が自然と静子夫人の体内に発生して来たように思われる。

そうした夫人の拒否に非ざる甘い反抗ポーズは、忽ち、これから淫らな遊びに入ろうとする二人のやくざの神経を切なく昂ぶらせ、他愛もなく、彼等はモソモソと喜こんでしまふのだった。

「——ねえ、おっぱいを——」

静子夫人は、そういうと、初々しい羞恥の感情をぽーと頬に浮かべて眼を伏せた。

そうした光景を黙って凝視していた鬼源と田代は、ふと顔を見合わせ、ニヤリと口元を歪める。静子夫人の好演に気を良くした二人は、ほっとした思いで、うまそうに酒を吸いこむのである。

凝然と声を殺して、悦子は、少し、離れた所から、やくざ二人に乳房をゆだねて、柔軟な肢態を切なげにくねらせ始めた静子夫人を物悲しげな表情で見つめていた。

紫のしごきをきびしく巻きつかせた艶々として豊かな乳房、その一つに大原のごつい手



が、もう一つには木村の毛むじらの手がかかっている。二人の手の中で、雪白の豊かな丘は戯弄されるまま、うねり舞い、左右へ、また上下へと揺すぶられているのだ。

熱い吐息と一緒に身をくねらせ、端正な線の綺麗な頬をバラ色に染めて、さも切なげになよなよと首を揺すり始めた静子夫人を見た他の男達は、もうどうにも押さえがきかなくなつたように、わらわらと夫人の傍へつめ寄つた。もう順番も何もあつたものではなく、うしろから夫人の柔軟な肩や背に唇を押し当てる者、ピップをさすったり、つねったりする者、ムッチリと引き緊まつた太腿や、うで卵の白味のように艶のある内腿を揉みほぐすようにしながら唇を当てたりする者——静子夫人は最初のうちは、一斉に襲いかかつて来た群狼に対し、あつと狼狽して、一瞬、身を硬化させたが、そのうち、数人の男達の巧妙な……の技巧に次第に煽られ出したのか、情感のせまって来たらしいねっとりした美しい瞳を上に向け始めた。

田代も鬼源も川田も、ただ、せせら笑うようにそれに眼を向け、酒を飲むだけで、襲いかかった狼達を払いのけようともしない。やがて、全身に上の空のような力の無さを

帯びて来た静子夫人は、男達のするがままに任せてしまったよう、酒臭い息を吐く大原が右側からぬーと唇を頬へ押しつけ、唇を求め始めると抵抗なしに、その唇に自分の唇を当ててやるのだった。こっちも頼むぜ、と今度は左側から木村が夫人の顎に手をかけ、その美しい顔を自分の方に向けさせる。夫人は、次に木村とも唇をそのまま合わせてやる。

誰かが、皮のついたままの果物で星屑のようにキラキラ光るバタフライの上を軽くたたいたりし、静子夫人の、さももどかしげな身悶えが一層、露に激しいものとなっていく。それを見ると大原も面白がつて、大事そうにポケットに入れていた一本を取り出し、その男にならって身を沈ませた。

「嫌っ、嫌、ああ——」

静子夫人の優美な足首に誰かが手をかけ、静かに持ち上げると、その繊細な足の指先と足裏を愛撫し始める。

体の裡から衝き上げてくる熱っぽいものに夫人は耐え切れなくなったよう一人の男に捉えられている片肢を激しく動かして自分に取り戻したが、男達は笠にかかつて、そのキラキラ光るハート型の一点に集中し出し、夫人は、わなわな唇を慄かせ、のけぞるようにそ

の美しい顔をうしろへねじ曲げた。

「へへへ、どうしたい別嬪さん。そろそろ切つて見せる気になったかね」

木村が背後からぴたりと夫人を抱きしめ両手で光沢のある豊かな夫人の両乳房をそつと押さえた。

静子夫人は、木村に強く抱きしめられるまま、一層、顔を仰向かせ、木村の頬に頬をすり寄せると

「も、もう充分ですわ。ねえ、お願い」

と甘く催促するように鼻を鳴らした。

「じゃ、その同時斬りつてやつをご披露する気になったんだね」

静子夫人は、小さくうなずいて、上気した頬をなおも木村にすり寄せ、さも、もどかしげに、大原達にいじめ抜かれている腰をもじつかせながら、消え入るように云った。

「——脱、脱がせて下さいまし」

それを聞くと、待つてました、とばかり、

男達は一斉にビニールの紐に手をかけた。

数人の男達のそうした騷りものになっていく静子夫人を千代は鬼源と並んで楽しそうに眺めている。

「随分と喜んでるじゃないの、お客は」

「そうですね。我ながら深窓の令夫人をよく



ここまで仕込み上げたものだと思ひますよ」

鬼源は、黄色い齒をむき出して笑った。

静子夫人にまといついていてる男達の神経は今、最高潮に達しているようだ。

「へへへ、そら、御開張だ」

妖しいばかりに白く、豊かに引き緊まった太腿を、ズルズルと伝わって、それは男達の手で剥ぎ取られて行く。

静子夫人は、綺麗に揃った長い睫毛を、そっと閉じ合わせ、大勢の男達の眼に、覆うものない姿を遂にさらしてしまつた羞らいを横顔に見せていたが、今まで受けた数々の屈辱の故か、柔軟な肩も、乳房も、可愛い臍まで、激しく息づいていようであつた。

静子夫人は、ようやく眼を開くと、ぎっしり周囲を埋め尽している男達に片意地なばかりに冷やかな微笑を作つて見せる。

「どうなさつたの。さ、遠慮なさらずに」

夫人にそういわれて、や々と我に返つたような大原と木村は、互いに照れ臭そうに顔を見合せながら再び夫人に近づいていく。

鬼源が横手から、責め手になつた二人に声をかけた。

「スター自身が切らせ方をコーチする事になつておりますからね。へへへ、果物一本分、

充分、お楽しみになつて下さい」

大原と木村が果物を手の上でくるくる遊ばせながら迫つて来ると、静子夫人は、上気した頬をようやく冷たく落着かせて、軽く微笑しながら、

「ジャンケンをなさつて下さい。勝つた方が静子の——」

じつと見守っている男達がゲラゲラ笑い出したが、夫人は、陶器のように冴えた表情で「負けた方は、<sup>かた</sup>静子の……の方よ。おわかりになりました」

と、冷ややかに顔色一つ変えず、云うのであつた。

少しは酔いが覚めたらしいが、まだ足もとがおぼつかない大原がジャンケンに勝つて、静子夫人の前にどっこいしょと坐りこむ。

うしろの方へ木村が身を低めたのを知つた

夫人は、再び、軽く眼を閉ざし、大理石のように冷たい頬を苦しげに曇らせて、びったりと閉ざしていた脚を心持左右へ開き始めるのだった。夫人の乳色にねっとり霞む全身が自分の演じる仕草にバラ色に染まり始める。

「おわかりになつて。ねえ——」

前と後に陣取っている二人の男に催促するよう腰を揺する静子夫人。鬼源に強要された

演技と必死に取組み、その中に自分を没入させようとしているのだ。

「ねえ、うしろにいらっしゃる方。<sup>かた</sup>まだ御覧になれない？ お二人の眼にはつきりするまで、静子、こうしていかなきゃならないんです。お願い、見えた、とおっしゃって——」

まだ、わかんねえな、と、木村はクスクス笑っている。

「——ひどいわ。静子に、まだ羞かしい思いをさせるおつもりなの」

静子夫人は、シクシクすすり上げながら、再び開いていく。云いようなない優美な曲線を持つ下肢が極端なまでに左右へ伸びて、周囲にむらがつている男達は夢でも見ているようにポカンと口を開け、茫然と突つ立ったままになつていた。

「ああ、羞かしい。静子、羞かしいわ」

男達の魂を揺さぶるような優雅な啼泣を夫人が口から洩らし始める。

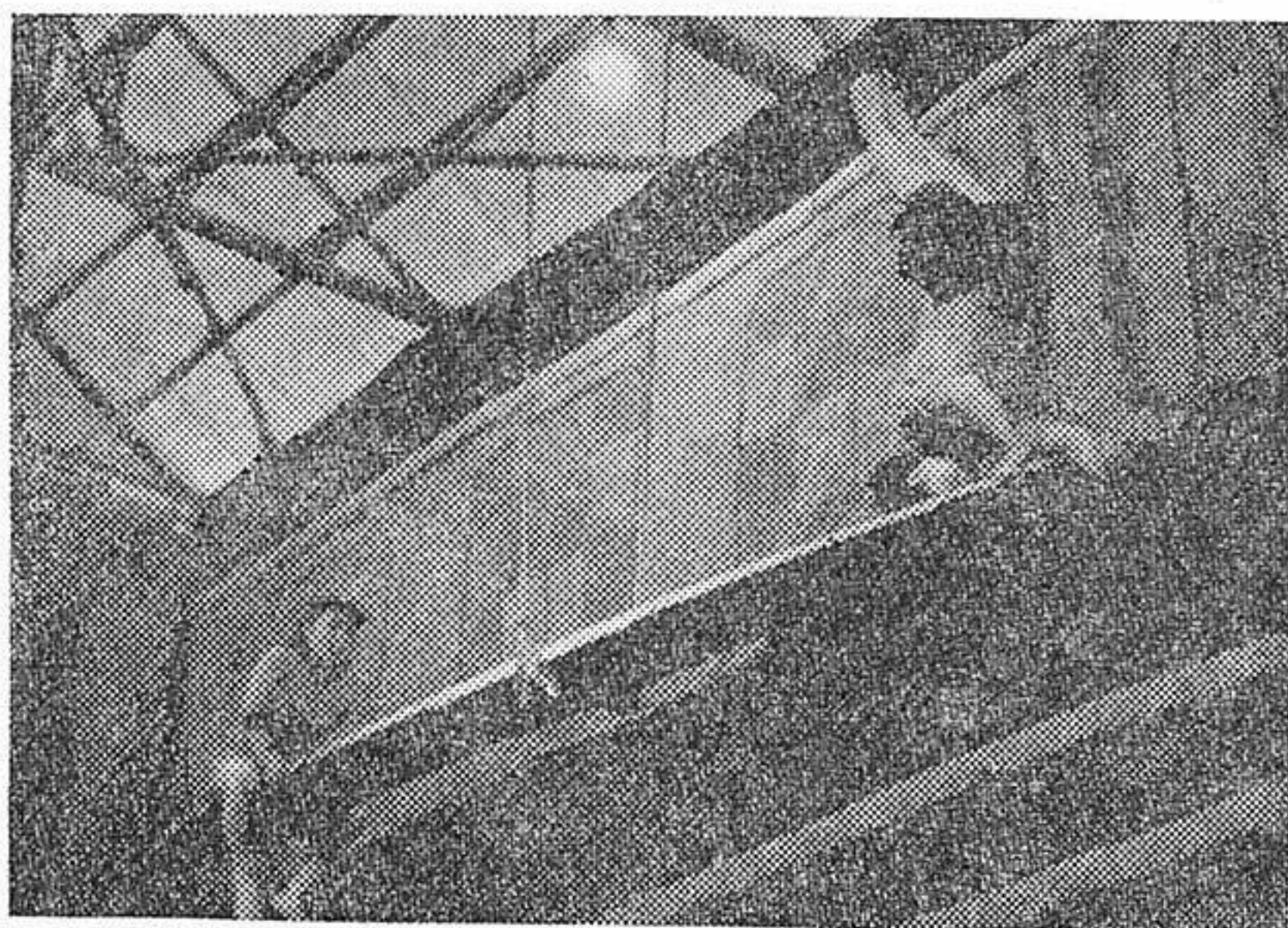
「はつきりと出たぜ。御苦労様、ハハハ」

夫人は、ハツとしたように動きを止め、さも羞かしげに顔をそむけて、上ずつた声で切れ切れに云つた。

「そ、それでは、始めて頂きますわ。お二人とも、果物の皮をむいて下さいまし」(未完)



## 〓 ある曲馬団員の回顧録 〓



「イハラサーカス」吊板曲芸

## サークスの仕込み

## 好談場極

一月号所載の「田倍井サーカス」という名前には記憶があります。手記の主は大震災で十五才とありますので、いまではおおかた六十才ぐらいの老婦人と、いうことになりますか。私も、サーカスには大変興味があり、数名のサーカス芸人経験者に断片的な話をききましたが、昭和初期の児童虐待防止法施行以前には、新参者としてサーカスに入った子供は、かなり厳しい訓練や待遇を受けたようです。

戦後、サーカスに入った人でも、名もない小さなサーカス団でその団の方針によって、不運なめぐり合わせに、ずいぶん辛い経験をもった人がありました。その人から聞いたことを、これから「私」という形でお話をしてまいりましょう。

私は、恵まれた家庭の一人娘として、何の不自由もなく育てられていましたけれど、昭和二十九年のある日、両親が突然同時に自動車事故のため不慮の死をとげ、ほかに身寄りのない私は、幸福から一気に不幸のどん底に転落してしまいました。ときに私は十四才の中学三年になったばかり。

近所の人のご厚意で両親の野辺の送りをす



## 「シバタサーカス」大一丁二人乗り



ませ、涙のかわく間もなく、近くのある児童収容施設に入れられました。施設では、年長者として幼い子供たちの面倒を見るのがいそがしくて、昔の夢を思い出すひまもありませんでした。当時の私にはかえってよかったと思います。

ある日、施設のある町にサーカスが来て、私たちの施設の子供たちが招待されました。小さな子供たちは、はじめて見るサーカスを心から楽しんでおりました。私は、まだ両親

が健在の頃、幾度か見たおぼえがありますが、そのとき両親から、あの芸人たちは、両親のない子供やサーカス芸人の子供が芸を仕込まれて、あんなのだときかされていきましたので、最近両親を失った私は、他の子供たちのように心から楽しむ気持にはなれませんでした。

それから数日たってから、私は園長室に呼び出されました。園長先生のほかに見知らない男の人が二人居り、呼び出されたのは、私と同じ中三の女子がほかに二人おりました。園長先生はその男たちに「お話ししたのはこの三名です」といいました。

それから私たち三人は、学校の身体検査でもお医者さんの診察でもしられれたことのないような身体検査を受けました。身長、体重はもちろん体中のすみからすみまで寸法をはかり、ふとり具合、両足の開き具合、腰や上体の前後のまがり具合、胸の形や大きさ、

その他、あらゆる検査が入念に行われたのでした。

小娘の私たちは、三人の男の前で全く無力な小鳥のようにあつかわれました。最後に全身や部分写真を撮られたようですが、放心状態でした。やっと部屋へ帰ることを許されても、はじめて経験した強烈な衝撃で、二日ほどは食事ものどにとおらず、どうにか平常に近い生活に戻ったのは一週間ほどたってからでしょうか。

それから三カ月ほどたちました。秋が去って、施設の庭の桜の木が西風の冷たさにふるえはじめた十二月のなかば、私はまた園長室に呼び出されました。そこには園長先生のほか見おぼえのある男の一人がおりました。

「おまえは、いまからこのかたにおともしていくのだ」

と園長先生からいわれ、部屋へ帰って荷物をまとめる間もなく、両親の位牌を持つことも許されずに、その男に連れて行かれました。汽車で数時間、男は私に何も語らず、一度だけ駅弁を買ってくれたきりでした。

汽車がある駅に着いたときは、もう夜でした。駅前からタクシーで十分あまり走って、町はずれの古びた旅館に着きました。通され



た部屋には、もう一人の、見おぼえのある男がおりました。その男は私を見るなり「うん、お前だ。おまえはこれからわしのところで働くんだ。わしんところには、おまえのような親なし子がたくさんいるから仲よくするんだ。それから、おまえには沢山のお金がかかっているから、どんなことがあっても逃げたりするんじゃないぞ。逃げたってすぐつかまることだし、つかまえたらただではおかないんだから」

そして連れてきた男に

「この娘にはロゼットという名をつける。あちらへ連れて行け。正月興行に何かやらせろ」と命令しました。命令したのは団長、私を連れてきたのは副団長で、私は施設からサーカスへ売られてきた——サーカスが施設収容児をサーカスに招待、サーカスは施設に何がしかの金を寄付、そのかわりにサーカスへ芸人見習いを世話した——のです。いつかの怖い身体検査は、収容児の中からサーカス芸人のタマゴをえらび出すための、ものだったのです。

翌日、近くの空地に小屋がけしているサーカスへ連れて行かれました。そして、その翌日から稽古と初舞台に出されたのでした。初



「アタリサーカス」針金渡り

舞台といっても、まだ何ひとつ芸はできませんが、パレードとフィナーレに衣裳を着て、舞台上で客席に向って、手を振るだけのことで、す。パレードで着るようになるといわれたのは、空中サーカスの人が着た全身の線がぴたり見える衣装です。他人が今まで着ていたもの

を、すぐに着るのははじめてですが、きもちの悪いものです。まる裸に色ペンキを塗ったような姿で、客席の眼が全部私一人にそそがれているような気持でした。フィナーレの衣装は小さなブラジャーとおヘソの出たパンティ。つまりビキニスタイルで、これもいやな衣装でした。

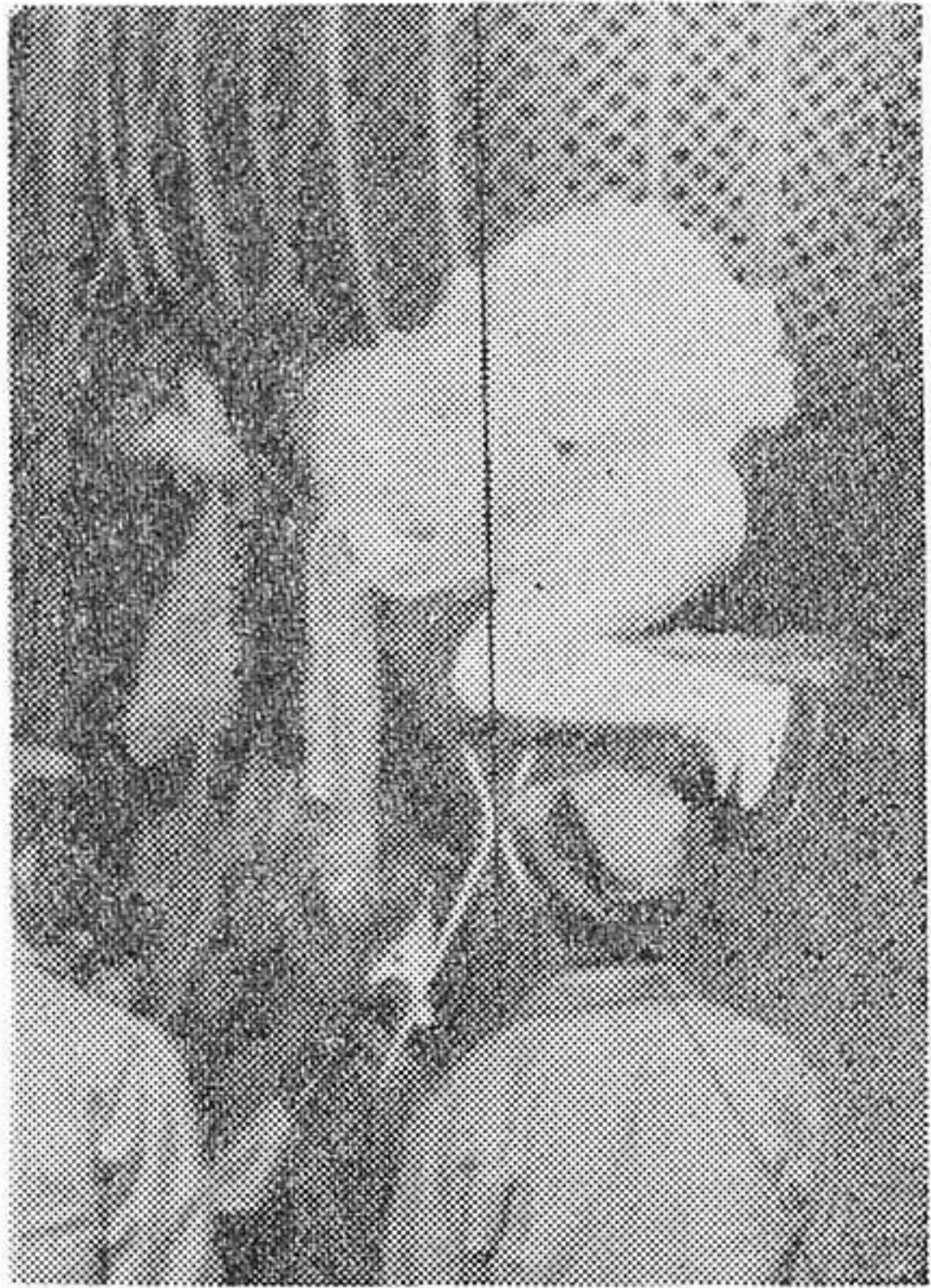
稽古は、夜明け前から無人の舞台、風にゆれる裸電球がともった無気味な舞台で、パンツすら許されないで、逆立ち、トンボ返り、一輪車、そして青竹のぼりと、三時間ぐらいいも連続でしごかれます。綿のようにくたくたにくたびれると、ほこりだらけのマットの上に寝かされて、全身マッサージです。先生とというのが、ピエロとオートバイ、それに馬の調教をする三十才ぐらいの男の人です。マッサージをしておかないと、シコリが残るのだというのですが、揉んでいるのか癩っているのかわかりません。

次の興行地Q市では正月興行で「運動会」という番組で曲芸らしい芸をもって舞台に出ました。

男女あわせて二十五人ほど、おおかた全員の出演で、三段の人間ピラミットでいちばん端の二段目が私のポストでした。また、舞台



## 「アタリサーカス」針金の上でのハンカチ啜え取り



の真中で前トンボ、後トンボ、まあアクロバットの初歩みたいな芸です。衣装は古い人のおさがりですが、他人の着古しを着せられるのにも、いくらか慣れてきました。

また一輪車にもどうにか倒れず乗れるようになって、正月興行の中頃から舞台をつとめられるようになりました。黄色いダルマ衣装に黒いタイツで、例によっておさがり衣装でしたが、その頃の私の着せられた衣装の中では、好きなもののひとつでした。

その頃から、空中サーカスの稽古をつけら

れました。はじめはブラン

コにひっかけてた青竹を、のぼったりおりたりする練習です。私といっしょに同じような年頃の少年が稽古をつけられたのですが、ふたりとも黒い海水褌だけで吊り下った竹をのぼり、ブランコにくくりつけてあるセーターを着ておりてくる。

こんどはそのセーターを少年が着てのぼり、ブランコにくくりつけてくる、というのをくりかえさせられました。竹のぼりで腕に力をつけ、ブランコの上でセーターを着たり脱いだりすることで、高いところに馴れるためです。

次には、両足首をロープでしばって逆吊りにされ、体をおこすことをやらされました。吊り下げられていると、全身の血が頭においてきてカッカするのですが、腰やひざに力が入らなくて体をおこすことができません。気を失うまでやらされます。

そしてあとはかならず、あの嫌な全身マッサージです。

それから綱へおちる稽古。はじめは胴体に

大きいベルトを締め、それにワイヤーがついており、天井から私の体が吊り下げられるようになったまま、ブランコから綱へ何度も落ちるのです。落ちるとき、体が上向きに落ちる姿勢をとるのですが、その姿勢が悪いときは、先生がワイヤーをひっぱって私のケガを防いでくれるのです。うまく落ちると背中は何ものすごく、痛さを感じますがケガはしません。失敗なく落ちることができるようになって、はじめて飛び台から中台に受け止められ、また飛び台に帰る稽古になります。

よくムチでひっぱたかれるという話がありますが、このサーカスでは芸人の稽古でムチや棒でひっぱたくようなことはありませんでした。それは芸人の素肌をいためないようにということと、私たちはムチどころか肌をきれいにするため毎晩、牛乳風呂に入れられました。もっとも牛乳風呂といっても、風呂に入るときゴム服を着て、襟もとから服の中へ売れ残りの牛乳を入れ、そのまま普通のお風呂に入るだけのことです。私のような新参者はいつも最後ですから、他人の汗でよごれた牛乳の残っているゴム服を着なければなりません。



このサーカスが女芸人の肌をなぜ大切に  
するかということは、興行だけでなく、お座  
敷でヌードのアクロバットや、一輪車、足芸、  
針金などの芸を見せたり、写真の好きな人々  
のためにヌードモデルをさせるためでした。

ムチはそんな訳で使いませんが、舞台で芸  
をしとくじると、辛いお仕置きがあります。若  
い芸人が、ひとつの芸を身につけるための厳  
しい稽古と、しくじったときのお仕置きなの  
です。また、そのために命を落さず、舞台を  
つとめることができるのです。お仕置きはい  
ろいろありますが、女では乳首を洗濯ばさみ  
ではさまれたり、両足を水平にして棒にしば

りつけられたままひとばん置かれたり、逆エ  
ビしばりのまま、長い間放置されることが多  
く、男では逆吊りや片手吊りなどが多く、ひ  
どいのは急所を、針でつつくことがあります。

逃げてつかまったときの仕置きはもっとひ  
どいもので、私がサーカスにいたあいだにも  
一人の少女が、そのお仕置きをされました。  
その少女が見えなくなって二日目、小屋が  
はねてから、全員が舞台に集められました。  
丸裸にされたその少女が、舞台中央に正座さ  
せられており、団長が

「みなよく見ておけ、逃げた者が受ける仕置



「タベイサーカス」針金の一輪車渡り

きだ」といって少女  
を立たせ、逆エビに  
して吊り下げ、口に  
は手拭をかませて、  
舌をかまないように  
し、乳首に安全カミ  
ソリで十字形にキズ  
をつけ、塩がつけら  
れました。とてもい  
たいらしいです。更  
に逆吊りの体にロー  
プがかけられ、その

端を結んで団長が腰をかけます。逆吊りの丸  
くなった体がV字形になります。それから振  
り子のように揺られたり、コマのようにぐる  
ぐるまわされたり、ときどきおろして呼吸を  
調べ、氣つけに水をかけたりします。いよい  
よ弱ったとき、赤いトウガラシが使われまし  
た。体がびくっとけいれんしました。とても  
正視できないのですが、下や横を向くと叱ら  
れるのです。

五年ぐらいつとめていますと、私も、いろ  
いろな芸をもつ者として、サーカスにとって  
重要な芸人になりました。衣装も自分のもの  
がもらえるようになり、もちろんわずかなが  
らお手当も頂けるようになりました。

けれど、サーカスはだんだんと客の入り  
が悪くなり、ついに解散となり、私はクラブの  
ホステスをつとめ、やっと他人様のように家  
庭の主婦になりました。昔の辛かった経験は  
思い出してもゾッとするのですが、反面また  
なつかしいものです。

「私」という女の物語りはまだまだありまし  
た。別世界のような興味のある話が尽きない  
のですが、いづれまた。

(写真・筆者提供。但し、本文とは無関係)





# 「恋 繩」 雜 記

井 風 呂 秋 於

先日のことです。

大阪は梅田の地下センターから階段をのぼっている、とつぜん上のほうから、けたたましい話し声と乱れた足音――

勿論あんな処を歩調そろえて降りてくるような奇特な人は居ないと思いますが、瞬間その足音が、ダダ！ とこちらへ突進してくるように思えてハッと立ち止まったら、やはり予期に反せず、正面からドン！

同時に足首を踏まれて、

「ギャッ！」

われながら凄まじい悲鳴をあげてしまいましたが、また同時に、私に向かって叩きつけられてきましたのが、この言葉でした。

「オッサン、氣いつけたれや」

「ちゃんと上見て歩いたれ、アホ」

……あなた、このニッポン語を平然とお吐きになった方は、如何なる人物とお思いになりますか？ いいえ飛んでもない。男性ではございません。ハイその通り、レッキとした

若き女性なんでしょう。

サア、足音に激痛の走った上、かような罵声までいただいた以上は――私とても日頃から、頭脳不明晰を補う意味から至って猪突猛進型をもって鳴る？ お人柄。このときサッとすれ違いざま、一段高く片足を掛け、エエ恰好してふり向くなり、

「なにを……」

――いえね、それから先を怒鳴りかけたのですがね、実はその相手の女性二人の姿を見



たとたんに、その、口のほうが勝手に噤んでしまったのですよ。

正直言うと、そのときはじめて相手が女性だったとわかったくらいで、どうも今、鼻の先ですれ違ったのは「異様な赤色」だと思ったら——案の定相手のその女性たち、揃いも揃って真紅のミニタリー・ルックの装りだったのです。

考えてもくださいよ。私アあんな真ッ赤な——そして、廃物寸前の裁縫箱を胸の前でひっくりかえしたみたいに、ボタンをいっぱい散らかした流行初期のミニタリー・ルックなんぞ、もうとっくの昔にすたれてしまっていると思っていたもの。それをいまだに、若い女性が得意然と着こんで大オオサカをほっき廻っているなんて、全然思ってもいなかったもの。

結局私は、その「時代遅れ」した型のミニタリー・ルックと原始時代と間違えて出て来たんじゃないかと疑いそうな乱髪ぶりの毒気にあてられて『なにを』という極く清潔な単語のみで引き退ってしまいました……。

やはりその時着ていた「中味」も悪かった故か、あんな型の服は、ちょっとどうかと思うんでございますよ、ハイ。

例のごとく、ここで好き放題を言わしていただく——

あの服を着て、ためしに背中へ斜めに番傘掛けて、腰に手拭いぶらさげ手風琴持ったとしたら何のことはない、まるで昔のオイチニの薬売りじゃねえか。なんで今更、オイチニの薬売りさんの真似をしなきゃならないの、ってことになっちゃうんです。

え、あの服の流行の因は、外国ですって？——へエ、すると、外国にもオイチニのおじさんが居なすったのですか？

——ともあれ、無暗に流行を追わず、個性を大切に活かしておられる女性が一とするならば、まア流行を追ううちにもある程度はその個性をしのばせるような女性を二とし、囲りがどんどん流行を追いかけているから、恥かしいけど仕方がない自分もヤケのヤン八で追いかけてみるかというような女性を三にしても、あのように、外来そのままのデザインの服を得意然と着こんでいる女性なんぞ、流行を追いかけているどころか、完全に乗り遅れている感じで——足首踏みつけられた恨みだけで言うのじゃないけど、ホント、なんだか哀れな感じですよ、ハイ。

あれで、……よく、テレビなんかで、下半

身をトラックにでも敷きっ放しにされてるような表情で唄ってる男の子みたいに、首にクサリでも巻いていたとしたら——いえ冗談じやなしに私ア、正月用に只今訓練中の紅い服着たゴリラが、合同で逃げ込んで来たのかとびっくりしていたものネ。

また最近の女性服飾雑誌を読むと……

え、お前はえらそうに言って、男のくせにそんな女性雑誌を買って読んでいるのか、ですって？ いえあなた、そのご配慮には及びません、レッキとした本屋での立ち読みでさア！……

そんな雑誌をみると、

『軍服の無駄をはぶいた機能的な美しさの此のミニタリー・ルック！』

『その一部を僅かに取り入れたデザインを通して勤着や街着にどうでしょう——』

てなことを書いています。

別にこの事だけを言うのじゃありませんが服飾界も、いつまでもネコ婆アみたいに執念ぶかく一つの流行のダシばかりとっていないで、次のエサなんかドデンと考えついたらどうですかねえ——

え、そんな他人のことは放っておきやがれですって？ それに、そんな服着て張りき



ている女の子を相手に、例のホレ、縄プレーなんかしてみるのも新鮮で、潑刺としていいではないか、ですって。

ハアさようですかね。

でも、——私アどうもね。

だって、あのような女の子と縄プレーやらかして汗をかきかき柱にでもくくりつけたとしましょ。すると彼女なんか、鼻唄まじりにガム噛んで、ムードもクソもあるものか。天井ふり仰いでケツケツケツてな調子になりやしないか——と、ハイ、そればかり。

まア、この足首に悲の残っているうちは、あのように珍妙で真紅な、ミニタリー・ルックにせいぜいカッカして、角から突っこんでいくことにしましょ……

△

……いえね、「女装」と言っただって、私あたりがやってる女装なんてミミっちくて、どうにもならない話ですが——

それでも、何となく私は私なりで、結構楽しんでるのだから此の女装っていうのは、なんと不思議な——いや、甘くって妖しい“心の遊び”なんですよええ。

いつかも書いたように“いちばん好きな女性像”を自分で演ずる楽しさ。そして自分の

思い通り？ に動いてくれるその『女性』を鏡なんか映したりして見つめる嬉しさ。やはりこの妖しい欲びは、女装の世界だけにしかないと思うのですが如何でしょうか？

いま私の女装はミミっちくて、どうにもならないと言いましたが、やはりその通り、私はべつに、最近の週刊誌などを盛んに賑わせている方のように、

「私は、女になりたい——女になってしまいたい……」そして

「私は女になった。女に生まれ変わった」

などと言う、記事のようなことには全然と言い切れるほど興味は無いのです。ホンのお手軽なもので、周囲に私に縛ったり苛めたりしてくれと言う女性が居ないものだから、手っ取り早く自分が女に化けて、その責められる気持ちでどんなものかと“観察”しているだけみたいなもの。

かえって、「女装遊び」をしていない普段など、自分が男性でアルということを大いによろこび、且つ誇りに思ったりしていることのほうが多いんですね。

私など本誌に“登場”させていただいで以来、なにか斯う、畠ちがいの性格を持ったMの男と想像されているだろう——と妙に感ぐ

ったりしているのですが、これはいまも言ったように、ホンにミミっちい私の「遊び」でしかございません。

ただ、その「遊び」の時ともなると私は私なりの情熱で……具体的に言えば、自分のいちばん好きな型の女性になるべく近く化けたという楽しみとその苦しみ？ に懸命となっているわけでございます。

私は別段、homosexuality 人間でもありません、またそれを願うものでもありませんで、それこそ、あんたと縄遊びしましょ、なんて言ってくれる女性が現われたら、こんなミミっちい女装ごっこなんか止めて、今すぐにでも、その場へすっとなでいくかも知れませんね。

斯うなると私なんぞ、大きな顔して、

「私は女装愛好者です」

なんて言えたもんじゃないと思います。だって世の中って、それが女装の好きな人間と聞いただけで、その人間は女性的な——もしくは女性には興味も薄い人間だと、妙に異端視的な推測をしがちなんですものね。

もちろんそれでも私ア構わないのですが、それじゃあ普段の男性的な？ この私はどうなるの、となんだか世のご期待にそむいたよ



うな気持ちになってしまっているので、この際ついでに言わせていただいた次第——。

こんな私のような「女装愛好者」は多分他にもいらっしやるとは思うんですけども、いかがですか？

しかし、この女に化けるといふ楽しみは、飽きたり諦めたりしていながらもまた、周期的な欲望のあらわれとなって、いつしか繰り返しているものなのですね。

現在では私、本誌を並べた机の中に、女装用具の化粧品なんか数多く取り揃えて大切に仕舞いこんでいる仕末。そして周期的な欲望のあらわれとなるまで待機しているんですからねえ。

またデパートなどへ、出掛けた折りは堂々と、いまからプレゼントするんだからと言ったような顔つきで、気に入った柄の服地を買いもとめたり、装飾品を買い漁ったりもしているんです。

時折り引っぱり出してきては、見てたのしんでいるアルバムも——すでに大型版で、全六冊。

何時何処で、どうして撮ったものやら、覚えていないほどの写真を、貼りつけてしまいました。

もしもあなたがこれをご覧になったら、「よくもまあこれだけ飽きもしないで」

と呆れてしまうかも知れませんか。

それからこのアルバムの写真というと、随分おかしいものもあるんですよ。

農家の井戸端で、頭の上へ西瓜をくくりつけられて（無論女装して）それを今まさに木刀で叩き割られようとして、悲鳴をあげている写真。稲刈り鎌のぶら下がる物置小屋で、ろくに化粧もしていない顔で髪ふりみだし、ブラジャーとパンティだけという姿で、股間縛りに泣きべそ掻いている写真。なかには鏡餅の前で、毀れた寝椅子へ縛りつけられて、その腹をむき出され、自動車用の刷毛の羽一枚でオヘソをこちょこちょとやられて、ヒエッ！ と大笑いしている図……。

とても本誌編集部には送付できたものではないかもしれませんが、私は不思議なことにはそのような「おかしい」過去の写真を見るにつけ、この胸が妙に熱くなってくるんです。

事实は自分が女装し、縛られ、苛められている写真なのですが、見てみるとそれは自分ではない——いや自分が責めてやっている見知らぬ女性？ のように錯覚してしまうのですね。そして私は、秘かに興奮してしまうの

です……。

やはりこれらの写真は、私にとっては何物にも替え難い、門外不出の大切な品というところになるでしょう。

——あなたがもし、自分の女装した姿を写真に撮っておられるとしたら、それはどのような場面ですか？

もちろん、私のような「ヘソまがり」なものは、まさか撮ってなんかおられないと思いますが、よろしかったらお聞かせ願えませんか？

それとも、どうですか？ あなたと二人きりで——『男』でなきゃ出来ない？ 女装の新奇な責めシーンをいろいろと考案しながら、お互いに撮りっこするってのはいかがですか……？

あるとき——

宏壮な館の庭内を、ゆったりと一人の女が駆けていた。

太陽は真上にあり、燦々として降りこぼれるその陽光は、すべての緑の樹木を濡らしているかのようであった。

見事な築山、美しい枯山水……それらすべても活き活きとしている。

女は、そのような庭園を、白いまぼろしの



ような動きで駆けていたのだった。

珠を散りばめた王冠のような、豪華なヘッド・ドレス。そこから、揺らいで浮遊する長いベール。

純白のドレスがぴたりと、またやわらかく身をつつんでそれは太陽に眼がしみるほどに映えていた。

さよう。女は、夢のなかから舞って出たような、清楚にして華やかなウェディング・ドレスを着ていたのである――。

そのとき。

彼女を追って、館から飛び出して来た男があった。

男は、彼女のその「白さ」にくらべて余りにも陰暗な、黒装束、黒のマントを着けていた。そして、その左手にロープの輪を持ち、右手には革先の躍るような鞭をにぎりしめている。

影のような彼は、跳ねるように……まるで獲物を追う黒い獣のような走り方で、次第に女に近づいていった。

「あッ！……」

女は、その追跡の足音に気づいてふり向いたが、花が開いたように量感のあるウェディング・ドレスを着ていたのではどうにもなら

なかった。

速めたつもりの足がそのまま纏れて、彼女はスロー廻転のフィルムを見るように、ゆったりと地に倒れ伏していた。

鞭を空間にするどく鳴らしながら、男がその清楚な白い花に近づいたのは、それから二呼吸としないうちである。

「……」

苦しげに胸を喘がせた彼女は、黒い影を首をねじってふりかえり、むなしく唇をふるわせた。

男はそんな彼女の様子に口もとをゆがませていたが、やがて目を細めるとその囲いをのろのろと廻りはじめた。

「ま、待って……」

しばらくして「花嫁」はさげんだ。

「あたしを、あたしを、そのような目にはあわせないで――」

すると男は、

「ふうん。そんな目――とは、どういうことだね？」

鞭を弄びながら、皮肉な笑みを浮かべ、わざとらしく小首をかしげてみせた。

そして突然――黒いマントをひるがえして彼女に跳びかかると――見るからに凄じい形

相となって、そのか細い腕を背中へねじあげたのである。

「ああ！――」

突きあげられたように顔を仰向かせ、彼女は悲痛な声を走らせた。

「フフ。こういうことなのかい、そんな目というのは」

男は言いながら鞭を投げ捨てると、ロープを解きさばき、それで彼女の手首から縛りはじめた。

広い庭園の一点にこうして「純白」と「真っ黒」の異様な蠢きが始まったのである。

――彼女は、

「し、縛らないで……。それだけは、それだけはゆるして！」

両手首を、ベールの被さったままの上から背中へくくり合わされた身で、もうそれ以上は縄を掛けられまいと必死にさからい、男はそれをちからまかせに押さえつつ、より以上に縄を掛けていこうとする――。

華麗なヘッド・ドレスが髪から飛び離れ、

地に垂れ下がったが転がりもならず、そのまま囲りを叩くように動く。逃れようとして膝を立てた足の先が、よごれはじめた裾からチラリと見えたと思うと、縄を締めつけながら



後に廻った男に蹴りつけられて瞬間そこから白い靴が軽々と吹っ飛ば。

そして縄が、豊かに隆起していた胸部を無惨にも歪な凸形と交えて幾重にも巻きつき、その固定されてしまった手首のところで結び終えられたとき、ようやくにして此の異様な「蠢き」は止まったのである。

「しょ、所詮は、こういう風になってしまふんだ……諦めのわるいことなどしないで、最初からおとなしくしていれば斯うまでは痛めつけられまいものを——」

肩先を波うたせていた男は、その冷暗な眼で女を見おろし、声をくぐもらせた。

「さあ、館へ戻るんだ——」

女の肩を踏みつけ、烈しく揺すぶった。

「いや、いやよ……」

後手に縛りあげられ倒れ伏し、それまで地に頬をなすりつけたまま涙をぼろぼろこぼしていた彼女は、微かにイヤイヤをしながら、言った。

「この縄を、ほどこいて……おねがいだから、この縄をほどこいてちょうだい……」

「駄目だな、それは出来ないな」

「どうして? どうしてなの!」

「これから館へ戻って、あの部屋で、あんた

をじっくりと可愛がってやるつもりなんだから——」

「いや、ゆるして! あの部屋へだけはあたし、もう行きたくない」

「ふふ、行きたくないと言っても、あの部屋にある滑車や、鞍馬や、檻などのヤツらが、あんたの御入来を今か今かと待ちのぞんでいるんだよ」

「そ、そんなこと!」

男の毒々しい口調に彼女は、不意に新たな恐怖に駆り立てられたごとく、不自由な膝をつかって身をずらしはじめた。

男は、その肩から足を放すと、素早く鞭をひろいあげ一振り打ち鳴らすや、薄気味わるい笑みを眼もとに浮かべながら言った。

「そうか、そんなにあの部屋が嫌なのか。ふふ……それなら、まあいいさ。あの部屋へお越し願うのはこの次にすることにして、今日は、この空気のさわやかな外で、あんたの泣きさけが美しい顔をとっくりと拝見することにしよう——」

そして、その思いつきにいかにも満足したかのように、尚も薄ら笑いをしながら頷くのであった。

間もなく男は、彼女の後手首のところをわ

し掴みにすると容赦もなく凄いちからで引き起こし、築山の陰へと手荒く曳き立てるのだった。

つい先刻まで、あれほどまでに美しかった彼女の花嫁姿は……いや、あれほどまでに美しかったからこそ、いまの此の姿はより悲惨な感じが強かった。搔き乱されてしまった大輪の花束といったところで、よろめき、倒れそうになりながら曳き立てられていくそれはいまにも花片となって散りくずれてしまうかと思うばかり。

やがて彼女は、哀願の言葉も聞き入れられず、築山の後の、寝姿の老松へ吊り気味に僅かに爪先立つぐらいにしてくりつけられてしまった。

すると不意に男が、その彼女の裾をウエストのあたりから引き裂き始めた。

「……!」

物も言えずに驚く彼女にかまわず、とうとう引き裂いてしまうと、今度は肌着までも裂きむしり、それを利用して、声を漸くにして出しかける彼女の口へ押しこんで猿ぐつわをしてしまった。

何ともまあ、呆れるほどの速さと冷酷さであつた。



彼女は、恐怖のために瞳をむき、足を縄みたいに縛<sup>な</sup>って揺らいた。そのために、ロープが肌に余計喰いこみ、後の手首も肩先に見えるほども吊りあがった。最早やこまでくるとそれは単なる痛みだけではないだろう。

その上——このとき男は、彼女の陽に晒された太股を狙って、黒蛇のような鞭をふりかぶった。

そして彼女のいっばいに見ひらかれていた瞳が閉じられたとき、その鞭は鋭い唸りを生じて第一打をふりおろされていた。

× ×

その夜——

館の奥まった部屋の豪華なベッドの上に、この「花嫁」だった女が全裸となって俯伏せていた。

やわらかな電気スタンドの灯りが、その肉体に見事な陰影をつくって、それは、いいも得ぬ程の素晴らしい「絵画」を描き出していた……。

そして、その「黒衣」だった男は、いま床にひざまずいて、そのベッドに寝ている女の太股へ、しきりに軟膏薬らしいものをなすりつけていたのである。

「それくらいで、もういいわ」

「いいえ奥さま、もう少しお付けしておかなければ——」

「そうかい。では、なるべく早くしてね、なんだか睡くなってきたようだから」

「あれあれ、左様でございますか。では、なただけ手早くいたしましょう。……でも奥さま……」

「なあに」

「ハイ、そのう……明日も奥さまは、なされますか？」

「あ、あのお部屋のことね」

「ええ。それと、今日のように外でのお遊びのこと……」

「そんなことわからない。あたしは、お前も知っている通り、あの遊びを急にしてみたくなったり、プツリとしなくなったり、本当に気ままなものだからね。その時になつてみなくちゃわからないわ」

「はあ……」

「フフ——それにしてもお前、今日の遊びは良かったねえ。え、そうは思わないかい。あたしには久しぶりの興奮だったわよ」

「ハイ、それは奥さま、私だって——」

「太陽、太陽の下で……やはり、それがよかったのかねえ」

「ハイ、でしょうね、奥さま……」

——やがて、薬を付け終えた青年は、女に恭しく一礼すると、しずかに部屋から出て行った。

女は、寝返りをうつと、ゆるやかな満足の笑みを浮かべたまま、その豊満な身に、足許の羽毛のように軽ろやかな掛け蒲団をすりあげていった……。

△

というわけで——私はよく、この物語のうな「夢」をみるのです。

その時の願望次第で私はその物語の「男」になったり「女」になったり……。

ただし「夢とは贅沢なもの」で、二度と同じ物語は追おうともしませんので、時折りネタ切れになって、仏頂面して寝入ってしまうことがあります。

本誌に小説、創作などを発表しておられる方々も、多分、私とはストーリーの違いこそあれ「夢」であることは同じで、その夢をペインにふくませて、書いておられるのだと思います。

そしてその方々も、私同様、その夢が現実になってくれたらなア、とお思いになるのは一、二度のことではないと思います。



しかし夢を現実に見せるといふことは仲々出来ないもので、特にこのような夢など相手がいないければ出来ない相談で、大ていは「やはりユメはユメか!」ということになってしまいます。

だれかに縛ったり苛めたりしてもらいたくてたまらない女性は、内から鍵をおろし部屋の隅で、自分の身体にそっと縄を巻きつけ、それを鏡に映したりして深い溜息をつく。Mの男性でもまた然りでしょう。

そしてSの女性男性ともなると——いろいろあるだろうけれど、だれかを縛ったり苛めたりしてみたくてたまらない時は、それこそ、屈曲できる人形か、それに似せたものでも相手にしなくちゃなりません。

私には、自分で自分を縛る器用さも、人形を用意する甲斐性もなかったもので、とうとう一月号に書かせていただいたような「強引」な夢の実現に出してしまったのです。

それとても、あの程度が精一杯のところでは就寝時に脳裡に描きだす「夢」には、とてもとてもおおよびもつきません。でも、あの程度のことでも出来るといういまの満足感、これ以上を高いぞみしようとする気持さえも押さえている今日このごろです。

十二月十六日——

△

私は性懲りもなく、ふたたび『緊縛美女大撮影会?』に招かれて、家を出ました。

人間勝手なもので、自分の好きなこととなると、忙しくても無理に都合をつけてしまうものです。

でもやはり「ちょっと女装をたのしむ」といった私と同じ心得の相手と、そうして面白おかしく過ごした時は、無理して出掛けて来たことぐらい、すぐにへのカッパという気持ちになってしまいます。

そして私は、その交互に被写体となる『撮影会』で、カメラマンになったときはSの気持で、女装して撮られるときにはMの気持で——贅沢にも一夜にして両性の醍醐味を味わっているというのですから、果報者としてもいわねばならないでしょう。

さあこのようなことがいつまで続けられるかわかりませんが、私のアルバムの数ページには今のこの果報ぶりが「記録」されるのは確実ですから、私は、この記録を生涯の想い出として大切に美しい? 夢の膜につつんで守りつづけていくことでしよう——

「おい、来たぞ——」

「よう、待ってたところだ。二階のほうも準備OKだ。今夜はひとつ、派手にやらかそうぜ、なあ!」

「ちえ、相変らず調子だけはいいな。だけどお前、今夜のために作るなんてたドレス、もう出来たのか?」

「ああ、もちろん出来てるよ。あとで着て見せてやらア」

「花模様の、アレだろうか?」

「うん。リボンなんかついてさ、デザインがとってもいいんだ」

「よし。じゃあ撮影会場へと参ろうか」

「ホイきた!」

「……おっと。ところで、今夜はどちらが先に「美人」になるんだ」

「お前から、なれ」

「あれ。今日は柄になく遠慮してやがるな。」

「お前からなれよ——」

「じゃ、ジャンケンで決めるか」

「ちえ、いうことがくだらねえな。だが、仕方がない。やるか!」

「よしきた」

『ジャンケンポン!——』

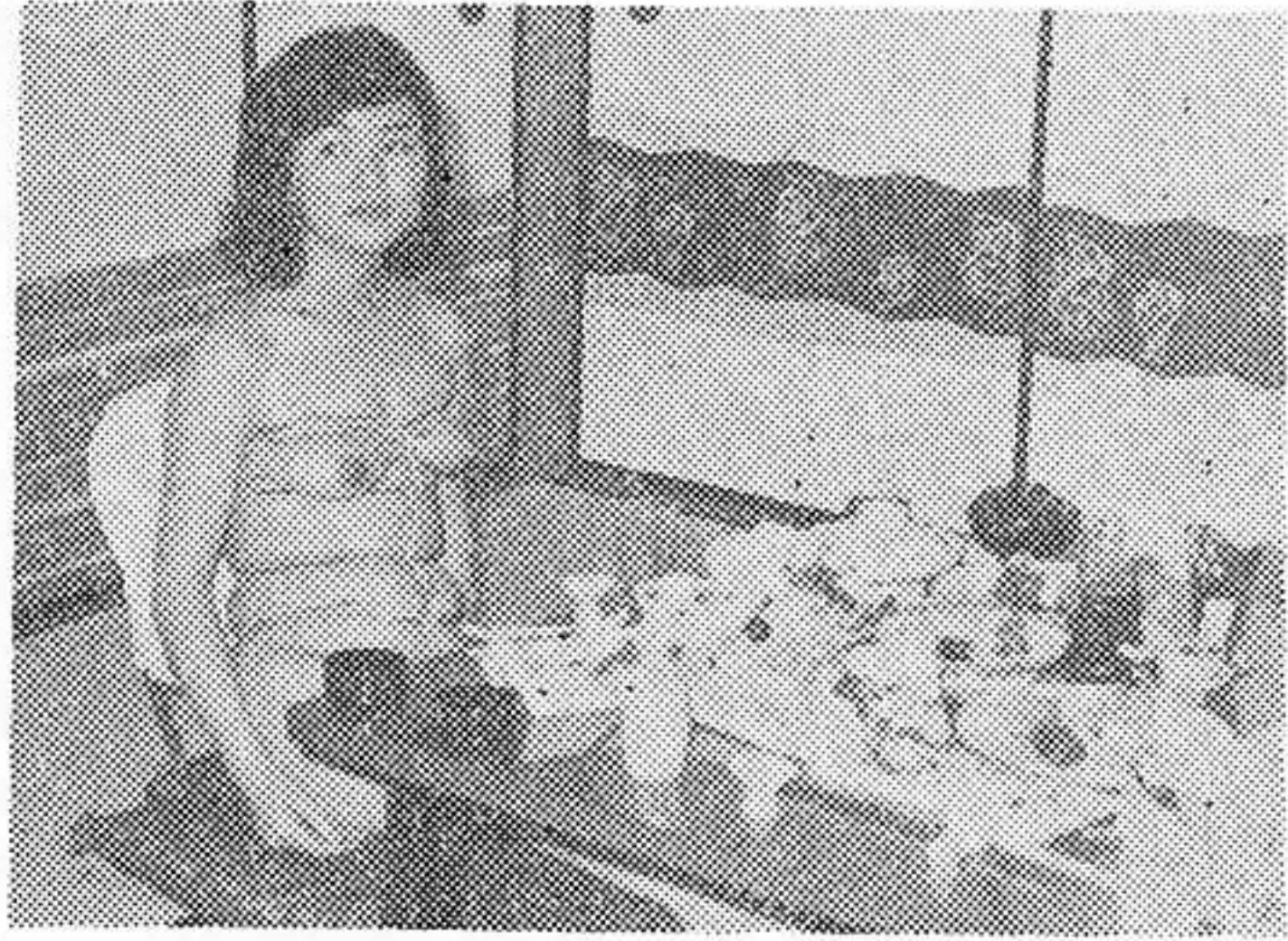


## SMカメラ・ハント

—— 浅井優子の巻

## 優子の涙

辻村 隆



電話口の声が、

「辻村さんですね、私今村という者ですが」といわれても、咄嗟には誰だか思い出せない。声を濁して渋っていると、相手の声は矢継早やにテキパキと響いてくる。

「K造船の秘書課の者ですが、会長様から貴

方に、是非お伝えしておくようにとの、お言葉でございます、実は……」

「ちょ、ちょっと待って下さい。会長と仰有ると、あの山田会長さんのことですね」

「ええ、左様でございます。貴方様が以前、西宮市の夙川の別宅を御訪問なさったと伺っております」

「ああ分りました」

やっと私にはのみ込めることが出来た。いきなり言われたものだから、まごついてしま

う。四十二年十一月号のカメラハントの『快樂の紋章』で、芝梨枝子とのプレイの仲介者としてお世話になった方であった。

「実はごく最近、私が或る若い女性を会長様に御紹介申上げました処、辻村さんに紹介してあげなさいと仰有いましたものですから」

「あの会長さんが私に？」

「ええ、近頃お体の方をお痛めになりました御静養なさっておられます」

「それはそれは、何処がお悪いのですか？」



「肝臓と高血圧とかのことです。それで早速でございますが如何なものでしょう。辻村さんさえおよろしければ、ビデオをお届けせよと仰有るのですが」

「それはどうも……カメラなら扱い馴れておりますが」

「カメラのフオートでも結構だそうでございます。諸費用一切は会長様が御負担なさいますが、承知下しますでしょうか」

「そりゃ勿論願ったり叶ったりですが、何だか会長さんにお悪いですね」

「御本人が左様仰有るのですからいいのでしよう。じゃあ女性の方との連絡を申し上げますが、明日の午後三時頃、大阪梅田の梅田大映横のSという喫茶店で待たせております。年令は二十一才、真赤なセーターでミニスカートです。手に週刊誌の『女性自身』をもっておりま。爾後の行動は一切、貴方様に御一任します。会長様よりの御命令で、折返し現金書留お送り申し上げますが、不足の節は秘書課の私まで御申付け下さいます様。では御成功をお祈りします」

電話はきれた。まるで私は狐につままれた面持である。降って湧いた様なハントではあるが、私の意向もものかわ、一方的に押しつ

けて来た手段は会長らしい心憎いやり方であった。私は会長に躍らされている様な劣等感に襲われ、スッポかしたくなった。その癖心のどこかの奥底では、会長推薦のこの若い未知の女性に、ムラムラとハントしたい探求心がこみ上げてくるのを押えようもなかった。

苦笑すると受話器を置いた。この勝負、完全に私の負けである。

明日という日は、私にはすでに約束があった。清原麻耶さんから数度電話があつて、彼女と明日の午後五時にサンケイホールで出会う。立川談志師を楽屋に訪問する予定であったのだ。午後三時に未知の女性と初対面して、それから午後五時の約束の時間までには、一寸カメラ・ハントは無理というものだ。それに幾ら物好きの私でも、矢張り多少の好き嫌いはある。女なら誰だっていいってもんじゃない。先ずは逢ってみるだけでもいいではないか。これは忙がしいことになった。清原麻耶さんの約束を延ばしてもいいのだが、これが又生憎と彼女からの一方通話で、彼女へ電話する手段はなかったのだ。

× × ×

梅田新道界隈は、初冬の昼下りでも相変らずの激しい往来であった。

目指す喫茶はすぐ分った。背広姿に合オーバーの私の手には、いつもの黒い手提鞆がある。カメラ、ストロボ、一条の縄、それに数十葉の参考フオートといったものが忍ばせてある。昼間でも薄暗い喫茶店のルーム内を素早く見廻す。奥まったテーブルに真赤なセーターの少女めいた娘がひとり、入口を見透す位置に坐っている。直感でこれだなと覚ると、私は躊躇せずそのテーブルに直進する。

軽い会釈で彼女の正面に席を占める。ルーム内に客は数人、二組許りはアベックで、他に背広の同僚らしき三人許りが顔をよせて何か喋っている、といった舞台装置であった。この娘は辻村と名乗っても知らぬかも知れない。会長の名を出すべきか、秘書課の今村某氏の名を切出すべきか――。

ままよ、私はしばらくは黙視することにした。約束通りの女性週刊誌が、表紙を上にして机上にさりげなく置いてある。果してこの娘は何者なのだろう。あどけない、一見して世間知らずに見える娘の挙措に私は氣をよくした。これならいける(失礼!)

娘は私をまじまじとみつめ、そっと眸を伏せた。彼女にも私が今日のデートの対象であることが分ったらしい素振りであった。やは



りこの際、男から口を切るべきである。今村某氏の紹介というのだから、やはり今村氏の名を口にすべきであろう。

「失礼ですが、K造船の今村さんを御存知の方ですね」

私の問いに、娘はハツとしたように顔を挙げた。ききとれぬ声で、

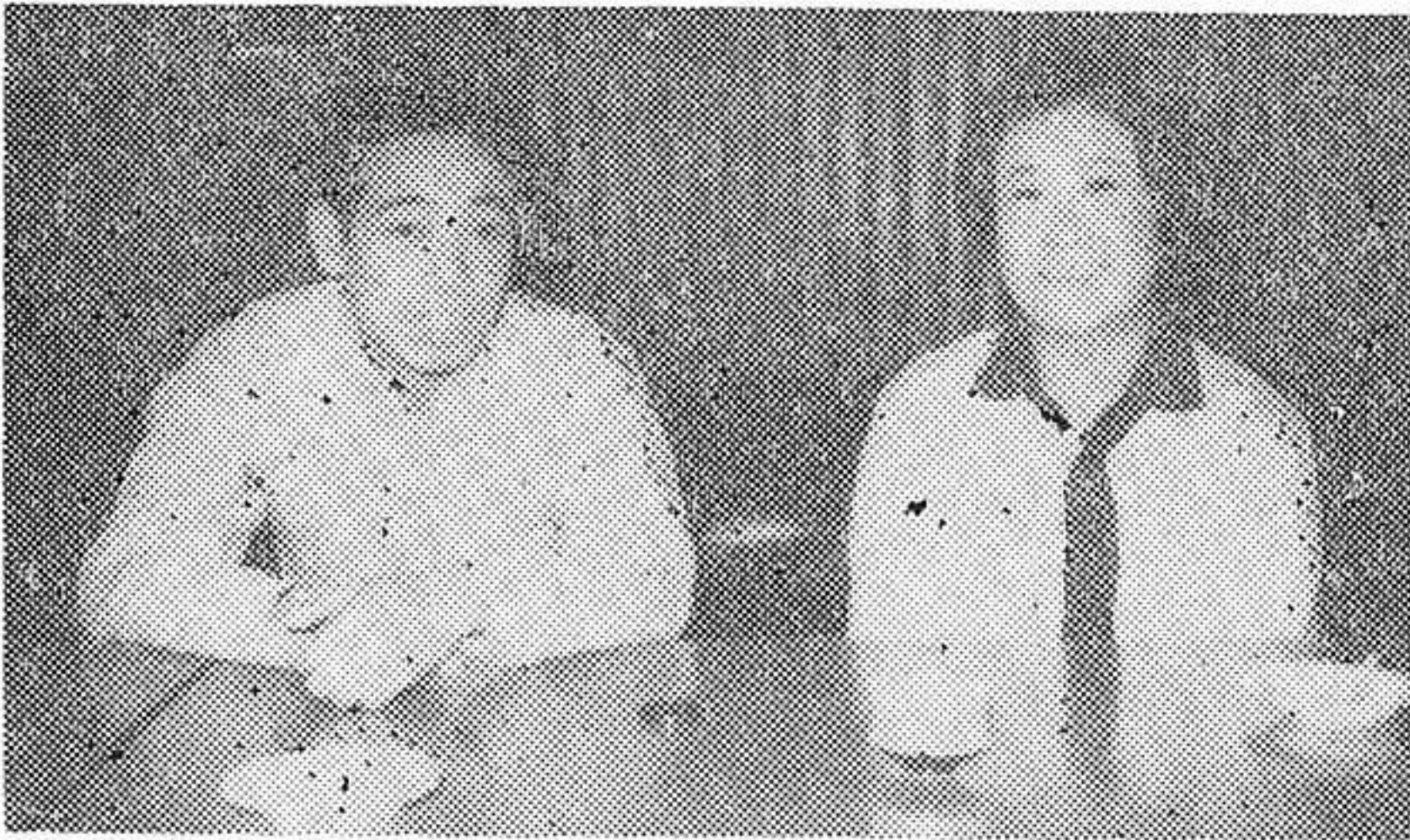
「ええ」と応える。私は名刺を差出して自己紹介すると、相手の名を訊ねた。

「浅井と申します」

「浅井さんですね。お名前は？」

「優子と呼んで下さい」

お互いに相手の素姓を全然知らないのだから、何とも話が、発展しにくい。この娘は、今村秘書氏なる人より、どのような予備知識を与えられてこの場にのぞんだのであろうか。ひょっとすると、単なるヌードのモデルぐらいを精一杯の限界とし



て、アルバイトのつもりでやってきたのではなからうか。かつて会長宅で出会った芝梨枝子の場合もそれに近かったのだ。とすると、彼女のハートをキャッチするのもエスケープさせるのも、すべては私の口説次第となってくるとなると、こいつはなかなかシンドイこ

とになりそうだ。

或いは悪くすると、会長がそうしたことを何もかも承知の上で、私にこの娘を紹介したのではなからうか。秘かに影で糸を曳きながら、ニタニタしてことの成行を傍観して愉しんでいるのではなからうかという想念が私の胸を刹那よぎった。よし、それならそれでよし。ひとつ会長の鼻を明してやれ。私は妙に、会長が絡むと好戦的になる自分を、どうしようもなかった。

「失礼ですけど、会社にお勤め？」

「ええ、お勤めしております」

警戒するような口吻りで、彼女は言葉少なに応えた。ズバリと聞いてやれ。

「今日のデートの目的を、きいておられるのですか？」

「いいえ」

「じゃあ、どうして」

「私のお友達の知合の、今村さんと仰有る方からの御連絡で、いいアルバイトの口があるからと、おききましたので」

矢張りそうだった。何もかも一から口説かせる肚らしい。会長がいくら現金書留を送ってくるのかは、未だ受取っていないので分らないが、未知のこの娘を、イロハのイの字から口説いてゆくのは並大抵のことじゃない。

しかし彼女は可愛い、良い甘才ざかりの娘であった。気を許せば、朗らかに喋べり、戯れ、邪気もなくおじさんと慕ってくるような人柄を感じた。会長の手前でも、私はこの娘を何とかハントしなければならぬ。それにはいきなりコワイ話を持出すテはない。しばらくは彼女の心を柔かく、温かにほぐしてやるべきだ。これからの二時間足らず、私はいいおじさんとしてつきあってやることにしよう。いきなり無理であることは一面識です



を感じたことだった。

「私の素姓、分る？」

「さあ、分りません。何処かの課長さん？」

「当らなかった。もっと自由な職業だよ。それで時々、いたずら書きの小説を書いてみたりしてね」

「今村さんとお親しいんですの？」

「いや、全然知らないんです。しかし今村さんの上司の、社長のも一つ上の会長とは、妙なことでウマが合って、親しいといえれば親しいし」

「まあ、そんなエライ方と……」

「会長がエライかね」

「だってK造船の会長さんなら、大したものなんでしょう」

B Gらしく、彼女は会長なる存在に、かなり敬意を抱いていた。

「浅井さんは大阪なの？」

「阪急沿線の塚口という処です」

「じゃあ大阪へ近いね。お勤めは大阪？」

「ええ、高麗橋なんです」

「証券か、相場、それともクスリ関係」

「まあ、御想像にお任せしますわ」

「じゃあ、今日は木曜だ。会社休んだの？」

「何とか休暇ってテがありますわ」

彼女は大分饒舌になり出して来た。二人のコーヒーは、とっくに空っぽである。

「辻村さんって、お呼びしていいんですの？」

「ああ、なんならおじさんでもいいよ」

「あおう、どんなアルバイトなんでしょう」

「困ったな。中年男の求めるアルバイトっていうと、想像出来ないかなあ？」

「マァー」

浅井優子は、何を想像したのか、真赤になった。

「エッチねえ」

「弱ったな。勝手に想像を逞ましくしちゃ。

私は未だ何も言っていないよ」

「だってえ」

「おいおい、何を想像したのだい？」

彼女は眼を固くつむり眉根をよせて、紅唇をギュッと突き出した。照れ隠しの表情なのだろうか。

私の心は奇妙に愉しくなってきた。近頃の娘はおじさま族に対して、結構小悪魔的なセックスめいたものを想像するらしいのだ。

「こんな笑い話があるんだよ」

と私は話してきかせた。

若いアベックが、草むらで恋を囁やいてい

た。そこへサカリのついた交情期の牝と牡の

二匹の犬が走ってきて、アベックの眼前で戯れ始め、やがて猛烈なシーンが展開される。

若い娘はうっとりとしながら青年にきいた。

「あなたは今、どんなことを考えていらっしゃるの？」

すると青年は夢みるような眼付で応えた。

「きっと貴女と同じことをですよ」と。

すると娘は急に真赤になって叫んだ。

「いやだ、エッチね、この人」

言わずして、娘の想像していたことは、犬の交尾より連想する、愛の交歓であったのだろう。

浅井優子は声を立てて笑った。私も喋べりながら可笑しくなって笑った。笑いが急速に二人の間の壁をとり除く役目を果してくれたようだ。

「あんたが聞けば、吃驚して腰を抜かすようなアルバイトかも知れない」

「おどかさないで……。びっくりしないから教えて——」

「いや、きくと驚く」

「驚かないわ」

「どんなことを、いっても？」



「ええ、どんなことでも」

「いや、やはりやめとこう」

「ウン、焦<sup>じ</sup>らさないで……」

「キッス一回が千円、おっぱいをさわると千円、ネッキングが二千円、ヘビィペッティン<sup>グ</sup>が五千円。手を握る程度なら五百円かな」

「まあ……」

「というようなアルバイトのあることが、週刊誌に書いてあったよ」

「いやッ、冗談ばかりいって」

「まあ、今日はよしとこう。でも折角休暇をとって、会って呉れたのだから、デート賃をあげるよ。それとも食事でも奢ろうか？」

「そんなの要りませんわ。私マジメなのよ」

優子はプンとふくれてみせた。わざと……

「御免御免、でも本当に言い出し難いのさ。」

今日は勘弁してよ。この次言うからさ。それに今日は会う人があるんだよ、午後五時に」

「忙がしいお体なのね」

彼女は多少の皮肉をこめて、呟<sup>ささや</sup>くように言った。

「貴女とは突然だろう。この約束は前々からなんだ。女流作家を目指す自称レスビアンの女性と一緒に、東京から今日サンケイホールにやってくる、落語家の立川談志に会うため

にね」

「ああ、あの人よくテレビで見ますわ。『笑点』の司会している、口の悪い人でしょう」

「音協の例会でね、彼のワンマンショウで、

『立川談志をきく』というのがあるのね。

彼から手紙をいただいて一度会ってみたくなつたのさ」

「何時から？」

「始まるのは多分午後六時過ぎからだろう」

「お邪魔でなかったら、私も連れてって下さい」

「ああ、一緒にいってもいいけど、あんた古典落語なんかきくの」

「余り興味ないわ。でもジカに一度顔をみたいわ。だって人気ものなんですもの」

妙な空気になってきた。彼女はもうすっかり、先刻来の押問答を忘れて、立川談志に興味を持ち出してきた。

喫茶店を出ると、十二月初旬の日暮れに近い午後四時の風はかなり冷めたかった。未だ時間も早いので私達は軽食を摂りに、桜橋近くの店に入る。

彼女はサンドイッチ、私はチーズとビール一本。彼女は私と芸能界のつながりをしきりにききたがった。ほどほどに或る程度誇張を

交えて、あれも知っている、彼も知人とホラ

を吹いていると、世馴れぬ彼女はすっかり信用してしまふ。若い娘と喋<sup>しゃべ</sup>っている私も結構楽しい。言葉のハシバシにSMのプレイが

かったものを挟むが、客観的にきいているので彼女はさして気にしない。「へえ」とか、

「まあ」とか、驚いている程度だ。

これも私のつくり話。飼育する場合、時によつては嘘も方便だからなあ。もうその頃は、彼女を呼ぶのに、馴れなれしく優子ちゃんである。

「優子ちゃんもきつと知っていると思うが、テレビでいつも出ているコメデアンだがね。

名前をいうと悪いからイニシャルをとってMといおう（なあに、實在しないのだから、本名などいってこないんだが）彼のヌード撮影は、知る人ぞ知るで、有名なんだよ。相当名のある女優も撮られたらしいという話だ。そ

の彼が、近頃もっぱら撮っているのは、女体をひしひしと縛<sup>しば</sup>ったり、いろいろの革具や責

道具を使って、女の人が苦しんだり、もがいたりするのをとることに夢中なんだね。こんなのをどう思う？」

「どうして、そんなことするの？」

いともあどけない問いである。



「どうしてって、嬉しいからさ。女の人もまた、いじめられて飲んでるんだよ」

「そんなこと信じられないわ」

「私もMと一緒にあったことがあるが、ヌードなら極く平凡なニューフェイスが、一旦縛られて、いろいろに動くと、まるで見違えるように生き生きとして素晴らしいんだね。こないない娘が、どうしてウダツが上らないのかと、不思議なくらいになるね」

「でも、痛いんでしょう」

「痛いと思うね。でも女の方は、うっとりとして、苦悶の中に陶醉しているんだね。勿論相手にもよりけりだけど」

「縛って、女の人を何もしないの？」

「何もって？」

「例えば乱暴したり、いやなことしたり」

「私の友人は生憎と、皆紳士でね。女の人とはプレイという言葉で私達呼んでいるが、つまりプレイして、食事でもして愉しく別れるよ。勿論残念ながら何もなくてね」

「プレイなのね」

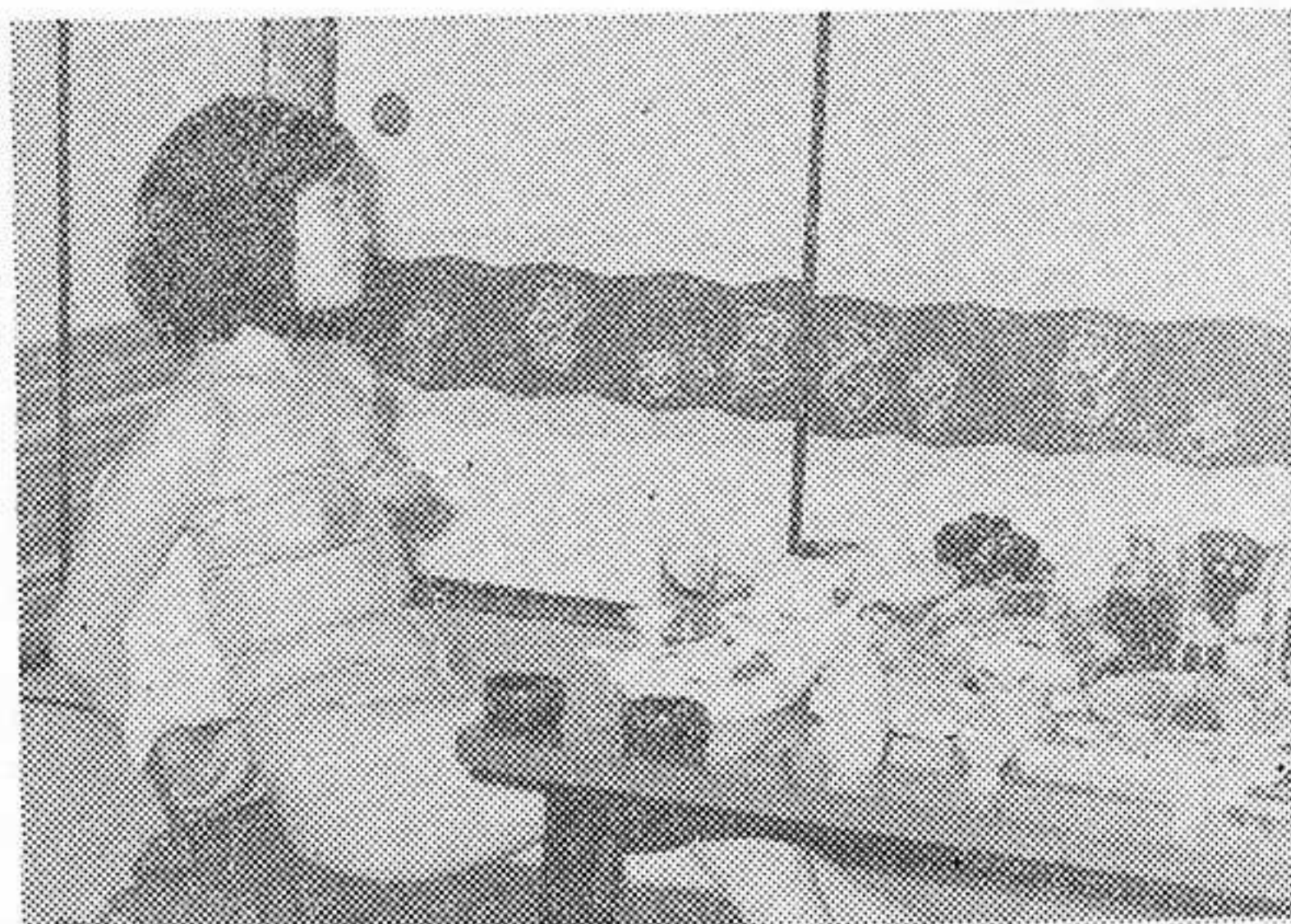
「そう、一種の謂わばお遊びなんだ。多少はアブノーマルだけど。そして偶には優子ちゃんのような可愛い娘ちゃんに、反対に縛ってもらって、いじめていただいてポンとお小遣

をあげてゆく社長タイプの人もあるよ」

「ヘンな世界」

「そう、確かにヘンな世界だけど、平凡と単調に飽いて、或る程度余裕が出来ると、そんなお遊びがしたくなるものさ」

「おじさんはどちら？ いじめるほう、それとも女の人にいじめられるほう？」



「私はいじめたいね。そんなひとときに生甲斐を感じるんだなあ」

「立川談志さんは？」

「そう、彼も恐らく、優子ちゃんのような可愛い子なら、暇があればいじめたくなるだろう。だけど彼は矢鱈に忙がしいから、心では仮にそんなことを考えても、とても、そんな余裕がないんじゃないかな」

「おじさんのアルバイトの意味、少し分ってきたわよ」

優子は無邪気にいつてのけた。

「そうかね。でも矢張り想像に任せとくよ」  
脈のありそうな気配を感じたが、いずれにしても今日は無理である。又の日にゆっくりと口説くつもり、謂わば前哨戦のようなものだった。

午後五時前、私と浅井優子はサンケイ会館の扉の中へ消えて、三階へエレベーターで昇っていた。

サンケイホールには、既に数人の男女が、チケット売場に並んでいた。立川談志の一行は、新幹線で東京より、ここへ直行してくる筈である。

私達は楽屋入口に通ずる廊下の奥へと歩いた。事務所で彼等の所在を訊ねると五時半過



楽屋入りの予定だという。半時間近くある。

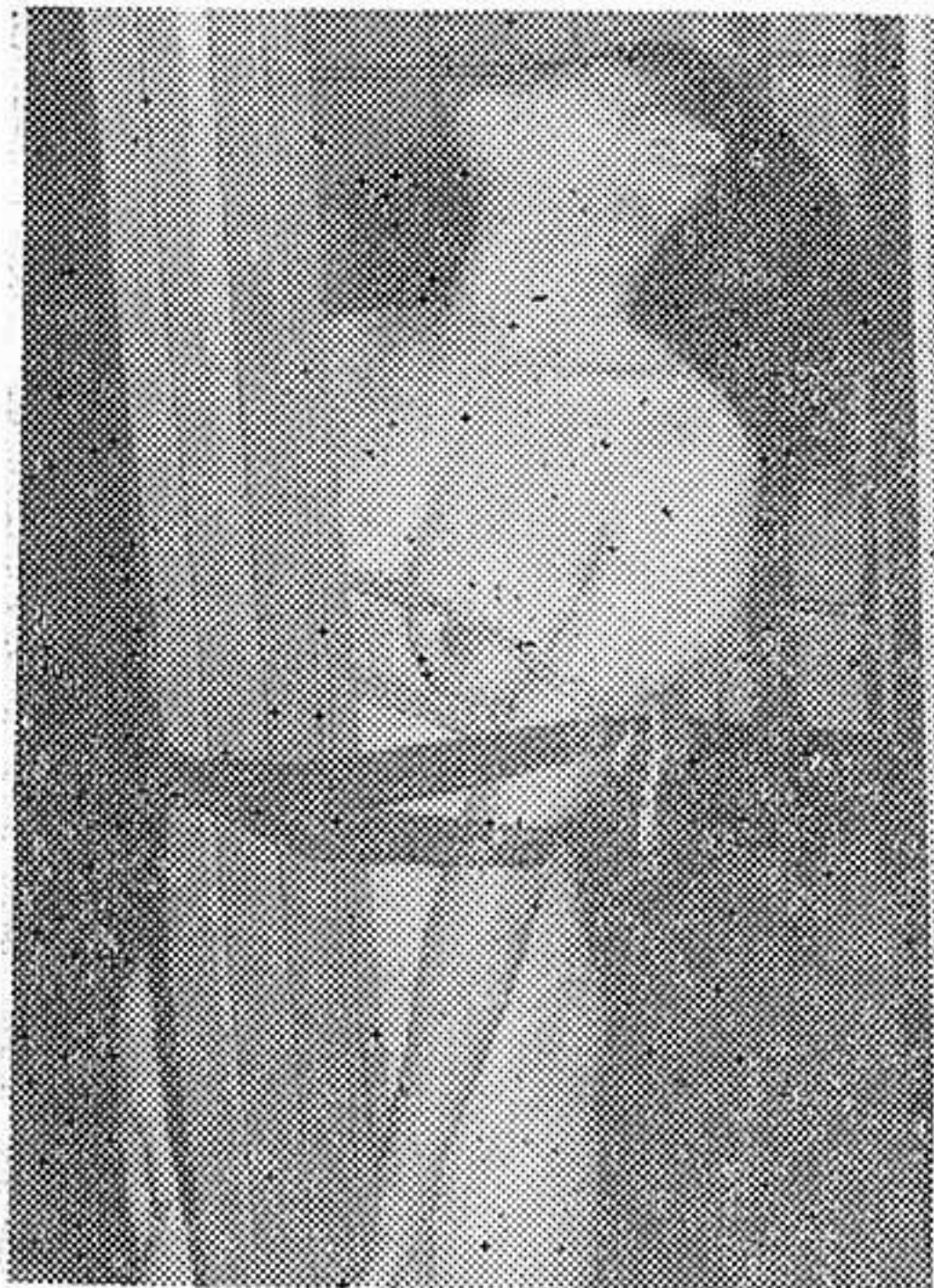
「優子ちゃん、どうする？」

「私、どちらでもいいわ」

「じゃあ、私は彼に会って、すぐ帰るつもりだから、何処かで待っていてくれない。未だ別れたくないからね」

事実、この俣別れるには忍びなかった。次の逢瀬の約束や、もう一押しして、浅井優子の気持をも確かめたかった。

「それじゃ、七時に逢いましょうか、さっき始めて出会った喫茶店で。それまで私、梅新をブラブラして買物でもしますわ。待ち呆うけは、いやよ」



彼女が、もし落語に興味があれば、私と残ったに違いなかった。しかし若い娘に関心は薄かったであろう、さして未練も示さずに私のそばを離れていった。

「近くだけ車にのってお行きよ」

私は手早く千円札を一枚優子に手渡した。

拒みもせず彼女は受取って、開いたエレベーターの中へ消えて、手を振った。彼女の住所も、勤務先も、連絡の電話すら聞き洩らしていた。私は掌中の珠を落した様な悔恨を覚えていた。

× × ×

偶然、皮肉なものだ。優子を見送って、ぼんやり佇んでいる私の眼前に、清原麻耶をのせたエレベーターが入れ違いに昇ってきた。

眼ざとくお互いを見つけて合図を送る。

「彼、未だ到着していないよ。今、事務室で聞いたのだけど」

「そう、少し早かったのね」

私は彼女に、浅井優子のことは伏せておいた。デリケートな女心……。寸前まで他の女性と一緒にだったと知れば、レスビアンをもっ

て任ずる麻耶とて、いい気はしないだろう。

時間潰しに階下に降りて、スナックバーでビール一本を傾ける。始めて出会った時の麻耶はミニスカートであったが、今夜はピタリと身についたズボンをはいていた。

麻耶が談志を知っているというので、同行するつもりになったが、よくきくと、彼女がPM11の仕事でスタジオに行った時、彼を垣間見たというに過ぎない。勿論、談志氏が彼女を知ろう筈もない。

頃合を見計らって、再び楽屋へ顔を出す。人気のない楽屋は冷めたかった。暫し待つつもりで腰を降した途端、ドヤドヤと一行が入ってきた。静かな楽屋は忽ち姦しくなる。

「やあやあ、辻村さん。今も今、新幹線の車中で、あなたの噂をしていた処ですよ。おなつかしい」

開口一番、彼は近よって私の手を堅く握った。素顔で逢えば、こんないい人間はない。悪口雑言は、すべて舞台でのテクニクを感じさせる懐かしさであった。彼の辛らつな皮肉たっぷりの漫談の底に、古典落語のエースの半面は、どうしても窺えなかった。

浅井優子に光る筈のストロボが、彼との記念写真に光った。妙なところで役に立ったも



のだ。麻耶もカメラに入った。

「覗いていって下さいよ。ロープちゃん、御案内したげて」

といわれて、すぐさよならとも言えない。私は彼にだけ打明けるつもりだった浅井優子との一件をすっかり言いそびれてしまった。

マネージャーの長縄ロープ氏に案内され、私と清原麻耶と、そしてもう一人、彼の大ファンだという二十才前の可愛い和装に着飾った娘さんと三人、ホールのいいシートに案内される。この場合、義理にでも彼の芸を拝見させていただかねばならない。

「彼の漫談が終ったら、私は帰るよ」

麻耶と話していると、神戸から遙々きたというM子さんは、意外といったように、「アラッ、おじさん、談志さんの古典をおききになりませんの。いけませんわ、きいておゆきなさいよ」

としきりにすすめる。これは弱ったことになった。私は若い娘二人の真中で、先刻別れた優子の面影を独り思い浮かべていた。

「笑点」の毒蝮三太夫が欠演で、代りに談志の弟分の若手落語家が掛合式の漫才めいたものを始め、果ては客席に降りてアンケートをとり始めていた。広いホールがぎっしり満員

の盛況に私は意外だった。談志一人の人気で大阪の客がこれだけ集まるのだ。私はそこに談志の憎めぬ人柄のよさを感じた。

心半ば上の空の一時間許り。彼には悪いと思ったが、目的を奈辺に持つ私としては致し方なかった。

休憩となった幕合に私はホールを出て、あわただしく喫茶店へ電話した。広告マッチを貰っておいたのが何よりであった。時計を覗くと七時半を過ぎていた。

レジで呼出して貰う間もまどろっかしい。

「どうしたのおじさん。私ずっと待ってますのよ」

「うん、御免御免。遂々談志をきく羽目になっちゃって、どうしようもないんだ。どうしよう」

「どうしようって。それじゃ、まだまだ終らないんでしょ」

「九時半頃になるだろうね」

「じゃあ、私帰りますわ」

「あっ、それじゃもう一度改めて会おう。えーと、（私はあわててポケットから手帳をとり出しあわただしく繰る）そうだ、十七日の日曜日どう、その喫茶店で午後一時に」  
「十七日ね、構いませんわ。それじゃきつと

ね。ああそれから、先刻お車代すみません」  
「いいんだ、そんなこと。それよりきつと来てくれ給えよ。若し差支えがあったら、さっき渡した名刺の電話に連絡して下さい。じゃあ、その日まで——」

「お休みなさい」

私は又しても、彼女の住所、電話をききもらした。しかし、彼女がきつと現われるような確信を抱いていた。嘘のつけるような娘ではない。あの娘の眸は清らかに澄んでいたのだから——。

若手落語家の出番の小半時間、私は談志と二人でゆるりとSM談義に過ごした。清原麻耶は来たがったが、趣味の違いもあるので、私は遠慮してもらった。優子を誘導する手段として持参した数十葉のフォトを、彼はシャツ一枚になって愉しく眺めていた。

談志の出が近づき、私達は再びシートへと引返した。

古典落語『鼠穴』の長講一席。ひたいに汗しての熱演に、私はしばし、すべてを忘れてその話術に惹きこまれていった。

万雷の拍手。そして深々と彼は語り終っていつ迄も客席に頭を下げていた。謙虚な彼の一面がそこにあった。これが本当の談志の姿



であるのかも知れない。

私はすぐその足で帰るつもりなのに、若い娘二人は、彼の熱演に酔って、私をダシにして彼を引っ張り出そうとした。

「彼は彼の約束がある筈だよ。しかしそんなにいるのなら聞いてきてご覧」

私は苦笑して娘二人を聞きにやらしてしばらく待った。てっきり数分して、スゴスゴと二人は断わられて戻ってくる。

「それご覧、だからいわんこっちゃない」

どうせ優子の既に待たない残り時間だ。少しはこの娘二人と夜の巷をさ迷ってみよう。

清原麻耶の案内で、私はスタンドに行き、

三人はよくたべよく呑んだ。神戸のM子は日本酒が苦手ときき、席を改めてニッカバーに立寄る。談志に似たバーテンがいるとい

うことも、生憎と彼は休みで、清原麻耶はしきりにバーテンのあれこれと顔を売

っていた。

フト、悪戯心から、この談志一辺倒の

M子にSMめいた話をしかける。年をきけば私の長女と同年令、家作と土地でたべている、いいご家庭の独り娘。所詮は住む世界の違う箱入娘に、私は鉢を納めて、いさぎよく大阪駅で麻耶と、そして

M子と三人三様に袂をわかった。談志と会う機会があれば、いつかはまたこの可憐なM子とも会うこともあろう。しかし恐らくハントの対象になるには、余りにも純情な娘すぎたようである。

× × ×

曇り空の間に晴間も見えて、この日曜日は暖かかった。ボーナス景気で、阪急、阪神のデパートは殺人的な雑踏と喧噪の渦中にあっ

た。  
浅井優子の歓心を買うつもりで、阪急の装飾品売場に足を踏み入れた私だったが、余りの混雑に恐れをなして、まるで人波に押し出されるようにして吐き出されてしまった。

山田会長から送られて来た現金書留封筒の



中味は、予想以上に多かった。相当豪遊し、優子にかなりの代償を払っても、なおオツリのくる額であった。それだけに私の心は負担を感じてかなり重い。何とか優子をハントしなければならなかったからだ。

キタの料理旅館『K』は会長始め、同会社のよく利用する待合なので、Kを利用したらいろいろと便宜を計って貰える旨の、今村氏の添書が入っていた。勿論会長の名でツケのきくところである。『K』は曾根崎新地にあった。

午後一時、私は喫茶店『S』の遮光硝子の扉を押す。さっと辺りを見廻したが、浅井優子の姿はなかった。

コーヒーを啜り、数本の煙草を灰にして、私はそろそろ焦立ってくる心を鎮めて彼女を待った。約束の時間は、既に二十分もオーバーしている。黒い不安の雲が、急速に拡がってきた。アルバイトの内容を薄々知って、彼女はやはり敬遠したのであろうか。それとも先日、待たされたシッペ返しのもりであるうか――。

もう十分許り待って、彼女が現われなかったら、潔ぎよく私は退却する腹をきめた。買物に行こうと誘った妻や子供の要求を蹴



ってまで、この未知の若い女性とのハントの目的で出て来た自分が、急に腹立たしくさえなってきた。

いら立たしく、数度となく時計をみつめていた私は、針が三十分をさしたので、遂にあらめて伝票を擲んで立ち上った。黒い鞆が今更のように重く感じてくる。

レジで金を払って出ようとした時、扉が開いて飛び込むように入ってきた娘——。それが紛れもなく浅井優子であった。

「遅いね、出ようとしたところだよ」

思わず言葉にとげが交る。

「すみません。電車がすぐ混んじやって、一台のり損なつたものですから……ご免なさいね」

彼女は素直に謝まった。

「おひるの食事は？」

「あわてて出てきたので、まだなんです」

「そう、じゃあどこかへ、たべに行こう」

私は喫茶を出てさっさと先に歩く。遅延を理由に有無をいわせず、このまま『K』へともぐり込んでやろう。足早に彼女は私のあとについてきた。大分私が待たされてご気嫌斜めとみてか、この若い娘は心を痛ませてオドオドした表情であった。

× × ×

数度聞き訊ねて、やっと辿りついた『K』の玄関口で、私は山田会長の名を告げると、あるいは既に秘書の今村氏から連絡があったのか、快よく座敷へ通された。

大体夕方より忙がしくなるのか、日曜日の割に閑散としていた。こうした場所は夜行族で栄えるのだろう。昼下りの客は反って珍しい方だ。浅井優子はこうした雰囲気のところには馴れないのか、表情は硬く体をこわばらせている感じだった。

「おのみものは、何になさいます？」

仲居は愛想よく振舞い注文をきいた。こんな場所で彼女の意向を聞くのも大人気なく、私は即決で酒を命じた。料理の出来てくる迄の間、私はホームゴタツを挟んで坐る。

「おじさん、ご存知のところ？」

「いいや、始めてだよ。会長の顔のきくところだそうだから、どんどん遠慮なくやっていいんだよ」

「私、こんな待ち合みたいところ、始めてよ」  
「だろうね、キタでも一流だそうだから、私にだって手がでない。でもいいじゃないか。どう、丹前にきかえるかい、落着くよ」

彼女は黙って、もじもじしていた。

私はそれにはお構いなく、服を洋服ダンス

へかけて、彼女の眼前で丹前を身につける。

「岩風呂があるそうだけど、料理を待つ間、入ってこないかね」

「でも昼間から変ですわ」

「構うことないよ、一緒にゆこう。勿論風呂は男女別々らしいけど」

先程からのかなり高飛車な私の出ように、彼女はすっかりのまれてしまってたか、正直いってオロオロしている。すべてが勝手違いなのであろう。いきなり昼食を口実にここへ誘った、私の計画は図に当たっていた。

「折角沸かしてあるんだから、ゆこう。あるいは今日の初風呂かも知れんよ」

私は立ち上った。

「おじさん、次の間で一寸待っててね。じゃあ着換えますわ」

遂に陥落して、彼女は立ち上る。どうやらその気になったらしい。微かな衣摺れの音がひびく。私は二の間の境の襖に、耳を当てる想いで胸を熱くしていた。

私は受話器をとり上げる。交換に風呂へ入ることを告げる。待つ間もなく先刻の仲居が入って来た。チラリと笑みをこぼして先に立って案内して行く。足早やに仲居に近付き、



小さく折り畳んだ伊藤博文を女に握らす。礼をいおうとするのに、いいんだというように肩をつつく。この二人のカップルに、カンのいい仲居は既に心得ているらしい。

浴場の前で、私と浅井優子は右と左に袂を分つ。

「旦那様、今の時間でしたらご一緒でも構いませんよ。私が気をつけておりますから」

「いいんだよ、一寸無理だろう」

私は仲居に好意を謝し、人ツ気のない浴槽を硝子窓越しに覗きながら丹前をぬいで裸になってゆく。

大都会の喧燥の真只中とは思えぬ静けさであった。華やいだタイルの仕切り越しに婦人湯の方で、湯のしぶく音が微かに聞こえる。

「優子ちゃん、一人きりだろう。こっちも、一人ぼっちだ」

私は大声で叫ぶ。ワーンと声が反響してわたる。

「いいお湯ですわ」

といったらしい言葉が、女湯から流れてきた。独りぼっち同志なら、どっちかへ固まりたい欲望を、私はかろうじてこらえていた。初手から驚かせてしまったら、きつとあとあと、まずいに違いあるまい。

私は洗うのも勿々に、この新湯の体にひりつくのを快よく裸に受け止めながら、岩風呂を出た。男は湯に入るといっても所詮は鴉の行水。折角のいい湯が勿体ないくらい早さである。記憶を辿って、当てがわれた部屋に戻る。仲居が料理を運び込んでいた。

「会長からきいているんだけど、ホテル式の間があるってことだけど……」

「ここから廊下づたいに参りますと、新館の方は大体アベック様になっておりますわ。お食事おすみになりました、およろしければご案内申上げます。外部から見ますと、全然独立したホテルのようでございますけど、経営は同じでございます、こちらからも参れるもでございますのよ。暖房もしておりますが、急には暖まりませんので、ガストーブもついております。せいぜいこれからもご利用下さいませね」

仲居は一寸好色めいた笑みを泛かべた。親娘ほども年の違う私達カップルに、フト猥らな連想を走らせたのであろうか。そんな情事を想像されても仕方のない、この場の雰囲気であった。

浅井優子は無雑作な髪的首筋辺りの毛を濡

れそぼらせ、顔を洗ったのか、つやつや光る素顔で、はにかみながら戻ってきた。

素顔は実にあどけなかった。まるで高校出たての少女のような可憐さで、丹前が如何にもぎこちなく不自然であった。

遠慮勝ちに料理を並べたテーブルにつく。

「お酌いたしましょうか」

「いいんだ、勝手にチビチビやるから、お酒を四、五本運んでおいて下さい。ついでにご飯も持ってきて下さいよ。その方が気楽だから」

「じゃあ、お願いしますわ。ああそうそう、先程は過分にどうも有難うございます」

仲居は心得て席を立てていった。酒とめしを運び終ったら、電話するまで来ないようないつけるつもりであった。

洋服ダンスへ向って立ち上り、背広の内ポケットの紙入れから白い封筒をとり出して来た。大きい聖徳太子が一枚鎮座している。

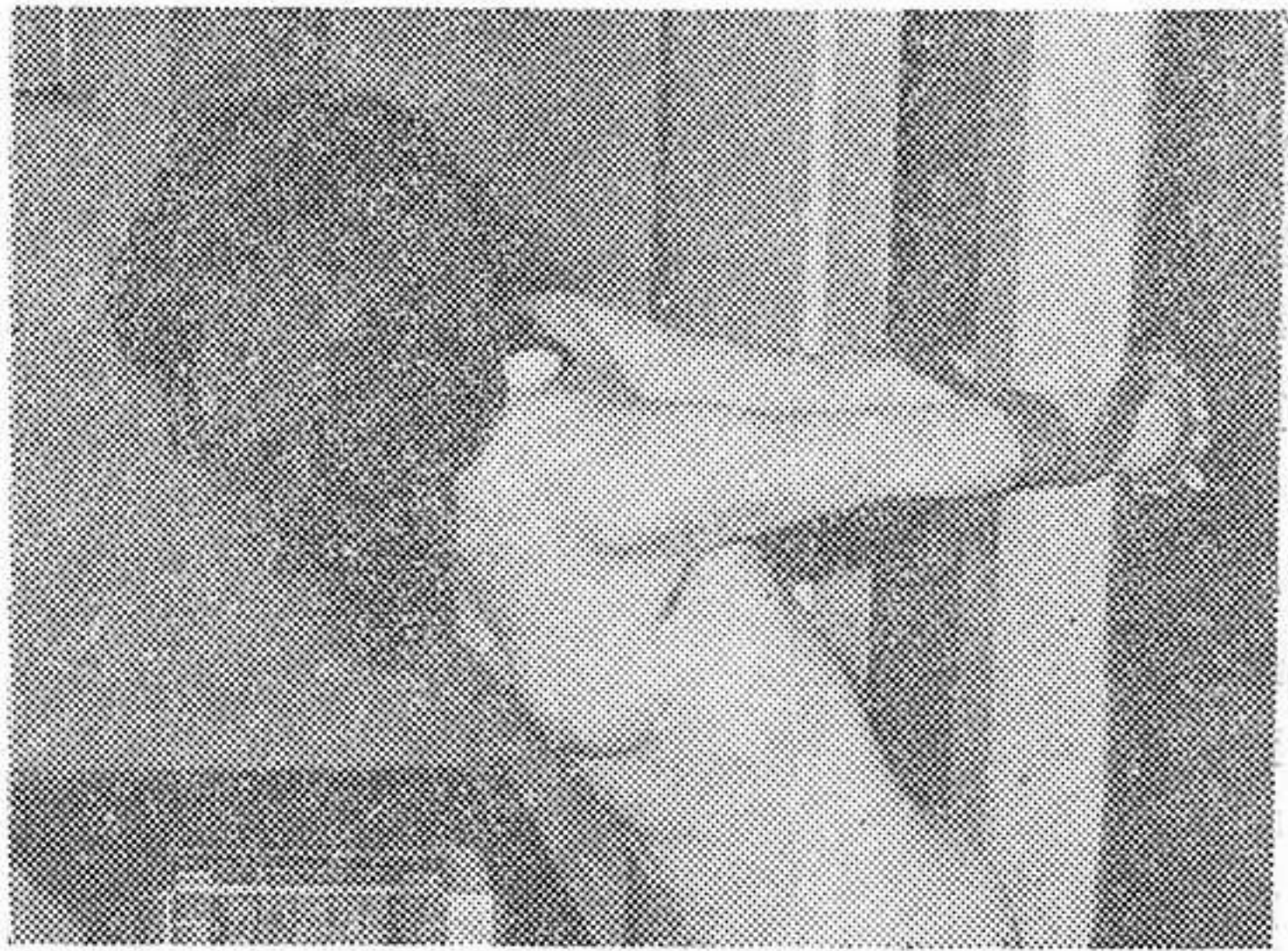
「これアルバイト料だよ」

「あらッ私、まだ……」

何も承知していないというつもりだったのだろう。それにかぶせて

「おやさうかい。私は今日来てくれたのは、てっきり承知したとったのだけど、いけな





かったのかい。どちらでもいいや、折角出したのを、引込めも出来ない。まあ、とっておくさ」

私は彼女の前に押しつけるように差し出した。

「困りますわ、本当に……」

「いいんだ、いいんだ——」

押しつけると私はトイレに立った。別段し

たくもなかったが、彼女の出様と、そしてあるいは中味を確めるかも知れない、その時間を与えるために、わざと席を外したのである。彼女の態度は、寸時のこの空白でどう変化するかが私には興味の中心であった。そのために、さりげなく押しつけた白い封筒の位置を確認することを私は忘れない。

私はやがて戻った。予想にたがわず封筒の位置はやや最初の位置よりずれていた。

「でも羞かしいわ、わたくし」

この言葉は、既にアルバイトの本質を説明するに足る充分な発言であった。彼女は容認しているのだ。羞恥と未知の恐怖が甘味なアルバイトの中味と相剋しているのだ。

わざとそれには触れず、私は黙って盃に酒をつぎ始め、独酌で数杯をあけた。

「一杯どう」

「余りのめないんです」

「少しなら、いけるんだろう」

「じゃあ、一寸——」

両手でこわごわさし出す盃に、私は軽くさしてやる。

「遠慮なく食べてよ。私もたべるからネ」

片っ端から箸をつけ出す。昼酒は風呂上りの五体にしみ渡り、凝った料理は旨く、しば

らくはたべる方に神経が集中していた。

「あんまり非道いことなさないでね」

ぽつりと思い出したように、雑談の間に優子は言葉を挟んだ。余程プレイのことが気にかかるのだろう。恐らく彼女はたべているこの旨味のよさも分らなかったに違いない。

彼女の言葉に大阪なまりがないと思ったのも道理、彼女は兄夫婦を頼って、今年の四月高校を卒業すると、遥々岡山県の玉野市というところから上京したのであった。故郷の実家は漁業だそうである。宇野—高松間の連絡船の発着のこの街で、生れ育ったのだった。「この間、兄の車で玉野市まで帰りましたのよ」

「随分かかっただろう」

「ええ、五時間半。私、メーターをのぞいていましたが、二三〇キロありましたわ」

「宇高連絡船のフェリーの辺りから未だ遠いの？」

「あれからもう十キロばかり、トンネルを四ツ、五ツ越して走りますの。私の家から四国の高松辺りが、はっきり見えますのよ」

ふるさとの話になると彼女はよく喋った。

故郷は遠くに在りて思うものなのか。私はいい調子で合槌をうってやった。大分ほろ酔い



気嫌も手伝っている。

「おじさん、全部脱がなくちゃ、いけませんの？」

また話がそこへ前触れもなく戻る。余程気にかかると思える。

「やってくれる気なんだね」

「でも……」

「優子ちゃんの心に任すよ。私はもうどちらでもよくなってきたよ」

「それじゃいけませんわ。でないと恵んでもらったみたいで受けとれませんわ」

「じゃあ、あんたの気のすむようにやればいいだろう。それで我慢するよ」

「あのう、どこでとりますの？」

「ここでもいいし、何なら別室へいってもいいよ」

「いよ」

「仲居さん、来るかも知れませんか」

「いや、電話するまで来ないことになってるんだ」

「羞かしいわ、わたくし……」

私は少し冷えた銚子の酒を、黙って空にしていた。

「いいですわ、おじさん。何かして下さい。」

私、何も分りませんもの。教えて下さい」

「いよいよ腹をきめたね。じゃあ、ここで全部脱いで丹前を羽織っていい給え。部屋は暖かいから寒くないだろう」

私はまたぞろトイレへ逃げた。少しでも彼女の気持を軽くしてやらねばならぬ。

かなり時間をかけて戻ってくると、優子は

丹前の胸許を深々と合せて、

両手で押え、ポツと眉目を紅

に染めて緊張した顔で座椅子に凭れていた。

「脱いだの？」

「ええ」

私はノロノロとカメラとストロボをとり出す。酔余の座興めいた気持で、優子の丹前の尻のポーズを二、三枚パツ

パツと撮った。

「胸を開いてご覧——」

いわれる尻に、彼女はこわそうな手付で渋々といった体で少し開けた。未だ乳房は覗かない。ああ、何と手間のかかることよ。

「もっと」

声が大きくなって、われながらハツとする。

優子は叱られてベソをかけた少女のような顔になって胸を開いた。汚れを知らぬ乳房が、豊かにそこに薫っていた。乳量も薄桃づいて、丸味を帯びたふくらみは、さながら処女の象徴の如く、つやつやと光り輝いていた。優子は顔を伏せ、必死に羞恥と斗かっているようであった。臍下は生憎と机にかくれてみえないが、すべてを脱いでいることは確かであった。ムラムラツと悦虐の血が頭に昇ってきた。私は俄破と近寄ると、彼女の丹前をむしり取るように引きはがした。

「呀っ！」と胸を抱えて、この若い娘はうずくまる。止めてとは叫べないのが彼女には悲しかったであろう。

丹前の紐を握ると私は優子の胸に手をかける。ピクリと体が小刻みに震え、総毛立ったように彼女は慄えた。

「触らないで、触っちゃいやッ」





いつしか優子は必死に拒もうとしていた。

「触らないと何も出来やしない。体を起すんだよ」

私は粗々しく叫んで、ぐいと、かがみ込んでいる彼女の体を起そうと肩に手をかける。ややあって落着きを取り戻したのか、彼女は自から体を起した。諦観の念が心を支配し始めたのであろう。

「おじさん、お願い。乱暴しないでね」

哀願するような小さな呟やきが、私の耳朶に残った。

「ああ、何もしない。唯ちよっとプレイするだけだよ」

私はさして長くもない一本の腰紐で彼女の胸をしめるようにして縛った。とても足りやしない。更に私の腰にある紐を外すと、丹前の前をはだけた俵、胸から下腹、そして彼女があつという声をのみ込んだ時、紐の残りは股を通過して腰で結びつけていたのだった。

両手は自由にしているので、ダラリと垂れていた。彼女は真赤になって、この曝し者の痴戯に耐えていた。机上の料理机が邪魔になるが、その周囲をぐるぐる廻って、左右前後の角度から、私は優子の初縛りのポーズをとってみた。

「優子ちゃん、両手を座椅子のうしろに廻して御覧」

「こうなの？」

云われる俵に、彼女は素直に垂れていた両手を座椅子のうしろで組み合す。私は邪魔な丹前を脱ぎすて、野暮ったいシャツとズボン下の恰好で、さかりのついた獣のように、優子の周辺をカメラを握ってうろつき廻っている。徐々に彼女の顔面から赤味がとれ、軽い微笑みすら浮かんでくるのを私は見逃さなかった。細い金のネックレスのみが優子のうなじでピカリと光っていた。

この若々しい、汚れを知らぬ裸女を前にして、私は更に酒宴を続けようと腹をきめた。

「ウーン、疲れた」

私はどざりと坐ると、冷え切った盃の酒をぐいと呑み乾した。熱燗一本欲しいところだが、こんな遊戯の最真中に、まさか酒の注文も出来ない。いつしか、かなり酔は廻っていた。銚子を振ると、一本に未だかなりの量が残っている。それを彼女の前につき出して、

「優子ちゃん、ついでくれないか」

私は盃を差出すと強要した。裸体を細紐でくびれる程に緊縛された優子は、素直に銚子を受け取ると、なれぬぎこちない手付で、私

の盃に慄え勝ちの手を、さしのばしてくるのであった。縛った裸女を前にして、悠々酒をのむ私は、何という果報者か。これぞ男冥利につきるというものである。(ウーン、やりやがったな)と苦笑する山田会長の老獮で皮肉たつぷりな笑みが、刹那、私の心をかきたてる様に走った。

× × ×

私達三人は今、本館から別館につながる渡り廊下を歩いている。先頭に心得た仲居、真中にハンドバッグをさげた丹前姿の優子、背後に丹前に鞆をもつ私と云う順序。優子の丹前の中味は、先刻縛ったあの俵の胸縄股縛りであった。

仲居がきた時、私はそつと耳打ちした。妙な顔をした仲居だったが、云われる俵にバタバタと出てゆくと、新たな二本の腰紐を持参してくれたのである。備え付けの二組の丹前の腰紐がどこへ消えたのか、仲居は敢えて詮索もしなかった。私や、優子の脱ぎ捨てた下着は嵌め込みの洋服タンスの底辺に散乱している筈である。服にわざわざ着換えるのも厄介だからという口実で、私達はその姿の俵別館へ行く事になったのである。

興味を抱いた仲居が、料理の皿や鉢を片附



けに部屋に入った時、タンスの中を覗けば、私達二人の痴戯は一目瞭然であるかも知れない。中年男の図太さは、むしろ仲居がそれをかぎつけることに快感すら覚えていたのだから、最早、病も膏盲である。

「本館のお部屋にお戻りになったら、又お知らせ下さいね」

ポットと茶菓子をおき仲居は丹前姿の二人を交互にながめて、稍々シヨッぱい顔でいうと、さっさと消えていった。

若い娘はドタン場まで追いつめられると、反って大胆になっていた。優子は案外淡々と、むしろ私のこのスリルある茶番に微笑みすら浮かべていたのであった。

人気のなかった部屋は冷えていた。客がなためか、暖房は全然効いていない。急拠ガストーブに火を点じる。二つ枕のダブルのマットレスが、ストーブの横にこれみよがしに敷いてある。和室を一段下れば、ソファー付のジュータンの敷いた洋間になっていた。

その洋間の中央に、私は優子を立たせた。丹前に手をかけようとすると、彼女は自ら素直にくるりと脱ぎ捨てた。

白磁の、蚤あとひとつないスベスベした柔肌の全貌が、寸前に佇立していた。澄んだ優

子の眸は、向後の私の一挙一動をじっとみつめていた。ぞろぞろと私は例によって愛用のダンダラ紐をとり出し始めた。優子の瞳にキラリと異様な好奇のまなざし。

かなり見飽きた初縛りを、私はやっと解いてやった。優子は蔽いようもなきハダカの身をかくしかねて、その場にしゃがんだ。

この熟さんとする乙女の肌を鞭打てば、如何なる反応を示すだろう。私は鞆の底に秘めてきた、しなやかなる黒革の細帯を試してみたい欲望にかられた。その欲望は押さえようもなく膨張し始めている。

手始めには尻を打つに限る。よしそのポーズをとらせてやろう。幸いバス、洗面所に通ずる障子襖を開くと恰好の立柱が一本ある。障子襖を外して、邪魔にならぬ個所へ立てかけ、私は優子の手をとった。

「どうしますの？」

「ウン、あの柱に抱きついて貰うよ」

「こうするの？」

「そうだ、それでいい。しかし一寸淋しいからアクセサリーをつけよう」

私は短かめの縄を一本、胸にかけ廻して結び、仲居の持参した腰紐で柱に女体をかたく縛りつけた。優子は柱を抱いた、ポーズにな

る。両足を柱の前に出させて、更に一本の縄で足首を固定させる。変なポーズだが鞭打ちにはおあつらえの立姿だ。円みを帯びた双丘が私の視野の中に自由にあった。

カメラをとり終って措くと、代りに革帯を握る。軽くなでる様にさっと刷くと、優子は「キヤーッ」と派手な声を出して、ビクンと飛び上った。

「ああ、痛いわ、痛いわ。しないで……」

「痛いかい？ 撫でただけだよ」

「痛いわ。もうやめて」

「もう一度」

「いやーん」

ヒューンとかすかな唸りと共に革帯が弧を描いて飛ぶ。

「ウワァッ、ヒーツ、やめて」

大きな叫び声だった。外部までも聞こえそうな派手な絶叫に私は躊躇せざるを得ない。

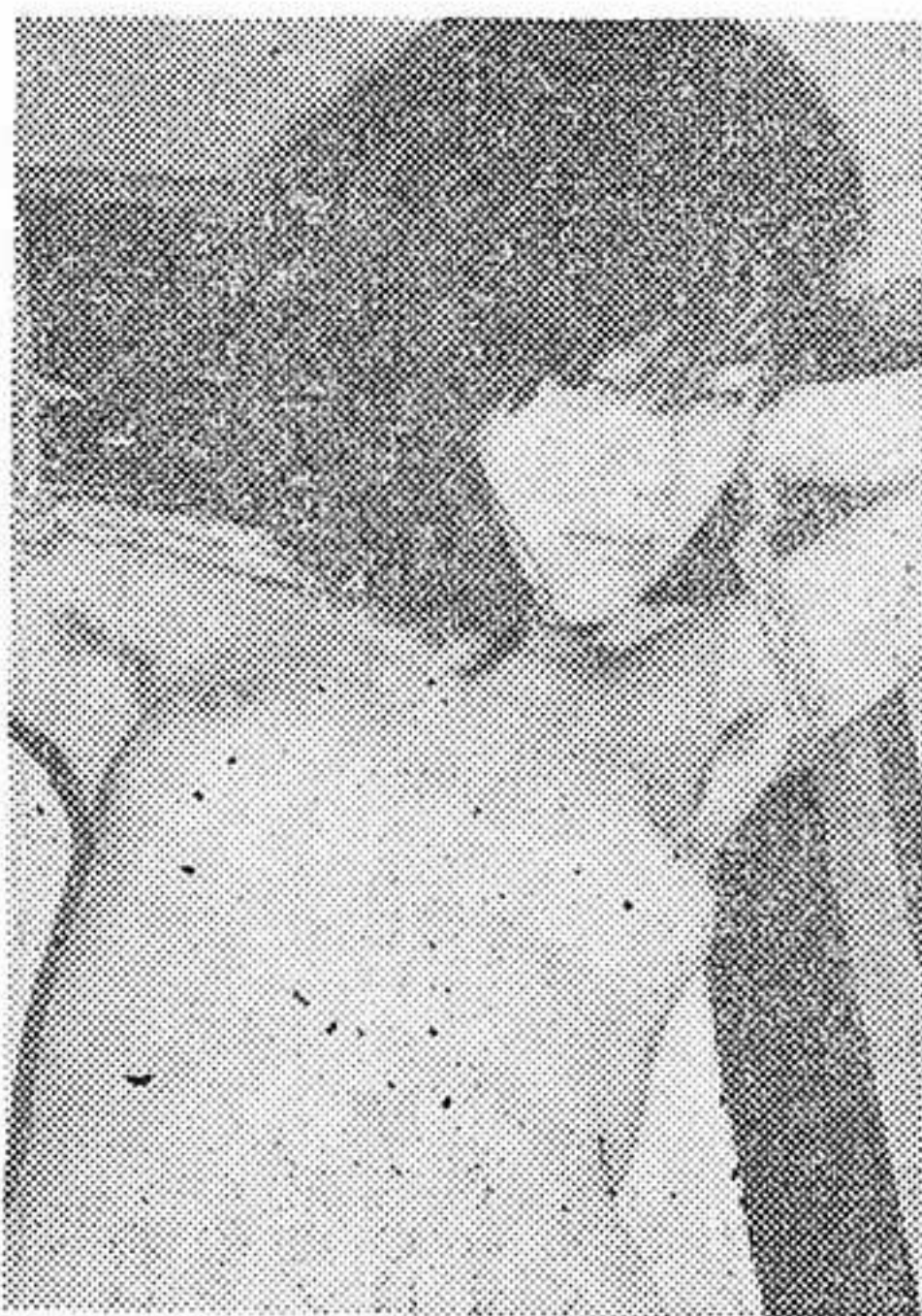
ニヤニヤ笑って腰紐をとくと、優子は袈裟にお尻の辺りを撫でさすっていた。

「非道いわ、おじさん。痛いことしないで、わたし泣けてくるわ」

「泣いたっていいさ」

私の心は、すっかりハイド氏に左右されている。嗜虐の情念が増強してくる許りであっ





た。

矢継早やに新手の縛りにかかる。

優子の両手をかなり高々とあげさせて、柱のうしろで組ませ、腰紐で結んだ。始めての後手縛りらしきものである。

腿の辺りで強く柱に締めつけると、肩胛骨が盛り上って、苦しい立縛りのポーズになった。

「ぶたないでね、お願い」

何もしない先から、必死の眼の色で優子は哀願する様に言った。

「分らない——」

「いやよ、いやよ」

私は叫ぶ彼女の唇に、白晒の切れはしで、

口の中に喰い込むように猿轡をかました。ムムと呻いて、頬がくびれて盛り上り、優子は恨めしげに私をにらんだ。

鞭打ちといえるようなものではない。私は細心に加減し乍ら、軽く打つのだが、それに対する反応は余りにも激しかった。汚れを知らぬ無垢の処女体は、こんな軽度の鞭打すら、骨身にしみてこたえる様であった。妖しく腰は揺れ、可愛い乳房は震えおののき、弾む胸は喘いでいた。ムムともの云えぬ唇の底から絶叫に近い悲鳴が洩れていた。

もう私は夢中で、この恍惚の境地にひたっていた。肩の痛みを恐れて、簡単な縛りをすると解いてやると、有無をいわせず柱を両手を抱くようにして仰向けにねかせる。猿轡はその俚にしてある。柱を抱いた恰好で両手を強く縛り終えると、両足を握って抱きかかえて、弯曲してゆく、柔軟な体はいくらでも曲るが、優子は足に力を入れて必死にあがらう。それを押さえつけるようにして尚も弯曲し、柱に足首が届いたところで、柱を挟んでしっかりと縛りつけてしまった。否応なく

豊かな双丘が、むき出しに私の眼前にある。平手で軽くパチパチと二三度叩き、そのすべすべした感触を愉しみ終ると、私はローソクをとり出して来て、ライターで点火した。かなり高いところで、ローソクを傾ける。蠟涙がしずくとなって、真白な臀部にボタボタと落下してゆく。呻きが洩れ、尻ははげしく揺れた。その真中にローソクを立てて見たい欲望をかううじて押さえて、私は解き始めた。蒼白く変色した両手をなでさすってやり乍ら、私は丹前をかけてやった。

二人並んでソファに腰を落し、私は丹前の上から、そっと肩を抱いてみた。優子は顔を伏せてじっと動かず、私の肩の手を拒もうとはしなかった。

「どうして、こんな非道いことなさるの。分らないわ」

「分らないだろうね。優子ちゃんが可愛いといとしいからさ」

「おしりや肩や、いたるところヒリヒリしているのよ。悪いおじさん」

「生れて始めてだろうね、こんなこと」

「小さい頃、父によくぶたれたけど、それには理由があったでしょ。おじさんの場合、何の理由もなしにぶつんですもの、変だわ」



所詮は分るまい。分る年頃ではないのだ。

この娘がMに目覚めるには、あと、五回、いや十回以上のプレイをした時、始めてチョッピリ、その心理が分ってくるかも知れないのだが……。第一、縛られるということ自体に娘は、理解に苦しんでいる模様である。若い娘の羞恥と屈辱にもだえる姿が、S族にとっては如何に垂涎の願望であるかは、到底夢想不到にし得なかったに違いない。なればこそ、この何ひとつプレイの既成観念のない娘を、泣かせ、虐め、責めさいなみ、鞭打つことが、どんなに愉しいものであるかということとは、S族ならでは知ることの出来得ぬ絶頂の喜びなのではなからうか。なまじM気ある女より、何も知らぬ女にこそ、S的な愉悦は増すものなのだ。

M女性に比して、その努力たるや並大抵でないにしても、一人の娘を徐々に被虐化してゆく過程の愉しさは、何に比すべくもないのではなからうか。

私の右手にはいつしか力が籠っていた。ぐいと引き寄せるようにすると、優子は体にかかる抵抗を起して避けようとした。更に抱きすくめようとする、するりと体を抜いて立ち上った。

「いけませんわ、おじさん」  
私はハッと我にかえる。

そうだ純粋なプレイで終始する筈が、思いもかけず、この娘の体に何ものかを求めようと、していたのだ。一対一の雰囲気は愛情づかせたのかも知れなかった。気をとり直して、

「じゃあ、もう一丁やるか」

「ぶたない、ローソクを使わないと約束してくれるのなら……」

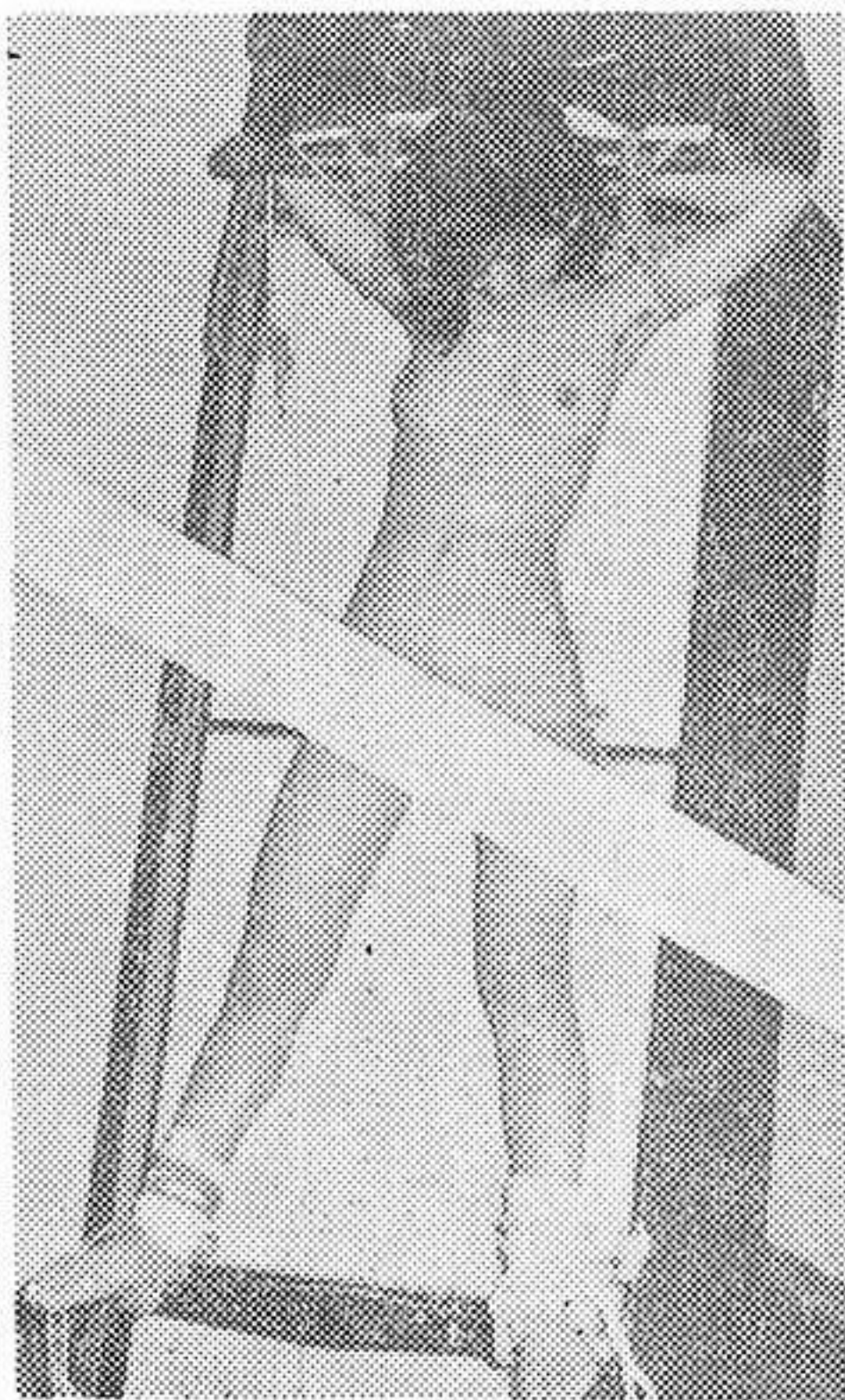
「ウン、もうぶたない」

その代り、今度は変った方法でじわじわと羞恥責めとゆくか。

細い打紐をとり上げ、ハダカになった優子の胸を、乳房を強調して後手に縛り上る。愛用のダンダラ縄の一方を、壁の上部の、換気窓の隙間に通し、素早く優子の両足の間をくぐらせて、和室に通ずる襖の鴨居にかけて、ぐんぐん引っ張り出した。

「あッ、いやよ、倒れるわ。やめて……」

優子は又しても騒ぎ出した。引く手をゆるめると娘に近づき、白晒を口中深く押し込み猿轡をかませると、再びとってかえして引き



はじめる。かがとが宙に浮き、股間深く喰い込んだ一条の縄は、肉迫して双丘の中に没していった。爪先で突ったった俣、優子はよろよろとよろめき、その都度、声にならぬ哀歎の絶叫が、ぐもり声となって、唇から洩れた。凄烈きわみなき股間責めのポーズに、私は幾度かストロボの閃光を走らさねばならなかった。よろめいて振り仰いだ優子の、苦悶の眼尻に、大きな涙の粒が一滴大きく浮かび上って、それがコロリと落ちて頬に伝った。白い真珠の涙に、私の良心がチクリと痛む。一条の縄をようやくにしてゆるめると、ヨタヨタと彼女はその場に崩れ落ちて、打ち伏した。乱れた髪が、優子のあどけない素顔をく



ろぐろと包み込んでいた。

解きはなしても、じっとその俣だった。優子の涙に、フト関連もなく、私の娘が近頃よく唄う、三田明の『夕子の涙』というヒット曲のメロディーが浮かんできたのである。

× × ×

これが最後という約束で、そこに優子のハリツケ縛りが実現していた。

一人の男のこの作業は、正に大事業であった。

ウンウンいい乍ら、

やっとの思いで、このベ

ッド兼用のソファを壁に

立てかけ、「もういや」

と駄々をこねる優子を、

散々になだめすかせて、

延々四十分の労作の完成

に、漕ぎつけたのであ

った。

みるがいい、この優子

の恨めしげな表情。

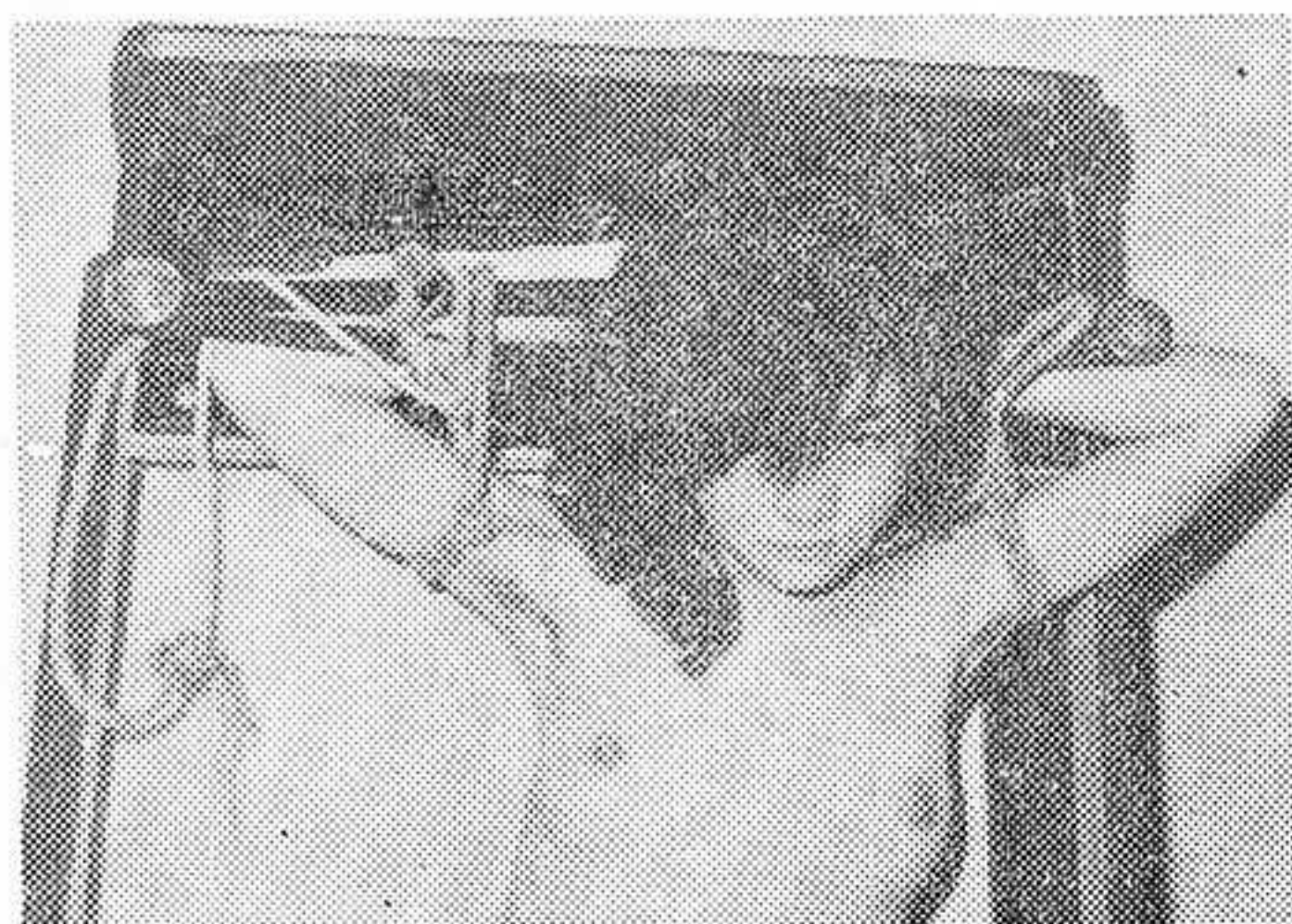
しかし、眼尻をやや吊

り上げ、泣きべそをかき、

頬に幾筋も涙痕をとどめ

る優子の表情に、私はこ

の日一番の美しさを見出



したのである。愁いにみちた表情に、悲しい

女のさがの苦悩が浮き上っていた。誰しも思

い当られるであろう。喪服を纏うた悲愁にか

きくれる佳人が、平常その人を見る時より、

一段と遙かに美しくみえることを――。

優子の場合も、それに近い状況にあった。

両手足を無茶苦茶にソファの足に縛りつけ、

ハリツケにした時、彼女は受難のマリアの如

く神々しくすら思えたのである。

約束を破って、余りの

美しさに私は、思わず革

帯を振った。優子はもう

大声で、喚かなかった。

唯、ポロリ、ポロリと大

粒の真珠の涙が止め度な

く頬を伝い、微かにうめ

き乍ら、残忍きわまりな

き私の鞭を甘受している

かに見えたのである。

恨めしげに、私を見つ

める眸がうるんでゆき、

人目がなければ、この屈

辱にまみれた女体を、我

と我が手でかき抱いて、

大声で涙のかれ果てる迄

泣きに泣いたかも知れなかった。辛うじて私

の手前、優子は必死に歯を喰いしばって、こ

の屈辱の悲しみをこらえていたのではなかる

うか。

遂に思い果した私――、そして無垢のいけ

にえのショックは、果てしもなく大きかった

に違いない。露わなはずかしめのポーズの数

分が、彼女にとっては数日間にも勝ったに違

いない。

がむしゃらに縛りつけたので、解くのの時

間がかかった。しかも芯のはみ出たダンダラ

縄は、尚更にとけにくくなっていた。

やっとの思いで、優子をジュータンの上へ

抱き降した時、私は汗びっしょりだった。重

い溜息がハアハアと洩れ、心臓の鼓動は音を

立てて騒ぎ踊っていた。

優子は私のこの疲労困憊の姿を、魂の脱け

た人形のように、ダラリと両手を垂れた俣、

うつろに眺めていたのである。

× × ×

しばらくはものを言う気力も失せていた。

今、私達は本館の元の居間に戻っている。

何か思い果した今、虚脱状態が否応なく、私

の全身を蔽っていた。私一人のプレイにして

は、正直いって余りにも荷が勝ち過ぎたので



あった。それを敢えて強行させたのは、優子のたくまぬ魅力に外ならなかった。

もう一度風呂へ入ったという、私の言葉を見無視して、優子は既に元の姿に還元していた。一刻も早く、汚穢にみちみちたこの部屋から脱け出したかったに違いない。

ハントは一応成功したとしても、今や優子の心は、完全に私から離脱していった。私の顔すら見ることを避けて、努めて背を向けている有様であった。この状態は、どの様にしても覆がえすすべもないカラストロフの窮極にあった。

「もう帰りませんか？」

よそよそしい声で、優子は私に離別をうながした。この場合私は、どの様な態度をとればいいのか。短い時間の間に必死に頭を回転させるが、いい智慧も浮かばない。

この娘に未練なければそれもいいだろう。しかし悲しい哉、私は余りにも純情無垢な浅井優子に、今ひとたびのプレイを願望していたのである。思い達したとはいえ、こんなそらぞらしくも又いやな別れは悲しかった。この俤、料亭『K』を出れば、その場で優子はさっと身を翻えしてしまう様に思えた。

「もう一度会ってこないかなあ」

未練と知りつつ言ってみた。

「さあ、考えておきますわ」

優子の返事は、さりげなく冷めたかった。私はその時、或ることに思い当たった。と共に急に気恥かしくなった。この素晴らしい娘をハントしておきながら、私が山田会長から受取った現金書留の中味の、何分の一に当るものしか使っていないのだった。知らず知らず、私は一人の娘をハントし、尚且つ幾分稼いだ気になっていた自分の浅ましい心に思い当り胸つかれる思いになった。(よし、あっさりとお金だけ投げ出してやれ。それは当然、優子がプレイの代償として受け取るべき性質のものなのだ。それを浮かそうとした私自身、何とケチな根性であったことか)

私は黙って紙入をとり出すと、机上に紙幣を並べた。

「これで私の有金全部だよ。皆優子ちゃんのものだ。持って帰っていいよ」

呀ッというように優子は眼をみはり、私と紙幣を交互にみつめていたが、

「どうして、こんなに沢山いただけますの」

と不審げに聞き返す。

「優子ちゃんに、それだけの価値があったからだよ。これでも足りないと思うけど、あと

は私のせめてもの誠意だけで我慢してくれ給え」

「やはりいい人ね、おじさんは……」

讃嘆する様な口吻で、優子はホッと口調で呟やくようにいった。

「いい人なもんか。お見かけ通りの単なるプレイおやじさ。でも優子ちゃん有難う。本当によく協力してくれたね」

何か爽やかな新風が、二人の間に吹き込んでくる思いだった。

優子は黙って紙幣を揃えようと、私に押し返した。

「やはりお返ししますわ。何だか悪いもの。又約束してもいいわ。だけど私、叩かれるのだけは、どうしてもイヤ。縛ったり、少しぐらいならいじめてもいいけど、叩かないと約束なさるのなら、きつと又来ちゃう」

「よし、絶対叩かない」

「フフフ」

優子は涙の乾いた頬で晴ればれと笑った。

「優子ちゃんね、三田明の歌で『夕子の涙』って知ってる？」

「知ってるわ」

「唄って御覧」

「いきなり云われても唄えないわ」







# 「秘小説」『水中花』メモ



## — 芳野眉美の作品について —

### 夜 乃 探 郎

『前書』すれば、おそらくそれだけで十数枚になるだろうか。かつて今も、これから現役作家であろう芳野眉美氏と現在の私との空間を埋め、そこから長篇連載小説『水中花』メモを始めるために、そのような方法で筆を進め本題に入るのは最も書きよいことだ。だが、今は止める。直ぐ作品そのものに目を走らせよう。

『水中花』は、昭和四十一年十月号より連載を開始し、昭和四十三年二月号で完結している。その間、たまたま休筆もあり、未完のまま終ってしまうのではないかと読者をハラハラさせたこともあったが、この小説に賭ける作者の気魄は、完結に向ってその筆を投げようとはしなかった。その懸命な執筆態度を、私は痛いほど知った。いや知らされた。

「少年は、節穴に眼をつけた。そして、そのまま動かなかった。——中略——全裸の女が両腕を竹竿に縛られて、天井から吊り下げられていたのである」

——『水中花』の発端は△西日▽の章からであるが、ある初夏の夕暮を背景に鬼頭家を訪ねた、額にうっすらと汗を滲ませた学生服の少年が、その家の物置をのぞいた所から、この物語は初まる。

早くも「その瞬間、女体が大きくゆらぎ、下腹部の黒い繁みから、一条の白線が弧を描いて落下した」という神酒情景<sup>ネクター</sup>が見事に描写されている。まさに異常美の世界だ。常識的には不浄と見なされる状態を、この作者ほど、まるで詩を<sup>うた</sup>くちずさむように美しく昇華させてしまう人を私は知らない。この場合、西日と天女の面が一層の効果をあげていることも見逃がせないことだ。

しかし、中世の豪族の屋敷跡が、そのまま住居になっている鬼頭家を舞台に、能の面が趣味の着流しの老人、その二度目の夫人（麻の葉模様の江戸小紋の細い柄が、アップのうなじも真っ白な寿美麗夫人に映えて——と作者は説明している）などの登場は、まさに古風な雰囲気である。それが冒頭の、とっぴよ

×

×

×

×

×

×



うしもないと思われる事柄（全裸の女縛り）を、より神秘的なまでに浮彫りさせることに成功している。また、そのような設定をしているからこそ『面の章』の少年（二郎）を無抵抗のまま犯した女<sup>ひと</sup>について「もし寿美麗夫人だとしたら……」という少年の妄想も、夢か事実か、混沌としたままで『すべては白日夢の彼方』かと、作者の魔筆に嬉しく戯弄されるのだ。

とにかく、第一回目からして予想外な事件が次々と起り「その夜、離れの渡廊下を全裸の女が静かに歩いて行く」のを少年に見せて終るという塩梅だ。それらを一気に何の抵抗もなく読ませてしまうのだから、その筆力はたいしたものだ。

余談になるが、私はこの第一回目を読んだ晩、あの幽玄な能の舞台を、ふと空想した。

そして、一条の白線が弧を描いて落下してゆく情景が、そこにダブって映<sup>うつ</sup>った。そのことが少しも不自然では無いのだ。むしろ、その落下のリズムが鼓<sup>つみ</sup>の音とこよなくとけあっている……。

作者は、果してそこまで神酒と『能』の結びつきを意識したかどうか判らない。

× × ×

発端篇は「ある初夏の夕暮」二郎という少年が、いまは鬼頭老人の二度目の夫人となっている遠縁に当る寿美麗夫人を訪ね、雑用とお留守番をする、いわば書生となった。そこで異常な事柄に出会った。能面が発端では重要な小道具として使用されている——所まででした。

また『面』の章の二郎の妖しき夢も作者は「眼が覚めて、下腹にどろんとした、ぬくみと異臭に気づき」それは「夢精であった」と書いてあるのだが、どうも本当の出来事であった？ そうとも取れそう。いや、夢か。そんな甘美な疑問が生じるような世界。

序章は実に完璧な構成だった。それだけ、次回は期待できたし、その反面に芳野眉美氏よ、第二回目は、さぞかし書くのに苦労だね——とも、ひとり気をもんだものだった。

× × ×

「期待されながら先月号の休載で惜しまれた水中花の第二回、今後どのような展開を見せるか、楽しみです」

——これは連載早くも次号休筆、ようやく第二回目が発表された十二月号の『編集後記』の言葉である。

第二回目は『銀杏』と『少女』と『鏡』の

三つの章からなっている。私は、この頃については余り触れたくない。発端の章と比較して筆の運びに精彩が感じられないのだ。期待が大きかったために私は失望した。私は作者の私生活を知らない。作品のみ語るのが本筋だから、そんなことは関係ないのだが、この時ばかりは、それを考えた。何かあったのか？ と。一回の休筆を、質の充実という良い方にとっていたのだ。

牧二郎は鬼頭家にお世話になるとき「午前中に用事を済まして、午後からは予備校に行くようにして下さいな」と寿美麗夫人にいわれたが、今回は予備校のことなどが軸となつて物語は展開。そして、御高祖頭巾をした、それを取れば長い髪を束ねて夜会巻にして、そこに一本の珊瑚の簪<sup>かんざし</sup>がさし込まれている香葉夫人（鬼頭家の隣）が登場する話がつけられている。文体はあまり余情なく、説明調と会話が安易に、必要以上に使用されている感じである。

第二回目は、次の場面に移る橋渡し程度でこれといった印象に残る場面もなく過ぎた。

この『金の輪』と『ネックス』の二つの章からなる「軽快なタッチ」と編集後記で評される第三回目の分（四十二年一月号）は、



冒頭のあたり「二郎は素足になると、敷砂に散った落葉を拾い集めた。夜半に一雨あったのか、しっとり濡れてる白砂の感触が快い」という文章に、作者の創作的気分が発端に戻ったような感じがした。

「これは頂けそうだ」——これは私の独白。

私は芳野氏のように庭についての知識はない。しかし、感覚的に受取ることは出来そう。この項の終りに「白砂の洲に糸もまとっていない女が横たわっていたのである」の描写には、その着想の非凡さに驚かされた。白砂に黒い石。名作だと評されている庭があるが、その黒い石を裸女に変えた所など、心憎いほどである。

ふと、私は思う。△花と蛇▽は羞恥責め小説という名が通り相場になったようだが、この『水中花』は秘小説という名をつけたらどうであろうか。

さて、直接でなく、それといった言葉で、読者が、あれかと察せられる会話を書く団鬼六氏のベテラン振りは周知のことだが、この回には芳野氏は上手に、しかも品よくやっている。

『金の輪』の章で、全裸縛りにされた寿美麗夫人が猿ぐつわされて、夜具に横たえられて

いる。隣の香葉夫人が、その部屋に入ってきた時の場面。

「猿ぐつわがきつそう」

香葉夫人の声であった。

「皮だ、わたしが作った。口の中にハンカチが詰め込んである(筆者註。鬼頭老人の声)」

「ハンカチでは物足りない」

「そうだな。それでは香葉さんのを借してもらうか」

「何を」

ここで香葉夫人が小さな声で、老人にささやかれた後で次のような言葉を吐く。

「わたくし、着物ですから、穿いておりませんわ」

また、香葉夫人の熱っぽい寿美麗夫人に対する責めは、思いきり舌を突き出させる金の輪という責め具が使用されて、妖艶というか「古典模様の着物の裾は微妙に動き続けた」という表現があって、この世ならぬ情景を現出させている。

「深夜、柱を抱く伯爵夫人は、妖しいまでに美しかった」という一節をとって、いまは昔貴族華やかなりし頃、その生活の内部に秘められた暗紅色の垂れ幕が暗示される、そんな古めかしい、そのくせ螢火のようにまばたく

『秘』の空気が漂う。これは芳野氏が待つ独自の影の世界、描写でもある。

× × ×

編集後記(二月号)の△第二回あたりで、いささか中だるみするかに見えた水中花、さすがに芳野眉美氏の麗筆によって今月号あたりから精彩を増してきた▽に、私は少しつけ加えたい。

すでに第三回目から、その気配を見せはじめた——と。第二回のみ低調。直ぐ取り戻した事は、作者にとっても、この小説のファンである私にも嬉しいことだ。

編集子も認める第四回目は『噴水』の章。

「白砂の洲に全裸の女が横たわっている」という所から筆を起している。この章は圧巻である。白砂の洲に全裸の女——というアイディアだけでも素晴らしいのに白砂の洲に「生きた噴水」とは。そして「老人は女の黄金の液体を飲んでいる」私は神酒趣味ではないが、この情景は『耽美』という接点で感動する。

けだし芳野氏は、誌上に『生きた噴水』をもって芸術作品を形成させた。その到達した心境に敬服したい。

——ここまで筆を滑べらせると、物想うことの西条操氏に、また物想われるかも知れない



が、こう書けることの出来る作品に接したことは、私として幸いなことだ。知る人ぞ知るである。

× × × 「二郎は息苦しくて眼がさめた」

これは△蛇△の章の一節だが、今度ははっきりと作者は寿美麗夫人と少年の床プレイを示し描写している。少しもワイセツさを感じさせないのは、さすがだ。

『泡』の章の中では、午後の柔かい日射しが浴室の窓から流れるお湯に反射している。

「洗ってあげる、前も」というあたりが、芳野氏一流の会話的テクニックを良い意味で、存分に発揮したところだ。

× × ×

私はこのメモを書く上に、たびたび『水中花』についての編集子の言葉を引用しているが、私見によれば、本誌上のどこにも、これといったこの小説に対する読者の声が見当たらないからだ。実績を有する人気作家、芳野眉美氏が新境地を開拓しようという意気込む連載作品にしては、奇妙なことだ。

× × ×

『水中花』第五回目（三月号）は「足、筆、汗」の三章から構成されている。

前回に引き続き快調だ。谷崎潤一郎好みの足崇拜も出てくる。勘解由小路公博と香葉夫人との足プレイから神酒拝受。ここでも会話が実にシャレている。今度は直接語なのに、いや味がない。

「水が飲みたいのなら、わたしのお小水を飲ませてあげる」「おいしかった、わたくしの……お小水」

他者が筆にのせるとしたら、こうは行かないだろう。これらの会話も、岡田茉莉子と市川染五郎の雪中のラブシーン。

△足だけなのに、何か全身をさらしている感じ……△

と、主演の岡田茉莉子はいっている。——など、きらびやかな言葉が挿入されている構成の中だからこそ生きてくるのだ。

『筆』の章で、推理的手法が何げなく応用されている。二郎が物置で覗いた全裸の女は、寿美麗夫人でなく香葉夫人であったというドندن返し。しかも、鬼頭老人と隣の香葉夫人とのプレイは「夫が承知している姦通」であり「夫は今この物置の屋根を見ているだろう」という——構成の複雑さ。「たちまち香葉夫人は、空に舞い上がり、月宮の舞を舞った。舞いながら老人の口に宝石のように輝く

雫をしばらく続けた」などの名文を読むことは楽しいことだ。

第一回からこの（五）まで読んでくると、能の面と寿美麗夫人および香葉夫人の結びつきと行動、その謎の解明を感じ、もう一度、はじめから読み返してみたい。ひとり合点で間違ったことをメモしてきたのではないかというおそれだ。でも、この小説は私流に一考してみても、筋書というよりその場面、場面の『秘』を頭というより官能で受けとめる方が先決らしいので、今更書き直しも必要ないときめた。（見当違いもあるだろうが、了承あれ）

『汗』の章。ここでも神酒が出てくる。

「寿美麗夫人は小水を洩らした。静流は、やがて本流となって勢よく老人の口に流れ込んだ」

まさにこの回のクライマックスであり、そのことはまた、濡れにぞ濡れし、全誌面がビッシヨリであることも意味しているのだ。題名からして『水中花』。寿美麗夫人と二郎でなく、この章にはまたしても姦通のお相手として『男』という人物が登場し、簡素なホテルの一室で、とんだ生花の稽古？をはじめ



——染み一つない美しい肌に薄っすら汗までにじませてだ。

(筆者註。四、五、六、七、八月号は『水中花』は休載)

× × ×

『水中花』第六回目(九月号)で『男』は中雄一郎ということが紹介され、この回ではその男をめぐってストーリーは展開される。わびとか、さびとか歴史物がお好きらしい作者の知識が十分に発揮され、筋の運びに重みをつける。『近親相姦』——こう書いただけで、何かドロドロとした物が感じられるが、「笹葉に 打つや霞の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも 愛しと さ寝しさ寝てば刈薦の乱れば乱れ さ寝しさ寝てば」

という御歌まで記されると、妖しきこととげに思いけり、で、別段、抵抗も感じないどころか、近親相姦って風流なものだと、考えてしまうのだから不思議だ。

一時、文壇ではこの種の物が発表され、話題となったことを記憶しているが、異母兄妹である中雄一郎と絵馬との行動は、古風な味付けがほどこされて、美しい淡彩画を觀賞しているような楽しい気分になせられる。特に可愛い小悪魔的な性格描写は一層、その感を

深くさせられる。

いや、これだけではどうも不十分な気持がする。絵馬とりりの『レスボス』という言葉も出てくるし『モズ族』という現代風俗も鮮やかに浮彫りされている。古典とモダンが、どこかでミックスした奇妙な味とするか。

× × ×

『水中花』も(六)(七)と進んでくると、ますます人物の関係も複雑になってくる。むしろ、めまぐるしいといおうか。正直のところ、読むだけが利口。メモを取るのおおっくうになる。私は煙草ばかりを、やけにふかす。絵馬は二郎とハプニングに行くことから、この第七回目(十月号)『ハプニング』の章がはじまる。

ある雑誌に、後何年か経つと『乱交時代』がやってくると、ショッキングな記事が書いてあったようだが、ふと私は(この、ふとは私の癖)そんなことを思い出した。

また「一条の白線が孤を描いて落下した」——の場面が現われる。絵馬が二郎にしたのだ。

記憶が朧ろになったが、かつて確か木戸川氏は、神酒小説の欠点を上げた中に、ストーリーの、そこに神酒の現われる必然性の問題

を論じたことがあった。

最もむづかしい多数の中にあって『神酒』が出る世界。この難問題を見事に「ハプニング」の中で、芳野氏はこなしている。ハプニングの会場という設定が、先ず外部の眼に死角となる。

「ネオンに(麻耶)」とあるが、ドアには本日休業の札がかけられてある」の言葉がその裏づけ。パーティの仲間は、よそ見などとんでもない。カップル同志で、そのほかは問題にしない。しかも「店内のライトが消え、クラブの白い壁に前衛地下映画が映し出される」という状態だから、人と人との中間にあって、二郎と絵馬の世界は密室という条件が形成される。そこで『神酒』拝受の出来事は、読むのに抵抗を感じさせなく、必然である。

× × ×

うらぶれて、又うらぶれてという、自称、耽美派が覗く世界とプレイボーイ的な芳野眉美氏との生活は、余りにもかけ離れている。

早い話が、屋台で焼酎を飲む私と、シャレた喫茶店などで、クラシッくな音楽を聴く彼を想像すれば、こと足りる。それが、こうまでその作者のメモを取るといえるのは、何か共通した物があるからだろう。それは何か?



『耽美』という言葉で説明できないことはない。前の方で、それに触れている。まだ物足りない。結論は本当の所、私にも判っていないのだ……。

× × ×

『遠雷』と「いつしか更けて」の二章より、『水中花』第八回目（十一月号）は構成されている。前回の『ハプニング』の章より、今回の章に入ると、なぜか、ほっとする。

鬼頭家の内部の描写の方が、私には水があらっているようだ。

ほう、コヨリで寿美麗夫人を老人が責めているね。夫人は生花の稽古の方は休んでばかりいて、ホテルの一室で『秘』の稽古に精を出しているようだが、鬼頭老人は生花？ が好きなようだ。お膳の上に夫人を上げ、コヨリで夫人の裏の小門をコチョ、コチョさせながら、「咲くかと思えばつぼみ、つぼんだと思えばまた咲く」人間妖花を立派に生けている。

「いつしか更けて」の章を読んで『水中花』の魅力とは、和洋折衷のアンバランスにあるのではないかと、ふと思った。

『ハプニング』のような話も出てくれば、又「いつしか更けて」には、長唄がとび出して

くる。『古典』と『前衛』この二つは水と油のようだが、噛み合わせれば△音▽が出ることは確かだ。どんな音かという答はない。古典な味が場面の展開をスムーズにさせるかと思うと、そこに登場した人間を、超現代風俗の中に出しても結構、動く。

『水中花』について△秘小説▽という言葉は私は捧げたが、この小説は又、△不調音▽かなる秘曲であるかも知れない。音楽評論家あたりに独自の作品論をさせたら面白いものが出来ようか——。

どうも私は『水中花』論をしながら、実は作者の秘筆に振り廻されているような気持ちがある。（少し頭がオカシクなった、ホント）

× × ×

『水中花』は、第九、十回目（昭和四十二年十二月号、四十三年一月号）の連載で、私のメモしていた、現在発表されている範囲である。

『陰影』『欄干』『呪文』『庭園灯』の四章で続くのだ。

『呪文』の章には、また前回の鬼頭家より反転してハプニングのシーンとなる。直ぐ交り鬼頭家は『庭園灯』の章だ。赤と青のライトがパツ、パツと交差するように忙しい。この

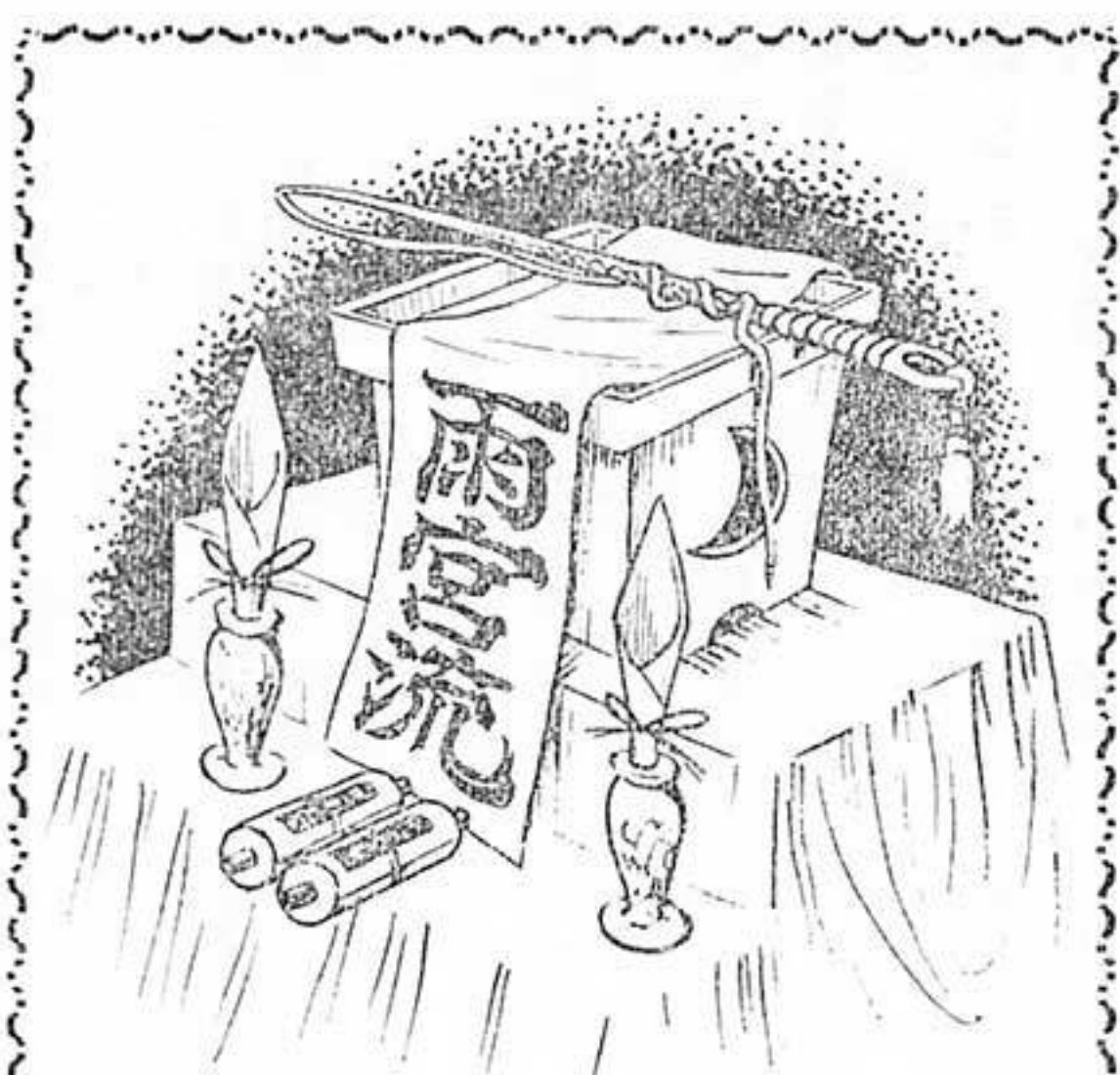
ような手法は映画にも使用されるようだが、むしろ前にも述べたように起伏の激しい曲を演奏する音楽的な、イメージを思わせるようだ。（私に音楽的な才能があれば、もっと上手に表現するのだが）

ここで気づいたのだがプロローグの能が利用されている点と、長唄が出て遠雷が鳴りハプニングの乱痴気騒ぎの雑音。この作品にはリズムによって、それも不調音的な破れを、持って運ばれているという感じがする。『水中花』という題を持って、作者は誌上に秘曲を奏でた。最も秘曲たる神酒の効果を盛り立てるためにも。私が作曲家であったならば、おそらく『水中花』という曲を作成するため、読後オタマジャクシの秘舞を夢みようが——

『欄干』の章に「欄干をひしと握りしめる寿美麗夫人を老人が責めるのは、老人が秘蔵している浮世絵の一枚に似た光景」であると、作者は誠に古風な雰囲気を感じ面に振り撒いている。実に淡々とした枯れた筆法だ。これも破調音の一つか。

私流の破調音を持って、メモを閉じたい。  
美少女ノ神酒ヲ凍ラシテ 洋酒盛ル杯  
ニ入レ ハイ、コレハ『水中花』デス  
芳野眉美氏の御健筆を祈る。





懸賞入選作品

# 鞭道雨宮流

中山

信

## (其の一) 忍・雅・苦

鞭道が何時頃から日本にあったかは詳らかでない。文献によると、今の東北地方がまだ蝦夷と呼ばれていた頃、既に其の地方で鞭打ちの儀式が行われていた形跡がある。又、平安の頃から、優雅な鞭打ちの儀式が、京の公家を中心として盛に行われていたらしいことは、かなり明らかである。

しかし、鞭打ちの儀式がはっきりと、鞭道として風俗文献にあらわれるのは江戸時代に入ってからで、大平の世を謳歌した元禄の時

代には、江戸を中心としていくつもの流派が完成されていた様である。

その流派を大別すると、三つに別けることが出来る。

一つは前述の蝦夷の流れをくむ一派で、奥州派と呼ばれていた。此の流派は、いわゆる「苦」の精神を中心とした流派で、如何にして鞭打ちの苦しさ、痛さを表現するかに主力がおかれていたものらしい。

第二は、前述の後者、即ち京都の流れをくむ一派で、京極派と呼ばれ、その精神は「雅」の精神であり、苦しみの表現、喜びの表現に

も、常に優雅さを失ってはいけないという精神が、根本となっていたと考えられる。

第三の流派は、いわゆる天草派と呼ばれる一派である。天草の乱に破れたキリシタンの間で受け継がれて完成されたと云われるもので、ヨーロッパの鞭打ちの精神と、キリスト教の精神の影響を大きくうけていた。その根本精神は「忍」であり、如何に痛くとも苦しくとも、一切の苦痛の表現は許されない。ひたすら堪え忍ばなければならない、という極めて厳しいものであったという。

此の三流派とも、それぞれ中心となる精神



のちがいこそあれ、共に非常に厳格な形式や規律が定められており、儀式として、すべてその形式や規律にのっとって行われて来たと推察される。即ち、儀式中に一切の自己表現、つまり自分の創意工夫による表現は許されないというのが大きな特徴であったといえるのである。

大政が奉還され明治時代に入ると、急激な西洋文明の影響をうけて、鞭道も大きく変化してゆく。即ち厳格な形式を重んじた形式主義から、自己の自由な表現を許す自由主義、又その時の衝動のおもむくままに行動し表現する衝動主義、乃至は刹那主義の思想が大々的にとり入れられるのである。

そして昭和の時代に入るや、此の衝動主義が全盛期をむかえる。今迄のわずらわしい形式は一切無視され、苦しみ、喜びはありのままに、そして自分の考え通りに表現された。即ち、鞭打ちという苦痛を通じての精神鍛練などという大目的は消滅してしまったのである。此の傾向は昭和二十年の終戦を迎えて更に激しく、そのありようを知る者すら殆んどなくなってしまった。併し当然のこととして、世の中も落ちつきだした昭和三十年代になって、此の様な傾向を、目にあまる無秩序とし

て反省しようという動きが、一部の識者の間に出始めて来た。

その反省運動の中心となって、今日の優れた雨宮流鞭道の完成をなし遂げたのが、京都に住む雨宮市太郎である。雨宮は、元々京極派の流れをくむ一門に、属していたのであるが、世の流れにはさからえず、彼の一門も無秩序な衝動主義に狂奔していた。彼は先ず、鞭道に形式をとりもどそうとした。

しかし賢明な彼は、時代の流れもよく見極めていた。今の時代に江戸時代の様な純粹の形式主義は受け入れられない。精神的なものに重点を置くことのみではなく、快楽に近づく必要を感じとったのである。そこで彼は、大筋の形式は重んじながらも、その形式の枠の中では自由に自己を表現しても構わないという折衷主義をうち出した。彼はこれを形式主義的衝動主義と呼ぶことにした。此の思想は、余りにも乱れた鞭道の現状をなげく多くの者の共鳴を呼び、入門する者亦多く、彼は遂に確乎たる雨宮流の基礎をきずいたのである。

京極派の伝統の中に育った雨宮市太郎は、京極派の精神である「雅」の精神を受け継いでいた。形式主義をとりもどした彼は、既に

失われた「雅」の精神も復活しようとした。しかし多くの門弟は、此の師の考えに反撥を感じた。彼等は「雅」の精神よりも「忍」や「苦」の精神の現代的、人間的体臭に、より多くの魅力を感じていたのである。

雨宮流の精神を、伝統ある「雅」の精神にしぼることは不可能であると悟った雨宮は、ここに画期的な、忍・雅・苦を一体とした新雨宮精神を創りあげたのである。これは大成功であった。此の大成功に力を得た彼は、着々と雨宮流儀式の形式を完成してゆく。そして現在その形式は一応の完成を見たと言ってもよい。

雨宮市太郎は最近、その心境を次の様に語っている。

△忍・雅・苦を一体とし、形式主義的衝動主義を基本とした、鞭道雨宮流は一応の完成を見た。今後は更に此の向上と完成のために努力を続けるが、わたしとしては今一つの大きな課題がある。それは「縛り」の形式である。江戸時代の三派の中、奥州派と天草派は「縛り」を伴った鞭道であったが、我が京極派は「雅」の精神を基本とするため「縛り」は行われなかった。従ってわたしが忍・雅・苦一体とした時も、「縛り」を除いてそ



の形式を創りあげた。だから今の雨宮流には「縛り」はない。今後は、奥州派と天草派に伝わっている「縛り」の形式を十分研究して、我が雨宮流にも「縛り」の形を完成させたい。

さて、此の様にして完成された雨宮流の、忍・雅・苦一体となった鞭道は、実際どんな特徴をもっているのであるか。それは、或る姿態に於ける、或る部分の鞭打ちを、すべて忍・雅・苦の三段階に分けたのが大きな特徴である。或る姿態に於ける、或る部分の鞭打ちには、京極派の伝統に従って、その数三十と定められている。その三十打を、忍十打、雅十打、苦十打と定めているのである。

たとえば、うつ伏せ、両足直伸、両手後手合せの姿態で、右臀部鞭打ちの場合、最初の十打は「忍」である。受け方は一切の苦痛の表現を相手に見せてはならないのである。わずかに、顔をしかめ、筋肉を硬直さす程度は許されるが、体を動かすこと、又は声を発することは一切許されない。じっと堪え忍ばねばならないわけである。

次の十打は「雅」である。此の時には、いわゆる「とり乱した」動作にならない程度に体の各部を動かすことは許される。たとえば、

臀部をわずかばかり持ち上げて痛みをこらえる、首を動かす程度。又声も「アー」とか「ウーン」とかの言葉にならない程度のうめき声ならば許される。しかし、此の場合も、鞭を受けるべき姿勢そのものを、変えてしまふとか、不作法に足を曲げるとかの動作は絶対に許されない。

最後の十打は「苦」であり、ここに至って今迄おさえていた苦痛を一気に表現することが出来る。足を曲げ、又尻を突立てても良し、又打たれた部分を手でおさえる、体をのけぞる、あお向けになる等。又声にしても、「痛い」「止めて」「許して」等表現しても構わない。此の三段階を経て一節の鞭打ちは終了するわけである。

そして各段共、忍・雅・苦に定められた枠内での各人の受感表現は自由であるが、あく迄も最終的には「優雅さ」を失ってはいけないというのが雨宮流の大きな特徴である。

たとえば、第三段の「苦」の段で、いかにのたうち廻ってもよいが、いつ迄も乱れたままの姿態でいることなく、節度をもって直ぐ又元の位置につき次の一打を受けなければならぬ。此のことは極めて厳格で、いやしくもその大要において「優雅さ」を失った者は

容赦なく破門される様である。

以上が、忍・雅・苦一体とした雨宮流の最も大きな特徴であるが、その実際の優雅な形式については、雨宮道場で修業され、受け方、打ち方共に修得された、山花愛子夫人の日記（というより、手記というべきか？）が、彼女の好意によって得られたので、それを紹介しようと思う。

## （其の二）山花愛子の日記

九月三日

今日は、待ちに待った雨宮先生にお目に掛かれる日だ。胸がどきどきする。雨宮先生とはどんな方だろう。

お家はすぐにわかった。金閣寺を少し入った所にある古風な構えのお宅。古ぼけた木札に、しかし達筆で「雨宮道場」とある。ご門はあいていた。声をかけても聞こえそうになので、ずーと玄関に向かって進む。前庭の右側にうっ蒼とした大木。古寺に入った感じ。此の中で鞭打ちの修業か——胸がキューと締めつけられる。

玄関の戸をあける。鍵はかかっている。手入れがよく行き届いている。

「御免下さい」声がすこし上ずっているのが



自分でわかる。

出て来られたのは一見、ごく普通のお家の奥様と変らない感じの女性。名前を告げる。すでに連絡は行き届いていた様だ。

「どうぞ」とさりげなく案内して下さる物腰が床しい感じの方だ。

導かれたのは立閑横の六畳の間。お掃除はきれいに行届いているが、何の飾りもない。床間に掛軸が只一つ。九月初めといっても、大木にさえぎられ、陽の当らぬ部屋の中はひんやりとしている。気味が悪い位静かだ。

十分たつ。二十分たつた。誰も来ない。

今迄長い間鞭道に対するあこがれはもっていた。噂に聞く雨宮先生に対する尊敬もあった。それが今日現実となって、いよいよ入門し、修業出来るのだ。夢にまでえがいた此の日だが、あまりにさし迫った現実と、此の静寂さの中で急に不安になる。不安、期待、喜び、恐怖、色々の心情が交錯して、胸が周期的にキューと締めつけられる。

三十分、まだ誰も来ない。

誰かが急に此の部屋に闖入してくる。いきなりわたしをネジ伏せ裸にし、ぐいぐいと手足をしばり、鞭でめった打ちにする。わたしは逃げようと跳いても、手足の自由がきかな

い。泣き叫んでも誰も来てくれない。「許して!!」「やめて!!」と哀願するわたしの肌に容赦なく乱れとぶ鞭。部屋中にこだまするその鞭音……。

こんな幻想にとりつかれた時、足音が聞こえた。ハッとなって顔があからむ。障子が開いた。さき程の女性だ。

「どうぞ、こちらへ」

いよいよその時が来た。胸は不安と期待でいよいよ高鳴る。

長い廊下。或る一室の前で彼女はひざまずく。わたしも無意識にそれにならった。障子越しに中へ向かって声をかけられる。

「先生、山花愛子さまをお連れ致しました」

「どうぞ」

部屋の中から太い声が返って来る。彼女は障子をわずか開けると、わたしに「お入りなさい」という様に目くばせをする。わたしは思い切って膝ですすみ、中に入る。同時に背中で障子の静かに閉まる音。(先生と二人だけになった)直感的にそう思う。顔をあげて(遙か彼方と感じた)先生のお顔を仰ぐ。

「山花愛子です。どうぞよろしく」

自分でも不思議な位落ちついて、はっきりした声で言えた。

以上が、大体私が今日雨宮先生に初対面した時の模様だ。別に緊張する必要もなかったのだが、今から思えば、その時はものすごく緊張してしまっていた様だ。雰囲気がそうさせてしまったのかもわからない。

此の部屋が又、だっ広い部屋だった。二畳はあろうか。ここもまた飾りものらしいものは何もない。陽当りも悪くうす暗い。先生の前に机が一つだけ。それをはさんで私は先生と向かい合った。

髪の毛を長く伸ばされて仙人の様な風体。それでいて顔色は如何にも若く、一体何才位か見当もつかない。三十代にも見えるし、五十に手が届いている様にも見える。肩巾広く、体格はがっちりとして威圧感十分なお方だ。着ておられた渋い茶色の背広が、此の部屋の雰囲気や先生の風体に何ともちぐはぐな感じだった。先生が正座しておられたので、私も正座してかきこまってしまった。

「どうぞ膝をお楽に」

存外、気のお優しい方とお見うけした。

先生は先ず、雨宮流の歴史からその精神をじゅんじゅんと説いて聞かせて下さった。大体の予備知識はもっていた私だったので、お話の内容はよくわかる。時々、私が今まで感



じていた疑問点についての反問や、相づちをする中に、先生の方でも気付かれたらしく、「あなたは太分鞭道については研究されている様だから、説明はこれ位にしておこう。あなた程熱心な方だと、修得もきっと早いでしょう」

と言われた。嬉しかった。

『では今日はこれ位にして、来週から実習に入ります。先ず位置につく迄の作法をやりましょう。雨宮流はすでに申し上げた様に、形式主義的衝動主義ですから、基本的な形式だけ守れば、あとは自分の思い通りの動作、表現をしてよいのです。それだけに自分で工夫する余地があって面白いのです。自分でどれだけうまく工夫するかということ、又普段からの研究や修練の結果が、いざ本番になって、すばらしい即興的演技を、生み出すのですから、平常の研究や修練が極めて大切です。そして如何なる時でも、雨宮流の、根本精神は「雅」であることを忘れない様に』

先生はそれだけの前おきを言われてから、「雨宮流作法」と書いた、書き物を掲げられた。その最初の「位置につく迄」という所には、簡単に次の様に書いてあるだけだった。

一、客人に向って一礼する。

二、打ち方に対して一礼する。

三、衣裳箱の前にゆき、脱衣する。

四、鞭置場より鞭をとって、打ち方の前に進み、一礼して鞭を渡し、「よろしくお願ひします」と言う。

五、所定の位置に行き、所定の姿態をとる。

『余り簡単なのに驚いたでしょう。定められた作法はこれだけなのです。あとは各人が工夫して、如何に「雅」の精神に到達するかを修練するだけです。では来週迄に、どの様な動作、表現をすればよいか、よく研究して下さい。来週にはそれを、見せてもらいましょう。それから、着物を全部脱ぐのが定法ですので、身体を清めて来られる様に』

何でもはつきり物を言われる方だ。

考えていたほど固苦しい感じはなく、帰途の足は軽く思われた。来週が待遠しい。

九月十日

いよいよ今日から実習だ。課題として出されて「位置につく迄」については、私なりに研究してみた。私には茶道の心得があるので、大体茶道の作法に準じてやれば「雅」の精神は表現出来ると思う。

しかし問題は脱衣だ。先生は最後に駄目を

おされた位だから、本当に脱がねばならないのだろう。恥かしい。でも今更そんなことは言っておれない。最初から鞭道にあこがれて先生の門をたたいたのではないか。鞭道を究めるためには、裸になることは一つの過程だ。どうしても通らなければならぬ。それに、私の内心の願望にぴったりだ。余りを射られすぎているので恥かしいのだろうと思う。

いよいよ先生の前、あらかじめ、客人の位置、打ち方の位置、脱衣場所、鞭置場等が仮に設定される。先生と二人きりで他の人はいない。客人に一礼、打ち方に一礼返は、茶道の心得通り、つとめて優雅に行った。先生は何も言われない。

さて衣裳箱の前、脱衣の作法はむづかしい。此の一週間ずい分考えた。客に正面を向けるか、背を向けるか、立って脱ぐか、坐って脱ぐか、客人に背を向けるというのも失礼になる様な気がしたが、客人と顔を合わせての動作はやりづらいので、背を向ける作法にした。羞恥心を表現するには、当然坐って、なるべく客人の視線の的を小さくすべきだが、それではスカートやパンティを脱ぐのに極めてやりにくいので、思い切って立ってすることにした。



上衣を脱ぎ、スカートを脱ぐ。シュミーズを脱ぎ、スリップ、パンティを脱ぎ捨てた。じーっと見つめられる先生の視線が無防備の身体に痛い。さすがに身体が熱くなった。顔が上気して赤くなってゆくのが自分でもわかる。

鞭は衣裳箱の少し離れた右側に畳の上に置かれていた想定だった。出来るだけ体をちぢめながら、その前迄歩いてゆく。畳の上の鞭をとるのに、まさか上体だけ前にかがめて拾い上げるわけにいかない。その様なり方では到底「雅」の精神を現わしたとは言えないからだ。考えて来た通りに、鞭に向かって正座し、一礼して両手に捧げもつ。

先生は只黙って見ておられる。うやうやしく鞭を両手に捧げ、再び打ち方の前にゆき、正座一礼して鞭を渡し、「どうぞお願いします」と言う。被虐の絶頂の境地に我ながら身慄いする。続いて中央にもどり、うつ伏せになって所定の姿勢をとる。

「はい、よろしい。ちょっと此処へ」

はじめて先生のお声がかかる。

言われるままに先生の前に正座する。無意識に肌を両手でかくせるだけかくす。先生はそんなことは少しも意に介さぬかの様に続け

られた。

「大体よく出来ました。しかし落ちつきがもう一つ足りない。特に脱衣してからの落ちつきが足りないので、せっかくのそれまでの優雅さが一ぺんになくなった。まあ、最初だから仕方ないけれども、それから最もいけなかったのは――」

と言って衣裳箱の方を指さされて

「あの脱ぎ方はなんですか。いくら初めてであがっていると言っても、脱ぎっぱなしでは駄目です。一枚、一枚きちんとたたまなくっちゃあ」

私も乱雑にとり散かしたままのスリップやパンティを見て（そうだったなあ）と恥じた。素肌の羞しさより、その恥の方が心に痛い。

しかしあの決定的な場合にいちいち折りたたむ余裕なんか……とも思ったが、しかし、それは恥かしくとも堪え忍んでせねばならぬ作法であろう。私の最終的な願望の為にも……

「まあ、その他の諸作法は、大体いいでしょう。あなたは茶道の心得があるから、さすがに全般にわたって、優雅さの基礎が出来ていきます。それではもう一度服を着て、脱衣時とその後の精神状態を十分馴らしておいて下さい」

更に二度、三度と反復させられ、色々細々とした点も注意されて、今日は終わった。

「来週からは。いよいよ実際の鞭打ちに入ります。これを読んで下さい」

といって出されたのには、こう書いてあった。見出しに「鞭打ちの作法」とあって、第一姿勢、うつ伏せ、両足直伸、両手後手背中合せ左右臀部鞭打ち。

「此の状態で、先ず右臀部打ちを実習しますから、忍、雅、苦の精神を踏まえて、よく表現を研究して下さい。鞭はここにある巾二十五ミリのなめし革の鞭を使います。打ち方は、すでに受け方道は修得され、現在打ち方道の第十二節を実習中の加納夕起子さんに来ていただきます」

九月十七日

さあ、今日はいよいよ本当に鞭打たれるのだ。どの位痛いだろう。果して我慢出来るだろうか。皆がやっているのだから自分に出来ないことはないだろう。今更、おじ気づいても仕方ない。いや、おじ気づいてるのではない。それが目的なんだから、本当は嬉しいのじゃないかしらと思う。何とも変な気持ち。自分でも自分の気持ちかわからない。



先生の前で、先ず加納夕起子さんに初対面する。私よりずっと若い。二十才を少し出た位か。こんな若さで打ち方道の十二節迄修得したとは。面長の顔がキリリッと締っている。さすがに、修業を積んだ人は何によらず美しさに締りがある。

はち切れんばかりに、ピッタリと身に合ったスラックスに皮のジャンパー。小柄だが、体は引き締まっていて力はあるそう。両耳から髪の毛をアップにし、上で束ねて後へ垂らした髪型が、面長の美しい顔を余計に引き立たせて見せている。

此の人が私の修業の先輩か、そして私を鞭打つのか——。私は複雑な気持ちで体が慄えた。「はじめまして、どうぞよろしく」

「よろしく」

それだけ言っただけでは言葉が続かない。変な気持ちだ。相手も同じだろう。

「では、自分の思い通りに一度やってみて下さい。加納君は此の椅子に腰かけて。あとで意見も聞かせてあげた方がいいでしょう。山花君は部屋に入ってきて来るところからやって下さい」

「ハイ」

私と彼女とは返事が同時になって顔を見合

わせた。

いよいよ来るべき時は来た。今更どうにもならない。

客人に一礼。続いて加納嬢に一礼。いよいよ脱衣の場面、今日はもう一人の視線があるため、胸の鼓動は一層はげしい。それが今から自分を鞭打つ人の視線だと意識するから余計だ。視線は痛い、恥かしい。けれども動作を早くすることは出来ぬ。落ちつかねばならない。優雅さを出さねばならない。先週、先生に特に注意されたことだ。

やがて加納嬢の足下にひざまずく。ああ何たる屈辱。裸形で、しかも今から鞭打たれる相手の足下に。——その鞭を捧げて「よろしくお願いします」

と言って彼女の顔を見る。

彼女は鞭をひったくる様に、とりあげるなり、つーんと横を向く。相手にもしてくれない。恐ろしくなる、此の先輩はどの位私を痛めつけるつもりか。

所定の位置でうつ伏せになり、顔を客人の方に向け彼女の到来を待つ。ややあって、彼女の立ち上がる気配。ああ、あの鞭を手にもって、ああ、もう駄目だ。観念の眼を閉じる。

尚もじーっと待つ。いつお尻に炸裂するか、

全神経を集中する。まだ来ない、不安で目を閉じていられない。

「只今より忍の段を始めます」

彼女の声だ。目を開けると、彼女は私の真横に足を拡げて立ち、腰をおとして、その足場をじっくりと固めている様だった。

やがて彼女の右腕があがった。と思うと、痛烈な一撃が炸裂。「ウー！」思わず体をよじらして、お尻の筋肉に力を入れる。

「動いちゃ駄目。忍だぞ、今は忍の段だ！」鋭い先生の声が落ちて来た。

ハッと思つて見ると、目の前に先生の手が先。それから足に沿ってずーっと目を上に向けると、其処に仁王立ちになった先生の姿がある。目は爛々としてわたしをにらみつけている。

「ハイッ、わかりました」

反射的にこれだけのことを言つて、じーっと目を据える。再び打ち方の腕があがった。と思うと「パシッ」と第二の一撃。痛ッ！

本当に痛い。しかし目の前に先生の鋭い目。じーっとこらえる。じわじわと痛さが体の奥深くににじみ込んで来る様だ。パシッ、と次の一撃、「ウウウウッ」しかし声を出してはいけない。お尻や腕に力を入れ、歯をくいし



ばり、全身を硬直させて受け止め、この痛さをこらえる……。

かくして、わたしにとっては、地獄の様な「忍」の段は終わった。

「続いて、雅の段を行います」

彼女の声だ。容赦のない声だ。

（ああ、つらい。本当につらい）しかし不思議と、やめて欲しいとは思わなかった。自分から求めて、此の痛さ、此のつらさを味うために入門したのではないか。甘い痛さじゃないか。嬉しいつらさじゃないか。

——そんなことを考える。

今度は「雅」の段だ。うめき声程度、身をそらせる程度は許されている。パシュー「ウーッ、ウウウウウーッ」思い切り腹の底からうめき声をあげた。それと同時に、体をグイッと弓なりにそらした。そして尚も「ウーッ、ウーッ」とうめき続ける。うめくことによつて、この痛さの万分の一でもやわらげられたらと思つて——。

「雅」の段の十打が終わった時、私はもうくたかだった。一打毎に体に力を入れ、腹の底からうめき声をしぼり出したために、咽喉はからから。汗は額からしたたり落ちた。

しかし、容赦のない打ち方は、続いて「苦」

の段を行うと宣言していた。「苦」の段は、どんなにのたうち廻っても、悲鳴をあげてもよいことになっている。これは受け方によつて、余程苦痛がやわらぐと思う。

ピシューッ、と第一打が来た時、私は待ちましたとばかりに両手で打たれた所をグッとおさえた。「痛ッ!! 痛ッ!!」私は背中をまろくし、お尻を両手でかかえる様にして、じ——とこらえたが、その痛さは到底「忍」や「雅」の段の比ではなかった。

焼き火ばしを突き立てられた様な激痛が、じわじわと体内に浸透して仲々消えない。

「何をしとる。雅の精神を忘れたのか!!」

ものすごい一喝が頭の上から降つて来た。ハッ、と我にかえる。

「すみません」

そう言つて、元の姿態にあわてて戻る。其処へ、待つてましたとばかりに次の一撃——にくい程適確に同じ所へ炸烈する。さすがに此の先輩、修練の賜物なのだろう。実に正確だ。絶対に新しい箇所には打ちおろしてくれぬ。思わず「堪忍してー!!」と叫んでしまふ。出そうと思わないのに、勝手に目から涙がこぼれて来た。

かくして、はじめての鞭打ちの実習は終つ

た。そのあと、色々と先生の御注意をきいて、すでにうす暗くなった家路についた。先程の激痛は心地よい、ほてりに変っていた。

山花愛子の日記は、此のあと長々と続く。一年余にして彼女は受け方の道を修得し、更に一年、打ち方の道をも修得した。其の後も鞭道一筋に精進している。

彼女の、日記を通してみられる鞭道に対する情熱。又それを修得するための肉体的精神的苦しみ。或る時は悲しみ、或る時は歓喜し、又ある時は失意に落ち、或る時は奮起する。その時その時の心の動き、それらは読む者の胸を打つ。特に鞭道を通して、現在の主人との間に芽生えた恋。そして遂に結婚に迄踏み切るくだりは、ホロリとさせられるものがあった。

いずれ又機会があれば、奇クの紙面を借りて彼女の日記の続きを紹介することもあらうかと思う。

### （其の三）雨宮市太郎と山花愛子

山花愛子を私に紹介してくれたのは、外ならぬ雨宮市太郎である。三年前、私は日本古来より伝わる鞭道なるものに、非常なる興味



をいただき、その研究に没頭し始めていた。そして雨宮市太郎と知り合いになる機会を得たのである。時に彼の道場を訪れて、鞭道の精神に触れることが出来、又私の研究のためにも非常なる知識を与えてくれた。

前述したことの繰り返えしになるが、最近彼はその心境を次の様に述べたのである。

「私は鞭道を究め、完成するため、毎日苦しみ抜いておりますが、まだまだです。一歩一歩前進はしておりますが、まだまだ完成にはほど遠いのです。特に、雨宮流には「縛り」がありません。これは京極派、つまり雨宮流の伝統であり、特徴であると同時に、大きな弱点です。私は残る余生を「縛り」の研究にとりくみます。そして「縛り」を雨宮流にとり入れ「鞭打ち」と「縛り」を一体とした雨宮流の作法を完成さすつもりです。これから苦難の道です。私は此のために、奥州派と天草派の縛りを徹底的に研究し、取り入れたかと思っております。幸い私には非常に良き協力者がおります……………」

ということと山花愛子の話になり、彼の紹介で彼女と会うことになったのである。

初対面は雨宮道場で行われた。まばゆいばかりの美人である。他人の奥さんだとは知っ

ていても、胸の高鳴りをおさえられない。

彼女の話し――

「主人とは絶えず実地に、研究をしております。今は、鞭の種類による作法についての研究です。雨宮道場に通った二年余の間に、姿態、及び鞭打ち場所による作法は、一通り修得いたしました。しかし鞭打ちも高度になると、鞭の種類によって、受け方、打ち方、皆作法がちがうのです。革の鞭、竹のムチ、其の他、色々な材質のものがあります。それらが、各々巾、長さ、厚さ、重さ、色々あり、又、材料のままの、単純なものから、巻いたり、結んだり、複雑な加工を施したものまでその種類は、実に多種多様です。とにかく大変です。私自身もまだまだ未修得の部分があるし、又、雨宮流そのものも未完成の分野が多いのです。特に「縛り」に対する研究をするのが今後の課題ですね」

と言って彼女は先生の顔を見る。雨宮の言う通り、彼女は誠に良き協力者ではある。

彼女は更に続けた。

「私は茶道を三年程修業し、免状も持っておりますが、鞭道と茶道とはその主旨に於いて全く相通ずる所があると、私はかねがねそう思っているんです。特にその奥の深さという

点では、全く共通していますね。一生かかっても極めるのはむずかしいのではないでしよか」

そしてそのあと、

「どの道に徹するにせよ、苦しみがついて廻るということは当然です。それが、精神的なものと肉体的なものに分れているように見える場合がありますが目標はすべて一つに帰着するのが、どの道にしろ、修業というものだ」と判りかけて来ました。私も昔からのお友達から、鞭で打たれるのが修業になるの、なんてよく訊かれるのですけれど、鞭道の間は、特に門外の人には理解され難い部類のものかも知れませんね」

と、美しい笑顔を見せて

「此の日記は私の長く苦しい修業を書き記したもののなのですが、若し研究のお役に立つのならどうか読んで下さい」

と言って出されたのが、大学ノート十数冊に及ぶ彼女の日記だったのだ。私は勿論有難く読ませていただくことにした。

鞭道について語る彼女のひとみは、美しく光り輝いていた。本当に幸せな人とはこういう人のことを言うのだろう。



＝「主 張」＝

# 切腹文学は

## 『悪書』ではない

城 山 秀 彦



日本が、過去のよき時代と訣別した瞬間から、其の「美德」の頂点にあった切腹は、アブノーマルセックスの一形式へと、移籍してしまった。

事実、切腹の苦悶は、そこにいかなる理由があったにもせよ、正視するにたえない程、激しく、長時間にわたる。

到底常識では考えられぬ自殺方法である。このような形式による自殺方法を案出し、普及せしめた日本人自体の、常識を疑わしめるに足りる。

しかし一方に於て、熱烈な支持者の多いことも、この自決の特色となっている。

それは、人の心の奥に沈む、なにかが、感応するからだと思う。

その「なにか」。

これこそ、人々が日常に果し得ない決断力と実行力への憧れではないだろうか。

この世にひそむ多くの矛盾。切腹は、これらのすべてを包含しているのである。

先ず、「死ぬ」と云うこと。

これは、理由のいかにかわらず、敗北

である。

しかし、切腹は、敗北感に挑戦する。

うめき苦しむ切腹者の双手の中に、一ふりの刀が握られ、生への本能と戦うのである。

この戦いに「勝った」時こそが、「死」なのだから。

従って、本人の意志のままに、腹が断ち割られ、それに伴う苦悶も、許される範囲の行儀作法のうちであれば、切腹者は息も絶え絶えに俯伏していようと、立派に「勝利者」たり得るのである。

この、一見理不尽な勝利が、ながく人々の畏敬のマトとなって来たのだ。

つぎに、切腹は、決断力だけでは解決しないことと云うこと。

服毒、飛込み、首吊り。これみな、決断力と、ワン・アクションによって、事は決定的に進行してしまうが、切腹は、大きな実行力が必要とする。つまり、切る事なのだ。

「ウーッ、く、くるし……」

と呻く言葉の下から、

「な、なんの……これしき……。ウウッ、ほ、本望……う、うれしい……」

と、苦痛にたえて叫び、自己を叱咤する。苦しみ、且つ喜ぶ……。



これも矛盾と云えよう。

そして、この苦痛こそ、名誉であり、永遠に生きる道であると、かたく信ずる事によって、肉体は、意志のままに、自らを傷け、亡して行くのである。

切腹に対する素朴な質問は、

「なぜ、あんなに苦しんで死なねばならないのか？」

に集約されるであろう。

それも尤もだ。

仏教における、「死して生きる」と云った悟りの思想と、誰にでもわかる極めて困難な行為への実行力の誇示。

それが、しばしば、敵前での切腹と云う形で、遂行された理由のようである。

しかし、切腹が、実生活に生きていた時代は、敗戦と共に去った。

切腹は、人の心の奥に沈む「なにか」を、探求しようとする者のために、門戸をひらいたのである。

武家時代の切腹は、好むと好まざるとにかかわらず、強制されて来たがゆえに、女の切腹を除いては、一応アブセックスとは無縁であらう。

軍国主義時代に於ては、明治時代を除き、

すでに、「云うは易く、行ふは難し」とする方向が是認され、愛國心の特に強固な者のみが決行する方法として、これが実行については、次第に特別扱いの形となってしまう。だが、まだ、アブセックスとの握手は行われていない。

しかし、正装して夫に殉じ、切腹を遂げた人妻などの場合に、ほのかな自虐の萌芽を読みとる事は出来る。

事実、戦争中には、隣の人にさえ、その可能性が考えられたのであるから、これが、自虐プレイとして開花するなどは夢にも思えないのであった。

これが、終戦と共に、男女多くの切腹者を出したのを最後に、一挙にして、頂点の座を放逐されたのである。

そして、四、五年の間、切腹は、雌伏していた。

世は、リバイバル・ブームにわき、戦記物が、ベストセラーとなった。

切腹は、姿をかえ、忍者そのけの变身ぶりで、文壇に踊り出た。

昔には、憚られたような、凄絶な描写が、誌面を朱に染めた。

中康弘通氏は、リバイバルの先端を切って

武家時代の、「女性の」切腹を書いた。

白むくの前を寛げ、わるびれもせず、短刀を我とわが腹に突込むヒロイン。

脂汗をうかべつつ、皮肉を裂く白刃をキリキリと引きまわし、思わずほとばしる、ウウッ、のうめき声さえ、歯をくいしばって押しこらし、白いうなじをふるわせつつ死んで行く武家女の姿には、多くの人が、感動と興奮を禁じ得ないのであった。

この段階でも、切腹は、必ずしも、アブセックスと、直接の握手をしたわけではなかった。

つづいて、法谷四郎氏が出て、はじめて、切腹文学は、その重点を負傷の描写に移し、官能的な展開へと、意識的に方向づけられてゆくのである。

腸をつかみ出し、苦しみもだえるヒロインの描写。そのうめきのテンポが、そこには、なにかセックスの匂いを感じさせるようになったのである。

これまでには、切腹は、一つ概念を持っていた。

すなわち、和服、と云う決定的な概念である。

しかし、終戦を境にして、われわれが接し



て来た軍人の切腹は、「制服」と云う拘束感に支えられ、一種の官能美を持っていた。

この軍服を、女に着せる。——いまでも、外国の女の軍人に、人気があるのと、全く同じ理由で——

軍服に乗馬ズボン、長ぐつ姿というヒロインは、妖しい官能美を現出した。

このような、軍服フェティシズムを、徹底的に追求したのが、藤山秀緒嬢の一連の乗馬ズボンの女腹切シリーズである。

ここに至り、法谷——藤山ラインによる、切腹文学は、決定的に、アブセックスを指向した。

多くの熱狂的な支持によって、藤山嬢は、生命をすりへらしてまで、ひたすらに書きつづけた。

乗馬ズボンに包まれた肢体のナマナましい描写。アアッ、ウーッ、と、交互につづくヒロインのうめき。それらは、女性特有のテンポで、書きつがれて行った。

恥しさ、あさましさ。そうした自己嫌悪を捨て去って、ひたすらに書いた嬢の胸中を思うとき、私はこの遺業こそ、受けつがれなければならぬと決心した。

それは、サドによって、サディズムと呼ば

れ、マゾッホによってマゾヒズムの名が生まれたように、仮に、ヒディズムとも云うべき新しいジャンルであると思うからだ。

この灯を絶やさないようにすることは、日本のアブセックスの歴史に、外国の従属を脱しえなかったと、書きのこすことしか出来ない昨今の斯界に、大きな一ページを、それも日本独自のジャンルとして記録させるものであろう。

ぼくが、他誌にも、くりかえし述べているように、切腹は、ワイセツ行為とは違う。

英雄的行為への感動のたかまりが、性的方向を指すのであって、破廉恥なものでは絶対ない。

切腹の愛好者は、憶病だ。

しかし、官能的な切腹、ヒディズムの継承者が、輩出すれば、基盤は、必ず拡大する。

恥じることはないのだ。

愛好者たちよ、書いて下さい。

すでに、乗馬ズボンや、ブーツをはき、切腹のとりこになっている若妻たちを、ぼくは多く知っている。

団地廻りのセールスマンに色目をつかい、とりかえしのつかぬことになった人妻の例を見ても、人の欲望は、抑えるばかりであって

はならない事がわかる。

それにひきかえ切腹マニア、乗馬服、ブーツマニアの若妻たちの、なんといきいきと、生活をたのしんでいることか。

ひとたび演技の場に至れば、乗馬ズボンを汗みどろにして、切腹の苦悶にのたうつ、これからの人々が、切腹と云う美徳の犠牲を、自らの体で演ずるとき、責任感を体得し、自己を犠牲にして、他人につくす事の喜びを、官能の中で知ることが出来るのである。

本誌をして「悪書」と呼ばしめないために、切腹を普及させることである。

そして、切腹は、その発生と、形式の古典的なにもかかわらず、申述べたように、人生の矛盾と云う、きわめて今日的な性格を併せ持っているし、官能美の頂点における読者の参加が、極めて容易である点にも、将来性のある、しかも日本独自の分野であろうと考える。

すでに外国にて、一部翻訳出版のうごきさえあると聞くこの時期に、是非、本格的な官能美切腹の作家が現れんことを、切にのぞむものである。

△END▽





# 二つの世界

町

陽

一

その町は二つの部分に分けられていた。いや、この町だけではないのだが、ここでは、特に区別が激しかった。換気装置、ウォーキング・ベルト等の公共施設は勿論、個人の家に至る迄はつきりと境がつけられてあった。甚しい差別が当然とされていたのだ。いつ云うとなく、一方はレッド・ゾーン、他方はブルー・ゾーンと名付けられた。はっきり云って、ブルー・ゾーンに住む人間は、人間として認められていなかったのだ。南北戦争以前のアメリカ、いや、それ以上に差別はひどかったかもしれない。人身売買は半ば公然と行

われていたし、レッド・ゾーンの人間が、ブルー・ゾーンの住人を殺しても、大した罪にはならなかった。殆どの場合「正当防衛」という言葉が成り立ったのだ。

何が故にこんな差別が出来たのか。何ら理由はない。ただ自然に、長い間に根を張った観念というにすぎない。人種的なものでも勿論ない。一人ずつ選り出してみると、何ら異なる所はない。唯、財政的に差があるだけである。経済的理由だけからブルー・ゾーンに住む。ブルー・ゾーンに住むから、差別が出来る。だが、ブルー・ゾーンに住む人間は、決

して現状に満足しているのではない。或る者は、どうにかして、レッド・ゾーンの仲間入りをしようとするのだが、一度、ブルー・ゾーンに住んだという事が判れば、レッド・ゾーンに入るという事は、まず不可能といっていいのだ。又、或る者は、レッド・ゾーンを潰そうとひそかに計画を進めていた。ひそかに、そう、それは秘密の上にも秘密に事を進めていかなければならなかった。

今迄にも、その企てのために数知れない人が、逮捕され、見せしめの為に、境界線に全裸にされて磔られたのだ。中には老人もいた



た、まだ固い蕾の少女もいた。そして、苦痛に泣き喚きながら、彼等は生命の火を消して行ったのだ。しかし、それにも拘らず、ブルー・ゾーンの若者達の間で、打倒レッド・ゾーンの運動は、決して途切れることはなかった。

ルミは一人暗い部屋の中に立っていた。どれ位の部屋なのか、本当に自分一人なのか、ということさえわからない。免に角、鼻をつままれても判らない暗さとはこういうのを云うのであろう。ルミが、マチに誘われて、打倒、レッド・ゾーンを目指すA R組織に入会するため連れてこられたのは、ほんの十分くらい前であった。

ブルー・ゾーン住人達の心に根強く残る、対レッド・ゾーンの感情は、いつの間にかA R組織と云う、大きな地下運動に迄発展して行ったのだ。A R組織の名は、レッド・ゾーンにも知られていた。そして、それを探ろうとする動きは激しかった。だが、その正体は誰一人として知っていなかった。組織の人間がつかまり、言語に絶する拷問にも掛けられたが、例外なく、口は割らなかった。それはどブルー人の団結対抗心が、強固だともいえ

る。かくして、A R組織の名は、全盛時のK K団にも勝る底知れぬ恐怖を、レッド・ゾーンの人々に与えていたのだ。

「新入会員、ルミ」

「は、はい」

闇の中からの突然の声に、ルミは身を固くした。

「唯今から入会式を行なう。まず、着ているものを取れ」

暗闇の中で、ルミの肌着がひそやかな溜息をつく。マチから裸になる事は知らされていたが、その後の事は全く判らない。なぜそうしなければならぬかは、自然に納得出来るだろうとマチは云ってくれただけだった。

「よし、ライト」

最後の一枚がルミの体を離れた瞬間、まるで見ていたように、声がかかり、部屋に薄暗い光が流れた。

相当広い部屋である。中央にルミ、そのまわりに目のまわりだけを隠す黒マスクに、袖無しの上着。ブリーフのように短いショートパンツというスタイルの男女が、二、三十人も囲んでいた。ルミは思わず身を庇って小さくなった。

「紹介者」

「F 64号」

正面に立つ男からの声に応じて、ルミの前に立ったのはマチだ。目は隠していても、唇の横のチャームキング・ポイントで、仲良しのルミにはすぐに判る。

「縄を」

「はい」

マチ……いやF 64号は、ルミの背後にまわると、両手を後にねじ上げ、ごく当然のことのように紅白縞紋様の縄で縛り上げた。強くはないが、ゆるみのない縛り方だ。さらにルミの目のまわりを隠すマスクがかけられた。

「新入会員、これへ」

男の立つ所は一段と高くなっている。ルミはその前に進み、ひざまずいた。どういふものか裸身が恥しくないムードだった。それほど厳粛で自然に溶けこめる作用をした。

「名は聞かまい。会員は本名を知らない方がよい。年は？」

「二十一です」

「レッド・ゾーンに対する恨みは？」

「限りなくあります」

「主なものを」

「両親を殺されました」

「理由は？」



「判りません。知らせを聞いて行ってみたら死んでいました。それだけです」

「兄弟は？」

「妹が一人」

「今、何処に」

「レッドに」

「レッドに？」

「はい。奴隷です」

空気がどよめいた。レッドの奴隷に対する仕打ちのひどさは衆知の事だった。

「年は」

「十八です」

「まだ元気か」

「と思います。毎日、モーグに見に行きますが、見つかりませんので」

モーグというのは、レッド・ゾーンの者が

酷使し尽した、ブルー・ゾーンの奴隷の死体や、死にかけた者を集めて放置する場所であった。そこには絶えず地獄の呻きと雰囲気がちこめているのだ。

「F 64号です」

不意にマチが後から声をかけた。発言を求める時のルールになっているらしい。

「よし」

「一度、潜入時に見かけた事があります。鋸

状の枷を三つかけられただけの姿で、歩かされていました」

どよめきが高まった。

「判った。新入会員」

「はい」

「わがA R組織に自分の生命を預けることが出来るか？」

「勿論です」

「組織の事を一寸でも口外すれば、即座に仲間の手で生命を絶つ。良いな」

「はい」

ルミは身体が引き締るのを感じた。ひしひしと迫る恐ろしいばかりの感激が彼女の心を慄わした。

「F 64号」

「はい」

「始めろ」

ルミの縄は一度解かれ、両手首に別々に縄が巻きついた。

「立って」

縄は引きしぼられ、ルミの体は両手を上に完全なY字型になった。

「F 64とM 98」

男が一人進み出た。ルミの背後にまわる。

突然、鞭が空を切る音。烈痛が噛みつくよう

に彼女の神経を驚愕させる。

「うむ」

ルミはのけぞった。背中の腕のつけ根辺りに痛みを感じる。

「これくらいのことでは声は出さな。レッドの拷問はこんなものではないぞ」

背中、細腰、尻、太もも、ふくらはぎ。鞭は正確にルミの背面を責めて行った。派手な音をたてるわりには痛みも少なく、跡もかすかに赤く残るだけだった。

責め手はマチに代り、ルミの正面から責めた。これは今迄以上の恐怖だった。打つ瞬間も、打たれた箇所もよく見える。しかも体の前面の痛覚は背面の場合より激しい。だが、ルミは声を出さなかった。唇を噛んで必死に耐えた。

「良いか、苦しめられる中に喜びを探せ。マゾヒストになれ。そして、レッドを殺す事に喜びを見出せ。サディストになれ」

男の声に、ルミは只うなずいた。乳首の炸裂した鞭の痛みが、全身を貫いたところなのだ。マチの鞭も正確だった。同じ所は二度打たなかった。薄赤い鞭跡が、きれいに平行線を描いた時、責めは終わった。ルミの体はいつしか苦汗にまみれていた。均整のとれた体は



大理石の彫刻像のように美しかった。

「誓酒」

ルミの体は横たえられた。今日の会のリードを取っている男が葡萄酒のビンと、グラスを持って近付いた。左の乳首にビンが傾けられ、美しい曲線を滑り落ちた赤い液体がグラスに集められる。大きなグラスだ。男はグラスに一寸口をつけると次にまわした。会員は次々と中の液体をすすると、最後にルミの所に戻った。ルミは男の手で上体を起こされ、最後の一口を飲み干した。

「新入会員、立て」

ルミを囲んだ輪が小さくなっていた。

「唯今からF214号として半年の間、訓練を受けるように」

「はい」

ルミの体内に喜びが湧き出て来た。マチが近寄るとルミに衣裳をつける。見習生はショート・パンツと厚手のブラジャーだけだ。

「F21号」

「はい」

一人の女がルミに近付いた。ルミより小柄だが引き締った小麦色の体だ。

「これからは、F21号が訓練係としてお前の傍につく」

「お願いします」

ルミ、いやF214号は頭を下げた。

「では、こちらへ」

「解散する」

ルミはF21号につれられて別室に入った。その入口は、ありふれたごく普通の薄汚い地下通路だったが、一步踏みこんで驚いた。中のこの広さはどうだ。ここが、AR組織の本部でない事は聞かされていた。とすると、本部の大きさは……。

二人が入った部屋には、床は一面にマットが敷き詰められ、むき出しの柱が三本、それに、何に使うのか判らない道具が、いろいろと並べられてあった。

「ではこれから半年、貴女の訓練をします。」

どうぞよろしく」

「よろしく」

21号の出した手を、ルミは何のためらいもなく握った。とたんに、

「イタッ！」

思わずルミは手を引いた。

「駄目よ。これからは、あなたの周囲は敵ばかり。絶対に油断しちゃいけないのよ」

21号は掌を返した。中指に光る指輪に鋭い物が見える。

「毒が塗ってあれば、もうこれだけで、あなたの生命はおしまいよ」

「すごい」

「まだまだ使い道があるけど、一つずつ教えて上げるわ。ここはね、訓練室。ここで、あなたがどんな具合に襲われても、逆に相手を倒せるように訓練をするのよ。例えば……私の中から首を絞めてごらん。本気によ」

21号は背を向けた。ルミは小柄な彼女の首に腕をかけ力を入れた。その途端、ルミの体は大きな弧を描いて舞い上り、マットに叩きつけられていた。

「いたあい」

「ごめんなさい。一寸きつかったかしら。加減はしたつもりだけど」

21号はルミの手を取って立たせた。

「あ、そうそう。私の事はヨコって呼んで。」

ほんとにヨシコって云うんだけど、ヨコの方が気軽でしょ」

「名前を呼んでも良いの？」

「こういうコンビの時だけはね」

「これから、いろんなことを教えてくださるんでしょ」

「そうよ、うんと悲鳴あげるくらいきついから。あ、そうだ」



ヨコは壁から細い縄を外すとルミの手に渡し、自分は柱を背にして立った。

「私を縛ってごらん」

ルミは、ヨコの手を取って柱の後にまわすと縄を巻きつけた。

「駄目よ、そんなゆるいの。お遊びじゃないのよ。レッドの人間だと思って、もっと思いきり縛ってよ」

レッドときいた途端、ルミの手に力が入った。

ヨコは柱を背に、手足を縛り上げられた。細縄はむき出しの手足や、セーターを盛り上げる胸のふくらみに痛々しい位深く喰い込んだ。

「よしって云う迄、そっちを向いてて」

ルミが、いわれるままに背を向けて五分も経ったであろうか。

「いいわよ」

ふり向いたルミの前に、すっかり自由になったヨコが、今迄自分を縛しめていた縄を手に微笑んでいた。

「すごいわ。貴女……」

「ヨコよ」

「ヨコみたいな人だったら、いくら縛っても仕方がないわね」

「そうでもないの。縄抜け出来る者には、又別の縛り方があるのよ。だけど、レッドの方では、縄は滅多に使わないわ。手錠とか枷とか、何か道具を使うわね。でもやはりあなたも練習しとかなきゃ」

「拷問なんか受けて我慢出来るかしら」

「さっき云ってたでしょう。どうしても避けられないわ。逃れられないものなら、拷問が楽しくなるようにすれば良いのよ」

「なれるの？」

「なれるわ。女って、昔からいじめられることには強いよ。いえ、むしろ好きなよ。苦しみに耐えられるような、体になっているの。問題は気持の持ち方といえるわ。だからここでも、潜入して秘密を探ったり、こっそりと暗殺してくる時などは大抵、女が使われるのよ。男は単純だから駄目よ」

「そりゃあ一寸ひどかないかね」

「あらM8号」

いつの間にか二人の後に、大柄な男が一人にやにやしながら立っていた。

「いざとなりゃ、何てったって男の方が我慢強いよ」

「では、試してみましようか」

「勿論、と云いたいところだが、止めておく

よ。なれ合いで拷問にかけたって、本当の事が判るはずはないさ。まあ、本番で男の腕を見せるからね」

「何とでも云いなさい。競争したらかないっこないくせに」

ヨコは楽しそうに広い背を向けた男に云った。

「大きな人ね」

「大きいばかりじゃ駄目だけれど、彼は優秀よ。しゃくだけど、あの人には負けるかもしれない。だってあの人だったら、苦痛をとっても悦べる特質をもってんだから」

ヨコは肩をすくめてみせた。

レッド・ゾーンのはぼ中央に、大きな邸があった。特に大きなと断わらなくても、レッド・ゾーンの家は皆、堂々たる造りで、こまかい所にまで金を使っていた。持てる者の強みである。入れ物は大きくとも、中に住む人間は少なく、男の家ならせいぜい二人。女の家でも三人を越える事は、殆んど無かった。それ以外にブルー・ゾーンの奴隷が、少なくとも二人はいたが、これは人数のうちに入らなかった。夫婦者というのは、殆どいなかった。わざわざ結婚生活というわくに自分をは



めなくても、殆んど全部といってよいほど、日常に必要なことがらは手軽に奴隷で間にあうからであった。

「シーロ、今日はせり市があるんだろう」

「せり市？」

「奴隷のさ」

「あ、そうか、お前は行くのか」

「行ってみようかなと思っている」

「そうか、チロ一人になったんだっけな」

「そうさ、前はモーグ行きさ」

「どうしたんだ」

「一寸傷め過ぎたようだ」

「たしか十五だったっけ」

「十六になったばかりだった」

「何をしたんだ？」

「いや、木馬と鞭だけだがね」

「弱かったんだね」

「そう思うね。シーロはどうだ、一緒に行かないか」

「そうだな。もう一人位買おうか、良いのがいればな」

「そうしろよ」

「チロは近頃どうだい」

「うむ、昨日、調教室から帰ったとこだ」

「調教室？ ひどい所なのだろう」

「一寸はおとなしくなったようだがね」  
「せりは一時からだろう。そろそろ行かなければ」

「そうだな。行こうか。チロ、行くぞ」

二人の男は立ち上った。奥から呼ばれた女奴隷が小走りに出て来た。腰の辺りだけを僅かに覆っている程度の姿だ。そのぬけるような白い肌一面に、赤い傷跡が痛々しい。固い胸のふくらみを彩る薄紅の蕾も苛責の印しが赤く充血していた。

「ほう、大分傷めつけられたな」

「一寸は身にこたえたか、チロ。云う事を聞かないと又調教室に送るぞ」

チロは口をきかずに男の仕度が続けた。

「仲々強情だからな。そうだ、帰りに調教室をのぞいてみようか」

「調教室を？」

「うん。どんな所か、一度見て置くのも悪くならろうじゃないか」

「そうだな。行くか」

ら月に一回開かれるせり市は、いつも盛況を極めていた。

会場にはすでにレッドの人々で大半埋まっていた。中央に突き出した舞台だけの、簡単な会場だ。その舞台の中央に奥の方から続くレールが見える。

「四番」

ほぼ客席の中央に当る舞台の端に立つ男の声を合図に、奥の幕が割れ、一人の少女が滑り出して来た。レールの上を滑る一本の柱、その柱に全裸の少女が両手を高々と上げた姿で縛りつけられていた。年はまだ十四、五らしく子供らしさを残している。客席の目がスポットを当てられた、この少女をなめまわした。少女の体はゆっくりとまわる。背面の柱も殆ど透明の為、全身隠す所なく視線にさらされる仕掛である。

「はい、いくら」

「一千デル」

「一千五百」

「二千デル」

会場に、熱を含んだ声が飛び始めた。

「二千三百五十」

「二千四百」

段々と小刻みになってくる。



「二千五百デル」

ひとときわ高い声を合図のように、せり声は途絶えた。

「はい、二千五百デル。もうありませんか。

さあ、二千五百……はい二千五百デルに決りました」

少女は柱から解き放たれると、後手錠をかけられて買主に渡された。

「五番、純労働用」

新しい柱には大柄な男が縛られている。

「労働にはもってこいだよ、又御婦人方のオモチャにも最適と来るよ」

男の言葉に場内は沸いた。ガッシリしたたくましい体格だ。

「どうだい？」

「いや、男はいらないよ、矢張り女だな」

「そうだろうな」

「おう。あれ、どうだ」

「ARじゃないだろうな」

「ARは奴隷にはさせないよ」

「判らないだろう」

「よく調べているらしいからな」

舞台には十七、八の少女が出ていた。

「二千デル」

シーロは、おやという顔で友の顔を見た。

レッド・ゾーンの片隅に防音完備の小さな

建物の一つ。奴隷達にとっては、その名を聞いただけで冷水を浴びせられたような気持ちになる調教室だ。一応、外部からは見えないようにしてあるが、希望さえすれば、いつでも見学出来るようになっていた。

彼等が訪れた時、丁度一人の少女が調教を受けている最中だった。調教師は男女各々二人ずつ。男は黒のパンツ、女はそれに黒のブラジャーをしただけの姿だ。少女は云わずもがな、一糸も許されぬのが常識である。両手脚を一杯に拡げ、俯向きに、宙に吊られていた。弓なりになって、全体重が両手足首にかかっているのだ。

「それ」

下から責め手が、棒の先で白い腹の中央に見える小さな窪みを突き上げた。

「ああ」

少女の体が、ばね仕掛のようにゆれる。

「ほれ」

責棒は休みなく次々と突き上げられ、少女の体はゆれ続けた。恐らく手首も足首もちぎれそうな感じであろう。

口には革製の箝口具がはめられているが、完全に声を殺してしまうものではない。色白

の肌が、たちまち紅色に染って行く。

「用意が出来たわよ」

女の調教師が、責手の傍らへ鉄の大きな板を運んで来た。

「よし、変えようか」

少女は体中であえいでいた。小麦色の若々しい肌と鉄板の間は三十糎程も離れているだけだ。

「始めよう」

鉄板の下のスウィッチが入れられた。黒かった表面が急速に赤く熱くせられて行く。

「むむむ」

少女の動きが又大きくなった。鉄板に面した肌がゆっくりと赤くなっている。みるみる内に汗が玉のように吹き出しては、鉄板にしたり落ちて、チュツ、と小さな音をたてて撥け散ってしまう。

「まだいけるか」

「もう少し」

あえぎが一段と大きくなった時、スウィッチは切られた。台がどけられ、少女の体も床に横たえられ、自由を奪っていたすべてが、取られた。少女は俯向けになったまま身動き一つしない。調教師達は少女に背を向けて、何事か相談している。



少女の頭が、かすかに動いた。上目使いに調教師達の様子を盗み見る。右手が目立たないように伸びて、傍に無造作に置かれた銃に近寄って行く。それはロケット発射秒読みの緊張感にも似ていた。ようやく右手に握りしめた銃を少女は調教師達の背に向けた。散弾銃の如く広い範囲に亘って、短い針が飛び出す短針銃。「危い！」シーロ達が、見学席から声をかけた。殆んど同時にそれ迄固まっていた四人は、一度に四方に跳んだ。ある者は転がり、ある者は宙に跳び、そしてある者は後に転がって、少女の手から銃を叩き落とし、素早くその手をねじ上げていた。

「うう。い、いたい」

「やっぱりARね」

「し、しりません。ARなんて」

「嘘云っても駄目！……ねえどうする」

「やっぱり処分だろうな」

「どれにする」

「さあて」

少女は、その日のうちに、レッドとブルーの境界近くに吊られた。両手首を揃えて縛られ、その縄だけでぶら下げられたのだ。まだ幼い感じの体が、余計痛々しく見えた。しかし、その痛々しさがむしろ美しさを強調して

いた。小さな胸のふくらみが少女の可憐さと抗議を現わしていた。若い体の全てに怨みをみなぎらせて少女はあえいでいたが、何時とはなく、その細い生命の火は吹き消されていた。色あせた少女の裸身は、モーグに棄てられたが、時を置かずして誰かの手で持ち去られていった。

AR本部の訓練室では、ルミが卒業試験を受けていた。

短針銃の早撃ちを始めとして、あらゆる小型武器の効果的な使い方。相手を殺さずに、抵抗力を奪う方法。テレパシー、テレキネシス。捕えられた時の逃れ方。拷問の耐え方、いや、喜び方。教えられたことは数知れなかった。

ブルー・ゾーンの者は生れながらにして苛酷な運命の下に置かれ、苦痛に耐える事には慣れていく。それに加えて、女の忍耐強さとルミの持前の鋭さに磨きをかけられ、F214号は斗士として大きな進歩を見せた。半年前のルミに比すれば、蝶が鷹に変身したともいえる程成長していた。

だが、元々素質のあったルミとはいえ、羞恥心をなくす為に四六時間中全裸で生活させ

られたり、一カ月も縛られたままの拷問を喜ぶマゾ訓練等は耐え難かった。特にマゾ訓練の場合は、肉体では苦を快に化し、表情にはあくまで苦痛を示さなければならなかった。さらに、いかなる責苦の最中に於いても、AR組織員は、頭脳の回転を忘れてはいけないのだ。だが、その困難さを消化し吸収して、ルミは成長したのであった。

肌を裂き、肉を貫かれるような拷問にも、喜悦にすり替え得る要素のあることを、体験から学び取れたし、他人に均整のとれた姿をさらすのに羞恥を捨て、誇りを感じられるようになった。そして、自分の肌にかけられた拘束具は、縄から機械仕掛けのもの迄、時間の差はあっても抜け出す事が出来るようにもなったのだ。訓練してくれたヨコが驚嘆まじりにタイコ判を押してくれた。

「F214号」

「はい」

黒のスリーブレス。セーターのようだが、もっと柔らかく、もっと強い材質で作られていた。それに極端に短いショート。

半年前、ルミが入会を認められた時と同じシーンだった。違うのは、ルミが正式会員として登録される集りに変わっていることだ。



『よく頑張った。早速仕事を与える。』

「はい」

「レッド・ゾーンに侵入して、妹さんを救い出す事」

「はい」

「F90号と一緒にいけ」

90号と呼ばれた会員が前に出た。その娘をルミは良く知っていた。名前こそ知らないが自分より年下で、まだ少女と云った方が良い位だ。体にもまだ幼なさが残っている。だが判断力や、テクニクに於ては、ルミに優るとも劣らぬものを持っていた。特に縄抜け等は、達人の域にある21号のヨコでさえも一目置く程だった。

「良いか、今度の目的は、一人を助け出すことだけだ。それ以外の事にはチャンスがあっても、手を出すな」

「判りました」

「着替えて、直ちに行け」

「はい」

二人は更衣室で手首、足首迄を包む黒色服に着替えた。光を吸収してしまうこの色は、闇にまぎれて動かずにいれば見つかる事はなかった。道具は何も持たず、指輪さえも外した。暗殺の仕事の時は小さな道具を目的に応

じて持って行くのだが、今日は違う、従って絶対に見つかってはいけないのだ。髪を小さくまとめ、軽く音のしない靴をはき、手袋をはめると二人の仕度は整った。身体にぴったりのとした服は何も着ていないように軽い。しかも伸縮自在で、少しも動きの邪魔にはならない。

「行きましようか」

「よろしくね、90号」

「セツと呼んで」

「私はルミ」

外はすでに闇に包まれていた。音もなくしのび出した二人は、たちまちブルー・ゾーンの暗黒に溶けこんでしまった。

二つの世界の境界には、別に塀などない。その気になれば往き来は自由だ。だが、塀よりも強力な精神的障壁が何重にもはりめぐらされているのだ。

「レッドは初めて？」

「ええ、そうよ」

二人の会話は声にならず、テレパシーで交わされた。境界に近い。

「セツは？」

「五回ほどかな」

「暗殺？」

「そう」

「全部成功したわけね」

「ううん、最後は失敗したわ」

「捕まったの？」

「そうよ」

「拷問された？」

「勿論よ。ひどかったわ」

「どんな……」

会話は途切れたが、その直前に、ルミは、セツの心から激しい苦痛の想起と憎悪の感情をよみ取った。

境界線は判然としていた。レッドとブルーの違いが簡単に読み取れる所だ。美しく光り輝やくレッド。暗く、汚れ放題のブルー。余りにもその差はひど過ぎた。

二人は、身内に湧き上る精神的抵抗に耐えながら、レッド・ゾーンに踏み込んだ。

完全に照明設備の行き届いたレッド・ゾーンは、二人に対して大変な苦勞を払わせた。身を隠す影すらないのだ。セツの経験によって辛うじて目的の家にたどりつきはしたが、ルミは早くも冷汗びっしょりだった。

「さあ、ここよ。手はずは判ってるわね」

うなずきながらルミは、頭の中で打合せを試みた。警報装置と見張りにはセツが引き受



ける。ルミは妹を探し出し、枷を外して、連れ出す。

「サ、行って」

ルミは音もなく飛び込んだ。レッドの家では奴隷をつないでおく場所は大体に於て決っている。何の苦勞もなく、ルミは妹の前に立った。

「チロ」

哀れにも、全裸といってよい姿に後手錠。更に足枷に拘束されたチロは、一瞬自分の目を疑ったようだ。

「ルミ」

目に希望の光が射した。

「黙ってて」

チロの手足はすぐに自由になれた。こんなものは今のルミにとっては、造作もない玩具に等しい。

「ルミ」

小さな声でチロが云うと、目で部屋の奥を示した。そこには、チロと同年配位の少女が手足を一つにまとめられ、猿轡をはめられてころがされていた。

「助けて上げたいけど、今日は駄目。目的以外はタブーなの。近いうちに必ず助けるわ」  
チロは心を残しながらも、ルミにせかされ

て部屋を出た。恥しかったが、今は服を探している暇はなかった。

「成功よ」

セツに無言の挨拶を送ると、二人はその前を通りぬけた。安全地帯に入る迄セツが援護するのだ。物影を拾い拾い、二人は音を殺して走った。

ともするとチロが遅れ勝ちになる。無理もない。今迄、全く自由を奪われていた生活が続いていたのだし、つい最近、散々痛めつけられ通した後だ。白い肌にはまだ、夜目にも傷跡が痛々しく残っている。

いつ撃たれるか。いつ声が聞こえるか。はらはらしながらも、二人は必死でブルー・ゾーンの暗闇に飛び込んだ。「助った！」抱きしめたチロの背が、細かく震え続けていた。セツの姿はまだ現れない。何か遠くで物音が聞えたようだが、すぐに治まってしまった。時は過ぎた。しかし、セツは戻らない。じりじりする気持でルミは判断に迫られた。見に行くべきか。いや、一まずチロを安全な場所へ……。

チロをAR本部に送り込むと、ルミは、許可も得ずに再びとって返した。約束の場所にはセツはいない。危険を承知でルミは先程の

コースをたどってみた。あの家にもセツは見えない。ルミは頭の中で、レッドゾーンの地図をたどってみた……調教室……頭の中に稲妻が走ったようだ。ルミは小走りになった。

「セツ、セツ」

頭の中で相棒を呼びながら走る。

「駄目！ ルミ、来ちゃいけない！」

突然、はっきりセツの波が、脳波を震わせた。

「何処、調教室？」

「駄目！ ここは恐ろしい所」

「どうなっているの」

返事はなかったが、映像が送られて来た。おぞましい調教室。その真中に、みじめにも衣服を剥がれて、後手に縛り上げられたセツが、宙に吊られている。

「ぬけ出せないの？」

「駄目なの。この縄は変なの、抜けられないの。あーッ」

映像は消え、苦痛の波だけがひびいた。

その時、ルミはすでに調教室の屋根にとりついていて。窓はない。屋根の端をまわってみる。と、後側に何の為の穴か、丁度のぞける位の穴が見えた。すかさずルミは飛びついた。



吊られたセツの裸身が、もだえ、ゆれていった。ルミは観察の眼をこらした。だが、そのもがき方は、ARで訓練された、拷問を喜び苦痛の表情を示すというものではなさそうだった。

「セツ。セツ。大丈夫？」

「ダメ！こ、これはひど、ひどいわ、あーッ」

おかしい。セツを囲む者達は何も手出しはしていない。只、黙って見ているだけだ。なのに、一人セツだけが苦痛を訴えている。

「ル、ルミ、帰って。私は助からない。ここで殺されるわ。ここからは、とても、出られそうにないわ……。ううむ……。ルミ。来ちゃ駄目よ。貴女も捕まる、わ。……。わあ……」

「待って、セツ。私達はコンビよ、必ず助けるわ。待っ……。あっ！」

ルミは本能的にふり向いた。いつの間に集まったのか、男が五人、ヒタヒタと輪を縮めて来ている。不覚！ルミは唇を噛みしめた。

「飛んで火に入るか」

「ARに違いない」

「勿論。あの服を试试看」

「こっちの方が発育しているな」

口々に好きな事を云いながら、男達は半円

を絞ってくるのだ。

「そら」

後に廻りこみ跳びかかった男が、ルミの腕を抱きすくめた、その手に力が加わろうとした瞬間、

「えいっ！」

ルミの喉から、気合が洩れると、男は大きく弧を描いて跳び、頭から落ちた。

「ぐえっ」

男の頭は内部をさらけ出した。

「味な真似を」

二人が同時に跳びかかった。続いて残りの二人。その一人の肋を折って心臓をえぐり、次の一人の腸を裂いたのが、ルミの最後の抵抗だった。二人に俯伏せに押さえつけられると、両手を後に高々とねじ上げられ、ギリギリ巻きに縛り上げられてしまった。早速、縄抜けをと思ったが、どうしたとか、この縄は弾力があって、少しのゆるみも出来なかった。血行を停める程強くないが、どうもがいても、腕に喰い込む縄目は、貼りついたようにゆるみそうになかった。

「ほう、もう一匹かかったか」

調教室にルミが引き立てられると、中の男が嬉しそうに云った。

「ああ、ルミ」

その声は力が無かった。セツの小さな乳房が縄目に潰されて痛々しかった。

「どうしよう」

「まあ同じ喜びを味合ってもらうんだな」

ルミは衣服を剥がれ、セツの丁度真下に両手脚を四方に思い切り引き絞られて縛りつけられた。短針銃で狙われていては、両手が自由になった瞬間も抵抗は出来なかった。

「さあ、楽しめよ」

左足の方に一人が近付いた。手に何か小さな物を持っている。

「組織の事が云いたくなったら、いつでも云えよ」

「絶対云うものですか」

ルミは云いかえしたが、頭を起した時に見えた、自分のみじめな姿がたまらなかった。

「まあ、良しさ。強がり云えるのも今のうちだけさ」

「あっ」

ルミは思いがけない衝撃を身内に覚えた。しばらくは何も起らなかった。だが、その小さな衝撃が、徐々にルミを、今迄に経験したことのない苦痛に追いやり始めたのだ。

「う、うむ」



組織での訓練で、すべての拷問に対する抵抗力をつけたと思っていたルミだが、この苦しみは初めて味わうものだ。この恐ろしい責め具は、女の弱点を巧みにあばき、身の内から容赦なく苛み続けるのだ。痛みと羞恥を交互に織り交ぜ、不規則に、しかも絶え間なく襲い来る苦痛。ルミは体中を引裂かれる思いであった。口からはよだれと共に、意味のない言葉が絶え間なく無意識の内にほとぼしり出た。頭の中には地獄と極楽が、灰色と桃色と交互に渦を巻いて、唸りを生じてフル回転しているようだった。苦しい。やがて、いつしか、意識を失なうて行った。

ルミは一足跳びに幼女の記憶の中に放り込まれた。ブルー・ゾーンに生れ育った者は誰でもがそうであるように、彼女も、貧困と、悪との渦の中を泳ぐことが生活のすべてであった。男というものを知ったのは十才になるやならずの時だったが、ブルー・ゾーンの女としてはむしろ遅過ぎる位だった。盗みはそれ以前に憶えていた。たまに会うレッド・ゾーンの人々から逸速く逃れる本能的なものも身につけていた。

一度、まだレッドの恐怖を知らない時、一人で歩いていて、レッドの子供達につかま

た事があった。女もまじえた子供達は、泣きわめくルミを裸にして縛り上げ、棒切れや縄で体中を打った。全身がはれ上がり、ルミはそれから一月余りも床を離れる事が出来なかった。痛く、苦しい。体が自分のものと思えない程痺れ、思わず呻く。

ルミは柱に、立たされたまま縛りつけられていた。両手は柱を背負うように後にまわして縛られている。目に鋭い刺激を感じてルミは目を開けた。開けた瞬間に刺激は去った。目の前に三角の棒を横にして脚をつけたものが置かれてある。三角形の一端が上を向いている、セツが後手に縛られてその上にまたがらされている。両横に置かれた脚台に立った姿だ。その足首にはおもりがつけられ、上体は上からの一本の鎖につながれている。

「セツ、大丈夫？」

ルミは元気をとり戻して、テレパシーで聞いた。

「大丈夫よ、一言も喋っていないわ」

セツは縄目にくびられた胸をつき出して答えた。小さいが形の良いふくらみ、紅の蕾が美しい。

「目をつぶると刺激が与えられる。よく相棒の苦しみを見ているが良い。相棒を助けたか

ったら、自分が同じ目に会いたくなかったらすぐに自白することだ」

ルミに向って男が云った。

「始めろ！」

セツの足台が外された。

「ギャーッ」

想像を絶する悲鳴だった。ルミには、セツの悲鳴が決して演技でない事がわかる。

全体重が三角形の頂点で激しく火花を散らし、痛覚を呼び出す。にぶい音と共に白い太ももにサツと鮮血が次き出し、スーッと筋を引いて流れ始めた。

「セツ、セツ」

ルミの脳波による呼びかけにも、セツは答えられなかった。ルミに伝わるのはすさまじい苦痛だけだった。

「どうだ、もっと苦しめ」

セツのもたえる肌に鞭が鳴った。いつもなら鞭の苦痛ぐらいは、何とも思わないセツだが、今はすでにいつものセツではなかった。想像を絶する苦痛にもがき苦しむ、一個の普通の女体でしかなかった。丸い体は鞭の嵐に襲われ、所々で血が赤い糸を引いた。

「あっ」

ルミは思わず目を閉じようとしたが、まぶ



たを襲う烈痛にのけぞった。またたき位ならこの刺激も堪えられる程度だが、目を閉じた状態になれば、ただちに苦しまねばならないのだ。

拷問を楽しみにすり替えられるよう仕込まれた二人だが、これはセツにとってとても楽しむどころか、耐えることも出来ないものだった。

「よし、降ろせ。死なせるにはまだチト早いようだ」

台から下ろされたセツは、生のない物体のようだ。グッタリとしていたのを後手の姿はそのまま、足を揃えて縛られ、長い髪を束ねられ、一本の縄につながれた。

「よし上げろ」

滑車が鳴った。無抵抗のままセツの体が伸びた。全体重が髪にかかった時、セツは苦痛で意識をとり戻した。

「そのままにしておけ。どんな踊り方をするものかもう一人に見せてやるんだ」

「見張りは」

「要らん。この縄からは抜けられん。もし、抜けられても、この部屋からは出られない」

捕われの二人を残して皆は出て行った。後には髪で吊されたセツと、立縛りにされたル

ミの二人だけだ。

「セツ、セツ」

ルミは声に出して呼んだ。真赤な血が、まだ流れを止めずに筋を引いている。柔肌のみみず腫れが痛々しい。

「ル、ミ」

声にはならない。ルミもテレパシーに切り変えた。

「セツ、しっかりして」

「ルミ、わたしはもう駄目」

「弱気になるんじゃないの」

「駄目なの。この拷問には今までの訓練が通用しないの。耐えられないわ。うう」

髪で吊られている為、セツの目尻は吊り上っていた。

「私は骨が折れているの。もうこの苦しさから助かるんなら何でも云ってしまえよう」

はげましこそすれ、ルミにもその若しみはよく判っていた。

「ルミ、貴女だけ逃げて」

「貴女も一緒よ」

「それでは逃げられないの。良いこと。逃げて、私達の想像以上の新しい拷問方法について、くわしく報告するのよ」

「でも、この縄は吸いついていて外れない。

それに部屋の鍵も」

「部屋は私が開ける。縄から、どうにかして抜け出すのよ。いいこと」

セツは吊られたまま、何事か念じるような仕草に、没入していった。見つめるルミの前でセツの肌を汗が糸を引いた。苦しそうである。入口の辺りでカチリと音がした。ホッとした態度でセツが目を開いた。

「外れたわ」

「どうしたの」

「いいの。それより私に構わないで、縄抜けをするのよ。きっと帰ってね。私はもうこれまでよ。さようならルミ」

「あ、待って」

かっと思開いたセツの目に鋭い光が差し、次の瞬間、ガックリと全身から力が落ちた。

「セツ——」

AR組織員は独得の方法で、必ず口中に自殺用のカプセルを仕込んでいた。勿論、間違えてカプセルが破れることのないよう、二重三重の安全装置がかかっているが、いざと云う時には手を使わずに目的を果すことが出来る。みるみる血の気を失って行くセツの体は美しかった。髪だけで吊られていても、手足を縛られていても、いたましく体中に鞭跡



が残っていても神々しい程の美しさだった。ルミは一瞬身動きもしなかった。閉じる事の出来ない瞳から涙がとめどもなく流れた。だが、それも束の間、自分の任務を思い起すと、猛然と、だが細心の注意を払って、この吸着性の縄ととり組み、縄抜けを始めた。

「よく帰った」

A R組織の一室。中央のベッドにルミが寝かされ、手当てを受けている。

「新式縄と、古式の拷問とはなあ」

ルミには、チロがずっと付添っていた。

「敵もいろいろと、考えている。負けてはならん。必ずや倒さねば」

「すみません、命令以外の事に手を出して」  
今度の命令は、チロを助け出すことだけだったはずだ。

「今回は見逃そう。良い土産があったから。」

連絡をとらねば」

「私に、是非」

ルミが、はね起きた。

「いや、よい。同志はすでに潜入している」

「え？」

「奴隷としてナ。まだ子供だが、しっかりして居る」

「何処ですか」

「ギローという男の家だ」

「あっ」

ルミの横に居た妹の表情が変わった。

「どうしたの」

「私の居た所」

「えっ」

「どんな男だ」

「残酷な男です。随分いじめられました」

一瞬、いたいけな少女の悩中に今迄のいま

わしい経験が走馬灯のようにかけめぐった。

「それにブルーを完全にレッドの支配下におこうとしている主謀者の一人です」

「よし、まず、その男を倒そう」

「私は」

「しばらく休養しているように。最後の時には嫌でも手伝ってもらわねばならない」

レッド・ゾーンには、男女の区別はなかった。社会的地位は勿論、労働についても男女は平等に扱われていた。レッドにおいては男女間の恋愛等考えられなかった。女性も男性も夫々の魅力に欠けていることも原因の一つに違いなかった。体格から云っても、殆ど変わりがないようになってしまっていた。ここ何

百年かの間に男女が互に歩み寄って来たような感さえするのだ。ただ女性の方が、ほんの少し脂肪層が厚いと見える程度なのが差と云えるのかもしれない。

子孫の保存は百%奴隷に頼られていた。今やレッドの人間にとって、愛情などというものは過去のものとなってしまったようだ。

「アプ、苦しいか」

言葉に反して、ギローの顔には楽しげな表情が浮かんでいた。

買ったばかりの奴隷をつれて、ギローが帰宅してみると、チロの姿は拘束具から消えてしまっていた。もともと短気のギローは、怒りにまかせて、早速残っていたアプという奴隷と、買ったばかりの奴隷プチを苛責し始めた。

プチを後手に縛り、その縄を天井の滑車にかけてアプの両手首に結びつけた。プチは床から一米余りも吊り上げられ、その体重でアプは辛うじて爪先が床につくだけだ。プチは正体を明かせばA R組織員だから、これ位の責め苦は何とも思わないが、表情は苦しみに歪ませ、うめき声さえ洩らしてみせていた。

しかし、アプはそんな経験は全くない。今迄にもギローに責められたことはあったが、



おとなしいアプは、せいぜい素肌をくびり上げて縛られることくらいだった。今度のような責め苦は初めてだ。全体重が手首の縄にかり、ちぎれるように痛い。さらに思い切り伸ばされた脇腹や、ふくらはぎもひりひり痛む。アプは口を開け、全身であえぎ、うめいた。

「苦しければ云え。誰だ？ チロをつれ出したのは。いいか、お前だけを残して行った奴だぜ。お前はブルーの奴から見捨てられたのだ。いえよ。A Rの奴か」

「だ、だれか知りません。暗くて何も見え、ヒューッ」

アプの白い背中に赤い筋が一本走った。

「云いたくなければ云わなくてもよい。きっとそのうちに云いたくなるだろう」

もとよりギローは、アプが何か知っているだろう等とは思っていなかった。唯、おとなしいアプをいじめる口実が出来たのを喜んでいるのだ。

実際、アプ程扱い易い奴隷はいなかった。

ギローは、極く小さな事でも失敗としてみたのだが、それでも、ほんの数回、簡単に縛る口実を見つけただけだった。従ってチロの脱走は又とない機会なのだ。アプは柔い、男心

をサディスティックにかきたてる肢体を持っていた。少ない機会ではあったが、縛る度にギローはその美しさに感心していたのだ。

その後アプに加えられた拷問は、言語に絶するものだった。プチは両手足を拡げたまま壁に縛りつけられて、その一部始終を目撃した。A Rでの拷問訓練は本格的に行なわれていたが、こんなに女の弱点ばかりを狙って責める場合の訓練は少なかった。いや、目的が違うので思い及ばなかったのだろう。何時間かたって、拷問が終わった時、アプの体は無残なものになっていた。白く柔い肌は一面に腫れ上り、出血や、内出血の跡も数知れなかった。手首、足首、二の腕、太ももにはくつきりと縄目の跡が何重にも残っていた。小さいながらも形の良い乳房は歪み、片方の蕾は真赤になっていた。アプはとうとう何も白状しなかった。いや、云えなかったのだ。疲れきって眠っている最中のこと、夢のように、チロが助け出されたのは、幻としか思えないのだ。一度、レッドにつかまって奴隷にされたものは、一生逃れることは出来ないと思じ込んでいたアプだから、目の前で、いとも簡単にチロが助け出されるのを信じられないのは無理もないことだった。

「すっかりして。大丈夫？」

気がついたのは、見慣れた奴隷部屋の中でだった。鎖が耳元で鳴り自分の頭が抱き起されていた。

「プ、プチとか云ったわね」

「そうよ、ここでの名前はプチ。それよりどう？ 大丈夫」

「痛いわ。体中が燃えてるみたい」

「一寸待ってね」

プチの手と足の鎖が鳴ると、同時に、アプは自分の手足が、全く自由になったのを知った。レッドに来てから初めてのことだ。軽くて手錠、重くなると、がんじがらめに縛られたり鋸状枷をかけられたりした。鋸状枷は肌に当たる部分が、ギザギザになっていて少しでも動けば肌身に喰い込んでくる。しかも、動けば段々締めてくる。これを脚にはめられると十米とは歩けないのが普通だった。

アプは全く自由な今が信じ難かった。思い切り手足を伸ばしてみた。先程の責めで痛めつけられた体が、ギシギシと、鳴るようだった。改めて見ると、自分の体が無気味な程傷めつけられていた。今迄、肌の美しい事を他人にもほめられ、自分でも誇りに思っていたアプだった。白く、肌理の細かい肌、適度に



艶があり、それに処女特有の艶消しがかかって、清純な美しさを充分に発揮していた。その肌が、無事な所を探すのがむずかしいくらい無残に傷ついているのだ。

「痛むでしょう」

プチが持つて来てくれた水で、やっと心地がついた。

「いつもこんな」

「いつもじゃないわ。もっとも、逃げたチロなんか毎日責められていたわ。何でも反抗するからなのよ」

「ひどいの？」

「ひどいわ。チロなんて、毎日毎日血みどろになってここへ帰って来るの。その上、鋸状枷でしょう。休めもしないのよ。主人のギロ―は、誰かを毎日責めなくちゃ、気がすまないらしいのよ。チロが逃げたから、今度は貴女か、私よ」

「いつ迄もこんな事は続かないわよ。今にきつと自由になれる」

「私も初めはそう思ったわ。だけど、もう今は希望も捨てたわ。私達は人間じゃないの。一生奴隷なのよ。誰か、オール・マイティの力を持つ人が現われて、助けてくれでもしなければ」

「駄目よ、いつ迄も希望だけは持つてなければ。さあ、もう休みましょう」

疲れ切ったアプは、横になるとすぐ軽い寝息を立て始めた。傷だらけの若い肢体が痛々しかった。熟睡した事を確かめたプチは、不自由な手を耳の後にやった。隠された送受信器が働き始めた。

「報告、七二号、すべて青、すべて青、すべて青」

「どうぞ」

「主謀者ギローについての報告。現段階ではレッドの……」

ルミにとっては永遠とも云える日時が流れた。妹も一緒になって訓練を受けた。実技ではとても姉にかなわないが、テレパシーについては驚く程の進歩を見せた。ルミの方も負けないように努力した結果、レッドの拷問に対する全面的な自信を持つようになった。レッドの新式本格的拷問を味わった唯一人という事で、ルミは数々の訓練についてアドバイスを求められた。三角木馬の上でもだえる妹の姿を見ても、初め程、心を動かされることはなくなつた。痛みと同じくらいの苦痛効果をもつかゆみ等にも、耐えられるようになって

た。勿論格闘技等にも長足の進歩を見せた。「まだまだ悲鳴を挙げちゃ駄目よ」

ルミは妹に格闘技を教えながら、妹を押え込み、右手を背にねじ上げていた。

「ほら、早く返さないと縛られるわよ」

むき出しになった若々しい手足に汗が光っている。ルミは一寸、力を抜いた。

「えい」

必死の返し技が決って、ルミは逆に押え込まれると両手を背にねじ上げられ、またたき間に縛り上げられた。

「そうよ、随分上手になったわ」

ルミは、足を縛っている妹に声をかけた。

「どうする、拷問迄する？」

「いいようにして」

その時だった。部屋中のライトが、赤に変わり点滅を始めた。

「非常召集よ」

云うが早いか、ルミは手足の縄を解いて立ち上った。

二人がその部屋にかけ込んだ時、もうすでに相当数の人員が顔を並べていた。全員が集まるのに五分とはかからなかった。ある者は手足に縄目や鞭の跡をつけ、又、ある者は殆ど全裸のままだった。訓練半ばと、ひと目で



判る。

「その日が来た」

部屋に緊張が流れた。

「レッドの上部組織がすべて判った」

部屋の電気が消え、一方の壁が明るくなり家系図のような系統図が与し出された。

「ここ迄を叩くのだ。今から役割を命ずる。

暗殺には二人が一組になって行なわれる。十二人のレッドに対して二十四人のAR員が配置された。それ以外に補助が二人ずつ、これは刺客者二人が仕事をし易いように助け、ブルーの奴隷がみつければ、これを助け出す。

これが四十八人。残りはブルーを迫害する各施設例えば調教室、懲罪室、拷問室等々の破壊に当ることになった。実行は一時間後、それ迄にレッド・ゾーンに侵入し、ただちに実行出来るような場所につく。暗殺は出来るだけ静かに、他のレッドの住人達に気付かれないうようにする。一度レッドをブルーの支配下に置くが、最終目的はレッドとブルーを対等の立場に置くことである。占領でも、侵略でもない。その事を忘れるな」

組織員はその他色々と注意を受けた後、それぞれの目的に合った武器を身につけた。ルミは121号と呼ばれる少女と組んで、暗殺

の組。ルミの妹は、他の一人とその補助員となった。このチームの責任者はルミ。

用意の整った者から、順次静かに、戸外の闇にのみ込まれて行った。ルミ達も続いた。

境に仕掛けられた精神障害を越え、殆ど影のないレッド・ゾーンに踏み込んだ。用心深く進みながら、ふとルミは妹の横顔に目をついた。まだあどけないその顔には複雑な表情が浮かんでいた。恐らく、いまわしい想い出に悩まされている事だろう。だが、ルミはその奥に固い決心を認めてほっとした。

目的の家は街の一番奥まった所にあった。ギローの家の前を通り過ぎる時、ルミと妹の心に一瞬苦い記憶がよみがえったが、現在その中で、どのような地獄絵が展開されているかは知るよしもなかった。

プチは手足を鋸状枷に止められて横になっていた。AR組織がすでに行動を起していることは知っていた。自分の任務はすでに終わった。後はどうなっても構わない。今度の行動は必ず成功するだろう。勿論、少なからぬ被害はあるだろう。しかし未来の明るさに比べれば、とるに足らないものだ。プチは満足し切っていた。

だが、その時アップは、主人の残酷な責めにあえいでいたのだ。後手に縛り上げられたアップの胸許に、冷く鋭い金具が噛みついていて、まだ幼いふくらみは蕾も半ば埋もれていた。その敏感な蕾に、金具が無残に噛みついた時、アップは可憐な顔を歪めてわめいた。余りにも激しい痛みだった。

「痛い、まだまだだ」

「ギャー」

アップはのけぞった。柔い体に縄目が深々と喰い込んだ。噛みついた金具を通った電流が体中をかきむしる。強く弱く、切ったり繋いだり。アップの白い体は充血し、苦汗を滴らした。段々、意識が遠のいて行く、もう縄目の痛みも感じなかった。何となく体がしびれてむしろ気持ち良くなってくるようだ。自分を責める男の顔がかすみ、そのかすれて行く視線の中で何かがグルグル回転を始め、倒れて行ったのも、手足の縛しめが解かれたのも、まるで夢のようにしか、感じられなかった。

ルミの組は、目的の家に達していた。どうやら嚴重な防禦設備があるらしい。

合図して、補助員の一人が、足を踏み出した。ドアの鍵は難なく外れた。しかし、一步



踏み込んだとたんに、その補助員は声もなく崩れた。

「危い」

ルミが、手を出そうとした妹を、テレパシ―で制した。

「自動噴射毒液よ」

倒れたのは女のような表情の少年だった。

三人は彼の屍をふみ越えた。一步一步が緊張の連続だ。

「この奥よ」

妹が踏み込み、121号が続いた。

「ギャーッ」

ボタンという音と共に二人の姿が消えた。

先頭の少女は首を吊られて宙にもがき、121号は踏み出す床を失なって闇に消えて行った。だがルミは、とっさにその上を飛び越えて寝台の横に立っていた。手には鋭く光るものが握られていた。

ガチャン。

物も云わずに毒針をつき出したルミは、金属音と同時にね上るように宙に浮いた。

「ほう、にぎやかな御来だな」

寝台の男はゆっくりと立ち上った。ルミは両手首を金属製の枷につかまれて高々と吊られていた。

「おや、美しい娘さん。これは素晴らしい奴隷だな、顔と同じように体も美しいと良いのだが」

鋭く空を切る音がしてルミは宙で跳ねた。いつ手にしたのか男の鞭がルミの服を大きく切り裂いていた。下から白い肌がなまめかしくのぞく。

「これは素晴らしいようだな」

次々と鞭音が続いた。特殊な衣服ではあるが、男の鞭もまた、特殊なものであるらしかった。ルミは、たちまち覆う物のない姿にされてしまった。白い肌一面に赤い鞭跡がみみず腫れになり、大半は血が赤い筋を引いていた。

「ぜい肉もない」

男の手は宙にもがく獲物に伸びた。

「脹りも充分」

ルミの体が下げられたが、爪先はまだ床に届かない。男の勝ち誇った傲慢な顔がルミの肌に近々と寄って来た。

ルミは体中を紅潮させた。男の手が顎に掛けて、顔が正面に捻じ向けられた。

「顔立ちも可愛いな」

男の顔は、ルミの顔のすぐ前にあった。それ迄目を閉じていたルミだが、急に目を開く

と、唇をとがらせた。

「うわッ」

男は急に顔を抱えこむようにして倒れた。

「くくく」

もがいたのはほんの一瞬だった。そのままの恰好で男の体は冷えて行った。

組織員が唯一本、完全に追いつめられた時にだけ、使用を許される毒針が効を奏したのだ。男が倒れたはずみで、ルミの体は又高々と引き上げられた。脇腹がはり裂けそうに痛む。ルミの視線には哀れな妹の姿が写る。121号は微動もしない、落ちた瞬間に息の根を止められたものだろう。

だが、ルミの心は、自分の哀れな姿とはうらはらに晴れ晴れとしていた。

仲間のテレパシ―で今日の行動が成功した事を知ったからだ。

もちろん少なからぬ犠牲はあった。だが今日からはレッドもブルーもないのだ。あるのは一つ、人間の世界だ。対等の人格を有する人間が共に営む社会なのだ。

吊られる苦痛に、いつしかルミの腋の下も冷汗でべっとりとぬれていた。

(完)



## 逆吊幻想奇譚

妖よう逆さか記き

秤

蕩

也

1

彼女は映画スターだった。もちろん、映画スターといったってピンからキリまである。

ある映画ファンに言わせると、彼女は、「別に、フェイスがいいとか、スタイルがいいとかいうのでもなし……」

「デビューしてから五年にもなろうとしているのに、まだお尻に殻がくっついていていようなことを、わざと言ってるカマトト女優」

「いつまで経たっても『ダイコン』の域から抜け出せないでいる女優……」

ということになっていた。

なるほど、そうかも知れない。

が、その彼女の所属する映画会社のほうに言わせると――

彼女はそれほどのカマトトではなく、むしろ最近の女優にはめずらしい、純真さといったものを持っている。それに、自分の演技はまだまだ未熟だということもよく知っているし、これからもっともっと勉強しなければならぬという気持も充分で、その証左には、出演したときにはすべてを補うような情熱と体当りで演技している。



たとえば、どのような——大概の女優なら怖気をふるって尻込みしそうな役柄でも、嫌な表情ひとつしなないで引き受けるばかりか、後から入社して来たチンピラ女優の代演……女優ならだれも、絶対にこれだけはしたがないという後輩のスタンド・インさえ、気易くつとめてくれるのだ。

それも、そのような場面<sup>シーン</sup>に選ばれて代演できるといことが、何か「誇り」でもあるかのように、ある種の意気込みさえもってカメラの前に立ってくれる。というのだから、会社としては彼女あたりこそが、言わば「重宝な存在」なのだと思ったのも無理はなからう。

一線女優などには大体専門のスタンド・イン女優もついているらしいが、大きく言えば彼女など、その会社の「お抱え」スタンド・イン女優みたいなものだったかも知れない。折りしも映画界は「忍者映画」のブームであつた。

彼女の会社も、やや遅まきの感ながらもそのブームに便乗して、一連の忍者映画を企画し製作することになった。ともかく、脚本の出来あがった作品からクラנק・インしようというのである。他の会社が何か一本大当り

すると、見栄も体裁もなく、類似品を作つてその大当りの恩恵にあやかうとするのは、彼女の会社とて例外ではなかったから、話は早いものである。

ところで、忍者映画だといっても、昔のそれのように、ドンパツパ！と調子がいいばかりでは現今の観客はついてこない。

なんといっても現在は、オール科学時代であるということだけは確<sup>しか</sup>とキモに銘じて、忍者映画たりとも至極リアルに、そしてマジメに撮らなくちゃならない。

またそれに加えて、いまや残酷ムードの横溢だ。

だから自然、その忍者映画の見せ場の撮影ともなると、スタジオ——またはロケ地そのものが、非現実な、そのくせ妙に現実味なところもある、悲惨な「世界」と一変するのである。監督以下スタッフ連までが、まるでイッパシの忍者みたいな眼つきになって、走り廻りだすのである。

さて彼女は——

このような忍者映画が相ついでクラנק・インしたことによって、急に『多忙な女優』たちの仲間入りとなった。

なんでも引き受けてくれるということが貴

重視されて大いに売れ？ 始めたのである。早替りよろしく、女忍者のチヨイ役を掛けもちしたり女主人公<sup>ヒロイン</sup>のスタンド・インをつとめたり……

つまり昨日は隠し持った毒を呷って自害し果てたかと思うと、今朝は密書片手にザツクバランと斬りさげられ、午後は敵方忍者に追いつめられて絶壁にへばりつく。かと思えば昔の拷問図絵そのままに、敵方に捕えられがんじがらめに縛りあげられて「言語に絶する」責めを受けるヒロインの代役をして、遠カメラのまま、あえ無くコロリと御佗仏してしまう。

言うなれば、毎日が危機一髪、噴死の連続だったのである。

おかげで全身これ痣や傷だらけ。だが、このような「無惨なる忙しさ」にも彼女は泣き言ひとつ洩らさなかった。例のごとく「誇り」をもって、それら難役を体当り演技でやってのけるのだった。

「ねえきみ、昨日につづいて今日もひどい責め場の撮影だ……大丈夫なのかい」セットの隅で、太股のかすり傷へしきりに軟膏薬をなすりつけている彼女を見掛けて、助監督が訊ねる。



「あら、大丈夫よ！」

腰に荒縄を巻き、ツンツルテンのやぶれ衣裳を着た彼女が、かつらのザンバラ髪をふりたてて、ニッコリ微笑う。

「と言っても、今日はロング・シーンを一カ  
ツトで終るらしいから無理する程のことはな  
いと思う。何ならだれか他の人に演<sup>や</sup>ってもら  
えるよう話してやろうか？」

人の優しいので通っている助監督は言う。  
すると、

「あら、そんなこと。……あたしなんかの分  
際で、そんなこと……。監督さんが聞いたら  
それこそ怒鳴られてしまうわ」

「でも」

「オホホ……大丈夫なのよ、あたしは。どう  
ぞ、ご心配なく」

いつもの通り、いたって意気軒昂だったと  
いう次第。

## 2

その日、珍らしく？ も彼女の出演予定は  
なかった。

「我が家」である自動車工場裏の、小さな廃  
工場に並んだ駄菓子屋の二階で、久しぶりの  
休養をたのしんでいた。

いや、

(……朝の美容体操はすませたし)

(……新聞はもう三回も読み直したし)

(階下のおばあさんは、昨夜から息子さんの  
処へ泊りがてら遊びに行つて、話し相手も居  
ないことだし……)

退屈しきっていた。

花形女優ならこんなときなど、その隙をみ  
て駆けつけて来る芸能部記者などの応対で、  
さぞ忙しくて退屈なんてものじゃないだろう  
けど、たかが端役女優では、何か話題がなけ  
れば呼んだって来てくれやしない。

ふと、

(こんな時こそ、あの男でも来てくれたら……  
……)

と空頼みもしてみたが、なにぶんとあ  
の男ときたら、気の利かないことこの上ない。  
オヨビでないときは、塩ぶっかけてやりたい  
程に足繁くやっても来るくせに、こんなとき  
には電報でも打つかしなきゃ、こちらを向い  
てやって来ないときている。

(——いまごろは、また何処かの女にしゃぶ  
りついて、あの間のびした顔を余計に間のび  
させているんだわ、きつと！)

彼女は、舌打ちして、四度目の読みかえし

をしかけた新聞を叩きつけると、ムックリと  
上半身を起した。

もう相当に古くなっているベッドが、彼女  
のボリュームに異様な悲鳴をあげる。それに  
対して再び大げさな舌打ちをすると、彼女は  
ベッドを降りて窓辺に行き、久方ぶりにピン  
ク色したカーテンをはねのけた。

染みだらけのコンクリート塀の向うに自動  
車工場の寮の窓が見える。以前、よく其処に  
モノ欲しそうな眼つきをした修理工などの顔  
を見掛けたので、近ごろはずっとカーテンを  
閉めたきりの状態だったのだ。

彼女は、これもまたピンク色したネグリジ  
エの胸もとを押さえると、ちょっと様子を窺  
う瞳<sup>め</sup>をしてから窓を開けた。

平日だというのに、自動車工場からも左程  
の音は聞こえず、静かだった。むろん此の静  
けさと両隣りの閑散さが気に入ったから、  
彼女はこの二階を借りたのだが——

「ちえッ、曇っているのか……」

昨夜から電気スタンドをつけっ放したまま  
にしているのでわからなかったが、細長く見  
える真上の空間は、どんよりと濁った色をし  
ていた。

といって、今日の彼女には天気のことなん



かどうだろうと関係ない筈だった。これから遊びにでも出掛けるなんて気持は、全然なかったのだから。

「フン！」

彼女は深呼吸をするつもりだったのもやめて、窓を閉めてしまった。

そしてなにやらハミングしながら、一方の壁にベタベタ貼りつけてある外国女優のフォトの前に立ち、そのポーズを片端から真似しはじめた。見本にはほど遠いかも知れないスタイルだが、なかなか肉感的なその肢体がハミングと共にしばし揺らぎつづけた。

そのとき、ふと、階下のあたりで音のしているのに気がついた。

耳を澄ませると、だれかが表の戸を叩いている音らしい。彼女は鼻をひとつすすりあげて階段のところまで行き、

「どなたア——」

とさけんだ。さけんでから、いつもならこんな時には知らん顔をしているのだけど、と苦笑を浮かべた。

「俺だア！」

今度は、表のほうの窓の下あたりで、遠慮のない大声がした。

（あ、あいつが来た……）

ちょっと眼が丸くなり、その口唇もとがほころびた。

（でも、なにを間違えていま時分やって来たのかしら？——）

するとまた、

「こらア、何をしてるんだア」

声が一層大きくなった。

（まあ、あんなことを言って……あたしが何をしようとか大きなお世話だわ。なにさ、まるで亭主が家に戻って来たときのような口を利いてさ）

しかし、彼女の口唇もとは、依然としてほころびたままだった。

階段を降りて行って、わざとゆっくりと表戸を開けてやると、

「ちっとは手早くするもんだ」

相変らずの間のびした顔で、悠然と男が入ってきた。

「なによ、いまごろ」

「ははん、お前まだ寝ていたのかア。——とところで今日は婆さん居ないらしいな？」

「いまごろいったいなにににに来たの、とあたしは、訊いてるのよ」

「ま、そういうな……」

男は、キザっぽい手付きでネクタイをゆる

めながら、わが住居のような顔をして先に上がって行った。そして彼女の部屋の中をひと目するなり、

「キャア、なんとまた遠慮もなく、派手に散らかしてやがるな」

自分のほうが余っぽど不遠慮に派手な声を張りあげた。

「いやよ、此処へ来て変な声ださないでちょうだい！」

男の脇をするりと抜けて、ベッドの端っこへ腰をおろすと、彼女は、なによ、とばかりに唇をとんがらせて言った。

「——？ 機嫌がわるいんだな」

肩をすくめてみせると、彼も彼女にならってベッドに腰をおろした。

「悪くもなるじゃないの」

「どうして」

「あのネ、いいこと。わたしはネ、これからゆっくりと寝て、明日のお仕事の勉強でもしようかと思っていたのよ」

「嘘つけ、その顔はこれから勉強しようかというような顔じゃないぜ」

「——ねえ、何の用で来たのよ」

「くだいなお前さんは。そんなこと、俺に何べんも訊くもンじゃねえ」



「あら、どうして」

「どうしてって……その、何か用事でもなければ来られないって言うような、そんなお前さんと俺の仲じゃない筈……」

「なに言ってるのよ、バカ。どうせ今まで何処かの女の胸にでも噛じりついていたんでしょに。——ハハンわかった。今日は、その女にお暇を出されたものだから、仕様ことなしにこちらへ廻って来たんだ。ね？　そうでしょう」

彼女は男の横顔をにらみつけた。男は、軽薄な笑いを浮かべると不意に跳びのいた。どうやら彼女に太股あたりをつねられるとでも思ったらしい。

## 3

「あ、そうだ。昨日、お前の出演<sup>で</sup>している映画を観てきたぜ！」

やがて彼は、思い出したように言って、また彼女のほうへにじり寄ってきた。

「まあ、なんて人だろう。もう、呆<sup>とぼ</sup>けているわ……」

「いやいや、まったくあの映画、凄いシーンの連続だったなア」

「フン」

「まあ聞け。その、くの一忍者のお前がさ、あのなんとか言ったな、そうそう悪党忍者の頭で無顔十平太、その野郎に襖ごとバツサリ斬られ、ギャー！と一声のこして死んじまう。

さあそれからが大変で、その死体の腹にブスリと忍者刀を突き差したかと思うと、ザバ！とひと断ち。斬られた瞬間、呑みこんでしまった密書をつかみ出すって場面だ」

「あらなによ、その眼つき。なにもそんな眼つきであたしを見ないでも、あれはただ映画のトリックで……」

「わかつとる、わかつとる。ところで、もう一本の映画だけど、あれも凄かったなあ」

「アレ、そのほかにも観たの？」

「なに言ってるんだ。お前の映画は、これでも俺は残らずみているつもりだぜ」

「もの好きね、あんたったら」

「もの好きってことはないだろう。これ程お前さんに逢いたがってる俺を放ったらかして撮っている映画だもん、どのように大熱演しているものやら、チーッとはのぞいてみたくもなるってモンじゃねえか」

「信じられないわね」

「なにが？」

「だって、あんたの坐ってた隣りの席には、

現在お手付き中の女がよりかかるようにして……スクリーンにあたしが映ると、アラあの女があんたの昔の恋人なの。ふうん、大したことないわね、とか何とか」

「きい——。お前って女は、なんてまあ感ぐり屋なんだろ。俺は呆れてひっくり返ってコンコンチキだ！」

男は両手をひろげると、大げさに後へひっくりかえってみせた。

「フン、そんな呆け方してもだめよ」

女は跳ねあがった男の足を、バシッと叩いて唇をゆがめてみせた。と、

「あれ、なにすんのよ！」

いま足を叩いた手で、今度は手を払いのけていた。

「油断もスキもありゃしない。工合が悪くなるとすぐにこれだから……」

男は、もうすこしでというところをみごとに払いのけられて、今度は寝ころんだまま喋り始めた。

「さて、もう一本の映画の事だけどネお前さん。ありや面白いには違いなかったが、少々まずかったとも俺は思うんだ。もちろんお前の出た場面のことだがね……」

「まずいって、どの映画のこと？」



いづどこへ伸びてくるかわからない男の手に、神経を使っていた彼女は、ついつりこまれて、言った。

「うん。お前の女忍者がさ、敵方の、ソレ、栄養失調みたいな顔した家老——につかまって、白状しねえかって散々に責めたてられるじゃねえか」

「あたしの役は、たいてい同じような役だからどの映画のことかわかんないわ」

「お前が、さ。後手に縛られ、戸板の前に立たされ……足をひろげさせられて、その足の間を、若侍にビュンビュン矢を射られるじゃねえかよ」

「ああ……あれのこと」

「そうさ」

「で、それが何故まずいのよ」

「矢と、若侍と、お前がパッパッと代りばんこに映るじゃねえか」

「それで？」

「勘定はしなかったけどさ、そのお前さんの姿が映るたびに、縛ってある縄の工合がまるっきり違っているんだな、これが」

「ふうん、そうだったかしら」

「それに、最後にはお前、舌を噛み切って死んじゃうだろう。——さあ、その場面がいち

ばんまずい。立ったまま死んでいって、仲々

壮烈だった場面……と斯う言いたいところだが、なんと縛られている縄がふにゃふにゃにゆるんでいて、ズリ落ちるのをとめるのに、苦勞するだろうと思ったよ、全くのはなしがさ。観ていると、あんな頼りない縛られ方をしているのなら、舌を噛んでる間に、早く吹っつんで逃げればいいのに、と思ってアホらしくなってしまった。折角の見せ場だったのに、あれで、みんなオジャンさ」

「……あんだ、アラ探し専門なのね」

「でもないんだけど——それに俺に言わせると、なにもあの映画ばかりじゃない。他の映画でもお前の縛られシーンだけは、もうひとつピーンと来ねえ。つまり被縛感が無えんだな」

「ヒバク？」

「そうさ、被縛さ。で、俺はもうちょっと何とかならねえかと思うんだ。そのお前の縛られ方……」

「じゃ、どういう風にあたしが縛られたらいいっていうのよ、あんだは」

「それはだな、つまり……」

「明日もあたし、また縛られて拷問されるシーン撮られるのよ。後学のためだわ、ぜひ

聞かして」

「き、聞いてもこんな事は、わかんねえんじやねえか？ 実際にさ——やってみるなりして覚えなきゃあ」

「ふふ、殺陣師<sup>たて</sup>じゃなくて、縄師ね。じゃいわ、やってみてよ。あたしをこれから縛って教えてよ。どうせ今日は、もう彼女との約束はないんでしょからネ」

「ちえ、まだ言ってるやがる！——でも、階下の婆さん、もう帰って来る頃じゃないのかい？」

「二、三日泊って来ると言ってたから、今日は帰って来ないわ。あのお婆ちゃんたら、こんな場所で商売がサッパリなので此の頃は出掛けてばかりしてるの、元気なのね。でも、考えてみると本当にいいお婆ちゃんよ」

「……」

「この前もね、あたしに此のお家を買取ってくれないかって。五年もいるあたしの事だから、大安売りしてやるって」

「バカ。此んな家は映画スターの住む家じゃねえ」

「ではあんだ、あんだがいま住んでいるマンションにあたしを引き取ってくれる？——ソラ駄目でしょう。そりゃあたしだって、右隣



りが留守がちのお家、左隣りが潰れた工場、前が土建屋の砂利置場でしよう、いくら静かなのがいいと言っても、ひとり住いになってしまふとなると……」

「おい——さっきの話は、一体どうなったんだよ」

「え？ さっきの話？」

「——そうだよ」

「ああ、そうか。あたしがこれから、縛られ方を教えて貰うって話ね」

「ちえ、ヤンなっちゃうな、まったく。いつもこれだから——」

界は、顔をつるりと撫でて、ぼやいた。

女はキョロキョロとあたりを見廻した。

何か、縛られる紐は見当らないかと——

## 4

さて。

幾本かの忍者映画に端役出演しているうちに、彼女はそのような映画の「責めシーン」には、なんだか不可欠な女優だとさえ思われるようになっていた。

ファンとは有難いもので、責めシーンのある映画に彼女が出演していると、よろこんで観に来てくれる。また逆に、ポスターなどに

彼女の名があると、これはきっと凄い責め場のある映画なのかも知れない、と思って駆けつけて来てくれるのだ。

その意味では、もう彼女は今までのような「無名女優」ではなくなっていた。

それらは——今まで大根女優のレッテルを貼られてきた彼女が、いったん縛られ責められるシーンに登場したとなると、まるで人が違ったような「被縛の名演技」？ でファンに大いに応えてくれるからだった。

特に、その被縛シーンにおけるクライマックスには、なにかしら凄絶感すら通り越した言いも得ぬ——「極美」感すら覚えさせてくれるのだ。これは、映画のみが持つ作用に掛かっているのかも知れないが、ともかく従来の「縛られ」女優などにはなかったことでもある。

斯うなるとファンはもう、主人公忍者などの活躍ぶりよりも、彼女のその責められシーンだけを観るために、映画館へ足を運んでいくようなものであった。

だから彼女が出演する映画ポスターともなると、少々他のものとは違ってきたりする。

主人公の忍者役俳優なんか、ポスターの片隅のほうにチヨコンと……まあある程度い

いカッコして載るだけで、あとの紙面は、全部彼女の悲惨な縛られポーズが占めてしまうのである。題字すら遠慮したみたいに片寄って載ってしまう。そしてこのポスターを見たファンが、またまた胸を躍らせながら映画館へと駆けつける——

映画会社にしても、この予像外だった人気にすっかり気を良くして、すぐさま彼女の出演場面を増やしたりする。彼女を責めるシーンを増やしたりすることぐらい、お安いご用とでも言わねばならず、またそれでファンを掴んでいけるというのだから、恵比須顔になるのも無理ない話だ。

——というわけで、最近の彼女は、毎日撮影所へ出掛けては「手を替え品を替え」た責め役に、『痛め』つけられ、『絶叫』させられ、『悶絶』させられているといった次第だった。

そこで彼女の私生活——つまりプライベートのことなのだが。

彼女は、最近の自分の、その「名演技」ぶりには、なにもあの男に——あの、時「手ほどき」を受けた故<sup>せい</sup>だけのものではない、と思っていた。あの時の男の辛辣な縄批評？ が、



ある程度彼女を「発奮させてくれたことぐら  
いは認めるが、なにも、すべてが、あの男に  
よってのみ開眼させられた「名演技」ではな  
いと信じていた。

（やはりこれは……今まであたし自身にもわ  
からなかったものが、これらの映画で、カメ  
ラによって露わにされたというだけのことな  
んだわ……）

それがただ単に演技といえるものなのか、  
それとも、自分自身で気づかなかったが、心  
奥にあった、「本来の秘やかなる願望からき  
た」陶醉感によって得たものなのか、その点  
は彼女自身ちょっと不明確だったが、ともか  
く彼女は、この「名演技」に関してだけは、  
あの男に変な恩義なんか感じたくなかった  
のであった。

しかし、これらは、彼女の日頃からの彼に  
対する観念からきた、一種の自誇意識でしか  
ないのかも知れない。その意識の底にあるの  
は、毎日のように縛られているうちに、その  
ことが、それこそ心奥で異妙な欲びの芽を育  
てはじめていて、それを自分自身、どのよう  
にして説明すればいいのかわからない、とい  
うことであった。

男は、相変らず現在も、浮気に夢中になっ

ている。

十日に一度、いや半月に一度、彼女の処へ  
やって来たらまだいいほうなのだが、それで  
も訪ねて来たときには、階下のお婆さんを気  
にしながらも、

「また新しい縛り方と責め方を考えてきたか  
ら、教えてやるぜ。明日、撮影所で監督にで  
も教えてやればいいさ……」

とかなんとか言いながら彼女を縛ったりす  
る。そして何だかよくわからないが、一くさ  
りの「縄談義」とやらをやらかすようになって  
いた。

どうせこんなこと、彼女の処を偶々<sup>たま</sup>かに訪  
れたことが、内心照れくさくなってやってい  
るのだろうと思っただけだが、ここで不思議  
なことには、数度彼に縛られたりしているう  
ちに、此の「縄談義」ひっさげての彼の来訪  
を、いつしかツイ心待ちにしている、といっ  
た今日このごろであったのも事実である。

撮影所へ行けば、毎日のように縛られたり  
苛められたりするシーンを撮っている。家に  
帰って来た時ぐらいいは「縄目」から解放され  
て、自由に手足を伸ばしていたものだ。と  
ころが、あの男に、縛られ曳きずり廻され、  
談義よろしく足蹴にされたり、踏みにじられ

たりしていると、それは映画のことなどから  
一切離れた……例の陶醉感が、ハッキリ『欲  
び』となって身内を駆けめぐ……。

男には映画に関する恩義なんか感じたくな  
い。でも男に毎夜でもいいから縛られたい、  
責められたい——言ってみれば自己的でしか  
なかったが、結局これとて彼女自身、どうす  
ることもできないのだ。ただその『欲び』の  
ためだけに、男への今までとは全然違った、  
新たな意識が日毎につのってきていることだ  
けは、わかっていた。

だが、過去に男の来訪が執拗に思えて、ス  
ゲなくした実績がある。いまさら、  
「もっと、あたしに逢いに来て——」

などとは言にくい。まして縛ってもらい  
たいから、ウンと苛めてほしいから来て、な  
どとは言いがたい。

——彼女は、彼が来るといつも縛りに用い  
ている細引の輪をにらみつけて、溜息ばかり  
をついていた——

## 5

ちようど、そんなころ。

忍者物の決定版とか称して、「不可欠」女  
優の彼女の出演シーンを、例によって見せ場



とした映画が製作に入った。

が、その時の若い監督がすごく気負って、「——今度はひとつ、みんながアッと驚くような、忍法をからませた縛り吊りシーンを撮ろうじゃないか」

と言いだした。

もともとこの若い監督は、時折りこのような思いつきを発言して、撮影現場の連中を煙に巻く癖があるものだから、この時もスタッフの一人が、

「なんです、それは？」

と早速たずねた。すると彼は、

「日本映画、いや世界の映画史上最初と言っていい女優の逆吊りシーンをマトモに撮るのさ——」

と、ニタリと笑ってこたえた。

なるほど、そう言われてみると、女優が縛られ、逆さまにぶら下げられているのをマトモに撮った映画は、スタッフ連には記憶がなかった。

「はあ。それは結構だと思いますが、ところで、それに忍法をからませると言うのは？」

「さあそこだが……ここはひとつ脚本の井坂さんに頼み譲歩して貰うことにして、この場面の設定を変更するんだ。もちろんストーリー

ーの流れには支障なくね。つまり、この忍者の娘を、ただ縛って突っ立たせておくと言うのではなく、ガッチリ後手に縛りあげて樹の枝から宙間にぶら下げることにする。そしてまず、カメラはいかにその娘が残酷に、きびしく縛られているかをクローズアップ、ドリム法などで、嘘いつわりのないところを丹念にとらえる。——そこで、そのあとがアッと驚く忍法なのさ。むろん、トリックになっちゃうがね。でも、このトリックの効果如何は、いま言ったようにその娘がいかに本格的な逆吊りか、その点を充分とらえた事によって決まる——」

「でも、先生……」

「なんだ」

「そのう、サカサマなんて、彼女ひきうけてくれますかね？」

機嫌よく唾を飛ばしている監督に一人が言う、

「そうだな。いくら責め場専門みたいな彼女でも、縛られた上に逆さ吊りともなると」

みんな小首をかしげた。

「駄目かな？」

「さあ、それも一応は訊いてみないとわかりませんが……」

「ウン、ではそうしてくれ。——それにこの作品は、忍者映画の決定版として、その悲惨さともいいうか、それを実際のアクションとして徹底的に追うつもりなんだ。彼女が駄目となると、残念だがこの狙いは破算となるかも知れないからねえ……そこはまア何とかひとつ、上手に話してみてくれ。何なら彼女に此処へ来て貰って私から話してもいい」

ところが。

この監督の意向を全部聞き終らないうちに彼女は開口一番、

「いいわ、やらしていただきますわ！」

ニッコリ微笑<sup>わら</sup>ってひき受けた——というんだからスタッフ連は感心してしまった。

「さすが、体あたり女優の名に恥じないや。」

見直したぜ……」

彼女のニッコリが、彼らをすっかり喜ばせてしまったのである。

——かくて、この忍者映画は、決定版と称するだけあり、見せ場が他のどの映画よりも強烈？ だということ、大いに観客を動員したものであるが、さて。

彼女がニッコリ微笑って引き受けたという役とはどのようなものか。このへんでちょっと、そのシーンを映画ストーリーより抜萃し



て書くことにし……そして、この物語の「結末」へと急ぐことにしよう。

### 映画ストーリーイ（抜萃）

——怪鳥とて、戸惑いそうな——

此処は年輪<sup>とし</sup>経た樹木が鬱蒼と覆い茂る甲賀の忍者谷。

つい先刻まで、死のように静かな白幻の世界を創りあげていた霧も、やがて樹間を縫って矢のごとく降り注ぎはじめた陽光に追われて——去った。

だが、これはどうしたことか。

陽はのぼったというに、いま四圍には小鳥の囀りもない、いや地を這う虫の動きすらなかった。

息を詰めたかのような静寂が、依然として死を模倣してながれていた。

そして、どのくらい経ったか……

と、突然。

その耳鳴りのしそうな静止の空間を斜めに断ち切るかのように、とある巨木の枝から飛来した黒い影があった。

影は、朽ち葉の谷地に一廻転すると、素早く岩かげを利用して身をひそませた。

背後に廻した反りのない大鐔の刀——

手には丸い異様な金具と、その中央に結びつけた「糸」の輪をにぎりしめている。

全身黒装束に固めているため、年の頃はおろか性別すらも窺えぬ。只わかるのは、その黒覆面の間に光る、するどい眼だけだった。

——すると、やはり。

この黒影に「断ち切られた」静止は、いつしか朦朧とした「動き」を生じ始めていた。

黒影を取り囲むかのように、目前に、その叢から湧いたとしか思われない灰色の影が立つ、六つ。

突如、黒影は身を伏せた。と同時に、

「——舞月伝波、よう来たのう……」

灰色の影、そのどれともなく陰暗な声がつたわってきた。

「しかし、もう遅いわ。うぬの娘が儼らの責め苦に掛かって、もう小半とき余り、多分息も絶えておるわ、死んで居ろうわ！——伝

波、うぬも折角出向いて来たからには、娘に習うて地獄へ行け——」

瞬間、黒影を的とした恐しい跳躍がはじまった。無音の突進から、唸りを生じた手槍が放たれて岩陰に集中しはじめたのだ。

が、この時黒影は、すだれを払うかのような手付きで数本の槍を落すと、やにわに灰色

の群れに向って直線に走った。——跳んだ。

そして立ち停まったとき、ひるがえったその手から、丸い金具がにぶい光りを放ちつつ空をすべって飛んだ。

「ぎウッ！」

「がッ！」

とつぜん、凄じい絶叫が起こった。

其処此処から、棒のようになった鮮血が噴きあがった。

そして、やがて地に倒れ伏すひびきが、妙にゆるやかな間<sup>ま</sup>を置いて、つづいた。

最後のひびきがつたわってきたとき、それまで空を旋回していた丸い金具……円刃の凶器は急に意を失ったもののように地に落ち、ゆるゆると黒影の手に戻ってきた。

黒影は、身ぶるいすると、しずかに息を吐きだした。

飛来した手槍が一本ずつ、その太股を貫いて地に縫いつけていた。あふれる血が、黒衣をより黒く染めながらどんだんに地に吸われていた。

黒影は、ともすればボヤけようとする眼をカッと見ひらき、前方の岩の上を息も止めてふり仰いだ。

「お……おこよッ——」



たった今の凄まじい血の動乱に、まだ揺れつづいているような四囲の谷間に、彼の悲痛なさけびが、ひびいた。

岩の上には――

張り出した太い枝から、それがまるで自然に垂れ下がったものののように、粗衣をまとった娘が後手に縛られ、逆さまに吊られていたのである。そして娘は、最早や息絶えている者のごとく、その逆さに垂れた黒髪すらも揺らしていない……

「南無三！」

黒影は尚も叫ぼうとし、その様子に絶句した。眼を見ひらいたまま、地に片手をつき、大きく肩を喘がせた。

が、やがて彼は、何かを測るように小首をかしげると、ひくく呟きはじめた。

「いや、そうではあるまい――おこよは、この儂が手塩にかけて育てた娘じゃ。なんでこれしきの拷問で参ってしまったおうか。生きておる。まだ生きておる。――なアおこよ、死んではおるまいが？　な、まだ死んではおるまいが！……」

呟きながら、彼は、間もなく上体を起し、その膝つきの姿勢で再び息を詰めた。

血に滲みつつある忍者足袋の指が微かに地

を搔いて、手の円刃がゆっくりとふりあげられた。そして、半身にかまえる。

「おこよ……まだ、まだ生きて居るといふのなら、忍者の娘らしゅう、み、見事――その足で、立ってみい！――」

そのとき彼に、凝固とした何かがみなぎった。胸をのけぞらせ、最後の氣力をふりしぼって、槍に貫かせたままの身をするどくひねっていた。

同時に、円刃は細い糸を曳いて――この父の、死を賭けた祈りをのせて、娘を吊り下げている太縄めがけ、虚空へおどりあがっていたのである。

円刃は一閃して縄を切った。切ってから、すぐ地に落下した。

が、それよりいち早く、全身「縄柱」のような娘の身体は、岩頭へと垂直に落ちていった……

黒影は、その結果を見ずして、息絶えてしまった。

## 6

空が真っ赤に燃えていた。

砂利置場も、その向うの建物も、すぐ近くのパークの植樹も、みんなその色を浴びて異様

に赤く染まっていた。

こんなに赤い夕方は、遠い子供のころか、なにかの絵本で一度見たことがあるような、そんな記憶しかなかった――

彼女は、窓辺を離れ、薄暗い部屋のテーブルの前に戻ったときも、まだこの異様な赤さが眼底に残っているように思えて、そっと眼じりを揉んだ。

彼女はそのとき、濃紺の、微妙な光沢のあるタイツを着ていた。

しばらくしてテーブルの上のウイスキーグラスをとり、隅のベッドへゆったりと倒れていったときも、その光沢は妖しいばかりの描線となって、肉体そのままの姿態を形づくって揺らいだ。

トン、トン、トンと足音がして、男が戻って来たのはその時であった。

「行って来たよ」

階段のところから首を出すなり、男は声をひそませて言った。

なにも今ごろから声をひそませていなくて、もいいのに、と内心おかしくなりながら、

「で、どうだった？」

彼女は訊いていた。

男はハンカチで顔をこすりながら部屋の中



央へあぐらをかくと、

「なるほど、すごい埃だったな。それに蜘蛛の巣だらけだ」

と言った。そして尚も顔をこすっている。

「あたしが昨日見て来たところへ、行ってみた？」

彼女が身体を起こしながら訊くと、

「そりゃ行って、見て来たさ。——だが、あの二階の天井に付いている滑車、あれは凄い音がして、駄目だぜ」

「あら、動かしてみたの」

「ウン。——がらがら！　っていう音、この部屋に居ても聞こえた筈だ」

「そんな音は聞こえなかったわ」

「ま、吊りのほうだけは諦めるより仕方がないな。いくら、だれも居ない、潰れた工場の滑車を使うとしても、あたりがこんなに静かだと……」

「いやよ。あんたはさっき、あそこに滑車さえあるなら吊ってやる、って言ったじゃないの」

彼女は、空になっているグラスを、両掌でにぎりしめるようにすると、男へ小さくかぶりをふってみせた。

「しかし——」

「いや、いや。まだ何もしないうちからそんな弱音を吐くのは。今日のお昼に話した通りに、まずあたしをあそこへ連れて行ってからにしてよ、そんなことは」

「……そうかい。それなら一応、いっしょに行ってみよう。でも、滑車の音がひどくて駄目なら、諦めてくれよ。ちょうどこの家の婆さんは居なくてよかったが、もし通りがかりの人が音を聞きつけたりしてはいけないからね」

「階下のお婆ちゃんは、居たって耳が遠いから大丈夫よ」

「いや、それに、そんな意味ばかりで言うてるんでもないんだ俺は。ひどい音がして、もし人に聞かれたら……とそんな事に気を使っている、第一お前の、そのう、吊り責めにも全然ちからが入らんじゃないか」

「……」

「あれ、怒ったのかい？　そんなふくれっ面なんかして」

男は立ち上ると、ベッドに坐ったままソッポを向いている彼女の肩に手を掛け、上眼づかいにのぞきこんだ。

すると彼女は、不意に笑みを浮かべて、「わかったわ。じゃあともかく、あたしをこ

れからあそこへ連れて行って……」

言いながら、軽い身ごなしでベッドから降りるのだった。

「よし、では行ってみよう！」

男も、ついその軽ろやかさにつられて、壁際に掛けてある新しい綿ロープの束をひっつかむと、元気よく階段口へと急いだ。と、

「あら、駄目じゃないの」

突っ立っていた彼女が、とがめるような口調で言った。

「え、なにが？——」

男はキョトンとして、ふり向いた。

「なにがって、あたしは……縛られて、あそこへ連れこまれる話だった筈よ……」

「ああそうか、そういう話だったっけな。でも、あれ本気で言ってたのか？」

「本気よ」

男は、ツルリと顔を撫でた。が、すぐに彼女の前へ戻ってくると、荒々しいちからでその肩をつかみ、膝をつかせると、

「ちくしょう！　やい、ジタバタするんじゃないぜ」

がらりと変った声音で、その両腕をやにわに背中へねじりあげた。そうしながら、素早くロープを捌くと、背中で交叉させられて座



縛する手首へ固く巻きつけた。

男が本気になった！と感じた瞬間、彼女は手首に絡まる縄の感触に目くらみするものを覚えながら、急に足掻き、その男の手から逃れようとした。

「あッ、逃げるか！」

男は、縛ったばかりの手首のところをわし掴みにすると、足を踏んばり、女の身体を半廻転、横へふりまわした。

「ヒィ！」

短い、するどい悲鳴が走って、彼女の長い髪が狂ったようにみだれた。

男は、極めて不自然に俯伏せとなった彼女の腰に膝を掛けるとグツと力み、上体を起こすようにしながら胸部のほうへとロープを巻き締めていった。するとタイトの、その光沢がまた妖しいちらつきをみせはじめた。ロープが締まると、そのロープに撥ねられたように、その部分から散って、こまかく光りふるえるのであった。

そしてやがて、濃紺に真っ白なロープは、女体を縦に走って股間を抜け、手首を高々と吊ると眼にも鮮やかな綾をつくって、その豊かな肉体をきびしく縛りあげていった。

縛り終えたとき、海老のように身体を丸く

して横倒れになる女を、尚もその髪をつかんで起こすと、今度はハンカチを噛ませ、スルリと引き抜いたバンドで猿ぐつわだ。

「う、うウッ……」

女のいったいに見ひらいた眼が充血する。

男は、猿ぐつわの済ませた手で口もとを拭くと、しばらくそんな様子の女を瞬きもせず見つめていたが……間もなく、女を足蹴りにして立たせると、階段のほうへ向けてその背をドンと押した。

そして、女が震えながら階段を降り始めると、窓際に掛かっていた女のコートと新しいロープを取って、すぐに後を追うのだった。

## 7

まだ、夕空は燃えていた。

割れて、埃をかぶった窓ガラスを透して、その赤さは此の廢屋の二階にも静かに染みこんでいた。

がら！ がら！ と、天井近くの柱の滑車が大きくひびいて揺れたとき、男はよろけてその赤さの染みた埃を、思わず息を詰めてしまふほどに舞いあがらせていた。

「駄目だ！」

男は、鎖の先に付いた掌ほどの鉤を、後手

首の結び目に掛けられて、ユラユラと立っている女の姿を見つめ唸るように言った。

窓の下の空地で遊んでいるらしい二、三人の子供の声が聞こえてくる。

彼は窓のところへ行き、眉をしかめながら眼下をうかがった。

子供の声に小犬の鳴き声が加わって、それは空地の廻りを駆けめぐっていた。

ちえッと舌打ちをし、彼はゆっくりと女のほうをふりむいた。

タイト姿で、目も綾に後手に縛りあげられた女の姿は、このような陰湿な処にはピタリのようなでもあり、また、こんな処にはかけ離れて異質な、美しい立像ともなって、揺れつづけていた。

と、ふと顔をあげて、男の視線をはね返すように見た彼女は、その時、何かを言った。

そして、逆光線に立った男がまだ動かないと知ると、大きく身体を揺すって、しきりに猿ぐつわをうごめかした。背中に垂れている鎖が、やかましい金属音を立てる。

思わず男が近づいていくと、

「……は——く！……」

女は眼を閉じ、また何かを言った。

「なにが、言いたいんだッ」



男が猿ぐつわを少しゆるめてやると――

「は、早くあたしを吊って――」

女は、朱に満ちた頬をふるわせて言うのだ  
った。

「駄目だ。ここでは吊れない！」

「いや、早く、して」

「馬鹿、無理を言うんじゃない」

「いや、いやッ」

その時、男のするどい平手打ちがその女の  
頬に飛んだ。

「打ってもいい、打ってもいいわ！ そのかわり、早くあたしを、逆さまに吊ってちょうだい！」

眼を真っ赤にさせ、讒言のように言って、  
彼女はまた繰りかえした。

「まだ言うのかッ」

「――っ、吊って……」

「ち、ちくしょう。まだそんなことを言うのなら、もう、もう我慢しないぞ！」

男は、とつぜん新たな縄で、その両足からぐるぐる巻きにし始めた。

すると、縄が喰いこむたびに女は、まだ何かを口走りながら、その白い咽喉のどもとをのけぞらせて天井をふり仰ぐのだった。

やがて男は、女を「縄柱」のように縛り終

えると、荒い呼吸をしながらも、そつと鎖を張っていった。

が、それは「逆さ吊り」ではなかった。  
女は言った。

「い、いや、逆さまに吊って。逆さまに吊るのよ！」

しかし、男はそれに答えて言った。

「吊っているんだよ。逆さまに、吊っているんだよ、いま……」

「ほんと？ ほんとうなの？」

「ああ本当だとも――いまお前は、俺の手で逆さまに吊られているんだよ！」

女の足は、鎖の軋みと共に爪先立った。

「そうかしら、あたしは本当に、サカサマに吊られているのかしら」

女は焦点の定まらぬ眼で、何度かくりかえした。

「ああそうだと！ ――ホレ、いまお前が仰向いて見えるのは、天井じゃなくて、埃だらけの床だろう？ な、そうだろう？」

男は、鎖をにぎる手にちからをこめて、くぐもった言い方をした。

すると、

「ああ、ほ、本当。本当だわ……あたしはいま、逆さまになっている――あッ、痛い、痛

いわ！ か、堪忍して、かんにんしてちょうだいッ……」

と、その時である。

「あ、ああ？」

男は、そこに信じられない有様をみて、凄まじいばかりの蒼白な顔となったのである。

「あ、あたまに、血、血が、下るわ。ああ、く、くるしい。逆、吊りって、ほんとに苦しい、もの、なの、ね……」

「ア、ア、ア……」

彼は鎖を放し、後すざりによるめて、壁に背を打ちつけたとき、そのワナワナとふるえる指先で女を差して、大きく口をあけた。

――見よ、そのとき最後の夕焼けに燃え立った落日の陽を浴びて、いま赤黒く映えた廃屋の片隅に、女の長く垂れていた髪はついに「完全に逆さに吊られた」ものの如く、暗い天井を差して、揺らぎながら「直立」を終えたのであった。

男は、この天地が逆となり、ともすれば天井のほうへ、落下していきそうな思いのために、か細い恐怖の悲鳴をあげてシツカリと窓枠にしがみついていた。



苦痛を耐える表情がこれほど美しいとは思わなかったと誰でも思うだろうが、S人土にとつては、これこそ珠玉の姿態と表情だ。



印画紙焼付極鮮明写真

## 〔新しいモデル強烈縛り〕

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号ハちねV  
左近麻里子

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号ハちてV  
左近麻里子

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号ハちやV  
左近麻里子

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号ハちみV  
左近麻里子

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号ハちつV  
左近麻里子

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号ハちなV  
左近麻里子

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号ハちすV  
左近麻里子

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号ハちさV  
左近麻里子

豊満女体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号ハちにV  
左近麻里子

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号ハちこV  
左近麻里子

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号ハちくV  
左近麻里子

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号ハちけV  
左近麻里子

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号ハちるV  
左近麻里子

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号ハちれV  
左近麻里子

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号ハちきV  
左近麻里子

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号ハなたV  
中河 恵子

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号ハなあV  
中河 恵子

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号ハなちV  
関谷富佐子

臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号ハなつV  
関谷富佐子

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号ハなてV  
関谷富佐子

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号ハせきV  
左近麻里子

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号ハせかV  
左近麻里子

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号ハせもV  
左近麻里子

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号ハせみV  
左近麻里子

ゴムカバーの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号ハせなV  
左近麻里子

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号ハせけV  
左近麻里子

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号ハせこV  
左近麻里子

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号ハせまV  
木村 洋子

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号ハせむV  
木村 洋子

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号ハせえV  
木村 洋子

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号ハせろV  
中河 恵子

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号ハせれV  
中河 恵子

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号ハせりV  
中河 恵子

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号ハせとV  
中河 恵子

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号ハせてV  
中河 恵子

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号ハせゆV  
左近麻里子

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号ハせいV  
左近麻里子

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号ハせたV  
大島 照代

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号ハせのV  
大島 照代

遅ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号ハせねV  
大島 照代

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号ハせにV  
大島 照代

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号ハわりV  
関谷富佐子

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号ハわもV  
関谷富佐子

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号ハわめV  
関谷富佐子

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号ハわみV  
関谷富佐子

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号ハわまV  
関谷富佐子

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号ハわとV  
関谷富佐子



## 〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」  
中河 恵子

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」  
中河 恵子

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」  
中河 恵子

鼻責めと鼻孔大写し

大手札三枚一組 略号「ねけ」  
中河 恵子

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」  
中河 恵子

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」  
中河 恵子

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」  
中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」  
大島 照代

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」  
大島 照代

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」  
大島 照代

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」  
大島 照代

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」  
大島 照代

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」  
大島 照代

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」  
中河 恵子

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」  
中河 恵子

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」  
中河 恵子

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」  
中河 恵子

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」  
木村 洋子

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」  
木村 洋子

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」  
木村 洋子

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」  
木村 洋子

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」  
木村 洋子

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」  
大島 照代

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」  
大島 照代

竹棒開股苔打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」  
関谷 富佐子

後手吊りにもかく女体

大手札四枚一組 略号「くて」  
川越 美佐子

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」  
愛知 葉子

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」  
愛知 葉子

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」  
愛知 葉子

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」  
左近 麻里子

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」  
左近 麻里子

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つの」  
左近 麻里子

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つね」  
左近 麻里子

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」  
左近 麻里子

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」  
左近 麻里子

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つね」  
左近 麻里子

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」  
中河 恵子

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」  
中河 恵子

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」  
中河 恵子

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」  
中河 恵子

両手万歳吊りにもかく

大手札四枚一組 略号「くむ」  
中河 恵子

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」  
中河 恵子

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」  
川越 美佐子

八力月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号「へぬ」  
増田 みゆき

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」  
増田 みゆき

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「わつ」  
関谷 富佐子



☆総天然色華麗美女緊縛極鮮明フオト

柱縛り強烈ムチ打

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みあ)

高小手に縛り上げた縄尻を柱につなげた夫人の臀部に太腿に皮ムチが乱打され、白い肌が忽ち真紅に縞模様を描くのをカラフオトによって見事に把握した。

臀部に炸烈する鞭

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みこ)

膝頭と頸とを連結されて豊かな臀部を高々と突き立てたポーズであらわな双丘に激しく炸烈する非常の鞭。柔肌はむごたしくミミズ脹れとなるところを色彩で。

笞にのけぞる女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みけ)

一打又一打、力まかせに揮うムチは肥り肉の肌に鈍い打撃音を残して狂う。その度に絶妙の悲愁の表情を顔面に漂わせて、カラー写真の迫力が最高度に発揮される。

苦悶する女の表情

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みて)

鞭に喜悅し笞に感泣した夫人は今や立っていることも坐っている

こともかなわず、畳の上にどたりと転って、その美貌に涙を浮べて喘ぐ表情を色彩で鮮明に捉える。

鞭に泣く美貌の女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みも)

ムチ打ちの連続は今や女体に対して激しい痙攣を呼び起し、伸ばしきつた脚は、爪先に至るまでブルブルとふるえ、感激の極に達している。涙の女の表情を彩る。

転り回って泣く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みひ)

白い肌はムチ痕で真紅に染まり、カラで素晴しい色彩を見せ、泣ける夫人は、余りの痛苦にムチを避けて畳の上をころがりまわって泣き喚き、迫真の表情を見せている。

鞭に喘ぐ全身表情

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

関谷富佐子 略号(みの)

ふり乱した髪、のけぞる顔、喰いしばった唇、乳房もお臍も打ちふるえて鞭の恐怖に全身がむせびつつ喘ぐ素敵な色彩の姿態。

高小手の全裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なゆ)  
ピンク色の若々しい全裸の肌に、厳しく掛った高小手縛り。両の手首を高くと背負ったまま、美貌の恵子の緊縛姿態が華やかな色彩写真で皆様の身近かに待る。

豆絞りに輝く美貌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なめ)

豆絞りの猿ぐつわをきりきりと噛みさされた恵子の美貌が胸に掛った高小手縛りによつて一層の哀愁と残酷味を漂わせ、乳房と乳首と色彩がまことに可憐である。

赤い絨氈に悶える

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なさ)

或は伏臥、絨氈の上に逆エビ縛り、或は縛り、開股縛りで、脚を縛り、臥したで、華麗な美しい全裸身をこの魅力に憑かれたマニアに捧ぐ。

豊満な臀部を晒す

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

中河 恵子 略号(なし)

モノクロ写真と違って豊富な色彩で、その女体の陰翳を微細に表現したカラーフオトは、美しい恵子嬢の全裸のすべてを、他に見られない緊縛姿態として提供する。

美しき緊縛の立像

大手札三枚一組 一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なひ)  
新鮮な魅力と美しさを持つ左近嬢の緊縛の全身をカラーの豊富な色彩の画面で、まるで自らがその場に立ち合っているように感じることが出来る素晴らしい立像。

転落寸前の緊縛女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なも)

後手に縛られたまま、椅子の上から床へころがり落ちようとする女体の微細な変化を色彩によつて一層多様に描きだえ、肌を喰い込む縄目のむごたらしさを強調する。

椅子に羞らう美女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なす)

赤いクッションの黒皮の椅子の上、赤い縄に縛られて羞らう美女の身をピンクに染めて、今やその均齊のとれた美しい肢体を足の爪先に至るまでとく御覧に入れる。

緊縛裸身を横える

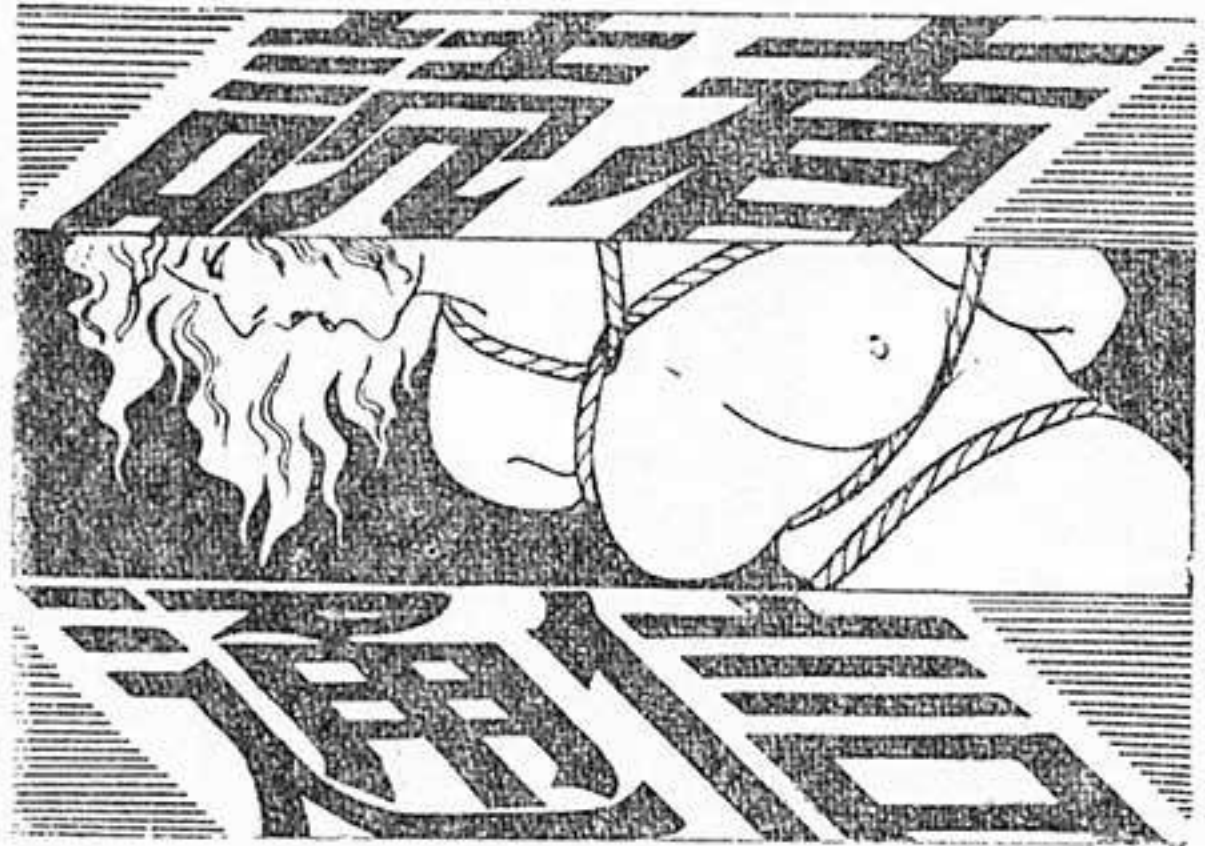
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円

左近麻里子 略号(なえ)

華やかな背景の中に後手に縛られた真白い裸身が縄目に悶えて、捻じめるようにくねらせ、縄に羞る美しき美貌の表情が実物そっくりの色彩感覚によつて迫ってくる。

◎お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、箕田京二へ。





先日、出入りの商人の方からはからずも、貴誌を見せていただき、ここに始めて、お便りする次第です。私は三年前に現在の夫のもとに後妻としてまいりました。十七才になる人妻です。夫は四十才で、先妻の子供が二人あります。二人とも高校生で殆ど手がかりませんので、私は結婚前に勤めておりましたように、外で働きたいと申しますが、夫は許してくれません。結婚して半年ぐらいたくも早く家に帰ってまいりました

が、最近では仕事が忙しいとかで夜おそくでないと帰宅しません。会社を三つも経営しているので無理もありませんが、待ってばかりの私は、退屈で仕方ありませんから、一度貴誌のモデルにでも応募してみたいと思っております。B生活五年のキャリアを持っておりますが、モデルの経験はありません。身長は一メートル五八センチ、体重四八キロ、バスト八七、ウエスト六六、ヒップ九三でスタイルに自信がありますが、年令が若くないのでモデル料の望みはありません。夫は早くとも午後十一時以前には、絶対に帰宅しませんから、午後一時から午後九時頃まででしたら、いつでも出掛けられます。まだ貴誌を拝見して日が浅いので、自分でもくわしいことはわかりませんが、私の身体を出来るだけ美しく見せる緊縛でしたらリードもいいたしません。子供は生んだことがございませんので十分鑑賞にたえることが出来ると思います。尚、私の主人は一向にこういうことに関心はないのですが、同好の御夫婦の方とお近かづきになれば、楽しいだろうと思っております。どなたか私の夫を教育下さる方があれば、これほどの幸いです。

ございません。

(神戸市・大上那美子)

奇ク御愛読の夫婦の方々、そして女性の方々、毎日御元気でお過しのことと思います。私は二十四才になる公務員です。仕事は真面目にやっています。こちら旭川はもう素ばらしい雪景色を見せて市民の目を楽しませています。私は以前からの貴誌の愛読者で毎月楽しく拝見させていただいております。ですが、まだ良きパートナーが見つからず、退屈な毎日を送っています。私の好みは浣腸、特に開股羞恥責めが好きです。その他三人プレイとして夫婦の方々を楽しむことも考えております。私は責められる方と責める方と、どちらもやれます。きっと奇クを読んでおられる方々の中には、一人胸の中にしまっていて、物足りない毎日と過している方々が大半ではないかと思っております。もっと、このペーじを利用して、お互いに楽しい真の生活を求めて行こうではありませんか。

(旭川市大町・吉村篤)

貴誌のファンになって、足掛五年になります。毎月色々と楽しく

拝見させて頂いております。奇クを読みはじめた理由を申し上げます。SM誌であるということは勿論ですがその中にたまに「鼻責め」の写真や文が目にとまったことでファンになりました。今までずいぶん私の心をおどらせて下さって有難く感謝しております。分譲のフォトで、最近はおどろしいものがあり、いっそう楽しくなりました。反面、本誌の写真、絵は全くといってよいくらい影をひそめ、淋しく思います。何かと制約も多し、おどらせて待っている私を落胆させるようになりまして。ほんとうに私達の心を知らない一部の人間が腹立たしくさえます。あんな追放運動さえなければ、以前のようにならなかつたか、以前ののにと考えると涙が出てきます。今後の本誌の編集部の各氏に対して、尚いっそうの御健闘をお祈りし、我々鼻責めファンを活気づかせて下さい。(岐阜市・長坂太二)

寒気厳しき折柄、益々御多忙のことと存じますが、奇ク編集部の皆様には、お褒めなく御壮健のこととお慶び申し上げます。今度発刊されました「花特」いつかいつ



かと心待ちしていただけに入手するや、一気に読破してしまいました。ずしりと手ごたえのある重量感たっぷりの特集号、さすがに団先生の力作だけあって、こうして一括して拝読してみると、一層迫力が感じられ、息もつかせず読みました。どうも有難うございました、感謝いたします。どうかこの種のS文学集を続々と発刊されま

（東京・桃林平）

○

貴誌七月号、古本店にて見つけ七〇〇円にて購入しました。今更

ながらバックナンバーの高価なのは驚かされます。同月号に山本武男様が書かれている手記「奴隷妻」大変興味ぶかく拝見致しました。奇クを愛読しだしてから三年になります、私はこの記事に一番感銘致しました。「以後、女奴隷は、このユニフォームを昼も夜

## ◎分譲品総目録◎

購多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれにて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込

も着け通しているわけです。昼は下着として夜は制服として。そして更に御主人様の前では、首輪をつけ、足鎖、猿グツワ、皮手袋を装着、最後に後手錠になるわけです。この個所は全く息もつかせず読んでしまいました。小生二十三才になる一現業員ですが、今後共山本様の手記をどしどし載せて下さい。M傾向の強い小生です。一度山本様に責めていただきたいような気がします。文通交際したいのですが、いかがですか。

（高松・堀川秋雄）

○

貴誌におかれましては益々御繁栄のこととお喜び申し上げます。さて私は七、八年ぐらい前に貴誌を読み、オムツマニヤの記事を見ましてから、何となく楽しい思いにかられ、その後はオムツに関する記事の載っている貴誌を買い、切り抜いてスクラップしてまいりま

みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも、箕田京二宛にお願いいたします。

したが、その貴重なスクラップ帳も船の事故で、海中に沈んでゆきました。本当に残念に思っています。私自身は船に乗っていませんのでオムツをして楽しむなど出来ませんが、貴誌を読むだけでも楽しいものです。貴誌に対して失礼ですがオムツ関係の記事以外は興味ツ関係の記事だけの特集とか絵画とかありましたら、お知らせ下さいませんかでしょうか。もしなければ、あれ程沢山いるマニヤのためには是非とも作っていただきたく思います。どうかよろしく願います。

（神戸・佐瀬頼正）

○

東京都の佐藤喜久子様、貴女の勇ましい呼びかけに魅き込まれる様に筆をとりました。もしこの一文が御目にとまる様でしたら必ず御連絡下さい。貴女の仰言る条件にはば一致すると思います。当年四十二才の妻帯者です。貴女が生れつきのSなら、私は生れつきのMかも知れません。幼稚園に行く頃、多分便秘だったのでしょうかが坐薬？の様なものを挿入されたのが病みつきで子供部屋へ行

は……。小学校へ通う頃は相撲に憧れゴムバンドをつないでは股間に喰い込む様にして、そのまま寝たり十八の頃になっては無理に酒をのませられ前後不覚の裡に女の役目をさせられたり、告白記か伝記（一寸オーバーかな）にでもなりそうな経過を辿ってきました。勿論大人になってからは色々普通の遊びも満喫しましたが、やはり行きつく所はSMの世界でした。今にして思えば結婚する時に同じ趣味の女性を選べば良かった等と思っております。でも時偶その様な女性に会う機会にも恵まれ過去数人の女性に巡り会いMとなり時にはSとなって楽しい一時を過ごすことも出来ましたが、その人達も結婚とか他の事情もあって今日そのチャンスもなく、たまにはSと

なっている事がありましたが、マニアで



（東京都・松本幸男）

○ 私は十九才になる女店員でございます。二年程前より下着にはパンティがわりにサラシの六尺褌を毎日愛用しております。女だてらに恥かしいのですが、何んだかとても気に入ってしまっておりまして。それで私は只今同性の方の六尺フンドシ姿の写真をとめております。十二月の二十四頁にフンドシ姿の女性の正面の姿がのっておりましたが、こんな写真がいろいろほしいと思います。それをお手本にして私もフンドシをしめてみたいのです。それから、私のフンドシ姿の写真もとってほしいと思います。お便りお待ちしております。

（愛媛県・川江芳子）

○ K誌愛読の東京RN子さま、一月号に投稿された貴女の御希望、我意を得てうれしく拝読、当方、私四十四才、妻三十九才。創刊以来の愛読者にてプレイ愛好家ですが、K誌は全くストレス解消のよき清涼剤で、時折りプレイを楽しむのであります。貴家同様研究し共に楽しむ事の出来るペアのパートナーを求めています。社会的メツツもあり、なかなか思う相手方

が探し難きところ、はからずも、呼びかけを得て、お手紙差し上げる次第、是非共に種々研究の結果K誌を通じて同好の人達に伝える機もあればと存じております。

（川口市・山方久雄）

○ 南九州、T・K様。美川芙美子です。嬉しくあなたの通信、読ませて頂きました。秋から又、私は肥りはじめまして五キロもふえましたの。妊婦にも負けない（七カ月ぐらい）私のこのタイコ腹を、あなたのような方の目の前に突き出し、私のお腹が妊婦のものかどうか、刃物で切って、調べて下さい。私は、あなたにこのお腹を見せ、妊娠腹と言われたため、怒った私はナイフをとり、あなたの前でお腹を切り、子供が入ってないことを証明するのです。私はその前に仰向けに寝て、あなたの手をとって私の大きなお腹にあて、私のお腹に子供が入っているかどうか、さぐらせます。そのとき、私は、わざと空気を一杯吸って、お腹を益々ふくらませます。あなたはパンパンにはったお腹を、どんなに撫で廻しても子供が入っていないと思うでしょうから、私は、そこでお腹を切るのです。私は、あ

なたの記事を見て、こんなことを想像して涙ぐんでいます。身近かに同好の人がいなくて残念ですがそのうち、お会いできると思いますが、私は皆様のおられることを忘れず、これからも色々皆様のことを想像して、幸福を得たいと思います。私は今から、お店に出ますが、楽しみです。又、お腹をつきだし、大儀そうに肩で息をしながら、ゆっくり歩きます。そして若い弱々しい男性の前に出た時は、私は思いきってお腹でも突き出し両手でさすって苦しそうな顔でもすれば……と思っています。

（仙台・美川芙美子）

○ 大阪の長本居一郎様、二月号の読者通信を拝見いたし、矢もたてもたまらずペンをとりました。私は十年來の本誌の愛読者です。貴方は理想の奥様を持たれ、羨ましい限りです。私の妻はS・Mには余り積極的ではなく、一度か二度くどき落して、わざわざ現像、焼付の器具を買い、研究の末、プレイの写真を三十枚ほど撮りました。が、その後一度も応じてくれませんでした。私は三十七才、妻は三十四才です。一度お会いして色々プレイの話などしたり、私が今までスク

ラップした本誌のグラビヤをお見せしたりしたいと思えます。また妻のプレイ写真など、よければ差し上げます。お便りを楽しみにしてお待ちしております。

（大阪・川野竹雄）

○ 奇ク愛好者の皆様、いかがお過しでございましょうか？この地上に女性サジスチンが実在することを経分、信じられるような気がして投書させていただきました。ぼくは以前から本誌で見るようなサド女性が身近かにおり、SMプレイができるなら、どんなに幸いであるかわからないと考えておりましたが、実際には空想の世界にすぎないとしか考えておりませんでした。でも最近では、もしかするとサド女性は実際に居るのではないかと思います。貴方のようなになり来る日も来る日も探し求めて歩き廻り、何も手につきません。そこで本誌読者通信を頼りに、マゾヒストたることを申し出て、女性サジスチンの方に召されることを願う者です。どうか交際ねがえないでしょうか。ぼくは残忍な遊びの好きな女性が好き。男性を意のままにしたり、責めたり、奉仕させたり、言うこ



とをきかない男の子を徹底的に降参させて、気に入るように飼育しようという方が素敵です。常に男性を服従させ、女王様として君臨したい方、どなたかおられないでしょうか。ぼくはM・Sプレイを想像すると胸が高鳴り、押さえることができません。ぼくには、どうしてプレイの相手がいないのでしょうか。淋しくて生きていけない。女王様の前であれば、どんな恥ずかしいことでも、つらいプレイでも耐える自信があります。プレイでは血を見るものより、もっと肉感的な甘味ある、そしてシヨッキングな方が、すごく好きです。又、神酒を飲むようなことなどが好きです。もっと好きなことも沢山あります。いずれ書かせてほしいと思います。秘密は厳守します。職業、年令、美醜は問いません。肉づきのよい方で男性を奴隷にしたい方、お手紙下さい。当方、サラリーマン、二十四才、体力に自信があります。

(東京新宿・有光生)

私は三十五才の男性です。十二月号の並原氏の「ブルマーマニヤの溜息」や原由貴子様の「無理強い」一月号の早渡氏の「赤いスリ

ッパ」など、大変興味深く拝見いたしました。と申しますのは、何れも女学生に関係のある記事だからです。私は少女趣味とでも言うのでしょうか、セーラー服の女学生に異常なほど心を魅かれます。それは普通の恋愛感情などではありません。紺のセーラー服のあの白線(あるいは、エンジ色などの線)ネクタイ、スカートのひだなど、とても魅力を感じ、目の前に女学生を見る時は衝動と興奮で気が狂いそうです。そして私は、空想の中で制服の可憐な少女に責められるのが楽しくて仕方ありません。私は素裸にされて口には鎖をかまされ馬になるのです。可愛い女学生はスカートをまくり上げて四つ這いの私に跨り、耳をちぎれんばかりに左右に引っ張って乗り廻すのです。私は、クタクタに疲れてもつばをのみ込むことさえできません。ちよつとなまけると鞭が尻におそいかかります。あとには彼女の後向きになって首に跨り、私の頭と顔は、ひだスカートのすっぽり覆われます。彼女のお尻の重みで私は頭を垂れてスカーツやスリッパの中であえぎと歓喜の声を上げて這いまわります。このような願望が、もし実行に移せたら、人生の最高の喜びです。しかし残念ながら私は家庭の都合で実現は不可能です。せめて女学生の体臭のしみ込んだセーラ

ー服の古着でも、入手したいと思っております。読者の皆様方の中で、私と同じように女学生に強い興味を持っておられる方がおられ

### 増田みゆき 双胎臨月蛙腹

大手札印画紙極鮮明焼付

〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕

増田みゆき 略号 八りけ 五〇〇円

〔明瞭な臨月の妊娠線〕

増田みゆき 略号 八りき 五〇〇円

〔全裸の臨月腹鑑賞〕

増田みゆき 略号 八りす 五〇〇円

〔双胎臨月腹の威容〕

増田みゆき 略号 八りて 五〇〇円

〔垂れた太鼓腹の陳列〕

増田みゆき 略号 八りな 五〇〇円

〔臨月蛙腹のアップ〕

増田みゆき 略号 八りは 五〇〇円

〔便々たる臨月蛙腹〕

増田みゆき 略号 八りへ 五〇〇円

〔蛙腹に腹帯をする〕

増田みゆき 略号 八りま 五〇〇円

〔誇示する双生児腹〕

増田みゆき 略号 八りむ 五〇〇円

〔仰臥する臨月の蛙腹〕

増田みゆき 略号 八りね 五〇〇円

〔臨月腹の股間しぼり〕

増田みゆき 略号 八りぬ 五〇〇円

〔亀甲縛りの妊娠美〕

増田みゆき 略号 八りた 五〇〇円

〔臨月後手縛り引き回し〕

増田みゆき 略号 八りし 五〇〇円

〔臨月の乳房縛りで弄る〕

増田みゆき 略号 八りさ 五〇〇円

〔乳房緊縛の臨月腹〕

増田みゆき 略号 八りち 五〇〇円

〔浣腸される臨月妊婦〕

増田みゆき 略号 八りひ 四〇〇円

〔双胎の臨月剥玉子腹〕

増田みゆき 略号 八りふ 五〇〇円

〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕

増田みゆき 略号 八りの 五〇〇円

〔臨月腹に革具装着〕

増田みゆき 略号 八りむ 五〇〇円



ましたら、誌上で私をばげまして下さい。  
(大阪市・三木生)

○ 小生、このたび福来保夫のペンネームで「縛られたお姫様」という小説集を発行しました。年来、マゾとサドとゴムマニアの三つの傾向に悩んできた者の詩集です。で同趣味の方には共鳴されると存じます。御希望の方には、おわかり致したいと存じます。古川裕子、竹野ひろ子、梅川幸子、木村ふみえさん始め、ゴムマニアの方方、お便り下さい。

(盛岡市・斎藤七郎)

○ 私は……変な人間。しかし世の中には変でない人間っているのかなあ。よくお医者さんが、自分の患者をペニシリン注射などで、殺す時が、以前はありました。この時、新聞では特異体質と掲載されました。これは、一般の人々から見た「特別な人」という解釈をしているらしいですが、人間一人一人、絶対同一というものは、たえ双生児でもありえないのであります。したがって、すべての人間は特異体質、又は特異性質を持っています。これ不思議ではないと思いませんか。これだけ前口上を言っておけ

ば、我々のS・Mなどの性向、又はこれからお話しする私の性向なども、理解していただけると思います。実は、私が自分の性向について、急にお話ししたくなったのは、昨日夢を見たからです。(目の前に、私に良く似た美しい女性が私を見つめているのです。その人は、BとPのつく下着と黒い網目のタイツとかかとのひどく高いヒールをはいて、後手で股間を一本のロープが通っている菱縄縛りにされて立っていました。そしてその横には、少し年が上と思われる、革の下着と革のブーツに身を包んだ女が、こちらを見ていました。私は、そのときはじめて私の目の前のものが大きな姿見であることに気がつきました。すると、私に良く似た女性性は私であって女でない。しかし目前にいる私は女である。何だか、さっぱりわからない。しかし、わかる人こそわからない。むろん私は、このスタイルに心の底から喜びを感じている。そして、これから横にいる真の女性から、どのように責められるか心をときめかして、そっとその人の顔を直接、見ようと目を動かした途端、にわたり鳴るに目を覚めた。) ああ残念、これから本番な

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽



のに。このように私は年上の女性（二十五才以上の方）つまり、あなたによって、やさしく女の子にされ、ペットとして、あなたに甘え、あなたの好きなようにされるのです。これが、私の性向なのです。おねがいです、私の友人になつて下さる方、お便り下さい。

（沢谷加男）

私は十年来の奇クの愛読者で、毎月、月末が近づくと次月号が出ているかもしれないと、胸をワクワクさせながら、近所の本屋をのぞきに行くのが、ならわしとなつていきます。十年前といいますが、川端さん、伊吹さんの全盛時代で今の若い人達が吉永小百合にあこがれるように、彼女等は私の青春時代の恋人でした。その後、絹川さん、大塚さん、東浦さん、中河さん、関谷さん、安井さんと、魅力的なモデルさんが百花咲き競う状態ですが、古い奇クを見ていると、今昔の感に耐えません。十年という永い年月ですから、その間には同じ趣味をお持ちの女性の何人かと御交際いただきましたが、やはりS・Mに関してはプレイと割り切って、さらっとした感じの交際が一番よいようです。私は鼻

責めに興味を持っていますが、あまり、しつこいのは好みません。鼻責めに興味をお持ちの女性で軽いプレイを楽しめる方との御交際を希望しております。御年配の女性とも喜んで御交際をお願いします。（豊中市・大塚良孝）

小生は奇クの愛読者です。小生はSとM両方に大変興味を持っております。「女性縛られてる姿が一番美しい」文学集の中にも出ていたこの言葉に、大いに共鳴出来るものがあります。話が交りますが、皆さんの中で吊るしをなさる場合、滑車を一カ所だけ使うと大変、労力もいるし、ちょっと危険なので、一つ滑車の中にホイール「こま」が二個ついた鉄製の小さいのがあります。これを上下に二個お使いになると一人で楽々とたぐり上げることが出来ます。先ず一個を上部「ハリ鴨居」などにしっかりと取りつけ、その滑車の尻の部分に太い針金などでロープの端を結びつけられるような部分をしらえます。そして別のたぐり用の長いロープ（鴨居の高さで十米以上、必要です）の一端をこしらえた針金の輪に結び、一方の端を下側の滑車の一つに通して、

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわ▽ 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

中河 恵子 略号△はわ▽ 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号△はふ▽ 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほ▽ 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はほ▽ 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はあ▽ 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はう▽ 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はう▽ 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はさ▽ 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はめ▽ 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はし▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はし▽ 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はも▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はも▽ 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はむ▽ 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はめ▽ 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はも▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はも▽ 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はさ▽ 四〇〇円

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号△はし▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はし▽ 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はす▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はす▽ 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせ▽ 四〇〇円  
大島 照代 略号△はせ▽ 四〇〇円

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆ▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はゆ▽ 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はた▽ 四〇〇円  
大島 照代 略号△はた▽ 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はち▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はち▽ 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつ▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はつ▽ 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はて▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はて▽ 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はと▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はと▽ 五〇〇円



上の滑車の一方のコマより再び下の空いている方のコマへ、更に上の空いているコマに通して端を下にならしめます。そして一度たぐり寄せて上下の滑車の途中でロープがX型にならぬよう注意します。この品物は、大きな工具店で探して下さい。小生は以前、色々な拷問具を自作してみました。一、五Vの乾電池とコイルを利用した電気ショック・コイルから、かなり高い電圧が出ますが、ほんの一瞬です。それから全く危険はありません。又、洗濯板を利用した石抱きは、石のかわりに膝の上に板をのせてボールトでしめつけます。次は自転車車のチューブよりやや太目のゴムバンドを全身にきつく巻きつけます。縄にくらべ膚に痛みはありませんが、全身がきつく圧縮されまた格別の感じですよ。このゴムバンドは、吊るしの時、使用すると最適です。他にも色々やってみましたが、現在は試作ができなくなっています。御入用の方があれば差し上げたいと思います。最後に女性の方におねがい致します。小生は一度、女性の方とプレイすることを夢にまで見、四六時中、このことが頭からはなれません。情け

ある女性の方、貴方の自由をこの手で奪ってみたい。又、貴女の手で私の自由を奪われたと思います。小生の望みをかなえて下さる慈悲のある女性の方が現われることを切に望んで止まぬ次第です。小生、三拝九拝して貴女の御厚意に感謝いたします。

(神戸市灘区・鈴木紀夫)

十一月号に掲載されていた「ゴムプレイの醍醐味」の菅原敏夫氏の記事に、すっかり身も心も奪われてしまいました。二度、三度と噛みしめて読んでみましたが、ゴムプレイの点は、幾重にもゴム製品を重ねるのが複雑で、場面を想像するのに手間どりましたが、ゴムフェチストにとっては目の前がクラクラするほどの刺激でした。私も子供の頃、大人の膝までの長さで、ガバガバの大きなゴム長を穿き、ヨタヨタしながら柔らかな雪の上を、つまずき転んでは立ち上りながら走り廻ったのが、ゴムの魅力につかれた最初でした。その後近くの魚屋のオヤジが、裏の小川へ三角型の網を背負って、胸まであるゴム長に短い雨合羽を着て、ガボガボさせながら腰まで泥水に浸り、小魚や小えびをとって

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこV

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てるV

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るまV

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るやV



ました。それで水から這い上った時にはドロドロした赤錆色の泥がヒザ上までくっついて、いかにも網の中には魚が入っているだろうという様子でしたが、私は泥と水にまみれたゴムの魅力にばかり気をとられ、興奮したものでした。現在は地方から上京してきていますので、せいぜい魚釣りに行く時に、さして深くもないのに胸まであるゴム長をはいて腰まで水に浸り、足許からジワジワ押し寄せる水圧に刺激を求めています。これから北国は雪です。全身ゴムで、おおって吹雪の中を腰まで雪に浸り、ギシギシさせながら走り廻ったり斜面を駆け廻ったりしてヘトヘトになり、大の字になって寝転んだりしたら、また水の中とは違った味があるのではないかと、雪のない東京の空の下で寒空の星を仰ぎ見ては、一人想像をめぐらしております。貴兄のお便りを、ぜひおねがいします。

(東京・北山生)

岐阜市、金原喜代子様。私達夫婦は数年前より相互プレイ、三人プレイを続けておりますが、貴女様の通信文を見て心強く思いました。ぜひ同好者夫婦として相互プ

レイを致したく存じております。私の主人も、その方面においては昔よりの体験者ですが、何にしろ現在、ある社会的地位と教育方面にも関係あり、秘密を厳守していただくことをぜひ条件として下さいますなら、喜んでお目にかかれと存じます。本誌の辻村隆様とは長い間の友人でございますし、自身、夫にいわれてモデルになったこともございます。初めは死ぬほどの恥ずかしい思いをしました。が、だんだんとこの世界の感じを肌で心よく感じるようになりました。現在では精神的にも、MSプレイを通じて肉体的にも全く仲の良い、夫婦生活を楽しんでおります。この味わいは、夫婦プレイを実行しているチームのみが持つ親近ムードと存じます。若し、夫のみのプレイが必要でしたら、いつでもお申し出下さい。勿論、私のみでも結構です。これは金原喜代子様だけではなく、MS同好者皆様に申し上げることです。よき通信をお待ちいたしております。京都の洛北生、及び赤畑修造様。本誌最近号によると、肥満女性に対し羨望とのこと、まことに心強く存じます。私自身、お好みに合うと存じ恥ずかしさを無理して、初

#### 股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよV

#### 羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れにV

#### 双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

#### 双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

#### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

#### 黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れぬV

#### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れぬV

#### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れぬV

#### 豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村 洋子 略号八れむV

#### 柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やかV

#### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やきV

#### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やくV

#### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やもV

#### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やしV

#### 腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原 清子 略号八やみV

#### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

めて書かせていただいたわけでございます。私自身、京都在住のこととて、何か親近感をおぼえます。よろしかったら一度お話しをして、出来ればフォトもお見せいたします。辻村様に責めていただいた、赤畑様お好みの股間もあらわに緊縛された私自身の裸身フォトもあります。夫は、信用できる同好者ならば見せてもよいと申します。勿論、お互いに信用できることが分かれば、プレイしていただいても結構です。ただし、夫の希望は、その目前で私を縛り恥ずかしめて欲しいと申します。私自身もその方が、より一層、M的ム



ードが感じられるようです。貴方様のいわれてます白衣の肥満形女性の責めフォトは、あるいは私かも知れませんが。数枚、辻村様に写して貰ったことがありますので：。金原様、洛北生、及び赤畑様以外の方々でも、以上の私の気持ちに御賛同御協力下さいます方はお便り下さいますよう、お待ちしております。 (京都・美恵子)

○ 新田由貴夫様、二月号の通信の記事、拝見いたしました。貴方同様、私も高度の女装狂です。しかし悲しいことに家族と一しょに生活しているため、女装品は何も持っていない。貴方を大変うらやましい限りと思っております。私も下着からすっかり女装して若奥様、女学生、お手伝いさんなどになつてみたいと思っております。又、赤いお腰に舞妓さんのような振り袖を着て、ダラリ帯をしめてみたいと思います。夜は貴方のように、きれいなネグリジエを着て休みたい等、毎晩夢想しつつ寝るのです。もしこれが実現したら嬉しくて卒倒するかも知れません。ぜひお便り下さい。私は三十才、独身で家にて家業をついでいます。 (東京・山下昭司)

○ 二月号の海野美津男氏の御作の続篇は珍重すべきもので、十二月号の前篇と共に女斗美文学の白眉と申せましょう。前号の通信にも投稿されておりましたが、私も、この御作は特に愛蔵いたすつもりです。前篇、後篇とも挿画も又すばらしく、特に海野氏の最近よく描かれる一重輝をひいた構図では尻の上の後ミツがT字型でなく十文字となり後立輝もひかれた一重輝の方向へずれて、大変美しい姿になっていきます。また、足の指も返るべきは返り、反るべきは反つて、このようにこまかく行き届いた女斗美画は稀有のものとお申せましょう。それに体の線が柔らかに凛々しくて、いかにも女斗美の真髓を示していると思われまふ。御作の文の内容も又、コクのあるもので、今までの御作の中で、もっとも感銘の深いものでした。それにしても、この物語を今流行のストリーリイ劇画としてあれば、いかに楽しいかなどと空想した次第です。(かつての畔亭氏の劇画「百合子の冒険」のように) (京都・雄松比良彦)

○ 読者通信は毎月、興味をもって

秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 (たぬ) 五〇〇円

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円

尻肌立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円

熱蠟は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

○ 鞭と羽毛の擦り責め 略号 (たあ) 五〇〇円

○ 早縄術を披露する 略号 (たら) 五〇〇円

○ 急所縄に慟哭する女 略号 (たお) 五〇〇円

○ 熱気を帯びた実演 略号 (たそ) 五〇〇円

○ 強烈な緊縛プレイ 略号 (たさ) 五〇〇円

○ 弄られる緊縛女体 略号 (たし) 五〇〇円

○ 鞭と縄に追われて 略号 (たす) 五〇〇円

○ 大手札四枚一組 略号 (たむ) 五〇〇円

○ 〇お申込みは、大阪市阿部野局私書箱第14号 箕田京二へ

くまなく目を通していきます。誌中の作品や体験記以上に、それは戯作でもなく脚色もなく、SMに対する憧憬の生々しさが感じられるからです。その意味で、私も今後つとめて投稿してみようと思ひます。十二月号掲載の仙台の美川芙

美子様、貴女の願望、想像、我が意を得た思いで拝読しました。私は、妊娠したような大きな下腹部豊かな乳房をこよなく愛し、思う存分、責めて上げられる方を探しています。丸味のある大きな腹部を足で踏みつけ、鞭の赤筋が幾条



となくしるされ、その苦痛に陶酔の表情をみるまで責め続け、その豊かな乳房を血行の止まるまでギリギリと縄で縛り、乳首の愛撫とローソクを垂らしての悦楽と苦痛のいたぶりを併用して、それでも足りなければ注射器をその下腹に突き立てて、たとえわずかでも血をとるところを見せたり、お望み通りナイフでお腹を切ることは勿論、アルコールを使つての入墨、小さな線香の赤い火の焼き責め、乳房への荒々しい髭責め等、あらゆる思考の限りをつくして奉仕したいと思ひます。実現不可能なことでしようが、もし願望にお答え出来る部分があれば文通したいと思ひます。

(東京佐藤勝雄)

文学青年の昔に戻ったように、何かにつかれて書きまくった水中花メモ(別稿)これは最終回前夜一月号の分までを対象とした。どうせ二月号で終るならば、それまで待つて書けばよいのだが、気まぐれな私には、出たとこ勝負というわけで、仕方がなかった。いま(最終回)を読んでも、ふと芳野大人、御苦労さまという言葉がでた。この作品は始めから終りまで正に雨あり風ありで、こんなに

場面展開の激しい小説は今まで見たことがない。ある部分の章を別として、全体的に書きたいことを感興にまかせて一気に書いたという迫力があつた。私は、よく八方ヤブレという文句を使用するが、正にそんな世界を感じた。幕切れは鬼頭老人の死で閉じるが「死」は悲劇の他はないのに読後、重たさを受けないのは、「老人の顔に満足した微笑が浮かんでいた」という風流人らしき充実した死を描写した故だろうか。「秘小説」または「前衛小説」または「神酒小説」とレットルは結構つけられる。しかし最終回を読んだ私にはすべての名称が満足でない。むしろ面倒くさいことをぬきにして、風流人の書いた風流小説と軽く逃げた方がよいかも知れない。そして芳野眉美という男が、私の頭に奇怪な老人姿となつて迫ってきたり、プレイ・ボーイ然としたタイプで話しかけたり、そうかと思えば、笛を持った昔の貴公子となつて現われたり、美少年の姿で立ちまはだかったり……、私には(かつて掲載された辻村氏との対談で或る程度、正体は判っているが)作者のイメージが、作品を通して見ると五里霧中だ。いや、この小説

「水中花」そのものが、どうにでもとれる不思議なロマンを持つてゐる。「水中花」は、ここによりやく完結した。だが私にとって、この作品評の、ちゃんとした結論を出せない。おそらく誰も出せない。——というのが、私の無理にしぼり出した結論かも知れない。「水中花」は読者のためというより、むしろ芳野眉美のために書かれた作品でもあるからだ。

(夜乃探郎)

長本居一郎様、貴方のお便り拝読いたしました。小生は今年二十五年になる独身男性です。元来の好奇心より、さまざまなものに興味をもつてまいりました。そして一番強く私の心をひきつけたのがこれ、つまり本誌の小説に出てくる世界です。私は割と早熟で、早くからサディズムということに興味を持っていました。勉強をおえて社会に出たころは忙しさにまぎれて、そちらの方の関心も薄れておりましたが、仕事にもなれ色々なことを考えるようになると、ともすると盛んに浮かんでくるのは本誌のことでした。そんなこんなで私は実際、自分でそのようなことをやってみたい、相手になつて

くれる人がいたら、実際に経験してみたいと考えるようになりまして。そして御夫婦の方々とプレイもしましたが余りにも遠方なのでプレイの回数思うにまかせぬ状態が、ままありました。しかし、はからずも貴方のお名前を拝見いたし、私の心に描いていた人だと直観いたし、矢もたてもたまらずお便りを差し上げた次第です。私もSMに関する資料を少しは持つております。どこか静かな貴方のお好きなところで、心ゆくまでプレイを、楽しもうではありませんか。

(東京・中村慎二)

私のS・M雑感を記してみたいと思う。大晦日の夜、話題の映画「昼顔」を観る。開巻劈頭、主人公が人気なき林の中で両手吊りにされ、荒々しく下着を剥ぎとられ、二人の御者に鞭打たれるシーンに遭う。幻想の場面の故とはいえ、鞭打つ音も打たれるヒロインの声もなく、身もだえする訳でもないのは一寸がっかり。次のシーンで、やはり両手を荒野の中の物置小屋に縛られたヒロインの顔に、男どもが赤黒い土、いや泥土を思いきり投げつけ、みるみる内に美しい顔が泥人形の如き観を呈



# 次号(四月号)は二月二十五日に発売します。

した時の方が、私のSM的官能を間違ひなく操ったようだった。外に男どもの決斗した一弾を受けた彼女が、大木に文字通り全身を立木縛りにされ、こめかみからタラタラと血を流す場面もあったが、平凡の一語に尽きた。この映画は一九六七年のベニス映画祭のグランプリ賞の榮譽に輝く傑作とのことだが、芸術映画としての価値の是非はともかく、SM的感觉を以て鑑賞した場合、物足りない作品に過ぎないと思う。むしろ、昨年度、邦画陣にて気を吐いた「裏切りの季節」と「胎児が密猟する」と「き」を私は高く高く評価したい。テレビでは、昨年の暮れ近くだったか(秋も深まった頃だったか)「七人の刑事、美しい女たち」という中で、田島和子という女優の演技に、私はSMの匂いがかがされた。田島和子は、妙に気位の高い、ある会社の女秘書という役柄だったと思うが、ある日、部屋の中で独りいるとき、突然発作を起したように胸をかきむしって苦しみはじめたかと思うと、矢庭に床の上に四つ這いになって犬のよ

うに歩きはじめるのである。それを別の女性に見られると、狂気のように、誰にも言わないでと、哀訴嘆願するのだが、最後まで何のために苦しみ犬のように這い廻ったか、ドラマでは説明されていなかったが、私は間違ひなく田島和子に、いや彼女の演技にMを感じたのは、私の独り合点だったろうか。Mといえば、前記の「昼顔」の中に、娼婦に、胸や顔をハイヒールで踏みつけにされ、インキを顔に振りかけることを強要し歓んでいる婦人科医(立派なヒゲを生やしている)が出たが、言わずもがな、正しくMではあった。ただし、さっぱり迫力がなかったが――。某日、私は市内のあるデパートに色物シャツを買ったことがあった。私の体格は男としての標準型と自認していたが、近年少し体重が増加の傾向にあるのは、私もそろそろ中年の仲間入りする年齢に達したためか。ともあれ二階の男性シャツ売場で、アレコレ物色していると、グラマー型の若い女店員が、私のそばに近づいてきた。そしてお客さまのサイズはと

訊くので、Sではないかと思うと私が答えると、彼女は「いや、お客さまは、Mの方がよろしいのではありませんか」と言う。いやSだ、いやMの方が、と、押し問答(というほどのこともないが)して、結局私はMのシャツ一枚を買わされる破目になったが、帰途エスカレーターの上で私は、ふと奇妙な笑いが顔に浮かんでくるのを押さえ切れなかった。私はSと言うのに彼女はMだと言う。最後にそのグラマー店員にM型シャツを買わされたが実は私はSならぬMだったからである。もしかすると彼女は、自分で気づかぬ内にS的本能をその肉体の深奥に秘め、知らず知らずの内に、私のM的本能を感知したのではあるまいか。いや、これは映画の「昼顔」ではないが、私の単なる幻想かも知れないが――。(仙台市・宇津木生)

私は愛読者の一人です。SM、ホモの経験もあり、その種のモデルの経験もある男です。自分の好みはMです。それも強い方なのです。その他なんでも致します。私の希望は貴社の男性モデル願望です。年令は四十七才ですが、体には自信があり頑丈です。身長一六

二センチ、体重六五キロ、一人暮らしです。私は美しい女性の足に強く魅せられ、土下座して頭を踏まれたり黄金水を歓喜して頂く自分の性癖に今まで随分なやみましたが、現在では自分の生きるべき道は、これより他にないと結論いたしました。そのためには、貴社のモデルになる外は私の生きる道はないのです。モデルの経験もあります。私はこの世界に入って生きたいのです。毎日、仕事をしたいのです。この点、けっして嘘ではありません。一回でも二回でもモデルに使って見て下されば、私がどんな男か、充分おわかりになる筈です。私は毎日、働きたいのです。人と異った性癖に悩みながら現在には孤独に暮す私です。美しい女性の足に憧れ、強く思慕を寄せ、哀れな自分に御同情下され、何卒、御返事を下さるよう、伏して願う次第です。

(大阪・M志願の男)

奇クを読む中に、どうしても心の中をお話したくてたまらずペンをとった次第です。私は今年四十七才になりました。日に一ぺん奇クを読まなくては心が休みません。十二月号は特に気に入りました。



た。春川様の「口腔検査」及びマゾ雑誌の画は、何回みても私を夢の世界に引きずり込んでしまいます。私は、いつも生ゴムパンティをつけておりますが、時々それを濡らすことがございます。三好留美様は私が心に画いているタイプの人です。一度でもよいから雑誌帳のようにして頂きたいと思ひます。しかし最近の奇巧は、マゾ的な読物、特にM男性のいじめられてゐるものが、少なくなりまして。画も、もう少し載せて下さいね。二月号だったかと思ひますが写真緊縛のポーズで、モデルの女性の体が、少し細いと思ひます。もっとボリームのある女性でしたらと残念に思つております。私は女性の魅力はヒップにあると思ひます。写真の女性もパンティをつけていたら、もっと大胆にアップで写してほしいですね。私は時々映画に行きます。この間も映画の中で、金持の五十ぐらいの男性がマットの上で美しい女性の股に挟まれて、死ぬところがありました。が、まだまだ内容に満足するものはなく期待はずれでした。私は武家娘が仇討をする場面、仇の男の胸の上に娘が跨り、もがく男を今にも一突きでとどめをさすというところなど良いと思ひます。又「〇〇7」に出てくる女性が皮具を全身にまとい、男性をコテンコ

テンにいじめているところなど良いと思ひます。とりとめもないことを書きましたがお許し下さい。  
(大阪岸田明)

初めてお便りします。私は二十才になる某大学の学生です。貴誌は毎月欠かさず購入してあります。しかし既刊号と比べると現在のものはグラビヤがないので淋しく感じています。それに梨花悠紀子さんがモデルになってくれたらどんなに奇巧を読むのが楽しいことでしょう。又、私は「花と蛇」の大ファンでもあります。どうか団鬼六先生、今後益々御健筆を揮われ美女達を羞恥責めにして下

さるようおねがいします。  
(東京・黒柳鉄生)

村まり子橋、貴女の告白「恥かしめて！」を興味深く読ませていただきました。私は、この文中、最後の方に書かれた「私も河森真理子さんのように……女の羞恥心を最大限に引き出されたポーズのままギリギリと縛り上げ、全く一方的に、暴虐の渦に投げ込まれる恍惚の初夜の思ひに陶酔する近頃の私なのです」という部分を何度か繰り返し読んでみました。私の考へていたことがずばり書かれてあります。大変嬉しく頼もしく思ひました。  
(瀬川菊男)

# 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担してりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括し

てお求めの際は「小包」にて発送申し上げます。

昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和40年2月号	昭和40年1月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年10月号	昭和39年9月号	昭和39年8月号	昭和39年7月号	昭和39年6月号	昭和39年5月号	昭和39年4月号	昭和39年3月号	昭和39年2月号	昭和39年1月号	昭和38年12月号	昭和38年11月号	昭和38年10月号	昭和38年9月号	昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年1月号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年8月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年1月号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号	昭和35年5月号	昭和35年4月号	昭和35年3月号	昭和35年2月号	昭和35年1月号	昭和34年12月号	昭和34年11月号	昭和34年10月号	昭和34年9月号	昭和34年8月号	昭和34年7月号	昭和34年6月号	昭和34年5月号	昭和34年4月号	昭和34年3月号	昭和34年2月号	昭和34年1月号	昭和33年12月号	昭和33年11月号	昭和33年10月号	昭和33年9月号	昭和33年8月号	昭和33年7月号	昭和33年6月号	昭和33年5月号	昭和33年4月号	昭和33年3月号	昭和33年2月号	昭和33年1月号	昭和32年12月号	昭和32年11月号	昭和32年10月号	昭和32年9月号	昭和32年8月号	昭和32年7月号	昭和32年6月号	昭和32年5月号	昭和32年4月号	昭和32年3月号	昭和32年2月号	昭和32年1月号	昭和31年12月号	昭和31年11月号	昭和31年10月号	昭和31年9月号	昭和31年8月号	昭和31年7月号	昭和31年6月号	昭和31年5月号	昭和31年4月号	昭和31年3月号	昭和31年2月号	昭和31年1月号	昭和30年12月号	昭和30年11月号	昭和30年10月号	昭和30年9月号	昭和30年8月号	昭和30年7月号	昭和30年6月号	昭和30年5月号	昭和30年4月号	昭和30年3月号	昭和30年2月号	昭和30年1月号	昭和29年12月号	昭和29年11月号	昭和29年10月号	昭和29年9月号	昭和29年8月号	昭和29年7月号	昭和29年6月号	昭和29年5月号	昭和29年4月号	昭和29年3月号	昭和29年2月号	昭和29年1月号	昭和28年12月号	昭和28年11月号	昭和28年10月号	昭和28年9月号	昭和28年8月号	昭和28年7月号	昭和28年6月号	昭和28年5月号	昭和28年4月号	昭和28年3月号	昭和28年2月号	昭和28年1月号	昭和27年12月号	昭和27年11月号	昭和27年10月号	昭和27年9月号	昭和27年8月号	昭和27年7月号	昭和27年6月号	昭和27年5月号	昭和27年4月号	昭和27年3月号	昭和27年2月号	昭和27年1月号	昭和26年12月号	昭和26年11月号	昭和26年10月号	昭和26年9月号	昭和26年8月号	昭和26年7月号	昭和26年6月号	昭和26年5月号	昭和26年4月号	昭和26年3月号	昭和26年2月号	昭和26年1月号	昭和25年12月号	昭和25年11月号	昭和25年10月号	昭和25年9月号	昭和25年8月号	昭和25年7月号	昭和25年6月号	昭和25年5月号	昭和25年4月号	昭和25年3月号	昭和25年2月号	昭和25年1月号	昭和24年12月号	昭和24年11月号	昭和24年10月号	昭和24年9月号	昭和24年8月号	昭和24年7月号	昭和24年6月号	昭和24年5月号	昭和24年4月号	昭和24年3月号	昭和24年2月号	昭和24年1月号	昭和23年12月号	昭和23年11月号	昭和23年10月号	昭和23年9月号	昭和23年8月号	昭和23年7月号	昭和23年6月号	昭和23年5月号	昭和23年4月号	昭和23年3月号	昭和23年2月号	昭和23年1月号	昭和22年12月号	昭和22年11月号	昭和22年10月号	昭和22年9月号	昭和22年8月号	昭和22年7月号	昭和22年6月号	昭和22年5月号	昭和22年4月号	昭和22年3月号	昭和22年2月号	昭和22年1月号	昭和21年12月号	昭和21年11月号	昭和21年10月号	昭和21年9月号	昭和21年8月号	昭和21年7月号	昭和21年6月号	昭和21年5月号	昭和21年4月号	昭和21年3月号	昭和21年2月号	昭和21年1月号	昭和20年12月号	昭和20年11月号	昭和20年10月号	昭和20年9月号	昭和20年8月号	昭和20年7月号	昭和20年6月号	昭和20年5月号	昭和20年4月号	昭和20年3月号	昭和20年2月号	昭和20年1月号	昭和19年12月号	昭和19年11月号	昭和19年10月号	昭和19年9月号	昭和19年8月号	昭和19年7月号	昭和19年6月号	昭和19年5月号	昭和19年4月号	昭和19年3月号	昭和19年2月号	昭和19年1月号	昭和18年12月号	昭和18年11月号	昭和18年10月号	昭和18年9月号	昭和18年8月号	昭和18年7月号	昭和18年6月号	昭和18年5月号	昭和18年4月号	昭和18年3月号	昭和18年2月号	昭和18年1月号	昭和17年12月号	昭和17年11月号	昭和17年10月号	昭和17年9月号	昭和17年8月号	昭和17年7月号	昭和17年6月号	昭和17年5月号	昭和17年4月号	昭和17年3月号	昭和17年2月号	昭和17年1月号	昭和16年12月号	昭和16年11月号	昭和16年10月号	昭和16年9月号	昭和16年8月号	昭和16年7月号	昭和16年6月号	昭和16年5月号	昭和16年4月号	昭和16年3月号	昭和16年2月号	昭和16年1月号	昭和15年12月号	昭和15年11月号	昭和15年10月号	昭和15年9月号	昭和15年8月号	昭和15年7月号	昭和15年6月号	昭和15年5月号	昭和15年4月号	昭和15年3月号	昭和15年2月号	昭和15年1月号	昭和14年12月号	昭和14年11月号	昭和14年10月号	昭和14年9月号	昭和14年8月号	昭和14年7月号	昭和14年6月号	昭和14年5月号	昭和14年4月号	昭和14年3月号	昭和14年2月号	昭和14年1月号	昭和13年12月号	昭和13年11月号	昭和13年10月号	昭和13年9月号	昭和13年8月号	昭和13年7月号	昭和13年6月号	昭和13年5月号	昭和13年4月号	昭和13年3月号	昭和13年2月号	昭和13年1月号	昭和12年12月号	昭和12年11月号	昭和12年10月号	昭和12年9月号	昭和12年8月号	昭和12年7月号	昭和12年6月号	昭和12年5月号	昭和12年4月号	昭和12年3月号	昭和12年2月号	昭和12年1月号	昭和11年12月号	昭和11年11月号	昭和11年10月号	昭和11年9月号	昭和11年8月号	昭和11年7月号	昭和11年6月号	昭和11年5月号	昭和11年4月号	昭和11年3月号	昭和11年2月号	昭和11年1月号	昭和10年12月号	昭和10年11月号	昭和10年10月号	昭和10年9月号	昭和10年8月号	昭和10年7月号	昭和10年6月号	昭和10年5月号	昭和10年4月号	昭和10年3月号	昭和10年2月号	昭和10年1月号	昭和9年12月号	昭和9年11月号	昭和9年10月号	昭和9年9月号	昭和9年8月号	昭和9年7月号	昭和9年6月号	昭和9年5月号	昭和9年4月号	昭和9年3月号	昭和9年2月号	昭和9年1月号	昭和8年12月号	昭和8年11月号	昭和8年10月号	昭和8年9月号	昭和8年8月号	昭和8年7月号	昭和8年6月号	昭和8年5月号	昭和8年4月号	昭和8年3月号	昭和8年2月号	昭和8年1月号	昭和7年12月号	昭和7年11月号	昭和7年10月号	昭和7年9月号	昭和7年8月号	昭和7年7月号	昭和7年6月号	昭和7年5月号	昭和7年4月号	昭和7年3月号	昭和7年2月号	昭和7年1月号	昭和6年12月号	昭和6年11月号	昭和6年10月号	昭和6年9月号	昭和6年8月号	昭和6年7月号	昭和6年6月号	昭和6年5月号	昭和6年4月号	昭和6年3月号	昭和6年2月号	昭和6年1月号	昭和5年12月号	昭和5年11月号	昭和5年10月号	昭和5年9月号	昭和5年8月号	昭和5年7月号	昭和5年6月号	昭和5年5月号	昭和5年4月号	昭和5年3月号	昭和5年2月号	昭和5年1月号	昭和4年12月号	昭和4年11月号	昭和4年10月号	昭和4年9月号	昭和4年8月号	昭和4年7月号	昭和4年6月号	昭和4年5月号	昭和4年4月号	昭和4年3月号	昭和4年2月号	昭和4年1月号	昭和3年12月号	昭和3年11月号	昭和3年10月号	昭和3年9月号	昭和3年8月号	昭和3年7月号	昭和3年6月号	昭和3年5月号	昭和3年4月号	昭和3年3月号	昭和3年2月号	昭和3年1月号	昭和2年12月号	昭和2年11月号	昭和2年10月号	昭和2年9月号	昭和2年8月号	昭和2年7月号	昭和2年6月号	昭和2年5月号	昭和2年4月号	昭和2年3月号	昭和2年2月号	昭和2年1月号	昭和1年12月号	昭和1年11月号	昭和1年10月号	昭和1年9月号	昭和1年8月号	昭和1年7月号	昭和1年6月号	昭和1年5月号	昭和1年4月号	昭和1年3月号	昭和1年2月号	昭和1年1月号	昭和0年12月号	昭和0年11月号	昭和0年10月号	昭和0年9月号	昭和0年8月号	昭和0年7月号	昭和0年6月号	昭和0年5月号	昭和0年4月号	昭和0年3月号	昭和0年2月号	昭和0年1月号	昭和-1年12月号	昭和-1年11月号	昭和-1年10月号	昭和-1年9月号	昭和-1年8月号	昭和-1年7月号	昭和-1年6月号	昭和-1年5月号	昭和-1年4月号	昭和-1年3月号	昭和-1年2月号	昭和-1年1月号	昭和-2年12月号	昭和-2年11月号	昭和-2年10月号	昭和-2年9月号	昭和-2年8月号	昭和-2年7月号	昭和-2年6月号	昭和-2年5月号	昭和-2年4月号	昭和-2年3月号	昭和-2年2月号	昭和-2年1月号	昭和-3年12月号	昭和-3年11月号	昭和-3年10月号	昭和-3年9月号	昭和-3年8月号	昭和-3年7月号	昭和-3年6月号	昭和-3年5月号	昭和-3年4月号	昭和-3年3月号	昭和-3年2月号	昭和-3年1月号	昭和-4年12月号	昭和-4年11月号	昭和-4年10月号	昭和-4年9月号	昭和-4年8月号	昭和-4年7月号	昭和-4年6月号	昭和-4年5月号	昭和-4年4月号	昭和-4年3月号	昭和-4年2月号	昭和-4年1月号	昭和-5年12月号	昭和-5年11月号	昭和-5年10月号	昭和-5年9月号	昭和-5年8月号	昭和-5年7月号	昭和-5年6月号	昭和-5年5月号	昭和-5年4月号	昭和-5年3月号	昭和-5年2月号	昭和-5年1月号	昭和-6年12月号	昭和-6年11月号	昭和-6年10月号	昭和-6年9月号	昭和-6年8月号	昭和-6年7月号	昭和-6年6月号	昭和-6年5月号	昭和-6年4月号	昭和-6年3月号	昭和-6年2月号	昭和-6年1月号	昭和-7年12月号	昭和-7年11月号	昭和-7年10月号	昭和-7年9月号	昭和-7年8月号	昭和-7年7月号	昭和-7年6月号	昭和-7年5月号	昭和-7年4月号	昭和-7年3月号	昭和-7年2月号	昭和-7年1月号	昭和-8年12月号	昭和-8年11月号	昭和-8年10月号	昭和-8年9月号	昭和-8年8月号	昭和-8年7月号	昭和-8年6月号	昭和-8年5月号	昭和-8年4月号	昭和-8年3月号	昭和-8年2月号	昭和-8年1月号	昭和-9年12月号	昭和-9年11月号	昭和-9年10月号	昭和-9年9月号	昭和-9年8月号	昭和-9年7月号	昭和-9年6月号	昭和-9年5月号	昭和-9年4月号	昭和-9年3月号	昭和-9年2月号	昭和-9年1月号	昭和-10年12月号	昭和-10年11月号	昭和-10年10月号	昭和-10年9月号	昭和-10年8月号	昭和-10年7月号	昭和-10年6月号	昭和-10年5月号	昭和-10年4月号	昭和-10年3月号	昭和-10年2月号	昭和-10年1月号	昭和-11年12月号	昭和-11年11月号	昭和-11年10月号	昭和-11年9月号	昭和-11年8月号	昭和-11年7月号	昭和-11年6月号	昭和-11年5月号	昭和-11年4月号	昭和-11年3月号	昭和-11年2月号	昭和-11年1月号	昭和-12年12月号	昭和-12年11月号	昭和-12年10月号	昭和-12年9月号	昭和-12年8月号	昭和-12年7月号	昭和-12年6月号	昭和-12年5月号	昭和-12年4月号	昭和-12年3月号	昭和-12年2月号	昭和-12年1月号	昭和-13年12月号	昭和-13年11月号	昭和-13年10月号	昭和-13年9月号	昭和-13年8月号	昭和-13年7月号	昭和-13年6月号	昭和-13年5月号	昭和-13年4月号	昭和-13年3月号	昭和-13年2月号	昭和-13年1月号	昭和-14年12月号	昭和-14年11月号	昭和-14年10月号	昭和-14年9月号	昭和-14年8月号	昭和-14年7月号	昭和-14年6月号	昭和-14年5月号	昭和-14年4月号	昭和-14年3月号	昭和-14年2月号	昭和-14年1月号	昭和-15年12月号	昭和-15年11月号	昭和-15年10月号	昭和-15年9月号	昭和-15年8月号	昭和-15年7月号	昭和-15年6月号	昭和-15年5月号	昭和-15年4月号	昭和-15年3月号	昭和-15年2月号	昭和-15年1月号	昭和-16年12月号	昭和-16年11月号	昭和-16年10月号	昭和-16年9月号	昭和-16年8月号	昭和-16年7月号	昭和-16年6月号	昭和-16年5月号	昭和-16年4月号	昭和-16年3月号	昭和-16年2月号	昭和-16年1月号	昭和-17年12月号	昭和-17年11月号	昭和-17年10月号	昭和-17年9月号	昭和-17年8月号	昭和-17年7月号	昭和-17年6月号	昭和-17年5月号	昭和-17年4月号	昭和-17年3月号	昭和-17年2月号	昭和-17年1月号	昭和-18年12月号	昭和-18年11月号	昭和-18年10月号	昭和-18年9月号	昭和-18年8月号	昭和-18年7月号	昭和-18年6月号	昭和-18年5月号	昭和-18年4月号	昭和-18年3月号	昭和-18年2月号	昭和-18年1月号	昭和-19年12月号	昭和-19年11月号	昭和-19年10月号	昭和-19年9月号	昭和-19年8月号	昭和-19年7月号	昭和-19年6月号	昭和-19年5月号	昭和-19年4月号	昭和-19年3月号	昭和-19年2月号	昭和-19年1月号	昭和-20年12月号	昭和-20年11月号	昭和-20年10月号	昭和-20年9月号	昭和-20年8月号	昭和-20年7月号	昭和-20年6月号	昭和-20年5月号	昭和-20年4月号	昭和-20年3月号	昭和-20年2月号	昭和-20年1月号	昭和-21年12月号	昭和-21年11月号	昭和-21年10月号	昭和-21年9月号	昭和-21年8月号	昭和-21年7月号	昭和-21年6月号	昭和-21年5月号	昭和-21年4月号	昭和-21年3月号	昭和-21年2月号	昭和-21年1月号	昭和-22年12月号	昭和-22年11月号	昭和-22年10月号	昭和-22年9月号	昭和-22年8月号	昭和-22年7月号	昭和-22年6月号	昭和-22年5月号	昭和-22年4月号	昭和-22年3月号	昭和-22年2月号	昭和-22年1月号	昭和-23年12月号	昭和-23年11月号	昭和-23年10月号	昭和-23年9月号	昭和-23年8月号	昭和-23年7月号	昭和-23年6月号	昭和-23年5月号	昭和-23年4月号	昭和-23年3月号	昭和-23年2月号	昭和-23年1月号	昭和-24年12月号	昭和-24年11月号	昭和-24年10月号	昭和-24年9月号	昭和-24年8月号	昭和-24年7月号	昭和-24年6月号	昭和-24年5月号	昭和-24年4月号	昭和-24年3月号	昭和-24年2月号	昭和-24年1月号	昭和-25年12月号	昭和-25年11月号	昭和-25年10月号	昭和-25年9月号	昭和-25年8月号	昭和-25年7月号	昭和-25年6月号	昭和-25年5月号	昭和-25年4月号	昭和-25年3月号	昭和-25年2月号	昭和-25年1月号	昭和-26年12月号	昭和-26年11月号	昭和-26年10月号	昭和-26年9月号	昭和-26年8月号	昭和-26年7月号	昭和-26年6月号	昭和-26年5月号	昭和-26年4月号	昭和-26年3月号	昭和-26年2月号	昭和-26年1月号	昭和-27年12月号	昭和-27年11月号	昭和-27年10月号	昭和-27年9月号	昭和-27年8月号	昭和-27年7月号	昭和-27年6月号	昭和-27年5月号	昭和-27年4月号	昭和-27年3月号	昭和-27年2月号	昭和-27年1月号	昭和-28年12月号	昭和-28年11月号	昭和-28年10月号	昭和-28年9月号	昭和-28年8月号	昭和-28年7月号	昭和-28年6月号	昭和-28年5月号	昭和-28年4月号	昭和-28年3月号	昭和-28年2月号	昭和-28年1月号	昭和-29年12月号	昭和-29年11月号	昭和-29年10月号	昭和-29年9月号	昭和-29年8月号	昭和-29年7月号	昭和-29年6月号	昭和-29年5月号	昭和-29年4月号	昭和-29年3月号	昭和-29年2月号	昭和-29年1月号	昭和-30年12月号	昭和-30年11月号	昭和-30年10月号	昭和-30年9月号	昭和-30年8月号	昭和-30年7月号	昭和-30年6月号	昭和-30年5月号	昭和-30年4月号	昭和-30年3月号	昭和-30年2月号	昭和-30年1月号	昭和-31年12月号	昭和-31年11月号	昭和-31年10月号	昭和-31年9月号	昭和-31年8月号	昭和-31年7月号	昭和-31年6月号	昭和-31年5月号	昭和-31年4月号	昭和-31年3月号	昭和-31年2月号	昭和-31年1月号	昭和-32年12月号	昭和-32年11月号	昭和-32年10月号	昭和-32年9月号	昭和-32年8月号	昭和-32年7月号	昭和-32年6月号	昭和-32年5月号	昭和-32年4月号	昭和-32年3月号	昭和-32年2月号	昭和-32年1月号	昭和-33年12月号	昭和-33年11月号	昭和-33年10月号	昭和-33年9月号	昭和-33年8月号	昭和-33年7月号	昭和-33年6月号	昭和-33年5月号	昭和-33年4月号	昭和-33年3月号	昭和-33年2月号	昭和-33年1月号	昭和-34年12月号	昭和-34年11月号	昭和-34年10月号	昭和-34年9月号	昭和-34年8月号	昭和-34年7月号	昭和-34年6月号	昭和-34年5月号	昭和-34年4月号	昭和-34年3月号	昭和-34年2月号	昭和-34年1月号	昭和-35年12月号	昭和-35年11月号	昭和-35年10月号	昭和-35年9月号	昭和-35年8月号	昭和-35年7月号	昭和-35年6月号	昭和-35年5月号	昭和-35年4月号	昭和-35年3月号	昭和-35年2月号	昭和-35年1月号	昭和-36年12月号	昭和-36年11月号	昭和-36年10月号	昭和-36年9月号	昭和-36年8月号	昭和-36年7月号	昭和-36年6月号	昭和-36年5月号	昭和-36年4月号	昭和-36年3月号	昭和-36年2月号	昭和-36年1月号	昭和-37年12月号	昭和-37年11月号	昭和-37年10月号	昭和-37年9月号	昭和-37年8月号	昭和-37年7月号	昭和-37年6月号	昭和-37年5月号	昭和-37年4月号	昭和-37年3月号	昭和-37年2月号	昭和-37年1月号	昭和-38年12月号	昭和-38年11月号	昭和-38年10月号	昭和-38年9月号	昭和-38年8月号	昭和-38年7月号	昭和-38年6月号	昭和-38年5月号	昭和-38年4月号	昭和-38年3月号	昭和-38年2月号	昭和-38年1月号	昭和-39年12月号	昭和-39年11月号	昭和-39年10月号	昭和-39年9月号	昭和-39年8月号	昭和-39年7月号	昭和-39年6月号	昭和-39年5月号	昭和-39年4月号	昭和-39年3月号	昭和-39年2月号	昭和-39年1月号	昭和-40年12月号	昭和-40年11月号	昭和-40年10月号	昭和-40年9月号	昭和-40年8月号	昭和-40年7月号	昭和-40年6月号	昭和-40年5月号	昭和-40年4月号	昭和-40年3月号	昭和-40年2月号	昭和-40年1月号	昭和-41年12月号	昭和-41年11月号	昭和-41年10月号	昭和-41年9月号	昭和-41年8月号	昭和-41年7月号	昭和-41年6月号	昭和-41年5月号	昭和-41年4月号	昭和-41年3月号	昭和-41年2月号	昭和-41年1月号	昭和-42年12月号	昭和-42年11月号	昭和-42年10月号	昭和-42年9月号	昭和-42年8月号	昭和-42年7月号	昭和-42年6月号	昭和-42年5月号	昭和-42年4月号	昭和-42年3月号	昭和
----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----



# ☆編集後記☆

○一月号の『カメラハント』で初めて誌上に登場した安井喜久子夫人から、はからずも貰った告白文で巻頭を飾った。SMプレイを基にした甘い夫婦生活の機微が喜久子夫人の巧まない筆によって坦々と書き綴られていて、夫婦プレイを信奉される読者の方々への参考ともなれば幸いである。

○長らく中断していた痴人の糧Vファンの乞いによって山本章氏が筆を新たに意欲的に展開される由、カメラ・ルポに興味と精力を奪われたのが『痴人の糧』中断の理由か。先月号で芳野眉美氏の『水中花』が完結したが、久方ぶりに夜乃探郎氏の麗筆が懇切な解説と批評を「メモ」で述べてくれた。

○今月号の異色作「殺人囚の詩集」は獄中生のペーソスをかいた。千葉青鬼氏の「復讐」は根強いマニアの支持を受けて快調。呼び物のカメラハントは活動的な辻村氏の働きかけによって優子の涙Vとして結晶、毎月のことながら読む者を倦ませない。

○M作品の低調をなげかれています時、みはらひろし氏の『贗作鞭の女王』は瞳目に値する出来栄え。鬼六談義は団氏の巧みな話術が読む者すべてを魅了してしまふ。S文学の巨塔「花と蛇」と共に見逃がせない文章である。○井風呂秋於氏の「恋繩雜記」北林一登氏の「女神」町陽一氏の「二つの世界」中山信氏の「鞭道雨宮流」秤蕩也氏の「妖逆記」と、いずれも妖しい魅力を持った作品を、網羅した。折角味読下されば幸いである。

## ◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのためて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。○尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

## ☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円V  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共V  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共V

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号 〔第二十二巻第四号〕  
昭和四十三年三月一日 印刷  
昭和四十三年三月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
△振替口座大阪四二七八三番V

(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。すが、本誌は成人として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願